

そして、鶴見留美は

さすらいガードマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

*林間学校編・クリスマススイベント編・バレンタイン編・卒業編完結**
鶴見留美視点のお話です。

彼女が、林間学校、クリスマススイベントなどを通じて、少しずつ八幡への恋心を育てていく物語。

原作よりも少しだけ八幡と留美の距離が近い世界。前半は比較的原作に近い、でもちよつとだけ違う話。原作からの台詞引用などもあり。

後半は、少し年齢を重ねた留美と八幡を中心としたオリジナルストーリーです。

更新はゆつくり目。連載再開。中学生編スタート。

目次

そして、鶴見留美は彼と出逢う 前編

1

そして、鶴見留美は彼と出逢う 中編①

オリエンテーリング 12

そして、鶴見留美は彼と出逢う 中編②

カレーライスと隠し味 23

幕間 ① 青い世界 40

そして、鶴見留美は彼と出逢う 後編①

自由行動は意外に不自由 56

そして、鶴見留美は彼と出逢う 後編②

肝試しが本当に試すもの 75

幕間 ② 三枚の写真と 105

鶴見留美は聖夜に願う① 比企谷八幡は

溜息をつく 133

鶴見留美は聖夜に願う② クリスマスツ

リーと唐揚げもどき 152

鶴見留美は聖夜に願う③ 彼女たちの絆

と私の場所 177

鶴見留美は聖夜に願う④ 大切な友達①

195

鶴見留美は聖夜に願う⑤ 大切な友達②

205

鶴見留美は聖夜に願う⑥ 大切な友達③

215

鶴見留美は聖夜に願う⑦ 直方体の世界

の中で	226	鶴見留美はふわふわと落ち着かない①	480
鶴見留美は聖夜に願う⑧	250	卒業とサプライズ	480
うもの 前編	271	鶴見留美はふわふわと落ち着かない②	515
鶴見留美は聖夜に願う⑨	309	二人の時間	515
うもの 後編	344	鶴見留美はふわふわと落ち着かない③	538
幕間 新しい友達	387	入学祝い狂想曲	584
幕間 新しい友達 続	410	幕間 とある日の電話	601
鶴見留美は想いを贈りたい①	453	幕間 甘くてあまい話	676
決戦は金曜日?	651	鶴見留美は未来に迷う①	676
鶴見留美は想いを贈りたい②		そして停滞の時は終わりを告げる(前)	
伝えたい		鶴見留美は未来に迷う②	
気持ちは		そして停滞の時は終わりを告げる(後)	
鶴見留美は想いを贈りたい③			
優しい世			
界			

鶴見留美は未来に迷う③ 私の進路希望

調査票 706

鶴見留美は未来に迷う④ 手のひらの中

の宝物 736

鶴見留美は未来に迷う⑤ ゆっくりと視

えてくるもの 793

幕間 オムニバス① 重なる気持ち

838

幕間 オムニバス② 冬の日、もう一つ

の想い 901

幕間 オムニバス③ 我が野望のために

幕間 オムニバス④ いつか本物の恋に 930

鶴見留美が守りたいもの① 彼女がドレ 945

スに着替えたら 964

スに着替えたら 964

鶴見留美が守りたいもの② 彼女がドレ

スに着替えたら 続 995

鶴見留美が守りたいもの③ 楽園

1030

鶴見留美が守りたいもの④ 守りたいと

願うもの 1079

幕間 彼の隣 1126

鶴見留美の瞳に映るもの① それは等身

大の自分 1173

そして、鶴見留美は彼と出逢う 前編

何がいけなかつたんだろう、どうしてこんな事になつているんだろう……。

気が付くと、私は一人だった。クラスの友人たちの中で孤立していた。

千葉村ちばむらへと向かうバスの中、窓の外を流れていく、高速道路の単調な景色を、私は一人誰とも口を利かずにぼんやりと眺めているだけ。

千葉村というのは、群馬県のみなかみ温泉から程近い所にある千葉市民のための保養施設で、正式な名称は「高原千葉村」という。

私の学校では毎年六年生が夏休みのこの時期、いわゆる林間学校としてここを訪れるのが恒例となっている。この林間学校という行事自体は強制参加ではないんだけど、参加費も安く、六年生の各クラス担任らが全員引率に参加するというのもあって、特別な用事のない限りほとんどの子が参加する。今年も全員参加との事だ。

六年一組から三組まで、それぞれ三十人余りがクラスごと三台の大型バスに分乗。ここに、担任、副担任、校長先生、養護の先生等が別れて乗り込み、総数は百人を超える。五十人乗りの大型バスの座席にはかなり余裕がある。私は、少し疲れたふりをして自分の席を離れ、バス後方の窓際の席に一人でぼつんと座っていた。

これは罰なのかな。あの日、あの子に声をかけてあげられなかったから、私は今、罰を受けているのかな……どうしてもそんな風に思ってしまう。

五月の連休を過ぎた頃、だと思ふ。いつの間にか、クラスの子の中心メンバーによる「その子」へのハブリ行為が始まっていた。話しかけられても無視し、あからさまにその子に分かるように内緒話をしてはクスクスと嘲笑う。先生の見ている所では普通に話しているような振りをする。

珍しい事じゃない。今までだつて何度もあつた。些細なことがきつかけでいつの間にか誰かがハブにされ、暫くするといつの間にか終わり、別の誰かにターゲットが移る。いつも、こういうの嫌だな、と思つてはいた。思つていたけれど、何もできなかった。しなかつた。可哀想だけど、自然に終わるのを待つしか無い。そう、無理やり思い込もうとしていた。でも、この時の私は、どうしてもそう思い切る事ができなかった。

だつて、その子——「藤沢 泉」——泉ちゃんと私は……

ザザツ、というようなノイズがバスの中に響き、私の思考を途切れさせる。

ガイドさんがマイクのスイッチを入れたようだ。気が付くと、バスはいつの間にか高速道路を降りて一般道を走っている。木々の緑は深く、遠くには高い山。その山上に広

がる空は澄んで青い。東京湾にほど近い都市部に暮らす私たちにとってはそれだけでも非日常の光景だ。

「皆さん、長らくのご乗車、お疲れ様でした。当バスはあと10分少々で本日の目的地、『高原千葉村』に到着します。駐車場にバスが停まりましたら、忘れ物の無いよう、慌てずに……」

ガイドさんの決まりきった注意のあと、担任の桜井先生から、一度荷物を建物の中に置いてから玄関前の「集いの広場」に集合すること、そこでこの後の説明を受けた後、そのままオリエンテーリング開始になるので、林間学校のしおりや飲み物などの手荷物は持つてくること、集合時間は九時半であること、などの連絡事項が伝えられる。

程なくバスは千葉村の駐車場に到着した。日差しは強いが、高原で、また、時刻も午前九時過ぎ、とやや早いこともあってか、八月とは言えそこまでの暑さは感じない。

クラスメイト達はバスの運転手さんから順番に荷物を出してもらうと、友達同士で大騒ぎしながら少し離れた本館という建物へと向かう。

私はこういう時も一人。気まずそうにちらちらとこつちを見てくる子も何人かいるけど、……周りの目を気にしてか、話しかけてはこない。仁美と由香が、こつちをちらつと見て、クスクスと嘲笑った様な気がした。

胸の奥が鈍く痛む。学校で一人でいるのはもう大分慣れたし、元々一人でいる時間は嫌いじゃない。ただ、こういうイベント時にひとり、っていうのはやっぱりきつい。夏休みに入って、仁美達と顔を合わせる事が無くなり、正直少しほっとしていたところで、本音を言えば林間学校にも来たくなかった。仮病を使って休んでしまおうかとも考えた。

でも、そんな事したらお母さん達が心配する。ただでさえ、「今年はお友達と遊びに行かないの?」なんて聞かれてる。「受験する子がいたりして、今年はみんな忙しいみたい」とか言つてごまかしてるけど。……受験する子がいるつても嘘じゃないし。

それに……もしかしたら、もしかしたらだけど、

——休みを挟んだことで自然と状況が変わって、みんな夏休み前の事なんか忘れたみたいに普通に話せるんじゃないかな——

なんて期待も、少しだけ、ほんの少しだけしていったんだ。

だけど仁美たちの私に対する態度は相変わらずで、他のグループの子達の、わたしに對する距離は前よりも開いてしまった感じさえある。

ただ、彼らからの悪意はあまり感じない。なんというか、「あまり関わりたくない」とか、「どの程度なら私と話しても自分が浮かないのか、距離感をつかめないでいる」みたいな感じ。

仁美たちだって、最低限必要なことは普通に話しかけてくるし、話しかければ無視まではしない。連絡事項なんかの必要な話ならば普通に聞く。ただ、それだけだ。それ以外の話をしようとする、他の子が勝手に違う話を始めて、まるでそこに「鶴見留美」が居ないかのように話が進む。私を、嘲笑う様な顔でチラチラ見て彼女たち同士で笑い合う。いたたまれなくなった私は、うつむいて一人距離を置く。その繰り返し。

なんとというか、私にとつてはタイミングも悪かったと思う。この、「いじめのようなもの」のターゲットが私に移るのが、せめてこの林間学校の班決めよりも前であつたなら、間違つても仁美たちと同じ班にはならなかつただろうから。

ふと気が付くと、みんなから少し遅れて歩いている私を、立ち止まって待っている女の子がいる。

—— 泉ちゃん ——

目が合うと、彼女は落ち着き無く周りをキョロキョロと不安げに見回す。きつと、私に話しかける所を誰かに見咎められないか気にしているのだろう。

「……………あ……………留美ちゃ……………」

それでも私に声をかけてくれようとしている泉ちゃんを、小さく首を振つて、大丈夫だからと目で制する。今私にかまつたら、泉ちゃんがまた標的にされてしまうかもしれない

ない。

それに、私はあの時、泉ちゃんを見捨てた。その場の空気を読んだつもりになって、彼女を見捨てたんだ。きつと、他の子が無視されている時もそうだったんだろう。

「こんなの、すぐに終わる」そう言い訳して、みんなを見捨ててきたんだ。

今更、自分だけ助けてもらうなんて……できないよ。

だから、今はいい。私はまだ大丈夫。そう自分に言い聞かせて——言い訳して——足を動かす。

集合場所である「集いの広場」には、屋根のない、けれどそれなりに大きな石造りのステージがあり、その正面に広い芝生のスペースが広がっている。

その芝生の部分に、各班ごとにまとまって座り、全員の準備が出来るのを待っているのだが……。

すぐくうるさい。もう九時半を過ぎているのにみんな大声で好き勝手に話をしていて、向こうのクラスの男子なんかまだ走り回っている。ほんと馬鹿みたい。

もう先生方はステージの上に並んでいるが、まだ何も言わずに私達を見ている。ステージの真ん中に立っている学年主任の小山先生はじつと腕時計を見ている。私の班の仁美たちもステージの様子には気づかず、話に夢中だ。

そのうち先生方の様子にみんなが気づきはじめて、少しずつ静かになっていく。仁美

達はまだ気づかない。仕方なく声をかける。

「仁美、ねえ仁美っ」

トントントンと軽く肩をつつく。

「え、鶴見。……なんなの」

冷たい声。由香や森ちゃんたちも珍しいものでも見るようにこつちを振り向く。

私は無言でステージを指差す。それで始めて周りの様子に気付いた仁美達は、あわてて正面を向いて静かにする。

『鶴見』……か、仲良くしてた頃は、『留美』『留美ちゃん』と呼んでくれていたクラスメイト達が、『鶴見』『鶴見さん』と呼び方を変えた。

幼稚だ。馬鹿みたいだ。下らない。そう思う。思うけど、……でも、心が折れそうになる。惨めになる。

「はい、みんなが静かになるまでに三分かかりました」

みんながようやく静かになると、小山先生のお説教が始まった……。

お説教の後はこの施設の説明。それからこの後についての話。天候もいいので、当初の予定通りで、これからすぐオリエンテーリングにスタートし、ゴールした先で配られたお弁当で昼食。その後、自由時間と屋外レクリエーション。それから飯盒炊爨で班ご

とにカレーライスを作って、それが早めの夕食、片付けの後、本館に戻って入浴、就寝という流れになる。

「では最後に、みなさんのお手伝いをしてくれる、お兄さんお姉さんを紹介します。まずは挨拶をしましょう。よろしくお願いします」

先生に続いて生徒みんなで

「よろしくおねがいします」

と、お決まりのあいさつ。

すると、段の端に並んでいた十人位の、高校生ぐらいの人たちが一斉に前に出て横に並んだ。先頭で出てきた、いかにもリーダーだって感じの人が、更に一歩前に出て挨拶を始めた。

「これから三日間みんなのお手伝いをします。何かあったらいつでもぼくたちに言ってください。この林間学校で素敵な思い出をたくさん作ってってくださいね。よろしくお願いします」

拍手が巻き起こる。女子たちはみんなキャーキャー言っている。挨拶をした高校生は、なんとというか文句無しにイケメンだ。髪を明るい色に染めているものの、不良っぽくない清潔な印象を受ける。女子が騒ぐのも当然だろう。

それに、彼だけでなく――

「あの髪の長い人すっぱー美人じゃん」

「てゆーかきれいな人ばかりじゃん。テンション上がってきた!」

「さっき挨拶したのつて、総武高サッカー部の葉山さんじゃん!こないだチバテレビに出た」

「あ、じゃああつちが戸部さんかー。あの二人で地区の得点ランキング一位二位なんだぜ、すっぱーよなー」

「もう一人の男の人もカッコイイ……けど……あれ? なんか目が……寝不足?」

「どうやらポランティアらしい高校生たちは、それで選んだんじゃないかってくらい全員が美男美女だった。」

男子が三人。さつき挨拶してた葉山? っていう人。それから長髪のちよつとチャラそうだけどワイルドって感じでなかなかハンサムな人。もう一人、背も高いし、整った顔立ちの一見文学青年って感じの人、なんだけど、ただ、この人の目が……ドヨンとして……。さつき誰かも言ってたけど、もしかして三日間ぐらい徹夜でもしてるのかもしれない。なんか疲れてるみたいに少し猫背気味だし。

女子は六人。まず目を引くのが長い黒髪の線の細い、超美人。芸能人と言われてもおかしくないどころか、芸能人にもそうはいないレベルに見える。何者?

それから長い髪を明るい色に染めたちよつと気の強そうな人。すごく綺麗で、スタイルも良い。モデルさんみたい。隣でその人と何か話しているのが、ふわふわの髪をピンクがかったブラウンに染めて、頭の横でお団子ヘアにしてる、こちらはスタイルバツグン過ぎの可愛らしい人。この人もモデルさんみたいで、二人とも服のセンスが凄く良い。二人が並ぶと本当に人の目を引きつける。

あと、メガネがよく似合うポブカット、お洒落な麦わら帽子をお腹に抱え、他の人達に比べると少しおとなしうに見える清楚そうな、文学少女っぽいひと。さっきの、目だけちよつと残念な男子の隣に並んだらちよつと絵になりそう。

次に、可愛らしい顔で、グリーン系のジャージとクウオーターパンツをボーイッシュに着こなし、髪も短くていかにも運動部女子って感じの人。

最後の一人は、他の人達に比べると小柄で、少し幼い印象の人。でも、元気いっぱい、すごく可愛らしい。下級生かな。

おまけに、その後紹介された総武高の先生が、びっくりする位キレイな女性で、背も高くスタイルも良い。総武高って、なんでこんなにレベル高いの？ 進学校だよな？

県立総武高等学校——私の小学校の学区内にあり、公立高校でありながら県内有数の進学校。制服のデザインもすごく可愛くて、ちよつと憧れる。ただ、通学途中ですれ違う生徒さん達は、あそこまで美形さんばかりでは無かったような気がするんだけど

.....?

そんな風に、自分の置かれている状況をしばし忘れて高校生たちを観察していると

.....、

「それではみなさん、立ってください。忘れ物はありませんか？」

係の先生がメガホンマイク片手に声をあげる。

「では、オリエンテーリング、スタート！」

そして、鶴見留美は彼と出逢う
リング
中編①
オリエンテー

「では、オリエンテーリング、スタート！」

先生の掛け声と同時に、私達は五、六人で組んだ班、三クラス合わせて17班が一斉にスタートを切る。と言っても、数組の男子の班が凄い勢いで走り出して行ったのを除けば、みんなそれほど急いではいない。

説明によれば、今日のオリエンテーリングは、東京ドーム2つ分位の広さ（広いのか狭いのかよくわからないけど）の林の中に網目のように遊歩道が通っており、その中にチェックポイントはAからFの6箇所。地図に描かれた大きな岩、小川、橋などを目印にポイントを探して、そこに書いてある問題を解いて、チェックシートの回答欄に書き込む、というもの。

制限時間90分。最低でも4箇所以上のチェックポイントを見つけるように、とされている。逆に言えば、4箇所だけでも良いということだ。そう考えればそれほど焦ることも無いだろう。もちろん、全チェックポイントを回って早いタイムでゴールすれば

順位は上がる。一応、5位までの班には豪華？賞品があるという事だし、さつき走って行った男子達はそれが目当てだろう。

各班、それぞれに、大体の探すポイントの順番を決めて、後は雑談をしながらのんびりと歩いている。私達の班も周りと同じように、賑やかに談笑しながら最初のポイントに向かつていく。先頭に仁美と森ちゃん。前とくつつくように二列目に由香と友ちゃん。そして、最後に私が、少し遅れてついて行く。

「……でさー、その時桜井センセが……」

「……うそおー。マジで？ 馬つ鹿じゃん」

「それで……」

「……………」

学校のこと、男の子のこと、さっきの高校生達のこと。話題はコロコロと変わり、誰かが面白いことを言えば、その度に歓声上がる。

私は、4人の会話に入れない。たとえ無視されても、自然に、普通に話しかけてみよう。そう思つて口を開いて見ても、声が出ない——私を拒否する視線に怯えて、声がかく出せない……。

仕方なく、周りの風景を眺めつつ、みんなの話を聞くともなしに聞きながら歩いていた。

周りが少し明るくなった。道のすぐ横をきれいな小川が流れていて、林が少し切れ、その向こうに山が見える。風景画みたいな場所。

……写真、一緒に撮ってもらえないかな……。

本当は、この子達と写真って雰囲気じゃないのはわかってるけど、でも、友達との写真が1枚も無かったら、きつとお母さん、心配する。

「お母さん、私そろそろ行くよ」

「そ、忘れ物無い？ ……あ、カメラ忘れてるわよ？」

「……いいよ別に、私、写真そんなに好きじゃないし」

「そんな事言わないの。友達との写真、たくさん撮っておいで。今は要らないって思っても、後から良い思い出になるんだから。ほらっ」

そう言ってお母さんは、私の手に小型のデジカメを押し付ける。それ以上何も言えず、それを受け取ってショルダーバッグのポケットに押し込む。

「じゃ、行くね」

「はい、行ってらっしゃい。楽しんでおいで。仁美ちゃん達とも仲良くね」

「……うん。行ってきます」

「あ、ポイントA、あれじゃない?」

森ちゃんが、小さな橋の袂にある立て看板のようなものを見つけて駆け寄る。

白いペンキで塗られた立て看板は、風雨にさらされてか、あちこち塗装が禿げており、大分茶色っぽくなっている。そこに真新しい白い紙が、四隅をピンで留めて貼られていた。

「やっぱりそうだ。えーと……」

『Aの問題 現在の千葉県の、市・町・村は、合わせていくつでしょう』

『正解なら10点、十の位が合っていれば5点』

「だってさ、仁美、わかる?」

「わっかるわけ無いじゃん」

「あたしも。友ちゃんは、」

「その、私もわかんない、かな……」

仁美達は、私をチラッと見るものの何も言わない。……ふと、友ちゃんと目が合ってしまった。

「あ、……留、……鶴見、は？」

そう友ちゃんが言った途端、一瞬だけ空気が凍る。

「あ、ごめん……」

友ちゃんは、失敗した、みたいな顔でシユンとしてしまう。

「いいよ、別に。……鶴見、わかる？」

森ちゃんが、どうでもいいけど、という感じで聞いてくる。

「……五十いくつかって聞いたことあるけど……」

私がそれだけ答えると、

「ふうん……じゃあさ、真ん中で55個にしとこっか。当たればラッキー」

由香がそう言って、チェックシートのAの欄に、55と書き込む。

「じゃ、次行こ、次」

「次、Cだっけ」

「うん。C行つてからB」

それからまた、さっきと同じように四人の少し後について、次のチェックポイントを目指して歩き出す。

……なんだか、今のめますます、写真、頼みにくくなっちゃったな……。

首からストラップで下げている小さなデジカメが今日は重く感じる。ちようどお腹のあたりでなんだか寂しそうぶら下がっているカメラを右手でそつと撫で、小さくため息をついた。

そうして、次のポイントを探しているとまた、木が少なくて少し開けたところに出た。するとそこで、さっきの高校生たちがみんなに声を掛けていた。

「頑張れ！」

「ゴールで待つてるから！」

「まだたつぷり時間あるよーん」

彼らに気づくと、仁美達はきやあきやあ言いながら話しかける。

「こんにちはー。お兄さん達もオリエンテーリングやつてるんですかあ」

「いや、僕たちはこのまま登って、料理の準備とかかな。後は、君たちの応援」

森ちゃんが話しかけたのをきっかけに、私達と高校生達は混ざって一緒に歩きだす。

「へー、いま、そーゆーのが流行ってるんだー」

「そのワンピース、すっごいカッコイイです〜」

「んーこれ？、ららぽのバーゲンよ。あーし、違うもん買いに行つた時にたまたま見つけてさー」

「それにしても、小学生なのにみんなおしやれだよね〜。お洋服とか、自分で選ぶの？」

「それはだいたいママが……、コーデは自分で……」

「とべさんは、ずっとサッカーやってるんですか〜」

「んんー、おれさー、小学校の頃はバスケやってたんよー。で、中学入ってから……」

「ええっ！ 男の子？ ……あ、ごめんなさい。その、びっくりしちやって……」

「あはは、よく言われちゃうんだけどね……」

みんな、かっこいい高校生達と話せるのが嬉しくて仕方ないらしく、大騒ぎだ。その後ろを私がついて歩き、一番後ろから、「寝不足男」と「黒髪超美人」が並んで静かに歩いてくる。

……高校生たちが居る今なら、「写真撮ろう」って言っても変じゃないかな？ なんて考えて、カメラを持ったけど、やっぱり話に割り込めない。

「あ、チェック・ポイント、この辺だよ」

お団子あたまさんと先頭を歩いていた由香がチェックシート片手に立ち止まる。

「せっかくだから、みなさんも一緒に探しましょうよ」

仁美が、葉山さんをお願いすると、彼は一瞬だけ迷って、

「じゃあ、ここのだけ手伝うよ。でも、他のみんなには内緒な？」

「はい」

四人が元氣よく返事をして、このあたりにあるはずのチェックポイントをみんなで探すことになった。

何となくみんなと少し離れて看板を探していると、いつの間にかすぐ横に葉山さんが来ていて、私に声をかけてきた。

「チェックポイント、見つかった？」

「……いいえ」

急になんだらうと困惑していると、彼はにこりと笑って言った。

「そっか。じゃあみんなで探そう。名前は？」

「鶴見、留美」

「俺は葉山隼人、よろしくね。あっちの方とか隠れてそうじゃない？」

そう言ってみんなのいる方を指差す。私は彼に背中を押され、四人の真ん中に連れて

行かれた。するとそれまで和やかだった4人に、ピリツとした空気が走る。

森ちゃんと由香が目を見合わせて何か言いたそうにして、でも何も言わない。仁美は、「何でこっちに来るの?」みたいな視線を私に向けてくる。友ちゃんは、周りをキョロキョロみて、なんだかオロオロしている。

「さ、ここには無いみたいだから、もう少し向こうかな?」

また皆でポイントを探し始める。仁美や森ちゃんのすぐ隣で歩いていると、ひどく居心地が悪い空気だ。「一緒に写真撮って」なんてとても言い出せないまま、いつの間にかみんなの輪からはみ出てしまう。

……結局言えなかったな……。どうしよう、お母さんに、写真……。カメラをきゅつと掴む。

「隼人くん。チェックポイントって、これじゃね?」

「きつとそーだよ。とべっち、やったねー」

道から少し離れた所を探してくれていた、とべさん?と、眼鏡ボブカットの女の子がポイントを見つけてくれたようだ。

「ありがとうございます!」

「いーよいーよ。それじゃ、ゴールで待ってるから、みんな、頑張つて!」

お団子頭さんに励まされ、私達は次のポイントを探しに行く。高校生たちはゆつくりと上へと向かう広い道を登っていった。

どうにか全てのチェックポイントをみつけて、私達の班がゴールしたのは終了10分前だった。

まだゴールしてない班もあるようだが、早めについた班は、木陰の芝生に寝転がったり、古タイヤと丸太で作られた遊具で遊んでいたりしていたようだ。

程なく全部の班がゴールする。

「全員揃いましたねー。では、こちらのテーブルに、班ごとに席について下さい。今から順番にお弁当を配ります」

係の先生や、高校生達が、紙の箱入りのお弁当とペットボトルのお茶をテキパキとそれぞれテーブルに配っていく。それから、各テーブルに一つずつ、きれいに剥いて切り分けられた瑞々しい梨の載ったお皿も。かすかに甘い香りが鼻をくすぐる。

「この梨は、みんなのために、ボランティアのお兄さん、お姉さんたちがむいてくれました」

「ありがとうございます」

よく見ると、梨なのに、「りんごのうさぎ」みたいに耳の形に皮がついてるものや、少

し歪な形をしているものもあった。

うさぎの形の梨を食べてみる。皮の付いているそれは、少しだけ苦くて、でもじんわりと甘くて……ちよつとだけ心が落ち着いた。

そして、鶴見留美は彼と出逢う 中編② カレーライス
と隠し味

お昼ごはんの後は、野外レクリエーション。

「子供の遊び指導員」の中岡さんという、少し年配のおじさんから、昔からある、あまり道具を必要としない野外の遊び方を教えてもらった。

五つほどのグループに分かれて、「ハンカチ落とし」「フルーツバスケット」「手つなぎ鬼」等を順番にやっていく。

クラスも班もバラバラに振り分けられたグループだったので他の四人とは一緒にならず、正直私は、少しだけほっとすることができた。

時刻は午後三時。今から班ごとに、野外炊飯でカレーライスを作り、午後5時を目安に早めの夕食になる。

私の班では、一応、私と仁美・由香がカレー、森ちゃん・友ちゃんがご飯の担当だ。

まず、高校生を引率してきたあの美人先生が、かまどの火の付け方を見せてくれた

……んだけど……、

まず、かまどの下に等間隔に隙間を開けて炭を積み上げ、下の方に液体の着火剤をびゅうとかける。それから、新聞紙を固く棒状に丸めて、その先端にライターで火を点ける。

ここまでは流れるような動きで実にスムーズだった。それを、着火剤をかけた炭の横に押し込む。一応火はついたようだけど、なかなか炎が大きくならない。

するとその先生は、炭の上からさつとサラダ油をかけた。バチバチつと音を立て、一瞬大人の背丈よりも高く火柱が上がる。

わあつ、と、みんなから歓声のような、悲鳴のような声が上がったが、その一瞬だけで火は落ち着いたようで、当の先生は余裕の表情。なんだかすぐくかつこいい。

ただ、他の先生方は慌てていて、

「みんな、最後のは悪い見本だから真似しないように。なかなか火がつかない時は近くの先生にお願いしなさい」と注意を受けた。

ふと横を見ると、さつきの女先生が、うちの校長先生に叱られてペコペコ頭を下げていた……。

炊事場、と言つても屋根の下に大きな流し台がたくさん並んでいるだけけど、雨天時にはここにガスコンロをセツトして煮炊きが出来るらしい。そのせいか、百人位で料理をしても、スペースには十分な余裕があるみたいだ。

私は、相変わらず他の四人と少しだけ離れた所で、割当のジャガイモと人参を、どんな皮をむいてちようどいい大きさに切り分けていった。

私達のところに近いかまどで、さっきの高校生達が火を起こしていた。葉山さんって人が、少しニヤニヤしながら、あの寝不足男をからかうように何か話している。

私のすぐ横で、「フ、腐腐……」というような変な声が聞こえたので思わずそつちを見ると、

「愚腐腐つ『とべはや』を見に来たはずが、まさかの『はやはち』とはっ!!! キマシタワー」

と、「眼鏡の似合う線の細い美少女」だったはずのものが、壊れて何か違うものになるうとしていた……。すると隣りにいた人が、そのものの頭をしゃもじでスパコンと勢い良く引つ叩いた。

「つたく、小学生の前で……。少しは擬態しろし」

あ、この人、髪を束ねてるけど確か三浦さんとかいう人だ。意外とピンクのエプロンがよく似合っている。まあ、今のは見なかったことにしよう。

でも……。こういう馬鹿みたいなのを見ていると、惨めな気分を少しだけ忘れられる。

私は手先が器用な方だ、と、自分でも思うし、料理だつて結構出来る。ただ、流石に炭のかまどでの調理は経験がないから、なかなか新鮮な体験だつた。

さつき見せてもらった要領で炭に火を着け、飯盒とカレーの鍋を火にかける。

ここまで作業が進むと、みんなの手が空いてくる。後は、カレールウを入れるまでは、かまどの前で雑談しながら時々鍋の様子を見ているだけだ。

仁美も由香も、一緒に作業している間は、必要な事だけは話をするけど、こういう時は何となく会話に入れてもらえない雰囲気になる。いつの間にか、そんな空気を読むことに慣れてきちゃつてるなあ……私。

……だから私は、四人がいるかまどの前から少しだけ離れた柱にもたれて、少しずつ暮れていく景色と、かまどの火とを交互に眺めていた。

すぐ近くで自分たちのカレーを作っていた高校生達が、近くで作業している、私達を含むいくつかの班に声を掛けてきた。

作業が遅れている班は、火を起こすのを手伝ってもらったりしているけど、森ちゃんや仁美たちは普通に雑談をしている。

仁美と話していた葉山さんが、突然、すつとこつちにくると、

「カレー、好き？」

なんだか造ったような笑顔で私に聞いてきた。何で私に？ ……みんなと離れてる

私に気を使ってくれたのかな。

でも、正直……困る。だって……。

さつきまではしやいでいた仁美や森ちゃん、それに他の班の子たちも、黙って私達を見ている。その視線にどこか非難めいたものを感じ、目をそらして下を向く。

「……別に。カレーに興味無いし」

周りの視線に耐えきれなくて、それだけ言つてその場を離れた。それでも、嫌な視線は絡みついてくる。

まだ、料理の途中だから、遠くに行くわけにも行かない。どこか……。一箇所、他と温度が違うように見える場所があった。顔をあげると、あの寝不足男と黒髪美人が少し間を空けて立っている。なんでここだけこんな空気なんだろう？

でも、私は逃げ込むようにそこに向かった。

美人さんが強い眼差しで周りを一睨みし、寝不足男がドヨンとした目でみんなの目を見返すと、私に向いていた嫌な視線がたちまちそらされる。

……もしかして、助けてくれたのかな。

そこで葉山さんが、

「じゃあ、せっかくだし隠し味入れるか。みんな、何入れたら良いかな？」

明るく大きな声でそう言うと、もうみんなの注目はそっちに行つてくれた。ほつとす
る。

「コーヒー入れようよ」

「チョコレートでコクが出るつて」

「フルーツ入れよう。桃缶とか」

え？ 思わず振り向くと、変なことを言つてるのはお団子頭さんだった……。カレ
ーに桃缶つて……。

「あいつ、バカか……」

思わず、という感じでそれを見ていた寝不足男が言葉を漏らす。美人さんは額に指を
当てて眉をひそめている。

「ほんと、馬鹿ばつか」

そう私が言うと、目の前の彼は、さも当然の事だろうと言わんばかりに、

「まあ、世の中大概はたいがいそうだ。早めに気がついてよかつたな」

そんなことを言う。私は急に興味が湧いて、まじまじと彼の顔を見上げた。相変わら
ず目はどんよりしているけど、眠そうつて感じでもない。この人、別に寝不足じゃなく

て、いつもこんな目なのかな？ そんなふうに見ていると、

「あなたもその、大概のうちの一人でしょう」

そう美人さんが言う。

「あまり俺を舐めるなよ、俺は大概とか大勢とかの中には入れてもらえん。ぼっちは常にぼつちだからな。つまり俺は常にオンリーワンの存在たる逸材ってことだな」

「そんな最低なことを得意顔で誇れるのはあなたくらいのものでしょうね……。呆れるのを通り越して軽蔑するわ」

「通り越したなら尊敬してくれませんかね……」

ふふ、変なの。……夫婦漫才？ なんだかこの二人なら、私のことを解ってくれるんじゃないかって……別に助けてはくれなくても、理解はしてくれるんじゃないかって、不思議とそう思えた。本当はなんでもいいから頼りたいだけなのかもしれないけど。

……名前、知りたいな。

どう聞いたら良いのか思いつかず、

「名前」

とだけ言う。

「あ？ 名前がなんだよ」

本当になんの事かわからない、みたいな態度にちよつとイラツとして、

「名前聞いてんの。普通さっきので伝わるでしょ」

と、つい強く言ってしまった。すると、

「……人に名前を尋ねる時はまず自分から名乗るものよ」

一気に二十度ぐらい温度が下がったような気がした。……美人さんが私を氷のよ

うな瞳で睨んでいる。表情を歪めたりとかは全然してないのに、

ただ、目だけが怖い……ほんとに怖いよ……。目を合わせられない。

視線をあわせられないまま、私は小さい声で、

「……鶴見、留美」

それだけ言えた。それでどうやら目の前の雪女さんは許してくれたようで、私の周り

の温度が戻ってくる。

「私は雪ゆきのノ下雪したゆきの乃。そこのは、……ヒキ、ガ？ ……ヒキガエルくん？ だったかしら」

「おい、なんで小学校の頃の俺のあだ名知ってんだよ、……最後は俺、カエルってよばれてたからな」

彼は雪女さん、じゃなかった雪ノ下さんにそう言い返してから、あらためて私の方に

向き直り、

「ひきがやはちまん比企谷八幡だ」

そう名乗った。

「で、これが由比ヶ浜結衣ゆいがはまゆいな」

ちようど今、雪ノ下さんのとなりにやって来たお団子頭さんを指して比企谷さんが言った。

「へ、なに？ どったの？」

由比ヶ浜さんは、わたしの方を向いて、

「あ、あたし由比ヶ浜結衣ね。鶴見、留美ちゃん、だよね？ よろしくね」

「うん……」

声をかけてくれた彼女に、私はただ、頷くだけで答えた。

「なんか、そっちの二人は違う感じする。あのへんの人たちと」

もどかしくて上手く言えないことを、それでもどうにか口にした。

比企谷さんは、一瞬だけカレーの味付けで盛り上がっている仁美たちや葉山さんの方を見て、また私に視線を戻す。それで、ああ、この人には伝わったんだな、と何故か安心した。

「私も……違うの。あのへんと」

そう、違うはずなんだ。私はあんなのと一緒じゃない。だから……。

「違うって、何が？」

由比ヶ浜さんが真剣な顔で聞いてくる。

「周りはみんなお子様なんでもん。私、今までその中でけっこう空気読んで、上手に立ち回ってきたつもりなんだけど……。でも、なんかそういうの下らないからもうやめたの。自分が嫌なことしなきゃ一緒にいられないなら、一人でも別にいいかなって」

「で、でも。小学校の友達とか思い出って結構だいいじなんじゃないかなあ……」

「別に思い出とかいらぬ……。中学入ったら他から来た人と友達になればいいし」

そう、あんたつまらない事を喜ぶ人達ばかりではないはずだ……。なんて——ただの強がりなのは自分でも分かっているけど……。

「残念だけど、そうはならないわ」

雪ノ下さんが、私の目をまっすぐに見て言い放つ。

「あなたの同級生達も、同じ中学へ進学するのでしょうか？　なら、また同じことが起きるだけよ。今度は『他から来た人』も一緒になって」

何も言い返せない。そんな事、ホントはなんとなく解ってた。ただ、そうじゃないって、勝手に信じたかっただけなのも。

「それくらい、あなたはわかっていっているのではなくて？」

そう。ほんとに私……。

「やっぱり、そうなんだ……。ほんと馬鹿みたいなことしてた」

「何が、あったの？」

由比ヶ浜さんが穏やかな声で聞いてくる。

「誰かがハブられるのは何回かあって……。けど、そのうち終わるし、そしたらまた前みたいに話したりする、クラスのマイブームみたいなもんだったの。いつも誰かが言い出して、なんとなくみんなそういう雰囲気になるの」

三人共同も言わない。けど、真剣に聞いてくれているのは感じる。

「それで、私と仲良かった子がハブにされてね、その時は私もちよつと距離置いちゃって……。でも、その子が本当に大切にしていることを、あいつら、けな貶して、馬鹿にしたの」

「私、その子がそのことをどれだけ大事に思っているか知ってたから、どうしても我慢できなくて……。それで、みんなに、『こんな馬鹿みたいなことやめよう』って。…….そしたら、今度は私がこうなったの……」

雪ノ下さんが小さく息を吞んで、少し目をそらした。

ぼたり、と、足元に水滴が落ちる。……私、いつの間にか泣いてたんだ……。

「中学校でも、…….こういうふうになっちゃうのかなあ」

その時、

「すごい。これ、美味しい！」

「ホントだー。やっぱコーヒーがよかつたんじゃん？」

「やっぱさー……」

カレーの味見で一層盛り上がるみんなの声が響いてきた。

夕食後、後片付けをして本館に戻り、入浴、今はもう就寝時間。

部屋は、ドアを入れて右側に、作り付けの二段ベッドが二組縦に並んでおり、左側がトイレ、奥に二段ベッド一組の、真ん中の通路を三組の二段ベッドで挟んだような形の六人部屋だ。

私は左のベッドの上の段で一人横になっている。

他の四人は、消灯時間を過ぎても、まだ右下奥のベッドに集まってまだひそひそと雑談中だ。

「それにしてもさー、葉山さん、やっぱカッコイイよねー」

「ほんとほんと」

「私は戸塚さんかな。最初、女の子かと思ってたからマジびっくりしたけど、話したら結構カッコいい事言うし、そう。あれでテニス部の部長さんなんだって」
え？ 思わず声が出そうになった。戸塚さんって……あの緑のジャージの!?
男の子だったんだ……今日一番びっくりしたかもしれない。

もうすぐ夕食が始まる……。またあの中に戻らなきゃなんない……。

私が必死でこぼれそうになる涙を抑えていると、

「まあ、あれだ。向こうに居場所がないような時は、俺らんとこに来ればいいんじゃないかねーの。知らんけど」

思わず比企谷さんの方を振り向く。目が合うと、照れたように視線を逸らされた。少し頬が赤い。

「……比企谷くん、あなたこんな所で小学生をナンパするなんて、犯罪者の風上にしか置けないわね」

「俺、どんだけ居場所限定されてんだよ」

「うわあ、ヒツキー、なんだか顔、赤くしてる。……キモい」

「馬つ鹿、違うっつーの。……雪ノ下、携帯をしまえ。すぐに通報しようとするんじゃない」

「まあ聞け、今は夏休み中だ。だからこの林間学校さえ乗り切ってしまえば、後は新学期まで自宅から一步も出なければとりあえず嫌な状況は避けられるだろ」

「い、一步も出ないって、それはさすがにムリがあるんじゃない……」

「大丈夫だ。必要なものはみんなアマゾンさんが届けてくれる。なんだったら、新学期が始まって一步も外に出たくないまである」

「ヒツキー……」

コホン、と雪ノ下さん。

「話がそれているわ。彼女が呆れているでしょう？」

「お、おう。これはあくまでお前が嫌じゃ無ければ……」

『『お前』じゃない』

「……スマン。……鶴見が、

『『留美』』

今みたいな感じになってから、『鶴見』と呼ばれると、相手から酷く距離を取られたよ

うに感じて、胸が痛くなる。だから、比企谷さんには、『鶴見』と呼ばれたくない。

何でか分からないけど……そう、思った。

「……はあ、わかった。その、留、留美が嫌じゃなければ、雪ノ下のところでも、由比ヶ浜のところでも良い、いつでもこっちがわに来ればいい。そう思えるだけでも少しは気が楽になるだろ」

「八幡のところでも良いんでしょ？」

思い切つて、『八幡』って呼んでみた……嫌がるかな？

「名前呼び捨てかよ……」

「は？ 名前、八幡でしょ？」

「はあ、まあ良い。俺んところでも構わんが、俺一人の時はダメだ」

意外なことに、彼は名前呼びされた事をあつさり流し、別なことにダメ出しをする。

「何で？」

「何でって、お前みたいのが俺一人のところに来たら、雪ノ下とかが通報しちゃうだろ」

「ほんとね。やっぱり今のうちに通報しておこうかしら」

「まだ何もしてねーだろ……」

「『まだ』、今『まだ』って言ったわね。比企谷くんあなたやっぱり……」

「ヒツキーキモい」

「揚げ足を取るな!!」

ふふ、なんだか少しだけ心が軽くなった。いつの間にか涙も引っ込んでいる。

「あの、」

私は三人に対して真つすぐ立って、

「もう、戻るね。……ありがとう。その、話、聞いてくれて」

「おう、またな」

「いつでもおいで、待ってるからさ」

「そうね」

雪ノ下さんも、優しい顔で頷うなずいてくれた。

微かに聞こえてくる仁美たちの話し声と、建物全体を包み込むように何処からともなく響いてくる虫や蛙の声……脳裏にはなぜか八幡の照れたような顔が浮かんで……

た。最近なかなか寝付けなかったのが嘘のように、私はいつの間にか眠りに落ちていった。

幕間 ① 青い世界

将来の夢

四年二組 鶴見 留美

私のお母さんは、洋服のコーディネートをする仕事をしています。洋服や、靴や、バッグ等を、たくさんの中から選んで、とてもおしゃれでかっこいい組み合わせを作ります。それを、雑誌の、ファッションの記事にします。

同じ洋服でも、組み合わせによって、おしゃれになったり、かっこ悪くなったりするので、とてもかっこいい組み合わせを見つけるお母さんはすごいと思います。

この前、お母さんのお友達のところへ、仮ぬいのモデル、というのをさせてもらいました。ばらばらに分かれています。私の体に合わせてまち針と糸でとめていくと、たった五分ぐらいですてきな洋服になりました。それを写真にとります。三着くらいやりました。

お母さんや、お母さんの友達に、「留美ちゃん、似合うね」と、ほめられて、とてもうれしかったです。

私は、おしゃれでかっこいい洋服が好きです。組み合わせを考えるのも楽しいです。だから、私は大人になったら、洋服を作る仕事か、お母さんのように、洋服の雑誌を作る仕事がしたいです。

「留美ちゃんは、さっきの作文、なに書いたの?」

「んー、お母さんの仕事のこと書いて、あとは、洋服の仕事がしたいです。っていうかんじかな。 泉ちゃんは?」

「わたしは、絵の練習と勉強をいっぱいして、おじいちゃんの絵をみんなに紹介出来るようになりたいって書いたよ」

「紹介? 『おじいちゃんみたいな画家になりたい』 じゃ無いの?」

そう聞くと、泉ちゃんは、びつくりした顔でかぶりを振って、

「無理だよおー。 画家にはなってみたいけど、おじいちゃんみたくするのは、さすがに無理」

「そうなの?」

「うん。 えへへ」

泉ちゃんのおいしいちゃんは、私は知らないけど結構有名な画家さんらしい。泉ちゃんは小さい時からおじいさんに絵を習っていたという。

そのおかげか、泉ちゃんが図工の時間に描く絵は、いつも特別な存在感を放っていた。奥行きがある、絵に広がりがある、なんというか、「一枚の画用紙の中に小さな世界がある」みたいな感じだ。

「でも、紹介して言っても、どんな仕事？ 雑誌とかで記事書くとか？」

「えっとね、がくげいいん、って言って、美術館とか博物館とかで展示物を管理するお仕事があるんだって。 だから、わたしはそれになりたいって」

そう言う泉ちゃんの顔は、何だかとてもほこらしげだった。

「……それで、なんだけど」

「何？ 泉ちゃん」

「留美ちゃん、今度の土曜日、何か用事ある？」

「何も無い、と思う。 一応お母さんに聞いてみないとだけど」

「もし大丈夫だったら、私のおじいちゃんの絵、一緒に見に行ってもらえないかな？ なんか今、展覧会、みたいなやつってるんだって。 それで、もしよければ泉も友達連れておいでって、おじいちゃんが券くれて」

「……良いけど、それ、私なの？ 愛ちゃん達は？」

愛ちゃんと夏菜ちゃんは、泉ちゃんと幼稚園から一緒の子で、いつも一緒にいる。三人とも、どちらかと言えばおとなしい子たちだ。だから、泉ちゃんがさそうなら、まず彼女たちが先だろう。

「えっと、聞いてみたんだけど、油絵とか、あんまりよくわかんないから……」

そう言つて彼女はちよつとしよんぼりしてしまった。自慢のおじいさんの絵を見せたかつたのかもしれない。

私は、逆に少し興味が出てきた。あれだけ絵の上手い泉ちゃんが、そこまで尊敬しているおじいさんの絵、見てみたいな。

「私、見に行つてみたい」

「ほんとー！」

「うん。今日帰つたら、行つてもいいか聞いてみる。土曜日だね」

「うんっ。一緒に行けたらいいなあ……」

泉ちゃん——「藤沢^{ふじさわ} 泉^{いずみ}」という女の子と仲良く話すようになったのは、その前の年、

三年生の五月くらいからだ。

私の学校には、朝のホームルームから一時間目の授業まで十分くらい「読書の時間」というものがあって、みんな自分の好きな本を読んでいる。漫画は禁止だけれど、それ以外なら、小説でも、絵本でも、科学の雑誌とかでもいい。本は家から持つてくる人もいれば、図書館から借りている人もいる。

私はその日、家から持つてきた文庫本の小説を読んでたんだけど、早く続きを読みたくて、休み時間にもその本を読んでいた。そしたら、

「あれ、その本……」

隣の席からそう声をかけてきたのが泉ちゃんだった。もつとも、本人は、声をかけた、と言うより、思わず声が出ちゃった。という感じだったようだけど。

「何？ この本、どうかしたかな？」

そう、私が尋ねると、

「あ、あの、ごめんさい。……そのね、こ、これ」

そう言つて彼女は、今彼女自身が読んでいたらしい本のブックカバーをはがしてみせた。

「あ！ それ……」

「うん。だからちよつとびっくりしちやつて」

そう、私と泉ちゃんは、隣の席で、お互いそれとは知らずに全く同じ本を読んでいた。
だ。

それは、おんだりく 恩田陸という作家さんの「夜のピクニック」という文庫本。小学三年生でこれを読んでる子はいないだろうな、と自分でも思っていたくらいだから、隣の席の子がその本を同時に読んでいた、という事に、私も本当に驚いた。

……それに、なんだかとても嬉しかったんだ。

彼女もきつとそう思ってくれたんだろう。それ以来、私達はいろんな話をするようになった。本の話が多かったけど、それ以外にも、家族のことや、お互いの友達のことも。ただ、それで私が彼女たちと一緒にのグループになる、というようなことは無かった。いつも一緒に行動するわけでは無いけど、二人で話していると楽しくて、なんとというかとても居心地がいい。そんな不思議な友達関係。

泉ちゃんとは、大人になってもずーっと仲良しでいるんじゃないかな……なんて、この頃はそんな風にも思っていた。

「お母さん、お帰りなさい。ご飯だけは炊いたよ」

「ただいま。ごめんね。ちよつと遅くなっちゃった。今日は、ぱぱつとおかず作るから、ちよつと待っててね」

「うん、それは大丈夫。あ、もうお風呂のスイッチいれよつか？」

「そうね、じゃあお願い」

帰ってきたばかりで疲れているはずなのに、お母さんは椅子に掛けてあつたエプロンを着けながらキッチンへと向かう。

……私をもつと大人なら、もつとたくさんお母さんを手伝えるのに……。

たまに私がそんな事を言うと、お母さんは、

「そんな事考えなくていいの。留美はまだ四年生でしょ、友達とたくさん遊んで、たくさん勉強して、とか、そういうことのほうがずっと大事なんだから」

なんて、笑いながらそう言う。

現在の鶴見家は、母子家庭みたいな状況になっている。お父さんは元気だけど、いわゆる単身赴任中で、ここ最近一、二ヶ月に一回くらいしか家に帰って来れないでいる。

以前の赴任先にいた時は、毎週末に帰って来れたんだけど……。まあ、一箇所に半年ぐらしいか居ないし、

『お父さんの次の赴任先が家に近いところでありますように』
と、今度神社でお願いしてきてあげよう。

いつも、向かい合ってごはんを食べながら、その日学校であったこととか、友達とどんな話をしたのかとか、いろんな話をする。なんてことない話でも、お母さんはとても楽しそうに聞いている。

「ねえお母さん」

「ん？ なあに？」

「今度の土曜日、何も無いよね？」

「無かった、と思うけど、どうしたの？」

「クラスの、泉ちゃんて子が、一緒に絵を見に行こうって、その子のおじいちゃんが画家さんで、なんか、展覧会？するんだって」

「泉ちゃん……。」

あ、あのおんなじ本読んでたって子か」

「うん。その子」

「良いじゃない。絵の展覧会。あ、でも、場所どこ？ 子供たちだけであんまり遠くは……」

「東京だつて言つてたけど、泉ちゃんはお母さんが一緒に来るつて」

「東京つて言つても広いけど……。でも、あちらのお母さんが行つてくださるつていうなら、お願いしちゃうかな。良いよ、留美、行つておいで」

「やった。ありがとうお母さん。お土産買つてくるね」

「いや、東京に仕事しに行つてる私に東京のお土産つて……」

「いいの。こういうのは「気持ち」でしょ」

「……留美、あんたはまた子供っぽくない言葉ばかり覚えて……」

子供っぽくなくていいんだ。……私は早く大人になりたい。

お母さんが仕事していることで、周りから色々と言われているにはけっこう前から気付いていた。そのことで悩んでいる事も。

自宅のパソコンで作業出来る部分が多い仕事とは言え、週の半分は江東区にある出版社に出勤してるし、時には遅くなることもある。お父さんがあまり家に居れないことも

あつて、おばあちゃんは、会う度に、「留美が可愛そうでしょ。十分生活出来てるんだから、無理しないでそんな仕事やめちやいなさいよ」とお母さんを叱る。

私は、それがたまらなく悔しい。仕事してるお母さんはすごくかっこいい。私のせいで、私が大人じゃないせいで、お母さんの仕事を、「そんな仕事」なんて言われちゃうのが悲しい。だから、私は早く大人になるんだ。

私が、そんなことばかり言っているせいか、お母さんは、私が友達と遊んだり、出かけたなり、という話になると本当に嬉しそうにしてくれる。私が……子供らしく、いつも元気で、たくさんのお友達と仲良くしてる、「留美」でいればお母さんは安心して仕事を続けられる。

だから、私は、いつも元気で友達たくさん「留美」で居よう。

——土曜日——

「……あの、……()? え?」

「? どうしたの、留美ちゃん?」

私、泉ちゃん、泉ちゃんのお母さん、の三人で電車に揺られてやって来たのは……、

上野近代美術館 特別展Aホール、『蒼あおの世界』—— 藤澤誠ふじさわせいじ司展し」

海外でも「青の巨匠」「日本のムソク」などとして広く知られる藤澤誠司の代表作、ニューヨーク現代美術館所蔵の『苦惱くのおう』、十五年ぶりの日本公開。他にも数多くの有名作品を揃え……。

正面玄関横の、深い青色のボードにくつきりと真つ白い文字も鮮やかな、大きな大きな看板を見るだけでも、どれほど有名な画家なのかわかる。有名つていう話だけは聞いてたけど、こんなに凄い人だなんて知らなかった。

啞然としている私とは対象的に、泉ちゃん親子は、慣れた様子で入場窓口に向かう。私もなんとか置いていかれないようについて行く。

『苦惱』は、私も生で見ると初めてなんだ。ほんと楽しみ」

「なんか、すごいんだね」

我ながら間抜けな感想だとは思うけど、それしか言葉が出てこなかった。

常設展は後で見ることにして、先に今日の目的である、泉ちゃんのおじいさんの展示、企画展、『藤澤誠司展』の入場ゲートをくぐる。

照明のやや落とされたまっすぐの回廊を抜けると、

そこに、『苦惱』はあった。

大きさは、畳三枚分程だろうか。暗い背景の上に、三人の男たちが描かれている。一人はうつむいて座り込み、一人は何かを嘆いているかのように右手で目のあたりを覆うようにして立ち、最後の一人は正面を向きつつも目をそらしている。

そして、幾重にも、幾重にも塗り重ねて描かれた男たちは、髪も髭も全て青色。黒に近い暗緑色のような色から、この暗さの中では白にさえ見える水色に近い青まで、その濃淡と、一センチ以上はあるだろう、油絵具の塗り重ねの立体が、照明に照らされて濃い陰影を作り出している。

——圧倒的な存在感。私はその絵の前に立っただけで足がすくみ、それでも目が離せないでいた。

「留美ちゃん」

どれくらい呆けて居ただろうか、泉ちゃんに呼ばれて、我に返る。

「うん……。泉ちゃん。うん、すごい、ね」

「うん……、ほんとに。すごい」
泉ちゃんは少し涙ぐんでいた。

その後、順路に沿って館内を進む。『苦惱』ほどではなくても、それぞれに素晴らしい絵が並ぶ。そのほぼ全てが青い世界。

面白かったのは、彼の若い頃の作品を集めた部屋で、ここだけは普通の（青色だけじゃない）風景画や、赤一色・黄色一色だけの人物画や、ブロンズ像まであって、こんなにすごい画家さんでも、昔は色々悩んだりしたんだろうな、と思つてちよつと楽しくなつた。

企画展の出口にあたる部屋に入ると、泉ちゃんが、

「おじいちゃん、来たよー」

と言つて駆け出した。

「あら、走らないの」

彼女のお母さんがたしなめるが、泉ちゃんは聞いてない。その先で、車椅子に座つた、でもどこかガツシリとした体格の、七〇歳ぐらいに見える男性がこちらに向かつてニコ

ニコしていた。すぐ横に二人、警護の人がついている。

「おお、お前たちか、来るのが今日なら連絡ぐらい……」

そこまで言つて、私に気が付いた泉ちゃんのお祖父さんは、

「おや、こちらのお嬢さんは？」

そう彼女に聞く。

「私の友達だよ。おんなじクラスで、ほら、私と同じ本読んでた子」

「あ、あの、初めまして。鶴見、留美です」

「初めまして。泉の祖父で、絵描きの藤澤誠司といいます。今日は来てくれてありがとう」

朗らかに右手を出されたので、思わず握手までしてしまった。なんか、あいさつの仕方までいちいちカッコイイおじいさんだなあ。映画に出てくる外国人みたい。

「もしよろしければ、今日の感想などいただけませんか」

藤澤先生がそう言うと、泉ちゃんは、

「私、『苦惱』、実物初めて見たけど、やっぱり写真とは迫力が違うねー。絵はさ、大きければいいってもんじゃないのは分かってるけど、あの大きさはそれだけでもうパワーだよ。私もあのくらい大きいのは、描いてみよっかな」

そう言うと、

「あんな大きなの、家のどこに置くのよ……」

と、泉ちゃんのお母さんは呆れている。

私は、

「あの、上手く言えないですけど、『苦悩』 本当に感動しました。なんていうか、心の中に真つすぐ入ってくるみたいで……その……」

「うんうん。ありがとう。君たち位の子には『怖い』絵だつてよく言われるんだけどね」
「えと、怖いって感じは無かったです。すごい迫力は有りましたけど……」

もう少し何か言わなきゃ……。 あ、そうだ。

「あと、先生の若い頃の作品で、あの、黄色い人の絵が、なんか可愛くて好きです」

私がそう言うと、藤澤先生は少しびっくりしたような顔をした後ニツコリと笑い、

「『憧憬』か。若い頃の拙い作品を、好き、と言ってもらえるのは、なんだか面映いおもはゆが、嬉しいものだね、ありがとう。留美くん」

うっ……、やっぱり藤澤先生、いちいちカツコイイ。

その後、泉ちゃんのお母さんに、私と泉ちゃんとで先生を挟んだ写真を撮ってもらった。
た。

「泉にはいい友達が居るな。どうかこれからも泉と仲良くしてやってくださいね」

「はい、もちろんです。今日はお招きいただきまして、ありがとうございました」

「あ、なんか留美ちゃん、あいさつがカッコイイ?」

ふふ。先生に対抗して、精一杯カッコつけてみた。

ミュージアムショップで、お母さんへのお土産にと何枚か絵葉書を買ひ、美術館を出る。

空を見上げるときれいな青空。その青を見ても、『苦惱』の、鮮烈な「青」の印象が薄れることは無かった。

そして、鶴見留美は彼と出逢う 後編① 自由行動は意

外に不自由

なんだか、懐かしい夢を見ていたような気がする。夢の内容はほとんど覚えて無かったけど、イメージは深い青色。窓の外に広がる、高原の空の色にも負けない、鮮烈な青……。

目が覚めた時、一瞬いつもと違う視界に混乱した……天井がすぐ目の前にある。二段ベッドの上の段って結構高いんだな。

そう、昨日から、林間学校で……。ようやく頭が働き始める。部屋の時計を見ると、まだ五時を回ったばかり。仁美たち四人はまだぐっすりと寝ているようだ。昨日、遅くまで起きてたみたいだし。

他のみんなを起こさないように、静かにベッドのはしごを降り、カーテンを小さく開けて窓の外をしてみる。外はすっかり明るくなっているけれど、太陽はまだ昇ってきたばかりのようで、林の木々が長い影を作っている。

予定では、今日、日中は自由行動のはず。それから、夜に肝試し。自由行動も肝試し

も、基本的には班ごとの行動だ。この部屋の四人と一日中一緒……。正直、気が重い。でも、今日を乗り切れば、明日はクリーン活動（ゴミ拾いとか掃除）をして、帰るだけだ。そう考えて、どうにか気持ち奮い立たせる。

朝食は簡易なバイキング形式で、クラス、男女関係なく、好きなもの同士で食べて良いとこのことで、みな大騒ぎで食べている。私は、窓際の一番組の、外の景色を眺めながら食べられる席に座った。食堂を見回してみるのが、八幡たちは居ない。どうやら朝食は一緒ではないようだ。その事をちよつとだけがつかりしている自分に驚いた。どうやら私は、あの人達が、その、嫌いでは……無いみたい。ふふ、変なの。

ふと気が付くと、もう半分以上の子たちが食事を終えて、食器を返し、部屋へと戻っていく。私の部屋の四人も、食堂を出て行くところだった。私は、残っていたパンを口に押し込むと。少しだけ急いで食器を片付けた。

御手洗いを済ませて部屋に戻ると、もう誰も居なかった。食事に出る前に、出かける準備を済ませておいたのだろう。多分だけど……わざと。私を置いてけぼりにするために。

さすがに凹んだけれど、とにかく仁美達を追いかけなくちゃ。素早く手荷物を用意し、首からカメラを下げ、すぐに部屋を飛び出した。

飛び出した……けど。走り出そうとしていた足が止まる。……飛び出して、追いかけて、それで？ 彼女たちに追いついたとして、なんて言うの……？

それでも、私はのろのろと歩き出した。追いつけなくなつていい。むしろ、見つからないほうがいいのかもしれないな、なんて思いながら。

そんな事を考えながら歩いていたのに、案外簡単に四人を見つけてしまった。正面玄関から出て右手の、本館から少しだけ離れた林の中に、やや大きめの東屋があり、そこから森ちゃんも仁美の声が聞こえて来る。おそらく、由香と友ちゃんも一緒だろう。

たつた今まで会いたくないな、なんて考えていたくせに、それでも四人に追いついたことにどこかホツとして声をかけよう……

「それにしても、鶴見、調子に乗つてるよねー」

そう言った仁美の声に、思わず木の陰に隠れてしまった。

「せっかく葉山さんが声かけてくれてんのに、『別に興味ない』とか言つて、どっか行つちやうしよ」

「こそ。相手してらんない、みたいにさ。でも、あの、なんだっけ、雪なんとかさん？目が超怖くなかつた？ やばいよね、あれ」

「わたしも怖かつた。目、合わせらんなかつたもん、あとゾンビみたいな目の人も」

「でもさー、私、見ちゃつたんだよねあの後」

何か思わせぶりに森ちゃんが言う。

「え、何？」

「それが、ウケんの。鶴見、あいつ泣いてたんよ」

……一瞬、頭が真っ白になった。

「あいつ、たまたまあたしから真つすぐ見えるとこに立ってたんだよね。で、何となく見てたら、俯いたまんまで、涙ポロポロ流しながらなんかボソボソ言つてんの」

「なっ、カツコ悪……」

見られて……た。……あんな惨め^{みじ}に泣いてるとこ、見られてた……。 恥ずかしい。

悔しい、恥ずかしい、悔しい、悔しい、悔しい……。

足が震える、目に涙が溜まってくるのが自分でもわかる。いつも私の事なんか見ないくせに、どうして、あんな時だけ……。

「じゃあ、あの怖いおねーさんに、『ハブラられて悲しいよー、えーんえーん』とか言っちゃってたりして、ぷ」

「フツ、誰よソレ」

「だいたい鶴見もさー、藤沢んときの事、あやまつてもこないじゃん。それじゃ、こつちだつて終わりつてわけにいかないよねー」

そう、私は、今までの子たちと違って、「何となく」ハブラれたわけじゃない。こんなの、幼稚だと言つてみんなを馬鹿にしたんだ。……直前まで、自分も同じ、幼稚なことを、馬鹿な事をしていたくせに。

だから、私に対する嫌がらせは、今までみたいに自然には終わらないだろう……もしかしたら、ずっとこのままなのかな……。

でも、じゃあどうしたら良い？ みんなに謝るの？ 私が間違つてた、つて。
……嫌だ。絶対に嫌だ。

それは、あの日みんなが泉ちゃんにした事を許すつて事だ。……あの時、私が泉ちゃんを見捨てたことを許すつて事だ。そんな事、できない……よ。

ポタツと、抑えていた涙が落ちる。私、また泣いてる。かつこ悪いなあ、私つて。

「あ、テニスコート、もうそろそろ使える時間になるよ」

そう言つて由香がぴよこんと立ち上がる。

「んじや、行こつか」

「あー、鶴見は？」

「来ないんだからほつとけば。自由行動は『好きな人同士で組んで下さい』だしねー」

「あはは、じゃあしよーがないつかー」

四人の声が遠ざかつていく。その声が完全に聞こえなくなるまで、私は動くことが出来ずに居た。

これからどうしよう。さすがに彼女たちを追いかけて一緒にテニスするなんて出来るわけがない。仕方なく、来た道を重い足取りで引き返す。

本館の前まで来た所で、生け垣の刈り込みをしていたらしい職員さんが声を掛けてきた。

「どうしたの、忘れ物かい？」

確か、昨日、外遊びの指導をしてくれた、中岡さんとかいう方だ。

「いえ……」

「お友達は一緒じゃないのかな？」

「……………」

私が何も言えずにいると、中岡さんにはっこり笑って、

「おや、それはカメラかい？ 最近のは、おしゃれで小さいんだねえ」

そう言われて私は、いつのまにかデジカメを胸に抱きしめるように持っていた事に気が付いた。

「あ、……………はい。 ……お母さんが、写真、撮っておいでって」

「そうかい。 ……じゃあ、あの小さい水路にそって少し降っていくときれいな川があるよ。林も開けていて、今の時期なら川沿いにラベンダーも咲いてる。いい写真が撮れるんじゃないかな」

中岡さんは、私の様子を見て、それ以上何も聞かずに話を変えてくれた。

「ありがとうございます。じゃあ、そこ、行ってみます」

私は笑顔を作ってそう言った。 ……ちゃんと、「笑えた」と、思う……………。

中岡さんに教えてもらったとおりに、水路沿いの細い林道をゆっくりと降っていく

と、サラサラと水の音がしてきた。少し歩くと、急に視界が開けて、ゆるやかにカーブしているきれいな川に突き当たった。

川幅は五メートルほどだろうか。川底の石が陽の光を反射してキラキラしているのがはっきり見える位の浅瀬になっている。対岸には鮮やかな紫のラベンダーと、白い小さな花がたくさん咲いていた。

何枚か写真を撮る。遠くの山々がちょうど林に隠れてしまって、川と一緒にフレームに入らない。もう少し角度を変えようと、川の上流に向かって川沿いの道をのんびりと歩く。すると、バシヤバシヤという、水を掛け合うような音と、きやあきやあ言う歓声が聞こえてきた。

顔を上げて先を見ると、どうやらあの高校生達が水着で水遊びをしているようだ。葉山という人もいる。私は、あの人がどうも苦手だ。多分、一人でいる私を気にかけてくれているんだろうな、というのは分かるけれど、あの、急に距離を詰めてくる感じと、いかにも作って貼り付けたような笑顔がなんだか好きになれない。

引き返そうかな、と思った時、川沿いの木によりかかって座っている八幡を見つけた。ちようど日陰になっているので、最初は気が付かなかった。

目を閉じてる。寝てるのかな？ 起こさないように、そつと近づく。他の高校生達は激しく水を掛け合うのに夢中で私に気付いていないみたいだ。

……八幡つて、目を閉じてると、すぐきれいな顔してる。木漏れ日が当たってキラキラしていて、絵葉書の風景みたい。……なんだかドキドキしてきた。そつとカメラを構え、木に寄り添うように眠る彼を写真に収める。八幡はまだ気が付かない。このまま立ち去ろうかな、と思った、けど……。

—— 向こうに居場所がないような時は、俺らんとこに来ればいいんじゃないかねーの ——

その言葉が私の背中を押す。勇気を出して、私は八幡に近づく。今度はわざと足音を立て、まるで今来たばかりみたいに。

それで起きたらしく、八幡はパチリと目を開けると、私に気がついて、やる気なさそうに左手を小さく挙げて、

「よっ」

と一言だけ。私も、

「うん」

とだけ返事して、八幡のすぐ横に座った。くつついてはいないけど、でも体温を感じる距離。それだけで少し心が上向く。

二人並んで、他のみんなの水掛け合戦を見ている。雪ノ下さんの目が本気だ。こんな遊びなのに、絶対にやられたままでは終わらない……あの人にはあまり逆らわないよう

にしよう。

「……ねえ、八幡は、なんで一人なの？」

「水着持ってきてきてねえんだよ。おま……留美は？」

「ふーん。私のほうはね、今日一日自由行動なんだって。それで、朝ごはん終わって部屋戻ったら誰も居なかった」

「……そか」

「うん」

……そのあと偶然、私への陰口を立ち聞きしてしまって、悔しくて泣いて、そのまま逃げて来ちゃった。なんて事、かつこ悪過ぎてとても言えない。

その後も二人でぼーっと川の方を眺めてると、由比ヶ浜さんが私たちに気づいたみたいで、雪ノ下さんと一緒に川から上がってくる。近くに敷いてあったレジャーシートからタオルを取って、体を拭きながら二人でこっちにやって来た。

由比ヶ浜さんが、タオルで少しだけ濡れた髪の毛をぼんぼんってしながら、私の前にしゃがんで声を掛けてくれた。

「あのさ……留美ちゃんも一緒に遊ばない？」

私は小さく首を振った。さっきの彼女たちのようにはしゃぐ気分じゃ無い。

「そ、そっかあ……」

由比ヶ浜さんをおつきりさせてしまった。ごめんなさい……。心の中で謝る。

「だから言ったじゃない……」

雪ノ下さんが、由比ヶ浜さんに声をかける。この三人、なんだか他と違う空気を持つてるけど……どんな関係なのかな。

「ね、八幡」

「ん？ どした」

「えっと、この三人って、付き合いは長いの？」

「いや、知り合ったのもこの春からだし、そもそも付き合いどころかまともな人間関係が成立してないまである」

「……はあ。なんとなくわかった。じゃあ、八幡は、さ」

「お、おう」

「小学校の時から友達っている？」

「いない。な。ま、正直必要ない。だいたいみんなそうだぜ、ほつといていい。義務教育終わればあいつら多分一人も会わないぞ。ちなみに俺は中学校の時の友達もいない」

急にドヤ顔になった八幡に、由比ヶ浜さんが呆れて、

「そ、それはヒツキーだけでしょ！」

と云うと

「私も会ってないわ」

雪ノ下さんが間髪かんはつ入れずに真顔で言う。すると由比ヶ浜さんは諦めたように小さくため息をつけて私の方を向いた。

「留美ちゃん、この二人が特殊なだけだからね？」

「特殊のどこが悪い？ 英語で言えばスペシャルだ。ほら、なんかちよつと、優れてるっぼいだろ」

「日本語の妙みょうよね……」

雪ノ下さんまで関心している。珍しい……のかな？

「なあ由比ヶ浜、おまえ、小学校の同級生で、今でも会うやつ何人ぐらいいる？」

由比ヶ浜さんは、顎に手をあてて少し考えてる。

「会うって言っても……同窓会とかを別にしたら、一緒に遊ぶつてのは、一人か二人、かなあ」

「お前んとこ、一学年何クラス？」

「ん？ 三クラスだけど」

「二クラスだいたい三十人として、掛ける三で九〇人。その中で、今も付き合いがあるのが一人か二人、%にすると、ええと……」

「約一・一から二・二パーセントね。小学校からやり直したら？」

雪ノ下さん計算早いなあ。

「まあとにかく、人付き合いの得意な、はっほうびじん 八方美人の由比ヶ浜でさえこんなもんだ」

「美人……えへへ」

「由比ヶ浜さん、別に褒められているわけではないわ」

「普通のやつの人付き合いが由比ヶ浜の三分の一くらいだと仮定すれば、小学校時代の友達が高校生になっても友達やつてる確率は1%以下だ。こんなもの、誤差の範囲だ。よって切り捨てていい。よし、証明終了」

八幡は得意気に胸を張って言い切った。由比ヶ浜さんは「なるほど」とか言って納得しかけている。

けれど、雪ノ下さんは、そつとこめかみを押さえる。

「この男……何から何まで仮定だけで証明をでっち上げたわ……。数学を何だと思ってるのかしら」

「うん。さすがにそれが無理やりなのは小学生の私にもわかる……」

私がそう言うと、

「え、あれ？ あ、そ、そうだよ！ こんなのおかしいよ！」

由比ヶ浜さんが手をブンブン振りながら八幡に抗議する。

八幡は、チツと小さく舌打ちを言う。

「数値とかはどうでもいいんだよ。要は考え方の問題ってことだ」

「さっきの証明はまるで出鱈目でたらめだけど、何故か結論だけは正解に見えるのよね……。不可解だわ……」

雪ノ下さんは、納得行かないというようにブツブツ言っている。由比ヶ浜さんは、「んんー……あたしはあんまり賛成しないけど……。でも、一%てことは百人の内一人でいいってことでしょ。そう考えれば、少しは気が楽になる、かな。みんな仲良くって、やっぱしんごい時あるし」

何となくだけど、由比ヶ浜さんが自分の経験を話してるんだなって事は分かる。こんなに誰とでも仲良くなれそうな彼女でも、そういうこと、あるんだな……。でもそうか、百人中一人でいい、そう思うと何故か、泉ちゃんの顔が一瞬だけ心に浮かんだ。

由比ヶ浜さんはそこで私に向き直って、優しく微笑んで言った。

「だから、留美ちゃんもそう考えれば、さ」

「うん。でも……お母さんが……。いつも、友達と仲良くしてるかって聞いてくるし。林間学校でも、たくさん写真撮っておいで、思い出になるから、って、デジカメ……。由比ヶ浜さんにカメラを見せながらそう答える。」

「そうなんだ……。いいお母さんだね。留美ちゃんの事、心配してくれて」

そう、お母さん。……今の私の状況を知ったら、きつと心配するだろうな。そんな

事を考えていると、

「そうかしら……。我が子を支配して、管理下に置く、所有欲の象徴しやうちやうでは無いのかしら？」

冷たく、暗い声で雪ノ下さんが言った。ちくん、と胸の奥に小さな痛み。

由比ヶ浜さんは大きく目を見開いて、

「え……。そ、そんな事無いよ！ ……それに、その言い方はちよつと」

そう言うのと、二人の間に緊張が走る、八幡が割って入った。

「雪ノ下、まああれだ。母親つてのは余計なことすんのが仕事、みてえなところがあるからな。俺が休みの日にゴロゴロしてりや小言を言うし、勝手に人の部屋掃除するし……。たとえそれがお前の言う管理だとしても、愛情が無かったらそもそも管理しようとさえしないだろ」

雪ノ下さんはきゅつと唇を噛かんで、何かに耐えるように下を向く。

「……そう、ね。普通は……そうよね」

彼女は、私に向かって優しく微笑むと、

「ごめんさい。私が間違ってたみたい。無神経な発言だったわ」

そう言つて私に向かって頭を下げた。小学生の私なんか、真摯しんしに。

「あ、全然……。なんか難しくくてよくわかんなかったし」

どきまぎしながら私が言うと、四人とも静かになってしまった。なんだか気まずい。彼女とその母親の間には、きつと私なんかでは想像できない何かがあるんだろうな……。

「まああれだ。なら、撮っておくか？ 俺の写真。誰も撮ろうとしないからスーパーレアだぞ」

八幡が空気に耐えきれなくなったようにそう言った。

「いらない」

「……そうですか」

バツサリ、という感じで私が言うと、少し凹んでるみたい。でもいいの……だって、もつとレアな八幡の寝顔、もう撮っちゃったし。

「まあ何にせよ、ぼっちには生きにくい世の中だ。みんな仲良く？ それ正義みたいに言うから、どこかが歪むんだろ。みんなが『正しいぼっち』になれば、誰も傷つかないのにな」

「た、正しいぼっちってなんだし」

「それは、他人は他人、自分は自分、つてのをきちんと理解しているぼっちだ」

「？ どゆこと、あんましよく分かんないんだけど……」

「人間は一人ひとりみんな違う。そんな当たり前のことがちゃんと理解出来てないか

ら、自分と違う誰かを排除し、傷つけようとする。親子だって、友達だって、みんな一人ひとり考え方も何もかもが違うんだ。だから……、自分と違う他人をちゃんと認めてやり、他人と違う自分もちゃんと認めてやる。それができるのが、『正しいぼっち』だ」

『正しい』ぼっち、か……」

私がそうつぶやくと、八幡が続けた。

「一人ひとりがバラバラになっても自分自身と向き合えるなら、無理して誰かと仲良しごっこする必要もないし、大勢で群れて、群むれから外れた一人を攻撃する事も無い」

「……うん」

八幡の言葉は、なぜか私の心にすっと入ってくる。

「比企谷くん……、あなた、小学生に『比企谷教』ひきがやきょうの布教でもしてるの？ 鶴見さん、あなたも、あまりこの男の話を真剣に聞きすぎるとそのうち抜け出せなくなるわよ？」

私たちの様子を見ていた雪ノ下さんが、少しだけ楽しそうに言う。

「俺を悪徳新興宗教の教祖あくたくしんきゅうきょうみたいになんて言うのはやめてもらえませんかね……」

「教祖？ あなた、そんな器じゃないでしょう？ せいぜい末端の勧誘員がいいところよ」

「さいますか……」

「……でも私も、あなたが言ってること、何となくだけど解るわ。『正しいぼっち』ね。ふ

ふ。比企谷くんらしい……」

「ゆきのんまで……、わかるけど、でもそんなのって、なんだか寂しいじゃん……」
由比ヶ浜さんは小さくそう言った。

「ねえ、私の状況とか、今みたいな嫌な感じも、高校生くらいになれば変わるのかな……」
私がそう誰にともなく尋ねると、

「少なくとも、あなた自身が今のままでいるつもりなら、絶対に変わらないわね」
雪ノ下さんの言葉はいちいち胸に刺さる。

「けど、この先周りが変わることだってある。だから、いまの人間関係にこだわって無理に付き合いつける必要なんてないだろ」

「でも……、留美ちゃんは今が辛い^{つら}んだから、それをどうにかしないと……」
由比ヶ浜さんが切なそうな顔で私を見ながらそう言った。

「辛いっていうか……今、自分が惨め^{つぽ}つぽくて嫌なの。無視されたり、陰口言われてんの聞いたりすると、悔しくて、そんな自分がかっこ悪くて、さ」

「そうか」

「嫌だけどき、もう、どうしようもないし」

「……何故？」

雪ノ下さんが静かに聞いてくる。

「……見捨てちゃったんだ。その子にとって絶対に見捨てちゃいけない時だったのに、私は……。だから、また同じように仲良くなつて出来ない。あの子とも、みんなとも。またいつ、誰がこんなふうになるか分かんないし、それなら、なんかもう、このままでいいかなくて。……惨めなのは、嫌だけど……」

思い出したら、また涙が溢あふれてきた。泣いている理由は、あの時の私？ それとも今の私？ 感情の整理がうまく出来ない。みんなから隠かくれるように、膝に顔を埋うずめた。

「惨めなのは嫌か」

「……うん」

八幡に問われ、顔を上げないまま小さく頷うなずいた。

「……肝きも試し、楽しいといいな」

八幡はそう言って立ち上がった。

そつと見上げると八幡と目が合う。相変わらずどよんとしてるけど、なぜかその眼差まなざしは優しかった

そして、鶴見留美は彼と出逢う 後編② 肝試しが本当に試すもの

八月にもなると、夏至の頃に比べて随分日が沈むのが早くなる。ここは、周囲を山に囲まれている分、いつそう暗くなるのが早いのもかもしれない。

私達が夕食を終えた頃には、外はもうだいぶ暗くなってきた。空にはまだ明るさが残っているものの、木々の姿は暗い影となり、窓から見える街灯の煌々とした明かりがその影を一層色濃く見せている。

「だいぶ暗くなってきましたね。もう少し暗くなったら、いよいよ肝試し、開始です。それじゃあ、待つてる間、こちらにちゅうもーく」

可愛らしい猫のコスチュームを着た、あの一番小柄な高校生が、マイクを持って声を上げる。尻尾が二本あるし、マイクを持ってない方の手には長い爪の付いた手袋をしているので、一応、「猫又」といふ妖怪のつもりなのだろう。猫耳がとても似合っていて、それになんだか話し方も猫っぽい。とても怖い妖怪にはみえないなあ。

ホールの照明が消されて、明かりは常夜灯と、外から差し込む街灯の光だけになった。

正面のテレビから不気味な音楽が流れ出す。どうやら何かのビデオを流すようだ。始まったのは、『本〇にあつた怖い話　〜夏の特別編〜』というタイトル。

周りが暗いこともあつてか、みんな結構夢中になつて見ている。短めの話が何本も続くんだけど、その内容が、「ふざけて肝試しに出かけたら本当に霊に襲われた」「海水浴をしていたら突然足首を捉まれて海にひきずりこまれた」「山でキャンプをしていたら、いつの間にか人数が一人増えている」といった、わりとよくある話。

ただ、これからまさにキャンプ場で肝試しに出発しようとしている私達をどきりとさせるには十分だった。

ビデオが終わると、ステージの真ん中の明かりだけがぼつんとついた。

「さあ、いよいよ肝試し、始めるよー。みんなは、班ごとに、だいたい二分おきに出発してもらいます」

口調も服装も変わらないのに、この暗さと、さっきのビデオのせいかな、なんだか司会の猫又さんがちよつと不気味に見えてくる。

「ここを出たら、コースに沿って進んで、途中にある古い祠ほくらから、この御札おふだを一枚取つて来て下さい」

そう言つて彼女は、長い爪の付いた手で、赤黒く煤すすけたような御札をみんなの前にかざした。

「途中、分かれ道にはこの、赤い三角コーンが置かれています。こっちの道には行つてはいけません。……もし行つたら……、二度と帰つて来れないかもしれないよ」

猫又さんは急に声を低くしてそう言う。他のクラスの女子が小さく悲鳴を上げたのが聞こえた。

「さあ、いよいよスタートです。出発する順番は、私がバラバラに指定するよ。いつ呼ばれるかわからない。ドキドキタイムだあー。最初はどの班にしようかなー？」

そう言われて、みんながザワツとする。目をそらす子、手を挙げて自分たちを指差してる男子とか、反応は色々だ。

「じゃあ、最初にスタートするのは、この班だー！」

そう言つて猫又さんが、長い爪の付いた手袋の指先で、一組の男子班を、「ビシッ」とばかりに指差す。さっき自分たちが行きたいとアピールしていた男子たちだ。

「よっしゃー」

「マジかよ。ちゃつちやと行くかー」

などと、歓声を上げながら彼らはスタートして行つた。

私達の班では、友ちゃんが、とりあえず一番をのがれて、

「あーよかつた こわかつたよー」

と言つて森ちゃんのかげに隠れるようにしていたけど、後のみんなは、

「えー、早いほうが良くない？」

「別にどつちでもー」

などと言いながら、さつき見たビデオの話なんかをしている。私は四人のすぐ近くにいるものの、相変わらず会話には入れず、他の班の様子なんかを眺めていた。

今朝、彼女たちの話を立ち聞きしてしまったせいなのか、みんなの視線が怖い。

森ちゃんが、仁美が、ちらつと私のことを見る度に、惨めに泣いていた私を嘲笑つているように感じてしまう。由香が、友ちゃんが、顔を見合せて何か言つてるのを見る度に、みんなを馬鹿にした私を非難しているように感じてしまう……。

あるいは、彼女たちの態度には、私が考えている様な深い意味など無いのかもしれない。でも……私は、彼女たちを真つすぐ見ることさえ出来ずにいた。

そんな事をしていううちに、みんな、次から次へと出発していく。私達の班は、半分以上を過ぎてもまだ呼ばれない。

照明を落とすぐらいまではホールの中にいた居た八幡たちはいつの間にか居なくなっていた。いわゆる、「脅かし役」をやりに行ったのかもしれない、なんて考える。

結局、私達は最後の班になってしまった。薄暗い中で、一班だけぼつんと残されると、

それはそれで別の怖さがある。

「おっ待たせしました。最後にスタートするのは、こおの班だー!」

猫又さんは、最後だからなのか、ひととき大きく腕を振って、「ビシーっ」という感じで私たちに長い爪を突きつけた。

「よりによつて最後とか、無いよね〜」

「ホント、超待ったつっの」

「でもお、やっぱり怖いねー」

友ちゃんは森ちゃんの袖にぎゅうつとくつついたままビクビクしている。

「大丈夫だって。別にお墓とかじゃないし」

本館の建物を出ると、もう空は真つ暗になっている。林道の中にぼつんぼつんと立っている照明の小さい明かりを頼りにコースを進んでいく。

風が吹く度に、ざわざわと木々が揺れる。遠くでホウホウト、ふくろう梟か何かの音がする。

どこからか、「きやあ〜」と悲鳴の様な声が小さく聞こえてくる。先に出発した他の班の子たちの声だろう。

不意に、私達のすぐ頭の上を、バサバサッと大きな音を立てて何かが飛び去った。

「きゃっ」「ヒィっ」「……………」「んっ……………」「……………」

思わずみんなでしゃがみ込む。黙り込むこと数秒。

「……………つはぁー」

「あー、マジビビったあ〜」

「何かの鳥、だよ。フクロウとか？」

「怖えー。幽霊とかより、鳥のが怖い」

さすがに今のはちよつと怖かった。友ちゃんなんか涙目になつてる。仁美が、無理やりにも気分を盛り上げよう、と言う感じで、

「はいはい、ただの鳥、鳥。ちやつちやつと行こー」

そう声を上げて歩きだす。その後は、四人は不安を吹き飛ばそうとするように少し大きな声で話しながら道を進んでいった。

私も、あまり離れるのは怖いので、なるべく四人にくつつくように歩いて行く。すると仁美が、ちらつとうつとうしそうな目で私を見た。……私は目をそらして、唇を噛む。

三つ目の分かれ道。三角コーンで塞がれていない左手の道を進んでいくと、街灯も遠くなり、周囲の闇は一層深くなる。風がざわざわと森を揺らし、何となくみんなの口数が少なくなってきた。

緩やかな曲がり角を右に曲がると、急に目の前に人影が見えた。

一瞬、みんなビクツとしたものの、よく見ればボランティアの高校生達三人だった。

あの葉山さんと、モデルみたいなお姉さん、それから派手でワイルド系のお兄さん、名前は、確か三浦さんと戸部さんだったかな。お化け役にしては、ごく普通の服装をしている。

「あー、葉山さんたちだあー」

「超フツの格好してる〜」

怖い思いをしていた所に、昨日たくさん話をしてくれた高校生達が現れたことに少しホツとしたんだろう。仁美と由香が声を上げて彼らに駆け寄っていく。森ちゃんもそれに続き、友ちゃんは森ちゃんの袖を握ったまま付いて行く。

「なんか、こんなんじや全然怖くないよー」

と、どこか小馬鹿にしたように森ちゃんが言う。

「高校生なのに頭わるーいー」

由香が言い、仁美がそれに乗って、

「そうそう、もつとやる気出してよねー」

そう言いながら戸部さんのパーカーの裾をクイクイとひっぱった。

すると戸部さんが仁美の手を乱暴に振り払うと、

「あ？ お前、何タメグチ聞いてんだよ？」

そうやって仁美を睨みつけた。

「あ、……え……」

仁美はびっくりして固まってしまい、他のみんなも一瞬で静まり返る。

「ちよつと、あんたらチョーシ乗ってんじゃないの？ 別にあーしら、あんたたちの友達じゃあないんだけど？」

三浦さんの声が険しい。すごく怒ってるみたいだ。

「あ、あのこと……」

「つーかさあ、なんかさつきあーしらのこと超馬鹿にしてたヤツいたよねー？ あれ言ったの誰？」

私達に何も言わず、端から順番に私達の顔を睨にらみつけていく。四人は顔を見合わせるものの、押し黙ったままだ。その様子に、三浦さんは一つ舌打ちすると、

「誰が言ったかって聞いてんの。答えらんないわけ？ あんたらの誰かが言ったじゃん。誰？ 早く言いなつての」

三浦さんの声が段々イライラしてくるのが分かる。

「ごめんなさい……」

仁美が小さい声で謝る。

「何？ 聞こえないんだけど」

「……………」

「舐めてんのか？ ああ」

戸部さんが一歩前に出て私達を上から見下ろす。思わず私達が後ずさりすると、いつの間にか葉山さんが回り込んでくる。気が付くと私達は、大きな木を背にして、三人に取り囲まれる形になっていた。

「戸部、やつちやえやつちやえ。ここで礼儀つてのを教えとくのもあーしらの仕事？
みたくない」

怖い。どうしよう、どうしよう？ 頭がうまく働かない。

戸部さんがぱちんと指を鳴らして、

「葉山さん。こいつら、やつちやつていいつすか？ ボコつちやつていいつすかあ？」

そう、私達の背後にいる葉山さんに声をかけながら、まるでボクサーのような格好で両腕をあげて拳こぶしを握る。……祈るような思いで、私達は葉山さんの方を見る。今までずっとみんなに優しい態度をとってきた彼なら、なんとかこの場をとりなしてもらえらんじやないかって。

だけど葉山さんは、そのどこか作り物のようなきれいな顔を歪ゆがませて、

「五人……か。こようしよう。二人は見逃してやる。三人、ここに残れ。誰が残るか、自分たちで決めていいぞ」

ぞつとするような冷たい声でそう言った。

皆で顔を見合わせる。一様にその顔に浮かんでいるのは、恐怖と戸惑い。森ちゃんが、友ちゃんの顔をちらと見る。もう今にも泣き出しそうだ。

森ちゃんは、葉山さんたちに

「……すみませんでした」

震える声でそう言った。

けれど葉山さんは、

「謝ってほしいんじゃない。三人残れって言ったんだ。……選べよ」

さつきより強い口調。また、みんなで顔を見合わせる。

「ねえ、あんたら聞こえないの？ それとも聞こえてシカトしてんの？」

「早くしろよ。誰が残らだって聞いてんだろ？ お前か？ おい」

三浦さんと戸部さんが脅すように言う。戸部さんが地面を蹴りつけた。私達の足元に砂が飛んでくる。みんなビクンとして、五人、くつつくように小さくかたまる。

「鶴見、あんた残りだよ……」

「……そう、そうだよ」

森ちゃんと仁美にそう言われる。……ああ、やっぱりそうなつちやうのかあ……。シヨックもあつたけど、私の胸に浮かぶのは、どこか諦めみたいな感情。膝が震えるほど怖いけど、不思議と涙は出てこない。誰かに肩を押され、五人の中からはじき出され

る。

その様子をじつと見ていた葉山さんが、少し顔を強張こわばらせたような気がした。

「一人決まったか。……あと二人だ。早くしろ」

「……由香があんなこと言わなければ……」

ぼつり、と仁美が言葉をもらす。その言葉に押されたように、

「由香のせいじゃん」

「そ、そうだよね……」

森ちゃんと友ちゃんも次々に言う。

「違う！ 仁美だつて森ちゃんだつて言つてたじゃん。あたしのせいじゃない」

「それは……、森ちゃんの言い方が悪かったの！ 森ちゃんいつもそう。先生とかにも
そうだし」

「はあ？ 私？ 先生とか今関係ないでしょ？ 私、普通のことしか言つてない。酷ひどい
こと言つたのは由香と仁美じゃん。なんで私のせいになつてるの？」

森ちゃんが仁美の肩を手で突いて声を荒げる。

「もうやめようよお。みんなで謝ろうよお……」

ついに友ちゃんがぼろぼろと泣き出した。釣られるように、他のみんなも涙目になつて
いる。

パチン、と携帯電話を閉じる音が鋭く響く。今まで不機嫌そうに携帯をいじっていた三浦さんが、

「あーし、泣けばいいと思ってる女が一番嫌いだから。隼人、どーする？ まだグズグズ言ってるけど」

そう言つて泣いてる友ちゃんを睨む。

「あと二人つて言つただろ。……早く選べ」

葉山さんの感情のこもっていない、機械みたいな声が怖い。戸部さんが、ボクシングのように鋭く拳をふりまわしながら言う。

「葉山さん、もう、全員ボコつたほうが早いんじゃないやねーの？」

「そうだな……じゃあ三十秒だけ待つてやる」

そう言つて葉山さんはパーカーの袖をまくり、腕時計を見た。

「謝あやまつても赦ゆるしてもらえないよ。……先生、呼よぶ？」

森ちゃんが小声で言つたのを戸部さんが聞き咎とがめる。

「ああ？ チクつたらどうなつか分かつてんべ？ お前らの顔覚えたかな」

また、みんなの動きが止まる。

「残り二十秒」

葉山さんの冷たい声が響く。

「……やっぱ由香だよ」

「由香残んなよ」

仁美と森ちゃんがそう言っつて、嫌がる由香を私の方へ押し出そうとする。由香は目を見開いて、何か言いたげに口を動かしながら、すが継るように友ちゃんを見た。

さつきから涙を止めることが出来ずにいる友ちゃんは、一瞬ビクツとした後、由香から目をそらして、

「……ごめん……でも、しょうがない、から」

小さくそう言っつた。

由香はそれで力が抜けたようになり、押し出されるままにフラフラと私の方へやっつて来た。

「あと一人」

葉山さんはそれだけ言っつてまたカウントを始めた。

仁美も森ちゃんも涙声でなにか言っつてもみ合っつている。友ちゃんの泣き声が大きくなる。

多数決。「みんなが言うからしょうがない」「みんなやっつてる事」だから、みんなが正しいと、そういう空気に行動を強制される私の周りの世界。

「十、九、八……」

そんな世界が当たり前だと、だから「しょうがない」とそう何かを諦めていた。けど、私は、「私」は……。

——自分と違う他人をちゃんと認めてやり、他人と違う自分もちやんと認めてやる——
八幡の決意にも似た言葉が、胸の中に響く……。 「私」は、胸にぶら下げているデジカメを握りしめた。

「五、四、三……」

「あの……」

私はそう言つて左手を上げた。カメラを握にぎつた右手に力がこもる。
葉山さんのカウントが止まる。

「な、に……!!」

彼が何か言いかけた瞬間、真っ白になる視界。

高校生三人が私の方を向いたのを見て、私はカメラを彼らの顔の方に向かって突き出

し、連続でシャツターを切った。フラッシュが強烈な光を放つ。……二回、三回。明滅する世界。

その場にいる全員の動きが止まる。

「走るよ？ こっち。急いで」

私は仁美たちに向かつてそう言い、まだ呆けている由香の腕を掴んで走り出した。

三浦さんの横をすり抜け、遠くに微かに明るく光っている本館の方向を目指してとにかく逃げる。

木々の間を駆け抜け、ようやく街灯のある、少し開けた場所にたどり着いた。後ろを振り返って見る。幸い、彼らは追って来てはいないようだ。

少しだけホッとして、私達は後ろを気にしつつも、歩を緩めて歩きだした。

みんな息が上がっている。友ちゃんはまだぐすぐすとベソをかいているし、他のみんなも涙目だ。多分、私も。

お互い、顔を見合わせるものの、誰も何も言わない。

……違う。あんな事があつた後で、何をどう話せばいいのかわからないんだ。

一言の会話も無いまま、少し歩くと、古ぼけた祠の前にてた。祠の前に木製の、和風のテーブルみたいなのが有り、その上に出発前に見たのと同じ御札が置いてある。どう

やらいつの間にか肝試しのコースに戻っていたらしい。

御札を取ろうと手を伸ばすと、

「呪うぞ〜、呪うぞ〜、呪つちやうぞ〜」

と、祠の裏からいきなり長い髪の毛を振り乱した巫女装束みこしやうぞくの女性が飛び出してきた。

仁美が悲鳴を上げ、みんなが転がるように後ろに飛び退く。友ちゃんがまた泣き出した。

「え、ありや？ そんなに怖かったかな？」

見ると、彼女は、あの、眼鏡の高校生で、たしか「ひな」とか呼ばれてた人だ。長い髪は玩具おもちゃっぽいウィッグで、しかも袴はかまはミニで、よくよく見ればコミカルでさえある。

ただ、葉山さん達と一緒にいた人だ。どうしたって怖いと思ってしまう。

「ごめんごめん。脅かし過ぎたかな〜 はい、御札」

彼女は台の上の御札を取り、私たちに差し出してくれた。私がおつかかなびつくりそれを受け取ると、

「もう少しでゴールだから頑張つてね〜」

そう言つて、につこり笑つた。多分、さっきのことなんか何も知らないのだろう。

「……ありがとうございます」

それだけ言つて、またゴールを目指す。お互い、一言も話さず、視線も合わせないま

まで。

また、目の前を大きな鳥がバサバサと羽音を立てて飛び去る。今度は、誰も悲鳴を上げなかった。

キャンプファイヤーがまだ赤々と燃え続けている。

炎を囲んでの、歌やフォークダンスを終えた私達は、就寝時刻までの自由時間を思い思いに過ごしていた。

……あの後結局、私達は予定と大して変わらない時間にゴールすることが出来た。ただ、泣きはらしたような顔をクラスメイトたちに見られ、

「えー？ たいして怖くなかったじゃーん」

なんてからかわれた森ちゃんは、

「いやー、なんか、すごい大っきな鳥がさー、もうここ、すぐ頭の上ではさばさーって。

もう、超ビビったー」

そんなふうに誤魔化ごまかしていた。

友ちゃんだけは森ちゃんの隣にくっついていてるものの、由香も、仁美も、違うグルー

プの子とばかり一緒にいて、意識してお互いを無視してみたいだった、私もそのまま、四人の誰かと話をするともなく時間は過ぎていく。

自由時間に入ると、早々に自分たちの部屋に帰るグループもあれば、クラスも男女もバラバラの友達同士でホールへと移動し、カードゲームとかをする人達もいるようだ。

それに、まだ燃えているキャンプファイヤーを眺めながら何かを話している子たちもいる。

私は、一人で芝生に座り、大きな炎を見上げて物思いに耽^{ふけ}っていた。

今日は本当に最悪の日だった。昼間は置いてけぼりにされたし。肝試しでは、本当に怖い思いをした。ほんと、最悪……。最悪だったはず、なんだけど……。

目の前の焚^たき火から、すこし焦げたような、でも嫌じゃない匂いがする。たまに吹き抜ける風には、高原の夜の匂いがある。私、息をしている。自然に、深く。

今まで気付かなかったけど、私林間学校に来てから、もしかしたら、その前から……。あの日からずっと、呼吸が浅くなっていたみたい。

「空気が美味しい」なんて感じたのは本当に久しぶりだ。

フオークダンスの途中から、変化があった。

最初、私と手をつなぐ時、相手の子は少し緊張して、仁美や森ちゃんの方へ視線を送る。いままでなら、彼女たちから冷たい目で嘲笑われ、なんだかギクシヤクしてしまうんだけど、今日は何の反応もない。段々緊張は解け、普通に話しかけてくれる子が出てくる。

それでも仁美たちは何もいわない。それを見ていた別の子が、私を、思い切つて『留美ちゃん』と呼んでくれた。それでも、クラスを中心であるはずの彼女たちは何も言わない。

……それで終わり。

フオークダンスと歌が終わる頃には、私をハブるというクラスの空気はあっさりと消えてしまっていた。

多分、彼らもきつと、終わりにするきっかけを探してくれていたんだろう。一人ひとりのクラスメイト達は、ただ、みんなと違う事をして、「次の標的」にされるのが怖かっただけなのだ。

だから、「みんなと違う自分」を認めず、常にみんなと同じであろうとするのだろう。……もしかすると仁美や森ちゃん達も、自分が標的になる事を怖がって、常に自分たち以外の生贄いけにえを作り続けていたのかもしれない。

さつき、なぜ彼女たちと一緒に逃げたのか、自分でも正直良くわかんない。あれだけ酷いことをされていて、普通に考えたら一人で逃げたって良かったはずだ。

でも、気がついたら、由香の手を取った。気がついたら、仁美たちに声をかけてた。なら、それが「私」なのだろう。変だとは思うけど、「私」が認めてあげなくちゃ、みんなとは違う自分を、ただそのままに。

色々と壊れてしまったものは多いけれど。今夜、私は何かから開放された。それは多分、クラス内での嫌がらせなんていうちっぽけなものじゃなく、もつとずつと大きな何かだ。

キャンプファイヤーを囲む輪の、私のちょうど向かいあたりに八幡を見つけた。本館へ向かう通路の横の、背もたれのないベンチに腰掛け、ぼうつと炎を見ているみたいだ。すぐ近くで、雪ノ下さん、由比ヶ浜さん、それにジャージに着替えたさつきの猫又さんが三人で立ち話をしている。葉山さん達はもう居ないようだ。何となく安心する。

気が付くと、かなりの数の生徒が本館の方へと引き上げていた。残っているのは二〇人位だろうか。仁美たち四人も、いつの間にか居なくなっている。

そうだ、火が消える前にキャンプファイヤーの写真を撮っておこう。フォークダンスの頃に比べると、だいぶ火は小さくなってきてるけれど、ここから撮影すれば、炎の櫓やぐらと、それに照らされた本館がきれいにフレームに入りそう。

たしか、「夜景モード」とか、「花火モード」とか言うのがあつたはず。どうやるんだっけ？ デジカメのダイヤル型のスイッチをくるくる回していたら、変な所を押してしまつたらしい。保存フォルダが開いて、最後に撮影した画像が表示される……。

—— 一人ひとりがバラバラになつても自分自身と向き合えるなら、無理して誰かと仲良しごっこする必要もないし、大勢で群れて、群から外れた一人を攻撃する事も無い。

—— 惨めみじなのは嫌か。

—— 肝試し、楽しいといいな。

解わかつて、しまった。八幡が、八幡達が何をしたのか、何をしてくれようとしたのか。あの時、とにかく相手の目を眩くらませようと、葉山さん達の顔めがけて夢中でシャッターを切つた。その時の画像。その中の一枚。

葉山さん達の後ろで、木の陰に隠れている八幡達がはつきりと写っていた。八幡は、「ドツキリ」なんて書いてあるボードを胸の前で持ち、今まさに飛び出そうとしているよ

うに見える。

……あんな酷い^{ひど}ドッキリがあつていいはずがない。高校生が寄つてたかつて小学生の女の子を泣かせるなんて、一歩間違えば大問題だ。……でも、誰のためにそんな無茶をしてくれたのか、が、わからないほど馬鹿でも、子供でもないつもりだ。

そして、その八幡達の無茶のおかげで、私がどれほど救われたかも……。

シヨックとか感謝とか、自分でもわけの分からない怒りの様な想いとか、そんな感情がごちゃごちゃになつて胸をいっぱいにする。

今、すごく八幡と話したい。だけど、なんて言おう。「ありがとう」っていうの？ それとも、「こんな無茶なことしないで」って文句をいうの？ どっちも違う気がする。

それに、私がホントのことに気がついた事を、八幡は多分喜ばない。

それでも私は立ち上がつて、ゆっくりと八幡たちに向かつて歩く。歩きながら、どう声をかけようか考える。けど、考えがまとまらないまま、八幡達の目の前まで来てしまった。一瞬、八幡と目が合う。思わず目をそらしてしまった。そのまま前を通り過ぎて……数歩。

私は足を止め、彼に向かって振り返る。

「ね、八幡」

「お、おう。どした？」

彼はびつくりしたように応じる。

「写真」

「……写真？」

「私と、一緒に写真撮って。……その、『ボランティアの高校生たちと仲良くなった』って言えば、お母さん、喜ぶと思うし」

きつとこれが、今の私の精一杯だ。お礼も、文句も言わない……言えない、まだ。

八幡は表情を緩めて、

「そうか」

と一言。

「うん」

と私。

すると、

「いーねいーねー。ね、留美ちゃん。私達とも一緒に撮ってくれる？ ほら、ゆきのん

もー」

「わ、私は別に……」

「ええー、いーじゃーん……」

話を聞いていた由比ヶ浜さんが、雪ノ下さんをグイグイ引つ張ってくる。

「あの、もし嫌じゃなかったら、みんな撮りたいんだけど……」

「そう……あなたがそう言うならご一緒するわ」

雪ノ下さんの笑みが優しい。

「おおつ、お兄ちゃんが美少女三人と一緒に写真!! いいですねえ。小町撮ります

よー、ほら、そこ並んで下さい」

猫又さん……小町さん? って、八幡の妹さんだったんだ……。言われてみれば結構

似てるかも。その、「目」以外は。

ベンチの真ん中に私が座り、私の左に八幡、右に雪ノ下さんが座る。私と雪ノ下さん

の間から顔を出すように由比ヶ浜さんが中腰で立つ。

「ほら、お兄ちゃん何やってんの。もつとちゃんとくつついてよ!」

「いや、でもな」

「い・い・か・ら」

八幡は、頭をガシガシと掻かいて、おっかなびつくり、という感じで私に肩を寄せてき

た。緊張してる八幡、なんだか可愛い？

「じゃ、撮りまゝす。……はい、ちーずっ」

フラッシュが光る。すぐ画像を確認した小町さんは渋い顔で、

「お兄ちゃん…… キヨドリすぎて顔が変。新しい顔と取り替えて？」

「小町ちゃん……、お兄ちゃん、どつかのお子様向けヒーローじゃないからね？」

見せてもらった八幡の顔は、確かに、あさつての方に目が泳いでて変だった。

「これは、……これを見せたら、反かえつて親御さんが心配するんじゃないかしら？」

雪ノ下さんがサラリと酷いことを言う。

「悪かったな……」

八幡がぼやいていると、

「あ、彩さいちゃん。彩ちゃんも一緒に写真撮ろうよー」

何故か水の入ったバケツを運んでいた戸塚さんに、由比ヶ浜さんが声をかける。

「え、それ、僕も入れてもらっていいのかな……？」

「あ、えと、いい、かな？」

由比ヶ浜さんが聞いてきたので、私はこくと頷うなずく。

「じゃあ、今度は戸塚と小町が入れよ。小町、カメラ貸し……」

そう言うって立ち上がったとした八幡の袖に、思わずぎゅつと縋すがりり付いてしまった。

「あ……」

何やってるの私？

「えーと……留美？」

疑問半分、照れ半分、という感じで八幡が戸惑っている。

その、なんというか、くっついてた八幡の体温が離れちゃうと思ったら、急に寂しくなっちゃったんだもの。うう……。

八幡の方を見れない。自分でも顔が赤くなってるのが分かる。

「あはは。……八幡、先に僕がカメラマンやるよ。みんな、交代で撮ろ。いいよね、ええと、鶴見さん？」

戸塚さんが優しく言ってくれる。

「小町、いーこと思いつきましたっ」

小町さんはそう言つて、戸塚さんにカメラを渡し、その耳元で何かぼそぼそ言っていると八幡の間から顔を出すように、由比ヶ浜さんの隣に立った。

「それじゃあ、撮るよ。さん、にー、いち……」

その瞬間、小町さんが私の肩を八幡の方にギョツと押し付けた。

また、フラッシュが光る。

「おい、小町何してんの？」

見ると、小町さんは左手で八幡の両目を塞いでいる。

「目さえ隠せば、お兄ちゃんもいい男つ。……あ、これ、小町的にポイントたつかいー」
「いや、ポイント高くないから。普通にお兄ちゃんのことデイスってるからね？」

「まあまあ、見てくださいいよお」

みんなで画像確認。……ほんとに、ハンサムさんに小町さんがじゃれついているように見える。八幡とくつついてる私は恥ずかしそうで、でも嬉しそうな顔。……私、こんな顔してたんだ。

「でも……本当にこれだけで随分と格好良……。いえ、その、いくらかはましに見えるようになるのね……」

雪ノ下さんは、少し照れたようにそう言う。

それから、カメラマンを交代しながら、自由時間ギリギリまで撮影会？ は続いた。

就寝前、廊下の端にある洗面所で歯磨きをしていると、やはり歯磨きをしに来たらしい由香と一緒にになった。

二人とも無言。歯ブラシの音と、水音だけが響く。

先に歯磨きを終えた由香が、正面を向いたまま話しかけてきた。

「……る、留美」

「……………何？」

意外。正直声をかけてくるとは思わなかった。由香は最後までこつちを向かずに、「さつき、さ、その……………ありがとう。……………それだけ」

本当にそれだけ言ってくるりと振り向くと、早足で部屋へと戻って行ってしまった。

色々なことが、少しずつ変わっていく。……………新しい出会いもあれば、壊れて無くしてしまうものもある。多分、これからずっと、その繰り返し。

それでも、この、今日という一日を、私は生涯忘れることはないだろう。

玄関に入ると、エアコンのひんやりとした空気が身体を包んだ。外との温度差に、背中のあたりがぞわぞわつとする。夕方になっても、こつちはまだまだ暑い。

「お母さん、ただいま」

「おかえり、留美」

私は大きいバッグと、シヨルダーを並べて床に置き、ぼすつとお母さんに抱きついた
「二日ぶりー」

「はいはい。 ……んー、ちよつと日に焼けたかしら？ 楽しかった？」

「うん、楽しかったよ。 ……疲れたけど」

「一緒の子たちに迷惑かけなかつた？」

「迷惑はかけてない、と思うけど……」

言いながらソファに移動し、くてんとその上にからだ身を投げ出す。いつもの天井。やつぱり家は安心するなあ。

「あら、何かあったの？」

「いやー、ちよつとだけ仁美たちとケンカしちゃつてさ」

意識して、何でもない事のように明るく言う。

「え、どうして？」

お母さんの顔が曇る。

「大したことじゃないって。『子供同士の喧嘩けんかなんてよく在ること、大騒ぎするようなこ
とじゃありません』よ」

「留美……、それ、子供本人が言う台詞せりふじゃないでしょう……」

諦め溜息あきり？ みたいな力の抜けた声で言つて、お母さんは笑いながらがつくりする。

「それにね、代わりに、つてわけじゃないけど、ボランティアで来てくれた高校生たちに、すごく仲良くしてもらえた。でね、すごい。その総武高の生徒さんなんだけど、全員イケメンときれないな娘ばかり。ついてきた先生まですごい美人なの!!」

私はソファからがぼと起き上がって力説する。

「あら、すごいじゃない。お母さんも見てみたかったわ」

「全員、じゃないけど一緒に写真撮ってもらったから、あとでプリントするよ……。あ、そうだ。お母さんにお礼言わなきゃ」

「お礼? 何のこと?」

「あのね、やっぱりお母さんの言うとおり、カメラ持ってつてよかったよ。ありがとね」
そう言って、もう一度ソファに寝っ転がった私は、お守りのように首から下げているデジタルカメラを優しく両手で包む。

お母さんに聞こえないように小さい声で「ありがと」と囁いて、その小さなボディをそつと撫でた。

幕間 ② 三枚の写真と

「こんにちはー」

「いらつしやい、仁美ちゃん」

玄関から仁美とお母さんの声が聞こえたので、私は座ったまま声を張り上げる。

「仁美、上がってきてー」

「留美、横着しないの!」

「あはは。それじゃあ、おじやましまさす」

そう言つて仁美は私の部屋へ。

「あれ、由香はまだ来てないの?」

「うん、少し遅れるって電話あつた」

「そつか」

今日は、私と仁美、由香の三人で、うちで宿題を終わらせ、その後みんなで遊ぶ予定。

森ちゃんは、陸上の地区選抜の練習日で、友ちゃんはその応援に行くと言つていた。

試合の応援には私たちも行くつもりだけど、練習の応援ってなんだろう? でも、本人

はとても楽しそうだった。

* * * * *

私の学校では三年生に上がるときと、五年生に上がる時の二回クラス替えがある。

仁美、由香、森ちゃん、友ちゃんの四人とは、去年、五年生に上がる時に初めて同じクラスになった。

彼女たちは、いわゆる、「目立つ女子」で、五年生になったばかりの頃、仁美が中心になって私にも声をかけてくれ、何となく今の五人で一緒に行動することが多くなった。

私はこういう、「クラスの中心グループ」に入るのは初めてで、最初は少し気後れしていたものの、いつの間にか一緒にいるのが自然になっている。

仁美は、スラツとして髪も目も色素が薄くて、ちよつと外国人の血が流れてるっぽい印象を受ける。けど、本人に聞いてみたら「バリバリの日本人だよ」と言っていた。怒りっぽくて、ちよつとした事ですぐカツとなるところがあるけど、何にでも一生懸命だ。

由香はちよつと調子のいいところがある子だけど、とにかくよく笑う。その笑顔がとつてもカワイイ。空気を読むのがうまくて、ただ、その分人の意見に流されやすい。

笑顔の効果か、男子にファン多し。

森ちゃんは、私たちの中で一番背が高く、成績優秀、運動神経抜群で、今年は短距離走の千葉県代表メンバーの一人にも選ばれている。いわゆる完璧超人で、そのせいか、誰に対してもちよつと上から目線なのが玉に瑕きずだけでも。

ただ、幼稚園からずっと一緒に幼馴染、友ちゃんに対してだけは激甘。傍で見ると、まるで過保護のお母さんみたい。

そしてその、うちのクラスのマスコット、友ちゃん。この子は、身長も低くて華奢。髪の毛もふわふわ。言動も少し幼くて、何ていうかお人形さんみたいに可愛い。森ちゃんの事が大好きで、いつも彼女に付いていく。……森ちゃんが甘やかすのも分からないでもない。こんな可愛いのに懐かれたらしようがないな、うん。

初めてみんなをうちに連れてきた時は、みんなのオシャレで可愛い様子に、うちのお母さんが大興奮。「うちの娘をどうかよろしく」と選挙の応援みたいにみんなと握手していた。……恥ずかしいなあ、もう。

中でも仁美は、将来はモデルになりたいらしく、そういう世界に詳しいお母さんとは話が合うようで、そのせいか、時々一人だけでも家に遊びに来るようになった。その度に、

「留美のお母さんってカッコイイよね。ホント、留美が羨ましい」

みたいなことを言うので、お母さんはますます仁美が気に入ってしまった。

* * * * *

遅れてきた由香と一緒に、三人で宿題を片付けたところで一息入れ、おやつの時間にする。

リビングで、お茶を淹れてくれたお母さんと一緒に、四人でお菓子をつまんでいると、「そうそう、あなたたち、デイスティニールランドとか好きよね？」

お母さんが何かを思い出したようにそう言い出した。

「ん？ 多分みんな、好き、だと思っただけ……」

言いながら仁美たちに視線を遣ると、二人共うんうんと頷いている。

「あー……、実は、取引先の方から、微妙な優待券を頂いたのよね……」

「ビミヨーってなんですかあ？」

由香が聞く。

「それがね、タダじゃなくて、パスポートが十人まで半額になるってやつなの。しかも、ゴールデンウィーク・夏休み・年末年始の繁忙期には使えませんっていう……」

「確かに微妙かも」

私がそう言うと、

「それなら、十人で使えば、超オトクですよ！」

仁美がそう言ってテンションを上げる。確かに、十人が半額なら、金額で三万円以上割引になる。

「でも、十人で……」

「あたしたち五人と、みんなのお母さん五人で十人じゃん」

仁美は行く気満々だ。てゆうか、お母さんたちと一緒に？ 由香もそう思ったようで、

「ええ、ママ達と一緒におっ？」

そう言って渋る。

「あら、楽しそうじゃない。私、仁美ちゃんたちと一緒に行ってみたいわ。それに、みんなのお母さん達ともお話したいし」

「話って……、わざわざディスティニー行かなくなつて」

「大人になると、色々ときっかけが必要なのよ……」

お母さんはわざとらしく溜息をつく。

「いいじゃん、なんか面白そうだし。あたし、今度森ちゃんたちにも聞いてみる」
「娘の友達と、女子だけのお出かけって、なんだか素敵よね……」

仁美とお母さんですっかり盛り上がってしまった……お母さん、自分のこと、女子と

か言ってるし……。

「あはは、まあいつか。私もママに言ってみる」

由香も乗り気になって、結局、みんなの都合がいい時に十人で出かけよう、という話になってしまった。

……それが、四月、ゴールデンウィーク前の話。

その後、なかなかみんなの都合が合わず、六月の第二日曜日か、その次の週ならみんなOKということで、出かける日はその日に決まった。

最初はちよつと面倒くさいと思っていた私も、お母さんや友ちゃんなんかはものすごく楽しみにしているのを見ているうちに、私自身も段々楽しみになってきていた。

……心配事が一つ。

去年の終わりぐらいからうちのクラスで始まってしまった、「気に入らない子をハブにする」ブーム、みたいなものの対象が、ゴールデンウィーク明け位から泉ちゃんになってしまった。

彼女自身が何かしたわけじゃなかったけど、その時ハブにされてた子と、普通に仲良く話しちゃってたんだ。それで、その次は泉ちゃん。こうなると、もうゲームみたいなものだ。誰もやめるきつかけを見つけれずに未だに続いている。

……ホント幼稚でバカばつかだ。そう思う。けれど……、結局は私だって何も出来な

いままだった。

こういう時、誰かを無視したり、わざとらしく名字で呼んだり、つていうのをしたくない私は、とにかくその子と距離を置いてあまり関わらないようにしてきた。そうやってブームが過ぎるのを待つしかない。

今回もそう。どうせすぐに終わる。そう自分に言い聞かせ、意識して彼女と距離を置いていた。泉ちゃんは悲しそうにはしているけど、しようがないと諦めて、「自分の番」が終わるのを静かに待っているようだった。

* * * * *

その日、泉ちゃんは明らかに様子がおかしかった。

最近の状況もあって、彼女が一人で行っているのは当たり前。休み時間は、一人静かに本を読んでいるか、あるいは無地のノートに、5Bとか6Bとかの濃い鉛筆で何かその辺のもの——例えば自分の左手とか——を描いて過ごしているか、だった。

その様子は、じつと大人しく、嵐が過ぎ去るのを待っている小動物みたいで、なんとかしてあげたいという焦燥感に駆られる。

ただ、そこで周りの空気を読まないような行動をすれば、きつと状況はもつと悪くな

ると、私も、多分泉ちゃんも分かっていた。だからこそ今まで、あまり目立つような行動はしないでいたはずなのに……。

六月も中旬。その日は金曜日だった。朝から彼女は、授業中は気もそぞろ。休み時間になると机の上に画用紙を取り出し、青色鉛筆で何かを一心不乱に描いている。シャツシャツというその音は少し離れた私の席にもはつきりと届いてくる。

二時間目の後の休み時間、私は仁美たちと、明後日行く予定のディスティニーランドに何を着ていくかの相談をしていた。

「折角せつかくみんなで行くんだから、何かテーマを決めてオシャレしよう！」と、今日になって由香が言い出したのだ。

「みんな白黒で、パンさんの耳とか付けて、目んとこに星のマークとかしたらかつこよくない?」

「うーん、いいけど、みんなで写真撮るっていうには、なーんか地味じゃない?」
「そっかー…… じゃあ、イエローでくまさんとか?」

「あ、いいかも。上がイエローで下が普通の青いデニムならみんな持ってんじゃない?」
「黄色のトップス、誰か持っていない子いる?」

「どうだったかな、最近着てないからサイズが……」

「それに、デニムだと暑くない？」

「そっかー……」

会話が途切れると、色鉛筆が紙をこするシャシャツと言う音が、少し耳障りに聞こえてきた。仁美がすつと席を立つ。

まずい、と思つた時にはもう、仁美が泉ちゃんから画用紙を取り上げていた。

「あつ……」

泉ちゃんは慌てて、取り返そうとするように手を伸ばすが、仁美はそれをサツと躲かわす。

「ちよつと、音うるさいよ藤沢。 だいたい、なんでこんな気持ち悪い絵え描いてんの？」

「？」

「う……………」

泉ちゃんは何も言い返せない。顔色が真つ青………というか青白い。体調が悪いんじゃないだろうか。風邪か、後はその、女子だし……。

「ほら、見てよこれ。変なの」

仁美はすぐ近くにいた子に押し付けるように泉ちゃんの絵を渡す。

「うわ、キモい」

一言大袈裟おおげさに言つてすぐ、汚いものでも扱うように次の子へ。

「げー、真つ青じゃん。変なの」

「なんか怖い」

「呪われそう」

「てか、何描いてんのか分かんない」

「不気味ー」

「……」

次から次へと押し付け合うように受け渡されるうちに、泉ちゃんの絵はあつという間にしわくちやになっていく。

こつちに回されてきた絵を森ちゃんが受け取り、由香と友ちゃんは横から覗き込む。泉ちゃんは自分の席で立ち上がったまま、絵がどんどんぼろぼろになっていく様子を目で追うことしか出来ないでいた。

「ほんつと、何これキモい。青い顔？ 何？」

森ちゃんが言うと、

「うん、なんだかわかんない」

「やっぱ怖いわ」

友ちゃんと由香が応じる。

「ほら、留美も見てみ？」

私は、押し付けるように渡された絵を手に、泉ちゃんの方を見る。彼女は、一瞬何か

言いたげに口を開いたものの、何も言わず、ただ私の顔を見つめた。

—— 娘の友達と、女子だけのお出かけって、なんだか素敵よね ——

一瞬、そう言ったお母さんの顔が脳裏をよぎる。

私は、その絵をちらつと見て、

「別に……絵とか興味ないし。……こんなのどうでもいい」

私がそう言うのと、泉ちゃんは大きく目を見開いて、悲しそうに目を逸らしてうつむいた。

私は絵を持ったまま泉ちゃんの席に近付き、かなりぼろぼろになってしまった絵を、彼女の机に放り投げるように置いた。……泉ちゃんの右頬を、つうつと涙が伝う。

……ごめん、泉ちゃん…… 私は、それに気づかないふりをして仁美や森ちゃんたちに声をかける。

「みんな、もうすぐ授業始まるし、話後にしよつか？ 私、ちよつとお手洗い行くけど

……」

多分、こう言えば……

「あ、じゃああたしも行く」

「わたしもー」

予想通り、仁美と由香がついてくる。

「しゃーない。じゃ、みんなで行って、もう少し話そっか」
「うん」

森ちゃんたちも来る。私達五人がいなくなれば、これ以上泉ちゃんに酷いことする子はいないはず。なんとなくみんな、ちよつとやりすぎたかな、という感じになってたから、たぶん丁度いいタイミングだったんだろう。

……あの絵は多分、『家族』だ、泉ちゃんの家遊びに行つた時、画集で見せてもらった事がある。彼女によれば、彼女のお祖父さんの、『苦惱』に並ぶ代表作の一つらしい。泉ちゃんの描いた絵は、色鉛筆ながらも絵の特徴をよく捉えていた。画集で見ただけの私が、すぐそれとわかる程に。

なぜ今日彼女がああ絵を描いてたのかはわかんないけど、本当は、すぐに割つて入つて泉ちゃんを助けたかった。だけど、明後日の事を考えると、どうしても空気を讀んでしまう……。お母さん、すごくすごく楽しみにしてるし……。

それに、一人の子をハブるのは、たいていそんなに長くは続かない。きつと、泉ちゃんのことだつて、もうすぐ終わりになる。そう、自分に言い聞かせる。

みんなで、あーでもないこーでもないと話しながら、休み時間ギリギリで教室に戻るのと、泉ちゃんが居なかった。

教室に残つてた子にそれとなく聞くと、保健委員の子が保健室に連れて行つたとの

事。そういえば随分顔色が悪かったし……。すぐ戻って来ないようなら、あとでこっそり様子を見に行ってみよう。そして……。みんなには内緒で、さっきの事謝ろう。

三時間目も、四時間目も、泉ちゃんは教室に戻って来なかった。

昼休み、みんなには、私は用事があるからと言い。少し遠回りしてこっそりと保健室に泉ちゃんの具合を見に来た。

けれど保健室のベッドには誰もいない。行き違いになったかな？　と思つて保健の先生に聞いてみる。

「……藤沢さんなら、先程お母さんが迎えに来て、早退しましたよ」

「え、そんなに具合悪かったんですか」

と聞くと、何故か少し変な顔をして、

「うーん、そうといえばそうなんだけど……。まあ、心配するようなことは無いから」と、それだけ言った。

* * * * *

—— 日曜日 ——

「晴れてよかつたよねー」

「ホント。日向ひなたはちよつと暑い位だけど」

「やっぱ、デニムじゃなくてよかつたじゃん」

私達は開門とほぼ同時にデイスティニーランドの入場ゲートをくぐり、アーケードのはるか向こう、青空を背景に輝くプリンセス城の幻想的な美しさに歓声を上げた。

直前まで来れるかどうかわからないと言っていた友ちゃんのお母さんも無事に参加でき、小学六年生5人、その母親5人、女性のみ総勢十人と、なかなかの大所帯だ。

インターナショナル・バザールを抜けた広場で、一応、はぐれた場合の集合場所とかの打ち合わせをしていると、

「あつ、留美く、仁美く、あつち。パンさん！ パンさん！」

少し先を歩いていた由香たちがパンさんの着ぐるみ……パンさんを見つめる。ここは夢の国。中の人などいない。

「行くっ。写真写真」

仁美が私の手を握り、二人で手を繋いで走り出す。

「うんっ。折角こんな格好してきたんだし……。おかーさん達も早くー」

その後ろに声を掛ける。

「お母さん、そんなに早く走れないわよ〜」

そう言ってるけど、そもそも走る気がなさそうだ。森ちゃんのお母さんと話しながら、ペースを変えずに歩いてくる。

「先行って、順番取つとくね〜」

森ちゃんが、艶のあるボブカットをふわりと揺らして一気に加速する。速っ！ さすがなんでもこなす女。100メートル走千葉県三位は伊達じやない。

……一人、また一人と、列に並んでいる森ちゃんに追いついて、ようやく全員が揃った。写真撮影の列が私達の番まで回ってくるのに、あと5、6組というところかな。これぐらいなら、パンさんと写真を撮れずに終わりなんていう悲しい事は無いだろう。

「森ちゃんさんきゅ。やっぱ速いね〜」

そう私が言うと、

「だって森ちゃんだもん！」

と、何故か友ちゃんがドヤ顔で胸を張る。

「ぶ。なんであんたが威張んのよ」

由香が笑う。

「友佳ともかはいいの」

そう言つて森ちゃんは友ちゃんに後ろから抱きつく。身長差があるので、友ちゃんがすっぽり包まれたみたいになる。

「……ホント、森ちゃんつて、友ちゃんには甘いよね……」

仁美が、誰に言うともなく呆れたように言った。

今日の私達五人の服装は全員パンさん仕様。白のトップスに黒のスカートかキュロット。頭にはしっかりとパンさん耳カチューシャ装着。アクセントに、全員同じ、白いレースで縁取られた、幅の広い赤いリボン、めいめい好きな所に付けている。

私は、フリルの飾りが付いた白いカットソーに黒のミニスカート＋細かいパンさん柄のレギンス、黒のスニーカー。ポニーテールに例の赤いリボン。このリボンは、この前みんなおそろいで買ったもの。

仁美と由香は、アイライナーで目の周りに星まで描いている。

私達の順番が回ってきた。五人でパンさんを囲んでポーズをとり、お母さんたちが何枚も写真を撮る。順番待ちをしている人達からも、「すごい」「カワイイ」などと歓声が上がっていた。

* * * * *

「たっだいま〜」

「たっだいま〜。 ……はあ、疲れた〜。もう年かしら？ あなた達にはついていけないわね」

一日、遊び倒してしまった。 ……花火こそ見なかったものの、午後七時半スタートのパレードまでしっかりと見てしまったせいで、お母さんと二人で家の玄関をくぐったのはもう九時近かった。明日学校も仕事もあるのに……。

「夕ご飯、はい入る？」

「うーん、少しなら」

「じゃあ、今日はちよつとずるしてレンジのやつにしちやおつか？」

お母さんは、冷凍食品のことを「レンジのやつ」という。よく考えると変な言い方だけど、「意味が分かるんだからいいでしょ」だって。

「じゃあ、エビピラフにしようか、半分ずつ。あとポテトサラダ」

「うん」

お母さんがご飯の準備をしている間にお風呂のスイッチを入れ、カーテンを閉める。テレビを付けると、もう九時のニュースが始まっていた。

『……による、今後の株価の動きが注目されます。 ……以上、報道フロアからお伝えしま

した』

『では、次のニュース。……訃報です。世界的に有名な画家の、藤澤誠司さんが昨夜亡くなりました。藤澤さんは、青の巨匠などの名で海外でも広く知られ……』

「……………み、留美、どうしたの？ 大丈夫？」

「……………あ」

目の前に心配そうなお母さんの顔。肩を抱かれている。気が付くと私は、床にへたり込んでいた。

「大丈夫、ちよつと疲れただけ。やっぱりご飯とか、あとにする。……部屋で少し横になるね……ごめんなさい」

「それはいいけど……平気なの？」

「うん……。何かあつたら、呼ぶから」

「そう……」

……ドアを閉じ、私は着替えもせず自分のベッドに倒れ込む。

やっとわかった。どうして泉ちゃんがおかしかったのか。遅すぎたけど。

泉ちゃんは多分知っていたんだろう。大好きなお祖父さんがもうすぐ亡くなってしまうという事を。

あの、『家族』の絵を描くことは、彼女にとって死に臨むお祖父さんへ捧げる、祈りにも似た行為だったのかもしれない。

……それを、私は……。

—— 泉にはいい友達が居るな。どうかこれからも泉と仲良くしてやってください
ね ——

—— はい、もちろんです。今日はお招きいただきまして、ありがとうございました
——

……わたしは……。

—— 別に……絵とか興味ないし。……こんなのもいい ——

……わたし、はっ……。

あの絵を投げ返した時の泉ちゃんの涙が、いつまでも流しきれない澱おりのように、わたしの心の深い、深い所に沈んでいった。

* * * * *

月曜日、朝のホームルームで、泉ちゃんが忌引で数日休む事が伝えられる。

昨日のディスティニーランドの興奮を引きずっている仁美たちは、いい気分を邪魔された、みたいに感じているようで、なんだか不満気だ。

「藤沢のお祖父さんってさー、あの真つ青な怖い絵描いてる人でしょ。図工の教科書に乗ってるやつ」

森ちゃんが言うと、

「あーあれ、ゾンビみたいでなんかコエーよな」

「そーそー」

「なんかグロいし」

一緒になって騒いでいた男子がみんなで言う。

確かに今年の図工の教科書に、『苦悩』が載っているけど、あんな、A4の教科書の四分の一ほどのスペースの平面的な写真では、あの絵の迫力の一万分の一も伝わらないだろう。

「あんなヤバイ絵なんか描いてるから、呪われて死んじゃったんじゃない?」

仁美が笑いながら言ったその言葉を、私はどうしても聞き流せなかった。

「やめなよ。人が亡くなってるのに。呪いとか幼稚なこと言って、ばっかみたい」

つい、きつい口調になってしまった。空気が凍りつく。森ちゃんも友ちゃんも目を丸くしてる。仁美は一瞬、言われたことが理解できない、みたいな顔をした後、真顔になって私を睨む。

「はあ。何いってんの留美。よく聞こえなかったからもう一回言ってくんない？」

「幼稚だつて言ってるの。クラスメイトのお祖父さんが亡くなってるのに、呪いとか下らない」

わかっている。こんなのただの八つ当たりだ。自分が肝心な時に何もできなかったのを、誰かを非難することで自分の心を紛らわしたいだけなんだつて。他に角の立たない言い方がいくらでも有るのに、どうしても自分が押さえられない。

「仁美も、留美もやめてよ」

「やめてつて。留美がいきなり突っかかってきたんじゃん」

「うん。いまのは留美の言い方が酷いでしょ。仁美に謝あやまんなよ」

森ちゃんにそう言われる。ほんとその通りだ。だけど、

「……………」

「ふーん。そう。……わかった」

仁美の声の温度が一気に下る。

「あんた、今までもあたしたちのことそうやって馬鹿にしてたんだね。何となく、ノリ悪

いなくて思うことあったけど、そういうことでしょ」

わからない。けど、どつかで、みんな幼稚だって、思ってた。でも、だからってそれが嫌ってことじゃなかったんだけど……。

「悪かったわね、私たち馬鹿で幼稚で。だから、鶴見さんの友達続けるの、無理だわ」

「仁美ちゃん！ それは……」

友ちゃんが何か言いかけるのを、森ちゃんが止めた。

「友佳やめな。鶴見が悪い」

……ああ、これは宣言だ。次にクラスでハブにするのは、「鶴見留美」だっていう事をみんなに伝えるための儀式みたいなものだ。

このクラスでだれかをハブにする時の、暗黙のルール。

私たちの学校では、元々男女とも、下の名前か、あだ名で呼びあうことが多い。けれど、ハブリが始まると、基本は無視し、何か必要があつて話す時は必ず名字みょうじで呼ぶようにするのだ。

そのルールを守らない者がいると、クラスを中心である森ちゃんや仁美、由香たちを含むみんなが、視線でプレッシャーをかける。その視線はこう突きつける。

『ルールを守らなければ、次はお前だ』
と。

私はこの日、生まれて初めて「ハブられる側」になった。

* * * * *

いままで、「留美」「留美ちゃん」と、親しげに話しかけてくれた友達から一斉に無視され、どうしても必要な時でも、クラス全員があだ名や下の名前で呼び合う中、私ひとりだけが「鶴見」「鶴見さん」と呼ばれる。

誰が思いついたか知らないけど、本当に幼稚で下らない。でも、単純だからこそ、真つすぐに心を抉^{えぐ}つてくる……。

今まで、泉ちゃんも、他の子達もこんな思いしてたんだな。……こんな思いさせてたんだな。ほんつと、幼稚でバカばっかだ。みんなも、私も。

木曜日。無視され始めてから四日目、重い足を引きずりながらも教室に着くと、久しぶりに泉ちゃんが自分の席に座っていた。ほんの一瞬、自分の置かれた状況を忘れて駆け寄る。

「泉ちゃん、もう……」

大丈夫なの？ と聞こうとした時、泉ちゃんは顔も上げずに、

「おはよう、鶴見さん」

周りの全てを拒否するような、冷たい声でそう言った。

……その後の数分のことは何も覚えていない。気が付くと私は、トイレで朝食べたものを全て吐いてしまっていた。

* * * * *

今、私の部屋の机に、三枚の写真が飾られている。三面鏡のように折りたためる木製の写真立て。

壊れてしまったもの。失ってしまったもの。新しく見つけたもの。今なら、……そう、今になってようやく分かる。どれも全て、私にとって大切なものだって事が。

一番左は、デステイニールランドで仁美たちと撮った、パンさんと一緒に五人でポーズを決めている写真。

夏休み明け、もう、クラスで誰かがハブられることは無くなった。ただ、私は、みんな

などの距離を計りかねている。

あれから由香とはわりとよく話すようになった。いつも一緒にいるってわけじゃないけど、今、一番話をするクラスメイトかも知れない。

仁美は、私を「留美」と呼ぶようにはなつたけど、二人で話すことはほとんど無い。友ちゃんはいつものようにクラスのマスコットで、なんだかんだいって森ちゃんとはいつも一緒だ。あの二人は変わらないなあ。彼女たちを見てみると、八幡たちと河原で、小学校からずっと付き合っている友達に百人にひとり、というような話をした事を思い出す。

でも……もう、五人で仲良くって事は二度とないんだらうな。って事はなんとなくわかつてる。多分、みんな。

真ん中の写真は、藤澤先生の左右に私と泉ちゃんが立っている写真。

泉ちゃんとは、「鶴見さん」と呼ばれたあの日から、夏休みに入るまで一ヶ月以上、一言も口を聞かなかつた。あの、何もかもを拒絶するような声が怖くて、目を合わせることにさえ避けていた。

私たちが、私があの日彼女にした事を考えれば、簡単に赦ゆるされないのは分かっている。だからか、私は、彼女の代わりにみんなに無視されることで、彼女に償ゆるっているとい

う自己満足に浸っていたのかもしれない。彼女は別にそんな事を望んではいないんだろうなどと頭では理解しているのに。それでも。

泉ちゃんとは林間学校の最初の日、聞き間違えじゃなければ、私を「留美ちゃん」と呼ぼうとしてくれていた。夏休みに入って、彼女にどんな心境の変化があったのかはわからないけど、もしかすると誰かから、なぜ私がハブられるようになったかを聞かされて、責任を感じて話しかけようとしてくれたのかも……。

夏休みが終わって、ようやく彼女とは他のクラスメイトと同じように、朝や帰りのあいさつだけはするようになったけど、でもそれだけ。未だに、泉ちゃんの前だと緊張する。また彼女を傷つけることが怖いのか、傷つけられるのが怖いのか……、自分でもよくわかんない。

右端の写真は、千葉村で、八幡たちと撮った写真。

小町さんが八幡の目を隠しているあの写真だ。お母さんを心配させないために撮った写真。千葉村のことは、決していい思い出ばかりじゃ無かった。

でも……林間学校で八幡に会えたことで、私の世界は随分と変わった。きっと、本当に変わったのは、世界ではなく私自身の方だろう。

結局私は、「自分はあのへんと違う」なんて言いながら、私と違う仁美たちを受け入れ

られず、彼女たちと違う「私」も受け入れられなかった。それだけの事だったんだと今だから分かる。

だからいつか、八幡があの時言つてたように、「自分と違う他人を認め、他人と違う自分を認める」そういう事が出来る「私」になりたいと思う。ただ、『正しいぼっち』つていうネーミングセンスはちよつとどうかと思うけど。

小町さんが一人だけ中学生だったというのはあとから聞いてびつくりした。確かに小柄だけど、その割に大人っぽく見える。中学生でも、三年生ならそんなもののかな。

あの後彼女に、「お母さんのパソコンでメールを使える」という話をしたら、最終日の帰り際に、

「何かあつたらいつでも連絡してねっ。お兄ちゃんはそういう時のためにあるんだから」

と言つて小町さんのメールアドレスが書かれたメモをくれた。

私は、机の引き出しを開け、手帳の間に隠すように挟んだもう一枚の写真をそつと取り出す。八幡が木にもたれて眠る写真。

プリンタの、セピアカラーモードでプリントしてみたら、本当にまるで絵葉書のような

な写真になった。木漏日の下で目を閉じて樹にもたれる八幡の姿は、何ていうか……知性的でかつこいい、みたいな感じで、見てるだけでドキドキする。

男の人の写真を見てこんなふうに思うなんて、初めてかもしれない。目を開けてる八幡にはあんまりドキドキしないけど。ふふ。

今はまだ無理だけど、いつか、写真立ての中の三枚の写真を、心から笑って見れる時が来たらいいな。なんて思いながら、セピア色の八幡のほっぺを軽く突っついた。

鶴見留美は聖夜に願う① 比企谷八幡は溜息をつく

秋も深まってきた十一月のとある午後、母に頼まれていた買い物途中で、八幡を見かけた。

駅前のマ○ンピアから家に向かって買い物袋を片手に歩いていると、総武高の制服を着た男女が、私とは反対側の歩道を歩いていた。私の視線は無意識のうちに引き寄せられ、男子のほうが八幡だとすぐに気付く。……夏休み以降、私はこの制服を見ると、どうしても八幡たちを探してしまう……。

八幡は、少し大きめのコンビニ袋を片手に下げて、とても可愛くてお洒落な女の子と並んで歩いている。雪ノ下さんとも由比ヶ浜さんとも違う女の子。あの二人と一緒にいるのはたまに見かけてたけど、この人と一緒にいるのを見るのは初めてだ。

なんというか、「ゆるふわ系」というのかな？ 女子の私から見ても「可愛いなあ」と思えるひと。八幡と距離が近い。二人共学校帰りらしく、バッグを背負ったままで、肩と肩をくつつけるようにして小声で何か話しながら歩いている。

もしかして、彼女さん……かなあ。そんな風に想像するとなんだかもやもやする。声もかけられずに見ていると、二人はすぐ近くにあるコミュニティーセンターに入って

いつてしまった。

なんだか気になって、少しだけ遠回りして信号を渡り、センターのエントランスに行ってみる。正面玄関の大きなガラス越しにそとと中を覗いてみたけど、もう八幡達の姿は見つけられなかった。

ふと、入り口近くの掲示板に目をやると、「海浜総合高校・総武高校合同、クリスマスイベント」の告知ポスター。

……総武高校。八幡の通う高校。もしかしたら八幡は、何らかの形でこのイベントに参加しているのかもしれない。

でも、このポスター「イベント」とだけ書いてあって、具体的に何をやるのかは書かれていない。サプライズ、みたいな感じなのかな？ そんな事を考えながら、踵を返して家へと急ぐ。今日は、お母さんの帰りが7時位のはずだから、それまでにご飯炊いて、お風呂準備して……。うん、やることいっぱい。頑張る。

二学期が始まり、私たちのクラスは少し雰囲気が変わった。クラスを中心だった仁美と森ちゃんのグループがバラバラになったことで、女子のまとまりが無くなった。いい

意味でも、悪い意味でも。

ただ、それでクラスもバラバラになったかといえば、意外なことに今度は男子を中心に、それなりに仲良くまとまり、日々の行事をこなしている。男子たちは、相変わらず意味もなく大騒ぎしたりして、幼稚だなあと思うことも多いけど、女子のグループにはない、その、裏表のないノリみたいなものが私たちを自然に引つ張っていく。これはこれで悪くないな、なんて、少しは彼らを見直すようになった。

その中で私は、特に誰かのグループに入るでもなくこの二学期を過ごしている。別に一人ぼっちというわけでもなく、その時その時で一緒にいるメンバーが違うだけだ。今は、……由香がいるグループの子たちと一緒にいることが多いかな。

泉ちゃんとも普通に話すようになった……表面的には。だけど、どうしても一歩引いてしまう。目の前で泉ちゃんが笑っていても、心から笑えない。だから、作った笑顔を貼り付ける。ほら、鶴見留美はちゃんと笑っていますよ……そう嘘をついて。彼女にも……自分にも。そんな自分が嫌だけど、でも、彼女と向き合うことがどうしても怖い。

八幡とは、今日みたいに、買い物途中とかにたまにすれ違う。たいてい向こうは自転車に乗っているの、私に気が付かずに通り過ぎてしまうことも多い。

でも、信号待ちとかで目が合ったり、時には隣に並ぶようなときもある。そんな時私

は、八幡に向かつて、肘から先だけをちよつと上げて、腰の横あたりで小さく手を振る。八幡はちよつと恥ずかしそうにして周りを見回し、でも、ほんの少しだけ手を上げて、小さく小さく手を振り返してくれる。そういう時のなんだか余裕の無さそうな八幡の表情が私は好きだ。だって、なんだかとってもかわいいんだもん。

言葉を交わすわけでもない、ただそれだけの行為。でもそれが、私の胸の奥にじんわりとした熱をくれる。

コミュニティセンターで八幡を見た次の日、私の小学校の掲示板に、このイベントへの参加募集の告知が貼り出された。

担任の桜井先生の話では、なんでも、あのセンターに近い学区にある小学校の6年生を対象に、主催する高校生たちのお手伝いとしてイベントにボランティア参加して欲しい、というものらしい。

イベントで招待するお客さんは、センターに隣接する老人ホームのお年寄り達と、やはりすぐ近所にある公立の保育園生だけど、ボランティアに参加すれば、当日もイベントを楽しむ事ができる、とのこと……。どうしよう、参加してみようかな？　もしかし

たら八幡と一緒に出来るかもしれないんだよね。でも……。

夏休み中、友達と遊ぶことが急に少なくなった私に、お母さんは何かを感じたのだろう、あまり仁美たちのことを言わなくなった。

代わりというわけでも無いだろうけれど、私が望めば、家事とか、色々な事を教えてくれるように、任せてくれるようになった。

食費用の財布を預かってスーパードでの買い物。料理は、電子レンジはいいけどオーブんとかコンロを使う料理はお母さんが居るときだけ。包丁はもう大人用を使ってもOK。

洗濯機やミシンもいつでも使っている。パソコンは、リビングのデスクトップ（一体型）やプリンタは自由に使える。自分のアドレスも作ってもらっている。

お母さんの仕事用のノートパソコンには決して触らないこと。

少しずつ、ルールが増え、手伝えることが増えていく。お母さんに頼ってもらえる事が嬉しい。

携帯電話は、中学生になったら持たせてもらえる約束になっている。だから、それま

ではメールはパソコンだ。林間学校の後、このパソコンから八幡の妹の小町さんにあの時の写真を送った。小町さんからはお礼のメールが届き、今でも、たまにだけメールのやりとりをさせてもらっている。

「ねえ、お母さん」

「ん、ちよつと待ってね……。はいはい、なあに？」

キッチンに並んで洗い物をしながら、私たち二人はいつもの様に雑談をしている。

「あのさ、マリンピアの手前にコミュニティーセンターってあるでしょ」

「うん」

「そこでクリスマスにやるイベントに、ボランティアで参加してもいいかな？」

「ボランティア？」

「うん。なんか、総武高と海浜高で、イブの日に、あそこの老人ホームと保育園のためにイベントやるんだって、で、小学生はそのお手伝い」

「へえ、いいんじゃない？ 留美、やってみたいんでしょ」

「でも、そしたら、買い物とか洗濯とか、色々手伝えることが減っちゃうかも……」

「留美」

「……………うん」

「前にも言ったけど、そんな事気にしなくていいの。家事を手伝ってくれるのは嬉しいけど、お母さんは、留美がやりたいことをやってくれた方がもっと嬉しい」

そう言つて笑つた後、ボソリと続ける。

「だいたい留美は変なところに気を使いすぎなの。相変わらず子供らしく無いわよね」
「うう。それはこういう性格なの！ 簡単には変わらないよ」

「……………あの、コーヒー、まだかな……………」

リビングからお父さんの声がする。すっかり忘れてたけど、そういうえば珍しく今日はいるんだった（ヒドイ）

「ごめーん、今から淹れるねー」

そう言つて私はコーヒーマーカーのタンクに水を入れる。

数日後、私はこの学区内にある三つの小学校から集まった、ボランティア参加者十数

人の中にいた。私の学校からは5人が参加しているが、私のクラスからは私一人だけ。そのことを寂しいと思わず、むしろホッとしている自分に気付く。

林間学校以降、クラス内で誰かをハブにするという事は無くなつたし、それなりに仲良くやっている。とは言え、どことなくぎくしゃくとした、変な緊張感はまだ残っている……。だからだろうか、クラスメイトのいない集団の中に居ると、不思議な開放感を感じる。

小学生の参加者が全員揃ったところで、係の職員さんに、「講習室」という、学校の教室より一回り大きいくらいの部屋に案内される。机や椅子、大きなホワイトボード。教室というより、会議室って感じかな。……そこに、

八幡が、いた。いてくれた。やっぱりこのイベントに参加してたんだ。トクン、トクンと、私の心臓が心地良く幸せなリズムを刻む。

向こうもすぐに気がついて目を丸くしている。私がいっものように、右手を腰のところで小さく振ると、いつもよりもさらにキヨドキヨドと周りを見廻して、そつぽを向いたままで私に向かって小さく左手を振ってくれた。

「……何やってるんですか？ せんばい」

ぶ、今、八幡てば、一瞬飛び上がって宙に浮いたみたいに見えた。

この前一緒にいた女の子に真後ろから声をかけられ、可笑しいぐらい取り乱している。

「べ、別になんでもねーよ……」

とか言ってる。

「ええー、嘘ですう。……今絶対なんか変な動きしてましたよー」

「いやアレだ。ちよつと疲れたからこう、ストレッツチをだな……」

「なんか怪しいです、あと、動きがキモいです」

笑顔でヒドいことを言いながらも、彼女は八幡の腕をクイクイ引つ張って、まるで二人でじゃれてるみたいだ。……なんだか面白くない。

でも……これからどう行動したら良いのかわからない。イベントに申し込んだ時は勢いで、とにかく参加すれば、八幡とゆつくり話が出るんじゃないか、もし出来るなら、あの時のお礼を言えたらいいな、なんて考えていたけど……。

うん。とりあえず八幡にはちゃんと会えたいし、とにかく、少し様子を見よう。今は、みんななんだか忙しそうだし。

そんな事を考えていると、海浜高の制服を着ている、背の高い高校生がこちらにやってきた。彼は、八幡達が何か計算の様な作業をしている方を向いて、

「いろはちゃん、ちよつといいかな？」

と、声をかける。

「はい、今行きますう」

返事をして、とてととやって来たのは、あの、八幡と一緒に居た可愛い人だった。彼女が隣に来るのを待って、高校生があいさつを始める。

「やあ、〇〇小学校、△△小学校、□□小学校の皆さん、こんにちは」

「こんにちは」

「僕は海浜総合高校の生徒会長で、玉縄と言います。……そして、」

玉縄さんはサツと左手を彼女の方に大袈裟に伸ばして、自己紹介を促す。

「はい、総武高校で生徒会長してる、一色いろはです。みんな、今回はよろしくね」

「よろしくおねがいします」

この人、生徒会長さんだったんだ……。少し驚いていると、玉縄さんが挨拶を続ける。

「今回は僕たちのクリスマスイベントに参加してくれてありがとう。みんな協力してクリエイティブで、エキサイティングなものに仕上げてください。君たちの参加によるシナジー効果を期待しているよ」

両手を振り回して、なんだか力強く語っている。隣の一色さんは、何故か呆れたような態度でそれを見ている。ちらつと八幡に目をやると、なんとというか、うんざりとした

ような顔でこちらを見ている……。なんだか少し変な空気だ。

「では、いろはちゃん、こつちでさつきさんの続きを……」

と言つて、玉縄さんは一色さんを連れて中央のテーブルに戻つてしまふ。

あれ、私達は何をすれば良いんだろう？ 別の人が指示をくれるのかな、と少し待つてみたが一向に誰も来る気配がない。

最初は雑談して気にしていなかった他の小学生たちも次第にざわざわし始めた。

「ねー、何やればいいの？」

「誰か聞いてきてよー」

「えー」

「お前行けよ」

「じゃあ、じゃんけんで……」

ふう、仕方ない。

「私、何やればいいのか聞いてくるよ」

そう言つて私は、八幡たちが座っている総武高校の席に向かう。八幡は片手で頭を抱えるようにしてノートパソコンを覗き込み、やはり総武高の制服を着た細身の男子としたりに何かを話していた。……なんだか忙しそうだな……。

声をかけるのをためらっていると、ちょうど一色さんが中央のテーブルからこつちに

戻ってきて、八幡の隣に座る。

会長さんの隣の席に座ってるってことは、八幡も生徒会の役員さんやつてるのかな？
なんて考えつつ一色さんに声をかける。

「あ、あのー、」

「あ、何かな？」

……この人、くると振り返る仕草からして可愛いなあ。年上の人を可愛いとか思ったら失礼かもだけど。

「すみません、私達、今日は何すれば良いんですか？」

そう聞くと、一色さんは、ウツと一瞬言葉に詰まり、玉縄さんたちの方をちらつと見て、はあ、と小さくため息をついた。

「ごめん、少しだけ待ってね」

そう言つて一色さんは八幡の方を向いて、何か小声で聞いている。八幡も小声で何かを返す。また、二人の距離が近い。ますます面白くない。

どうやら話がまとまったらしく、一色さんは、

「そうですね。じゃあ、そういうふうに表示してきます」

八幡にそう言うと、何かのファイルを一冊持つて立ち上がり、私と一緒に小学生の集まっている席へと移動した。

「はい、じゃあ、小学生のみんなには、今日から、イベント当日にこの上のホールで使う飾りを作ってもらいまーす」

そう言つて一色さんが持つていたファイルを開き、くるんとひっくり返して私たちに見せる。

「こつちの、ピンクの付箋ふせんが張つてあるのが、会場用で、水色の付箋が張つてあるのがクリスマスツリー用のです。付箋に丸がついてる物は、もう材料がそろつてるやつです」
彼女の説明を聞きながら、小学生みんながファイルを覗き込む。材料がある、という物は、立体的な星型のオブジェやサンタクロース、トナカイなどの、クリスマス限定でしか使えない切り絵などで、それ以外は、折り紙の輪をつないで作るチェーン等、どこでも手に入りそうな材料で作るものが多い。

「今日は、最初二組に分かれてもらつて、一組はこの切り絵を作り始めて下さい。もう一組は、その文具店で、ここに書かれている材料と、あと、人数に足りない分のハサミとか糊とかの買い出しをお願いしますねー」

「私たちだけでですか？」

私とは別の小学校の、とつても背の高い女の子が一色さんに尋ねる。

「あ、そうか……。そうだよね。……女の子が多いみたいだし……」

一色さんは、ちよつとだけ考えて、

「書記ちゃん、ちょっとこっち来てくれる？」

そう、八幡たち総武高の役員さんの方に声をかけた。

呼ばれてやって来たのは、三つ編みに黒縁メガネの真面目で大人しそうな人だった。

一色さんが買い出しのことを説明し、彼女が買い出し班に付いて来てくれることになった。

「総武高書記の藤沢沙和子です。よろしくね」

「よろしくおねがいます」

「えっと、じゃあ、あなたたち五人、私と一緒に来て下さい。後の人は、私が帰ってくるまでは他の人がついていきますので、その指示で切り絵の方を始めて下さい」

「はい」

私とさっきの背の高い子を入れた五人が、一番前に居たため買い出し班になってしまった。……八幡が付いて来てくれればいいのに……。

文具店はセンターからすぐのマ○ンピアの中にあり、品揃えも豊富で、文具のディスプレイカウントと看板を出しているだけに値段も安い。すぐそのコンビニで五百円で売っているものと同じ物が二百円台前半で売られていたりすることもある。当然、私もよく

利用するけど……。

大掛かりなイベントってやっぱりすごいんだな、って思う。大判の折り紙、色画用紙、工作用紙……、紙、紙、紙。紙関係だけで買物かご三つ分。買物に五人も要らないよ、と思つてたけどそんなことは全然無かった。

考えてみれば、三階のホールは結構広い。折り紙のチエーンだつて、端から端まで飾れば相当な長さになるだろう。書記さんと、買物リストを見ながら買物忘れがないかをチエックしていると、

「鶴見さん」

少し離れた通路から、隣のクラスの子に呼ばれる。たしか佐川……なんとかさん。下の名前が出てこない。まあいいや。

「どうしたの、佐川さん？」

「え、あなた……鶴見、さん？」

私が返事をする、何故か書記さんがびっくりしている。佐川さんは何事かここつちを見てる。

「はい……」

私が答えると、さらに質問をかぶせてくる。

「もしかして、〇〇小学校？」

「そうですけど、あの……?」

「あ、ごめんなさい、何でもないので。……ええと、なんだっけ?」

佐川さんが、

「あの、ハサミなんですけど、わたし、左利きで……どうしようかなって。それに、すごくたくさんあるし」

それで、三人でハサミのコーナーを見てみると、……ホントだ、たくさんある。この列の棚、通路から通路まで全部ハサミだ。左利き用のハサミも安いのからプロ用までそろっている。

「もちろん買うのは構わないけど、左利きって何人いるのかしら?」

そう言って書記さんは携帯電話を取り出し、誰かに電話をかけて確認している。

結局、左利きは、買い出し組が、佐川さんと背の高い子——綾瀬さん、だったかな——と、センターに残っている子に一人、の合わせて三人、ということ、糊とかハサミとか入ってるカゴに足りない人数分のハサミ（安いのを）を入れていく。

「……つと。うん、これで全部そろったと思います」

私がチエックを終えると、

「じゃあ、会計して帰りましょう」

書記さんがみんなに声をかけ、会計を済ませる。袋が大小合わせて八個にもなった。

みんなで袋をぶら下げコミュニケーションセンターへと帰ってくる。重い袋は、二人いた男子が頑張つて持つてくれた。

講習室に入ると、部屋の半分の机が大きく並べ替えられていて、残っていた小学生たちはそこでサンタとかトナカイとかの切り絵を作っていた。ハサミが足りてなかったようで、交代で使っている。

そのすぐ横の椅子に、さっきのファイルを広げた八幡が座っている。どうやら作業中の子たちの監督役をしていたらしい。

「あ、比企谷先輩、お疲れ様です」

書記さんが声をかけると、

「おう、そっちこそお疲れさん」

それこそ、なんだか疲れたような声で言う。

「……会議、どうでした？」

「あー……、まあ、どうもならんわ。とりあえず今日は、今できるのをやるしかねーな。

あと、議事録のまとめ」

「……そうですか……」

「あの議事録必要なの？ 『アグリー』と『それあるっ！』ばっかりなんだけど……つて、

いやお前に言ってもしょうがねーな、悪い」

思わず、という感じで言ってしまったらしい。

「そんな事……でも、このままじゃ、不味いですよね」

彼女もうつつむいてしまつて、なんだか元気がない。

「八幡、なんか困つてるの？」

私が八幡の隣の椅子に座つてそう聞くと、少しだけ優しい顔になつたように見えた。

「……おう、おま……、留美もお疲れさんな」

八幡は私が反射的に睨んだのを見て、『お前』と言いかけたのを『留美』と言い直した。

うん、八幡えらいえらい。ちゃんと覚えてたみたい。

「うん、大丈夫、近いし。それで？」

「ああ、まあなんだ、具体的に何やるかまだ決まつて無くてな……」

「え、それつて大丈夫なの？」

もう十二月に入っている。イブまで日数はあるけど、今まだ何も決まつてないというのはさすがに……。

「大丈夫じゃないから、頑張つてどうにか決めないとな」

そう言つて八幡はがつくりとして、一つため息をついた。なんだか思ったよりも大変

そうだ。

「そっか。……うん」

私と八幡のそんなやりとりを、書記さんは少し離れた席でなんだか不思議そうに見ていた。

鶴見留美は聖夜に願う② クリスマスツリーと唐揚げもどき

それから、火曜から金曜までの週に四日、コミュニティセンターでクリスマスイベントの手伝いをする日々が始まった。学校が終わった後一度家に帰り、各自コミュニティセンターに集合する形だ。

それぞれの学校の行事や、家の用事を優先してくださいと言われていたので、毎回全員参加と言うわけではない。日によっては、十六人のうち、半分くらいしか来れない日もあったりする。

そんな中、私は今のところ毎回参加している。……初日に何をやるかみんなを代表して聞きに行ったり、高校生の中に八幡と言う知り合いが居て、親しく話していたり、という経緯があったせいかな、何となく私が小学生の代表みたいになってしまっているのだ。

飾り作りの材料が足りなくなったり、とか、今日は誰々さんがお休みです、とかいう報告が何故か私のところに来て、その度に私が八幡や会長さん、書記さんたちに話す。

「別に私がリーダーだってわけじゃないのに……」

そう八幡に不満をこぼすと、八幡は何故か可笑しそうに笑い、

「留美もかよ……。世の中ぼつちを働かせ過ぎだろ。せつかく一人で居るんだから、そうとしておいてくれませんかね……」

なんて馬鹿なこと言ってる。あと、私は別にぼつちじゃないし。

「そんなことよりさ、八幡」

「おう」

私はちよつと気になってることを聞いてみることにした。

「まだ何やるか決まんの？」

「……おう」

「『おう』ばっかりだね……」

「おう。つて、いや悪い、留美。……そのな、別にテキストに返事してるってわけじゃないか。……」

「ううん。……八幡が悪いわけじゃないし」

……八幡も、だいぶ疲れてるなあ……。

そう。私たち小学生が参加し始めてもう二週目だというのに、未だにイベント自体、何をやるのか決まっていらないらしいのだ。

一度、高校生・小学生みんなで「アイデア出し」の会議？　みたいなのをやったけど、

合唱・コンサート・演劇・ミュージカル・映画……等々、それなりに案は出た。けれど、そのどれかに決めるんじゃないやなくて、全部ミックスしてうまくやれないか？ みたいな話になってしまい、結局その日は何一つ決まらなかった。

どうやら今日になっても状況はあまり変わっていないらしい……。

どうするんだろう、このペースで行けば、今週中には飾り作りが終わってしまう。あと、私たち小学生に出来るのは……。そんな事を考えながらハサミを動かしていると、「あ、留美ちゃん、小学生はそろそろ時間ですね〜」

そう一色会長さんが声をかけてくれる……。だからどうして私に？

……はあ、もういいや。なんだか慣れてきたし。

小学生はいつも、五時前を目安にして作業は終わりになる。あまり遅くなって、家族に心配をかけないようという配慮だろう。

「みんなー、時間だつて。片付けおねがいします。あと、今日何をいくつ位作ったか、だいたい良いのでこっちのチェック・シートに書いといてくださいー」

私は、今日参加している小学生十人ぐらいにそう指示をする。この講習室は、私たちの貸し切りというわけではない。明日もまた作業があるからといって、やりっぱなし。出しっぱなしで帰るわけにはいかないのだ。

完成した飾り・作りかけのものを、道具や糊といったものを、それぞれ種類ごとにべつ

べつのダンボール箱に入れ、部屋の端によせて置く。……結構増えてきたなあ。

「鶴見さん、こつち終わったよ」

「こつちも」

「……」

きれいに片付いた所で、みんなそろって高校生たちにご挨拶。

「はーい、今日もお疲れ様です。いつもホントにありがとう。外はもう暗いので、みんな、気をつけて帰って下さいねっ」

一色さんがそう言つてニツコリ笑う。ほわわわーんと、花が飛ぶような可愛らしい笑顔に甘い声。……男子とか、顔真っ赤にしちやつてるし……。女子はまあ、うん、色々と気がついてる子も何人か居るみたいだけど。

「おつかれさまでしたー」

声を揃えて挨拶し、今日の作業は終了。コートを着ていると、八幡と一色さんの声が聞こえてきた。

「……お前、小学生にまであざといんだな……」

「むー、なんでですかあ、ぜんぜんあざとくないです。素ですよ」

「イヤほら、そーゆうところ……」

小学生がみんな部屋を出た後、私は最後に部屋を出て……くるつと振り向いて、八幡に向かつていつもみたいに体の横で手を振る。

八幡は、一色さんのことを気にしてか、私の方を見てもこくと頷くだけ。……でも私は手を振るのを止めてあげない。ふふ。

一色さんはそんな様子に気づき、わざとらしく小首をかしげて八幡のことをじいつと見ている。八幡は、手を振りつづけている私と彼女を交互に見て……がしがしと頭を掻きながら、諦めて私に小さく手を振ってくれた。

「じゃーな、留美。気をつけて帰れよ」

一色さんは、にやつとなんだか悪い笑顔を浮かべると、八幡を肘でつつきながら、彼を真似するように腰の横で手を振ってみせた。

八幡は「お前らな……」とかなんとか言ってる。ちよつと顔赤くしてるし。おつかしいの。

「留美ちゃん、またね〜」

「はい、お先に失礼しまーす」

私は一色さんにも手を振り、今度こそ部屋を出る。

コミュニティセンターを出ると、街はもう完全に夜の風景へと変わっていた。マリ
ンピアの周りの木々を飾る青いイルミネーションが遠目にも美しく輝いている。

ひゆう、と風向きが変わった。十二月の夜の冷たい風が、ついさっきまで暖房の効い
た部屋にいた私から遠慮なく体温を奪っていく。

うわ、風が当たるとほんと寒い。今日はお母さん居るはずだし、特に買物もない。早
く帰ろ。

どこかの店先から聞こえてくる、「ラスト・クリスマス」の曲をBGMに、私は家への
道をリズムを刻むようにして歩き出した。

「ただいまー」

コミュニティセンターからわずか数百メートル。それでも相当冷えてしまった体
を、香ばしいカレーの香りが出迎えてくれた。

「あ、留美お帰りー。きょうは寒いからカレーにしてみたよ」

「うん！ ふふ、玄関までいい匂いしてきてるよ。いつもの？」

「そう。お肉を切る大きさだけ変えてみた」

最近のうちのカレーは鶏肉のカレー。塩麴しおこうじに漬けて一晩置いたお肉を使って、後はいつもと同じように作るだけなのだが、胸肉も肉とも蕩けるように柔らかくなり、「一味違う」カレーになる。

しばらく前、お母さんが関わっている婦人雑誌の料理の記事で「塩麴」とか「なんかヨーグルト」とかにお肉を漬けて寝かせる、みたいなのを特集したそう。その中でも、塩麴と鶏肉の相性は抜群に良く、たまたま試食に参加したお母さんはすっかりはまってしまい、自分でも試行錯誤しながらうちでも色々と作っている。

コートをハンガーに掛け、小学生の基本、「手洗い・うがい」を済ませてから食卓にお皿を並べる。

「いただきます」

「はい、召し上がれ」

熱々のカレーライス。例のお肉を一切れ口に運ぶと、じゅわつと旨味が溢れ、舌先でほろほろと崩れるくらい柔らかい。

「はあく、美味しい。生き返る〜」

そんな私の様子を見て、お母さんはニコニコと笑っている。

「外、寒かったでしょう」

「うん、風がすごく冷たいよ。まあ、センターの中は暖房効いてるから、帰ってくる時だけなんだけどね」

ふと、正面の壁掛け時計が目に入る。六時……か。八幡たちはまだ準備やつてるのかな？　なんか疲れてたみたいだけど、大丈夫かな……。

「留美、何かあったの？　心配事？」

ちよつとだけぼうつとしていたようで、お母さんに心配されてしまった。

「……心配ってほどのことじゃ無いんだけどさ……」

「うん」

「ほら、前に話したでしょ、林間学校でお世話になった時に仲良くなった高校生のこと」

「うん、確か総武高の子たちで、みんなイケメンと美人ばかりなんだっけ？」

「そうそう。でね、そのうち一人が今回のイベントにも参加してるんだけど、なんか色々大変そうだし。……すごく疲れてるみたいだったし」

「あら、大変ねえ……。ね、それって、写真に写ってる子？」

「うん。八幡って言ってさ、あの、小町さん……妹さんに目隠しされて写ってる人」

「ああ、あの、ちよつとだけ残念なイケメン君か」

「残念で……まあ、合ってるけど」

娘の恩人にそれは酷くないですか？　お母さん……。あんまり詳しいこと言ってな

い私が悪いんだけどさ。

林間学校の写真をお母さんに見せる時、さすがに目隠しされた写真だけじゃ可哀想だと思っただので、ちゃんと何枚かは八幡の顔がはつきり写っている写真も見せた。もちろん、できるだけ目がどよんとしてないのを選んでだけど。

「そんなに心配なら、差し入れでもしてあげたら？」

「え、差し入れ？」

「ほら、この前留美が作った唐揚げもどきとかどう？ まだ、お肉も塩麴もあるわよ」

「もどきって言わないで。あれは、『揚げ焼き』って言うの！」

「どっちでもいいでしょ、あれ、美味しかったわよ」

そう、あれは確かに美味しかった。本当の揚げ物はまだ危ないから駄目と言われていくけど、深めのフライパンを傾けて作る、揚げ焼きなら、お母さんが家にいる時に限り作ることが出来る。

確かに、学校から帰って、前の日に塩麴に漬けておいたお肉を拭いて、少し多めの油で揚げ焼きすれば、十分か十五分で出来る。でも、

「センターまで持っていったら冷めちゃうじゃん。それに、本当に渡せるか分からないし……」

あれは温かいから美味しいんだしさ……。

「ふっふっふー。じゃじゃーん、こんなこともあろうかと、こういうものを用意しております」

お母さんは食器棚の奥から、大きめのマグカップみたいなのを取り出した。スクリュー式のしつかりした蓋がついている。

「これはね、スープマグっていつて、朝入れたお味噌汁とかスープが、お昼でも熱々のままで飲めるようにするものなの」

「へえ、……でも、スープ用じゃ無いの?」

「それがね、最近の若い子たちはこれにあつたかいパスタとか、リゾットとか入れて、それでお弁当にしちゃうんですって。……ね、これなら荷物にならないでしょ」

「そっか、うん。じゃあ明日やってみよう。……後でお肉漬けなきやね」

ふふ、なんだか楽しみになってきた。八幡、どんな顔するかな。

「それに、もし渡せなくても、私がちゃんと晩御飯で食べてあげるからねっ」

……お母さん……ちよつとヒドい。

「それじゃあ、これから二手に分かれてもらいます。一班はここで残ってる飾りを作ってください。もう一班はエントランスの方に降りて、クリスマスツリーの組み立てと飾りつけをしてもらいますねー」

必要な飾りがほぼ完成し、まだ作ってなくて数が多く必要なのは雪の結晶型の飾りくらいになったころ、一色会長さんからそう指示があった。

「ツリーって、大きいんですよね」

誰かがそう聞くと、

「うん、大きいよ。……ええと、」

「確か、三メートル二十センチだったと……。この講習室の、あの換気扇の高さくらい、だそうです」

一色さんの隣にいた書記さんが答える。……大きい。小学生たちが歓声を上げる。

「すごいねー」

「わたし、そつちがいい」

「俺もー。こつちちよつと飽きたし」

確かに、細かい作業ばかりでみんなもう飽きてきている。

「班分け、どうしよつか」

一色さんが私に聞いてくる。……はあ。みんな、ツリーの方に行きたいよね……。

「残り、この折り紙の雪だけだし、私やるよ。みんなはツリーの方に行つて」

私がそう言うのと、背の高い子——綾瀬さん——が、

「それじゃあ、鶴見さんだけ大変じゃん。あたしも残ろうか?」

そう言つてくれるけど、本当はツリーの方に行きたそうだ。

「大丈夫だよ、それより、ツリーの方でみんなのことお願い」

うん、この綾瀬さんもリーダータイプで、作業によつては指示を出す側に回ることも多い。私が残るなら、彼女は向こうに行つてもらつたほうが良いだろう。

「それなら、私、むこうに呼ばれるまで、ここ手伝いますよ」

書記さんがそう言つてくれて、結論が出る。一色さんは、「書記ちゃんおねがいね」と言つてみんなを連れて講習室を出ていった。

「これ、結構細かいんだねえ……」

書記さんがハサミを動かしながら言う。この飾りは雪の結晶。材料はキラキラとした光沢のある白銀色の大きめの折り紙。この裏に線が印刷されていて、その線に沿って六等分に折り、細かい線に沿って切り抜いてから再び広げると、きれいな雪の結晶の形が出来る、という物だ。この線が中々複雑で、きれいに切るには集中力が要る。

「ずっとやっていると目が疲れますよ」

「うふふ。もう疲れてきちゃった」

書記さんはそう言つて言つて一度眼鏡を外し、軽く目をマッサージする。ちようどその時、

「藤沢さくん、ちよつといい？」

総武高の生徒会の席から書記さんに声がかかった。彼女はちらつと私を見ながら立ち上がる。

「大丈夫ですから行つて下さい」

「そう、ごめんね」

そう言つて彼女は自分の席に戻つて行つた。

高校生たちの方を見ると、八幡は海浜の生徒会長さん——玉縄さんだつたつけ——と何やら話をしている。ちよつとイライラしてる、かな。とにかく忙しそうにしている。どうしよう、差し入れ渡すつて雰囲気じゃないなあ。八幡の分しか無いし。

目の前の箱にはまだ相当な枚数の白銀の折り紙。私は作業に集中することにした。

「……飾り、作つてんのか」

その声に顔を上げると、さっきまで忙しそうにしていた八幡が目の前に立っている。集中してて気が付かなかった。

「二人でやってんのか」

私の手を覗き込むようにしながら、少し心配しているような声でそう聞いてくる。

「……見ればわかるでしょ」

私が、ハサミと作りかけの飾りを持ったまま、両手を小さく万歳するように上げて微笑うと、八幡もにやつと笑い、「そりゃそーだ」とかボソボソ言いながら、私の座っている隣の椅子にどかっと座る。

そのまま見ていると、私の目の前の箱からハサミと材料を取り出し、見よう見まねで私と同じ作業を始めてしまった。

「……なにしてんの」

「見りゃわかんだろ」

ふ、そりゃそーだ。……ふふ、変なの。

「……他にやることないわけ？」

「ないんだなあ、それが」

八幡は、やっぱり少し疲れたような声でそう答えた。

「……暇人ひましん」

「ほっとけ」

二人して笑い合い、後はしばらく無言で作業に集中する。八幡と居ると、何も話さずにいても不思議に居心地が良い。波長が合うというのだろうか。家族以外の人をこんな風に感じるのは初めてかも……ううん、もう一人。一瞬だけ脳裏を泉ちゃんの顔がよぎり、胸の奥が小さく疼いた。

私と八幡は、ただ黙々とハサミを動かす。紙を切るチヨキチヨキという音だけが耳に響き、他の雑音を遠ざける。……気が付くと、完成した雪の結晶の飾りは相当な数になっていた。

ばたばたという足音が響く。一色さんが小走りにやって来て、

「あ、カッター借りていきますねー」

そう言つて、道具の箱からカッターを数本取り出す。多分エントランスの方の作業で必要になったんだらう……と、

そこで初めて、私と八幡が一緒に作業をしていたのに気付いたようで、八幡に向かつてちよいちよいと手招きしている。

八幡が一色さんの方に、なんだよという感じで体を傾けると、彼女は内緒話をするように八幡の耳の所に手を当てた。

「……先輩つてもしかして年下好きですか？」

……聴こえちゃってるし。それもなんだかスゴイ意味深な言葉が。

私を除く小学生がみんなエントランスの方に行ってしまっているためか、講習室は意外に静かだ。聞くつもりがなくてもつい声が聴こえてきてしまう……。

……嘘です。気になって気になって、作業してるふりをしながら耳がダンボになっていました。そしたらまさかの……。

ドキツとした。え、それってつまり八幡が私を……イヤそんな、……でも、ホントにそうだったらどうしよう。あ、なんだか頭がぐるぐるしてきた。

「別に苦手じゃねえな」

「!!」

八幡がさらに私を混乱させるようなことを言うので、つい我慢できずに二人の方を向いてしまった。八幡と目が合う。……八幡は、私と一色さんに一度ずつ目をむけ、フツと優しく笑い、「妹いるしな」と小さい声で独り言のように付け加える。

ふふ、そういう意味かあ。ちよつと安心した、かな……うん。もしかしたら八幡は、一色さんと私を妹みたいに思ってくれているのかもしれない。そうならそれはそれで嬉しいな、なんて考えていると、

「……もしかして今、わたしのこと口説いてますかごめんなさい年上結構好きですけど無理です」

いつの間にか八幡が一色さんに振られていた……あれ？

「いや、どう考えても違うでしょう？」

八幡はそう言って、犬にシツシツとするように手を振って一色さんを追い払う。

彼女は、「なんですかその扱い……」とか文句を言いながら、カッターを持って講習室を出ていった。

また、静かな時間。紙とハサミの音だけの時間。二人とも終始無言で、折り紙でできた雪の結晶だけが、さらさらと音をたて、目の前のダンボール箱の中に降り積もっていく。

やがて、最後の一個が完成し、カサツと音を立てて、箱の中で山になった雪の飾りの一番上に落ちた。

「これで終わりか……」

「……うん」

ふうとため息をついて、となりを見上げると八幡と目が合う。二人で笑い、小さくハイタツチ。

終わったあゝ。思ってたよりずっと時間掛かっちゃったな……。八幡が手伝ってくれなかったら今日終わんなかったかもしれない。

「八幡、あの、ありがとう」

「おう、留美もお疲れさん」

そうやって八幡は、私の頭をいい子いい子するようにさすさすと撫でてくれた。

「……あう」

う、嬉しいけど、恥ずかしい。頬が熱い。わたしの顔はきつと真つ赤だろう。

「……つと、スマン、留美」

慌てて八幡が手を引っ込める。どうやら無意識だったらしい。

「ううん、大丈夫、びつくりしただけ。その、イヤじゃない……」

「……そうか」

八幡はちよつと照れくさそうに微笑むと、今度は、ぽん、ぽんと二回、手のひらで優しく頭を包むように撫でてくれた。……はああ、八幡の手ってなんだか気持ちいい。

「ふふ。八幡もお疲れ様」

「おう。……ツリー、まだやってるだろうし、行って見たらどうだ？」

「うん……。ね、八幡、ちよつとだけ時間ある？」

「ん……。まあ、やれること無いしな」

私はバッグから巾着を引っ張り出し、八幡の手を引いて講習室を出る。

「こつち」

「お、おう、つて留美？」

私は、二階と三階を結ぶ階段の踊り場にあるベンチまで八幡を引つ張つてきた。ここなら、ほとんど誰も通らないし。……振り向くと、彼はちよつと照れたような顔をしている。

「何？」

「いや、そのな……手……」

言われて、私が八幡の手をぎゅつと握つたままなのに気付いた。

慌ててパツと手を放す。

「べ、別にこのくらい、ちよつと引つ張つてきただけでしょ」

「あーまあ、いやその……」

変な雰囲気になつてしまったので、コホンと一つ咳払い。

「八幡、そこ座つて」

そう言うのと、何故か八幡は床に正座しようとする。……何してんの？　そこ座つて

床に正座なの？

「そうじゃなくて、ベンチに」

「お、おう、そうか」

八幡がベンチに座り、私も隣に座つて巾着から例のものを取り出す。蓋をパカンと外

し、フオークを添えて彼の前に差し出す。スープマグという保温容器はちゃんと仕事をしてくれたようで、中にたっぷり詰められた唐揚げは美味しそうに湯気を立てている。

「八幡、差し入れ。良かったら食べて」

「え、これ、なんで？」

八幡はなんだか戸惑っているみたいだ。

「なんか、疲れてるみたいだったから……元気出して欲しくて。日頃のお礼？ みたいな」

「いや、お礼って……。でも、サンキユな。じゃあ、いただきます」

八幡は私が作った唐揚げ（風）を一切れ口に放り込む。少し噛んで……ちよつと驚いた顔。これは成功かな、ふふ。

「すつげえ美味い。何これ、何でこんなに柔らかいの？」

「ふふん。私が作ったんだよ、スゴイでしょう」

「マジで？ 留美、お前本当にすごいな……」

そう言いながら、八幡は二個目、三個目と唐揚げを口に運ぶ。

「ありがとう。でも、少ししか無いから、みんなには内緒ね。あ、あと、これお茶」

マグボトルに入ったお茶を渡す。八幡は一口飲んで、ふう、と一呼吸ついた。

「ねえ、少しは元気出た？」

「おう。……その、悪かったな。まさかお前にまで心配掛けるとは……」

「八幡が悪いわけじゃないでしょ。……でも、一人で頑張るって嫌いじゃないけど、さ」

「……そうだな、俺も一人でやるのが普通だが、それだけじゃ駄目かあ」

「うん、多分。ふふ」

そう、一人で出来ないことが二人なら出来ることもある。さつき八幡が私を手伝ってくれたみたいに。もちろん、そんな単純な問題ばかりじゃ無いのはわかっているけれど。

「……私も食べよ」

私はそう言つて八幡からフォークをさつと奪い、唐揚げを一つ刺してそのまま口へ。

「お、おい……」

「もう食べちゃったもんね」

「いや、そうじゃなくて……」

八幡はフォークを見て、少しだけ赤くなっている。もちろん、八幡が何を言おうとしたかなんてわかっている。だってわざとだから。……私だってちよつとは恥ずかしいし。でも、八幡の今の顔を見たら、もつともつとそんな顔を見たくなくて……。

「八幡、あーん」

私は唐揚げを一つ刺すと、フォークを八幡の口元に差し出す。

「おい……」

「早く食べちゃわないと、誰か来ちゃうかも」

「いや、だからね……」

「はーやーくー」

「あー、ったく」

八幡は、降参というように目を閉じ、口を大きく開いた。

う……、ドキドキする。目を閉じた八幡の顔はとても繊細そうで……。唐揚げを口の中に運ぶと、八幡の口がそつと、フォークを挟むように閉じる。ほんの数秒前、私の唇に触れていたフォークを……。照れくささをごまかすため、私はあえてそのフォークでもう一きれ唐揚げを食べる。……ああもう、口閉じるのドキドキするよう……。

こ、これはマズイなあ、最近、うつすらと自覚しつつあった私自身の心の中の何かが勢いを増してきた気がする……。

「ね、ねえ八幡、この唐揚げの秘密、教えてあげよっか」

八幡にフォークを返し、妙な雰囲気切り替えるため、無理やり話題を切り替える。

「いや、……うん、そうだな、是非教えてくれ、うん。」

八幡もそれに気付いて話題に乗ってきてくれた。こういうとこ、やっぱり波長があうなあって感じる。

「あのね、これは前の日にお肉を塩麴に……」

八幡と一度講習室にもどり、巾着をしまつてからエントランスに降りる。ガヤガヤと騒がしい声が聞こえてきた。ツリー自体はもう組み上がっていて、今は、何ていうんだろう、幅の広い脚立みたいなのを使つて飾り付けの真つ最中だ。

「あ、鶴見さんおつかれ。雪のやつ、終わったの？」

綾瀬さんが私に気付いて声を掛けてくれる。

「うん、総武高の人たちも手伝つてくれたから……。でも、ほんと大きいね、これ……。」
そう、組み上がったツリーは本当に大きい。さつき、大体の高さは聞いていたもの、当たり前だけどその分横に伸びる枝部分も長い。こうして全ての枝を広げた時の迫力は想像以上だ。

「……………これ、後で運ぶつて言つてたけど、エレベーターに入るの？」

私が誰ともなしに聞くと、綾瀬さんが、

「なんか、上の二段を外して、後は下の枝はロープで縛ると上に閉じるんだつて」

そんな風に答える。よくはわからないけれど、まあ、ちゃんと運べるつて事だけはわかつた、けど……………

私の隣に来た綾瀬さんがなんだか不思議そうな顔をする。すんすんと鼻を鳴らし、こう言った。

「……あれ、鶴見さん、なんだか美味しそうな匂い？」

「え、き、気のせいじゃない？」

やば、さっきの唐揚げの匂いが付いちちゃったんだ。自分ではわからないけど。

「そうかな〜 お腹すきすぎたかな？」

「うん、お腹空いたね〜」

綾瀬さん、みんな、ごめんなさい。私だけ、お腹も心もほっこりしています……。脳裏にさっきの光景が浮かぶ……八幡の唇に挟まれたフオーク……。それに……。

「……鶴見さん、やっぱり疲れてる？ 少し休んだほうがいいんじゃない、顔もちよっと赤いみたいだし……」

言われて我に返ると、私は無意識に指で自分の唇を触っていた。……。それで赤くなってるって……。やっぱり、そうなのかな……。

ふふ、でも悪い気分じゃない。まだはつきりと言葉にするには曖昧だけど、私の中で確かに育っているこの感情はきつと、とてもとても大切なものだ。

……うん、すぐに結論を出さなくてもいいや。もう少しだけ、このむず痒いような、甘酸っぱいような感覚を楽しんでおこう。

エントランス奥の時計を見ると、午後四時四十分。

「もうすぐ時間になりまーす。切りの良い所で片付けに入ってくださいーい」

私は、飾り付けをしているみんなに向かつてそう声を上げる。

「もうすぐ終わりだから大丈夫。こっち、手伝ってくれる？」

気遣ってくれた綾瀬さんに声をかけ、ツリーの下に散らばっている道具を片付け始める。

「おーけー。じゃ、さっさと終わらせて帰ろっか」

綾瀬さんは右手の親指を上げ、ニカツと格好良く笑った。

鶴見留美は聖夜に願う③ 彼女たちの絆と私の場所

コミュニティーセンターの窓の外には冬独特の澄んだ青空が広がっている。晴れて風が無いせいだろうか、日中はコートが必要なくらいの暖かさだった。中途半端な飾り付けのままでもエントランスの端に置かれている大きなクリスマスツリーは、その大きさ故にか、やけに青々として見えている。

ここに来るのは二日ぶり。昨日は他の行事でセンターのエントランスが使われていたため作業が出来なかったのだ。

私たち小学生は、ある程度人数が揃ったところでツリーの飾りつけの準備を始めた。高校生たちは、今日は先に会議があるとのことで、ドアをくぐると、私たちに挨拶だけして階段を登り二階の講習室へと向かって行く。時間割の関係だろうか、今現在来ているのは海浜総合の生徒さんたちばかりで、八幡たち総武高の面々はまだ姿を見せていない。

「どうする、もう始めちゃおっか?」

「箱だけ持ってきて準備しておいて……高い所の飾りは高校生来てくれてから、かな」

今日のようにエントランスで作業がある日は、センターの職員さんがこの場所にも暖房を入れてくれるので寒くはない。私たちは一度講習室に行って上着を置き、オーナメントや、私達自身が作った飾りの入ったダンボール箱を持って、またエントランスに戻ってくる。

「あ」

ちようど玄関口の扉から八幡が入ってくるところだった。いつものようにコンビニ袋を手下げ、隣には一色会長さん。

「はちま……」

声を掛けようとして、二人の後に続いて入って来る人影に気付いた。

「あら」

あちらは雪ノ下さんが最初に気付いたようだ。

「こんにちは。……鶴見留美さん、だったわよね」

そう言つて雪ノ下さんは微笑んだ。なんだか……夏より笑顔が優しくなったような気がする。

「はい。こんにちは。雪ノ下さん、由比ヶ浜さん」

「やつはろく、留美ちゃん。久しぶり」

私が返事をする、隣の由比ヶ浜さんも片手を大きく上げて挨拶してくれ……た？

「？ やっほ？ ろー……？」

聞き間違えかな？ 『やっほー？』、『ハロー？』

「由比ヶ浜、日本語で話せ。そんなんじや小学生に笑われるぞ」

「ヒッキーひどい。ちや、ちゃんと日本語だし！」

八幡に言われ、由比ヶ浜さんはアワアワとしながらも言い返す。……正直どう考えても日本語では無いような……。

「大丈夫よ由比ヶ浜さん」

雪ノ下さんが優しく言う。

「ゆきのん……」

「……宇宙は広いもの。あなたの挨拶を分かってくれる人たちもきつとどこかに居るはずよ」

「フオローの規模が大きすぎる!？」

……あんまり優しくなかった。……でも、本当に仲が良いんだなって事は三人のそばに立っているだけで伝わってくる。これは、夏には感じなかった、三人に漂う和やかな空気感。

「まあ、なんだ。今日からこの二人にも手伝って貰うことになったから。その、よろしくな」

八幡がそう説明し、私たちは改めて挨拶を交わす。

「あ、はい。……よろしくお願ひします」

「うん。こちらこそよろしくね」

「あの男に何かされたら、すぐに私たちに言うのよ」

「おい、そこ。世間の皆様が聞いたら誤解すんだろーが……」

そんなやりとりをしていると、一色さんが時計をみて言う。

「あ、先輩、すいません。そろそろ会議、始まるんで……」

「……おう。じゃあ行くか」

『会議』と聞いて一瞬だけ顔を曇らせた八幡が、他の三人にそう言う。

「留美ちゃんもゴメン。また後でね」

一色さんが最後にそう言い、八幡たち四人は二階への階段を登って行ってしまった。

……もう少し、八幡たちと話したかったな……。

四人の姿が見えなくなると、少し遠巻きに私たちの様子を見ていた小学生たちが一斉

に寄ってくる。

「ね、鶴見さん。今の人たち誰？ すっごいキレイな人たちだね！」

「わたし、見たことある。うちの林間学校に来てくれてた人たちだよね。……鶴見さんと知り合いだったんだあ」

「林間学校？」

「うちの学校で、夏に千葉村に行った時にさ……ボランテアで……」

「へえー、うちも千葉村行つたけど、ボランテアとか無かつたなー」

そんな雑談をしながら作業を進めていく。これだつて、あと二日もすれば終わつてしまう。今日こそイベントの内容が決まれば良いけど……。

一時間ほどして、今日の会議は終わつたらしい。高校生たちの何人かがこちらに降りてきて作業を手伝ってくれる。

少し遅れて、八幡たちも降りてきた。みんな、すごく疲れたような顔をしてはいる。けれど、八幡の顔はどこか今までは違い、俯いたまま溜息をついたりはしない。雪ノ下さん、由比ヶ浜さんと小声で言葉を交わしながら、次の何かを考えている。

「八幡、」

駆け寄つて声をかけると、

「あ、留美。悪い、俺たちこれからちよつとうちの学校行ってくるから」

「学校って、……総武に？」

「おう。ま、ちよつと相談があつてな」

そう言い、皆少し早足でセンターを出て行く。……八幡、雪ノ下さん、由比ヶ浜さん。三人が本当に自然に、横に並ぶのが当たり前のように歩いて行く後ろ姿を見ていると……何故か胸の奥がもやもやする。

何故か、なんて、理由はもう何となくわかつてる。私にとつて八幡は、林間学校の時から「特別」な人だけど、私は別に八幡の「特別」ってわけじゃないから。

八幡にとつての「特別」は、きつと雪ノ下さんと由比ヶ浜さんだ。……うん、三人のこの様子を見てれば誰にだってわかる……お互いがお互いを「特別」に想っている、三角形の閉じた世界。……そこに私なんかが入る隙間は見つけられなくて……。

ふと、隣を見ると、一色さんが前を歩く三人に、はつとさせるような切ない視線を向けているのに気が付いた。……もしかすると、私も今彼女と同じ表情をしていたのかも知らない。

一色さんは一度俯^{うつむ}き、そして再び視線を上げる。もうそこには、さっきの憂いを帯びたような表情は無い。彼女はとびきりの可愛らしい声を上げ、三人を追って駆け出して

いへ。

「せんぱうい、待つて下さーい。置いてくなんてひどいですよう」

「おう、あんまりあざとすぎて、うっかり忘れてたわ」

「あざとくないですつ。……だいたい、あざといから忘れるとか意味わかりません！」

ホント、私の扱いがひどすぎませんかあ」

「あはは。ごめんねいろはちゃん……………」

「……………」

八幡たちに追いつき、並んで歩いて行く一色さん。……ただ見送るだけの私……。

その日、結局八幡たちは、私たち小学生が帰される時間までにはセンターに戻って来なかつた。

土日の休みを挟み、月曜日。先週末までは土・日・月は、小学生の作業はお休みだったのだが、今週と来週は、コミュニティーセンターの利用が多い日曜日以外は作業が出来るようになったとの事。

私が着いた時にはもう高校生たちの会議が始まっていて、私はまだ八幡の顔も見れて

いない……。

「鶴見さくん、この星、どっち向きにしよっかー」

少しぼうつとしていたようだ。気付くと、頭の上から声がする。見上げると、綾瀬さんが手すり付きの脚立の上で、きらきらとミラーボールのように光る大きな星型の飾りを抱えている。これは、クリスマスツリーの一番上に、ペンにキャップを被せるようにして取り付ける物だ。これを取り付ければいよいよ飾り付けも完成だ。

ツリーはステージを降りた所、右端の方に置く予定だから……。

「正面から見て、一番きれいに見えるのってどの向きかな？」

近くで作業している子達に聞くと、

「こつちじゃない？」

「この向きも綺麗に見えるよ」

と、意見はバラバラ。みんなでツリーの周りをぐるぐる回って、一番左右のバランスが良く見える向きがいいと言うことになった。

私はその方向から綾瀬さんを見上げ、

「こつちが正面になるように取り付けてー」

と声を掛ける。綾瀬さんは、星を一度くるとひっくり返して表裏を確認すると、両手で慎重に星を被せていった。……少しだけ角度を調整して、ゆっくりと手を離す。

——完成。その場にいるみんなから、自然に拍手が湧き上がる。

「二度ライト当てて見ようか」

作業を手伝ってくれていたセンターの職員さんが、下から当てるタイプの投光器をセツトしてくれる。イベント本番でもこれでライトアップするらしい。

「じゃあいくよ。……スイッチ・オン！」

ワツと歓声上がる。……すごく綺麗……。私と八幡で作った雪の結晶も、キラキラと白銀色の粒のような光を反射して、折り紙とは思えないくらい……。思わず見惚れてしまった。……小学生みんなに広がる、なんとも言えない満足感。ちよつと目をうるうるさせている女の子もいる。

ずつと見ていたい位だったけど、残念ながらライトは数分で消されてしまった。八幡たち高校生にも見てほしかったな……。

私たち小学生は、ツリーが完成してちよつど区切りが良いので今日の作業は終わりにしよう、という事になった。

みんなで道具なんかの片付けをしていると、二階から総武高の書記さんが降りてくる。

「お疲れ様ー。……ツリー、すごくきれいだねえ」

「さつき、ライトアップして、もつともつとキレイだったんですよ」

誰かが言うと、彼女は、

「ほんと？ 私も見えたかったなあ」

そう言つて少し残念そうに笑う。

「あ、鶴見さんもお疲れ様。……ね、会議、ようやく決まったよ」

ホツとしたような顔をして私に言う。

「やつとですか……」

「会長と……それに雪ノ下先輩と比企谷先輩がすごく頑張ってくれてね……。具体的な

話は明日になるけど、一応、うちは演劇、海浜さんはコンサートをやることになったの」

「雪ノ下さんと、八幡……」

「……うん。あの人達、本当にすごいね。それに、由比ヶ浜先輩も。高校ごとに別れてや

るって事になった時、なんだか雰囲気悪くなっちゃったんだけど、それも由比ヶ浜先輩

がうまくまとめてくれて……。私生徒会なのに、あんまり役に立たなかつたなあ……」

「そんなこと……」

でも、やつぱりあの三人……か。そうだ、会議終わってるなら、様子見に行こうかな。

……少しだけでも何か話したいし。

帰り支度をしているみんなに「お疲れ様」と声をかけ、二階の講習室へと向かう。

「……ほんと、雰囲気最悪ですよー。このイベント無くなるかと思つたじゃないですか」

講習室のドアからそつと中を覗くと、何故か八幡と雪ノ下さんが一色さんに怒られていた。一色さんはぷくつと頬を膨らませ、眉をひそめてかなりのお怒りモードだ。

あれつ、書記さんは、「二人が頑張つたおかげで会議が終つた」みたいなこと言つてたはずなんだけどな……。

「私は、間違つたことを言つたつもりは無いけれど」

雪ノ下さんがそう言つて拗ねたように目をそらすと、一色さんはちよつと頭にきたらしく、少しだけ声を荒げる。

「正論かもしれないですけど、もつと空気を読むっていうか、こう、いろいろあるじゃないですかー」

言われた雪ノ下さんは、ちよつとだけ八幡の方を向いて、

「その男に空気を読め、なんて言つても無駄よ。部室でも文字列しか読んでいないし」

八幡からは見えなくてもいいが、少しいたずらっぽい表情でそう言う。

「生憎だが俺クラスの読書家ともなれば、きつちり行間を読むぐらいのことはする。

……だいたい、今怒られてたのお前じゃないの？」

雪ノ下さんは不思議そうに小首を傾げ、

「二色さんは、今正論だと認めたじゃない。だったら怒られる謂れは無いと思うのだけ
ど」

「あー、それぞれ、そういうところ怒られてんだよ。ちゃんと人の話聞け、話」

まるで喧嘩しているようなやりとりだけれど、その声音はとても穏やかで……。会議
が決着して、八幡がどれだけホツとしているのが伝わってくる。

「あの一、私の話聞いてますかー。二人に言ってるんですよ。二人にー」

「ま、まあまあ、丸く収まったんだし……。その、イベントも無くならなかったんだし、良
かったじゃん。ね？」

一色さんの怒りを由比ヶ浜さんがとりなし、八幡たちの方に視線を送る。すると、八
幡と雪ノ下さんは一瞬目を合わせ、すぐにぷい、と二人、反対方向にそっぽを向いてし
まった。由比ヶ浜さんはそんな二人を見て「あはは」と苦笑いしながら頬をコリコリと
搔いている……。

——私のほうが……。先、だったのにな……。——

八幡とは年齢も違うし、当たり前前だけど学校も違う。あの二人と違って、いつでも一

緒に居られるわけじゃ無いのはわかってる。……でも、このクリスマススイベントに限っては、私のほうが先に八幡と一緒に居て……。たくさん話をして、一緒に飾り作りをして、それに二人だけで私の作った鶏の揚げ焼きも食べて……。

——それでも、どこか追い詰められていたような八幡を助けたのは——
……あーあ。結局、あの二人、かあ……。

八幡も雪ノ下さんも、別に優しい言葉なんか言わないし、態度もなんだかそっけない。けれど、会話の端々で三人の間に交される暖かい視線……。そこから読み取れるのは、八幡と雪ノ下さん、由比ヶ浜さんの、お互いに対する深い信頼と優しさ。……今のやりとりを見ているだけでも三人の絆の強さが伝わってくる。

だから、これはきつと三人にとつては普通のこと。……なのに私は、「ずるい」と思ってしまう。雪ノ下さんのことも由比ヶ浜さんのことも嫌いじゃないのに、感謝だつてしてるのに、……後から参加してきて、当たり前のように八幡の隣にいる二人を、「ずるい」「羨ましい」と思ってしまう……。

やだなあ……。何より、そんなことを考えてしまう自分が本当に嫌だ。

私は彼らに声をかけるきつかけが掴めず、そのまま踵を返して講習室を後にした。

あの二人が来てから、あんまり八幡と話せてないな……。そんな事を思いながらの帰り道。風も無く、先週よりは随分と暖かいはずなのに……。クリスマス風のイルミネーションで鮮やかに彩られた街の風景は、しかしひどく寒々しく感じられた。

翌日。

私は今、講習室の隅っこで、天使の羽根、というか、翼を作っている。

工作用の白くて薄いダンボールを、翼・背中部分・翼、が繋がった形に切り抜き、翼部分に淡い青色のペンで羽根の模様を描く。それから翼部分を背中のように折り曲げ、背中部分に幅の広いゴム紐を輪のように二つ取り付け、ランドセルみたいに背中に背負えるようにして完成。

ただ、このゴム紐、針と糸で取り付ける、というのが少し面倒くさい。ホチキスや安全ピンだと、保育園児に付けさせるには怪我が心配、ということらしい。

それでまあ、そのゴム紐をつける作業は裁縫にある程度慣れていないと少し難しい、ということ、他の子の作った翼も、全部ではないけれど結構たくさん私の所へ回ってくる。結果として、私の目の前にはかなりの数の「ダンボールでできた翼」が積み上がっ

ている、という状況になってしまった。

他の子たちは天使の輪を作ったり、会場の飾り付けの足りない部分を作ったりしている。

今、高校生たちがそれぞれの高校の席に集まって細かい内容を決めているところなので、その内容次第で、その後の作業は変わってくるのだろう。

しばらく一人で作業を進めていると、総武高の方の話は終わったのか、八幡がやって来た。この前と同じように私の隣に座ると、私の作業を見ながら裁縫箱の方に手を伸ばしてきた。

ああ、やっぱり手伝ってくれるつもりなんだな……。でも、

「八幡、いい。いらない」

ふうんだ。雪ノ下さんと由比ヶ浜さんが来てから、ずっと、ずーっとべったりで、私の事なんかかまってくれなかったくせに……。

「一人でできる」

私が八幡の顔も見ずにそう言うのと、

「いや、できるつってもお前……」

だって、結構寂しかったんだから。簡単には赦^{ゆる}してあげないんだから……。

「いい」

そう言つて私は首を振る。

「……そうか、一人でできる、か」

八幡はそう言つて、がたんと椅子を引いて立ち上がった。

あ……。思わず八幡を見上げる。……言い過ぎちやつたかな、また向こうに行つちやうのかな……。引つ込みがつかない私は、何も言えないまま下を向くだけ……。

すると八幡は、ちよつと大袈裟に胸を張り、トントンと自分の胸の真ん中あたりをたたく。

「でもな、俺のほうがもつと一人でできる」

そう言つて「にいつ」と笑つた。

ふ、何かツコつけてんの？

「……なにそれ、……ばつかみたい」

わたしと八幡は顔を見合せて笑つてしまった。

もう一度座り直した八幡は、裁縫箱から針と糸を取り出す。もう、私も止めない。

二人して針仕事。意外なことに、と言つたら失礼かもしれないけれど、八幡は結構上手に縫い針を使う。ダンボールに糸を通す時も中指にはめた指ぬきを器用に使つてゐるし。男の人つて、あんまりこういう事しないものだと思つてたけど……。

ふふ。やつぱり八幡は私に優しい。……だけど、それはどこか、「外に向けた」優しさ

で、彼が雪ノ下さんや由比ヶ浜さんに見せる、遠慮のない優しさとは違っている。

優しくされるのは嬉しいけれど、同時にその優しさの違いに切なくなる。

……だって、八幡が、彼女たちと並んで歩む世界を見せつけられると、「私もそこに行きたい」という、叶うはずのない願いを抱いてしまうから……。

「八幡」

「ん？」

「……良かったね。……その、雪ノ下さんたち、来てくれて」

「おう。まあ今回は特に……あいつらには感謝してる。……それから、留美にもな」

「え、私？ 何で？」

「まあアレだ……お前と、あと平塚先生にも随分と心配かけてな。それで、色々と背中を押してもらったというか、」

「八幡……」

「その、唐揚げも旨かったしな。……だからその、あんがと、な」

そう言つて八幡は私の方に手を伸ばし、軽くクシャツとするように私の頭を撫でてくれる。

もう……。一番ずるいのは八幡だ。私、さつきまで結構本気で拗ねてたのに。この何日か、雪ノ下さんや由比ヶ浜さんのことですつともやもやしてたのに。……これだけ

で、この、八幡の手の暖かさだけで、私の中の嫌な感情がゆつくりと溶けていく。

だからいいや。「特別」じゃないかもしれないけど、でも、八幡の中には私の場所がちゃんとある……そう、触れている手の温もりが伝えてくるから。

私を撫でていた八幡の手の動きが止まる。どうしたんだろう……。八幡の方を見上げると、彼は私をじっと見て何かを考えているみたいだった。

「どうしたの、八幡？」

すると八幡は私が思ってもみななかったことを口にする。

「なあ、留美。……お前、うちの演劇出てみないか？」

鶴見留美は聖夜に願う④ 大切な友達①

『……世界中で贈り物をやり取りする人々の中で、この若い二人のような者たちが最も賢い行いをしたのです』

『こういう者こそが最高の賢者と呼ばれるのです』

『……だから、私達から彼ら若い二人に』

『そしてみなさんに、心ばかりの贈り物を』

『メリー・クリスマス』

「……で、ここで留美と、保育園の代表の子にスポット・ライトが当たるから、ここからは向こうの代表が決まってからもう一回だな。一応、流れとしてはこの後ケーキとお菓子配って、それから留美と綾瀬さんでキャンドルサービスってことになる。大体のところはいいか？」

「うん。台詞もそんなには無いし」

「あ、あたしも大丈夫です」

ここはコミュニケーションセンターの三階ホールのステージ上。八幡の言葉に、私と綾瀬さん——あやか絢香が頷く。

「後は……あ、そうそう。言いにくい台詞とか有ったら今のうちに言ってくれつき。変えられるところは書き直すからって」

「セリフは別に……ただ……」

私が少し言いよどむと、

「ん、どした？」

「別に大したことじゃ……。この話は前から知ってたけど、あらためて読んでみると……その、どこが賢者なのかなって。……何ていうか、この二人、結局ちぐはぐな事するわけでしょ。賢者って、頭いい人のことじゃないの？」

「留美もやつぱさそう思った？ 実はあたしも。……二人とも脇が甘いつていうか……とにかくリサーチが足りないっ」

絢香は両足を踏ん張り、右手の拳を握りしめて言う。……相変わらずアクションが大きいなあ。けれど背の高くスラッとした彼女がやるとそれがギャグにならず、いちいちカッコイイのだ。そういうところはちよつと羨ましい。

すると八幡は、

「ああ、それな。俺も前に気になって調べたことがあんだけど、これってキリストさんが

産まれた時にすごく貴重な贈り物をした三人の賢者の話からきてるんだと。『相手のためだけを想って自分の本当に大切なものを差し出すという行為が素晴らしい』って事なんだとさ」

「相手のためだけを想って……」

「ああ。何でもその贈り物つてのが、それぞれ当時は簡単には手に入らない、家を買えるぐらい貴重なもので、しかも、その三人の賢者たちは、幼いキリストを守るために命がけで王様の命令に背いたんだと」

「ま、だからこの『賢者』つてのは頭がいい人という意味じゃなくて……」

「せんばくいい、ちょっとこつち良いですか」

ホールの入口から、ファイルを胸にかかえた一色会長さんがぴよこりと顔を覗かせる。

八幡は言葉を切り、「悪い。じゃ、あとでな」と言つて舞台から降りていく。

「こつち単独で使える予算の事なんですけど……」

一色さんは八幡の隣にぴたつとくつついてファイルを開き、指を指して何かを説明してる。

八幡は頭をガシガシと掻きながら、

「あー、それか……。雪ノ下はなんて言ってる？」

「雪ノ下先輩と結衣先輩はケーキとクツキーの材料費の試算してます。あとは、まだ参加人数が確定して無いんで……」

小声で話を続けながら、二人は並んでホールを出ていってしまった。

「へへっ。留美、比企谷さん取られちゃったね」

つい、二人の姿を目で追ってしまっていた私の肩を後ろから捕まえて、絢香がそんな事を言う。

「べ、別に取られたとか……」

「いやー、他の男の事をそんな熱い目で見られると、夫としては妬げちゃうねえ」

絢香は全身をくねくねさせながら大げさに言い、また「へへっ」と笑う。

『夫の役』でしょ。日本語は正確に」

釣られて笑いながら私は答える。

あの、長い会議がようやく決着した日、私は八幡に、「総武高の劇に出ないか」と誘わ

れた。

『八幡は、私が出たら嬉しい?』

『……おう。まあ、留美ならその、舞台映えすると思うしな』

『……八幡がやって欲しいなら、良いけど……。でも、それって八幡が決めちゃていいの?』

そう聞くと、彼は視線を天井に向け、しばし考えると、

『……まあ、俺はプロデューサーみたいなもんだからな』

そうして、よくわからないけど、とにかく私は総武高の劇に出演することになった。

その後、上演する劇は「賢者の贈り物」に決まった。私でも知っている有名な話で、作者はO・ヘンリー。

ざっくり言うと、デラとジムという貧しい夫婦が、お互い相手へのクリスマスプレゼントを買うために、デラは自慢の美しく長い髪を、ジムは親から受け継いだ金時計を売ってしまう。ところが、デラからジムへのプレゼントは金時計のための立派なプラチナの鎖、ジムからデラへのプレゼントは美しい髪を飾るためのべっ甲の櫛で、お互いのプレゼントは用をなさなくなってしまった。という話だ。

しかし、物語はこの二人を最高の賢者であると言って締めくくる。初めてこの話を読

んだ時から少し変だなと思っていたけれど、八幡の説明で何となくだけ納得はできた。

で、その配役が……

デラ　：　私、鶴見留美

ジム　：　綾瀬絢香さん。私とは違う小学校。背が高い。カツコイイ女の子。

ヘア用品店の女主人　：　中原さん。誰もやりたがらないので手を上げてくれた。

あとは、ナレーション及び機械の操作に五人、園児の誘導に三、四人。それぞれ兼任あり。中原さんも、出番以外の時はこっちに回る。

それから、楽器が弾ける数人は海浜総合高校のミニコンサートの方に参加することになった。二曲ぐらい高校生と一緒に演奏するらしい。

『じゃ、あらためてよろしくね。綾瀬絢香だよ。そろそろ絢香って呼んでくれたら嬉しいけど』

そう言つて彼女は右手を差し出してくる。

『こっちこそよろしくお願ひします。ふふ……じゃあ、私のことも『留美』でいいよ、……
絢香』

私は絢香の手をしっかりと握った。

絢香はまず、背の高さが印象に残る女の子だ。私も小さい方じゃないけれど、立って話すと少し見上げるような感じになる。九月に測った時には161センチだったと言っていた。その後も伸びているらしい。

意思の強そうな瞳。肩より少し長めの髪を一つ縛りにして、美人だけど「かわいい」というより「かっこいい」女の子。あと、アクションがいちいち大きい。そういうところは演劇に向いてるのかも。

今日は、あの「書記さん」が劇の脚本を書き上げたというので、劇に参加する小学生みんなと、実際の流れを確認して三階のホールに来てただけ……。

「それで？ 前から気になってしょうがなかったんだけど……留美と、あの比企谷さんってどういう関係なの？」

他のみんながステージを降りて、私と二人だけになったところで絢香がそう聞いてきた。

「どうって……。前に話したことあると思うけど、夏の林間学校の時にお世話になって

……」

「ええ〜。でもさ、なんかお互い名前でも呼んでるし、最初は親戚とか、ご近所さんとかかな〜って思ったけど、そーゆうんでも無さそうだし、この間なんか頭撫でられてるし。……それに、そういう時、留美が比企谷さんを見る時の目がさ……」

「え、私の目？」

思わず聞き返すと、

「マジ？ 自覚無いの？」

絢香は、「意外」といった顔をする。

「うん。そんなに変な目、してるかな」

「変、っていうか……その、目の中にハートマークが見えるというか……」

「な…… え？」

「やっぱその、好き、なんでしょ？」

動揺している私に、何故か絢香のほうが赤くなつて聞いてくる。

……「好き」か。正直良くわからない。いや、ここまで来ればさすがに自覚はある。私は間違いなく八幡が好き。……けれど、それが、みんなが囁し立てるような恋愛的な「好き」なのかと問われるとすぐには答えが出ない。

私は、八幡からは妹みたいに思われているんだろうな、というのが何となくわかる。

でも、それが嬉しいと感じる自分もいて……。恋として好きなら、妹扱いされて嬉しいと思うだろうか。……それに、「高校生と小学生の恋愛」というのは、なんだか現実感が無いし。

「うーん。よく分かんない」

「ええー、なんで？」

「あ、もちろん嫌いなわけじゃないけど……だって、高校生と小学生だよ？」

「いいじゃん！ 高校生との大人っぽい恋とか、ちよつと憧れあるなあ」

絢香は、両手をぐーにして軽く頬に当て、わざとらしく腰を左右にくねくねさせる。

「だからさあ、留美はもつとぐいぐい行こうよお」

「絢香……面白がってるだけでしょ……」

「へへっ。やっぱわかる？」

「あのねえ……」

私が呆れた声を出すと、

「あ、ゴメン。……こういうの嫌だったらもう言わない」

絢香は、しまった、という感じで真顔になる。

「ううん。……ここだけの話にしてほしいんだけど、正直、自分でもちよつとは自覚あるよ。八幡のこと、好きなのかな、って」

「! だったら……」

「でも、八幡から見たら、多分私は妹みたいなもので……どう考えても恋愛対象にはならないと思うんだよね……」

私が小さく溜息をつく、絢香は、

「うーん……確かにすぐには……。あ、でもさ、あたしは来年は中学生じゃん。中学生と高校生なら、さ」

「ふふ。今はこの話はいいよ。まあ、自分でもホントのところ分かってないんだし。……もし良かったら、また相談乗って」

私がそう言うと、

「うん。それはもちろん」

絢香はホツとしたように頷いた。

鶴見留美は聖夜に願う⑤ 大切な友達②

絢香と二人で講習室に戻つてくると、八幡と雪ノ下さん、それと書記さんが一つの机を囲んで何か話していた。

「八幡」

ちようど私たちに背を向ける形で座っていた八幡がくるりと振り向く。すると八幡の陰に隠れていた反対側の席に……。

「……泉ちゃん……？」

大好きな友達——苦手な友達……「藤沢 泉」ちゃん……。

「あ、その……こんにちは。留美ちゃん」

意外な人物の登場にあ然としている私に対し、泉ちゃんの方は当然私がここにいることをわかつた上で来ているのだろう、少しぎこちない笑みを浮かべながらも普通に挨拶をしてくる。

「うん、こんにちは……じゃなくて、その、どうしたの？」

いきなり彼女の顔を見せられて、一瞬足がすくんだものの、どうにか気持ちを立て直

し、無理やり笑顔を作って尋ねる。

「あ、あのね……沙和子おねーちゃんに劇の背景描いてほしいって頼まれて……」

「背景？　沙和子おねーちゃん？」

「私たちから簡単に説明するわ」

雪ノ下さんが話を引き継ぐ。

『賢者の贈り物』で登場する場面は、デラたちの自宅、髪を買い取るお店、それからできれば街中の三つ。これからセットを作るのは時間的にも予算的にも現実的では無いわ」

「はい」

「幸い、このコミュニティーセンターに後方投影型のプロジェクター・スクリーンがあるというので、それをお借りすることにしたのよ」

「ごうほうとうえい……？」

絢香がよく分からない、という顔を見ると、八幡が説明してくれる。

「あー……。プロジェクターは分かるだろ？　白いスクリーンに映画みたいに映すや

っ」

「あ、はい」

「後方投影型ってのは、すごく薄いスクリーンに、左右を逆にした映像を真後ろから投影

して、その反対側から透かして見れるタイプのやつだ。これにパソコンとかデジカメとかを繋いでおけば、保存されている映像を使って次から次へと背景を切り替えられるから、今回みたいに尺が短いのに場面転換のある劇にはもってこいだ。それに、裏側から映すから演技の邪魔にもならない」

「ふうん。なんか、すごいんだね……」

私たちが感心していると、

「ただ、その背景がな……」

「出来合いの画像を使っても良かったのだけれど、せっかく手作りの劇なのだから、誰か描ける人がいればお願いしましょう、という話になったの」

雪ノ下さんはそう言って視線を書記さんと泉ちゃんに向けた。

「それで、私の従妹がものすごく絵が上手いし、描くのも速いという話をしたら、じゃあお願いしてみましようという話になったの。泉ちゃんは今回参加してる、留美ちゃんたちと同じ〇〇小学校だし、追加の参加者っていう形にしてもらって」

四人が囲んでいたテーブルに目を移すと、泉ちゃんがスケッチブックに鉛筆で簡単な部屋の絵を描いているのが見えた。それをちらっと見るだけでも、その小学生とは思えない絵のレベルの高さを感じる。所々にバツ印が付いていたり、漢字で「緑」とか「茶」とか書き込んであるのはまさに今打ち合わせをしていた内容なのだろう。

「うわあゝ 絵、すごく上手なんだね」

私の横でスケッチブックを覗き込んで目を丸くしていた絢香が泉ちゃんに声をかける。

「あ、あたし、綾瀬絢香。留美の夫のジム役だよ。よろしくね」

そう言つて右手を差し出す。

「あ、はいあの、ふ、藤沢泉、です。よろしくお願いします」

ちよつと気圧されるみたいにながらも、泉ちゃんは微笑つて絢香と握手した。

「でも、ジム役、女の子がやるんだね」

あの後、少し休憩になり、今は私・絢香・泉ちゃんの三人で話をしている。泉ちゃんがふと漏らした言葉に、

「あはは。この劇、最後のところで留美を抱きしめるシーンが有るんだよね。男子は恥ずかしがって誰もやんないの。せつかく留美とギューつてできるチャンスなのに」

絢香は何かを抱きしめるようなポーズをとつてニヤニヤ笑いながら言う。

「ちよつと絢香、変な言い方しないで。『私を』じゃなくて『テラを』でしょ」

「どっちだっておんなじじゃないん」

「違うっ。……上手く言えないけど、なんか違うからっ」

私が文句を言っても、彼女は全く平気な顔。

「そうかな。ねえ、藤沢さん。あたしがジム役じゃ変かな？」

「ううん。全然そんなこと無い。背も高いし……なんだかかっこいいし」

「え、かっこいい？ ……そう？」

泉ちゃんのストレートな言葉にちよつと照れたような顔をしていた絢香だけど、一つコホンと咳払いをすると、私たち二人に向かって斜に構え、両腕をびしつと広げるようなポーズを決め、

「ありがとう！ 泉さんにそう言ってもらえて光栄だよ！」

少し低く作ったような声でそう言った。

「！」

一瞬間まった泉ちゃんは何故か頬を染めて絢香に向かってぱちぱちと拍手。……絢香の方は右手を胸に当て、大きく礼をして応えている……何だこれ。

でも、確にかっこいい。私も、八幡に見てもらうんなら絢香に負けないように演技しないと……なんて、ふふ。やっぱり私、何かというと八幡の事考えてるなあ。

それに絢香がいると息が詰まらずに泉ちゃんと話せている。お互い同士は相変わら

ず目を合わせられないでいるけど、避けられているような空気は感じないし。

もしかしたら、泉ちゃんの方も以前のように仲良くなりたいと思っていてくれるのかもしれない、なんて都合のいい事を考えてしまう。……今だって傍から見れば多分普通に話せているのに、それでも、心の奥にある泉ちゃんに対する『怯え』のようなものがどうしても消せないでいる……。

「そういえば、泉ちゃんと書記さんが従姉妹だったっていうのはびっくりしたなー」

私は自分に笑顔を貼り付け、なるべく自然に話題を振っていく。

「ああ。うち、お父さん居ないでしょ。だから小さい頃は、お母さんに用事がある時は、お祖父ちゃんのところか、沙和子おねーちゃんの家で預かってもらってたんだ」

『お祖父ちゃん』という言葉がチクリと胸に刺さる。

少し遅れて彼女もちよつとだけ気まずそうな表情に変わる。

「あ……。あの……わたし、今日はそろそろ家に帰るね。これ、少しでも描いておきたいから」

そう言って彼女は左腕に抱えたスケッチブックをポンと叩く。

「そっかあ。じゃ仕方ないね。じゃあ、また明日、かな？」

絢香が言うど、

「あ……。あのね、わたしは毎日は無理なんだ。その、絵の塾もあるし……。でも、こ

れは家でちゃんと描くし、また来るから」

なんだか申し訳なきそうに彼女は言う。

「うん、待ってるよー。藤沢さん」

「わ、私も、待ってるから」

私たちが言うのと、

「……………うん。じゃあまたね、留美ちゃん、綾瀬さん」

泉ちゃんは、今度はぎこちなさのない笑顔で私達に手を振り帰って行った。

そのあと、劇の出演者とナレーション役みんなで、講習室の隅でセリフの読み合わせをしてその日は終了。いつもより少しだけ早い時間。

「おつかれさん。……………留美、今ちよつと良いか?」

帰り際、珍しく八幡の方から私に声をかけてきた。

「うん。どうしたの?」

彼に付いて行くと二階と三階を結ぶ階段の踊り場……………二人で揚げ焼きを食べたあの場所まで八幡は立ち止まった。そのまま振り向かずに言う。

「なあ……………留美、お前、あの藤沢の従妹となんかあんの?」

「……………!」

「ああいや、別に話したくないなら聞かん。……ただ、お前らの様子を見ててちよつと心配になったただけだ。それに俺の気のせいかもしれんし、な」

「……何で？」

「何でって、まあアレだ。ぼつちには人の苦手オーラが見えるつうか……」

八幡はこつちを振り向きながらよくわからないことを言う。

「……おい留美、何で泣いてんの？」

八幡はそう言うのと、しょうがないなあ、とでもいうように優しく頭を撫でてくれる。

泣いてる、というより涙がただ流れている。自覚が無いだけかもしれないけど、表情だつてあんまり変わって無いはずなんだけど……。

「……分かんない……」

「スマン。変なこと言ったな」

ホントに分かんない。何で私泣いてるんだろ。今日、泉ちゃんと学校にいる時よりたくさん話せたし……絢香のおかげだけど……泣くような事なものにもないはずなのに。

八幡に苦手オーラが出てるって言われたからショックだった？ それとも……。

「ねえ、八幡……そんなに変だった？」

八幡は私の頭に手を乗せたまま動きを止め、少し躊躇して、それからなんだか済まなそうに口を開く。

「これは俺の気のせいかもしれない、という前提で聞いてくれ」

「うん」

「さっきのお前らは、その、『お互いに話しにくいと思ってるのに二人とも笑って……無理に言葉を探して会話を続けている』ように見えた。俺にはな」

「そっかあ……」

分かる人には分かっちゃうんだなあ。

「ただな、」

「ただだ？」

「お互いを嫌っているようには見えなかったぞ。むしろ仲がいいのに喧嘩中、みたいな感じにも見えた。だから、よくわかんなくて、つい留美に聞いちゃったんだ。悪かったな」

「何も悪いことなんて……。あのね……。あの子が私の前にハブられてた、私とすごく仲良かった子なの。だけど色々あって……。まだなんだかギクシヤクしちやってるままなんだ」

「そっか……」

八幡はそのまま黙ってしまった。頭に触れている手の温もりが私の心に沁みていく。……それにしても、八幡は照れてもいない……。この前の事といい、彼は私のこと、「とり

あえず留美は頭撫でとけばなんとかなる」ぐらいに思ってるんじゃないだろうか。……うう、なんか悔しいけど否定できないなあ。今だつてすうつと心が落ち着いてきてるし。

「ねえ、八幡」

「ん、どした」

「私、このイベント頑張る。……それで、終わったたら、話の続き聞いてくれる？」

「おう、任せる。俺なんか力が力になれるかは分からんが……。ま、話を聞くだけならいくらでも聞いてやる」

「ふふ……うん。ありがとう。……あと、もう一つだけお願い」

「ん、なんだ」

「もう少しだけ頭撫でて」

八幡の顔を真つすぐ見て、ちゃんと笑顔でお願いする。

八幡は「フツ」と笑うと、今度はガシガシとちよつと乱暴に私の頭を撫でてくれた。

鶴見留美は聖夜に願う⑥ 大切な友達③

今日は衣装合わせの日。と言っても実際に衣装らしい衣装を着るのはデラ、ジム、髪用品店の女主人、の役の三人だけ。

小学校が違うため、センターに着く時間はバラバラで、今日は私のほうが絢香達より先みたいだった。講習室の入り口で由比ヶ浜さんと一緒になる。

「やつはろく 留美ちゃん」

「ふふ。やつはろーです。由比ヶ浜さん」

挨拶を返しつつ室内を見回すけれど、八幡は居ないようだ。由比ヶ浜さんは、

「今日は衣装合わせのやるんだっけ。エレベーターの手前の控え室だっけ。ヒツキと沙和子ちゃんはもう行ってるよ」

そう教えてくれてにっこりと微笑んだ。

「ありがとうございます。じゃあ、そっち行ってみます」

お礼を言って、そのまま同じフロアの控え室に向かう。

控え室は複数あるんだけど、一番エレベーターに近い部屋のドアが開けっ放しになっていた。部屋の中を覗き込むと、書記さんの姿は見えず、

……八幡がしゃがんで、保育園児の女の子のほっぺを右手でむにむにとつついていた……。

「あ、はーちゃん、だれかきたよ」

「ん、さーちゃん帰ってきたんじやないのか？」

八幡はそう言つて、ほっぺむにむにを続けたままこつちを振り向く。

「おう、留美か。今日は早いんだな」

「うん。……じゃなくて、八幡何やってるの？」

私に言われてようやく気付いたように女の子のほっぺをつつくのをやめる。

「いや、別にこれは……」

「あのね、じゃんけんに勝ったほうがつんつんできるの。……おねえちゃんもやる？」

女の子の方が嬉しそうに説明してくれる。あらためて見てみると、さらつさらの少し青みがかった髪を二つ縛りにした、整った顔立ちの非常に可愛い女の子だ。

「私は、その……」

「留美、紹介しとくわ。この子が保育園代表で留美たちと一緒に舞台上がってくれる

『けーちゃん』だ」

「かわさきけーか！……です」

しゅたつ、と手を上げて名乗り、あとから思い出したように「です」を付けて、にぱつと微笑う顔がかわいい。

「こんにちは。私は、鶴見留美。よろしくね」

「るみ？」

「うん。そうだよ」

「けーか？ちゃん——けーちゃんは、何かを考えるようにじいっと私の顔を見る。そしてまたにぱつと笑うと、びしっと私を指差し、

「るーちゃん」

と、得意顔で言う。

「え、『るー』？」

「ふつ、良かったな、留美。今日からお前は『るーちゃん』だ」

八幡が言うと、けーちゃんは満足気に、

「うん。はーちゃんとするーちゃん」

そう言うのとまたまたにぱつと笑う。よく笑う子だなあ……。

「なあ、るーちゃん。悪いんだが少しけーちゃんのこと見ててくれ。もう少ししたらここに衣装が届くから。俺の方も多分そんにはかからん。終わったらすぐ戻る」

「る……」。八幡までるーちゃん言わないでよ、自分だつてはーちゃんのかせに」

「大丈夫だ。けーちゃんとは話してればすぐ慣れる」

いや、それって大丈夫っていうのかな。

「まあ、とにかくちよつとだけ頼むわ。そのうち綾瀬たちも来るだろ」

「うん」

八幡が控え室を出ていくと、けーちゃんが、

「るーちゃん、じゃんけんしよう」

と言う。八幡とやってた遊びの続きって事なのかな。

「いーよ。どうやるの?」

「じゃんけんしてー、勝ったらほっぺつつんするの」

「おっけー。じゃあ……、じゃん、けん、ポン!」

最初はけーちゃんの勝ち。

「えへへ。いくよー」

けーちゃんは小さい指で私の頬をぐりぐりしてくる。痛くはないけどなんかくすぐったい。

「じゃん、けん、ポン! あいこで、しょー!」

今度は私の勝ち。けーちゃんは負けたのに嬉しそうに顔を差し出してくる。私は彼

女の頬をそつとつつく。

……うわあ〜 なにこれ。スベスベしててぶにぶにしててすっごい気持ちいい……。小さい子のほっぺってこんなにかわり心地いいの？ それともけーちゃんが特別なのかな？

あまりの気持ちよさに、つい長めに触っていると、ドアのところからスツと誰かが荷物を抱えて入ってくる。

「けーちゃんゴメン。ちよつとおそくなっちゃった……つて、あれ、アンタ、うちの妹に何してんの」

総武高の制服を着た、目つきの鋭いポニーテールの美人さんに睨まれた。え、ちよつと八幡、こんなの聞いてないよ……。

「あ、あの……」

「はあ？」

うう、こ、怖い。この人ちよつと不良っぽいし……。

「さーちゃん！」

けーちゃんは、ててつとその美人さんに駆け寄り、ぴとつとそのお腹に抱きつく。

「あのね、るーちゃんとあそんであげてたの」

けーちゃんがニコニコしているのを見て、さーちゃん？さんは表情を緩める。けー

ちゃんの頭を撫でているその表情はとても柔らかくて、ついさつきとはまるで別人のようだ。

……でもけーちゃん、私と遊んでくれてたんだ……。

ひとしきり妹の相手をして、彼女は、はっと思い立ったように顔を上げて私を見る。

「その、ごめんね。うちのが迷惑かけたみたいで」

「迷惑なんて……。けーちゃん、いい子でしたよ」

「うん！ けーちゃんいいこ！」

けーちゃんは、はいと返事をするように手を上げる。

「けーちゃん……。それで、アンタは？ 比企谷がこつちに居るって聞いたんだけど」

「あ、私は鶴見留美です。デラの役で……。八幡はすぐに戻るような事言っていました」

そう言うのと彼女はちよつとびっくりしたような顔で、

「『八幡』……。ね。ああ、アンタが由比ヶ浜の言つてた、『比企谷と仲良くし過ぎの小学生』か」

仲良くしすぎって……。由比ヶ浜さん、そんな事言ってるんだ。……。ふふ。間違つても褒められてるわけじゃないのに、不思議と悪い気はしない。

「あたしは川崎沙希。この子の姉で、比企谷と由比ヶ浜とは同じクラスだ。今回は奉仕部の連中から劇の衣装を頼まれてね。……。三人って聞いてるけど、あとの二人は？」

「もうすぐ来ると思いますが、学校が違うのではつきりとは……」

「そう。じゃあ、とりあえずデラ用のは……」

川崎さんがそう言って大きなトートバッグの口を開いたところで、絢香と中原さん、それに八幡と書記さんが入ってくる。

「留美、おまたせ〜」「遅くなりました〜」と小学生二人。

「おう、川崎。今回はサンキューな」「先輩、お疲れ様です」と、こちらは八幡と書記さん。

「ま、アンタ達には色々世話になったしね」

そう言いながら川崎さんはバッグから服を取り出していく。

「これがデラ、で、ジム、女主人、と。資料見て、雪ノ下から預かった材料でそれっぽく作ってみたけど、あくまで即席の衣装だからね。裏地もなんにも無いから、中に何か着ないと寒いしゴワゴワすると思うから、それは注意して」

「「はい」」

「それからデラにはこれも」

書記さんがそう言って取っ手の着いた少し大きめの紙袋を渡して来る。

「ウィッグ二つです。長髪と、それから髪を切った後用のショート」

それを見て川崎さんが、

「あ、じゃあそつちからやってみようか。えーと、鶴見さん？　ちよつと髪まとめるよ」
「はー」

その後、全員が衣装を着用。サイズが合わないところは仮縫いで止め、後は私用のウイッグ。まとめてピンで止めた髪の上から、ショートヘアの方をすっぽりとかぶつてみて、ずれないように数か所へアピンで留めてもらおう……完成。

「「おお〜」」

「すごい。るーちゃんじゃないみたい」

「ホントだあ。留美、明るい髪色でショートだと印象が変わるねえ」

姿見に映った私は、本当に別人みたい。髪はもちろん、衣装も『昔の外国の、粗末だけど暖かそうな冬服』にちゃんと見える。実際は表布一枚のペラペラだけど、とてもそうは見えない。ちなみに中には学校の体操服を着ている。

「ね、八幡……どうかな？」

「……ん。まあ悪く無いんじゃないの。なかなか似合ってるしな」

と、なんだか無難な感想。もうちよつと褒めてくれてもいいのに。

「比企谷さん、あたしは〜？」

「おお、綾瀬は身長あるからか、男物似合うな……なんつーか、格好いい。うん」
あれ、絢香はすごく褒められてる……なんだか面白くないなあ……。

それから、衣装を着たまま演技の中で動きが大きい所を実際にやってみて、問題がなさそうかをみんなでチェックする。特に悪い部分はなさそうなので、後は川崎さん達に衣装の仕上げをお願いして、元の服に着替え、講習室に戻る。

また、セリフの練習をして、少し休憩。ふと、資料かなにかの整理をしていたらしい八幡と目が合った。私は八幡の所に行き

「あれ、なんか用事？」

そう聞くと、八幡は周りを気にしてか小声で言う。

「いや、用があったわけじゃない。ただ、やつぱいいつもの髪の方が似合ってるなと思ってな。さつきのシヨートも良かったけど、俺はその髪型の留美のほうが好きだなと……」

「あ……う。す、好……」

ちよつと待って、いきなり何言うのよ八幡……。こんな不意打ちずるい。もう……自分か真っ赤になっているのが分かる。……びっくりしすぎてなんだかくらくらしてき

「ひ、比企谷くん……。あなた、小学生の女の子に向かって何を言ってるのかしら」

「ちよ、ヒツキー！」

「せんぱい……。いくらなんでもそれは……」

八幡は小声で言ったはずなのに、しっかりと雪ノ下さんたち三人に聞かれていたらしい。

「へ？」

八幡は、何のことだか分からない、というような顔をしていたが、

「あ、いや待て。今のは別にそういう意味じゃなくてだな、」

やっと自分が何を言ったか気付いたらしい。慌てて言い訳するも手遅れみたい。

「そういう意味じゃ無かったらどういう意味なんですかー。せんぱいのロリコン、変態っ」

「だからちがうっつの……。……」

「……………」

「……………」

そう、多分特別な意味なんてなにもない言葉。でも、私にとっては特別な言葉。胸の

ドキドキがいつまで経っても止まらない。

「るーちゃん、かお赤いよ。だいじょうぶ?」

私が一人で悶えていると、こっちで川崎さんの仕事が終わるのを待っていたけーちゃん心が心配そうに声をかけてくれた。

「ありがと。大丈夫だよ。けーちゃん」

そう答えたものの、大丈夫……じゃあないかも。でも、感情をコントロール出来ない今の自分は、変に冷静だった自分より愛おしく感じる。誰かの一言、態度一つでこうも心を揺り動かされていることが……嬉しい。

きつとこうして、少しずつこの心は育っていくんだろう。

ちなみに、絢香は後日、けーちゃんにより、「あーちゃん」の名前をもらいましたとき。

鶴見留美は聖夜に願う⑦ 直方体の世界の中で

「るーちゃん、準備オツケー？」

照明が落とされ、非常灯の明かりだけの暗い中、舞台袖の絢香が私に声をかけてくる。
「る……、はいはい。あーちゃんも？」

「うん」

そう頷いて、絢香は右手を上げて軽く左右に振り、台本片手に舞台下に立っている八幡に合図を送った。八幡は、耳元に手をやり、インカムを操作して何か指示を出すと、私の目を見て小さく頷く。その所作が妙に様になっていて、いつもよりちよつとだけかっこよく見える。ふふ、さすがはプロデューサーさん。

私も八幡に向かってこくと頷く。

『1ドルと78セント……。それで全部……』

ゆっくりとナレーションが流れ始めた……。半分だけ降ろされていた幕がゆっくりと上げられていく。私は床に座り込み、お金（おもちゃ）を数えている。まだ照明は点かない。

最初に、舞台奥のスクリーンが暖炉のある部屋の絵を映し出す。泉ちゃんによって描かれた背景は「正面に暖炉のある、小さいながらもよく手入れされた暖かな雰囲気の家」わずかに遅らせて私にスポットライトが当たる。

『でも、やつぱりリードと78セント。明日はクリスマスだというのに』
ナレーションに合わせて、私はがっくりと俯いた……。

今、コミュニティセンターの三階ホールでは、総武高側の出し物である、演劇『賢者の贈り物』のリハーサルが行われている。本番をあと三日後に控え、衣装やかつらも付け、照明なども全て本番と同じように行く。また、「通し稽古」という形で、途中でセリフを間違えたり段取りの違いがあったりしても途中で流れを止めない。

本番と違うのは、お客さんが居るかないかという事と、あとは、みんなが、さっきの匂香のように声を出して動きを確認しても良いということだけだ。だから、スタッフ役の子たちが、

「ここで照明つけます」とか「背景、お店の中が変わります」とか、本番では出せない声を出しながらお互いのタイミングを確認している。

……それにしても背景の絵、すごいなあ……。さすがは泉ちゃん、というべきか。『デ

ラたちの部屋』『繁華街』『髪用品店』、昨日訓練室のプロジェクトで初めて見せてもらった背景の絵はどれも暖かな色味で、ごちゃごちゃせずに良くそれぞれの雰囲気が出ている。こうして見ると、余計なものが入らない、という「絵」の「写真」に対しての強みがよく分かる。……しかも、場面転換の時に、数秒だけ、『マダム・ソフロニーの髪用品店、髪のことなら何でも。シャンプー、カツラ、取り揃えております』などと描かれた看板が映ったり、鍋を火にかける場面では美味しそうな料理が登場したりといふなかなか見事な演出になっている。

僅か数日でこんなに描けるなんて……やっぱ『絵』は彼女にとって特別なものなんだなあ……。

それが、ステージの大画面プロジェクトで表示されると、拡大された迫力もあつてかより雰囲気が出ていて……。いけない、気を抜くとつい背景を見てしまう。これが一番だったら主役がお客さんに背を向けっぱなしになってしまう。当日は、お母さんも見に来てくれるんだから、ちゃんと頑張らなきゃね。

衣装合わせの翌日、私達小学生に一枚ずつプリントが配られた。「クリスマスイベン

ト観覧申し込み用紙」……？

「みんな、ちゃんともらったかなー。足りなかったら手を上げてくださーい」

一色会長さんが声をかける……どうやら全員に渡ったようだ。

「じゃあ、雪ノ下先輩、お願いします」

雪ノ下さんが一歩前に出る。

「みなさん、いつもありがとうございます。……実は、何人かのご家族の方から、イベントを観たいという御要望をいただきました。ですが、このイベントは元々施設のお年寄りと保育園のためのもので、ご家族をご招待出来るだけの予算は正直ありません」

雪ノ下さんは一度言葉を切る。

「そこで昨日話し合いを持った結果、お菓子と飲み物の代金を「協力費」という形で負担していただければ、保護者の方々にも参加いただけるだろうという事になりました。幸いこのセンターのホールは十分な広さがありますし。

今、みなさんにお配りした用紙は、そのお願いと参加人数把握のためのものです。申し訳ありませんが、期日が迫っていますので、明後日までに提出をお願いします。尚、お金はこちらに書いてあるように当日受付で………」

「……………」

「ね、るーちゃんちはどうなの。イベント来れそう？」

「るーちゃんつて……。それ、そんなに気に入ったの？ 絢香」

「ノンノン。あたしの名前は『あーちゃん』よ。はい、『あーちゃん』、りぴーとあふたーみー」

絢香は、右手の人差し指を立てて左右に振り、ぱちーんとウインクをしながら言う。

「……あーちゃん……」

私が半ばため息混じりにそう言うと、

「ぐーっどー！」

絢香は親指を立てて、嬉しそうにへへつと笑う。

ついさつき、劇のあとのサプライズ？ の練習を保育園の子たちとしていた時に、私がけーちゃんから「るーちゃん」と呼ばれているのに気づいた絢香。その後、けーちゃんに何かお願いしたようで、絢香はめでたく、『あーちゃん』の称号を手に入れた！

絢香はこれが大変お気に召したようで、けーちゃんたち保育園生が帰ったあとも、誰彼構わず「るーちゃん」と呼び、呼ばれたみんなを面食らわせている。

「あーはいいい。うちは、お母さんの当日の仕事次第かな。在宅勤務の日なら来れるかも。……で、絢……あーちゃんのうちはどうなの？」

「あはは。うちは来る気満々だよ。」「イベントを観たいという御要望」って、あれ、うちも入ってるもん。……それにしても、「御要望」だつてさ、ぷぷ。そんな大袈裟なものじゃ無いんだけどね。あたしが、『コミセンでステージに立つよ』って言ったら、『え、見たい見たい』って」

何となく想像できてしまう。やっぱり絢香のご家族だなあ……。あれ、こんな風に思うのつて失礼かな？ でも、絢香だし。ふふ。

出会つて一月も経つていない彼女のことをこんな風に思える事が不思議でもあり、嬉しくもある。気に入った相手には一気に距離を詰めてくる、しかもそれを不快に感じさせない絢香の性格のおかげだろう。

このイベントに参加している小学校三校の六年生は、私立に進学する者を除いて、来年同じ公立中学校に進学する。だから、あと三ヶ月ちよつとで、もしかしたら私たちは同級生になっているかもしれない。「絢香と同級生……」そんな他愛のない事を考えるのがなんだか無性に楽しかった。

そんな事があり、その夜、家でお母さんに例のプリントを渡すと、
「イブの日の午後なら東京出勤じゃないから観に行けるよ」とのことで、お母さんもイベントを見に来てくれることになった。

ただその後、「留美がお世話になつてる八幡くん達にもご挨拶しなきゃね〜」なんて言つてたけど……聞かなかつたことにしよう、うん。

「……キャンドルサービス、ちよつと時間がかかりすぎるわね」

雪ノ下さんがストツプウォッチを見ながらそうつぶやく。

「うくん、けっこうテーブルの数増えちゃったからね〜。ヒツキー、どうしよつか?」

「話の雰囲気的に、デラとジムがばらばらに回つてわけにもいかねえだろうし……。留美、綾瀬、けーちゃんはお年寄りの席だけ回ることにして、ホールのサイドからもう一班か二班、小学生に出してもらうか。増えたテーブルは保護者席が多いんだからそのほうがいいだろ」

「じゃあ、左右の入り口に一班ずつ待機してもらいますかね〜、あ、でもそれだと……」

劇のリハーサルが終わり、今はその後のキャンドルサービスの時の動きとかを確認している。八幡たちが話してるのをぼうつと眺めながら私が小さくため息をつくど、

「留美、まだ気にしてんの? あれ、留美だけが悪いってわけじゃないでしょ」

そういつて絢香は私のおでこを指でちよんとつつく。

「うん……それはわかってるんだけど、さ」

リハーサルでちよつとしたトラブルがあった。

私が髪用品店で、『その値段で構いません。どうぞ髪を切って下さい』とセリフを言うと、一瞬舞台が暗くなり、少しの間だけ幕が下りる。そしてその後、幕の外ではジャキ、ジャキと髪を切る音が効果音として流れる。

幕が降りているのは時間にして30秒ほどで、私はその間にロングのウィッグを止めている三本のピンを抜き、女主人役の中原さんが服の中に隠しているショートカットのウィッグと取り替え、前と後ろの二箇所をピンで留めてもらい、幕が再び上がった時には髪が短くなっている、という段取りだったんだ……。――

私がロングのウィッグのピンを抜き、カツラを外そうとしたら……痛つ。ウィッグが外れない！ どうやら私自身の髪がウィッグの何処かに絡みついてしまったらしい。どうしよう、カツラを付ける前、後ろ髪のとめ方が甘かったんだ……。私と中原さん、ふたりが焦れば焦るほど手元がおぼつかなくなり……結局、流れを切らないはずのり

ハーサルを一度止めることになってしまった。

その問題は、私が髪からみ防止用のターバンみたいなものを着ける、ということで一応解決したんだけど……どうしても「迷惑をかけてしまった」という気持ちが拭いきれず、後半の演技には今ひとつ身が入らなかった。

八幡たちは、

「気にすんな。誰かが悪いわけじゃない。むしろ本番じゃなくて良かったってだけの話だ」

「そうよ、鶴見さん。こういう問題点を見つげるためのリハーサルでもあるのだし」
そんなふうに着うだけで、誰も私を責めたりしなかった。

ふと、奥で従姉である書記さんと話していた泉ちゃんと目が合う。……いつから来たんだらう。今日、リハーサルを始める時にはまだ来てなかったはずだけど……。さっきの、見てたのかな……。

泉ちゃんは私の方に来ると、心配そうな声で、

「留美ちゃん……髪、大丈夫だった？ 痛くない？」

そう聞いてくる。……ああ、やっぱり見てたんだ。かつこ悪い所みられちゃったなあ。

「泉ちゃん……。うん、大丈夫。まだここがちよつとだけヒリヒリするけど平気」

私は右耳の後ろ辺り、さつき髪が引つ張られた所をちよんと指差して笑顔を作る。

「そう、よかつたあ」

泉ちゃんは胸を撫で下ろすようにすると、少しだけ遠慮がちに、

「ね、その……。背景、実際ステージで見てどうだった？ あれで大丈夫かなあ？」

そう不安げに感想を聞いてきた。

「あ、うん！ 何ていうか、色がとってもあつたかくつて、お話にはピッタリだって思ってたよ、それに……。それに……」

あれ、なんだろう、普通に絵の感想を話そうとしてるだけなのに、なんだか胸が痛い、どんどん言葉が出てこなくなる。……なんで？ あ、なんだか涙出そう、どうしよう、なに……。これ……。

「……留美ちゃん……。？」

泉ちゃんが不安そうな顔で私の顔を覗き込もうとした時、突然、絢香に後ろからがばつと抱きつかれた。

「きゃ」

「へへっ。るーちゃんもいーちゃんも何辛気臭い顔してんの？ クリスマスイベントなんだよ？ もっと明るく盛り上がっていかないよ」

「ちよつと絢香……」

「ねえねえ、いーちゃん、留美つてばさつきのこと自分のせいだつてまだ気にしてんの。みんなそんなこと無いよつて言ってるのにさ」

違う。今のは別にさつきのことでおかしくなつたわけじゃ無い……。

「別にこれは……」

言いかけて身を振るように振り向いて絢香の顔を見上げると、とても優しく、それでいてちよつと切なそうな瞳で私の顔を見つめ、頷くように微笑つた。

あ……わざと、だ。絢香は私の泉ちゃんに対する態度がぎこちないの、ちゃんと気付いてるんだ……。だから今、無理やり割り込むみたいにして、私を助けてくれたんだ……。

絢香は私の頭を優しく、包むように撫でてくれる。

「あ、ごめ……私、ごめんねっ……」

思わず涙が溢れる。でも、私はその一雫^{しずく}だけ涙を流し、それでどうにか気持ちを踏みとどまらせた。

「へへっ、特別だよ。私は比企谷さんみたいに簡単にほいほい人の頭撫でたりしないんだからね」

絢香は冗談めかしてそう言ってくれる。……ふふ、八幡、言われてるなあ。こんな状況なのになんだか頬が緩んでしまう。

「……泉ちゃんも、なんかゴメンね」

ようやく少し落ち着いた私が謝ると、

「んーん。気にしないから大丈夫。……それであの、綾瀬さん、『いーちゃん』ってわたし?」

泉ちゃんは私に優しく言うと、それからなんだか訝しげに絢香に尋ねる。

「そう。ちなみにあたしは『あーちゃん』ね。こっちが『るーちゃん』で、比企谷さんが『はーちゃん』」

「え、え?」

絢香が得意顔で答える。泉ちゃんはますます何のことだかわからないみたいでオロオロしてる。

「あはは。あのね、保育園の代表の子、居るでしょ。彼女が自分のこと「けーちゃん」つ

て言つてて……………」

話題が変わり、いつの間にかきつきの変な胸の痛みは感じなくなっている。……もしかして私は「あの時」の自分自身の言葉を怖がっているのかもしれない。自分の言葉がもう一度彼女を傷つけることを……。

もしそうなら、きつとこのままじゃ何も進まない。元通りに心の底から笑い合うことも出来ない。……でも、じゃあどうしたら良いの？ ……答えはまだ見つからないまま。

イベント二日前、終業式の日。絢香たちは学校の行事があるので、今日は遅れるか、もしかしたら時間によっては来れないかもしれないと言っていた。

リハーサルが変なことになってしまい、後半の、特にジムとのセリフ合わせをもう一回ぐらいはしておきたいところだけれど……絢香がいないんじゃないかな。

少し時間の空いてしまった私が、あの二階と三階の間の踊り場に行くと、八幡が飲み物を片手にベンチに座ってボーっとしていた。

私に気付いた八幡は、黄色と濃い茶色の、蜂の体みたいな色の缶コーヒーをくいつと一口飲み、

「おう、留美お疲れ」

と、だるそうに片手を上げた。

「八幡もね。……サボり？」

「ばーか、今日は俺、超働いてるつつくの。……今はアレだ。千葉県民のソウルドリンクを飲んで英気を養つてるところだ」

「八幡、それ好きだよね……。甘すぎない？」

「その甘いところがいいんだろうが。……人生、色々苦いことも多いしな」

八幡は髪をかきあげ、格好をつけたように言う。……でも、苦いこと……。か。

「ね、八幡……。サボりついでに、ちよつとだけセリフ合わせに付き合ってくれない？」

「だからサボってないっての。……綾瀬たちは？」

「今日は学校の行事で遅れるって。もしかしたら来れないかもって言った。子供会がどうか」

「そうか……。ま、いいだろ。どうせなら、このまま上に登ってステージ行くか？ 今なら開いてるぞ」

「うん。……あ、でも台本私のしか……」

「いや、俺も持つてる。まあ、劇だけじゃなく、イベントの流れ全部一冊にまとめたやつ
のほうだけだな」

「そか、じゃあよろしくね、『はーちゃん』」

「あいよ、『るーちゃん』」

「で、どっからやる?」

「あ、じゃあ、あの失敗したところ。髪を切った後から」

「おう。って、ここ、あんまりセリフ無いぞ」

ホチキスで閉じてある資料の、台本の部分をパラパラめくっていた八幡が言う。

「うん。だから、八幡はナレーション読んで。それに合わせて私が動くから。で、ジムが
帰ってきたらジム役」

幕が降りたままの舞台に立つと、世界からそこだけ四角く切り離されているような不思議な錯覚を覚える。遙か頭上のライトだけが灯されており、ステージの上には何も無い。床のあちこちに様々な色のテープが貼られているだけだ。演劇、コンサートそれぞれで立ち位置や楽器を並べる位置を示すテープ。

私のテープは白。幅の広いテープをほぼ真四角にちぎって、真ん中に大きく数字が書かれている。

私はステージの隅に台本を置くと、このシーンの始めの立ち位置の番号が書かれたテープの所に立った。……八幡に向かってコクンと一つ頷いて合図を送る。

「あー『デラは、ジムの喜ぶ顔を思い浮かべながら、次々と時計店や宝石店を巡ります………』」

八幡のナレーションに合わせ、私は花から花へと渡るちようちよのように、ウキウキとした足取りで白いテープを番号順に渡り、ジムへのプレゼントを探す……。

……そして、ジムの金時計にぴったりりのプラチナの鎖を買って帰宅した後の場面へ。
ジムが帰ってきて、デラの姿を一目見ると、唾然として何も言えなくなってしまおう。
それで、デラが何を言っても、

『髪を……切っちゃったって?』とおなじような言葉を馬鹿みたいに繰り返すだけ。

私は八幡の目を下から覗き込むようにして訴える。

『お願い、ジム。私のことを嫌いにならないでちょうだい。……髪は短くなってしまったけれど、ちゃんとお洒落もしたし、いつもよりちよつとだけ上等のお肉も用意したの

よ。……それにワインだつてあるわ』

八幡は、セリフの無いところだから一応演技しとくか、みたいな感じで台本通りに首を振り、俯く。

『お願いよ……ジム。今日はクリスマス・イブなのよ……』

その今にも泣き出しそうなデラの声にハツとして、ジムはデラを抱きしめて……。

「……つて、八幡、なんでぼーつと立ったままでセリフ読もうとしてるのよ」

動かずに私のセリフを待っている八幡に文句を言う。

「え、いや別に演技とかいらんだろ、俺は。それにさすがにこのシーンはな……」

「誰も……、誰も見てない、から。……私、勇気出したいの。だから、ね……」

ちよつと大きな声で彼の言葉を遮つたものの、そのあとの言葉はどんどん尻すぼみになつてしまう……。

八幡からしたら私が言ってる事は支離滅裂だろう。……それでも、私は八幡の制服の裾のあたりを両手できゅつと掴み、すが縋るように彼の目を見上げる。

「……………」

八幡は、私の目を見て何かを感じたのだろう。しようがないとでもいう風にひとつ溜息をつくど、台本を持っていない右腕をそつと私の背中のように回し、優しく後頭部を

かかえるようにして、ほとんど力を入れずに抱き寄せた。

私の頭がぼてんと八幡の胸にくつつく……。

「八幡……」

「……『ジム?』だろ。そこは」

見れば、八幡は左手に持った台本を片手で器用に広げたままだ。

もう……ばか正直で鈍感なんだから……と、いうわけじゃないらしい。私のくつついている八幡の胸からはドクン、ドクンという大きな鼓動が伝わってくるし、顔も赤いし、声もどこか震えている。照れ隠し、なのかな。そう思っただけで八幡を見ると、なんだかカチコチに固まってる……。ふふ、少しは私のこと、女の子って意識してくれてるのかなあ。

もつとも私は八幡よりドキドキしてるし八幡より顔を赤くしてるし、八幡より声も震えてるけどね。……こんなに自分の鼓動がはつきり聞こえるのって私の記憶にある限りでは初めてじゃないかな。自分で何かの病気じゃないかと心配になるレベル。

まあ、昔から恋は病気みたいなものだって言われてるみたいだし……うん、これが恋だとしたなら、何の心配もいらぬ。むしろ心地良いドキドキでさえある。

はあ、しばらくこのままでいたいなあ。でも、演技を続けられないでいると、八幡が変に思っちゃうかもしれないから、

『ジム?』

そうセリフを言い、ジムを……八幡を見上げる。八幡は懐からプレゼントの箱を取り出し、そつとテーブルの上に置く、というふりをする。

「えと、『デラ、僕のことを勘違いしないでおくれ。髪型とか化粧とかシャンプーが変わったとか、そんなもので僕のかわいい奥さんを嫌いになつたりするもんかい。でもね、その君へのプレゼントを開けたら、さつき、しばらくの間どうして僕があんな風におかしかつたか解つてくれると思うよ』」

心臓をきゅんと締め付けられたような気がした。……せ、セリフだからつ。それに何ていうか棒読みだし。でも、そう分かつていても、この密着した体勢で『僕のかわいい奥さん』とか言われると、鼓動がさらに一段と速くなる。……「奥さん」かあ。ふふ。……このまま離れちやうのはちよつぴり残念だけれど、そうしないと話が進まない。私は八幡からすつと体を離し、プレゼントを開ける動作をし、ちよつと大袈裟に喜びの悲鳴を上げて演技を続ける……。

そうして、最後まで一通りセリフ合わせを終えると、八幡はどこかホツとしたような

表情で台本をぱたんと閉じた。

「んんつ、と。留美、お疲れさん」

両手を頭の後ろにまわすような格好で軽く伸びをしながら八幡が言う。

よし、林間学校の時のお礼を言うならきつとこのタイミングだ。さっきので勇氣も出た。今日のお礼と、そのついでに合わせて、って形なら夏の事を言ってもそんなに唐突って風にはならないと思うし……。私は意を決して真つすぐ八幡の方を向き、彼の相変わらず疲れたような横顔を見上げる。

「……八幡、その、色々ありがとう」

「どういたしましたして、だ。それに、留美には俺たちの劇に出てもらってる訳だし、どっちかって言えば礼を言わなきゃならんのは俺の方かもな」

「ううん……。私がお礼を言いたいのは、今日のことだけじゃ無いの……」

「留美？」

八幡は私の雰囲気が変わったのに気が付き、怪訝な顔をして私の正面へと向き直る。

私は……勇氣を振り絞る。今まで言えずにいたことを言うために。いつかは言わなきゃいけないことだから。

「あの、林間学校の肝試しの時の事……」

そう言っただけで、なぜか明らかに八幡の表情が少し辛そうに歪んだ。

「あの時、私を助けてくれたお礼を、ずっと……ずっと言いたかったの」

「……やっぱ、気付いてたのか……。まあ、キャンプファイヤーで写真撮ったりした時からそんな気はしてたけどな……」

「うん……。今まで言えなかったけど、私は……」

「やめとけ留美」

強く、けれど冷静な声で静止され、私は一瞬言葉を失う。私を見つめる八幡の瞳はひどく悲しそうで、何かを後悔しているようにさえ見える。

「……どうして?」

やっと、一言だけ声を絞り出すようにして尋ねると、八幡は、

「俺は留美に感謝してもらえるような事は何もしちゃいない。……俺はお前の周りの人間関係をバラバラにしようとしたんだ。むしろ恨まれても仕方ないとさえ思ってる」

そんな、私が思ってもみなかった事を口にして俯く。

「恨むだなんてそんな事……。私があの時どれだけ辛かったか、八幡たちのおかげでどれだけ楽になれたか……。だから私はっ……」

私がそう訴えると、

「まあ、そういう事も、もしかしたらあったかもしれない。……けどな、留美の感謝を受

け取るべき相手がもし居るとしたら、それは実際に体を張って損な役回りを演じてくれた葉山たち三人だ。……間違ってもあんな最低の筋書きを考え、その上悪役を他者に押し付けて、結局最後まで何もせずに見ていたような俺なんかじゃない」

八幡はきっぱりとそう言いきった。そう言う八幡のどこか悟ったような表情は、私にそれ以上の反論を許さない。だけど……だけどさ……。

「八幡……わ、私が八幡に感謝しちゃ……ダメなの？」

なんとか、それだけ言えた。……声が震えてる。自分でも半分涙声みたいになっているのが分かる。ねえ、どうして？ あの時、何か見えない檻のようなものにとらわれていた私を開放してくれたのは——間違いなく八幡なのに……。

そんな私の様子を見た八幡は、がしがしと頭を掻きながら、

「まあ、アレだ。その……『今日のお礼』って言うんなら、いくらでも感謝されてやる。実際、慣れない事やったからすっげー疲れたわ。少なくとも、俺には役者は向いてないって事はわかった」

無理やり空気を変えようとするように、ちよつとおどけた調子でそう言つて、彼は照れたようにニイつと笑つた。……良かった、怒つてるわけじゃ無さそうで私は少しホツとする。

うん。八幡が何にこだわっているのかわからないけど、今は……いいや。

私はコホンと一つ咳払い。

「じゃあさ、あらためて、……八幡、今日は練習付き合ってくれてありがとうございましたっ」

私はわざとらしく、ちよつと大袈裟にお辞儀をする。45度の最敬礼とか言うやつだ。

「おう。まあ、役に立てたならなによりだが」

そう偉そうに言つて八幡は私の頭を軽くぼんつと撫でる。……ホント、八幡は私の頭を何だと思つてるんだろう。絢香が言うとおり、気安く撫ですぎだよ……。でも、それで嬉しくなつちやう私も大概だけどね。ふふ。

それに、なんだかちよつと心が落ち着いた。まだ不安が完全になくなつたわけじゃないけど、でも、きつと大丈夫。

「うん。……じゃあ、向こうに戻ろっか」

私は、この八幡と二人だけの時間に少し名残惜しさを感じながらも、舞台の端に寄せて置いておいた台本を取りに向かう。

「なあ、留美」

八幡が背後からぼそつと声をかけてくる。

「ん？ どうしたの」

私が足を止め、上半身だけ振り向くと、

「例の葉山たちな、イベント当日来るつてさ。そう一色が言つてた。……さっきの話だけど、もしあいづらに礼を言うつもりなら、俺が話通しておこうか？」

私の方を見ないままそんな事を言った。

「……ううん。当日時間があるかも分からないし、……それにそれはちゃんと自分で言わなきゃいけない事……なんじゃないかな」

「そか。んじゃ、この話は終わりだな」

二人並んで舞台を後にする。舞台袖のパネルを操作し、八幡がステージの明かりを消した。

照明が落ちて暗く静まり返った舞台を振り返り、ほんの少しだけ立ち止まる。次にこの明かりが灯るのは、イベント本番当日、クリスマスイブの日。……開演の日は、もう目の前に迫っていた。

鶴見留美は聖夜に願う⑧ 私に聖夜に願うもの 前編

「八・幡っ!!!、盟友たる汝の檄に応え、剣・豪・将・軍っ、ここに推さ……ん……ん……?」
コミユニティーセンターのエントランス。自動ドアが開くと、いきなり大声で名乗りを上げる不審人物。何やら両肩に大きなクーラーボックスをぶら下げている。

ちようどクリスマスツリーを三階のホールに移動させるための準備をしていた、私たち小学生十数人の警戒するような視線にさらされ、彼の声は急速にしぼんでいった。

「何、あの人……」

「あ、総武の制服なんか着てる。……なんか怖い」

「ね、ケーサツ呼んだほうがいいんじゃない……」

遠巻きにしているみんながそんな事を言い始めると、総武高の制服に無理やり体を詰め込んだような小太り体型、銀縁の眼鏡をかけた彼は急にオロオロし始めた。

「いや、け、警察とかそんな……」

たまたまその時入り口の近くにいた絢香が、距離を保ったままで、

「……あのー、な、何かご用ですか?」

おっかなびつくり、という感じでそう尋ねた。

すると、

「わ、我は八幡の前世からの盟友にして劍豪……」

ボソボソと言いかけたところで、周りの視線が更に厳しくなるのを感じたらしく、彼は一度言葉を切り、口調を変えて言い直す。

「あ、その……わ、僕は比企谷くんの友達の材木座という者です。本日はイベントのお手伝いをという話ですね……」

彼の声がどンドンとしぼんでいき、聞き取れなくなりそうになったところで、

「ふう〜、疲れたあ。……あ、材木座くん、どこに運ぶかもう聞いた？」

やはり両肩でクーラーボックスを担いだ、ジャージ姿の爽やかスポーツ女子……にしか見えない戸塚さんが、自動ドアを開いてエントランスに入ってきた。

「と、戸塚氏〜」

「? どうしたの材木座くん。……って、あれ? 八幡は?」

「そ、それが……」

材木座さん? が情けない声を出す。

そこで戸塚さんが私に気付いた。

「あ、鶴見さん! 久しぶり〜。僕たち学校から、八幡に頼まれたもの運んで来たんだけ

ど……。エントランスで待つてゐるからって」

なるほど、中身はきつとケーキとクツキーの生地だ。……そういえば八幡が、昨日一日がかりで総武高の調理室で仕込みをやったとか言つてた。

ちなみに、昨日は祝日で、別のイベントがあつたためここの調理室は使えなかつたらしい。

「こんにちは、戸塚さん。……八幡なら、今隣の保育園に打ち合わせに行つてます。「そんな時間に時間かかんない」って言つてましたけど……」

私が言い終わる前にエントランスの入口が三度開き、八幡と一色会長さんが並んで入つて来た。一色さんは、八幡と二言三言言葉を交わすと、戸塚さんにペコリとお辞儀だけしてそのまま早足で二階に上がつていった。

「おお、もう着いてたか。遅くなつてスマン。……その、悪いな戸塚、こんなこと頼んじまつて」

「何言つてゐるのさ、八幡。僕から手伝いたいつて言つたんじやないか」

「まあ、な。でも、重かつただろ。……こんなの、材木座に全部持たせればいいのに」

「ひどいなあ。それに、そんな事したら僕の仕事が無くなつちゃうよ」

「何を言う！ 戸塚は俺の近くで笑つていてくれればそれでいいんだ！」

八幡は拳をぎゅつと握つて力強く宣言する。

「あはは。八幡は冗談が上手いなあ。それに大丈夫。僕、こう見えて体力あるんだよ。ちやんと運動部の部長やれてるんだから。……それにほら、腕の筋肉だつて結構有るんだからね……」

戸塚さんは八幡の手をとると、自分の二の腕の当たりを触らせて、「キラツ」という効果音が聞こえるような顔で爽やかに微笑った。

「お、おう……」

戸塚さんの腕を掴まされた八幡は、遠慮がちにその腕を揉み、何故か頬を赤くしている。

「ね、ね、留美。あの娘やばいんじゃないの？ 比企谷さん、すごいデレデレしてるよ。あつちが本命なんじゃないの？」

絢香が私の肩を掴んで揺さぶるようにしながら言う。あつちが本命って、じゃあどつちが本命じゃないのよ……。でもまあ、あれは勘違いしちゃうよね……。

「あー、大丈夫、つて言うのかな？ こういう場合。……あの人、戸塚さんというんだけど、男の子だから」

「あのね留美つ、冗談言ってる場合じゃ無いよ。もしかしたら雪ノ下さんたちより強力なライバルが……」

彼らの様子と私を交互に見ていた絢香が言葉を止めて黙り込む。

「……………マジッ?」

「……………うん」

「ええ〜、し、信じらんない。けど、言われてみれば確かに……………僕っ娘なんか現実には
そうそう居るもんじゃないし……………。でも、これって違う意味でもっとやばいんじゃ
……………」

「なんだか絢香が一人でブツブツいい出した。絢香って、たまにこう、ちよっとおかし
くなる時があるなあ……………」

「は、八幡よ」

「今まで完全に放置されていたさっきの不審人物、もとい材木座さんがようやく八幡に
声をかける。」

「ん、なんだ居たのか材木座」

「な、ひどいではないかっ。だいたいお主がエントランスで待っているなどと言うから
……………、我は今危うく通報されるどころだったのだぞ」

八幡は小首を傾げるようにして、

「話が見えん。……………留美、こいつなんかやったのか?」

そう私に聞いてくる。

「別に何かってわけじゃないけど……。入ってくるなりおつきな声で、『けんごーなんとか』って名乗ってた」

八幡は額に手を当てててがっくりすると、ゆっくり材木座さんのほうを振り返り、

「なあ、材木座」

「う、うむ」

ジトツと材木座さんを睨んで一呼吸置くと、

「馬鹿か。全部お前が悪い」

「ぐはっつ」

……とどめを刺した。

「まあ、冗談はともかく、材木座もサンキューな。これで全部か？」

「うむ、ボックス4つにどうにか収まった」

「足りない食器なんかは後で平塚先生が届けてくれるって。もし、早めに必要なら、僕がもう一回行ってくるよ」

そう戸塚さんが言うと、

「……いや、うちの演劇は後半だし、食器を使うのは最後の最後だ。先生もイベント開始

前には来るって言ってたんだから大丈夫だろ」

そう言って八幡は、戸塚さんと材木座さんが持ってきたクーラーボックスを一個ずつ両肩にかけ、

「じゃあ、二人とも調理室まで頼むわ。ついて来てくれ」

そう言って、二人を連れてエレベーターに向かつて行った。

私たちもクリスマスツリー移動の準備を再開する。一度、ツリーの上から三分の一あたりにあるジョイント部分を外し、二つの部分に分けてエレベーターに乗せるのだが、その作業にじやまになる飾りは一度取り外し、また三階のホールにツリーを設置してからもう一回飾り付ける、という流れになる。

今回のイベントの準備を進めていく中で、私たち小学生が中心になって作り、いつもこのエントランスにあったツリー。それが今日で見納めになる……。

八幡と私で作った雪の結晶の飾りもいくつか外す。そうして、後はホールに運ばれるのを待つばかりとなった。

一部だけ飾りを外された、大きな大きなクリスマスツリーは、枝を垂らしてどこか寂しそうに見えた。

時刻は一時五十三分。

午後の一時にイベントが始まり、もうすぐ一時間が経つ。海浜高のコンサートは二部構成で、前半は海浜高プラスバンド部と小学生（音楽チーム）のジョイント演奏。話題のコマーシャルの曲や、流行りのドラマの主題歌などを織り交ぜた、みんなが楽しめるようによく考えられた曲ばかりだった。

そして今は後半、プロの弦楽四重奏カルテットによるミニコンサートが行われており、最後の曲が演奏されているところだ。

バイオリンの音色が長くたなびくように響き、余韻を残して曲が終わる。四人の奏者が立ち上がり、そろって会場に向かって一礼をすると、会場からは割れんばかりの拍手。さすがに、プロの演奏は迫力があつた。

こんなすごい人達が、忙しい時期にも関わらずこのイベントに出演してくれたのは、なんでも、メンバーのうちの一人が海浜高のOB、正確には、海浜総合高校が三校から統合される前の、その内の一つの高校のOBだからだという話だ。

これで、間もなく海浜高校側のミニコンサートは終わりを迎え、休憩を挟んで、いよいよ総武高の演劇、『賢者の贈り物』の幕が上がる。

さつきまで海浜高のバンドと一緒に演奏していた、私たちの中で「音楽班」とか「音楽チーム」とか呼ばれている子たちも、もう自分たちのテーブルに戻ってきていた。彼らは一様にホツとしたような、けれどとても満足気な表情を浮かべている。

……私たち「演劇チーム」も、舞台が終わったらいこういう顔で笑えるように頑張ろう。そして……私は客席最後列右奥のテーブルを見る。そこには、葉山さん・三浦さん・戸部さん・海老名さん……と、知らない男子生徒が二人。すぐ隣のテーブルには、けーちゃんのお姉さんと戸塚さん達が座っている。そういえば、八幡が同じクラスだとか言ってたっけ。

うん。劇が無事に終わったら……。私は、願掛けをするような気持ちである決意を固め、未だアンコールを求める拍手が続く中、劇の準備のためにそっと席から立ち上がった。

『二十ドルだね。それで良ければ買わせてもらおうよ』

女主人役の中原さんがデラの髪を一撫でして言った。

……デラが髪を売る場面。『賢者の贈り物』の舞台は今のところ順調に進んできてい

る。——でも、ここからだ。

『その値段で構いません。どうぞ髪を切って下さい』

私がそう言うと、スツと舞台の照明が落ち、幕が降りる。リハーサルで私が失敗した場面……今度は大丈夫、と思っただけでも全員に緊張が走るのを感じる。

舞台上では幕から光がもれないように小さな明かりが灯され、会場には髪を切る音の演出が流されている。

——一本、二本、三本——髪留めのピンを全て抜き、ロングのウィッグを外す………。今度はきれいに外れた！

シヨートカットのウィッグは、幕が降りると同時に舞台袖から飛び出した絢香が持つてきてくれている。それを素早くかぶり向きを微調整。前のピンは中原さんが、後ろは絢香が留めてくれた。……そしてロングの方のウィッグを抱えた絢香が急いで舞台袖に引つ込む……。時間は？

舞台袖の八幡がこちらに両手を突き出し、九、八、七……と指を折りながら「よし！」と私たちに合図を送るように深く頷く。彼に右手のVサインで合図を返した私は、中原さんと顔を見合わせて笑みを浮かべ、音を立てないようにちよんと小さくハイタッチ。

また一度照明が消され、スルスルと何事もなかったかのように幕が上がる。

『どうだい、短い髪もなかなか似合ってるじゃないかね』

女主人のセリフに一拍遅らせて、私にピンスポットが当たると、会場が大きくざわめく……。反応は上々、やった……大成功だ。

『ほら、約束のお金だよ』

デラは女主人からお金を受け取って礼を言うと、ジムへのプレゼントを探しに街へ飛び出していく……。

舞台は進み、場面はデラがジムの帰りを待っているところへ。

デラである私は姿見の前に立ち、短くなってしまった髪をいじりながら、

『ずいぶんみすばらしくなっちゃったわね。……ジム、怒ったりしないかしら?』

そう言って大きなため息をつく。

『デラは、ジムが彼女の事を嫌いになっちゃってしまつたらどうしよう。と、どんどん不安になってきてしまいました。だって、ジムはいつも、彼女の流れるように美しい髪をとても褒めてくれて、一番の自慢のように言ってくれていたんですから』

ナレーションの後、カラン、とドアベルが揺れる音がしてジムが仕事から帰ってくる。

『ただいま。デラ、ねえこれを……』

少し興奮気味に早足で入ってきた「ジム」絢香は、デラの顔を見るなりシヨックで固まってしまった。……何かを取り出そうとするように懐に手を入れたままで。

『おかえりなさい、あなた。今、お鍋を火に掛けるから、少し座って待っていて』

そう言っても絢香は目を見開いたままピクリとも動かない。……そういえば、彼女は、この「動かない」演技が一番きついつて言ってた。

『そんな顔しないで。……髪は、切って、売っちゃったの』

『髪を……切っちゃったって?』

ようやく口を開いたジムは、

『そうよ、だって、どうしてもあなたにプレゼントをしたかったんだもの』

『……髪を……切った……』

絢香は、まるで魂が抜けた人形みたいにおなじような言葉を繰り返す。

私は絢香の目を下から覗き込むようにして訴える。

『お願い、ジム。私のことを嫌いにならないでちょうだい。……髪は短くなっちゃったけれど、ちゃんとお洒落もしたし、いつもよりちよつとだけ上等のお肉も用意したのよ。……それにワインだってあるわ』

絢香は、信じられないとでも言うように首を振り、がっくりと俯く。

『お願いよ……ジム。今日はクリスマス・イブなのよ……』

その今にも泣き出しそうなデラの声にハツとして、ジムはデラをぎゅつと抱きしめる。

絢香の肩にもたれかかり、抱きしめてくる彼女の背に私も腕をまわす。

やっぱり、背が高いって言っても、八幡とはずいぶん肩の高さが違うんだな。それになんだか絢香は少し甘い匂いがする。こんな時なのに、練習の時の八幡の胸の暖かさと鼓動を思い出してなんだかドキドキしてきちゃった。

絢香の肩越しに舞台袖の八幡とたまたま目が合ってしまった。彼はなんだかちよつとバツが悪そうにぶいと目をそらす。ふふ……って、いけない。集中、集中。

『ジム?』

おそらく赤くなってしまうているだろう顔でそうセリフを言い、ジムを……絢香の目を見上げる。彼女はそれを見てさらにきつく私を抱きしめる……ちよつときつ過ぎ、絢香痛いつてば。

彼女は片方の手を緩めると、懐からプレゼントの箱を取り出し、そつとテーブルの上に置いた。

『デラ、僕のことを勘違いしないでおくれ。髪型とか化粧とかシャンプーが変わったとか、そんなもので僕のかわいい奥さんを嫌いになつたりするもんかい。でもね、その君へのプレゼントを開けたら、さつき、しばらくの間どうして僕があんな風におか

しかったか解ってくれると思うよ』

ふふ。絢香って演技上手いなあ……八幡の棒読みとは大違い。デラのことを好きって心がすごく伝わってくる。

私はプレゼントの包みを開く。

『そこには、素晴らしい物が入っていました。もう半年も前にブロードウェイのお店で見つけてからずっと、素敵だなあ、綺麗だなあと思って、店の前を通る度に眺めていた、高価なべつ甲の飾り櫛のセットだったのです。きっとデラの美しい髪によく似合うことでしょう』

『これって……なんて素敵なの!! 私、すぐに……』

そう言っつて私は後頭部に手を回し……啞然としたように動きを止める。

『そこでデラは気付いたのです、その高価で素敵なお櫛が飾るはずだった、自慢の美しい髪がもうそこにはないことを』

『ああ……なんてことなの……』

ナレーションに続き、私はがっくりと項垂れてそのまま座り込む。

『デラ……』

絢香ジムが、座り込んでいる私の肩に背後から両手をのせる。私はのろのろと立ち上がり、櫛を胸にいただいたまま、ジムに向き直って気丈に言う。

『ねえ、聞いてジム。……私の髪はとっても早く伸びるのよ!!』

ここに、「ドヤ顔で」って書いてあったのを思い出して、つい笑いそうになってしまった……………」。

『…………世界中で贈り物をやり取りする人々の中で、この若い二人のような者たちが最も賢い行いをしたのです』

…………そして、物語は終りを迎える。私が鍋を火にかけると、スクリーンには美味しそうな肉料理の絵が映し出され、それから舞台もスクリーンもゆつくりとフェードアウトするように真つ暗になっていく。

ナレーションが続ける。

『こういう者がこそが最高の賢者と呼ばれるのです』

『…………だから、私達から彼ら若い二人に』

『そしてみなさんに、心ばかりの贈り物を』

『『メリー・クリスマス』』

劇の間消されていたクリスマスツリーのライトアップ照明が灯され、暗いホールの中でキラキラと煌く。雪の結晶が綺麗に光っているのを見るとなんだか嬉しくなった。

次に、舞台袖に一筋のスポットライトが当たる。小さな小さなホールケーキの載ったお皿を抱えた可愛らしい天使姿のけーちゃんが、てててと舞台中央に進み出て、ライトもそれを追いかける。

彼女は、

『めりー・くりすまゝす』

と、元気な声で言い、にこばつ、とどびつきりの笑顔。

その声に合わせてホールの照明が点き、

「「メリー・クリスマゝす」」

八幡と副会長さんがホール横の扉を開くと、ケーキのお皿を胸に抱えた大勢の小さな天使たちが一斉に入ってきて、お年寄りにケーキを配っていく。その可愛らしさにお年寄りたちはもうメロメロだ。

園児たちの後ろから、沢山のケーキやクッキーの小皿、それからガラス製の、花の形をした文鎮のような物が載せられたワゴンがいくつか、小学生と書記さんたちに押されてゆつくりと入ってくる。ちなみにこちらのケーキはきれいにカットされたショートケーキだ。

可愛い天使ちゃんたちは、自分の持つていた分のケーキを配り終わるとワゴンの所にもどり、まだ配っていないお年寄りへ、会場奥の家族や高校生たちの席へ、それから自分たちの席へも、次から次へとケーキやお菓子を届けていく。そのちよこちよこと可愛い姿に、会場は何とも言えない幸せな空気に包まれた。

その間に、サンタ帽子をかぶった小学生たちが、ガラスのオブジェをテーブル一つに一つずつセットしていく。

私と絢香と、それからけーちゃんは、舞台が暗転している間に私たちのすぐ横に置かれたテーブルにケーキをのせると、舞台横の階段を降り、キャンドルサービスの準備をする。私と絢香は、銀のトーチ——に見立てた、アルミ箔できれいに巻いた着火マ——を二人で手をつなぐ用にして持ち、けーちゃんは緑・赤・白のクリスマススカラーの紙紐で編まれた可愛いカゴをちよこんと腕にかけた。このカゴの中には金銀ラメ入りの、ドリルみたいな形の、いわゆるクリスマスキャンドルが何本も入っている。

……雪ノ下さんは、保育園の子たちが転んだりした時のことを心配して、ケーキ等はだいたい余分に作っていたみたいだった。実際、練習の時は張り切りすぎて転んだ子も居ただけけど……。うん。どうやら本番では何事もなく無事にケーキやお菓子を配り終えることが出来たようだ。少しホッとす。

私の視界の端にいた八幡がインカムに何か言うのと、ホール全体の明かりが絞られ、しだけ暗くなった。

「るーちゃん、けーちゃん、行こう」

絢香が小さな声でそう言つて一つウインク。

「うん」

私たちはゆつくりとお年寄りたちのテーブルを回り始めた。

まず、私たちの前を歩くけーちゃんが、カゴからキャンドルを一本ずつ取り出し、『めりり・くりすます』と言いながら、例のガラスのオブジェに開いている穴に差し込んでいく。そう、これはキャンドルスタンド。実は、このスタンドもキャンドルもカゴも、ついでに着火○ンも、ダ○ソーで全部百円。だけど、こう演出されると不思議に豪華なものに見える。

絢香と私は、けーちゃんのセットしたキャンドルに、結婚式の新郎新婦のように二人で一緒に銀のトーチもどきを持ち、やはり『メリー・クリスマス』と声をかけながら順番に火を灯していく。キャンドルに火が灯るとお年寄りたちは本当に嬉しそうに喜んでくれた。

一方、ホールの、ステージから離れたテーブルでは、サンタ帽子をかぶった小学生ス

タツフたちと保育園の天使たちが私たちと同じようにキャンドルをセツトし、順番に火を点けていった……。

そして、全てのキャンドルに火が灯され、私たち三人は再び舞台の上へ。けーちゃんが先程のテーブルの上に置いてある、これ一つだけ取っ手のあるガラスのキャンドルスタンドにろうそくをセツトし、それを掲げるように持って私と絢香の方を向く。

私たちがそうつと火をつけると、微かに揺れる炎を見て、けーちゃんは「えへへっ」と笑い、小さい——けれど眩い光を放つキャンドルをそつとケーキの横に置いた。

その瞬間、ホールの照明はさらに暗くなり、沢山の炎が幻想的に揺らめく……。

そして数秒の間を置き、はつとさせられる程きれいに通る声がホールに響く。一度聞いたら強く印象に残る、雪ノ下さんの涼やかな声。

『大切な人のことを心から思うことが出来る者こそが本当の賢者。……あなたの大切な人は、誰ですか？ ……ここにいらっしやる全ての賢者のみなさんに、メリー・クリスマス』

彼女の凜と透き通った声が、言葉が、みんなの心に染みていく。

メッセージが終わると同時に会場が明るくなり、スピーカーからは「ジングル・ベル」

が流れ出す。

私たちは、けーちゃんを真ん中にして三人で手をつなぎ、深々と客席に向かってお辞儀をする。

ワツと、会場からは大きな歓声と沢山の拍手。さっきの、プロの音楽家の人たちにも負けないくらいの拍手をもらえている。

左の舞台袖から中原さんとサンタ帽小学生チーム、右の舞台袖から園児の天使ちゃんたちが舞台上がってきて、みんなで手をつなぎもう一度深く一礼。……再び会場から大きな拍手が巻き起こる。

—— あなたの大切な人は、誰ですか？ ——

歓声と拍手とクリスマスソングに包まれながら、私はさっきの雪ノ下さんの言葉を思いついて返していた。……大切な……人。

—— 後ろの方のテーブルから大きな拍手を送ってくれているお母さん。

—— 今、一緒に舞台上に立ち、一緒に笑ってくれる絢香。

—— なんだか泣きながら拍手してくれてる泉ちゃん……。

—— お年寄りたちに忙しそうにお茶を注いで回っている八幡。……つて、そこは私の方を見て、よくやったって頷いてくれるところじゃないの？……ふふ。

つい、その四人にちらちらと目が行ってしまふ……。こんな風に、すぐ近くに大切な人が居ると思える自分はきつととても幸せなのだろう。だけど……。

うん……。泉ちゃんのこととは……。大好きなのに、前と同じように笑いたいの……。いつかは元通りに自然に笑える日がくるのかなあ——もう、半年も経つちやつたよ。ホント、自分の臆病さが嫌になる。

それに、八幡とは——そか、このイベントが終わつちやつたら、もう当たり前みたいには会えなくなつちやうのか。……。やだなあ。終わりたいくないなあ……。
だつたら——だつたら、私は……。

そうして、ゆつくりとステージの幕は下りていった。

鶴見留美は聖夜に願う⑨ 私が聖夜に願うもの 後編

『以上で、海浜総合高校・総武高校合同クリスマスイベントのステージは終了となります。まだお時間はございますので、総武高校が誇るパティシエのケーキとお菓子をお供に、ごゆるりとご歓談下さい。』

尚、施設の都合上、会場の使用は午後四時までとさせていただきますので、ご協力をよろしくお願いします』

ふ、すぐくしつかりした挨拶だったのに、最後だけなんだか一色さんっぽい……。それにパティシエって。

無事に舞台を終え、控え室に降りて衣装から私服に着替えた私たちは、そこでお母さん達と少しだけ話をする事ができた。

「ほんと、かっこよかったわよ。留美」

「ふふ、ありがとうございます」

「あの、髪を切ったところってどういふふうにやったの？」

「それはね……………」

そんな事を話していたら、お母さんが、

「あ、そういえば、さつき八幡くんたちに挨拶してきたわよ」

突然とんでもない事を言い出す。

「なっ…………。何してんのっ？ 変なこと言つてない？」

私が詰め寄るようにしてそう聞くと、お母さんは、えへらえへらと笑つて、

「大丈夫よお。ただ、留美がお世話になってますっただけ」

「そう…………なら、いいけどさ」

ほんとかなあ…………なんだかニヤニヤしてるみたいなのが気になるけど。

その後、私たちはホールの自分たちのテーブルに戻り、雪ノ下さんたちがここの調理室で仕上げたというケーキとクッキー、それになんだか高級そうな紅茶で優雅なおやつタイムを過ごしている。

「いやー、でもさ留美、このケーキほんと美味しいよね。…………雪ノ下さんって、マジで何者？ あんだけ美人で仕事もできて、こんなケーキも作っちゃうとか…………」

絢香の感想はもつともだと思ふ。こんな完璧超人が身近にいるなんて信じられない

くらいだ。何でも出来るっていうのはうちのクラスの森ちゃんなんかもそうなんだけど、雪ノ下さんは何でも「完璧に」出来る。

このケーキだって、普通のいちごのショートケーキだからこそ余計に質の高さがはっきりと分かる。こんなに美味しいの、お店でだって食べたこと無い。

八幡もなんだか彼女には弱いんだよね……。雪ノ下さんって、弱点とか無いのかな？

「……はい、どうぞで」

「ありがとうね」

「いえいえ、そちらも、お茶のおかわりいかがですか？」

制服に洒落たエプロンを着けた給仕係が、優雅にお年寄りのカップにお茶を注いでいく。その正体は……。

玉縄さん……ギャルソン姿が妙にさまになってるなあ。相変わらずアクション大きいけど、かえってそれがよく似合う。

いま、お年寄りや家族のお茶くみなどを担当しているのは、海浜高の高校生たち。数人ずつが交代でホールを担当しているようだ。ケーキやクッキーの準備は総武高校側が主体で行ったので、こっちは逆に海浜高が中心で、ということらしい。

そんな様子を眺めながら、私がテーブルを立つタイミングを図っていると、

「留美ちゃん、お疲れ様ー」

「小町さん!?!」

まさかの小町さん。いつ来たんだろう。劇の時には分からなかったけど……。

絢香が「ね、留美、誰？」と肘をつつきながら小声で聞いてくる。

「あ、八幡……さんの妹さんで、小町さん。こっちはジム役の綾瀬絢香さん。小学校は違うけど、友達です」

「こんにちはー」

「へへー、こんにちは。モニター越しで、作業しながらしか見れなかったけど、劇、すごく良かったよー。後でもう一回家でゆっくり見せてもらおうねっ」

小町さんはそう言うけど……

「え、モニター？ カメラなんて……」

私がキョロキョロとあたりを見回すと、

「ん？ ちゆうにさんが撮ってるよ、ほら、あそこ。さつき、ちゃんとケーキとお菓子も届けてきたよ」

そう言つて小町さんは、ホールの後方、天井からせり出しているガラス張りの部屋を指差す。確か、コントロールルームとか制御室とかいう部屋。劇の時の照明とか、背景

のプロジェクトや効果音もここで操作してははず。

「あ、ホントだ」

ガラスの向こうが薄暗くて少し見づらいけど、よく見ればその中で材木座さんが大きなカメラを操作しているのが見える。他にも何人かいるみたい。……そういえば、戸塚さんたちのテーブルに居なかつたな。すっかり忘れてた。

「雪乃さんたちと、その映像見ながらタイミング見てケーキのカットしたりしてたんだ」
「そうだったんですか……でも、小町さん、受験だから来れないかもってのはちま……お兄さんが」

「ふふっ、いいよ、あんなの、『はちまん』で」

「でも……」

さすがに本人がいない時に小町さんの前ではなんだか呼びにくい。絢香だけならもう平気なんだけど。

「まあなんでもいいけどさ。……お兄ちゃんには、息抜きに来れたらおいでって言われてたんだ。だから、今日の雪乃さんのお手伝いだけ。……ホントはもつと手伝えたら良かったんだけどね」

「そんな……でも、今日会えて嬉しいです。……そうだ、なかなか言えないから……受験、がんばってくださいね」

「うん。だから、今日はもう、これ食べたたら帰ってまた勉強するよ。留美ちゃんたちは打ち上げ出られるの?」

「あ、はい、一応。絢香も行くって言ってるから……」

「ええ〜、るーちゃんはある、あたしが行かなくてもはーちゃんが行けばホイホイ付いて行くんじゃないの〜?」

「んん? はーちゃん?」

「ちよつと絢香!! な、なんでも無いです」

そう言っつて私は絢香を睨むけど、彼女はべろつと舌を出して平気な顔……もう。

「じゃあ、私はそろそろ帰るねー」

「はい、また今度」

小町さんが席を立ち、八幡たちが座ってる席に向かったの、私もひと呼吸置いて立ち上がる。

「留美、どしたの?」

「あ、ちよつとだけ知り合いに挨拶してくる」

絢香の質問にそれだけ答え、私はホール一番奥の席へ向かった。

総武高生のテーブルのうちの一つ。私は少しだけ離れたところで一度立ち止まり、ゆつくりと深呼吸。それから真つすぐ前を向いて進む。……私を変えるために、私が変

わるための一歩として。

私が彼らの席に近付くと、最初に葉山さんが気づき、ちよつとだけ怪訝な顔をする。

「ん？ 隼人？……つて、アンタ……」

三浦さんも気が付き、さすがにちよつと驚いた顔をする。

「こんにちは、あ、あの……」

勇気を出してここまで来たはいいけど、どうしよう。いきなりお礼を言うのつてさすがに変だよね……。周りがみんな注目してくるのでさらに話しにくい……。

すると海老名さんが、

「ね、大岡くん、大和くん、飲み物取りに行きたいんだけど、ちよつと付き合ってくんない？」

立ち上がったて、私の知らない二人にそう声をかけた。

「え、でも、」

二人はちらつと戸部さんを見る。その戸部さんは、葉山さんと一瞬目を合わせると、「あー、わりいけど、俺の分も頼むわー」

そう言つて拝むように両手を合わせる。

二人は、ちらつと私を見てそれから葉山さんの方を向く。葉山さんが小さく頷くと、

「うし。じゃあ、ゆっくり行ってくるか」

大和さん？　の方が言い、海老名さんと三人で席を外してくれた。

テーブルに残ったのは、私の他に、葉山さん、三浦さん、戸部さん……あの肝試しの夜に、私たちを囲んだ人たち。……もちろん、あれは演技だったんだつてもう解つてるんだけど……それでもさすがに緊張はする。……でも。

「……林間学校の時、その……私のために嫌な思いさせてごめんなさい。……いろいろありがとうございますございました」

私は一息にそう言っ頭を下げる。

三人は顔を見合わせてはいるけど、特に驚いてるといふ様子がない。予想してた……のかな。

「……あーしらは、別に。あーゆーのムカついて、勝手にやっただけだし、……それに嫌な思いしたのって、アンタもでしょ」

三浦さんはケータイを弄りながら独り言みたいに言った。

「……それでも……」もう一感謝の言葉を口にしようとするど、

「感謝とかいーから。それでさ……あのあと……　どうなん？　その、ハブリとか？」

三浦さんがちらちらとこちらの様子を気にしながら聞いてくる。

「あ、はい。その……みなさんのおかげで、クラスからそういうの、無くなりました。

……まだちよつとだけギクシヤクはしてるけど、でも……大丈夫です」

「そ。……なら、良かったじゃん」

彼女は横を向いたままそう言つて「フツ」となんだか楽しそうに笑つた。

「そーだべ。まー、なんつーの。前より良くなつたんならオツケー、みたいな」

戸部さんが、親指をたてて言う。

葉山さんはそんな二人に目をやると、

「二人もこう言つてるし、こつちは気にしてないよ」

そう言つて爽やかに微笑つた。

「ほんとに、ありがとうございました」

私はホツとしながらもう一度お礼を言つた。

すると葉山さんが小声で、

「あと……これは黙つてろつて言われてたんだが……」

「……」

「さつき比企谷が俺に声をかけてきてね。何かと思つたら、『もし林間学校の時の子が俺達の所に来たら、何も言わずに話を聞いてやってほしい』と、そう言つて頭を下げてきたんだ。……あいつが俺に頭を下げるなんて意外でね……。ずいぶん君のことを心配してるみたいだよ」

八幡……。鼻腔の奥がツンとして目頭が熱くなる。……ちゃんと自分で言うって言ったのに……。ばか。……。でも……。ありがと……。

両手で口元を抑える私を見て、葉山さんは、
「比企谷には内緒な」

口元に人差し指を立て、そう言って笑った。

そして私は、心が暖かくなって自分の席に戻った……。……はずなんだけど。
何故か私はまた葉山さんたちのグループのテーブルに戻ってきている。

私が自分の席に戻ると、

「ね、留美。あのイケメン集団と知り合い？」

「あ、うん、あの人達も林間学校で……」

「なにそれ……。その、林間学校の時のメンバーって顔で選んだの？ 雪ノ下さんとか
由比ヶ浜さんもそうなんでしょ」

「うん……。あ、あと、戸塚さんと、それから小町さんも」

「……ちなみにあの材木さんは？」

「い、居なかった」

名前間違ってるけどね……。

「ふむ、ますます顔で選んだ疑惑が……ってまあそれはいいや」

「いいの？」

「うん、それよりあたし達のことも紹介してよ」

絢香がガシツと私の手を掴んで揺さぶる。

「あ、じゃあ私も」

「それなら俺も」

中原さんやほかのみんなまでノリで騒ぎ出す。

「え、やだよ、紹介とか……」

だって、さっきみたいな話をした後にもう一回って……なんだか恥ずかしいし。

「えー、留美には比企谷さんがいるんだからいーじゃん。独り占めはんたうい」

「別にそんなんじゃない……」

「特にあの、髪長のおねーさんとお話してみたい」

え、三浦さん？ そっちなの？ 葉山さんじゃなくて？

「へへ、きれいで格好いいじゃん。あーゆうの、やっぱあこがれるよね」

「……………」
「……………」

私はみんなの圧力に負け、恥ずかしながら葉山さんたちにもう一度頭を下げ、小学生たちとお話してもらうことになった。

ただ、けーちゃん、すぐ隣のテーブルのお姉さんの所に来ていたのでちよつと心強い。

でも、……けーちゃんに頼る私って……。

そういうえば、けーちゃん、なぜかまだ天使姿のままだけど……。お姉さん……確か沙希さん、が顔をほころばせて写真を撮りまくってるからこれでもいいのかな。……うん、歩く度にぴこぴこ揺れる天使の羽根と輪っかがとつてもかわいい。これで、
「るーちゃ〜ん」

なんて、可愛い声でピトツと抱きつかれたりすると……もう……なんかね……。

そんな事を思いながらけーちゃんと遊んだりしていると、少し離れたテーブルで紅茶を飲んでいる八幡を見つけた。彼は、由比ヶ浜さんや雪ノ下さんたちと優しい目で話を

している。

彼が何かの拍子にこちらを向き、私と目が合う……。彼は少しだけ驚いたような顔をした後、目を細めて柔らかい表情を浮かべた。……なんとなくだけど、その目は私に、「よかったな」と言ってくれているように思えた。

老人ホームのお年寄りも、保育園の子たちも帰り、今は会場などの片付けが始まっている。

とりあえず今日は色々と細かいものはじやまにならない所に寄せて置き、運び出しは明日、という物も多いということだ。準備の時とちがつて締切りみたいなものがないからか、騒がしいながらもどこか弛緩した、のんびりとした空気が流れている。

夕方から簡単な打ち上げ、「お疲れ様会」とかいうのがあるので今日はそれまでのんびり作業という感じ。

それに、クリスマススイブということもあり、小学生たちは片付けも打ち上げも強制ではないんだけど……なんだか名残惜しいのは私だけでは無いらしく、結構な人数が残っているようだ。

絢香たちと一緒に講習室の荷物を一通り後ろの壁際に寄せ、今日各学校に返還したりするものはエントランスに下ろしてまとめて、と。

うん、だいたいのは決まりはついた、かな。

「ね、ちよつとだけぐるつと見てきていい？」

そう絢香に言うのと、なんだかニヤニヤしながら、

「いーよいーよ。ほらほら行つといで。集合時間まで帰つてこなくていいから」

「あー、比企谷さんならさつき控え室に居たよ。多分ホールの荷物をそっちに下ろしてらんじやないかな」

中原さんまでいい笑顔でそんな事を言う。

絢香たちの話だと、小学生のメンバー……特に演劇班と一緒にいた子たちは私のことを応援してくれているらしい。……応援って何よ？

いやまあ……その、気持ちは嬉しいけどやっぱり恥ずかしいというか……。

でも、反論するのも変だし、「ありがと」とだけ言い、みんなの言葉に甘えて講習室を出た。

「ぐるつと回ってくる」なんて言ったくせに、私は自然と早足になって控え室の方に向かった。そこに八幡が居なかつたらそのままホールに上がってみよう。

控え室の方には結構な数のダンボール箱が積まれている。入り口から覗くと、八幡と副会長さんが何かの数をチェックしているところだった。

「ま、ここはこんなところか……」

八幡がチェックに使っていた、クリップボードをぼんと机の上に置く。

「比企谷」

「ん？ どうした本牧……」

私に気付いた副会長さんが私の方を指差すと、八幡は私を見つけ、入ってこいと手招きする。

私は副会長さんにペコリとおじぎをしながら控え室に入った。

「留美か……。お疲れさん。……そっちは手、空いたか？」

「八幡たちもお疲れ様。講習室はだいたい終わりかな……。すごい荷物だね、これ、どうするの？」

「平塚先生が明日ワンボックス借りてきてくれるから、それで運ぶ。三、四回ぐらい往復すれば終わるだろ……。近いしな」

うん、ここから総武高は、車なら五分もかからないだろう。……それで、全部終わっ

ちやう……かあ……。ただの感傷かもしれないけど、やっぱり寂しいなあ……。

そんな風に思っていると、

「そういや、さつきお前の母さんこっちに挨拶に来たぞ」

ああ、そういえばそんなこと言ってた。

「何か変なこと言ってたなかつた？」

「……いや、なんだ、『お世話になってます』『こちらこそ』みたいな感じだったけど……。それにしても、すごいな、留美の母さん」

「え、なにが？」

「いや、俺の目を見ても全然平気そうだったぞ。……いや、大人だから、見ても知らんぷりで目をそらすってのはあると思うが……そういうのは何となく分かるからな」

八幡は少しだけ寂しそうに言う。

「うん……」

「けど、ほんと自然に話すんだよ、ジロジロ見るわけでもなければ目をそらしもしない……。そういえば、留美も最初からそうだったな……？」

「お母さんはまあ……慣れてるんじゃないかな、そういうの」

「慣れって……、ああなんかマスコミ関係みたいなこと言ってたな。取材なんかで、いちいち人の外見気にしてる場合じゃないってやつか、なるほどな……」

八幡が一人で勝手に納得してる……ふふ、慣れてるってそういう意味じゃないんだけど……まあいいや。

八幡が時計を見て、

「まだけっこう時間あるな……。留美、大丈夫なら、少し『話』するか？」

八幡はこつちを見ないまま、「話」を強調するように言った。……だからこれは、あの時の「話」の続きのこと……私と泉ちゃんの事。……どうする？

少しだけ迷ったけど、話そう。……前に進まなきゃ、変わらなきゃって、そう決めたんだし。

「うん。私、八幡には聞いて欲しいこと……あるし」

「おう……あ、じゃあちよつとここで待っててくれ。二、三分……いや、五分以内で戻る」「え、八幡……？」

彼は返事も聞かずにさつと出ていってしまった。結果、私は副会長さんと二人で取り残される……。

う……ちよつとだけ気まずい。実は副会長さんとはあんまり話したことないんだよね……。林間学校でお世話になった人たち以外では、書記の藤沢さんか、後は一色会長さんとばかり話してるから……。

「あ、その、鶴見さん」

「は、はい」

間が持たないのは彼も同じようで、ちよつときこちなくだけど向こうから話しかけてきてくれた。

「その、今回はありがとう。……正直最初は小学生と一緒にやるのつて大変なんじゃないかって思ってたんだ。でも、実際やってみたら、君たちのおかげで大成功だった」

「そんな……みんな頑張ったからですよ」

そう私が応えると、彼は何かに納得したように言う。

「うん、そう……そうだね。じゃあ、『お疲れ様』かな」

「はい、『お疲れ様』です。ふふ」

その後は少し緊張が解け、あの場面はうまくいった、とか、キャンドルサービスの時に転びそうになった子がいて焦った、とかそんな話になった。そうこうしているうちに八幡が戻ってくる。

「悪い、待たせたな、留美。……上でいいよな?」

「うん、大丈夫。……じゃあ、失礼します」

「お疲れ様。比企谷も後でな」

「おう」

副会長さんに挨拶して、「上」へ……いつもの、遠い方の階段の二階と三階の間の踊り場へ。ふふ、なんとなくここは、「八幡と私の場所」って感じがする。そう思ってるのは私だけなのかもしれないけど。

いつもならがらんとしていて、ベンチ以外なにもないような所だけど、今はここにも大きなダンボール箱がいくつつか、端に寄せて積み上げられている。

八幡はベンチの端にどかかと腰を下ろすと、

「なあ、留美。……無理に話さなくてもいいんだぞ」

「……ううん」

私も八幡の隣に少しだけ間を空けて座る。くつつきはしないけれど、でも体温を感じることが出来るいつもの距離。

私は、ゆっくりと話し始めた……。

三年生の時、泉ちゃんと、隣の席で偶然同じ本を読んだのに気付いて仲良くなったこと。藤澤誠司先生の絵画展を見に行つて、先生とお話したこと、泉ちゃんと仲良くしてくれつて言われたこと。

友達が泉ちゃんをハブにした時、雰囲気流されて距離を置いてしまったこと。

そして……先生がご病気で亡くなる直前に、そうとは知らずに、「絵には興味ない」なんて言つて泉ちゃんをひどく傷つけたこと。

そのことで友達に八つ当たりして、自分がハブられるようになったこと。その時、泉ちゃんに避けられて、シヨックだったこと……。

……今は、一緒に話していても心から笑えないこと。

そこまで話したところで、八幡がぽつんと言つた。

「で、どうしたいんだよ、留美は？」

「それは……また、前と同じように仲良くなりたいの」

「だったら、前みたいに話してればいいんじゃないのか？ 見たところ、ギクシヤクはしてても、向こうからは普通に話しかけてきてるんだろ。そうすればそのうち……」

「うん、わかってるんだけど、でも私……怖いんだ、泉ちゃんと話してて。……特に絵の話とかになると……その、この前も勝手に涙が出てきちゃつて……」

「ああ、トラウマみたいなもんか。だったら藤沢とは一切絵の話はしないとか……」

「そんなの……無理だよ。……あの「背景」の絵、見たら分かるでしょ。泉ちゃんって言つたら、やっぱり「絵」なんだから」

「ま、そりやそうだ」

八幡は一つ溜息をつき、

「だいたい、怖いって何が怖いんだ？」

「それは……あの時みたいに、私がなにか言ってまた泉ちゃんを傷つけるんじゃないかって。……もう、あんな顔は見たくないんだ……」

「違う、な」

八幡の雰囲気之急に変わった。……なに……なんか、怖い。

「八幡……？」

「違う。それだけじゃ、無いだろ」

「え……」

「お前が何かを言うことで藤沢を傷付けるのが怖いって話なら、留美自身が気をつける問題だ。……昔それだけ痛い思いしてんなら、もう絶対に彼女を傷つけるようなことは言わないだろ」

「……………」

「だから、留美が怖いのは自分だけではどうにもならないこと……藤沢に、何か言われた

り、拒否されたりするのが怖いんじゃないのか」

八幡の言葉にどきりとさせられ、胸が詰まる。……そう、か。そうかも。私が怖いのは……でも……。私は八幡の顔を見上げて逡巡する。

「……いいから言つとけ。言いにくいことでも、誰かに吐き出せば楽になるってこともあるしな」

「うん……」

「どうせこのベンチに座ってるのは留美と俺だけだ。……俺はぼっちだから、誰かに喋るって心配もないぞ」

またそんなこと言ってる……。でも、八幡になら、私の嫌なところ、知られてもいいかな。……そう、八幡だけになら……。

そして私は、今まで言えなかった、閉じ込めていた、忘れていた想いを打ち明ける。

「私……ね、あの時、泉ちゃんに、「鶴見さん」って呼ばれて、すごく、すごくシヨックだったの。いやだったの……。私……泉ちゃんのために仁美たちとケンカして、ハブラれて……。わかってるの、自分が悪いんだってこと。けど……それでも——いやだったのっ」

いつの間にか涙がこぼれ、声が枯れていく。それでも、八幡はただ静かに私の話を聞いてくれている。

「あの後私、トイレで吐いたんだよっ。……いくら吐いても気持ち悪いのが収まらないくって。泉ちゃんのために怒ったのにどうしてって、悲しくって……辛くって……」

そう、私はあの時拒絶された恐怖から抜け出せてないんだ……もう、ずいぶん前の事なのに……でも、苦しいよう……八幡……。

「だとき、もう出てきていいぞ、藤沢」

一瞬、八幡の言葉が理解出来なかった。

「え……なに。……なんて言った……の？ 八、幡……う？」

私の問いに答えず、八幡はすっと立ち上がると、踊り場の端に積み上がっているダンボールを軽々とどかしていく。……中身、空っぽだ……。

そして、その箱に隠された角のスペースに、涙で顔をぐちゃぐちゃにして座り込んでいる——泉ちゃんが、居た。

「あ……」

嘘……、私の嫌な所、みんな……聞かれてた……の？ 泉ちゃんに？

私は思わず立ち上がり、八幡を睨んで、

「どうして……どうしてこんな酷いこと、するのっ！」

そう涙声で叫ぶ。

けれど八幡は平気な顔で、

「あー、言つとくが藤沢は悪くないぞ。……俺がいいって言うまで、何があっても出てく

るな。声も出さなつて言われてたんだからな」

「ここに居るの、八幡だけつて言つたじゃない……」

だから、……八幡だから私はっ……。

「この『ベンチに座つてんのは』二人だけつて言つたんだ……別に嘘は言つてねーよ。

……夏のドツキリは失敗したけど、今回はうまく……」

パシツ、と、びっくりするほど鋭い音が響く……。

私は無意識に八幡の頬を殴つていた……。

「あ……う……うう……」

痛い、……手のひらが熱くて……。心が痛い。痛いよ、八幡……。

涙が止められない。声も絞り出すようにしか出ない……。

私に殴られた八幡は、何も言わずに私を見つめ、ただ静かに立っている……。

私はこの場にいる事に耐えられなくなって、顔を伏せ、八幡を見ないように走り出そうとして……。

後ろから泉ちゃんに抱きしめられた。

「ごめんなさいっ……。比企谷さんが悪いんじゃないの……。わたしが、何もできなかった……から」

なに……。分かんない……。よ。

混乱している私に、泉ちゃんは言葉が続ける。

「あのね、わ……。わたしも、やだったの。……。留美ちゃんが『絵なんて興味ない』って言ったの。……。お祖父ちゃんの絵と一緒に見た留美ちゃんにだけはそんな事言ってほしくなかったのっ」

泉ちゃんが泣きながらそう訴える一言一言が私の胸に刺さる。

「あの時……。お祖父ちゃん死んじゃって……。わたし、心がぐちゃぐちゃで……。留美ちゃんにひどいことしちゃって……。ずっと謝りたかったのに、なかなかうまく行かなくて……。ただ笑ってごまかして……」

ああ……同じ、だったんだ。泉ちゃんも私も、ちゃんと言わなきゃいけないこと、……
言えないでいたんだ……。

「なあ、留美、藤沢……」

ずっと黙っていた八幡が口を開く。さつきとはまるで違う、温かい声。

「八幡……?」

「無理に、元通りにしよう、前と同じにしよう、って考えるから怖くなるんだ。前と違うことが不安になるんだ。……今、お互い、言いたかったこと言っただろ。言い足りなければもつと言つとけばいい」

「……………」

八幡がほんの僅かに笑みを浮かべる

「もう留美も藤沢も前とは違うんだ。……それで、嫌なところもわかって、ちゃんと覚悟して……それでも友達やりたいたいなら——また最初から始めれば良いんじゃないのか?」

……相性がよけりやうまくいくし、壊れるもんは壊れる。……けど、一から……ゼロから始める関係なら、前と同じかどうかなんてそもそも気にする意味がない。……なら、

何も怖いことなんかねえだろ」

彼はそう言うのと私たちに背を向け、

「……ま、俺はそんな面倒くさいの御免だけだな」

一言余計なことを言い、八幡は、そのまま下に降りて行ってしまった。

踊り場には、放り出されたように私と泉ちゃんが残される。……でも、なんだか不思議な開放感。

ふりむくと、泉ちゃんと目が合った。ふふ、ひどい顔。……きつと私はもつとひどい顔してる。

泉ちゃんの目を見ていると、私の中にまだ不安が残ってるのを感じる……だけど。

また、今から始めるんだ。……だから、きつと怖くない。

「泉ちゃん……」

「うん……」

「私と、また友達になって」

「うん……うんっ」

私はそのまま泉ちゃんに抱きつく。……再び溢れる涙。けれどその涙は、暖かく、しよっぱくて……ほんの少しだけ甘い——心地良い涙だった。

二人でひとしきり泣き、少し落ち着いた私たちは、洗面所で顔を洗ってから講習室に戻ってきた。「お疲れ様会」までは、二十分以上あるけど、もうテーブルの準備とかは始めているようだ。……八幡は中にいるのかな？

そのまま入ることがなんだか恥ずかしくて、そつと入り口から中を覗くと……何故か八幡が絢香の頭をぼん、ぼんと撫でているところだった。……どういふこと？

八幡と目が合う……、彼は絢香からそつと手を離すと彼女に一言何か言つて、素早く何処かへ行つてしまう。あ……逃げた。絢香の方はまだ私に気付かない。

……私は泉ちゃんをその場に押しとどめ、

「あーやかっ」

そつと近付き、真後ろから声をかける。

「ひゃっ！」

彼女はビクンとして振り向く。

「あ、な、なに？ 留美」

え……絢香、なんだか顔赤いみたいだし、目が泳いでる……まさか……。

「大丈夫、ちゃんと見てたから……。今の何？」

う……思った以上に棘のある声が出てしまった事に自分自身でびつくりする。

「ちよ、留美怖つ……」

絢香もぎよつとしたようだが、

「へへー……いやあく、年上男子に頭撫でてもらうっていいもんだねえ。ほら、私背え高
いからさ、同級生とかだとちよつとさ……」

急にくねくねしながら変なことを言い出した……何かごまかそうとしてる……？

私がそのまま、じくじくと見ていると、彼女は諦めたように言う、

「あはは。……いや、そのね、留美のこと頼まれてたんだよね……比企谷さんから」

「な……」

「あんたと泉ちゃんがさ、色々複雑みたいだから、『それとなく気をつけてやってくれ、頼
む』って感じに……」

いつの間にそんな……。

「あー……実はさっき、泉ちゃんを階段のところに連れ出したり、段ボール箱積むの手伝っ
たりしたりしてましたっ。あは。……で、今のは、『うまくいったから、ありがとな』み

たいな……。留美？」

振り向いて泉ちゃんを見れば、ちよつとバツが悪そうに、右のおでこのあたりをこりこり搔いて苦笑いしてる。……ほんと、八幡にはかなわない……。なあ……。

「ごめん。絢香、泉ちゃん、またあとでっ」

「はいはい、いつてら〜」

絢香のなんだか嬉しそうな声に送られて、私は八幡を探しに講習室を飛び出した。

誰もいないエントランス。隅っこにある自販機コーナーのベンチに腰掛けて、八幡はいつものアレを飲んでいた。

「八幡」

私は声をかけ、八幡の隣りに座る。

彼は、

「おう」

と、こつちを見ないまま一言だけ。

「さつきは……。ごめんなさい。……。叩いちやって」

「いや、叩かれるようなことしたしな。……で、もう大丈夫なのか？」

八幡は、私の様子を伺うようにそう聞いてきた。

「……うん。ほんとに、ありがとう」

「そか」

八幡はそう言つて、ふつ、と小さく笑つた。

無言だけど満たされた時間が過ぎていく。時折八幡がコーヒを啜る音がかすかにするだけ。

……あ、やっぱり八幡の頬、片方だけちよつと赤い。

「ねえ、ちよつとほっぺ見せて」

「いや、んなもん見てどうすんだよ」

「いいから」

私はベンチの上で膝立ちになり、八幡の肩に寄りかかると、嫌がる八幡の手をどけて無理やり覗き込んだ。……まだ結構赤い。腫れたりしてないみたいだけど。

「ごめんね、痛かったでしょ……」

「あー……まあ、少しだけな」

私は、赤くなっている所を指先で優しく撫でる……。

そして……そこにそつと私の唇を押し当てた。

「なんっ……!?!」

八幡は一瞬固まった後、びっくりして飛び退く。

「る……おま、何してんの?」

いつもどこか余裕のある八幡も、さすがに赤くなって慌ててる。……けど私の方も
いっばいいいっばいだ。

……これ、思ってたよりずっと恥ずかしいよ。

「お……おまじない。おまじないだからっ。……早く治るようになって」

どうにかそれだけ言って、今度は私が逃げ出した。……唇が熱い。心臓が鼓動を刻む
度に、その熱が全身に波紋のように拡がって行く……。

……私、八幡のこと好きだ……。

今までだって自覚はあった。ううん、そうじゃない。自覚してるって勘違いしてただけだ。

——八幡と目が合うと心が暖かくなる。八幡と話すのがうれしい。彼の近くで体温を感じる目安する。八幡が他の女の子と仲良さそうにしてるともやもやする——だから好き？

そんなんじゃない。それは、もう好きになってるからそう感じるってだけ。

……今気付いた。初めて知った……本当に人を好きになるってこと。

——八幡が、この世界に居てくれることに、……私を、比企谷八幡という、少しひねくれてるけど誰より優しい男の子と巡りあわせてくれた奇蹟に「ありがとう」って言いたい。ずっとこの奇蹟が続きますようにって心から願いたい——

世界とか奇蹟とか——大袈裟かもしれないけど、そう素直に思える、それが私の好きの気持ち。

ふふ、でも……誰に感謝したりお願いしたりしたらいいのかなあ……神様？ それとも仏様とか？ 八幡のご両親……は違う、かな……。

そうだ。だったらイエス様をお願いしよう。きっと願いを叶えてくれる——だって

私は「賢者デラ」そして今夜はクリスマス・イブだもの。

イベントから二日。昨日まではテレビでも「クリスマス」の話題で持ちきりだったのに、一夜明ければクリスマス「ク」の字も出てこない。今年を振り返って、とか、来年は、とかの話題ばかり……。

「はあ」

「どうしたの、溜め息なんかついて……。クリスマスイベント終わって気が抜けちゃった？」

リビングのソファにもたれて、一つ大きなため息をついた私にお母さんがそう声をかけてくる。

「そんな事無いけど……」

誰かを心から好きになる、それはとっても素敵なこと。

だけど……自覚してしまった恋の現実はなかなか厳しくて……。

何と言っても恋のライバル……と言っているのかな？ 八幡の近くにいた女の子は魅力的な人たちばかりで……。

その中でも——多分だけ——今、八幡の心を一番占めているのは雪乃さん。八幡を好きになったから、見ているから分かる。あの、漫才みたいなやりとりをしている時、真面目に仕事をしている時、二人が並んで立つ姿がとっても自然で……なんというか、根っここのところで深く信頼しあっているのを感じる。

それに……二人の間にあるのはただの信頼だけじゃ無い。……それが何なのかは、彼ら二人にしかわからないことなんだろう。

それから、結衣さんが八幡のこと好きなのは間違い無いし、いろはさんも……もしかしたらだけど沙希さんもなんだか八幡のこと気にしてるっぽいんだよね。

ほんと、全くだこがぼっちなのよ。

そして、決定的なのは、彼女たちが八幡と同じ高校生なのに、私はまだ小学生であること。

高校生の八幡にとって、五つも年下の小学生である私が恋愛対象になるとはとても思えないし。……はあ。

また溜息をこぼす私に、お母さんが、

「ね、留美、これやってみない？」

そう言ってお母さんがタブレットPCの画面を開く。

「ん？ 何」

「うちの雑誌の新年号のウェブ版限定でやってる来年の運勢。干支と星座と血液型の組み合わせで576通りの結果が出るって。

「へえー」

576通りって……さすがウェブ版。それだけで本が一冊出来ちゃうよ。

「じゃあ、お母さんから」

母が自分の干支と星座、最後に血液型を入力すると、「健康運」「金運」「仕事・学業運」「恋愛運」なんかが、棒グラフで表示され、その下に簡単なコメントが表示される。

「うーん、金運は良いけど、恋愛運はイマイチね」

……お母さん……恋愛運って……。

「あ、相性占いもあるわ。……お父さんは五つ上だから干支は〇年で、星座は△。血液型はBと」

え、五つ上。

「ね、お母さん。お父さんとお母さんって、五歳差ってこと？」

「急にどうしたの？ そうね、お母さんのほうが誕生日早いから、差は四歳半位だけど、

学年では五つお父さんの方が上よ」

両親の年の差なんて意識したことなかったけど——五歳差……私と八幡と同じ。

だから何、って言われれば何も無い。わかってる。……でもちよつとだけ……ううん、すごく嬉しい。

頭の中で、大人になった私が八幡に向かって、「おかえりなさい、あなた」なんて言ってる場面を想像してしまった。何だこれ……私、おかしい……。

「……留美？　溜め息ついたり真つ赤になったり忙しいわね……」

お母さんが何か言ってるけど聞こえない。

そうか、大人になれば……結婚するぐらいの年齢になれば、五歳の差なんて大したことじゃないんだ。……叶わない恋かもしれないけど、今、無理に諦める必要なんて無い。そう考えることが出来るだけでもこんなにも心が躍る。

……やばいなあ……これ。自分で思ってたより私、ずっと本気みたい。ふふ、なんだか楽しくなってきた。自分ですらも心は躍る。

「おーい、留美……大丈夫？　今度は何で笑ってるの？　話聞いてる？」

私の恋はきつと前途多難——それでも私は前を向く。いつか、自然に八幡の隣に立っていられる未来を夢見て。

鶴見留美は聖夜に願う

完

幕間 新しい友達

最近、新しい友達^ができた。

近所の高校が主催するクリスマススイベントのボランティアに参加して知り合った子で、同じ六年生。お隣の小学校に通っている。

彼女とはなんだか波長が合うというか、この先もずっと仲良くしていけそうな気がするんだ。

ただ、彼女はとっても素敵な子なんだけど……。

なんと、目がドヨンと濁った高校生に恋をしているのだ！

ふっふっふ。るーちゃんだと思った？ ……残念っ！ あーちゃんでしたっ。
って、あたしは一体誰に話してるの……。

その子、「鶴見留美ちゃん」の最初の印象は、「すっごくきれいな娘」

あたしも、自分の容姿は……まあまあいい方なんじゃないかな、ぐらいには自信あつたんだけど、鶴見さんはそういうのとはちよつとレベルの違う美少女で、「アイドルの卵です」とか、「なんとか劇団で女優目指してます」とか言われたら、多分普通に納得してしまつただろう。

そのせいかもしれないけど、初めはみんな、こつちから話しかけるのは気後れするとか……この地区の3つの小学校から集まつたボランティア参加者16人の中で、彼女はどこか浮いてるみたいに一人で居た。

ボランティア初日。私たち全員が講習室という部屋に案内されると、早速、海浜総合高校と総武高校の生徒会長さん二人から御挨拶をいただいた。

まず、海浜の制服を着た、なかなかのイケメン君がこちらにやってくる。高校生としてもやや高めめの身長。彼が総武高校の人たちの方へ何か声をかけると、

「はーい、今行きまっすう」

と、可愛らしい声で返事をして、肩までの茶髪をゆるふわにした、海浜の彼に比べるとやや幼い印象の女の子がこちらにやって来る。背もあまり高くなり、あたしより小柄だ。

二人並んだところで、海浜の彼がコホンと咳払いをひとつ、挨拶を始めた。

「やあ、○○小学校、△△小学校、□□小学校の皆さん、こんにちは」

「こんにちは」

「僕は海浜総合高校の生徒会長で、玉縄と言います。……そして、」

玉縄さんは彼女の方に手を差し出して、場を譲る。

「はい、総武高校で生徒会長してる、一色いろはです。みんな、今回はよろしくね」

「ニコツ」という文字が見えそうなくらい完璧に可愛い笑顔で彼女が言う。でも……、なんだか隣の玉縄さんにちよつと苛ついているような……気のせいかな？

「よろしくおねがいしまっす」

あたし達も元氣よくあいさつを返す。それにしても、この一色さん、元々の容姿だけでなく、表情とか仕草とかがいちいちカワイイ。……高校だと、会長は選挙で選ぶんだ

ろうし、やっぱりそういうのが大きいのかな。

続けて玉縄さんが話を始める。

「今回は僕たちのクリスマスパーティーに参加してくれてありがとう。みんなで協力してクリエイティブで、エキサイティングなものに仕上げたいこう。君たちの参加によるシナジー効果を期待しているよ」

……うわ……いきなりガツンとカマしてくれるなあ、この会長さんてば……。身振り手振りは大きいけど、ぶっちゃけ何言ってるんだかさっぱりわかりませんよ？

で、結局何のイベントなの？ と話の続きを待っていると、あろうことか玉縄さんは一色さんを連れて自分の席の方に戻って行ってしまった。いわゆる、「すぐに担当者が参ります」って感じでも無さそうだし……。

え、いきなり放置ですか……。それでも、少しの間は、私たちも他の小学校の子たちと自己紹介もどきをしたりしてただけで、いつまで経っても次の指示がないのですすがにみんなざわついてくる。

「ねー、何やればいいのか？」

「誰か聞いてきてよー」

「えー」

「お前行けよ」

「じゃあ、じゃんけんて……」

やれやれ、しょうがないからあたしも行くかあ、と立ち上がろうとした時、

「私、何やればいいのか聞いてくるよ」

そう言つて鶴見さんはすつと立ち上がるとそのまま高校生たちの方へ行つてしまつた。ちょうど席に戻つてきた、あの可愛らしい生徒会長さん達となにか話をしている。

……鶴見さん、か。へへ、なんか格好いいな。

私達小学生にとつて、面と向かつて高校生達と話をする、つていうのはけっこうハードルが高い。なんていうか、大きいし大人っぽいし。

だからあたしは、何をやるか聞きに行くにしても、二、三人で行くつもりでいたんだよね。でも、彼女は当たり前のように一人で堂々と話をしている。

綺麗でかっこいい女の子、鶴見留美ちゃん——仲良くなれたらうれしいな。と、この時はその程度の間感だった。

彼女に本格的な興味を持ったのはその後、材料の買い出しから帰つてきた後だ。

その日、私達小学生は最初二班に分けられた。

あたしと鶴見さんを含む五人は、総武高の生徒会役員の藤沢さんという人と一緒に、

すぐ近くのマリ〇ピアにある文具量販店に紙や道具類などの買い出しに行つてくることになった。

で、その買物を無事終えて、みんなで沢山の袋をぶら下げてえつちらおつちらとコミュニケーションセンターに帰つてきた、その時の話。

この時、買物に参加してないみんなは、元からある材料で作れる飾りなんかを作つてたんだよね。あたし達が講習室にたどり着くと、

「あ、緋おかえり〜。すごい荷物だね……」

同じクラスで一緒にイベントに参加してる陶子とうこが私たちに気付いて声をかけてくれる。

「ただいま〜。紙ばっかりだけどけっこう重い……」

「おつおつ〜」

持つてきた袋をドサツと机の上に下ろす。あーあ、手のひら赤くなっちゃってるよ。

最後に講習室に入つてきた藤沢さんが、小学生の監督役をしていたと思しき高校生に、

「あ、比企谷先輩、お疲れ様です」

そう声をかけると、

「おう、そっちこそお疲れさん」

彼は疲れたような声で応じる。見れば、ちよつと「うわっ」ていいそうになるくらいどよんと濁った目をしてる……けど、それ以外はなかなかのイケメンさん。作り自体はさっきの玉縄さんより整ってるんじゃないだろうか。

でも、あの目は無い。……徹夜でもしたんですか。

「……会議、どうでした？」

「あー……、まあ、どうもならんわ。とりあえず今日は、今できるのをやるしかねーな。あと、議事録のまとめ」

「……そうですか……」

何となく聞こえてくる話では、どうも会議がうまくいってないらしい。

「……でも、このままじゃ、不味いですよね」

なんて、彼らが二人して元気無さそうにしていると、

「ハチマン、なんか困ってるの？」

鶴見さんが、その目の濁った高校生の隣の椅子に、当たり前のように座ってそう聞いた。

「……おう、おま……、留美もお疲れさんな」

彼の方もなんだか普通に返してくる……今、『留美』って名前呼び捨てにした……？
それに『ハチマン』って、何？ あだ名？

周りのみんなは、二人の様子に ?? って感じなんだけど、当の二人はそんな空気に気
付く様子もなく会話を続ける……親戚かなんかなのかな。

「うん、大丈夫、近いし。それで？」

「ああ、まあなんだ、具体的に何やるかまだ決まって無くてな……」

「え、それって大丈夫なの？」

「……………」

「……………」

聞けば、「ハチマン」とは「八幡」——比企谷八幡さん。……まさかの小学生が高校
生の名前呼び捨て！

面白い……。綺麗でカッコ良くって、高校生の男子と名前で呼び合う「鶴見留美」ちゃ
ん。それに、その微妙なイケメン高校生「比企谷八幡」さん。

あたしはその日、この二人を生暖かく見守っていこうと決意したのでした。

あたしの密かな楽しみは、

「他人の恋愛を横から眺めてニマニマすること」

あまり大っぴらにそんな事をしていると、「こいつ性格悪いーなあ」なんて言われそうなので一応ヒミツ。まあ、陶子辺りは気がついてるんだけどね。

それに、あたしは別に誰かの恋愛を馬鹿にしたり、邪魔したりはしない。もし相談に乗ってほしいって言われれば一生懸命手伝う。お似合いのカップルがラブラブしてる所を見てると、なんだかこっちまで嬉しくなっちゃうんだ。

誰かにそう言ったら、

「えー、そういうの見たたら、羨ましくなったり、リア充爆発しろとか思ったりしないの？」

なんて聞かれた事がある。

羨ましい、か。……正直ピンとこないなあ。あたしは今のところ、自分自身の恋愛にそれほど興味がない。だからその分、やりすぎない程度に彼らを、彼女達を応援するのだ。

ついでに言えば、マンガや小説なんかも恋愛要素がたっぷり入ってるものが好み。ただ、いわゆる少女漫画の、ヒロイン一人が複数のかっこいい男子に囲まれる、みたいな

話はいまいち好きじゃない。

だってそれってヒロインの勝利が確定してるから、いまいちドキドキしないんだよね。むしろ、どっちかといえれば男の子向けの「ハーレムもの」なんて言われる作品の方が好きかもしれない。

そういうお話に複数登場するヒロイン達の中で、気に入った娘を応援する気持ちで読むんだ。でも、その娘が主人公と結ばれるとは限らないから、すごくドキドキする。……それで、その恋が実ればとっても嬉しいし、他の娘が選ばれるとちよつぴり切なくなる。

……少し前にとあるライトノベルで、あたしイチ押しのも、表は厨二ゴスロリ、裏は家庭的で健気っていう少女が、まさかの展開で主人公の実の妹に負けた時はけつこうシヨックだったなあ……：：：：そういえば、あれって、この千葉が舞台だったつけ。

ま、あたしの話はいいや。

とにかくそんな訳で、あたし的に現在注目の鶴見さんだけど……、ここ二、三日なんだか機嫌が悪い。それに、ちよつと元氣も無いみたい。……まあ実は、理由はなんとなくはわかってるんだけどね。

あの二人……雪ノ下さんと由比ヶ浜さんの二人が参加するようになってからという

もの、「ハチマン」こと比企谷さんは急に忙しくなったみたいで、ちっとも鶴見さんにかまってくれなくなっちゃったんだよね……。

まったく……イカン、イカンよ比企谷くん。君は女心というものがわかっておらね。

今まで、少しでも時間があればすぐ比企谷さんのところに行って、大した話じゃなくてもとつても楽しそうに話をしてた鶴見さん。……それを、いくら忙しいからと言って全く相手をしてくれないとか……。

しかも、今正に彼と一緒に行動してる二人が二人とも、総武の制服がよく似合うすつごく魅力的な女の子っていうんだからそりゃあ鶴見さんの機嫌も悪かろうって話ですよ！

でも……この二人の高校生、本当にレベル高い！

雪ノ下さんはいわゆる黒髪ロングのものすごい美人。スラッとしていてどこか儂げなんだけど、なんとというか、こう……シャープな、一本芯の通った印象をうける。「凜とした」っていう表現が似合うかな。

しかも、聞いた話だと彼女の一言で、止まっていたイベントが一気に動き出したというじゃないですか。この外見で中身も有能とか……こういう人、現実にいるんだなあ、

と感心してしまう。

もう一人、髪を明るく染めている由比ヶ浜さんは、優しい笑顔が印象に残る女の子。彼女がいると不思議とその場が柔らかくなり、ギスギスした雰囲気が消えていく。

くるくる変わる表情のせいか、「可愛い」印象が強いけど、小顔で目もパッチリで、雪ノ下さんとはタイプが違うけどこちらも「美人」に分類される顔立ちだとあたしは思う。……そして、注目すべきはそのスタイルの良さ！ 何ていうかその……大きいんですよ、すごく。それなのにウエストラインはきゅつと引き締まって……どつかのモデルさんですかって感じなの。

そんなハイスペックな二人だけど、何となく比企谷さんに気がありそうっぽいんだよね。いや、はつきり分かるわけじゃないけど……なんか三人ですごくいい雰囲気出しちゃっててさ。……で、ますます鶴見さんがしょんぼりしてしまうと。

鶴見さんもすつごくきれいなイイ娘だけど、そうは言ってもまだ小学生。恋のライバルがこの二人ってのはキビシイよね。

それにしても、この二人にしろ鶴見さんにしろ、こんな綺麗な娘たちがそろってなんであんな目が濁ってて猫背のイケメン崩れに惹かれるのかね？ とか、最初は思ってたんだよね。

……でも、このイベントを通してわかってきた。
あれだね、「仕事ができる男はモテる」ってやつだね。

彼はとにかく頭の回転が速い。そして難しい仕事、大変な仕事を当たり前のように分で引き受け、淡々とこなしていく。強力な助っ人である雪ノ下さん達を連れてきたのも彼だし……正直、比企谷さんがいなかったら、このイベント自体失敗して……何もやらずに解散、みたいなことになってたんじゃないだろうか？

そして、たまくにしか見せない素の笑顔とか、目を閉じて何かを真剣に考えてる表情とかを見ているとなんだかキュンと……って、いやいや、あたしまで胸キュンしてどうすんだよ……危ない危ない。

まあ、そんな雰囲気の中、私達小学生チームは無事にクリスマスツリーの飾り付けを完成させ、今は講習室の後ろの方で、保育園の子たちに着けてもらうための天使の翼とか、頭の上の輪っかとかを作っているところ。

この天使の翼は、白いダンボールで出来た本体とそれを背負うためのゴム紐を針と糸で縫ってくつつけるんだけど……あたし、あんまり裁縫って得意じゃないんだよね。

だからあたしは、他の子が切り抜いてくれた翼に、水色のペンでせつせと羽の模様を

描いている。

それに、鶴見さんが幅の広いゴム紐を縫い付けていくんだけど……この子器用だなあ。ダンボールに千枚通しみたいな物でプスプスと小さな穴を幾つか開け、そこに上手に針を通していく。彼女がゆっくりと糸を引っ張ると、きれいなバツテンの形の縫い目になった。

他にも縫い物出来る子はいるんだけど、彼女がやったほうが綺麗に仕上がるのでついみんな鶴見さんに任せてしまう。……結果、彼女の前に翼の山が。しゃーない、こっち終わったら、あたしも下手なりに手伝おう。

お、ホワイトボードの辺りで、「今後の方針」みたいなのを話し合ってた高校生達だけど、どうやら一段落したらしい。

比企谷さんが、様子を見に、つて感じでこちらにやって来た。鶴見さんの前に山と積まれた翼に気付いたらしく、ごく自然に彼女の隣に座り、作業を手伝おうと手を伸ばす……。

あたしを筆頭に、鶴見さんの機嫌が悪い理由に気付いている小学生のみんなは、仕事をしているふりをしつつドキドキしながら彼女の動向に注目する……。

「八幡、いい。いらない」

そうやって彼女は少し唇を噛む。

比企谷さんの手がピタッと止まり、彼は鶴見さんの顔を覗き込む。

「一人でできる」

彼女が比企谷さんの顔も見ないでそう言うのと、

「いや、できるつつてもお前……」

比企谷さんは、鶴見さんと山になつて翼とを交互に見ながら呆れたような声を出す。

「いい」

彼女は首を振る。もう、素直じゃ無いなあ……。

「……そうか、一人でできる、か」

比企谷さんはそう言うのがタンと音を立てて立ち上がった……ええつ、行っちゃおうの？ 見守る小学生ズに緊張が走る。

鶴見さんはその音にピクンとして、一瞬、縋るような目で彼を見上げる……。けど、自分で「一人で出来る」と言ってしまった手前、何も言えずに下を向いてしまった……。

ああもう！ 意地張つてるから……。

比企谷さんは小さく息をつき、それからぐつと胸を張り、トントンとその胸を叩いて言う。

「でもな、俺のほうがかもつと一人でできる」

比企谷さんナイス！ 意味分かんないケド格好いいよつ。でも目はちよつとアレだけどつ。

「……なにそれ、……ばつかみたい」

鶴見さんはそう言つてクスクス笑い出す。……いや、馬鹿つてそれはアナタの方でしょうが、この意地っ張りさんめ。

まあ、比企谷さんがフォローしてくれたのはちゃんと鶴見さんもわかつてるみたいで、比企谷さんがもう一度彼女の隣に座つても何も言わず、二人で仲良く作業を再開してしまつた。……比企谷さん、意外に針使うの上手いな。手慣れた感じで様になつてる。

くつ、女子としてなんか敗北感。……裁縫、少し練習しようかなあ。

うん。まあとにかく良かった良かった。鶴見さん、けつこう機嫌良くなつたみたいだし。

一安心したあたしは、二人の様子を気にしつつも作業を再開した。……でも、二人の話はしっかりと聞き耳を立てて聞いている……へへ、だつて気になるじゃん。

「八幡」

鶴見さんがポツリと言う。

「ん?」

「……良かったね。……その、雪ノ下さんたち、来てくれて」

鶴見さんいい子だ。なかなか言えないよ、こんなこと。

「おう。まあ今回は特に……あいつらには感謝してる。……それから、留美にもな」

「え、私? 何で?」

「まあアレだ……お前と、あと平塚先生にも随分と心配かけてな。それで、色々と背中を押してもらったというか、」

「八幡……」

ををつ、なんかいい雰囲気じゃないのっ。

「その、唐揚げも旨かったしな。……だからその、あんがと、な」

そんな事を言いながら比企谷さんは、彼女の頭に手を伸ばし、サワサワと優しく撫でる……。

ひやあああ……こ、これってアリなの? いいの?

ふと周りを見渡せば、この部屋にいるみんなが注目しているというのに、鶴見さんはとろんとした瞳で気持ちよさそうに自分から頭を擦り付けるみたいにしてるし、比企谷さんは目を細めて優しい顔してるし……完全に二人の世界?

はうう………見てるこつちがなんだか恥ずかしくなってきた……。

……はあ。キミたちもうちよつと周りを気にしなさいよ。由比ヶ浜さんなんて目を丸くして口をぱくぱくしてるじゃないの。てゆうか唐揚げって何？ いやそれはいい……のか？

ふと気がつくと、比企谷さんは彼女の頭に手を乗せたまま何か考え事してるみたい。鶴見さんも気付いて、

「どうしたの、八幡？」
と尋ねた。

ツツコミどころ満載、いやむしろツツコミどころしか無いようなこの状況は、比企谷さんの次の発言でさらに加速する！

「なあ、留美。……お前、うちの演劇出てみないか？」

……あたし、もうついて行けない……。

「じゃあ、うちのプラス部のリーダーに紹介するから、キミたちは僕と一緒に来てくれたまえ」

玉縄会長さんが、アライアンスでシナジー効果がどうたらこうたら言いながら、金管楽器を吹ける小学生、「音楽チーム」の五人を上上のホールに連れて行った。何でも、海浜総合高校の吹奏楽部の部長さん達が今日会場のチェックに来ているとのこと。

「では、このメンバーで劇の方頑張っていきましょう。みなさん、あらためてよろしくお願ひしますね〜」

一色会長さんが、講習室に残った小学生、「演劇チーム」それから、総武高生徒会、奉仕部のメンバーに、相変わらず甘〜い声で挨拶する。

「えっと、『賢者の贈り物』本編については、書記ちゃん脚本が今日中には書き上がるということなので、出演者の練習は明日からですね〜。……留美ちゃん、絢香ちゃん、陶子ちゃん、そういうことでよろしくね〜」

「「は〜」」

「では、今日は本編の後の演出について話し合う、ということでもいいのかしら?」

「です。……それでなんですけど、雪ノ下先輩にはぜひケーキを作って頂きたいな〜と。それをみなさんにプレゼント! みたいな感じで〜」

「え、でも、そんなにお金あるの? だって、お年寄りと保育園の子たちだけでもけっこうな人数になるじゃん」

「それは一応、さつき役所の方に確認してみた。お年寄りたちにお茶とお菓子を提供するって形なら、市の方でもある程度は助成金を出してくれるとき。どんなものを出すかにもよるが、自分たちで作るなら、それほど無茶な金額にはならんだろ……。どうだ、雪ノ下？」

「それなら、まずは、参加人数の確認と材料費の試算ね。それから、ここうちの学校の調理室、冷蔵庫の利用状況の確認と予約」

「ゆきのん、学校の方はあたしやるよ。23日でいいんだよね」

「ええ、でも、冷蔵庫は前日からイベント当日まで使いたいわ」

「……………」

「……………」

「……………」

「はー、なんか……今までダラダラしてたのが嘘みたいにすごいペースで話が進んでいくなあ……。うん、会議とか話し合いつて、やっぱこうじゃないとねっ。」

さて、『もうついて行けない』なんて思ってたはずんだけど、何故かあたしは準主役である「ジム」として劇に出演することになってしまった。

と言つても、この『賢者の贈り物』つて、舞台に立つのは三人だけなんだけどね。そ

れにずっと出てるのは、留美が演じる「デラ」だけで、私の「ジム」と、陶子の「女主人」は、それぞれ一つの場面に登場するだけ。

留美が主役の「デラ」に決まった時点で、身長バランス的にジム役をやれそうな男子は二人いたんだけど、二人とも恥ずかしがって、「絶対やりたくない」って言うんだよね。

……まあ、分からなくもない。演技とは言え、女子と抱き合ったりしたら、後でからかわれるに決まってるし。……まして、相手が留美というすごく綺麗な娘ともなれば、どうしたってビビってしまうんだろうな。

しかし……まったくもったいない。どうしてこれをチャンスと考えないのかね彼らは。

だって、留美と合法的にハグ出来るんだよ！　こんなラッキーそうそう無いよ！

でも、みんな、舞台に立たなくて済むナレーションとか照明とかの方をやりたがって、ジムと女主人のなり手がない。

……で、さっきも言った身長のバランスもあって、結局はあたしがジム役に決まったの。

女主人役もなかなか決まらなかつたんだけど、「絢もやるならしょうがない」ってこと

で、最後は陶子が引き受けてくれた。

そういうえば、この時初めて「留美」「絢香」って呼びあうようになったんだっけ。ふう、やっと「留美」「八幡」の関係に並んだよ〜！

今日は、完成した脚本を持って、出演者と比企谷さんで実際のステージを見に来てい

る。舞台の上で本を持ったまま、だいたいの動きを確認。

気をつけなきゃならないのは、現実にと人と話すときと違って、セリフを言う時に相手と客席の間ぐらいいの方向を向くこと。そうやって客席から顔が見えるように、声を通るようにするんだってさ。

これが意識してやらないとなかなか難しい。つい、話す相手を真つすぐ見ちゃうんだよねー。

「せんぱい、ちよつとこつち良いですか〜」

一通り流れの確認が終わったところ、一色さんがホールにやって来て、比企谷さんに何

か相談をはじめた。……肩をびったりくつつけるみたいに並んで、ふたりでファイルを覗き込んでいる。

うーん……なんだかこの一色さん、気のせいかもしれないけど、急に比企谷さんにモーションをかけた始めたような……。

最初はそうでもなかったよね？ いつからだろう。……雪ノ下さんと由比ヶ浜さん達が来てから……かな。急にライバル心が出たとか？ もし彼女まで比企谷さんに好意を持つてるとしたら、留美はますます大変だよなあ……。

結局、比企谷さんはそのまま一色さんに連れて行かれてしまった。

みんなが舞台を降りて自分の持ち場に帰っていく。その時留美と二人になったので、思い切って比企谷さんとの関係を聞いてみた。

「それで？ 前から気になってしょうがなかったんだけど……留美と、あの比企谷さんってどういう関係なの？」

「どうって……。前に話したことあると思うけど、夏の林間学校の時にお世話になって……」

うんうん、それは前にも聞いたってば。

「ええええ。でもさ、なんかお互い名前前で呼んでるし、最初は親戚とか、ご近所さんとか

かなーって思ったけど、そーゆうんでも無さそうだし、この間なんか嬉しそうに頭撫でられてるし。……それに、そういう時、留美が比企谷さんを見る時の目がさ……」

「え、私の目？」

「マジ？ 自覚無いの？」

「うん。そんなに変な目、してるかな」

あんなとろんとして幸せそうな表情をしておきながら、自覚が無い……だと……。

「変、っていうか……その、目の中にハートマークが見えるというか……」

「な……え？」

おおつ、珍しく動揺してる。なんかかわいいなあ。もうっ！ こっちが照れちゃうつての。

「やっぱその、好き、なんでしょ？」

ここでど真ん中の疑問をぶつける……さすがに怒るかな？

留美は小首をかしげて少しだけ考えると、

「うーん。よく分かんない」

と、照れるでも怒るでもなく、「ほんとにわかんない」みたいな顔で答えた。

「ええー、なんで？」

アレで好きじゃないとか言うつもりかね？ そんな考えが顔に出ってしまったのか、

「あ、もちろん嫌いなわけじゃないけど……だって、高校生と小学生だよ？」
彼女はそう言い加える。

「いいじゃん！ 高校生との大人っぽい恋とか、ちよつと憧れあるなあ」

冗談めかして言っただけど、これは本音。あたし、自分の背が高いのもあつてか、同じ小学生の男の子には興味がない。それに、漫画なんかの影響かもしれないけど、「彼氏の顔を見上げて話す」のにはちよつと憧れる。

「だからさあ、留美はもつとぐいぐい行こうよお」

「絢香……面白がつてるだけでしょ……」

「へへっ。やっぱわかる？」

「あのねえ……」

留美はちよつと困ったような顔で呆れたように言う。

あ、マズったかな……。恋愛のことあれこれ言われるの嫌いな子もいるよね……。

「あ、ゴメン。……こういうの嫌だったらもう言わない」

そう彼女に謝る。留美にはこんなことで嫌われたくはない。

すると留美は少し表情を崩して言う。

「ううん。……ここだけの話にしてほしいんだけど、正直、自分でもちよつとは自覚あるよ。八幡のこと、好きなのかな、って」

認めたつ。そんなに素直に答えるとは。

「! だったら……」

「でも、八幡から見たら、多分私は妹みたいなもので……どう考えても恋愛対象にはならないと思うんだよね……」

留美は小さく溜息をつく。

そうかなあ、傍から見ると、二人で居てもおかしくないと思うけどな。……でもまあ、雪ノ下さんとか由比ヶ浜さんとかと比べちゃうと、どうしたってそう考えるよね。

「うーん……確かにすぐには……。あ、でもさ、あたしは来年は中学生じゃん。中学生と高校生なら、さ」

あたしが話を続けようとすると、

「ふふ。今はこの話はいいよ。まあ、自分でもホントのところ分かってないんだし。……もし良かったら、また相談乗って」

留美はそう言って笑った。あたしはそれ以上何も言えず、
「うん。それはもちろん」

とだけ言って頷いた。

話題が途切れ、何となく二人無言のまま講習室に帰ってくる。

ドアをくぐると、比企谷さん、雪ノ下さん、書記の藤沢さんと、それにもう一人、慣れない女の子の四人が一つの机を囲むようにして話をしているところだった。赤くて細いフレームの眼鏡を掛けた小柄な女の子。

気が付くと、並んで歩いてた留美がいつの間にか立ち止まって、あたしから数歩遅れている。

思わず振り向いたあたしの目に映った彼女の姿は、まるで幽霊を見て立ちすくんでいくかのようだった。

あの時……怯えるような表情を一瞬だけ見せた留美はしかし、その後は普通に笑顔でその娘——藤沢泉ちゃん——と話していた。

総武高の書記の藤沢沙和子さんの従妹で留美の同級生。演劇の背景を描くために途中から参加してくれるという。

ちよつと大人しい感じの子で、絵がものすごく上手だ。……この「上手」っていうの

が普通のレベルではなく、本格的な、いわゆる「プロを目指す」レベルの絵で……聞けば、絵の専門学校の特科コースに、高校生・大学生に混じって通っているようだ。

彼女はいつも黒と黄色の表紙のスケッチブック持ち歩いていて、何か思い付いたことがあるとそれに鉛筆でサツと何かを描いている。普段は眼鏡をしておらず、小柄なものあつて少し幼く見える彼女だけど、絵を描く時には眼鏡を掛けていて、その時の表情はずっと大人びて見える……つて、この鉛筆9Bつ？ そんなのあるの？

その後の留美と藤沢さんの様子を見てると……なーんかギクシヤクしてるんだよねえ。話の内容なんかや話し方はなんだか親しそうなのに、突然どっちかが言葉に詰まったみたいになつて、気まずい雰囲気になつたり……。

何かはあるんだろうなと思うんだけど……表面上はお互い仲良くしてるので無理に踏み込むことも出来ないし、それに藤沢さんは毎日来るといいうわけでもない……。

まあ、そんな感じで順調に劇の準備は進んで行き、今日は保育園の子たちとの初練習。といつても、代表の子以外は、天使の格好でケーキとお菓子を配ってもらうだけなんだけど。ただ……。

「るーちゃん、このろうそくおもしろいねー。ぐるぐるだねー。火がついたらきれい？」
「そーだねー。あ、けーちゃんはあんまり見たことないの？」

「えーと、さーちゃんが『火はあぶないから』って小さいろうそくしかつけてくんない」
留美と話してこの代表の子が、もう超カワイイの。

例の天使コスプレセットを身に着けた姿は……何これ天使？本物の天使なの？お
家を持って帰りたいっ！

んん？ 今、留美のこと「るーちゃん」って呼んでた？ それに留美も「けーちゃん」
とか。なにそれズルい。あたしも混ぜてもらおう。

「ねーねー、けーちゃん？ おねーさんのことも『るーちゃん』みたいに呼んでー」
「いーよー。おねえちゃん、おなまえなんていうの？」

彼女がくりくりのお目で可愛く聞いてくる。

「あたしは、『あやせ あやか』っていうんだけど……」

けーちゃんはほんのちよつとだけ視線を上にするようにして考え、

「じゃあ、『あーちゃん』」

そう言つて彼女は、にぱつと天使の笑顔……癒やされる……。

「へへっ、ありがとー、けーちゃん」

「うんっ、あーちゃん」

ぐはっ、これは想像以上に嬉しい。

……テレテレテツテツテター「あやかは『あーちゃんのしょうごう』をてにいった」

「じゃあほら、陶子もっ」

「え、私も？」

「ほらほら」

「あ、ええと私は、『なかはら　とうこ』だよ」

「じゃあ、『とーちゃん』」

「ぶっ」

「とーちゃ……ちよつと絢、それに鶴見さんまで何笑つてんのよ！」

陶子はムツとした顔で私たちに言い、

「ね、ねえけーちゃん？　ちがうのないかなあ」

けーちゃんにそう願うする。

「んーとね、あ、『トコちゃん』は？」

「トコちゃん……うん。ありがとうけーちゃん」

……テレレテツテツテツター「とうこは『トコちゃんのしょうごう』をてにいれた」

……しつこい。

「あ、そうだ綾瀬、今ちよつとだけいいか？」

見事「あーちゃん」の称号をゲットし、意気揚々とホールを出ようとした所で比企谷さんに声を掛けられた。ちなみに留美達は先に「お花摘み」へ。

「はい大丈夫ですよ。でも……わざわざなんです？」

「いやその、留……鶴見と藤沢の事なんだが……」

「ぶ。別に言い直さなくてもいいですよ。比企谷さんが留美を名前で呼んでんのなんて最初からですし」

そう言うのと、彼は少しだけ照れたように頭を掻きながら、

「まあ、な。ただ、そもそも俺は誰かを下の名前で呼ぶつてのに抵抗があつてだな」

と、よく分からない言い訳をする。

「ええー？ だつたらなんで留美のことだけは名前で呼ぶんですかあ？」

すると、比企谷さんは少し言いよどみ……

「そういえば綾瀬は留美と違う小学校だったな……。その……留美にとって、『下の名前で呼び合う』って事には、俺らが普通に思うより大きな意味があるみたいなんだわ。

だからまあ、留美がそう呼んでほしいって言うんならそんなくらいはしてやろうと……まあそんな感じだ」

「なんでそ……まで……」

「まあ、責任っていうか……夏にちよつといろいろあつてな」

夏……例の林間学校の時のことか。……留美は、「お世話になった」としか言わないけど……。

「なんだかよくわかりませんが、まあとにかく留美と泉ちゃんの話、ですよ」

「おお、そうだったな。スマン」

「いえ」

「あの二人の様子……どう思った？」

ああ……。へへつ、やっぱ比企谷さん、留美のことよく見てるなあ。

「その、無理に笑ってる、とかそういうことですよな？」

「おう。藤沢に聞いた話では……ああ、うちの書記の子の方な。……で、あの二人、前は本当に仲良かったのに、半年ぐらい今みたいな状況が続いてるらしい。

「半年も……ですか？」

そこまでとはさすがに意外。ギクシヤクしたにしても、もつと最近の事かと思つてた。

「ああ。ただ、俺が見た限りあの二人はお互い元のように仲良くしたいと思つてる……ように見える。だから、何かきつかけさえあれば……な」

「でも……きつかけて言つても……」

「まあ、今すぐでなくても、自分たちの小学校以外の場所、例えばここで一緒に何かをやることで少しずつ変わって行くかもしれない」

「はい」

「で、二人が気まづくなったりギクシヤクした時にうまくフォローしてくれるヤツがいればなあ、と」

「なるほど、それをあたしに。……でも、なんであたしなんです？」

「お前たち二人が、名前で呼び合ってるから、つてのが一つ。……さつき言っただけに、留美にとって『名前と呼ぶ子』は特別だと思うからな……」

あとは、何となく綾瀬なら大丈夫って感じがしたから。……どうだ、頼んでもいいか？」

「もちろんです。あたし、留美のこと好きですし。あと、それから……」

「ん？」

「さつき比企谷さん、『責任』とか難しいこと言っちゃいましたけど……留美は比企谷さんに、『留美』って呼ばれるのとっても嬉しそうです。……だから、大丈夫ですよ！」

上手く言えない……何が大丈夫なんだか……。でも、ニュアンスは何となく伝わったようで、比企谷さんは眩しいものを見るように目を細め、

さわさわつ、とあたしの頭を撫でてくれる——つて、ひやあああく。こ、これ、留美限定じゃ無いのっ!?

「なんつーかその、ありがとな」

ふわあくあく、あつたかくつてちよつとだけ重い……でもその僅かな重さが気持ちよくつて……。な、なんとという破壊力。これが八幡大菩薩の右手に封印されし能力ちからかッ。……いやそうじゃなくてっ。

それに比企谷さん、何フツーに『ありがとな』とか言ってるんですか！ ちよつとは動揺したり恥ずかしがったりしなさいよ！

……けど、これ……留美が気持ちよさそうにしてたのわかるわ。なんだか脳みそ溶けそう……。

「……はう……」

「お、スマン。つい……な」

あたしが動作不良を起こしてるのに気付いた彼がすつと手を引つ込める。「つい」つて……。

「いえあのあの……はう……」

くそう、比企谷さんの手が離れた時、もうちよつと撫でて欲しい……とか思っちゃつ

たじゃないか。ここは反撃の時だ。あたしは無理やり心を立て直し、

「へへっ、それなら今度は、あたしのことも『絢香』って呼んでくださいよ」

、そう言つて、わざとらしく上目遣いをしてみる。

比企谷さんは、ちよつとだけびっくりしたような顔をして、

「……あや……」と言いかけたものの、

「やっぱやらん。恥ずい」

そう言つてぷいっとそっぽを向いてしまった。

ええ〜、あなた乙女の頭を撫でておいて今更ですかあ……。

斯くしてあたしは、「留美と泉ちゃん対策特命係」（脳内変換）としての任務を受けたのでしたっ。

新しい友達 続 につづくっ。

幕間 新しい友達 続

「背景変わります」

確認役の子の声が響き、ステージ奥のスクリーンに映し出されていた背景が、『繁華街』から、『髪用品店』に切り替わる。数秒だけ、『マダムなんとかの髪用品店』のカットインが入るのがなんか格好いい。

イベントまで三日。今、総武高側のステージ、『賢者の贈り物』のリハーサルが行われている真つ最中……なんだけど……。

……暇だ。

ジムの出番って、演劇の本編では最後の方だけなんだよね。まあ、その後キャンドル・サービスとかあるけどさ。

これが本番なら、出番が無いからと言って衣装のままですの辺をウロウロするわけにもいかないんだらうけど……リハーサルだから、ということで客席の最前列から留美と陶子の演技を眺めている。

留美が、

『その値段で構いません。どうぞ髪を切って下さい』

そうセリフを言うのとサツと幕が降りる。といつてもリハーサルでは下のほうが空いたままだけど。

スピーカーから、ジャキジャキと髪を切ってるみたいな音が流れてくる。その間に留美がロングのカツラからショートカットのカツラに取り替えて……。あれ？ なかなかカツラが外れない？ 二人が慌てるのがわかる。

ばんばん、と、手を鳴らす音。

「ストツプウオッチとめてくださーい」

あたしの横、ステージのほぼ正面で見えていた一色さんが、手を叩いて声を上げ、進行を止める。

「留美ちゃん、陶子ちゃん、無理に引つ張らなくていいから少し待ってて」
そう言いながら彼女はステージに駆け上がった。

あたしや比企谷さんも舞台上に上がり、何があつたのかを確認する。

「どうやら、カツラ本体の金具部分が、留美の髪の毛を喰うようにガツチリと挟んで引つかかかってしまったらしい。どうにかカツラは外れたけど、留美の、耳の後ろ辺りの地肌が赤くなっちゃってしまっている。」

「ごめんなさい……髪、ちゃんとまとまっちゃってなかったみたいで……」

留美がそう言うのと、一色さんは、

「そんなのいいです。それより……ここ、痛くないですか？」

そう言っつて、赤くなつてるところにそつと触れる。

「あ、ちよつとだけです。でも……」

「いいから気にすんな。誰かが悪いわけじゃない。むしろ本番じゃなくて良かったってだけの話だ」

比企谷さんや、他のみんなも気にしないように言ってくれたけど、留美はその後もし気持ちを引きずつてるみたいだった。うん、まあしょうがない。

結局カツラの問題は、留美の髪に薄いはちまきみたいなのをピン留めしたままにしておいて、ロング・ショートそれぞれのカツラを髪に直接じゃなく、そのはちまきに留めるようにする、という事になった。

それから、ショートのカツラも陶子が最初から隠しておくんじゃなくて、幕が降りてる間にあたしが運ぶ、というように変更になった。そうすればかぶる向きを確認した

り、髪を整えたり、ロングの方をまとめたりっていう手間が無くなるし、……なによりその時間、あたし暇そうにしてたし……ってそんな理由ですか……。

リハーサルは、中断こそあったものの、劇本編のほうは他に問題もなく終わった。ただ、その後のサプライズ部分が色々……。

保育園の子たちがケーキとかお菓子を配る時お互いにぶつかって転んだり、お皿（練習だから何も載ってない）を落としたりということがあった。これは、お皿を配り終えた子が後ろに戻るのではなく、ぐるつと大回りしてワゴンのところに戻るようになるとで解決。

結果として天使の動き回る範囲が広くなって、見た目もすごく華やかになった。

それから、あたし、留美、けーちゃんのカンドルサービス。

全テーブルを本番と同じつもりで回り、その時間を測ってみたら、ステージに戻って最後のろうそくに火を灯す頃には最初のろうそくが半分以上溶けてしまう、ということがわかった。さすが二本で108円だけのことはある……。

それに雪ノ下さんの、「あまり時間を掛けすぎないほうが雰囲気を保てる」という指摘もあって、無理に出演者のあたし達がやることにこだわらず、奥の方のテーブルは別の

キャンドル班を二つ作って対応することになった。

と、こうして、色々な問題が解決して、みんな、いよいよ本番、という感じに雰囲気
が盛り上がってくる。

そんな中、泉ちゃんが留美に、

「ね、その……背景、実際ステージで見てどうだった？ あれで大丈夫かなあ？」

そんなふうに感想を聞いた。

留美は、最初は笑顔で答え始め……、

「あ、うん！ 何ていうか、色がとつてもあつたかくつて、お話にはピッタリだつて思つ
たよ、それに……それに……」

……けれど、見ている間に間に留美の顔色が悪くなり、手先が小さく震え始めた。

あ、これマズイヤつだ。

「……留美ちゃん……？」

泉ちゃんの方も異変に気付いたみたい。

……どうしたら……つて。 ああもうつ、このまま迷つてたつてダメだつ。

あたしは留美に、後ろからかかえるようにして抱きついた。

「きゃ」

……留美の手、怖いくらい冷たくなってる……。

びつくりしてる二人に構わず、あたしはわざとらしいぐらい脳天気な声で言う。

「へへっ。るーちゃんもいーちゃんも何辛気臭い顔してんの？ クリスマスイベントなんだよ？ もっと明るく盛り上がっていかない？」

いーちゃんてだれだよ。なんて突っ込まれる前に、もうここは勢いでいくしか無い。「ちよつと絢香……」

あ、留美の顔色が戻ってきた。ほっとしながらあたしは続ける。

「ねえねえ、いーちゃん、留美ってばきっきのこと自分のせいだってまだ気にしてんの。みんなそんなこと無いよって言ってるのにさ」

留美は、あたしの方にくるりと振り向いて、

「別にこれは……」

そう言いかけたところであたしと目が合う。……涙で滲んだ目。

彼女は、安心したのか、力を抜くようにしてあたしに体重を預けてくれた。

あたしはそのまま、留美を抱きしめるみたいにして彼女の頭を撫でてあげる。

「あ、ごめ……私、ごめんねっ……」

留美の目尻から一滴だけ涙が溢れる——床にぼたりと落ちた涙の跡。あたしはそれ

に気づかないふりをした。

「へへっ、特別だよ。私は比企谷さんみたいに簡単にはいはい人の頭撫でたりしないんだからね」

良かった、留美笑ってる。でもほんとだよ。あたしは「ナデナデの安売りはしない女！」……うん、あんまりかつこよくない……。

その後、彼女は落ち着きを取り戻すと、いつものままの留美に戻っていた。……さっきの、何だったのかなあ。痛々しくてこつちが泣きそうだったよ……。

イベント当日の朝、あたし達がクリスマスツリーを移動させる準備をしていると、「剣・豪・将・軍っ」とかいきなり名乗りを上げて、変なおじさんがエントランスに入ってきた。クラーボックスを二つ肩から下げている。

最初は不審者かと思ってみんなぎよつとしてたけど……、みんなに睨まれると急に弱々しくなったし、総武高の制服着てるし、よくよく見ればそれほど老けているわけでも無さそうで……。うん、ただの「痛い人」だな、これは。

なーんて、ちよつとホツとしたところにさらなる衝撃が襲う。

彼の後、すつごく可愛い女の子が少し遅れて入ってきた。やはりクーラーボックスを肩に下げている。どうやら留美と知り合いで、戸塚さんというらしい。爽やかなライムグリーンのジャージを着てるけど、この娘も総武高の生徒さんなのかな？

彼女から比企谷さんの事を聞かれた留美が、

「……八幡なら、今隣の保育園に打ち合わせに行ってます」

そんなに時間はかからないだろう、みたいなことを説明してるまさにその途中で自動ドアが開き、比企谷さんと一色さんが並んで帰ってくる。

「せんぱい、雪ノ下先輩たちこれ待ってるんで先きますね〜」

一色さんは、手に持った封筒をひらひらさせて言う。

「おう、俺は調理室に荷物運んでからいくわ」

「了解です」

そう言って彼女はちよつと小首をかしげて、ぱちんとウインクしながら可愛く敬礼。はああ、わざとらしいけど、かつわいいなあ。女子としては見習うべきだろうか？

そんな感じで一色さんは、ちよこんと戸塚さん？ に頭をさげ、そのまま二階へと上がって行った。

比企谷さんは彼女のところにいそいそとやって来て、

「おお、もう着いてたか。遅くなってスマン。……その、悪いな戸塚、こんなこと頼んじ

まっつて」

比企谷さん、なんか、嬉しそうだなあ……。

「何言ってるのさ、八幡。僕から手伝いたいって言ったんじゃないか」

む、……この人、比企谷さんのこと「八幡」って呼んでる！ しかも「僕っ娘」だどっ

！

「まあ、な。でも、重かっただろ。……こんなの、材木座に全部持たせればいいのに」

「ひどいなあ。それに、そんな事したら僕の仕事が無くなっちゃうよ」

「何を言う！ 戸塚は俺の近くで笑っていてくれればそれでいいんだ！」

比企谷さんはなぜか拳を握って熱く語る……。つて、愛の告白かよ！

「あはは。八幡は冗談が上手いなあ。それに大丈夫。僕、こう見えて体力あるんだよ。ちやんと運動部の部長やれてるんだから。……それにほら、腕の筋肉だつて結構有るんだからね……」

彼女は比企谷さんの手をとり、腕をペタペタ触らせたりしてる。

「お、おう……」

比企谷さんは比企谷さんで、頬を赤くして彼女の腕をムニムニと……つて、ええ〜、こゝ、こゝこに來てまた新しい女登場とか……。しかもやたらとペタペタしてるし……。

「ね、ね、留美。あの娘やばいんじゃないの？ 比企谷さん、すごいデレデレしてるよっ。あつちが本命なんじゃないの？」

留美の肩をガクガク揺さぶっても、彼女は妙に冷めた顔。……アンタわかってんの？ 雪ノ下さんにも由比ヶ浜さんにも一色さんにもデレてない比企谷さんが大デレですよッ！

「あー、大丈夫、つて言うのかな？ こういう場合。……あの人、戸塚さんていうんだけど、男の子だから」

男の娘？ 何いってんのこの子は。

「あのね留美っ、冗談言ってる場合じゃ無いよ。もしかしたら雪ノ下さんたちより強力なライバルが……」

男の娘なんて現実にもそう居るもんじゃなくてオトコノコは男の子だから……？

慌てるあたしを留美は、「うんうん、わかるよ」みたいな顔でじっと見てる。……え？ ホントに？

「……………マジっ？」

「……………うん」

「ええええ、し、信じらんない。けど、言われてみれば確かに……僕っ娘なんか現実には

そうそう居るもんじゃないし……。でも、これって違う意味でもっとやばいんじゃない……」

そう、これはもしかして、女子が腐つちやう感じの人たち大歓喜みたいな状況なので
はっ。

留美はなんだか呆れ顔であたしを見てるけど……。比企谷さんて、そつちの趣味の人
なんてことは……。無いよね？

『こちらのお店で、私の髪を買っていただけますか？』

『そりゃあ、商売だからね。……けど、まずは見せてもらってからだよ』

総武高プラス小学生演劇チームの舞台本番、『賢者の贈り物』は、リハーサルでトラブル
ルのあつた、髪用品店の場面に入ってきた。

もちろん対策はしたし、今回はうまくいくはずだ。そう思っただけでも、みんなどう
しても緊張してしまう……。

『その値段で構いません。どうぞ髪を切ってください』

デラのセリフに合わせて照明が落ち、幕が下りる。完全に幕が下りたところで一つだけライトが点灯した。

一色さんにぽんと肩を叩かれ、シヨートのカツラを持ったあたしは舞台袖から飛び出して留美と陶子のところへ向かう。

あたしが二人のところに着いた時には、もうロングのカツラを外し終えたところだった。

「向きはこのまま。そつちが前ね」

あたしはそう小さい声で言つて、シヨートのカツラを、陶子と二人で留美の頭にかぶせる。そして、焦るけど慎重に、留美の巻いてるはちまきみたいなやつにピンで丁寧に留める……。よし、OK。

陶子も指でOKサインを作ったのを確認して、あたしは受け取ったロングのカツラを丸めて抱きかかえると素早く舞台袖に引っ込んだ。

ひと呼吸置いて振り向くともう、一つだけ点いていた明かりは消えていて、それからゆっくりと幕が上がっていく。

『どうだい、短い髪もなかなか似合ってるじゃないかね』

陶子のセリフに合わせて、スポットライトがショートカットになった留美を照らすと、会場が大きくどよめいた。

……よし、上手くいったあ。

一色さんが心底ホツとしたように溜息を一つつき、すぐにインカムで何か指示を出す。……そこであたしと目が合った彼女は、ニコツと微笑つて可愛く片目を閉じた。

さあ、いよいよあたしの、ジムの出番がやって来る。

カラン、というドアベルの音を合図にしてあたしは舞台上がる。

『ただいま。デラ、ねえこれを……』

懐に手を入れたままセリフを言い、そこから視線を上げる。

……そのまま目を見開いて動きを止めるんだけど……。

脚本を書いた書記さんに、「できれば瞬きもなるべくしないで」と言われてしまっている。これが地味にキツイんだよね。

『おかえりなさい、あなた。今、お鍋を火に掛けるから、少し座って待っていて』

留美デラに言われてもそのまま動かない……。懐に突っ込んだままになってる右手

がつりそう……。目もヒクヒクしてきた。

『そんな顔しないで。……髪は、切って、売っちゃったの』

『髪を……切っちゃったって?』

はあ、ようやく動ける。

『そうよ、だって、どうしてもあなたにプレゼントをしたかったんだもの』

『……髪を……切った……』

あたしは馬鹿みたいに同じようなセリフを繰り返す。

『お願い、ジム。私のことを嫌いにならないでちょうだい。……髪は短くなってしまうけれど、ちゃんとお洒落もしたし、いつもよりちよつとだけ上等のお肉も用意したのよ。……それにワインだってあるわ』

留美が切ない声で訴える。

あたしは、「なんてことだ」みたいな感じにゆっくりと左右に首を振り、がつくりと俯く。

『お願いよ……ジム。今日はクリスマス・イブなのよ……』

今にも泣き崩れそうな留美の声。……なんだかキユンとしちやう。

そして、あたしは……ジムはデラをぎゅつと抱きしめる。ちらつと留美の表情を伺うと、彼女の口が小さく「八幡」と動いたように見えた。

『ジム?』

留美はそう言ってそのまま潤んだような瞳であたしの顔を見上げる。……かわい
いなあホントにこの子はもう！ 思わず留美を抱きしめる手に力が入ってしまい、窮屈
そうにわずかに身を振った彼女から睨まれちゃった。

ごめん。君が可愛すぎるのがいけないのだよ——じゃない！

……馬鹿なこと考えてないでちゃんと演技しなくちゃね。

あたしは手の力を緩め、改めて懐からプレゼントの箱を出して、テーブルの上にトン
と置く。そして留美の目を見つめ、

『デラ、僕のことを勘違いしないでくれ。髪型とか化粧とかシャンプーが変わった
とか、そんなもので僕のかわいい奥さんを嫌いになったりするもんかい。でもね、そ
の君へのプレゼントを開けたら、さつき、しばらくの間どうして僕があんな風におか
しかったか解つてくれると思うよ』

よし、完璧つ。なにを隠そう、これがジムの一番長いセリフなのだ。これが上手く言
えると、あとはなんとかなるって自信が湧いてくる。

そして留美デラはプレゼントの包みを開き、歓声を上げた……。

海浜高・総武高両校によるステージは大成功のうちに終了し、イベントも大きな山を越した。

今、あたし達はお客さんと一緒に、雪ノ下さんや、由比ヶ浜さん、それになんと比企谷さんの妹さんの小町さん達お手製の超美味しいケーキとクッキーをお供に贅沢なお茶の時間を過ごしている。

……そう、比企谷小町さん。さつき少しだけあいさつに来てくれて、留美に紹介してもらった。比企谷さんの妹で中学三年生。目が濁っていないこと以外は整った顔立ちといい、お兄さんとよく似ていると思う。留美とはたまにメールのやり取りをしているとのこと。

小柄で可愛らしい。……一色さんと少しだけ印象が似てる……かな？

小町さんが自分のテーブルに戻って行った後、留美が

「知り合いに挨拶してくる」

と言って、なんだか気合い入れてホールの一番端の方にあるテーブルに歩いていった。彼女はさり気なく席を立ったつもりみたいだったけど、小学生はみんな注目しているよー。

で、今、総武高の高校生達（当日参加の人たち）が座っているテーブルのところでは何話してるんだけど……。何で留美の周りには美男美女ばかり揃うのかな。

「ね、絢、あの留美と話してる人たち、カッコイイ人ばかりだよね」

陶子も気がついてたようで、もつともな感想を口にする。

「うん……なんかキラキラしてるね……髪とか」

「いや、それだけじゃ無いでしょ……」

あたしたちの話が聞こえたらしく、隣のテーブルに座ってた男子が、

「おれ、あの人が知ってる。今鶴見さんと話してるの、総武サッカー部の主将の葉山さんだぜ。秋の大会で県のベストイレブンに選ばれてた」

と、なんだか嬉しそうに教えてくれた。

はー、見た目が良いだけじゃ無いんだ……。でも、サッカー？ 留美とどんな知り合いなのかなあ。

それにあたしは、留美と話してたもう一人、髪の毛長いおねーさんに興味を持った。何ていうか、綺麗だけど、それだけじゃ無い、いい女オーラ？ みたいなのを感じる。

留美は彼らに何度か頭を下げ、それからどこかホツとしたような顔になって自分のテーブルに戻ってきた。あたしはさっそく、

「ね、留美。あのイケメン集団と知り合い？」

まずそこから聞いてみた。すると、

「あ、うん、あの人達も林間学校でお世話になって……その、八幡と一緒に」

「なにそれ……。その、林間学校の時のメンバーって顔で選んだの？ 雪ノ下さんとか由比ヶ浜さんもそうなんですよ」

「うん……あ、あと、戸塚さんと、それから小町さんも」

うわ、美形ばかりじゃん。比企谷さんはともかく（ヒドイ）。

いや、そのね、比企谷さんもイケメンの部類だとは思うんだけどさ。それにあの目も見慣れてくれば大して気にならないし。うん。

あ、総武高生といえは、

「……ちなみにあの材木さんは？」

確認のため聞いてみると、

「い、居なかった」

との答え。はい、顔で選んだの確定ですね。まあ、だからどうしたって話だけど。

そんなことより、

「あたし達のこととも紹介してよ〜」

あたしは留美の手を握ってお願いする。すると、

「あ、じゃあ私も」

「それなら俺も！」

陶子や、それから、さつき「サッカー部の葉山さん」のことを教えてくれた男子が食いつく。

「え、やだよ、紹介とか……」

でも、留美はなんだか渋い顔。

「えー、留美には比企谷さんがいるんだからいーじゃん。独り占めはんたうい」

そう言うのと、留美は、照れと呆れが混ざったような変な顔をする。

「別にそんなんじゃ……」

「特にあの、髪長いおねーさんとお話してみたい」

そう言うのと留美はちよつとだけ驚いたようだ。……ふふふ。女子がすべて葉山さんのようなイケメンに群がるわけではないのだよ。……まあ、別に美形が嫌いなわけではないけどね。というか、眺めるのは好きだけだね。

「へへ、きれいで格好いいじゃん。あーゆうの、やっぱあこがれるよね」

「おれも葉山さん達に話聞いてみたい！ 鶴見さん、頼むよー」

「あ、えーと、別に私が紹介とかしなくたって……」

「ねー、鶴見さん、お願いっ」

「……………」

「……………」

抵抗むなく留美はみんなに押し負け、小学生のうちあたしたち十人ぐらいが葉山さんたちのテーブルの方に移動してきている。

留美が、

「あの、この子たちがみなさんとお話してみたいって言うんですけど……………」

と、なんとも申し訳無さそうに言ったお願いを、彼らは笑ってOKしてくれた。

「…………綾瀬、匂香っていいいます」

「あ、アンタさつきダンナ役やってた子だね。…………へえ、背え高いんだね。あーしと変わんないじゃん」

「はい、身長ばかり伸びちゃって…………ちよつとコンプレックスだったりするんですけど」

あたしがそう言うと、三浦さんは、

「なんで？ 小学生でそんだけ背高いって超かっこいいし。堂々としてれば？」
そう何でもない事のように言う。

はあー、三浦さん、思ってた通り格好良い人だ。……それに、思ってたよりずっと優しくして繊細な人だ。

言葉遣いとかはアレだけど、話しかけにくそうにしてる子にも気付いて、自分から声をかけてくれたりする。

少しきつめ、というか強気な印象を受ける目元だけど、これってわざとそういうメイクにしているのかも。よく見れば別につり目ってわけじゃないし、笑顔はすごく穏やかだ。

もしかしたら、すっぴんは優しい顔だったりするんじゃないかなあ。

それに……時折葉山さんを見つめる横顔が……なんてゆるーかもう、超乙女なの！

まあ、少し見てればすぐ、彼女が葉山さんの好きなのはわかる。そう思っただけでと彼に対する仕事とか態度とかがいちいち可愛く見えてくるんだよねー。

葉山さんを、「はやとー」って呼ぶ時の、「や」から「と」にかけてちよつとだけ声が上がるとか、もう、きゆううんってしちゃう。

ふむ……わからないかね？ ならば君は、恋愛ウオッチャーとしてはまだまだだというとき。

色々あったクリスマススイベントもどうにか無事に終わった。

観に来てくれた家族の反応も良かったし、出演者のはしくれとしてはもう大満足。……なんていうの？、こう……やりきった感、みたいな。

あたし達は、講習室で夕方に行われる簡単な打ち上げ、「お疲れ様会」が始まるまでの時間を、会場とか講習室とかの片付けをしながらダラダラと過ごしていた。

倦怠感と、高揚した気持ちりが混じり合ったみたい不思議な気分。……「祭りのあと」って、こんな感じなのかな……。

さつき、作業が一段落したところで、留美が、

「ね、ちよつとだけぐるつと見てきていい？」

なんて言い訳をして出ていった。まったく、どうせみんな応援してるんだから、「八幡に会いに行ってくる」とか言えばいいのに……。素直じゃないなあ。

陶子が、「比企谷さんは控え室に居るよ」って教えた時の、ほんのり頬をピンクに染めた嬉しそうな顔と言ったら……。へへ、きつと真つすぐ控え室に向かったに違いない。

ところが、留美が出て行って少ししてから、比企谷さんが、誰かを探すように周りを見回しながら講習室にやって来た。あれ、留美と行き違いになっちゃったかな。

「あれ、留美と会いませんでした?」

あたしがその声を掛けると、

「お、ここにいたか」

と比企谷さん。……あれ、探してたのあたし?

「綾瀬、ちよつと急ぎで頼みたいことあんだけど、今大丈夫か?」

「あ、はい。こつちだいたい終わりですし……でも留美が……」

「ああ、留美なら今控え室に居る。……それでお前、奥の階段の、ホールに上るとこの踊り場ってわかるか?」

「え……と、はい」

それなら知ってる。講習室からだとホールに上がるには遠回りになるからほとんど使わないけど。

「そこに、藤沢を、『控え室の前を通らないように遠回りして』連れてきてくれないか」

え、控え室を通らずに……さっきの話からすると、

「留美に見られないように、つてことですか？」

「……まあ、な。俺はちよつと用意するもんがあるから……頼む」

詳しい事情はわかんないけど、つまりこれは、特命係（仮）の任務ですね。よし、ここは今朝新たに学んだ技を使う時……。

「了解ですー！」

そう言つてあたしはビシつと敬礼してぱちんと片目を閉じる。少しだけ前かがみ、小首をちよつとだけ傾げる。この曲げ過ぎない角度がポイントだ。

「……それ、やめといたほうがいいぞ、一色のあざといのが感染るから」

比企谷さんは呆れたようにそう言った。

「あ、あのく、これつてどういう……」

さて、例の踊り場の隅には事情がいまいちよく分からずにオロオロしてる泉ちゃん。今、あたしと比企谷さんで、まるで彼女を囲んで閉じ込めるみたいに空の段ボール箱を積み上げているところだ。

いじめじゃないのよ。念のため。

「悪いが藤沢、俺の言うとおりにしてくれ」

「は、はい」

泉ちゃんが不安げに頷く。

「もう少ししたら、俺と留美がここで話をする……予定だ」

「予定……ですか」

「事情が変わったら連絡するが……とにかく、俺達が何を話していても……俺が良いと言うまで絶対に出て来ない。声も立てない。……という事で頼む」

「それって……」

「たぶん、お前にとって気分のいい話じゃないかもしれない。けどな……それできっと何かが変わる。……藤沢も、今のままで良いとは思ってないんだろ」

「……はい」

ダンボールの壁の向こうで泉ちゃんが小さく、でもはっきりと返事をした。
「あのー、あたしはどうしたらいいですかね？」

あたしが比企谷さんにそう尋ねると、彼は少しだけ迷うような顔をした後、

「あー……綾瀬は、部屋にもどって知らなかったふりしてろ」

そう答えた。

「え、でも……」

「いや、これがもしうまくいかなかったら……綾瀬が手伝ってたって事になれば留美とお前の間が気まずい事になるかもしれないし……。だから、な」

ああ、なるほど……考えたくもないけど、今より悪くなることだってありえなくはないんだよね……。

「わかりました……」

そう言われればここは納得するしかない。

「よし、じゃあ留美を待たせてるから、一度下降りてここに連れてくる。……あ、藤沢」

「はい？」

「そこに一個置いてある箱は、中身も段ボール詰めたやつだから、椅子代わりにしていいぞ」

「はい、ありがとうございます。それから……その、よろしくお願いします」

「……おう。ま、お前の従姉からの依頼でもあるしな」

そう小さく返事をして、彼は階段を降りていった。え、依頼って何？ 比企谷さんって、もしかして高校生探偵……いや漫画じゃないんだから。

あたしは、気にはなりつつもその場を離れる。……どうか上手くいきますように……。

あれからどうなったのかなあ。講習室に戻ったあたしはヤキモキしながら待っていたんだけど……。

お疲れ様会まで30分を切り、テーブルやら飲み物やらの準備が始まった頃、ようやく比企谷さんがすつと講習室に入ってきた。

……留美と泉ちゃんの姿は見えない。どうしたんだろう。

心配してるのが顔に出ていたんだろうか、あたしに気が付いた彼は、「大丈夫」というようにひとつ頷く。

それから比企谷さんは雪ノ下さん、由比ヶ浜さん、それから総武高生徒会の人たちと何か話してただけ……一段落したところで、ようやくあたしの所に来てくれた。

留美たちの事、聞かなきゃ。

「あの、比企谷さん……？」

「おう。……アレだ、多分うまくいった、と思う」

「多分……」

「いや、あとは二人だけのほうがいいと思って最後まで……な。まあ心配ないだろ」

そか、留美たち、仲直り出来たんだ。……はあくくよかったあ。

ほんと、リハーサルの後の時なんかもう痛々しいぐらいだったし……でも、一体どうやって？

あの二人の抱えてるものって、なんか複雑そうで……『お互いゴメンナサイして、はい仲直り』みたいな簡単な雰囲気じゃなかったと思うけど。……あれ、そういえば比企谷さん、なんだかずっと左の頬を触っているような……。

「比企谷さん、それって……」

あたしがその不自然な手の動きをじっと見ているのに気付いても、

「ま、ちよつとな」

彼はそれしか言わない。

「大丈夫なんですか？」

あたしが聞くと、比企谷さんは、

「このくらい大したことじゃない」

そうして話を打ち切るように、

「とにかく、今回は変なことさせて悪かった。サンキューな……絢香」

そうやってあたしの頭をぼんぼんと撫でた。

……つて、ぎやああああ。絢香？ 絢香つて言った今？ そんなでもつて頭ぼんぼんつて。

な、何してくれんの比企谷さんつ。うわこれ、自分でも顔赤くなつてんのわかる。

「な……なんで」

あたしがやつとの思いでそう聞くと、

「なんでつて……こないだ自分で言つてただろ、名前と呼べとか。だからまあ、一回くらいは、な」

ぐわつ、そう言えばあたし言いましたね……「あたしのことも『絢香』つて呼んでくださいよ」とか……。ああでも、一回だけかあ……。

つて、いやいやそこはがっかりするところじゃ無いでしょ！

すると比企谷さんは急に手を引つ込め、

「ま、とにかく助かったわ」

とかなんとか言つてすうつとあたしから離れると、何故かそのまま部屋から出ていってしまった。……どうしたんだろう。

——一瞬、背後に冷気を感じた。

「あーやかっ」

いきなり真後ろ三十センチ位のところから呼ばれる。

「ひやつ！」

あたしが慌てて振り向くと。目の前に留美が仁王立ち。

「あ、な、なに？ 留美」

あちやう、いつ戻ってきたんだろ。……あ、さては比企谷さん逃げたな。ずるいじゃん自分だけ……。

ここは一つ、何でもないこと、みたいな感じで行こう、と……、

「大丈夫、ちゃんと見てたから……。今の何？」

笑顔なのに、感情を殺したような低い声。……それはちつとも大丈夫じゃないやつですわねわかります。

「ちよ、留美怖っ……」

いや誤解だからね？ あたしはただ留美たちのことを心配してただけで……。うん、そう……それだけ。だから、

「へへー……いやあ、年上男子に頭撫でもらうっていいもんだねえ。ほら、私背え高
いからさ、同級生とかだとちよつとさ……」

そう、本音を冗談っぽく言っただけです。

留美がなんとも言えない顔であたしを見ているので、あたしは一つため息をつき、
「あはは。……いや、そのね、留美のこと頼まれてたんだよね……比企谷さんから」
そう種明かしをした。

「な……」

「あんたと泉ちゃんがさ、色々複雑みたいだから、『それとなく気をつけてやってくれ、頼む』って感じに……」

さすがに驚いてるみたい。ここでさらに追撃を。

「実はさっき泉ちゃんを階段とこに連れ出したり、段ボール箱積むの手伝ったりしたりしてましたっ。あは。……で、今のは、『うまくいったから、ありがとな』みたいな……」

留美?」

彼女は唾然として、あたしと泉ちゃんを交互に見て目をぱちぱちさせてる。

泉ちゃんは照れ笑いまいたいな顔でおでこを掻いてるし。

留美は、一度大きく息を吐くと、すっごくいい笑顔でふふつと笑い、

「ごめん。絢香、泉ちゃん、またあとでっ」

そう言って講習室を飛び出して行く。

「はいはい、いってら〜」

その背中にこっちも笑顔で声を掛け……、

留美が見えなくなったところで素早く泉ちゃんの手を握り、一言、
「追っかけるよ——静かに」

と言って、そのまま彼女を連れて走り出す。

「え、ええ〜」

「あ、あの、こーゆーのってよくないんじや……」

「しっ。泉ちゃん、声低く」

「あ、ごめんなさい。でも……」

「まあまあ。ここを見逃してどうすんのよ。恋愛ウオツチャーの名が泣くよ」

「わたし、べつに恋愛ウオツチャーとかじゃ……」

「あ、なんか動きが……………」

ここはエントランスの隅っこ。

留美たちのいる自販機コーナーから少しだけ離れた場所で、今朝までツリーが置いてあった場所の目の前だ。

あたしたち二人は、そこに並んでいるソファアーベンチの間に隠れて留美と比企谷さんの様子を覗いて……………じゃなくて見守っている。

だって……………ねえ、気になるじゃん、ここまで付き合っただしさ。

「……………ほんとに、ありがとう」

留美の声が小さく聴こえてくる。

比企谷さんは、

「そか」

と、一言だけ言って、笑う。

その後二人はなんにも言わずにただ並んで座ってるだけなんだけど、なんだか雰囲気あるんだよねえ。二人が、くつつくかくつつかないかギリギリぐらいの間を空けて座っ

てるってのがあたしのにイイ感じだ。

「ねえ、ちよつとほつぺ見せて」

どれくらい経つただろう、留美が比企谷さんの顔を覗き込むようにして言った。

「いや、んなもん見てどうすんだよ」

「いいから」

比企谷さんが手でガードするみたいにしたけど、留美はベンチに膝立ちすると、そのまま彼の肩に体重を預け、その手を剥がした。

留美は比企谷さんの赤くなった頬を見てわずかに顔を歪めた。

「ごめんね、痛かったでしょ……」

「あー……まあ、少しだけな」

彼女は、比企谷さんの頬にそつと触れ、指先で静かに撫でる……。

あれ？ 留美……なんだかぼうつとして……。

ふらつと、吸い寄せられるようにして留美が比企谷さんに近づいていく。

え、ここ、これつてもしかして……。

彼女はそのまま、比企谷さんの赤くなった頬にそつと触れるようなキスをした。

—— 一瞬、時間が止まる ——

ひやあああゝゝ。きたこれ！ 大スクープ！ じゃなくてっ！

泉ちゃんなんか、さつきまで嫌がってたくせに、両手を口に当てたまま目を丸くしてガン見だ。……なんかうるうるしてるし……。

留美すごい！ あたし達が出来ないことを平然とやってのけるっ！ そこにシビれる！あこがれるウー！ ……って、いやいや。

それに、「平然と」ってわけでも無さそうだしね……。

「なんっ……!?!」

留美の予想外の行動に、ちよつとだけ固まっていた比企谷さんが弾かれたように椅子から立ち上がる。

留美は留美で視線があっち行ったりこっち行ったり定まらず、なぜか両手を中途半端に上げてジタバタするように動かしてる……ぷ。なんだか可愛い……ペンギンみたい。

二人共可笑しいぐらい真っ赤になってるし。

「る……おま、何してんの？」

へへーん、いつもどこか余裕で人の頭撫でたりしてる比企谷さんが珍しく慌ててる。

……ザマーミロだっ！

留美は、真つ赤な顔をいつそう赤くして、

「お……おまじない。おまじないだからっ。……早く治るようになって」

そう言うのと、恥ずかしさの限界に達したらしい。そのまま小走りに廊下を走って行ってしまった。……講習室、そっちじゃないよ……。

……だいたい、カエルの呪いじゃないんだから、ほっぺの赤く腫れてるのがキスのおまじないで治るとか聞いたこと無いし……あれえ？

訂正。ごめん留美、おまじないちゃん効いてるわ。

……比企谷さん……顔全部真つ赤だから、頬が赤くなつてたのなんてわかんなくなつてる。

ふと気がつくと、あたしの横の泉ちゃんが、まだ両手を口に当てたまま、赤くなつてうるうるを続けていた。……こっちはこっちで固まつてたか……。

その後、あたしはどうか泉ちゃんを正気に戻し、お疲れ様会の始まる前には無事に講習室に戻れたのでした。

あたし達が講習室に戻ってから、少しだけ時間を開けて、留美も、それに比企谷さんも、「出来るだけさり気なく」みたいな感じでここに戻ってきていた。

ただ、さすがにちよつと気まずい……というか気恥ずかしいようで、お互いをチラチラと見たりして意識しながらも、留美は私達と一緒に部屋の後ろの方の壁際で、比企谷さんは材木さんや戸塚さんがいるテーブルで、とそれぞれ別々に過ごしている。

たまーに目が合っちゃやうと、二人してお互い慌てて目えそらしたりしてるの。ふふふ。若い二人は初々しくて良いのう……。

打ち上げが始まってからしばらくして、由比ヶ浜さんと雪ノ下さんが二人で私達小学生のほうにやって来た。

「みんな、おつかれさま〜。飲み物とか足りてるかな?」

「おつかれさまです」
「だいじょぶです」

みたいな感じで、みんなで一通り、「お疲れ様のごあいさつ」
後はまた皆バラバラに雑談が始まる。

……そして、

「ねえ、留美ちゃん……」

みんなの注目が逸れるのを見計らっていたかのように、由比ヶ浜さんが少し表情を引き締めて、いよいよ本題というふうになぞう切り出した。

「は……は……」

「あのさ、お願いがあるんだけど……」

「ちよつと、由比ヶ浜さん……」

話し始めた由比ヶ浜さんに、雪ノ下さんが窘めるたしなような口調で声をかけた。

けれど、由比ヶ浜さんはそれを目で制し、もう一度留美に向き直る。

……すると留美のほうもちよつと気圧されるみたいな感じになり、表情から笑顔が消える。……まさか、さっきの見られてたとかじゃないよね？

え、何これ……も、もしかして宣戦布告とか!?

『私のヒツキーに手えださないでっ』とか言っちゃうのっ？

……い、いわゆるしゅ、修羅場ってやつ？ ……ってあわわ……。

「私たちのことも、名前で呼んでくれないかなあ」

ズル。

いや、マジでコケそうになった。……でもなんで今？

「あの……？」

さすがに留美も戸惑ってるみたい。

「あはは……。何ていうかさ、夏とか、今回とかで、留美ちゃんと私たち、けっこう仲良くなれたと思うんだよね……」

由比ヶ浜さんはなんだか照れくさそうにしながら話を続ける。

「でもさ、留美ちゃんはヒッキーとだけ名前で呼び合っていて、私たちのことはずっと「由比ヶ浜さん」「雪ノ下さん」だし、なんか寂しいっていうか、そのズルっていうかだし……。ね、ゆきのん！」

急に振られた雪ノ下さんは、こめかみの辺りを押さえながら、

「別にずるいわけではないと思うのだけど……でも、そうね」

そこまで言って、ふふつと微笑うと、

「同じ時期にあなたと知り合ったはずのあの男が、私たちより親しげに接しているというの……なんだか負けているような気がして不快だわ」

ちよつといたずらっぽいやつ顔でそう言った。

留美がくすりと笑う。

「だから、私もこう呼んでいいかしら——留美さん？」

雪ノ下さんの声は優しい。

「あ……は、はいっ。もちろんです。……その……雪乃、さん。それから、結衣さん」

「うんっ。留美ちゃん、これからもよろしくねっ」

そう言つて由比ヶ浜さん——結衣さんは留美に抱きついた。……あ、留美が埋まつて
る……やっぱりすごいなあ結衣さんの、……ふかふかメロン？

その様子を見ていた一色さんが不満をこぼす。

「ええ、結衣先輩たちだけなんかないです。せつかく今回仲良くなったんだから、
わたしたちも混ぜてくださいよう」

へへっ、ホントそうだよ。

「じゃあ、あたしもいーですか？ いろはさん」

あたしがそう声を上げると。

「もちろん。今回はほんとお疲れ様ね、絢香ちゃん」

その後は、いろはさんが比企谷さんを無理やり引つ張ってきて、「ほらほら、せんぱいも、『いろは』って呼んでいいんですよ？」なんてからかったりしてる。

あ、いろはさん、冗談ぼく言ってるけど……声少しだけ震えてるし、頬もほんのり赤い。……これってすごく期待してる？

「いや、俺はやらんっつーの」

残念ながら乙女の気持ちは伝わらなかったようです。

「ええ、何ですかあ。留美ちゃんだけしか呼ばないなんてえこひいきですう」
「別に……一人だけってわけじゃ……」

比企谷さんはそう言っただけあたしの方を見た。

なっ……ちよっと比企谷さんっ。「アレ」をカウントに入れるのはずるいでしょ。あんなのはただの冗談で……。ほう。

なななにをドキドキしてるんだあたしはっ。

……そもそもみーんな比企谷さんが悪い！ ホント、「撫でるな危険！」

それからは、なんだかお疲れ様会全体が、「名前で呼び合う祭り」みたいな変な感じになっっちゃったけど、……なんだかとっても楽しかったなあ。

まだ一週間くらいしか経っていないのに、やけに懐かしいような気分でクリスマスイベントの時のことを思い返していると、

「あゝやゝ」

よく通る陶子の声それがそれを中断させる。……あたしの耳に駅前独特の喧騒が戻ってきた。駅に向かう人の波はいつもの倍ほどもあるだろうか。

いつの間にか見上げていた空の色は、冬の……それもこの時期だけの澄んだ青。

あたしは座っていたベンチから立ち上がり、白い息を吐きながら陶子たち三人のもとに小走りで駆け寄る。

「あけましておめでと。絢香」

「うん。おめでと、留美、泉ちゃん」

「おめでとうございます、絢香さん」

「ちよつと絢ゝ、私には？」

「陶子には今朝言ったでしょーが」

「あれは電話じゃん」

ああもう！ めんどくさいなあ。

あたしは胸に軽く手を当てて軽く腰を落とし、「騎士の礼」みたいなポーズをとる。

「……陶子様におかれましては昨年中は大変お世話になりました、うんたらかんだらで本年も宜しくお願いいたします」

「うむ、苦しゆうない。今年もよきにはからえ」

陶子が偉そうにふんぞり返って言う。

「ぶ、なにそれ」

留美が笑う。隣で泉ちゃんが笑う……もう、どこも無理をしてない自然な笑顔で。

そんな——あたしの、新しい友達。

へへっ、特命係の任務完了！ 今日はいこれから四人で初詣！

鶴見留美は想いを贈りたい① 決戦は金曜日？

もうすぐあのドアが開いて八幡が入ってくる。

私を見てびっくりするかな？ ふふ、……小町さんじゃなくて私が「お帰りなさい」って言ったらきつと驚くよね。

八幡から小町さんに、『駅に着いた。なんか買ってく物あるか？』って電話があつてからも五分以上経ってる。

小町さんは『何も無いよ、早く帰っておいで』と返事をしてたし、ここまでゆっくり歩いても十分はかからない——だから、もうすぐ八幡に会える。

そして私はこの、綺麗にラッピングした小箱を渡し、想いを告げる。

たぶん八幡は……まあやっぱり最初は驚いて……それから……ちよつとは嬉しいって思ってくれるのかな。——それとも、迷惑って思うかな。

胸のあたりが苦しくなる。……あーあ、やっぱりやめようかなあ。

ううん、今日まで何回も何回も考えた。まだ子供だつて思われてるのは解ってる。け

ど、私が……私も、八幡のことが好きな女の子の一人なんだってこと、ちゃんと伝えた
い。……別に、すぐ思いに伝えて欲しいなんて言わない、言えるわけがない。ないけど、
少しぐらいは私のこと、女の子として意識させてやりたい。

——だから、伝えるんだ。

ドアの外で、トントンと、靴に付いた雪を落としてるような音がする。帰ってきた！
どうしよう、偉そうなこと考えてたくせに急にドキドキしてきちゃった。

……そして、ドアノブがガチャリと音を立てて回り、ゆっくりドアが開く……。

『で、どうなの？ やっぱり手作り？』

「なんであげるの前提なのよ」

『あげないの?』

「それは……あげるつもり、だけど……」

『へへっ、それでそれで?』

「うん、実は、さ……」

『……………』

「……………」

『なるほどね、ね、留美、明日、留美ん家行ってもいい?』

2月に入り、寒さはいつそう厳しさを増している気がする、そんなとある土曜日、一応、「バレンタインデーの相談」という名目で、絢香が私の家に遊びに来ている。

十二月のイベントを通じて仲良くなった私たち。話してみたら、意外とお互いの家が近いということがわかった。……まあ、この春からは同じ中学校に通うわけだし、それほど遠くないんだろうなっていうのはなんとなく思ってたけど……絢香の家、私知ってる

お店だったの！

駅前、やや千葉寄りの方にある、『御菓子司 あやせ屋』という地元ではけっこう有名な和菓子屋さん。ちよつと高級めなお店で、家でも、自宅用というより、お土産とか御使い物として利用することが多い。

絢香の家はお祖父さんの代に暖簾分けされた美浜店で、本店は千葉城の近くにある大きなお店。そこは絢香のお父さんの従兄のお店で、江戸時代から続く銘店だそうだ。

「うくん、要するに、インパクトが欲しいってことだね？　なんてーの、『差別化』とかいうやつ？」

腕組みのポーズで、大袈裟に頷きながら絢香が言う。

「……うん。普通に作って普通に渡しても印象に残らないかなって」

「ふむふむ。じゃあ、いつそのこと、手作り和菓子なんかどう？　ほら、これとかカワイイでしょ」

そう言つて絢香は、今日家からお土産に持ってきてくれたお菓子のうちの一つを指差す。

練切ねりきりと言われる色鮮やかな餡を使った細工菓子がいくつか載せられた重箱みたいな
タッパ。絢香が指したものは、ピンク色のハートを白い矢が撃ち抜いているという意
匠の物。可愛らしいけど繊細な作りの、もはや芸術品だ……ほんと、食べちゃうのもつ
たいない位。

「……それ、ちゃんと作れるようになるのに何年かかるのよ……」

「えーと、満足いく生地が練れるようになるまで五年、修行は一生とかおとーさん言っ
た」

「はいはい却下」

「いやだから、うちでお買い上げいただいですね、そんなもってラッピングだけば
ぱっと変えて、

『これ、あなたの為に一生懸命作ったの♪』

と、やれば……」

はあ。私のがつくりと小さくため息をつく。

「あのねえ……。それって一番やつちやダメなやつでしょ!」

「ごめん、半分冗談だってば」

半分は本気なのね……。

「それに……こういうの初めてだし、やっぱりちゃんと自分だけで作ったお菓子がいいかなって……」

「ほうほう、乙女ですなあ」

「からかうなら、相談するのやめるっ」

「ごめんごめん。……でもさ、贈るものが決まってるなら、それこそ相談って？」

「……昨日電話でも言ったけど、八幡って、あんなだけ……それなりにチョコとか貰うと思うんだよね。だから、普通に渡して、「義理チョコのうちの一つ」みたいになっちゃうのはやだし、何か……その、渡し方、とかさ」

……それに、

「そもそもこのままじゃ、二人だけで面と向かって渡せるチャンスとか無いし……」

「留美あんた、仮にも自分が好きな男子を『あんな』って。……あーでも……そうねー。

比企谷さんにチョコあげそうな子かあ……ひとり、ふたり……」

そう言いながら絢香は指折り数え……って、え、両手？ 片手で収まらないの？

「そ、そんなにいるかな……」

私が地味にシヨックを受けていると、絢香は、

「まあ、少しでも本命チョコの可能性がある人みんなってことで。恋のバトルは、可能性

があるライバルを全部あぶり出して、それから一つずつ潰し……対策を練っていくのが基本だからねー」

……今、なんか怖い発言があったような気がしたけど……?」

彼女はそう言うのと、今度は声に出してもう一度数え始めた。

「まず、雪乃さん、結衣さん、いろはさんは本命チョコ確定。留美も当然そうだよね？」

義理か本命か微妙なのは沙希さんとけーちゃんに……あとあたしとか……」

「けーちゃんも?」

「うん。あとはねえ……戸塚さん、小町さん」

「……戸塚さんは……なんというかまあ……。でも、小町さんが『本命チョコ』ってこと

はないでしょ?」

「甘いっ 甘すぎるよ留美! 千葉の兄妹の仲の良さを舐めちゃいけないよー!」

「……その『千葉の兄妹』って、八幡もたまに言うけど、何なの?」

「まあそれはこっち側のネタみたいなのもんだけど、でも……仲いいんでしょ、比企谷さん

と小町さん」

「まあ、普通よりは……かなり……相当?」

言われてみれば……うん、本命チョコもひよつとしたらありそうなくらい……? ま

さかね。

「いい？　ここからが重要よ」

急に真剣な表情になった絢香の言葉に、私はゴクリとつばを飲む。

「さっきの本命云々はともかく、比企谷さんが何かを考える時、小町さんの意見が大きく影響するつてのは間違いないと思うの」

「!!　それは……うん、そうかも」

「だから、まずは小町さんに味方になってもらおう」

そう言って彼女は自分でうんうんと頷く。……でも、なんだかすぐ納得できる。たしかに小町さんに嫌われでもしたら、八幡、会つてもくれなくなっちゃうかもね。

「ただ………小町さん受験生だし、そこは上手くやらないとね」

「うん」

もちろんそうだ。2月14日は受験当日だし、しすこん？の八幡もバレンタインどころじゃないかもしれない。

そう考えると……別な日にしようかなあ……当日渡せないのは残念だけど。

「それから、もう一つ」

絢香は、言葉を止め、一瞬言い淀んでから続ける。

「小町さん……最終的には、雪乃さんと結衣さんの味方をするだろうから、そこは覚悟しておくこと」

「……………うん、わかってるよ」

うん。……………きつと小町さんは、あの三人の特別さを、もしかしたら八幡以上に大事にしていると思うから。

もちろん、私が八幡にチヨコ渡したいって言ったら、協力はしてくれと思う。

……………でも、もしも私が、……………その、「本気で八幡の恋人になりたい」って言ったら——雪乃さんや結衣さんのライバルになりたいと思ってるって言ったら——きつと小町さんは雪乃さんたちの側についてしまうだろう。

でも——今は無理でも、いつか……………いつかは小町さんも、みんなも、私が八幡の隣にいても変じゃないって認めてくれる日がくるんだろうか。そんな日が来たらいいなあ。……………それで、『おにいちゃんと留美ちゃんはお似合いだね』なんて言ってもらえたりして……………。

はあ。改めて思う……………道は険しいなって。

「で、小町さんの——総武高の受験って何時くらいに終わりになるのかな」

ぼんやり考え込んでしまっていた私に絢香が聞いてくる。

「えと、千葉県の公立校はみんな13日が学科試験で、14日は面接とか小論文とか

だから……2時か3時位だと思うけど」

「ふむふむ。当日に渡すなら……そこが狙い目かもね」

「え、でも、小町さんの受験当日に……」

「だから、終わった後だよ。比企谷さんて、小町さんの受験、まして会場が総武高つて事なら、普通に付き添いでついてきたり、そうじゃなくても、迎えに来るぐらいはしそうですよ」

まあ、無いとはいえないけど……。

「というか、そこは迎えに来てもらって、駅前かどつかで比企谷さん兄妹と合流。んで、留美はめでたくチョコを渡せる……と。うん！ 完璧！」

グツと、ガッツポーズを決める絢香。

「そんなに上手く行かないよ……それに、小町さんになんて説明するの？ そ、その……『本命チョコ渡したいから手伝って下さい』とか、言えないよ……」

「ううん……そこはほら、あんまり重くならないように……そうだね……」

彼女はまた腕を組んで目を閉じると、今度は体をコミカルに左右にくねくねさせながら、顔だけは真剣な表情で考えてくれる。

すぐにぱっと目を開けて彼女は言う。

「じゃあ、こんなのどう? 『日頃の感謝の気持ちを贈りたい』から、受験終わった後時間があれば機会を作ってください、ってメールで頼んでみるの」

「へえ、なんだか格好いい言葉だね……。でもどこかで見たような……」

「うん、うちの店に張ってあるポスターに書いてあった。ま、ベタつちやベタな言葉だけどね」

「……………でも、悪くないかも。『私が八幡に感謝の気持ちを贈る』なら、小町さんも、雪乃さんや結衣さんだって変に思わないだろうし。」

それに、八幡だつてその理由なら自然に受け取ってくれそうな気がする。

「じゃあ、それでお願いだけしてみようかな。……………それで都合悪ければ、別の日でも仕方ないし」

「そうそう、まずは連絡してみたら悩めばいいんじゃない?」

20xx/02/xx 18:32

宛先1：小町さん

宛先2：

件名：バレンタインのこと

本文：

こんばんは 受験前の忙しい時にすいません

実は、八幡さんに日頃の感謝の気持ちをこめてお菓子を贈りたいと思っていますのですが、受験が終わった後、少しでも協力してもらえませんか

お忙しいようでしたら、このメールはスルーしてください

受験、頑張ってくださいね

20xx/02/xx 18:45
送信元：小町さん

件名：返信：バレンタインのこと

本文：

こんばんは留美ちゃん メールありがとう
ちようど息抜きしてたところなので大丈夫だよ
まずは愚兄めにバレンタインの贈り物をいただける件ほんとに感謝ですよ！
お兄ちゃんも泣いて喜ぶことでしょう

でも、協力ってどうすればいいのかな？

小町もこういう話なら大歓迎だから、遠慮しないでまたメールしてね
小町にできることなら手伝うよ

20xx/02/xx 20:07

宛先1：小町さん

宛先2：

件名：ありがとうございます

本文：

すぐに返信いただいてありがとうございます

パソコンは着信にすぐに気が付かないことがあるのでちよつと不便ですね

来月にはケータイを買ってもらえることになっているので、そしたらすぐ返信できるようになります

さっきの協力のお話ですが、私の希望としては、2月14日当日に八幡さんに直接手渡ししたいです

ですので、小町さんの受験終わった後、八幡さんが小町さんを迎えに来るようなら、その時少しだけお時間ももらえないかなあ、と

もちろん無理には言いません

20xx/02/xx
20:38

送信元：小町さん

件名：今のところ

本文：

さつきお兄ちゃんに14日の予定を聞いてみました

もちろん、留美ちゃんのメールのことはナイショにしてるから安心してね

今のところお兄ちゃんは、朝から小町のために一日中神様にお祈りしてるって。

それで、小論文の試験が終わるころ小町を迎えに来てくれるか聞いたら、何の予定も無いから構わんって言っていました

バレンタインだつてのになんだろうねこのがっかりな兄は……

ただ、まだ先の話なので、これから予定が入るかもしれない

また、日にちが近くなったらあらためて予定決めようね

その後、何度か小町さんとメールのやりとりをし、待ち合わせは駅前の和菓子屋さんの茶寮コーナー、いわゆるイートインみたいところで午後3時ということになった。

——2月14日当日——

「泉ちゃん、ほんとありがとう。次、ちゃんと交代するからね」

「いいよいいよ」

泉ちゃんはニコニコした顔で手を左右に振り、それから、

「でもでも、あとからお話きかせてね」

小声でそう付け加え、うふふと微笑った。

帰りのホームルームが終わり、泉ちゃんに日直の仕事を交代してもらった私は急いで教室を飛び出した。彼女以外には家の用事ということにしてある。

今日は五時間目までしか無い日だし、これから家に帰っても3時には十分間に合うはず。……なんだけど、どうしても気持ち急いでしまう。

だって、今日は千葉では非常に珍しいことに雪が降っているのだ。

昨夜から降り出した雪は、家々の屋根や木々にうつつすらと積もり、辺りを一面真っ白に変えた。幸い、道路の積雪はそれほどでもなくて、交通機関の乱れも僅かだったようだ。それでも、

「小町さん、大丈夫だったかな……」

受験当日の雪。私との待ち合わせのことはひとまずおくとしても、肝心の受験自体、多少の日程変更とかはあったかもしれない。何かあれば、メールで連絡が入っていたりするかも。

そう思つて数百メートルばかりの家路を急ぐ。

「ただいまー」

「留美お帰りー」

家に着くなりパソコンを起ち上げメールのチェック。

小町さんからは……うん、昨日、日時の確認した後のメールは入っていない。

現在時刻は午後2時40分。

私はランドセルを置き、昨日準備しておいた小ぶりのトートバッグの取っ手を握るとすぐまた、さつき入ってきたばかりの玄関へ取って返す。

「いつてきまーす」

と、お母さんに声をかけると、

「慌ただしいわねー。でも、頑張っておいで!」

そう言ってお母さんは、胸の前で腕を斜めにするようなポーズでぴつと親指を立てる。

……格好いいけど、エプロン着けたままやるポーズでは無いと思うよ……。

クリスマスの後、八幡と私は、学校帰りとかに偶然会えば話くらいはするようになった。だけど、そうは言ってもせいぜいちよとした立ち話程度だ。

あと……何回かはファミレスとかに入ったこともあるけど、そういう時は八幡だけじゃなく、奉仕部の二人だったり、いろはさんだったりと一緒に、私が八幡に甘えてもいい、みたいな雰囲気にはちつともならない……。

だから、今回みたいに時間をとって話せるのは、本当に久しぶり。小町さんも、『チヨコ渡す時には、ちゃんと席外してあげるようにするから大丈夫だよ』

と言ってくれてるし……。

一瞬、風が吹いて私の髪をフアサツと跳ね上げる。

「あ」

髪の毛、もう一回梳かしてくればよかつたかなあ……。オフィスビルのガラスに映る私の髪は、心なしか少しだけ乱れているような気がしないでもない。

服は……襟とか、肩のあたりを少し引つ張つて整える。それから、ちよつとだけ笑顔の練習。

……うん、おーけー。ちゃんと可愛い、と、思う。

待ち合わせのお店の前で立ち止まり、一つ深呼吸してから自動ドアを潜る。

「ごっつしやいませ〜」

店員さんに声をかけられ、

「あ、奥で待ち合わせです」

私がそう言うのと、「どうぞ」と促されて私は奥の茶寮コーナーへ。お客さんはまばらで……その一番奥の席。

小町さんがもう席に着いていて、テーブルの上には、黒い漆塗りの小盆に並べられた色とりどりの綺麗な干菓子とお茶。

あれ、八幡は？ ……お手洗い、かな。

「あ、留美ちゃん久しぶりー」

私に気付いた小町さんが小さく手を振ってくれる。

「こんにちは、小町さん、受験お疲れ様でした」

私がそう挨拶しながら、落ち着き無くあちこち視線を泳がせているのを見て、小町さんはなぜか申し訳無さそうな顔になる。

「あのね、お兄ちゃん、今日になって急に仕掛ける事になったからって連絡来て……帰ってくるの、夕方……夜になるんだって」

「そんな……」

かくんと膝の力が抜け、思わずテーブルに手をつく。

「留美ちゃん、大丈夫？」

「あ、ごめんなさい。……だ、大丈夫です」

ちつとも大丈夫じゃないように見えただろう——小町さんは慌てて立ち上がり、私を支えるようにしてそつと椅子に座らせてくれた。

……………色々決心してきたのにな。今日のためのお菓子だつてすつごく頑張つて作つただけだな……………。

一人でドキドキして、お母さんにニヤニヤしてて気持ち悪いって言われて、絢香にかかわられて怒つて、泉ちゃんにキラキラの目で励まされて……………。

……………楽しみに、してただけだなあ。

あーあ。このお菓子、小町さんに預けて八幡に渡してもらおう。……………ホントは直接顔見て手渡ししたかったけど、そんな風に言つたらせつかくここに来てくれた小町さんに申し訳ない。

じわつと滲んできてしまった涙を、なんとかこぼさないように我慢していると、

「留美ちゃん」

小町さんが私の顔を覗き込むようにして声をかけてくれる。

「は、はい」

「明日、休みだよね」

「はい……あの?」

「確かに今日は金曜で……明日、明後日とは特に学校行事なんかの予定も無いけど……。」

「もし留美ちゃんが良かったらなんだけどさ……今夜、うちにお泊まりしない?」

鶴見留美は想いを贈りたい② 伝えたい気持ちは

「もし留美ちゃんが良かったたらなんだけどき……今夜、うちにお泊まりしない？」
「ええっ！」「ひゃあー……つてマズ……」

小町さんの言葉に驚きの声を上げたのは私だけじゃ無かった。

私がもう一つの声の方を振り返ると、衝立を挟んだ、ちようど私の真後ろに当たる席に……。

「……絢香、ここで何してるの？」

「えーと？ さ、三時のおやつ？」

いつの間にか高校生風の私服を着て、伊達メガネまでかけた絢香が座ってる。……と
いかこの人最初からいたじゃん。全然気付かなかった。

……腹が立つことに、大人っぽい格好がよく似合ってるんだよね。

そう、ここは絢香のお家、おうち『御菓子司 あやせ屋』美浜店。

『一番奥の席に案内するように言っておくね。大丈夫、邪魔なんかしないから』だっけ

？」

「いやその、邪魔はしてない……ような？」

「あのね……」

私は一つ溜息をつき、小町さんの方に振り向き、

「あの、友達がごめんなさい」

見れば、小町さんは大笑いしてる。

「……あはは、びつくりした。……えーと、絢香ちゃん、だっけ？ 全然小学生に見える

ないや……。よく留美ちゃんのメールには出てくるけど、会うのはクリスマスの時以

来かな」

「はいっ。ご無沙汰してまーす」

絢香がびしっと敬礼すると、何故か小町さんも敬礼で返す。……もういいや。

それより、

「あの、小町さん……さっきの……」

「ああうん。お兄ちゃん、ご飯は食べてくけど、そんなに遅くはならない、みたいなこと
言ってたからさ。じゃあ家で待っててもらえば今日中に直接渡せるなって思ってた」

「で、でもそんなのご迷惑じゃ……」

「いやいや、うちは全然。どうせ今日も両親は遅いし、お兄ちゃん出かけてるから小町と

カーくんだけだし」

「かーくん？」

「あ、うちの猫。カマクラってゆーの。可愛いよ、会いにおいでよ」

う、それはちよつと会いたい……かも。

「それに、せっかく受験終わったのに、打ち上げ一人じゃ寂しいじゃん。ね、留美ちゃん」

「でも、お母さんがなんて言うか……」

よく知らない人の家にお泊りなんて……。

「うん、そだね。親御さんの許可はちゃんと取らなきゃ！ 留美ちゃん家、ここから近い

んだよね。歩いて何分くらい？」

「あ、七、八分です……けど」

「よし！ じゃあ一緒にごあいさつに行こう！ そうすればお泊りの準備も出来るし」

そう言つて小町さんはさつと席から立ち上がり、店員さんに声をかける。

「すいませーん。これ、包んでもらつていいですか？ あと……これとこれ、お土産用に

……」

……なんか、小町さんてすごい。あの、めんどくさがりの八幡の妹さんとは思えない

なあ……。

「さ、行こう、留美ちゃん。……絢香ちゃんはまた今度ゆつくりね」

会計を終えた小町さんが、私と一緒にお店を出ようとするのと、

「あ、あの……小町さんっ」

絢香が彼女を呼び止めた。

「これ。比企谷さん……お兄さんに渡してもらっていいですか？」

そう言っつて小町さんに、このお店のバレンタイン用デザインのペーパーバッグを預ける。

「絢香？」

「ちよ、留美、変な顔しないでよ。あたしもクリスマスの時とかけっこうお世話になったし、まあ、菓子屋の娘として、せっかく来てくださるんならと用意してただけで」

そう言っつてちよっと居心地悪そうに言う。

「一応、お兄さん宛にはなってますけど、宜しければ皆さんで食べてくださいね」

「……うん、ありがとう。……ちゃんとお兄ちゃんに渡すね」

小町さんは絢香の目をじつと見て、大事そうにその袋を受け取る。

「……その、よろしくお願ひします」

そう言っつてもう一度頭を下げる絢香は、ほんの少しだけ頬を染めているようにも見え

た。

それからはあつという間。私を連れて鶴見家に取り込んだ小町さんはすぐにお母さんと仲良くなり、お互い電話番号やら住所やらを交換し、私の着替えなんかを準備して……。

「それじゃあ、娘のこと、よろしくお願いします。留美もご迷惑おかけしないようにね」

「はい、おまかせください。留美ちゃんはしっかりしてるから大丈夫ですよ」

「うん、行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい、頑張ってください！」

……と、あやせ屋を出てからここまでわずか30分。

その後電車で揺られること数駅。最寄り駅から徒歩5〜6分。

まだ雪はチラチラと舞っていて、歩道のあちこちに雪は残っている。

けれど道中特に大きな混雑もなく、私たちは、5時前には比企谷兄妹のお家の前に無事到着することが出来た。

2階建てのきれいなお家。エントランスのところに、今やすっかり見慣れた八幡の自転車止められている。……へえ、ここが、八幡のお家、かあ。

3時頃お店に入るまでは全く思ってもいなかったような展開……。

——今日、私は八幡の家にお泊りする。

って、あらためて言葉にすると、ええうって感じだよ。……はあ、またなんか緊張してきちゃった。

「ただいま〜」

私なんかの緊張をよそに、小町さんはさっさと鍵を回しドアを開ける。……まあ、自宅なんだから当たり前なんだけどさ。

「留美ちゃんどうぞ。ささ、入って入って」

小町さんに手招きされて玄関をくぐる。

「比企谷家へようこそー」

小町さんの声に合わせるように、玄関で待ち構えていたらしい灰縞の猫が「ミー」と鳴いた。小町さんが、

「ただいまカーくん、いい子にしてたあ?」

と声をかけ、その頭を軽くワシワシつと撫でる。

この子がカマクラくんかあ。思ったより大きいけど、どこか愛嬌のある顔……うん、カワイイ。撫でようと右手を伸ばすと、彼の方からその手に頭をすり寄せてきた。

首から背中にかけてのあたりをさすさすと優しく撫でてあげたら、「にゃー」でも「ミー」でもなく、

「ハッハッ」と声を上げて目をほそめる。……あつたかい……それに……手触りも、こっ、ちくちくさらさらしてて、なんとも気持ちがいい。

「ををつ、カーくんも留美ちゃんのこと気に入つたみたいだねー」

小町さんはそう言いながらちらつと時計を見る。

「5時、かあ。……お兄ちゃんはお飯食べてくるみたいだし、わたし達も食べちゃおうか」

それから、作り置きしてあつたらしいシチューを温めて夕食をいただく。

二人で食事をしながら、それぞれの学校の話とか、友達の話、あと、小町さんの受験の話なんかもした。小町さんは、

「まあ、全部終わったしね、……あとはもう、受かるときは受かるし落ちるときは落ちるっ」

なんて、半分開き直ったように言ってる……。

もちろん、絶対、ぜったい合格してほしいけど……ただ、話によると小町さんは第二志望の私立にはもう合格していて——ここだってレベルは低くない——まあ、それを考えればこれ以上気を揉んでも仕方がないのかも。

洗い物を始めた小町さんに追い払われたカマクラくんが、「しよすがないからこつちと遊んでやるか」みたいな顔で私のところへやってくる。

ヨイシヨと抱き上げ、膝の上に乗せて、喉のあたりを指でさすってあげると、気持ちよさそうにゴロゴロと喉を鳴らす。ふふ、かわいいなあ。

……けどこれ、けっこう重い……。ずーつとこのままだったら、足がしびれて立てなくなっちゃうかも。

時計が午後7時を回ったところ、小町さんの携帯が着信音を奏でる。

「もしもし。……お兄ちゃん、今どこ？ ……うん、……うん、小町ももう食べ
たよ……………」

八幡から、だ。

「……………特に無い、かなあ。寒いし、早く帰っておいでよ。……………うん、気をつけ
てね」

通話を切った小町さんは、私の方を振り向き、

「お兄ちゃん、今駅だつて。……留美ちゃん、どうする？ 玄関でサプライズするな
ら、小町たち奥にいるよ」

「どうしよう……………。うん、やっぱり、できれば早く渡したい、かな。」

「じゃ、じゃあ、それでお、お願いしましゅ」

う、緊張して囁んじやった……………。

小町さんは優しく微笑って、

「よし。じゃあ、小町は自分の部屋にいるね。留美ちゃん、後で声かけて」

小町さんはカマクラくんに、

「カーくんも行くよ〜」

と声をかけて二階に上がっていく。

カマクラくんは小町さんの声に答え、するすると器用に階段を登って彼女について行った。ぴよん、ぴよん、つてジャンプするみたいに登るわけじゃ無いんだなあ……な
どと、変なところに感心してしまう。

そして私は、きれいにラッピングされた小箱を手に、一人玄関で八幡を待つ。

「ただいま」

玄関のドアを開け、ややテンション低めで帰ってきた八幡を、

「お帰りなさい♪ 八幡」

と、私にできる精一杯の可愛い声でお出迎えする。

「うおっ、……………え……………何？……………留美……………？」

うふふ、混乱してる混乱してる。サプライズ成功。

八幡は、じいつと私を見て、

「……………小町が化けてるわけじゃないよな……………」

なんて馬鹿なこと言ってる。

「そんなわけ無いでしょ……………」

もう、相変わらず発想がひねくれてるなあ。

「いやでも……………何で……………？」

「……………あのね、八幡、……………これ。今日、バレンタイン……………だから」

そう言ってる私は、彼のために、思いをいっぱい詰め込んで準備した小箱を、両手で八幡に差し出す。

彼は一瞬固まって、……………それから、戸惑うような、少し照れたような顔をすると、壊れものでも触るようにそれを優しく受け取ってくれた。

「まあその、何だ、ありがとな、留美。……………義理でもやっぱうれしいな、ここのうのは」

はあ……。やっぱり義理とか言うんだ。……………こんなに丁寧にラッピングして

あつて、義理なわけ無いでしょ。

「あのね、八幡……」

「ん……？」

「……それ、義理じゃ無いから。本め……」

本命だから、と言おうとして顔を上げた時、

——見てしまった。……目に入ってしまった。

八幡が、大事そうに大事そうに抱えている2つの小さな紙袋を。

——ピンクとオレンジが可愛らしい花柄の袋。

——光沢のある純白に、細く真つ赤なりボンが一筋鮮やかな袋。

それは見るだけであの二人を思い起こさせる……………。

「……………ほ、本気の、感謝チョコ、だから」

思わず怯んで、変なことを言ってしまった。

「感謝チョコ？ ……今はそんなのがあるのか。……いや、友チョコとか聞くけど、違いがよく分かん……」

「その、ね……」

どうしよう。……とつきに言ってしまっただけの言葉に意味なんて無い——けど、そこで思ったんだ。

『本気の感謝チョコ』って変な言葉だけど、でも、もしかしたら私の気持ちとしてぴつたりかもって。

もちろん、八幡のことは好き。……その、男の人……として。だからこそ本命って言おうとしたんだし。

けどさ、私は彼に好意を伝えて……どうしたいのかな。……付き合って欲しい、とか？

——小学生の女の子が、高校生の男の子に「好きです、付き合ってください」と言いました——

……うん、なんていうか、OKしてもらえる未来がまったく見えない。むしろOKされたらこっちが引くかも。……はあ、5歳の差って、やっぱり大きいなあ。

だから、林間学校の時のこと、泉ちゃんのこと……。私がどれだけそのことを感謝しているか。……今は、それを八幡に伝えよう。

「留美？」

私が黙ってしまったのを、どうやら待つてくれていたらしい八幡が心配そうに声をかけてくれる。

「これはその……義理なんかじゃなくて、私の……感謝の気持ち」

「感謝って……」

「林間学校のと きも、泉ちゃんのと きも、いつも私を助けてくれてありがとう」

戸惑ったままの八幡に、私はもう一度頭を下げる。

「いや、俺は感謝されるようなことは……。それに、林間学校の時の前にも言ったように葉山たちが……」

「そうじゃないの、八幡」

彼は言葉を切り、黙って私を見つめる。

「もちろん、ハブにされてるのを無くしてくれた事にも、もちろん感謝してるけど、それより……私の、何ていうのかな、「世界の見え方」みたいなのを変えてくれた、から」

「あん？ 世界の見え方……？ どういう……」

彼は、心底わからない、という風に首を傾げる。

「ふふ、『正しいぼっち』の事だよ」

「ゴホッ。な、お前な……」

私が言うと八幡は嘖き出し、

「……………それ、忘れてくれ……………」

なんて言う。……………あれ、私にとってはけっこう大事な思い出だけど、八幡にはそうじゃないのかな。

私がシユンとしているのを見た彼は少し慌てたように言う。

「いや、あの時のこと全部忘れろって話じゃなくて、今の、『正しいぼっち』って言い方な？」

何だ……………少しだけほっとする。

「あの後、雪ノ下に、

『いいかしら比企谷くん。せっかく普段よりちよつとはましな事を言っているのだから、もう少し言葉のセンスにも気を遣った方が良いわね。』

いくら目とか顔とか心とかが腐っているからと言って、言葉まで腐らせる必要は無いのよ?。」

とか言われてな……………」

うわ、雪乃さん、容赦ないなあ。……………でも、八幡の、雪ノ下さんのモノマネが妙に雰囲気を感じていて、なんだか笑ってしまった。

その後、小町さんも一緒に三人でリビングの炬燵を囲み、お茶の時間。

「はい、お兄ちゃん……これは小町から」

そう言つて彼女は八幡に小さな包を渡す。

「え……、でもお前、今年は受験だから無いって……」

「まあ、一応。さすがに手作りじゃないけど、お兄ちゃんが喜ぶ顔も見たいしね。あ、今の小町的にポイント高い！」

「……あんがとな」

「どういたしましてだよ、お兄ちゃん」

なんだか二人とも嬉しそう……こういうのが、『千葉の兄妹』なのかな、ふふ。

「あと、せっかく留美ちゃんからもらつたんだから……食べて感想言つてあげなくちゃ！」

「え、」

そんな急に……こ、心の準備が……。

小町さんは私にいたずらっぽい笑みを向ける。

「開ける、ぞぞ？」

八幡は私をちらつと見て、それから丁寧に包装をはがしていく。やがて箱の蓋が開き……

「これは……クッキーサンド？ いや、なんかやたら軽いな」

八幡は箱いっぱい詰められているそれを一つつまみ、不思議そうに見つめる。

「じゃあその、食べて良いか……？」

「う、うん。……どうぞっ」

うう……目の前で食べてもらえるなんて思ってたから、うれしいけどなんだかドキドキする。

八幡は八幡で、小町さんと私の二人に両側から注目されてちよつと食べるにこそう……。

八幡が私のお菓子をゆつくりと口の中へ……。

「……お、融ける！ それにこの味……もしかしてマツ缶、か？」

「うん！」

やった。成功!!

「……うん……なんかじゅわつと融けて……すげえ美味い。これ何だ……」

「これね、ダックワーズっていうの。生地になんか少しだけコーヒー混ぜて、かける砂糖少なめにして、コーヒーと練乳で作ったクリーム挟んでみたの……八幡の好きなあの味みたいでしょ。……………どう、かな？」

「いや、ほんとうまいぞこれ。な、小町にもやっていいか」

「うん、小町さんにも食べてみて欲しい。……………あ、あと、その下の方にある黒っぽいクリームのやつはチョコ味だから。……………バレンタインだしね」

「じゃあ、小町もいただくね。チョコのとコーヒーの一つずつ……………」

小町さんは小さめのダックワーズを二つ手のひらに載せると、まずチョコ味の方を口の中へ。

「ホントだ、融けるみたい。美味しいねえ……………チョコと……………これ、バタークリーム混ぜた？」

「はい、生クリームより生地に合うって本に書いてあつて……………」

「へえ……………うん、チョコの方も美味しいぞ。まあ、俺はマツ缶味のが好きだが」

「ふふ、それは八幡のために作ったんだもん」

そう言うのと八幡は、

「そう面と向かって言われると照れるっつーか……………その、ありがとな、留美。スゲー美味かった」

「うん」

良かった。八幡が美味しいって言うてくれた。……………絢香、泉ちゃん、やったよ！

バレンタインデー数日前。

私は絢香と泉ちゃんに、八幡にあげる予定の『マックスコーヒー味のダックワーズ』の試食してもらっていた。

「……………でね、こつちのお皿が例のコーヒー味のやつで、こつちがチョコクリームなんだけど……………。とりあえず食べてみて」

「ほいほい。いただきまーす。どれどれ……………ん、サラサラ溶ける。美味しい美味しい」

絢香が言えば、

「うん、美味しいね、このとける感じ、ほんとマカロンみたい」

泉ちゃんの反応も上々。

「あ、でもなんでマカロンにしなかったの？」

「う……」

絢香の一言に一瞬固まる私。

「? どうしたの留美ちゃん……」

と、ちょうどそのタイミングでキッチンにお母さんが入ってくる。

「お、頑張ってるわね。少し休憩してお茶にしたら？」

そう言っただけ私たちの分も紅茶を淹れてくれる。

「ありがとうございます」「いただきます」

お母さんはお皿の試作品をちらつと見て、

「あ、留美……八幡くんにあげるの、結局『失敗マカロン』にしたんだ」

「へ、『失敗マカロン』？」

絢香たちがびっくりしてる。

「ちよつとお母さん、今回は失敗じゃないの！ ちゃんと最初から、『ダックワーズ』の

レシピで作ったんだから」

「あはは、ごめんごめん……」

そう……実は、私は最初、表面ツルツルで可愛い『マカロン』に挑戦したんだけど——見事に失敗。ひび割れだらけの残念なマカロンになっちゃったんだ。……生地が乾燥とかすぐく時間かかったのに……。

ただ、見た目はともかく食べてみればそれはとても美味しくて……まあそれで色々調べて、ほぼ同じ材料で手早く作れるダックワーズ……お母さん言うところの『失敗マカロン』を作ることにしたんだ。……お小遣いでたくさん買ったアーモンド・プードルを無駄にしなくてすむし。

それにお母さんには『失敗』なんて言われてるけど、悪いことばかりでもない。このダックワーズ、見た目の華やかさではマカロンに及ばないものの、生地の風味や、大きさ、形の自由さはこつちのほうが応用が効くし、それに生地の泡を潰したり乾燥させたりといった手間もかからないから、味を変えて何度も作り直ししたり出来るし、数も作りやすい。

そんなこともあって、私は八幡が喜んでくれそうな、例のコーヒー味のダックワーズを作ってみることにしたんだ。

「こう、融けるみたいな感じだから、このくらいの小さめのほうが良いんじゃないかなあ。一口でお口に入るし」

「比企谷さんならこっちのコーヒー味でしょ。こっち多めにして……あと、箱に詰める時一番上の段は全部コーヒーのやつにするといいよ。そうすれば間違いなく最初の一口にインパクトある」

そんな、彼女たちの協力のおかげで……………。

私が工夫して一生懸命作ったお菓子を、八幡が美味しい美味しいと食べてくれる……何とも言えない幸せに浸っていると、

「あと、お兄ちゃん、これは絢香ちゃんから。後でちゃんとお礼言つてね」

そう言つて小町さんは、絢香から預かっていた袋を八幡に渡す。

「綾瀬が？ 俺に？」

八幡が不思議そうにしながら炬燵のテーブルの上に中身を取り出すと、細長い紙の箱と、封筒に入っていない、二つに折られただけの便箋。

彼が箱の蓋を開けると、色鮮やかでお洒落な練切菓子が三つ。

あ、この前見たピンクのハートと白い矢がモチーフの、和菓子っぽくないデザインのものも入ってる。でも、どこか少し違うような……。

八幡は便箋を開き……、

「えーと、『これは……」

「ちよつとお兄ちゃん！ 女の子からの手紙を声に出して読むとか……」

ポイント低いよー、と小町さんが非難の目を向けると、

「いやでも、大したことは書いてないぞ、ほら」

そう言つて八幡は、私たちの方に向けて便箋を広げて見せてくれた。

これは……確かに手紙というよりは走り書きのような感じで、多分絢香がこれを小町さんに預ける直前に書いたんだろう。

『比企谷さんへ』

これは私が練習もかねて作ったものなので形はあれですが、餡はちゃんと父が練ったものなので味は保証します。どうぞ、皆さんで食べて下さいね。

あーちゃんより』

あらためて絢香のお菓子を見る。……確かにプロが作ったのに比べれば拙いかもしれないけど、細かい細工を、手を抜かず丁寧にやっているのがわかる。

きつと、食べてくれる人のことを想つて。……………絢香……………

八幡は、

「小町、留美、先に好きなの取つていいぞ」

なんて言つてるけど……………。私は小町さんと目を見合わせる。

「お兄ちゃん……………。これは、お兄ちゃんが全部食べたほうが良いと思う」

「うん……………」

私たちの反応に八幡は、「？」という感じで、

「いやでも、みなさんでつて書いてあるし……………」

なんて言うので、

「じゃあ、一口だけ味見させて貰うから」

私はそう言い、お菓子の端っこをほんの少しだけ切り取つて口に運ぶ。

それは、この前食べた同じお菓子より優しい味がするような気がした。

小町さんが、

「留美ちゃんの布団とか、さつき広げておいたんだ。今からちよつと敷いてくるね」と言つて二階に上がつて行き、リビングに残されるのは八幡と私の二人だけ。

「八幡、なんか元気無い?」

ソファア-の下の部分を背もたれ代わりにしてぐつと座つてゐる八幡に声をかける。

「いや、少し疲れてるだけだ。……なにせ、ぼつちの引きこもりが休日に出かけるとか、それだけで半分ぐらいライフが減るわ。あと……少し考え事してただけで、別に調子悪いとかじゃあない」

「そう? でも、なんだか悩んでるみたい。……あの、クリスマスイベントの……会議ばつかりやつてた時みたいなの顔してる」

「え、そんなに、か」

「ね、私に話してみない?」

「いやそれは……」

「話せることだけ。……前に、八幡も私の話聞いてくれたでしょ。……ヒドイことされたけどね」

「うぐ、……あれは……悪かった」

泉ちゃんの時のことをチクチクつついてあげると、八幡は渋い顔をして謝った。

「じゃあ……ねっ」

「……少しだけな」

八幡は天井の照明を見上げ、少し眩しそうに目を眇めて話し出した。

「まあ……俺の理想みたいなものとして……他人の意見とか、今の状況とか、人間関係のしがらみとかに一切影響されずに、本心から思った通りの行動をとりたい……みたいない気持ちがあつたわけだ」

八幡は、一言一言、言葉を選ぶかのように訥々と話す。

「うん」

「だけど俺は……逃げた」

「逃げた？」

「今の関係とか、状況とかを壊すのが怖くなって——選ぶことから、自分の本心と向き合うことから逃げて、今の状況を、関係を守ろうとしちまった。

……だから、本当にこれでよかったのか、これは欺瞞じゃないのか、なんて……今なつてグダグダと色々考えちまって……ま、そんな感じだ」

そこで八幡は、部屋の角にそつと置いたままになっている二つの紙袋に目をやり、小

さく溜め息をこぼす。

「その……悪かったな、心配かけて」

八幡は、これで終わり、と言うように話を切ろうとする。

「ねえ、八幡？」

「おう、どした？」

「さつき、ありがとね」

「ちよつと待て分からね……何が？」

ふふ、この流れでいきなり言われても分からないよね。

「お菓子、美味しいって言ってくれて」

「ああ。いやお礼いうのはこつちだろ。別にお世辞言ったわけじゃないしな。……そ

の、ほんとに美味かったぞ。特にマツ缶味のやつとか」

「ふふ、良かった。でも、やっぱりありがと、なんだよ」

「？」

「八幡が私の作ったお菓子を、美味しいって言ってくれた。ほんとに美味しそうに食べてくれた。……それがね、涙出そうになるくらいうれしかったの」

「そう、か」

「だからあらためて思ったんだ。私、八幡のこと大好きなんだって」

「おう……………つて、え？」

さすがにびつくりしてる。急に何言い出すんだこいつ、みたいな顔。

……………でもね、私にとつては急に、じゃないんだよ。

「さつき八幡が帰ってきたときさ、私、『感謝チヨコだよ』みたいなこと言ったでしょ」

「ああ、いやでも……………」

「いいから聞いて？」

「おう……………」

「あれ、とつさに思いついて言ったただけなの。…………そのね、あの時…………八幡が持ってたあの紙袋見て急になんだか怖くなっちゃって」

「紙袋……………」

八幡はもう一度部屋の角に視線を送る。

「ふふ、今の八幡の話もだけど、雪乃さんと結衣さん、でしょ？」

そう。私の想いが、彼女たちの想いに到底届かないことなんか最初からわかってるのに……………ただ、怖かった。

八幡はと言えば良いのかと一瞬迷ったような表情を見せ、そして、

「……まあ、な」

そう言つて八幡は少し切なそうな顔をする。……その表情にどんな思いが隠れているのか、八幡じゃない私にはわからない。

「私……欺瞞、なんて難しいことよくわかんないけど……。八幡はさ、逃げたんじゃなくつて、今の関係をそれだけ大切に思つてることなんじゃないかな。無くしたくないほど大事に思つてることなんじゃないかな」

「留美……」

「だから、『逃げた』なんて言い方したら、八幡が守ろうとしたものに……。失礼だと思う」

「……………」

「逃げてたのは、私なの」

そう、八幡には雪乃さんと結衣さんがいるつてわかつて、そのくせ、八幡が二人から貰つたであろう紙袋を見ただけで、「本命」つて言えなくなつて、「感謝チョコ」とか変な言い訳して……。

さっきの『感謝』つて言葉も、嘘を言つたつもりはない。

けど、私が八幡に本当に伝えたかつたことは……………。

「だから、今度はちゃんと言うね——」

私は……八幡が好き。八幡から見たら私なんてまだ子供かもしれないけど……でも、ちやんと一人の女の子として、八幡に恋してる、の。

——だから、これは本命チョコ。……まあ、あんまりチョコレートは使って無いんだけどね」

ようやく想いを告げた私は、中身を半分ほどに減らしたダックワーズの小箱にそつと手を添え、まつすぐに八幡を見つめる。

「留美お前……」

八幡の顔に浮かぶのは困惑の表情。

「別に、今私と付き合って、とかそんな無茶言わないから。ただ私が言いたかった……だけ、だから」

「……………その、本気、か？」

「うん」

「けど、そのなんだ……恋、つてのは……たぶん勘違いだ。たまたま苦しい時、悲しい時に俺がちよつと手を貸したっただけで、——別に俺じゃなくてもそうしたらどうし……だから、やつぱりさっきの感謝チョコっていうので合ってるんじゃないかねえのか？」

「……………あのさ、八幡」

まったく……。八幡は、そんな言い方をするんだね。

「おう……つて留美、なんで笑顔で怒ってんだよ」

「はあ。……八幡つて、面倒くさいね。それに馬鹿みたい」

「馬鹿つて……」

「……本当に……。本当に辛くて苦しい時に助けてもらつて、どれだけ感謝していいかわからない位で……。この人のこともつと知りたいなつて思つて、

それから、その人が今度は、ずっとギクシヤクしてた大好きな友達と仲直り……。うん、もう一度友だちになるのを手伝つてくれて……。やつぱりただ感謝するつてだけじゃ足りなくて、そして沢山話すうちに、どんどん、どんどん好きになつて……」

「いやだから、それが勘ちが……」

「勝手に私の気持ちを決めつけないで！　じゃあ聞くけど、これが勘違いなら、勘違いじゃない恋つて、ほんとに好きになるつてどういうこと？」

感謝から始まる気持ちが勘違いで、話をしていくうちに相手を知つて好きになるのも勘違いなら、どうやつて好きになるのが本当なの？　顔とか見た目？　それともお金持ちかどうかとか？」

いくら八幡でも、この気持ちを勘違いつて言われるのは許せない。

「——八幡は、私の気持ちが、恋じゃない、勘違いだつて言えるぐらい、女の子の気持ち

がなんでもわかるって言うのっ？」

「それ……は……」

八幡は、私の思わぬ反撃にたじろいだように言葉をつまらせる。

「ねえ、私は……私を助けてくれた八幡にいっぱい感謝して、色々話してるうちに八幡のこと少しずつわかってきて……それでますます好きになったの。……ね、自然なことだしよ……それにね」

「それに……？」

「私、これからも八幡のこともつと見ていたい。……近くに……居たい、の」

「……………」

「それで、万が一八幡の言うとおりにただの勘違いだったら……」

「おう……」

「その時はちゃんと『やっぱりやーめたっ』って言うから！ だから……それまでは八幡のこと好きでいてあげる」

私は強気に笑って胸を張る。

「ふ、おま、どんだけ上からなんだよ」

文句を言いながらも八幡はようやくやく愉しそうに……優しい目で笑ってくれた。

「だから逃げないでね？ 私は、八幡に助けってもらって嬉しくて、そして好きになった——この気持ちがお勘違いなんかじゃないって、ちゃんと本物だって証明してあげるんだから！」

「!! 留美おまえ、……『本物』って……」

八幡が何かに驚いたような表情かおをする。

「ん、どうしたの？ 八幡」

何か変なこと言っちゃったかな？

「いや……、なんでもねえよ。……しかし参ったな」

八幡はガシガシと頭を搔いて、ちよつと困ったように天井を見上げる。

「なあ、留美……」

「うん」

「その、悪かった。一方的に『勘違い』なんて言っちゃまって」

「うん……」

「まあなんだ、留美の気持ちはうれしい。けど、俺はなんにも応えらんねーぞ？」

「ふふ、『うれしい』って思ってくれたんなら……いいよ。さっき言ったでしょ、私が言いたかったただけだって」

これは本当。さすがに今、彼が私を恋愛対象に見てくれるなんて思っていない。

「おう……」

「だから、私が八幡を好きってことだけ、覚えておいてくれればいいの。あとは今まで通りで……いいよ。……あとね、八幡」

「お、おう」

「お願いだから、私のこと避けたりしないでね。……そんなことされたら……泣く」「脅しかよ……ったく、わかったわかった。これで留美を泣かせたりしたら、小町になんて言われるか分からんしな。……だから、お前がちゃんと『勘違いだった』って気がつくまでは……いつでも相手してやるから」

彼は、なんだか諦めたみたいに笑い、

「だからまあなんだ、その、よろしくな」

と言つて、八幡はまた私の頭を、ポン、ポンと撫でる。

……ふふ、自分の顔がにやけてるのがわかる。

ロマンチックでもなんでもなくなっちゃったけど、でも、伝えた。伝えられた……私の気持ち。

「うん、ふつつか者ですが、これからもよろしくお願いします」

私がカーペットの上で正座して、手をつけてペコリと頭を下げると、

「いや、そのあいさつ違うだろ……」

そう言つて八幡はちよつと照れたようにそつぽを向いた。

そこで私はようやく少し落ち着く。冷静に考えるとずいぶん恥ずかしいことを沢山言つてしまつたような……あう……。

もちろん八幡といつしよにいられて嫌なわけ無いんだけど、今の告白直後のこの状況で二人というのは……気まずいとかむず痒いとか……。

そこに階段を降りてきた小町さんから救いの声がかかる。

「留美ちゃん、お風呂いっしょに入るー」

清潔そうなバスルーム。白い湯気。

私と向かい合つて湯船に浸かっている、どこにも無駄なお肉がついてない裸身。

私は今、小町さんと一緒にお風呂に入ってる。

小町さんて、普段は全然そんなこと意識させないけど、こう、目の当たりにしてしま
うと結構スタイル良いんだよね……。スレンダーだけど、ちゃんと女の子らしい丸みを
帯びたライン。胸だって小さくはないし。

でも……八幡だって男の子だし、やっぱり大きい方がいいのかな？

私は……。まだそのっ、ふ、ふくらみ始めたばかりだし、お母さんはスタイル
いいし、こ、これからだもん！

「いやー、うちで誰かと一緒にお風呂はいるなんて何年ぶりかなー？」

小町さんはなんだかすごく嬉しそうに言う。

「……小学校卒業する頃までは、たまにお兄ちゃんと一緒に入ったりしてたんだけど
ねー」

「そーなんですか」

その言葉にちよつとだけドキツとする。

だって、小学校卒業する頃って、つまり今の私ぐらいって事で……。八幡と一緒にお風
呂……。

「うん？ お兄ちゃんと一緒に入ってみたい？ 呼ばか？」

「ええっ！　ちよ、そのあの……」

私が体を抱きしめるようにして縮こまると、

「あはは、冗談だよ。さすがに一緒に風呂つて年じゃ……。あ、そだ。……留美ちゃん」

「はい？」

「髪、洗ってあげる」

小町さんの指が、さわさわと私の髪をすくようにしてシャンプーの泡を馴染ませていく。誰かに髪を洗ってもらうのって、髪を伸ばしてからは初めてかも。

軽く指が通る度にシャンプーの花の香りが広がって、ほんの僅かだけ髪を引っ張られるような感じがなんだか気持ちいい。

「うーん、留美ちゃんの髪、真っ直ぐで綺麗だよねー。ストレートロング、ちよつと羨ましく」

小町さんは手を止めないまま、私の後ろから正面の鏡越しに声をかけてくる。

「小町さんは髪、伸ばさないんですか」

「小さい頃はけっこう長かったんだけどね。でも、こんなには伸ばしたことはないなあ。小町、ちよつと癖つ毛だし」

「小町さん、髪長いのも似合うと思いますよ」

「うーん、高校入ったら伸ばそうかな。さっきの話じゃないけど、もうお兄ちゃんとお風呂はいるわけじゃないし」

「八幡と？」

それと髪を伸ばすの話がどう繋がるのかよくわかんないけど……。

「小町ね、小さい頃はその長い髪が上手く洗えなくて、お兄ちゃんに洗ってもらってたんだー。」

ほら、うちは両親とも忙しくつてさ。お母さん帰ってくるの待っていると、お風呂入るの遅くなつちやうから」

なるほどね。八幡と小町さんが仲いいのって、きつとこういう事情もあるんだろかな。

「いくつぐらいまで伸ばしてたんですか？」

「小学校二年生、かな？ そのころから、お風呂入るのいつも一緒ってわけじゃなくなってきたし、自分でやるとなると洗うのも乾かすのも大変でさ。」

お兄ちゃんは、頼めば文句言いながらちゃんとやってくれるんだけど、毎回頼むのも

悪いなって思うようになって」

「私は逆で、そのくらいから伸ばし始めました」

「ふうん、なんかきつかけでもあるの？」

「……大した理由じゃないです。聞いたら笑っちゃうような……」

「別に笑ったり……と。留美ちゃん、流すから目、閉じててね」

「あ、はい。……ふわあ」

上からシャワーのお湯が優しくかけられ、小町さんの手が撫でるように、バラのような甘い香りの泡をすすいでいく。時折、泡を流してくれるように背中やお腹に当てられる温かいシャワーがちよっぴりくすぐったい。

「ほい、もう目を開けて大丈夫だよ」

小町さんは私の髪をサツと拭いて水をきると、もう一枚乾いた大きめのタオルを取って巻くようにまとめてくれた。

「完成っ」

「あの、ありがとうございます」

「へへっ。どういたしましてっ。……小町、こういう『お姉ちゃん』ほいことやってみたかったんだよね。ずっと妹欲しかったし」

そう言っつて小町さんは楽しそうに、いたずらっぽくクスクス笑う。

「ね、留美ちゃん、小町の妹にならない？ ……あれ、でももし留美ちゃんがお兄ちゃんのお嫁さんになったら、留美ちゃんがお義姉ちゃんいもうとで小町が義妹……。それはなんかヤダな。そこはあえて『小町お姉ちゃん』って呼んでくれないかな」

「お、お嫁さんって……………あう」

こ、小町さんてば急になんてこと言うの！ ……そりやあ、考えないわけじゃないけど、女の子だし。この前なんか、妄想の中で八幡を、『あなた』なんて呼んじやったりしてたけど……………。

「ごめんごめん冗談。でも……………へへ。その、ありがとね、あんなお兄ちゃんを好きになつてくれて」

「……………小町さん……………やつぱり、聞こえてました？」

いきなり「お嫁さん」とか言うって事は……………恥ずかしいなあもう。

「まあ、うちは別に防音でも何でもないし、ドアも開けっ放しだったし。……………あは、『ふつつか者ですが』だもんね……………。でも、留美ちゃんの気持ちに気がついたのはお菓子屋さんで会った時だよ」

え、あやせ屋で……………？

「実はさ、小町、あの時まで留美ちゃんをお泊りに誘おうとまでは思ってたんだよ

ね」

「え？ その……」

じゃあ、なんで……。

「とりあえず湯船浸かる。身体冷えちゃう」

小町さんはそう言つてにぱつと笑つた。

「ふう、あつたかくい。ね、留美ちゃん」

「はい」

髪を洗ってもらつている間にけっこう体は冷えてしまつていたようで、湯船のお湯がやや熱めに感じられた。ただ、その熱さがむしろ気持良く体の奥に沁みていく。

「さっきの話だけどき、今日お兄ちゃんから携帯に連絡あつたのつてちようど受験終わつたぐらいの時間でさ。多分こつちに影響ないようにつて気を使つてくれたんだろうけど……」

そう言つて小町さんはまた申し訳無きそんな顔をする。

「で、もう連絡間に合わないと思つたから、小町は、留美ちゃんに謝つて、『明日か明後

日には必ずお兄ちゃんのこと引っ張ってくるから』って言って、その予定を決めようと思つてたんだ」

「！ そうだったんですか？ あ、でも、だったらどうして急に……」

「あのね、留美ちゃんさ——すつこい悲しそうな顔したんだよ、小町が、『お兄ちゃんが来れない』って言った時。……もう、『この世の終わり』みたいな」

「な、そそ、そこまでじゃ……」

無い、と言える自信はない。だって会えるの楽しみにしてたぶん、会えないのが……お菓子渡せないって思った時、すごいショックだったから……。

「だからね、その顔を見て……今日じゃなきやダメだつて思ったの。留美ちゃんのこと、今日中にお兄ちゃんに会わせてあげなくちゃつて」

「……………」

「まあ、まさかあんな告白するとは思わなかったけどねー」

「あ、あれは勢いもあつて……その……」

全部聞かれてたかと思うと、このままブクブクと湯船に沈んでいきたくなる。

「でもさ、気持ち……伝わったんじゃないかな。……お兄ちゃん、もう少し自分に自信が持てるようになるんじゃないかな」

小町さんはまっすぐ私を見る。

「だから、今日留美ちゃんを連れてきてほんとに良かった。……ありがとうね」

立ち込める湯気の中、そう言って優しく笑う小町さんの顔は、何故かとても大人びて見えた。

鶴見留美は想いを贈りたい③ 優しい世界

小町さんと色々な話をしていたこともあって、少々長風呂になってしまったようだ。

ちよつと火照った身体に小町さんから借りたパジャマを身につける。きれいなグリーンの厚めの生地、見た目はちよつともこもこしてて、合わせの部分と袖のところにオフホワイトのラインが入った「ちよつとおしゃれな冬用の部屋着」みたいなデザイン。でも、腕通りもいいし、素肌への肌触りも良いあたり、やっぱりパジャマなんだなと思う。

サイズは……私にはほんの少しだけ大きい。でも、腕や裾を捲くらなきゃいけないほどでもない。

実は、うちでお泊りの準備をした時にはパジャマも持ってこようと思つて準備したんだけど、小町さんが、

「小町のパジャマ一組貸してあげる。冬物は荷物になるしさ」

と言つてくれたので、結局家から持つてきたのは替えの下着・靴下と歯磨きセットぐらいで済んだ。

ふと見れば、小町さんも私のと同じデザインで淡いオレンジ色のパジャマを着ている。見た感じ私の着てるグリーンの物より気持ち大きいサイズに見えるかな。

「えへへ、うちはいつも、ららぽの同じお店で、家族みんな同じ柄のやつ色違いで買ってるんだー」

小町さんはそう言つて、にこにこしながら私の肩を後ろから抱きかかえるようにして洗面台の前に引つ張つていく。

「小町さん？」

「ほら見て、お姉ちゃんと妹みたいでしょー」

満足気な小町さん……。洗面台の鏡に映る、色違いでおそろいのデザインのパジャマを着た二人の少女は——確かに、とても仲の良い姉妹みたくに見える。

それから二人並んでリビングに戻ると……。八幡は炬燵に足を突つ込んだまま、先程のソファに上半身をもたれさせた状態で静かに寝息をたてていた。

「ああもう、お兄ちゃんはしょうがないなあ。……。小町、上からお兄ちゃんの着替え取ってくるから、留美ちゃんはそいつ叩き起こして、お風呂に放り込んで」

「え……。あの、……。はい」

小町さんは、私が「あの」といつてるあたりでもう階段を上り始めていた。

仕方なく、というわけでもないけど、八幡の肩を軽くゆすりながら声をかける。

「八幡、起きて。……コタツで寝たら風邪ひいちゃうよ……八幡ってば」

「……………ん……………小町ちゃん、愛してるからあと五分……………」

はあ、ダメだ。完全に寝ぼけてる。

でも……………目を閉じてる八幡はいつもより少しだけ幼く見える。整った眉、すつと通った鼻筋……………こうして間近で見ると、意外に睫毛もけつこう長かつたりして。……別にすごいイケメンでわけじやないんだけど……………うん、十分にカッコイイ男の子だ。

ふふ、……………なんだかドキドキしてきちゃった。

あまりにも無防備なその姿を見て、私はちよつとしたいたずらを思いつく。

一つ咳払いをして、「あー、あー」と軽く発声練習。……よし！

『お兄ちゃん、とつとと起きないと、小町もう口聞いてあげないよ』

もう一度肩をゆすりながら八幡の耳元で言う。口調だけは真似たつもりだけど、どうか……………？

すると八幡は、目を閉じたまま、

「んっ」と正面やや上に両手を伸ばす。……引っぱり起こしてつてことかな。ふふ、いつもこんな風に小町さんに甘えてるんだ。なんだかかわいい。

私が、八幡の両手を持って、よいしょと勢いをつけて引つ張ると、八幡は寝ぼけたまま、でも引つ張られるままにゆっくりと起き上がり……………わ、私の身体に抱きつくように覆いかぶさってくる！

え、八幡？ 何……………いきなりそんな……………「ぐえ」

ちよ、重いっ。変な声出ちやつたでしよ。

何の事はない。八幡はただ、私の身体を手すり代わりに立ち上がったただけだった……………んだけど、まだ完全に寝ぼけているらしく、私に抱きついたまま……………というか、頭と肩に掴つかまったままフラフラしてる。

ちよつと八幡……………肩はともかく女の子の頭に掴まるって失礼じゃない？

そうは言つても、私は八幡が倒れないようにバランスをとるのに必死で、身動きが取れず困っていると、

「お待たせ……………つて、ちよつとお兄ちゃん何やつてるの！ 小町にじゃないんだからそんなことしちやダメ……………」

階段の中ほどで気が付いた小町さんが慌てて駆け下りてくる。

小町さんになら良いの!? という疑問は一旦置くにしても……………慌ててたわりにはすぐに助けてくれる様子がない。

うう……………八幡が近いよ……………体温が、息が……………近くて……………。

「あ、あの、小町さん助けて……………」

私が言うと、小町さんはようやく手を貸してくれた。

「あ、ごめん。留美ちゃんなんか嬉しそうだったから良いのかなって」

「そ、そんなわけ無い……………です。重かったし」

「あはは」

バレてるなあ。…………それはその、嬉しくないこともなかったけど…………。まあ、頬が火照っているのは決して風呂上がりだからというだけじゃない。小町さんから見たら、私の顔は面白いぐらい真っ赤になっていることだろう。

八幡を二人で両側から支えるような体勢になり、小町さんが肘で彼の脇腹あたりをけっこう遠慮なくグリグリつとやると、

「んがっ……………。あ？ ……何？」

と、八幡はようやく目を覚ました。

「…………へ、何この体勢…………俺、どっかに連行されてんの？ それに留美、なんで赤くなつて…………？」

「なん……………」

「なんでも何も、ごみいちゃんのせいでしょうが、この馬鹿八幡。いいからとつとお風呂入ってきて」

私何か言うより先に小町さんがキレた。二階から持つてきた八幡の着替えを彼に押し付けるように渡すと、片足を上げて足の裏で押し出すようにして八幡をお風呂の方へと追いやった。

彼は、「相変わらず扱いがヒデーな……」とかブツブツ言いながら、まだ少し寝ぼけているのか、フラフラとした足取りでバスルームの方に向かって行った。

「留美ちゃん、アホな兄がゴメンね」

「いえその……私も悪くて……」

私がボソボソとそう言うと、

「え？ 何が」

小町さんが不思議そうに聞く。……これ、言うの恥ずかしいなあ。

仕方なく、私が正直に「小町さんの真似をしたらさつきみたいになつた」のを話すと、彼女はなんとも複雑な表情をして……。

「うん、やっぱりお兄ちゃんはどうしようもなく八幡だなー」

と結論づけた。

「八幡」って悪口じゃないと思うけど……でも、小町さんの言い方になんだかすごく納得させられてしまった。……ふふ「どうしようもなく八幡」だって。

小町さんと二人、まだ湿っている髪にドライヤーを当てていると、玄関から、「ただいまー」と声が聞こえてきた。

どうやら八幡たちのご両親が帰ってきたようだ。……なんだか少し緊張する。この前お母さんの雑誌に、『カレの母親のアナタに対する好感度は、第一印象で九割決まる！』とか書いてあったし……。

「おかえりなさい、お父さん、お母さん」

「はい、ただいま」「ただいま」

「あの、お邪魔してます」

私は立ち上がり、ピンと背筋を伸ばしてご両親に頭を下げる。——第一印象、第一印象。

「あら、小町のお友達がお泊りするって……ずいぶん可愛らしいお友達ね！」

「うん、小学六年生の子でね、夏にお兄ちゃんに行ったボランティアの時に仲良くなったの」

「鶴見、留美っていいです。よろしくお願いします」

「こちらこそ。八幡と小町の母です。今日は遅くなっちゃってごめんなさいね」

「初めまして、二人の父です。家は、私も家内もこんなだから大したお構いも出来ないが、自分の家のつもりで寛いでくれて構わないからね」

なんか……カッコイイご両親だ！

いつも八幡が、「社畜」とかヒドイこと行ってるけど、お父様もお母様も、スーツが似合ってる、すつごく「仕事が出来る大人」って感じがする！

それに、なかなかの美男美女だ。……文句なしに可愛い小町さんと、ちゃんと見ればかっこいい八幡のご両親なんだから当たり前なのかもしれないけど。

「おう、お帰り。親父、お袋」

そこに、八幡がお風呂から戻ってきたんだけど……。

「あ……」「おい……」

二人して一瞬固まる。八幡は、私と色も柄も同じパジャマを着ていた。………八幡と、おそろいのパジャマ……。

八幡は視線を下に落として、なんとも落ち着かない表情。………きつと私も似たような顔をしてるんだろうな。

「えへへ、留美ちゃんには私が前に着てたのを貸してあげただけど、偶然お兄ちゃんと同じ色になっちゃったねえ」

小町さんは、私たち二人が照れているのを見て、満足そうにニヤリと笑った。

その後、あらためて八幡のお父様とお母様にごあいさつ。

私が、

『八幡さんと小町さんには、本当に、感謝しきれない位お世話になってるんです』

といったようなことを一生懸命お話ししたら、ご両親はうんうんと頷きながら聞いてくれた。

話の区切りがつくと、お母様はなんだか嬉しそうに、

「留美ちゃん、これからもよろしくね」

と仰ってくださいる。……それに、その様子を見ていたお父様が、ニコニコして八幡

に何か言いながら彼の背中をバンバンと叩いていたのが印象的だった。

八幡は「いてーよ親父、ったく叩き過ぎだろ……」とか言つてそっぽ向いちやっただけど、小町さんはそれを見てとつても楽しそう。

うん、八幡でばいいつも、親父やお袋は小町ばかりかわいがつて……とか言ってるけど、全然そんな事無さそう。ちよつぱり拗ねてるみたいな八幡を見ると、なんだか私まで嬉しくなってきた。

小町さんの部屋。彼女のベッドの横に敷かれた薄ピンク色のふわふわのお布団の中。布団に入って暫くして……最初は少しだけ緊張していたものの、いつの間にかウトウトしていた私は、どこからか聴こえてきた「キイ」という微かな音に気付き、ゆつくりと目を開く。

……そして、足元の方向、部屋の入口から誰かが覗き込んでいる気配に気付いた。背中がゾワリとし、一瞬で目が覚める。

僅かに開いたドアの隙間。常夜灯の明かりは弱く、その暗闇の先には届いていない。え、八幡？ でも、用があるなら声かけてくるよね……。まさか、泥棒、とか……。気付かれないように、寝返りをうつふりをしてそうつと周りを見回す。小町さんは全く気づかずに眠っているようだ。……ドアのところの気配はまだ動かさじつとしているみたい。私が目を覚ましたのに気付いたのかな？ どうしよう。

「ん……」

小町さんが寝返りをうつ……と、その侵入者は、

可愛らしく、「みー」と鳴いた……。

はああく。全身の力が抜ける……びっくりしたあ。

気配の正体はカマクラくん。そういえばさつきから姿が見えなかったけど、今までどこにいたんだろう。

隣のベッドで寝てる小町さんが、「んんっ」だか「んなっ」だか言いながら布団の真ん中あたりを腕で持ち上げて隙間を作り、反対の手でポンポンとベッドの縁を叩く。カマクラくんはおっかなびっくりという感じに私のちようど膝のあたりを布団ごと踏み越えると、そのままベッドに飛び乗るようにして小町さんの布団の中に潜り込んでいった。

ああ、そうか。いつもの通り道に私が寝てたから、カマクラくんは困ってすぐ部屋に入ってこれなかったんだ……ふふ、怖がったりしてごめんね。

でも、一安心はしたものの、私は今ですっかり目が覚めてしまった。

小町さん、今ので起きたのかな？ もし目が覚めてるなら、せつかくだから聞いてみ

たいこともあるんだけどな……。

「……小町さん、起きてます？」

「……う……ん。……どうしたの留美ちゃん…… 眠れない？」

やっぱりもう寝ちやつてるかな、と思った小町さんが、一呼吸遅れて返事をしてくれる。

「あ……なんだかその、目が冴えちやつて……」

「あはは。まあ、今日は色々あったしね。……留美ちゃんも小町も」

あー……私の場合、今まさに目が覚めるようなことがあったんですけど……。

でもそうだね。小町さんは今日ようやく受験が終わって……。

「……もしかして今起こしちゃいました？……小町さん、疲れてるのに……」

「ううん、いーよいよ。——それで？」

「あ、あの……」

「聞きにくいこと？ ……もしかしてお兄ちゃんのことかな」

「いえ、そうじゃなくて……あれ、やっぱりそうなのかな……」

「んん？」

八幡のことって言えば八幡のことだけど……でもそうじゃなくて……。

「小町さん」

「うん」

「小町さんは……何で私のこと……その、手伝ってくれるんですか？」

「ん？ 何でって……」

彼女は質問の意味がよく分からない、というふうに言っただけで寝返りをうつ。部屋の明かりは微かで、その表情ははつきりとは見えない。

「……友達に……小町さんは雪乃さんと結衣さんの味方をするだろうから、って言われてそれで……その」

そう。さつき小町さんが言っていたように、もし私の気持ちに……私が八幡のこと本気で好きなんだっていう気持ちに気付いてるなら、あの二人とすぐく仲の良い小町さんが私を手伝ってくれる理由が解らない。

……所詮私なんて子供だから、って、本気にされてないのかな。——全然、相手にもされてないのかな。

そんな風には思いたくない。ないけど……。

「ふんふん……なるほどね〜 ……もしかして絢香ちゃん？」

「いえあの……はい」

まあ、隠すようなことでも無いし。

「あはは、言いそうだよね〜 ……ねえ、留美ちゃん」

急に小町さんの声が真剣なものに変わり、私は一瞬息を呑む。

「は、はいっ」

「小町は、雪乃さんのことも結衣さんのことも大好きだけど……別にあの二人の味方ってわけじゃあないよ？」

「え……」

「それに、留美ちゃんの味方でもない。——小町はね、お兄ちゃんだけの味方なの」

「……………」

「お兄ちゃんはあるんだけど——でもね、小さい頃から、小町が寂しい時も辛い時も、どれだけ我儘わがまま言ってもずっとずっとそばにいてくれて……いつでも小町のことを一番に考えてくれて——だから、小町は『お兄ちゃんの味方』なの」

息が詰まり、なぜかじわつと涙が出てくる。……きつと、いつもどこか飄々とした話し方をする小町さんの……こんなにも感情のこもった声を初めて聞いたから。

「まあ、うざいし面倒くさい時も多いんだけどねー」

「あはは」と、小町さんはいつもの話し方に戻って照れ隠しのように笑う。

「小町さん……」

「結局恋愛なんて本人同士の問題だからね。お兄ちゃんが誰かを好きになつて……その人もお兄ちゃんを好きになつてくれたなら……うん、小町はそれでいいと思うんだ」

「はい……」

「ただ……出来るなら——お兄ちゃんをちゃんと見てくれる人がずっとそばに居てくれたら良いなつて」

いつの間にか仰向けになっていた小町さんは、天井を見上げてそんなふうと言つた。

「今の、留美的にポイント高い、です」

そう言つて、私も小町さんと同じように仰向けになる。

「おー、留美ちゃんもなかなか言うねー」

二人で天井を見上げ、目を合わせないままクスクス笑う。

「ふふ、起こしちやつてごめんなさい。もう寝ましょうか」

「そだねー。……どう、もう眠れそう？」

「はい。なんだかぐつすり眠れそうな気がしてきました」

「ん、じゃあ……おやすみ、留美ちゃん」

そう言つて小町さんは少しもぞもぞと動いて後ろを向いた。微かに、ゴロゴロというカマクラくんが喉を鳴らす音が聞こえてくる。

「はい、おやすみなさい……」

私は右耳を枕につけ、家で眠るときと同じ横向きの体勢になり、それから肩まで掛け布団を引つ張り上げた。小町さんとはちょうど背中合わせの向き。

そういえば……私の正面、壁一枚挟んだ部屋で八幡が眠ってるんだよね……なんだか変な感じ。

その壁をぼんやりと見つめながら、私はゆっくりと目を閉じた。

今度こそ、私はゆっくりとまどろみの中に落ちていく。

………小町さんて、八幡のシスコン以上にブラコンだったりする……？

ふふ、もしかしたら私の恋の最大のライバルは……小町さんかも………なんて……

くだらない事を考えてるなあ……私………。

………お休みなさい………八………幡………。

「ピンポーン」と、比企谷家のリビングにチャイムが鳴り響く。

「お兄ちゃん、ちよつと出てく。小町たち今、火い使ってるからく」

「へいへい」

そう言つて八幡は、一つ伸びをしてからゆつくりと立ち上がり、引き戸をあけて玄関に向かった。

土曜日の朝。私たち三人は、少し遅めの朝ごはんの準備をしているところ。

八幡たちのご両親は、まだお休みになっている。と言つてもお仕事がお休みという

わけでは無いらしい。土曜日はフレックスという制度で、小町さんの話によると、ご両親は今日はお昼前位に出勤することにしたそうだ。……昨日もお帰りが遅かったし、大変だなあ。

八幡がいつも、仕事なんかしたくないって言ってるのって……ご両親の大変そうな姿を見ているせいもあるんじゃないかな。

今朝の献立は、ご飯に豆腐とわかめのお味噌汁。豚こま肉を生姜焼き風に炒めたものと、玉子焼き、サラダ。それから、昨日のシチューの残りを電子レンジでチンしたものと、小町さんに、朝はいつもご飯なんですか、と聞いたたら、特には決まってるじゃないとのこと。トーストのときもあるし、完全な和食の時もあれば、今日のように和洋折衷みたいなメニューの時もあるんだって。

小町さんが玉子焼きを焼いている間に、私は煮立ちかけたお味噌汁の鍋の火を止め、レタスをちぎって皿に敷き、トマトとブロッコリーを切つてその上に盛り付ける。

ドレッシングは……好みもあるし、まだ掛けないでおいたほうがいいかな。

八幡がなかなか戻ってこないの、私は玄関に続く戸を開けて顔を出し、

「八幡、もうすぐ朝ごはん出来るからこっちに……」

来て、と声をかけようと……。

「……………とにかくつ、昨日は奉仕部のお二人に先輩のことお譲りしたんですから、今日こそはわたしに付き合ってください……………へ？」

なつ……………え、ええ〜っ!? ちよちよつとお、どゆことですかせんばいっ!!」

と、早口でなにかをまくし立てていた、特徴のある甘い声の女の子が驚きの声を上げる。

「あ、いろはさん……………おはようございます」

「あ、うん。留美ちゃんおはよ……………じゃなくてっ! ……これは一体……………」

いろはさんは、私と八幡にせわしなく視線を走らせ、なぜか両手をブンブン振り回して半分パニックになってる。……………そんなに何か変だったかな？

えーと? チャイムが鳴って、まず八幡がパジャマ姿のまま玄関へ対応に出た。

で、戻ってこない彼に、

「八幡、もうすぐ朝ごはん出来るよ」

と、声をかけに出たっていったら、八幡はまだ来客であるいろはさんと話をして……………。

……あ、もしかして、小町さんも八幡のご両親も顔出してないから、八幡と私、二人つきりだと思われちゃったのかな？　そういえば私、八幡と同じパジャマの上にエプロンを着けた格好だし……うん、これは変な誤解させちゃったのかも。

小町さん呼んで誤解を解かなきゃ、と思つた時には、

「……………だから、ちよ大変なんですよう。……………そうです、留美ちゃんをお家に連れ込んで……………。はい……………。……………その、おそろいのパジャマなんか着ちゃつててですねー……………」

いろはさんは、もう誰かに電話（通報）をしている最中だった……………。

数時間後……………。

比企谷家のリビングは法廷と化し、被告人である八幡が、無実の罪で裁かれようとしていた。……………よくニュースでやつてる冤罪つて、こんな感じなのかなあ。

法廷（仮）に、八幡の正面に陣取った裁判長の凜とした声が響く。

「……………では結論として、被告人比企谷くんが、小学生女子を自宅に連れ込み、その、いかがわしい行為に及んだ、ということの間違いないわね」

「ひ、ヒツキーがそんな……………ヒドイよ……………」

「ホントです。……………せんぱいが……………せんぱいがこんな変態だったなんて……………」

「だから違うっつーの。……………ねえこれいつまでやるの？ お前らわかってやってやってんだろ」

周りを女子三人にぐるりと囲まれて正座させられていた八幡がぼやくように言う。ちなみに小町さんと私は少し離れたソファ（傍聴席？）に座っておとなしく様子を見ている。

「……………そうね、さすがに人様のお宅でいつまでもこんな悪ふざけをしているわけにもいかないわね。ここらでお開きにしてお茶にしましょうか」

直前の台詞とは別人のような柔らかい声で雪乃さんが言う。

「よし、それじゃ、ヒツキーは有罪ってことでいいよね」

「ですねー」

「いやよくねーだろ？」

「どうやら裁判ごっここの決着はついたらしい。——八幡の弁明は届かなかつたみたいだけど。」

「じゃあ、小町お茶淹れてきますよ」

「あ、私も行きます」

隣ですつと立ち上がった小町さんに続いて私も席を立つ。

ふと、結衣さんと目が合う。私のことを見てたみたいだつたけど……。

「結衣さん？」

「あ、ううん。ゴメンゴメン。ただ、ずいぶん小町ちゃんと仲良くなつたんだなーつて」
それは……うん。昨日からたくさん話せて、八幡——「お兄ちゃん」に対する強い想
いも聞けて……。

今回のことで私、小町さんと前よりずっと仲良くなれたんじゃないかなって思う。
……小町さんの方もそう思ってくれてたら嬉しいんだけどな。

実は、朝のあの後すぐに、変な誤解自体は解けたんだよね。……小町さんが私たちの様子を見に来てくれたから。

でも、どんなやりとりがあつたのかは分からないけど、いろはさんの電話の相手だった結衣さんと雪乃さんがここに来ることになった。なんでも八幡に話したいことがあるんだとかで。

しばらくしてご両親がお仕事に出かけられて——起きて来たらリビングにいる女の子がもう一人増えてるのに目を丸くしてたけど——そして、程なく雪乃さん、結衣さんが到着。

で、さっきの裁判になりました、と。

「……………ひどい目にあつた……………」

ようやく被告人席から開放された八幡がお茶をすすりながらホツとしたように言う。

「比企谷くん、貴方がいけないんでしょう。昨日電話で話した時、留美さんのこと一言も言わなかったじゃないの」

「そーだそーだ、ヒツキーが隠すのが悪いんだー!」

「いや、あれはその、言うタイミングを逃したっつーか……だいたい、留美のこと連れてきたのは小町だし」

「それでも、よ。折角……これからは何でもすぐ話せるように、と連絡先を交換したというのに……最初から隠し事みたいなのをされるといいうのは気分が悪いわ」

雪乃さんが、珍しくほんの少しだけ拗ねたような声を出す。

「うぐ……それは、……スマン、悪かった。……ただ、ああいう話の流れだと言いつらくてな……」

八幡が頭をガシガシ掻きながら言い訳のように言う。

「ええ……確かに分からなくもないけれど……」

「えへへ、でも……やっぱりゆきのんも、あの後ヒツキーに電話したんだね」

結衣さんが嬉しそうにポツリと言う。

「それは……その、緊急時のためにもちゃんと連絡できるか確認しておかないといけな

いでしよう」

「いや、昨日は別にそんな話しなかっただろ。お前の……………」

「黙りなさい比企谷くん。例えば私が昨夜貴方^{きのう}に何を話したとしても、それは今言つたように確認のための一環に過ぎないわ」

雪乃さんは微かに頬を染めた表情でキツと八幡を睨む。

「お、おう……………」

「でも…………そんなふうに言われると、雪乃先輩がせんぱいとどんな話したのか逆に気になりますね……………」

「——色さん？」

いろはさんの言葉に、雪乃さんが氷の視線を向ける。

「ひゃい、な、なんでもないです……………」

雪乃さん……………最近是她女の事「いろはさん」って呼んでるのにこういう時は……………ふふ、怖い怖い。

「あはは……………」

なんていうか……………お互い言ってることはアレだけど、八幡たち三人といろはさん……………

絡み合う視線は優しく、そして楽しそうで……いいなあ。

過ごしてきた時間の、積み上げてきた絆の差を見せつけられ、胸の奥が鈍く痛む。

きつと、これが八幡が守ったもの。——失いたくなかったもの。

八幡は「欺瞞」とか言うけど、私から見えるのは、ただ眩しくて、遠くて……どこまでも優しい世界。

でも……でもいつか、私もこの世界の内側に入ることが出来たなら、きつと……。

「……とにかく、留美さんはあくまで小町さんのお客さんで、比企谷くんにやましいことは何も無かったというのなら、最初からそう言えばよかったですよ」

雪乃さんの言葉にドキツとする。……別にやましいこと、じゃないけど……昨日、私は八幡に「好き」って伝えて……思い出しただけで頬が熱くなる。

思わずそつと八幡の方を見てしまう——と、八幡とまともに目が合ってしまった。彼もなんだかバツの悪そうな、照れたような表情で……見つめ合った時間は数秒。二人どちらからともなく目をそらす。

「……………」 「あ……………」 「……………」 あれ？」

はっと気がつくと、雪乃さんたち三人が私と八幡の様子をじいつと見ていた。

「……………」 比企谷くん、今のは何かしら？」

「ヒッキー……………」

「……………」 せんぱい……………。これはもう一回裁判ですかね……………」

「あのつ、八幡は別に……………」

「留美さん……………」 貴女もそこに座ってくれるかしら？」

私の弁明は、雪乃さんの平坦で——でも有無を言わせぬ声に遮られた。

さ、さっきの訂正。八幡が守ろうとした世界は、優しいだけではないみたい……………。

鶴見留美は想いを贈りたい 完

鶴見留美はふわふわと落ち着かない① 卒業とサ・プ・ライズ

「おつ待たせです〜」

ここは比企谷家のリビング。三人とも部屋に入ったのを確認するようにして元気な声を上げたのは、私の左隣に立つ小町さん。

彼女の反対側、右隣には絢香が立ち、私たちは三人とも、首から足首のあたりまでを隠すようにすっぽりと薄手のシーツを巻きつけるように羽織っている。

リビングのソファには観客席宜しく八幡たちが座ってる。どうやら私たちの準備を待っていてくれたようだ。

そう言えば、先月にお邪魔した時にこの部屋の真ん中をどーんと占領していた炬燵は、その姿を普通の低い長テーブルへと変えており、そのせいか少しだけ部屋が広くなったように感じる。

あの日、雪乃さん・結衣さん・いろはさんに不審な態度を追求された八幡と私だけど、

「感謝の気持ちのチョコプレートを送った・受け取っただけ」という事でどうにか事なきを得た。

つまり、玄関で『感謝チョコ』を送ったことだけを話して、八幡が「ぼっちの俺はそういうの慣れてないから態度がおかしかっただけ」と主張し、夜の……私の八幡への本気の告白についてはどうにかバレずに済んだの。おかげで今私はこうして無事にここに立っていられるんだ……。

大袈裟？ ううん、そう思えないくらいあの時の裁判もどきはちよつと怖かった……うん……怖かった。

ふと、隣に立つ小町さんがピンと姿勢を直す気配で我に帰る。

「ではっ、エントリーN.O. 一番！ 小町、行きまーす！」

彼女が掛け声とともにバサツと勢い良くシーツを床に落とすと、

「おおっ」

と、観客席？ から感嘆の声が上がる。

「小町ちゃん……小町ちゃんが総武の制服着てる………なんかもう、なんかもうだよ！ ゆきのくん」

結衣さんが目を潤ませてそう言いながら、雪乃さんの袖を引つ張ってぶんぶん揺する。

「ちよつと……結衣さん、そんなに引つ張らなくてもちちゃんと見ているわ」

雪乃さんは結衣さんの手を押さえるようにしながら、

「でも……、本当によく似合っているわ。あらためて、合格おめでとう、小町さん」

そう言つて柔らかに微笑う。

「へへー。ありがとうございます！ 結衣先輩、雪乃先輩」

小町さんはニコニコしながら、なんだか嬉しそうに言った。

「あ、先輩つて……そうかあ。えへへ、小町ちゃんにそう呼ばれるとなんか照れちゃうね

……つて、ヒツキー、なんか泣いてるし!？」

「ばっかお前、小町の晴れ姿だぞ!! これが泣かずにいられるかよ」

八幡がグツと拳を握つて力説するように言う。

「いや、入学式とかでもないのにさすがにそこまでどちよつと引くつてゆーか……」

「まあまあ結衣先輩。お兄ちゃんはどうせいつもこんなんだから、いちいち気にしてたら負けですよっ」

小町さんが苦笑いしながら「たはは」と呆れたように言えば、

「そうね、小町さんの言うとおりよ。比企谷くんのシスコン体質はもはや不治の病なの

だし、これから小町さんがうちに入学してくるにあたっていちいち気にするのは時間の無駄……いえ、そもそもあなたの存在自体が無駄……？」

雪乃さんは素の表情で小首を傾げる。きよとんとした表情が可愛い……言ってることはヒドイけど。

「おい……」

「なにかしら泣なきき谷がくん」

そう言つて雪乃さんは八幡に視線を向け、いたずらっぽく笑った。

「無駄に韻を踏んでるのが腹立つな……」

そう文句を言いつつも、八幡の声音はどこか優しい——優しさを、無理に隠そうとしなくなってる。それを見て結衣さんが嬉しそうにへへつと笑った。

そんな様子を見ていた小町さんは口元に笑みを浮かべ、くるりと私たちの方を向いてニツと笑つて声を上げる。

「じゃあ、第二弾っ！ 留美ちゃん、絢香ちゃん、どうぞっ！」

少しだけ緊張する。私と絢香はお互いに目を合わせ、声を出さずに「せーのっ」と口だけを動かし、二人同時にシーツを足元に落とした。

「おお……」「うわ、可愛い……」「ふふ……」

私たちがこの春から通う中学校、美浜第二中学校——通称浜二中——の制服は黒に近い紺色のジャンパースカート型だ。前身頃に6つの飾りボタンが着いていて、スカート部分の裾のところには一本白いライン。ウエストのところをベルトで締められるようになってる。

中のシャツは白で、襟の赤いリボンタイが可愛い。この赤いタイが総武高の制服と同じっぽく見えるという所も私的にはちよつと気に入ってる部分だったりする。

「……リアル朝潮改二かよ……マジか……いや、これはこれで……」

なんだか意味不明なことをブツブツ言ってた八幡だけど、

「あの……どうかな、八幡……?」

という私の言葉にはつとしたように、

「いやその、すごくよく似合ってるぞ。留美も……綾瀬もな」

ちよつとだけ照れたような顔で、それでもちちゃんと褒めてくれた。ふふ。

「うんうん、なんかさ、二人ともかつこいいっていうか……大人っぽい、し?」

「ほんとそうですね。小町のとこのセーラー服も好きでしたけど、浜二の制服のが特徴あつてオシヤレっぽい感じはしますよね」

ちよつと羨ましいなー、と小町さん。

「そうね。特に絢香さんなんか背が高いから……なんだか高校生みたいに見えるわね」
雪乃さんが誰に言うともなくそんな風に言う。

確かに絢香は、結衣さんや小町さんより身長が高い。雪乃さんともそれほど変わらな
いんじゃないだろうか。

早く大人になりたい私としては、彼女のスラつとして大人びたスタイルはすごく羨ま
しいって思うんだけど、絢香に言わせれば、「背え高ければ高いで損することだってある
んだよ。特に女子はさあ……」ということらしい。

そんな話をしていると、絢香が

「あの一、今さらなんですけど……本当にあたしも呼んでいただいて良かったんでしょ
うか？」

と、なんだか申し訳さそうに言う。

「あら、急にどうしたの、絢香さん？」

「いやそのですね、比企谷さんのご自宅って……留美はともかくあたしは良いのかなっ
て。いろはさんだって来てないのに……」

「二色は声かけなかったわけじゃないぞ。ただ、この時期忙しいみたいでな」

「そうそう。いろはちゃん、生徒会長さんだもんね。今日来れないってすごく残念がつてたし」

「まあアレだ。今日は卒業祝いつてことだしな。なら留美と綾瀬は一緒に呼んでもおかしくはねえだろ。留美一人つてもアレだし……。それに……いやまあ、それは後でか……」

「……?」

後で? なんの事だろう。

そんな風に、少々大袈裟過ぎだった制服姿のお披露目も終わり……、

「じゃ、あらためて乾杯……の前に、制服着替えよつか」

着たばかりだけどねー、と小町さんが言い、私たち三人はそろそろと小町さんの部屋へと着替えをしに戻っていく。ふふ、なんだかちよつとお間抜けな感じ。

まあ、さすがに入学式前に制服汚すわけにはいかないもんね。

そう、私と絢香は数日前にそれぞれの小学校を卒業したばかり。四月から同じ中学校

に進学するのを待つ身だ。

小学生でも中学生でもない——ちよつとだけ心細いような、それでいてわくわくするような——不思議な、ふわふわとした気分の数週間。

『桜のつぼみもふくらんで』

『今、希望の季節——春』

『僕たち』

『私たちは』

『『今日、〇〇小学校を卒業します』』

『……………』

『……………』

今日は私が六年間通った〇〇小学校の卒業式。嬉しいことも悲しいこともあったけど、それが今日で最後だと思うと……どうしてもしんみりしてしまう。

なんて……我ながら月並みな感想だなあ。でも、卒業式の当事者になればきつとみんなが思うこと——感じることに。

今、六年生から在校生に向けての、『わかれの言葉』の最中なんだけど、皆で言う台詞以外に、卒業生全員に一人だけで言う台詞が必ず一つ割り当てられる。

その、私に割り当てられた台詞が………

『夏休み、楽しかった林間学校』

ふふ、……楽しかった、かなあ？ でも、間違いなく一生忘れられない思い出にはなつた。もし林間学校が無かったら、八幡とも出会えなかつたわけだし……。

そんな風に思えば、割り当ては単に出席番号順なのに、私にこの言葉が回ってきたのには不思議な縁のようなものを感じてしまう。

——ほんと、馬鹿ばっか

——まあ、世の中大概たいていはそうだ。早めに気づいてよかつたな

誰に言ったわけでもない私の独り言のような言葉に、なんともひねくれた言葉を返し

てきた、徹夜続きみたい目だドヨンとしたボランテニアの高校生……変なやつ。
あれから半年……ふふ、まさかその「変なやつ」をこんな……こんなに好きになる
なんて想像もしなかった。

思えばあのひねくれた台詞も、一応私を慰めてくれようとしてたのかなって今ならわかる。ほんと、八幡の優しさって解りにくいんだよねー。

『私たちは決して忘れません』

あ、今の女子全員で言う台詞だったのに、ぼーつとして言えなかった……。

……変なこと考えてないで集中しなくちゃね。もうすぐ『わかれの言葉』も終わりが近い。

『……』

『……』

『希望を胸に』

『旅立ちます!!』

卒業生全員で最後の言葉を締めくくる。一呼吸置いて、ゆつくりとピアノの伴奏が流

れ始めた。

『『くしろいひかりのなーかにー……………』』

練習で散々歌って、もう感動も何もないだろうと思っていた卒業式の定番ソング……
けれど、本番で歌うと——なぜかこの歌はひどく心に沁みた。

卒業式を無事に終えた私たちは一度在昇降口から校庭に出た。下級生たちが一列に並んで作ってくれている花道をぞろぞろと歩き、彼らとの別れを惜しむ。卒業式で泣かなかったのに、ここで泣いてしまう子達が結構いる。

それほど親しい下級生がいたわけじゃない私だけど、それでも縦割り活動とかで一緒だった低学年の女の子たちが目を潤ませて、

『留美ちゃん、卒業おめでとうございませす』

と言って小さな花束をプレゼントしてくれたのには、私の方もちよつとだけ目頭が熱

なくなってしまうた。

その後、卒業生全員が正面玄関前に移動し、父兄と一緒にのクラス写真撮影になる。自分のクラスの順番が廻ってくるのを待ちながら、めいめい仲の良い友達と写真を撮り合ったり、話をしたりしている、そんな時。

ピンクと黄色の紙の造花で縁取りされた、「〇〇小学校卒業式」の看板の前で、泉ちゃんと並んで写真を撮ってもらっていると、

「……留美、ちよつといい？」

「え？ ……うん、……何？」

声をかけてきたのは森ちゃん。見れば、一緒に友ちゃんと仁美も居る。……そういえば仁美がこの二人と一緒にいるのを見るのはずいぶん久しぶりのような気がする。

「あの、さ……」

森ちゃんは仁美と私とを交互にチラチラ見ながら、遠慮がちに何かを言いかける。

「うん……」

「五人で、写真撮らない？ その……うちら、中学違うし。由香にも声かけて」

「あ……」

そう。森ちゃんは陸上の強豪校である私立中に無事合格し、この春から私たちとは違う中学校に通うことになっている。そしてなんと友ちゃんも。

友ちゃんだって元々成績は良い方ではあったけど、森ちゃんと同じ中学校に行きたいつて言つて春ぐらいからものすごく勉強してたもんね……。森ちゃんもずっと彼女の先生役してたし。

ちなみに森ちゃんも陸上特待生ではなく一般受験。この前「どうして？」つて聞いてみたら、

「うーん、中学校で陸上よりもつとやりたいこと出来ちゃつたら困るし」

だつて。何でもこなせる森ちゃんならではの答えだよ。

ただ、もしかしたらだけど……。友ちゃんの受験の結果によつては私立中やめるつもりだったのかも。ちらつとそんな事をほのめかしたら、森ちゃんは照れたみたいにくすりと笑つた。

……ふふ、いつの間にかこんなことも自然に話してる。……林間学校の頃には、森ちゃん達とこんな風に話せるようになるなんて想像もしてなかつた。

他のクラスメイトと写真を撮っていた由香に、

「由香、私たちとも写真撮ろ」

私がそう声をかける。彼女は私と一緒にいる森ちゃんや仁美の顔を見て一瞬怪訝な顔をしたものの、友ちゃんのハラハラしたような顔を見てフツと表情を緩め、

「うんっ、撮ろ撮ろ」

そう言つてニカツと笑つた。

二度とそろつて仲良くなんて出来ないと言つていた五人が、ぎこちない笑顔を浮かべながらもこうしてまた一枚の写真に収まろうとしている。

嬉しさと寂しさと、それから戸惑いを一摘みだけ混ぜ合わたような——そんな不思議な感情が私の胸を占める。

みんな、少しずつ変わっていく。……変わることが良いことも悪いこともあるんだろ
うけれど、きつとそれは誰かが止めようとしても止められない流れなんだよね。だから、今はそのままの流れに任せてみようと思う。

……何年か過ぎて、また一緒に写真を撮る機会があるのなら、その時こそ、みんな素直に笑い合えるんじゃないかな——なんて……樂觀的すぎるかなあ。

振り返れば、通い慣れた薄いクリーム色とれんが色の校舎。その上に広がるのは三月らしい淡い色の青空と巻雲。……六年間を過ごしたこの場所が、家の近くにあるという

のは今までと何も変わらないのに、四月からは、通りがかりに外から眺めるだけの場所になる。

右手に抱えた卒業証書の筒がわずかに重みを増したような錯覚。

うん、私——卒業したんだ。

お母さんと並んで歩く、卒業式からの帰り道。

「留美ももう中学生かあ。……ついこないだ小学生になったと思ってたのに、なんだかあつという間だったわねー」

「えー？ 私は……六年間、けっこう長かったと思うけど……」

「そう？ お母さんが年なのかしら」

「年って……」

お母さんは確か35歳だったはず。さすがにまだ、「もう年だ」とか言う年齢じゃ無い

と思うけどな。

「いやほんと、この前買った留美のケータイだって、説明書見ても何がなんだかさっぱり分からないし。留美もお父さんもよく最初からあんなに簡単に使えるわよね……」

「まあ、お父さんはああいう仕事だし。でも、スマホは本体に説明全部入ってるから分かんなければそれ見ればいいんだよ」

「それが簡単じゃないのよね。機種変える度に一から覚え直しだし」

「えー、でも、お母さんだってパソコンとかタブレット使ってるでしょ？」

「あれはパソコンっていうか、ソフトを使ってるのよ。編集で使うソフトは昔からあるソフトのバージョンアップだから。……さすがに十年以上使ってれば覚えるってだけよ」

お母さんは、年っていうより機械が苦手なだけなのかも。

でも、そう。中学入学のお祝い、ということ、両親は前からの約束通り私にスマートフォンを買ってくれた。今流行の「学生割引プラン」で、家族もお得になるからとお父さんも同時に最新型に機種変更。お父さんと私とで色違いの同じ機種つてのがなんとも言えないけど……。

お母さんは、「娘を持つ父親の気持ちを感じてあげなさい♪」だって……。

で、お母さんも一緒に同じのに変更しようかって言ったら、使い方がわからなくなる

からいって……。

そんな話をしていて、ポーチの中のスマホの電源を卒業式の開始前から切りっぱなしにしていたのを思い出した。歩みを止めてポーチから取り出し、電源を入れる……と、新着メールが数件。

「お父さんと……あ、小町さん……？」

お父さんからは、「卒業おめでとう。出席できなくてごめん。あと、卒業式の写真送って」みたいな内容。

小町さんからは――

「卒業のお祝いパーティー……小町さんと……え、私たちも？」

「じゃあ改めて――小町ちゃん、留美ちゃん、絢香ちゃん、卒業おめでとう。かんぱー

い!!」

結衣さんが乾杯の音頭を取り、私たちはジュースやお茶の入ったクラスを鳴らした。テーブルには私たちが着替えている間に運ばれたらしい、色とりどりの美味しそうな料理が所狭しと並べられている。今日の料理は、雪乃さんと、それからなんと八幡が作ってくれたとのこと。

八幡は、

「まあ、そう言っても俺は野菜切ったり洗い物したりを手伝っただけで、ほぼ雪ノ下の料理だから期待していい。……あと、由比ヶ浜には触らせてないから安心して食べていぞ」

なんて言ってる。

「ちよ、ヒツキーそれどういう意味だし!」

「ま、まあ、結衣さんだつて頑張ってくれたじゃない。……その、買い出しとか……味見……とか?」

「フオローされてるのに悲しい!」

雪乃さん、優しく微笑ってるけど目が泳いでますよ?

でも……うん、前に一度だけ結衣さんの作ったお菓子を食べたことがあるけど……マ

ドレーヌ？だったかな？ ……なんというか、酸っぱかった（甘酸っぱいじゃ無いところポイント！）

結衣さんて、なんで余計なものを入れたがるのかなあ。

私もお料理とかお菓子作りとか時々する。初めて何かを作る時はレシピを参考に一度作ってみて、次に作る時に自分の好みに合わせて調味料の量を変えたりっていうのはよくやるけど……そもそも、レシピに載ってない調味料をドバドバ入れたりしたらそれはもう別の料理だよね……。

結衣さんは、

「ええー、でも、いろんなの入れたほうが美味しくなりそうだし。ほら、なんかこう……隠し味？ 的な。『さしすせそ』とかいうじゃん」

なんて言ってたけど……結衣さん、隠し味が隠れてないよ……。

「結衣さん……『さしすせそ』というのは、五つ全部入れなさいという意味では無いのだから……」

雪乃さんがそう言って頭を抱えていたのを思い出す。

話のとおり、並ぶ料理は雪乃さんの御手製なんだけど、とても普通の家庭料理には見えない。

サフランできれいに色付けされ、ムール貝や海老などの魚介がふんだんに使われたパエリアの皿を中心に、温野菜のサラダ、小さなピザ、カットフルーツなどがそれを囲むように並べられ、色彩もとても華やかだ。プロのケータリングを頼んだみたい。

流石に雪乃さんのお料理だけあってどれもすごく美味しい。私も、料理をするからには、いつかこういうのも作れるようになりたいな……それで八幡に褒めてもらって…… はあ、私、こんな時まで何考えてるんだらう……。

「ふむふむ。あ、これ柔らかくて美味しいです。蒸したんですか？ 雪乃先輩」

小町さんが雪乃さんに尋ねる。

「いえ、これは下茹での代わりに電子レンジを使っているの。……でも、小町さんに先輩と呼ばれるのも慣れないせいかなんだか変な感じがするわね。……別に今までと同じ呼び方でもかまわないのだけれど」

「いえいえ、『親しき仲にも礼儀あり』ですよ。それに小町、雪乃さんと結衣さんを、『雪乃先輩』『結衣先輩』って呼べるようになるのを目標にずっと受験頑張ってきたんですから。……あ、今の小町のポイント高い！」

「いやいや、『礼儀あり』って言うならポイントがどうか言わないだろ」

八幡が言うと、

「別にいいじゃん、面倒くさいなあ比企谷先輩は。そんな事言う人は『お兄ちゃん』って呼んであげません」

小町さんが Pruitt とそつぽを向く。

あ、シスコンを自称する八幡がちよつとシヨックを受けるかなと見れば、

『比企谷先輩』……なんかいい響きだな。いやしかし『お兄ちゃん』も捨てがたい」

なんだか頬を赤くしてちよつと喜んでいた……。

「……貴方ね……………」

「げ、ヒツキーなんかキモ」

雪乃さんと結衣さんが軽く引き気味に言うと、八幡はこほんと小さく咳払いをして応じる。

「いや、まあアレだ。確かに自分でも引かれて当然な発言だとは思う」

「自覚はあるんだ……」

「だが、俺は基本ぼつちだからそもそもまともな後輩がいない。唯一俺を先輩呼びするやつがいるにはいるが、『比企谷先輩』とは言わんしな……」

いろはさんか。彼女の『せんぱい』呼びには、あれはあれでもつと特別な感情がこもつてそんな気がするんだけどなあ……。

「うーん、じゃあ、大志くんにお兄ちゃんのこと『比企谷先輩』って呼ぶように……」

「小町！ せっかくの祝いの席で羽虫の話などするな」

「えー、大志くんならよろこんでお兄ちゃんのこと『比企谷先輩』って呼んでくれると思
うけどなー」

「ふふ、そういえばけーちゃんのお兄さんも無事に総武高に合格したって言ってたっ
け。」

「もし小町さんが奉仕部に入部したりってことになったら、その川崎大志さん？ も
いっしょに入りそう。……八幡と仲良くしてくれるといいけど。」

その後、料理を楽しみながら話題は次々と移り、進学したら部活はどうするのか？
みたいな話題になっていった。

小町さんは、

「小町はどうしよーかなー、奉仕部は魅力的ですけど、結衣先輩も雪乃先輩も夏で引退に
なっちゃうんですよねー」

「ちよつと小町ちゃん？ 誰か一人抜けてませんか」

八幡が言うとうと、

「何？ お兄ちゃんは別にいてもいなくても変わらないし」

言われた八幡は「兄の扱いがヒドイ」とかいつて地味にダメージを受けているようだ。その姿を見た小町さんは、にへーっと満足気に笑うと、

「だって、お兄ちゃんとはいつでも一緒にいられるでしょ」

胸の前で両こぶしを可愛くくつつけるように握り八幡を見上げるように、健気でせつない声音を作つて言う。

「えへへ。これも小町的にポイント高い！」

「く、お前、一色と付き合うようになってからあざとさが増してないか？ 落として上げるとか……ズルくない？」

文句は言ってるけど、八幡はなんだかんだで嬉しそう。小町さんのこと好きすぎでしよ。

「留美ちゃん達は？ もう決めてるの？」

結衣さんに質問され、私と絢香は顔を見合わせる。絢香が、

「部活は……一通り見学してからですかねー 聞いた話では5月中に決めればおーけーらしいんで」

と答え、私もこくこくと頷く。

あと、もしかしたらだけど、お母さんの友達の方に将来のための勉強に行くかもしれない。そうするとハードな部活じゃ大変かな……なんて、そんなことも頭にある。

まあ、この前ちらつとそんな話が出ただけだし、わざわざここで言うことでも無いかな。

会話が一通り落ち着いたところを見計らったように八幡が席を立つ。彼が小町さんに視線を向けると、小町さんはこくん頷いた。

「じゃあ、小町頼むわ」

そう言つて八幡が二階に上がっていく。雪乃さんと結衣さんがちらつと目を合わせただけど、特に不審がつてる様子もない……なんだろう？

八幡が階段を登るのを小首をかしげて見上げていた小町さんが、彼が自分の部屋に入ったのを確認するとくるつと私たちの方を振り向いた。

「はいはい。ここで留美ちゃんと絢香ちゃんはじゃんけんをして下さい」

「え、何？」「あの一、何ですか？」

「まあいいからいいから。順番決めるだけだから気楽にね」

順番……？

二人とも小町さんに腕を取られて立たされ、訳も分からないまま絢香と向き合う。彼女も戸惑っているようで……どうやら事情を知らされていないのは私と彼女だけのようだ。

絢香は私の顔を見ると、なんだか覚悟を決めたようにへへつと笑う。

「よくわかんないけど、やるからには負けない。3回勝負ね！」

彼女は左手で前髪をサツとかきあげ、そのまま流れるような動きで私の目の前にその指先を突きつけた。……ただじゃんけんするだけなのに大袈裟だなあ。でも、絢香はこういう仕草が一々かつこいいんだよね……。

「じゃあ、勝負！」

『じゃん、けん、ポン——』

あいこ、負け、あいこ、あいこ、勝ち、あいこ、負け……………。

「へへつ、あたしの勝ちい」

絢香が飛び上がった喜び。う……………けつこう真剣に悔しい。私に向かって得意げに

Vサインを見せてくるところとかちよつと頭にくるなあ。なんて、ふふ。

「じゃあ、絢香ちゃん、お先にどうぞ」 小町の部屋の手前のドアだよー

小町さんがそう言って絢香を促す。

「ええー、いやあの……ホント、何なんですか？」

「まあまあ、行けば分かるから」

尻込みしてた絢香は、小町さんに背中を押され、恐る恐るという感じで階段を上っていった。

上からノックの音。ドアが開き、再び閉まる。

「留美ちゃんは座ってもう少し待っててね」

小町さんにそう言われ、なんだか落ちて着かない気持ちのままソファに浅く腰を下ろす。

「待ってて」っていうことは……次は私も行くんだよね。何があるんだろう。

「結衣さんと雪乃さんは何か知ってるんですか？」

向かいに座る彼女たちにそう尋ねる。結衣さんは、

「いやー、小町ちゃんには言わないでって念を押されちゃったし……」

あははと申し訳なさそうに笑ってお団子にした髪をくしくしといじる。

それじゃあと雪乃さんの顔を見れば、一瞬私と目が合った彼女はふっと笑みを浮かべ、

「心配するようなことでは無いわ」

と一言だけ。うん——さっぱり分らない。

そうこうしているうちに、二階でドアを開閉する音がして、それから絢香の声。

「次、留美呼んでくださいってー」

「じゃあ、絢香ちゃんは小町の部屋で待っててねー」

「はーい」と返事をする、絢香はそのまま奥に引っ込んだようだ。

「お待たせ。今度は留美ちゃんどうぞっ」

階段を上る。一つ目の……八幡の部屋のドアの前で一つ深呼吸。

コンコンとノックをすると、ひと呼吸おいてノブがカチャリと回り、ドアが内側からゆっくり開かれる。

「おう。まあ……どうぞ」

「うん」

おう、だって。ふふ、さつきまで下で話してたのになんだか変な感じ。

八幡の部屋……かあ。前に小町さんと一緒に少しだけ入ったことはあるけど、八幡と二人というのは初めてだ。

とは言っても、二人つきりだっという感覚……なんていうか緊張感みたいなものはあまりない。すぐ隣の部屋に絢香、下には小町さん達が居るわけだしね。むしろ今から何があるかのほうが気になる。

「とりあえずそこ座ってくれ」

言われて、ラグの上に置かれたクッションに腰を下ろした。

あらためてぐるりと部屋を見回す。あまり飾り気のないシンプルな部屋に、けっこう大きめの本棚が二つも並べておいてあるのが印象的。本棚はほぼ隙間なく埋まっっていて、カラフルな背表紙の、いわゆるライトノベルから、文学全集のような渋いものまで、ジャンルもバラバラのようだ。

あ、『夜のピクニック』がある。なんだかちよつと嬉しい。隣に同じ作家さんの本が何冊か並んで……これはまだ読んだことないなあ。今度貸してもらおう。

そんな風に私がキョロキョロしていると、八幡は机の引き出しからきれいにラッピン
グされた箱を取り出した。

そして私の斜向かいに少しだけ距離をとって胡座をかくように座ると、それを私に向

かつてスツと差し出す。

——水色の地に、白とピンクの細かい花柄。巻かれた焦げ茶のリボンには『White Day』の白い文字。

「遅くなつてすまん。もつと早く渡せればよかつたんだが、卒業式とか色々あつたしな……」

八幡は申し訳なさそうに言うけど……えへ……う、嬉しい……。

先月のバレンタインデー。私は想いを伝えることが出来た、という事だけでもう一杯一杯で、お返しなんて全然期待して無かつた。それに、自身の卒業式や中学校入学の準備とかもあつて、ホワイトデーどころじゃなかつたっていうのが正直なところ。

あ、もしかして、だから今日私と絢香が呼んでもらえたのかな。あの日、絢香が八幡に贈つた綺麗で可愛い和菓子姿が脳裏をよぎる。

「下で渡そうかと思つてたんだが、ちゃんと一人一人渡したほうがいいつてあいつらに言われて……まあ、そんな感じだ」

……私は、八幡が差し出してくれたそれを両手で大事に受け取り、きゅつと胸に抱えた。ふふ、なんだか顔がにやける。

私のそんな態度を見たからだろうか、八幡は付け加えるように言う。

「あー、そのアレだ。あくまでこの前のお返しつてやつな? ……言つとくがそんな大したもんじゃないぞ。普通に買えるお菓子だ。まあ、評判を聞く限りじゃ、美味しい……らしい」

「うん………八幡、ありがとう」

分かってるよ、特別な意味なんか無いってことぐらい。それでも私は――

「それで、な」

あれ、まだ何かあるのかな? 私が八幡の目を見上げると、

「まあこれはこれとして、だ。 ……留美、入学祝い、なんか欲しいものあるか?」

意外なことを聞いてくる。

「え?」

「まあ、あんまり高いもんは無理だが」

「入学祝いなんて……そんなのいいよ」

私が断ると、

「いや、これは俺が勝手に留美に何かしてやりたいと思ってるだけだ。おまえとは、夏以来なんだかんだで縁みたいなものがある気がするしな」

「……うん……」

縁、かあ。ふふ、八幡もそんな風に感じてくれたんだ。……でも、そうだよ。そうでなければ、私と八幡が今ここに二人で座つてることなんて無かった。いろんな縁が重なって今があるんだ。……大切に……しよう。

「ただ、その『何か』がまるで思いつかん。まあ考えてみれば、俺なんか小中学生女子の好みなんて分かるはずが無い」

「それは……」

うーん、そうかも。さすがに否定できない……かな。それに、小学生女子の好みに詳しい男子高校生つても逆に「それってどうなの!？」って言われそうだよ。

「それで小町に相談してみたんだが、小町は、『なら、本人に聞いてみればいいんだよ。お兄ちゃんの残念なセンスでいらぬものプレゼントされても留美ちゃんの困ると思うし』だと」

「小町さん……」

相変わらず八幡にはキビシイなあ。

「まあそれはその通り、と納得したわけだ」

納得しちゃったの!?

「で、どうだ、留美？」

なるほど……それで本当に本人（私）に聞いてるわけか。八幡つて小町さんに言われたことにはほんとと素直だよね。

「……そんな、急に言われても思いつかないよ。それに、もし何かもらえるなら、八幡が選んでくれる物ならなんだって嬉しいよ？」

「そうは言ってもなあ……文房具とかは……学校の指定とかあつたりするの？ 服……いや、俺のセンスじゃな……」

八幡が悩んでる顔を見て一つ彼にお願いしたいことを思い付いた。……でも、そのままお願いしてもきつと八幡はOKしてくれないかなあ。それなら……。

「ね、八幡……だったら、あの、い、一緒に選んでよ。その……お買い物、連れてつてくれたら嬉しい……」

勇気を振り絞った私の言葉に、八幡は一瞬ぎよつとしたような顔をする。

「ああ、だったら小町とも都合を合わせて……」

「だめっ」

私は思わず八幡の膝に手を伸ばし、少し体重を預けるようにして八幡の顔をじつと見上げる。だって……

「……………留美？」

「だめ。……………八幡と二人だけがいい」

一瞬私と目が合った八幡は、視線を私の手が乗っている膝に移し、それから居心地悪そうに目を逸らして言う。

「いや、それはアレでだな……………」

そうだよ。八幡は「勘違い」とか言ってるけど、それでも一応私の気持ちは知ってるわけだし……………「二人で出かけたい」って、つまりはデートのおねだりみたいになっちゃってるもんね。

うん、八幡なら、私の彼に対する好意を知ってるからこそきつと断ってくる。だから、「デート」じゃない理由があれば……………。

「だって、小町さんが一緒だったら……………八幡は小町さんにまかせちゃって自分で選んでくれないもん。——私……………私は、どんなものでも八幡が私のために選んでくれた方がいい」

「……………」

彼は、何か言いかけて口を開いたものの、声を発すること無く唇を結び、それから部屋の天井を見上げるようにしてしばし悩む。

やがて八幡は、「はあ」と溜息を一つついて、

「まあ、『欲しいものを選んでもらうために一緒に買物に行く』ってだけの話だよな」

どこか、自分に言い訳するみたいに言う。だから、

「う、うん。そうそう買物。せっかくだから直接見て選びたいし。それだけだよ」

そう言つてその「言い訳」を後押ししてみる。

「……………なあ、留美…………。入学祝いの話は小町しか知らない。…………だから、他のやつ

らには内緒にしてもらつていいか？ その、この前みたいなことになると面倒だしな」

この前…………先月の裁判ごっこかな。

「うん。絶対…………絶対と言わないから」

だつてバレたら私も怖いし。

「…………じゃあ、いつがいいんだ？」

そう言つて八幡はスマホを取り出し、スケジュールを確認し始めた…………。

ふふ、嘘みたい！ 八幡と…………その、「デート」の約束…………しちゃった。いやその、ただのお買い物だけだよ。でも、私の心の中では「八幡とのデート」

どうしよう、今からドキドキしてきちゃった。男の子？と二人で出かけるのつて初め

てだし。

あ……何着てこうかな。

鶴見留美はふわふわと落ち着かない② 二人の時間

「うん。いい感じ……だよな?」

そう、黒っぽいガラスに映った自分自身に問いかけた。

ここは南船〇駅を北口側に出て、すぐ左の階段を下りた所。駅舎の大きな明り取りのウインドウを姿見替わりにして、今日の服装にどこかおかしなところがなくかチエック中。

なんだか落ち着かない表情の私は、いつもより少しだけ大人っぽい装いをしている。ゆつたりとしたハイネックの白いニットの上に、春らしく明るい茶色のノースリーブで膝丈のAラインワンピース。足元はわざと短めにした白いソックスに、今まであまり履く機会のなかったヒールの高いスウェード調の黒い革靴。

頭にはワンピースと同じ色のベレー帽（元々ワンピースとセット）を浅めにかぶる。髪は左右に分けて肩のあたりをゴムで括り、前に垂らすようにしてみた。あとはその髪

を留めた所に小さな小さな赤いリボンでアクセントを付けている。

右肩にかけられたあまり大きくない焦げ茶のバッグ。これは前にお母さんのお友達からいただいたものだ。元は絵本の主人公であるツリ目で愛嬌のある猫の顔が焼印のように加工されているところが可愛くてお気に入り。

そして——唇にはほんの少しだけ淡いピンクのグロス。

うん、高校生の……八幡のとなりを歩いてもおかしくない位には大人っぽくしよう、っていう目標は一応クリアしてる——と、自己採点。

……ただ、八幡の目にはどう映るだろうか？

——大人っぽいつて褒めてくれるかな？

——似合いもしないのに背伸びしてるって馬鹿にされるかな？

……なんて。ふふ、実はなんとなく予想はついてるんだ。だって、八幡と出会って半年以上。いつも一緒にいられるわけじゃ無いけど、彼の人となりに触れる機会は決して少なくなかったから。

だから分かる。八幡は私から「どう？」って聞かなければきつと何も言ってくれない。そして、私がそう聞いたら、必ず「よく似合う」って言ってくれるんだろう。

彼のその言葉が本心なのか、はたまた相手を傷つけまいとする気遣いなのかは——その時々々の八幡の表情を見てこっちで判断するしか無い。

全く、本当に面倒くさいよね。……けれど、彼との付き合いに慣れてくるとこれが癖になってくる。

私の言葉や態度で八幡が動揺したり、嬉しいと思ってくれたりするのが僅かに彼の表情に出るんだけど……そのなんとも言えない照れたような表情が……その、たまらなく愛おしくなってくるんだ。

以前絢香にそんな話をしたら、

「え、そこまで？ 単に留美の、なんてゆるーか、『惚れた弱み』みたいなもんじゃないの？ 思ってることをきちんと言ってくれない男子って、あたし的にはどっちかと言えばイラツとくるけど……」

なんて言われてしまった。……惚れた弱み……まあ否定しきれない、ような気も、しないでもない？ うーん。

まあその後絢香も、「それが比企谷さんらしいっちゃらしいんだけどね」とか言って笑ってたけど。

そんな風に頭のなかで色んな思いを巡らせていたら、次の電車が到着したらしい。駅

の北口から次から次へと掃き出されるように出て来る人の中に……八幡を見つけた。

あれ？ スマホで時間を確認すると、待ち合わせの時刻までまだ30分以上ある。

随分早く来るんだな……って、私も人のこと言えないか。ふふ、だって今日八幡と出かけるの楽しみすぎて家で時間まで待っていられたかったから。

もしかしたら八幡も、私とのデー……お出かけ、ちよつとは楽しみにしてくれてるのかなあ——なんて、私に都合のいい事を妄想してしまう。

その八幡だけど、どうやら私が先に着いているとはあまり考えなかったらしい。階段を下りきったところでまわりを一度ぐるっと見回しただけで、すぐに歩道を仕切る柵みたいなものに寄りかかると、ポケットからスマートフォンを取り出してやり始めてしまった。

でも今、一瞬だけ私と目が合ったような気がしたんだけどなあ……？

こちらに気が付かなかった八幡。改めて観察してみれば中々にお洒落な格好。

グレーのパーカーにカーキグリーンジャケット。下は黒いスキニーパンツ、同じく黒のスニーカー。ネイビーブルーの地にベルトが茶のワンシヨルダーバッグ。

……カッコイイ。えへへ、あれって一応私と出かけるために着てきてくれたんだよね。思わず顔がにやける。

でも八幡、やつぱり猫背だなあ。背筋伸ばせばもつと素敵に見えるはずなのにに勿体

無い。

私は私服の八幡を一通り観察して満足すると、ゆつくりと彼に近付いて行く。一メートル位の所まで寄つてもまだ八幡は顔を上げない。

少しいたずらしたくなつて、私は声をかけないままさらに彼の方に一步踏み込んだ。

私と八幡の距離は50センチ。さすがに今度は彼も顔を上げて私を一瞥すると、また視線を外しかけて……………驚いたように私の顔を二度見した。

「留美……………か？」

「八幡……………何で疑問形なのよ？」

いくらなんでも顔見て分らないってこと無いでしょ。

「いやだつてなお前……………それに背もなんか……………」

そう言いながら彼は確認するかのように、視線を私の頭から足先まで移動させる。

そして私の足元、靴の踵の高さに気づいたららしい彼は、「納得した」というように一つ頷き……………改めて私に目を向けた。

私は両腕を軽く開くようにして、

「どう？…似合わない……………かな？」

ちよつと震えてしまった声で例の質問をぶつけ、じいつと見上げるようにして八幡の

表情の変化に意識を集中する。

彼は一瞬戸惑ったような表情を見せた後、

「あー……上手く言えん。まあなんだ、今までのイメージとは違うが……これはこれで似合つてると思うぞ。……正直驚いた」

「驚いた……？」

八幡はなんだか落ち着かない様子で……やがてわずかに照れたような——私の大好きな表情で次の言葉を紡ぐ。

「その、そういう大人っぽい格好もするんだなって」

やった！　ちゃんと本気で褒めてくれてる。

八幡から見た私はきつともものすごく嬉しそうな表情をしたんだろう。彼は自分自身の言葉に照れたのか、なんだか恥ずかしそうにふいと目をそらす。ちよつと顔を赤くしててカワイイ……けど、手で顔をパタパタ扇ぐのはなんだかオジサンくさい。

「えへ、ありがと。八幡も格好いいね。私服……あんまり見たこと無いから新鮮……かも」

「おう。まあこれは全部小町に着せられた。正直俺にはダメ出しされたやつとの違いが分からん……」

ぶ。別に服だけ褒めたわけじゃないよ。——でも、服装に気を使わなそうな八幡にし

ては決まってるな、とは思ったけど——これ小町さんチョイスかあ、なるほどね。

……ん？ 「着せられた」って、そのままの意味じゃないよね？ 小町さんが手取り足取り八幡を着替えさせている姿を想像してしまった……。ありえないとは思うけど、八幡と小町さんの仲の良さを知ってる身としては一概にそう言いきれないのが怖い。

そもそも高校生位の兄妹で、兄のワードローブを妹が管理してるって時点で……。

「どした？」

「んーん、なんでもない。じゃあ行く、八幡」

私はそう言って彼の手を引く。

「お……おっ？」

京葉線の高架下を線路と平行に通っている、高架の谷間みたいな歩道を、私たちは並んで歩き出した。

歩道橋を渡って、そのまま店舗二階の入り口に到着！ 本日の目的地は、私の家や総

武高の最寄り駅からたったの四駅、千葉県民のお買い物聖地——ららぽーとTOKY O—BAY!

なんてね。「千葉県民の〜」とか言っちゃってるあたり、私にも八幡が感染っちゃったかな。

でも、ほんとにそうなんだよね。ららぽって京葉線と京成線に挟まれたみたいな所に在って、どちらの沿線の人も利用しやすいし、駐車場だつて結構たくさんある。その上映画館とかの遊ぶ施設もいろいろある。千葉県全部っていうのは大袈裟にしても、少なくともこの沿線に住んでる人たちは「買物」といえばまずここを思い浮かべるんじゃないだろうか。

広さだけならイオ○の方が大きいかもだけど……こっちのほうがオシャレでカワイイ店が多い気がする。

お母さんに言わせると、「外で着るもの中心なら、ららぽの方がバリエーション豊富」「家で着るもの中心ならイ○ンの方が安い」ということらしい。

まあそんなふうだから、私も子供の頃から、お母さんと一緒に買物だったり友達と甘いもの食べに来たり、と数え切れないくらいここには来てるけど……ふふ、こんなにドキドキわくわくしながらこの入口をくぐるのは初めてだ。

八幡はお店に入つてすぐ、コーヒーショップの手前あたりで立ち止まり、店内の人混

みを見て少しだけめんどくさそうな顔を見せた。

「なあ、留美」

「なに？ 八幡」

「欲しい物だいたい決めてきたか？」

「ううん。だってそれを一緒に選んで貰うために今日来たんでしょ？」

「いやまあ、それはそうなんだけどな……」

彼は右手で頭をガシガシと搔くと、

「まあ、アレだ。とりあえず帰るか」

「ちよ、なんで来たばかりで帰る話してるのよ！」

ほんと、信じられない。そんな思いを込めて八幡を睨むと、

「……なら、とりあえずその手を離してくれませんかね」

逆に軽く睨み返された。

う……私はさつきから——駅前からずっと彼の左手を握り続けている右手にむしろ

力を込めてしまった。

「お前みたいのと手を繋いで歩くとか……色々とハードル高すぎんだろ」

……ブツブツ言ってる八幡。「お前みたいの」って何よ？ せっかく二人で来たんだ

し、手をつなぐぐらい……。

「えーと……その、八幡が迷子になったら困るでしょ」

「いやそれ言い方おかしくない？ 俺が迷子になっちゃうの？ まあ確かにこのままだと下手すると俺の人生が迷子になっちゃうかももしれんが……」

相変わらずだなあ。でも、ただ手を離しちゃうのはつまらないし……。

「あ、じゃあこうしよつか？」

そう言つて私は繋いでいた手を一度離し、今度は彼の服の袖口をちよこんと握る。

「これなら良いよね」

「……それ、あんまり変わらなくていいか？」

「じゃあ……やっぱり手、つなぐ？ それとも腕組むとか……」

「……このままでおねがいます」

私に握られた袖をしばし見ていた彼は、「選択肢がおかしい……」とかぼやきつつあきれたように一つ息をつくと、

「とりあえず……何か良いのが見つかるまで、ぐるっと周ってみるか」
何か諦めたようにそう言った。

「この辺のやつとかどうだ」

「うーん、これならさつきのお店で見たののほうがいいかな」

「じゃあ……………」

洋服屋さん、アクセサリーショップ、小物屋さん……。八幡と二人で巡るテナントの数々はとても色鮮やかに映る。

なーんて、まあ実はららほに入ってるお店って元々、やたらと色彩豊か過ぎ、みたいな意匠のお店にしてるところが多いんだよね。去年仁美たちと一緒に来た、スイーツ食べ放題のお店なんてもう、それこそ店内全部パステルカラーで、「超カラフル」みたいな感じだし。

それでも——やつぱり違う。八幡と二人だと、いつもと同じ風景が違って見える。これが誰かを好きになるって事なのかな。隣を歩く——高い踵のおかげでほんの少しだけ近くなった——彼の横顔をちらつと見上げながらそんな事を思う。

八幡の方は……慣れてしまえば平気、ということなのか、最初の頃こそ落ちて着かない

様子を見せていた彼も、今は私に袖を握られている状況でも自然に話をしてくれてる。

そのことをちらつと聞いたら、

「思い出させるなよ……まあ、意識しなけりや俺にとつては手首に重りぶら下げてるみたいな感じがするだけだしな」

「重りつて……」

相変わらず女の子に失礼なこと言うなあ。ふふ、でもね、一度目を合わせてからすぐにプイツとそらす仕草で、これは照れ隠しに言ってるんだって解るよ？ それに小町さんや奉仕部の二人のおかげか、私と二人で並んで歩いてること自体には案外それほど抵抗無さそうにしてるんだよね。

「あ……まだ同じ柄のやつ売ってんだな……」

八幡が立ち止まったのはファンシーなキッチン雑貨のお店の前。彼が気にしているのは……エプロン？ 前にこのお店で買い物したことあるのかな。イメージ的にはあんまり似合わないような気もするけど……でも本気かどうか、「俺は専業主夫志望だ」と

か言ってるくらいだから、そういう意味では別におかしくない……のかも。

「どうしたの、八幡。何か買うものあった？」

「いや、前にちよつとな」

そう言つて八幡は何かを懐かしむように笑う。

エプロンかあ。デザインは好きなのもあるけど、いま四枚持つてるんだよね。さすがにこれ以上あつても使わないかな。

だつたらむしろ調理器具。この、鮮やかなオレンジ色で内側に目盛りのついてるお玉とかカワイイ……あ、商品名が「レードル」になつてる。さすがはオシャレ雑貨のお店。同じシリーズ、へらは「スパテラ」フライ返しは「ターナー」菜箸さいばしは……さすがに「菜箸」のままだった。

このあたりのコーナーにはアイデア器具みたいのもいろいろあつて、八幡もけつこう興味深そうに見てる。

今は、スイッチを押すと10センチぐらい離れたところから鍋の中の油やフライパンの表面の温度を測れるセンサー式の料理用温度計のサンプル品を手にとつてなんだか感心してるみたい。

ん？ 今頭の上でピツという音がした。

「……………ちよつと」

私が抗議の声を上げると、

「悪い。いや、ついな」

八幡は少しバツが悪そうな顔をして謝る。

「つい」 って……全く……人の頭の温度なんか勝手に測らないでほしい。

うーん、今まで色々見た中ではここのオレンジのお玉（商品名はレードルだけど）が一番心にヒットしてる。

けど、入学祝いに調理器具、それもお玉をプレゼントしてもらうってどうなんだろう……しかも高校生の男の子から。

うん、無いな、無い。これは日を改めて自分で買いに来よう。

そんな風にお店を見てまわる。エスカレーターを下りて一階のお店も。

「なあ、留美。腹減らないか？」

一階に下りて暫く経った頃、これまで私に引つ張られるままについてきてくれたいた

八幡がそう聞いてくる。

色々と見て回る事に夢中になっていたらしい。気がつけばお昼をかなり過ぎてしまっていて……それなりにお腹も空いてきているみたい。

おまけに足もなんだか痛くなってきた……慣れない靴でけっこう歩いたからかなあ。

でも、まずはこんなに引つ張り回したこと謝らなきや。

「ごめんね、八幡。なんだか夢中になっちゃって……」

あなたと一緒だったから……とは言わない。あんまり好き好き言い過ぎるときつと八幡は逃げちやうし。……ホントはちよつと言ってみたいけど。

「いや、俺もぐるつと見て回るのは久しぶりでけっこう面白かった」

どうやら気を悪くしてるわけでは無さそうなのでほつとした。

「んじや、メシにするか。……留美、なんか食いたいもんあるか？」

「私はなんでも良いけど……八幡は？」

『『何でも良い』……そこに罨が……いや、留美に限ってはそれは無い……か？』

八幡はなぜか変な顔して悩んでる。

「どうしたの八幡？　ほんとになんでも……あ、なら、」

私たちは、二階から一階へと縦にUターンするようにグルッと回って、だいぶ駅方面の入り口の近くまで戻ってきている。ここまで来てるなら……。

「ねえ、八幡。だったらサイゼリヤにしようよ。すぐそこだし」

「サイゼ……」

八幡がピクンと動きを止める。

「あれ？ ダメかな。八幡、前にサイゼ好きだとか言つてなかったっけ？」

「いや大歓迎だ。むしろ俺一人ならサイゼ以外のファミレスが全て閉店しても構わない
まである」

「全部閉店って……。でもだったらなんで？」

「いや、留美はいいのかよ」

「何が？ サイゼリヤ、安くて美味しいよ……って知ってるよね。八幡だし」

そう、サイゼリアは小学生のおサイフにも優しいのだ。友達と遊びにきて、ちよつとお小遣いがピンチの時でも、一番安めのドリアやスパゲティ、ハンバーグ、あとピザだつて299円とか399円。小学生ならプラス110円でドリンクバーが付いちやう！

もちろんちゃんと美味しいし、女の子ならそれで十分お腹いっぱいになれる。

——あ、そういうえば私はもうすぐ中学生。キッズドリンクバーとは今日でお別れかなあ。

私に変なところで寂しくなってるのはひとまず置いて、と。

あらためて、首を傾げるようにして「どうしようか」という視線を八幡に送ると、
「じゃあ、サイズにするか」

彼はなんだかとおても嬉しそうな声でそう言った。

「お待たせしました。こちら、ミラノ風ドリアとミートソースポロニア風、辛味チキンとシーフードサラダになります。」

八幡と向い合せて座る窓際の席。時間がだいぶ遅めだからか、そこそこお客さんが入ってはいるものの、私たち二人は特に待つことも無くすぐ席に通される。

注文を済ませ、私たちがドリンクバーで飲み物を取つてくると、さほど時間を置かず料理が運ばれてきた。

八幡の前に置かれた、ふつつつとまだ音をたてているドリアの香ばしい香りが鼻をく

すぐる。

「そつちも美味しそうだねー」

私がサラダをボールからお皿に取り分けながらそう言うと、

「ん。サイゼのメニューはだいたい食ったが……やつぱりこれが最強だな。これが299円で食えるとか……やはり千葉は神に愛された地ということか……」

「サイゼリヤは別に千葉だけじゃあないでしょ……八幡の好きなマックスコーヒーならそうかもだけど」

「フツ、甘いな留美。マツ缶は、利根^{とね}コカ・コーラの管轄する地域で発売してる。だから千葉だけじゃなく茨城県でも普通に買えるぞ」

彼は得意気にそう言ったあと、

「まあ、茨城つて俺ほとんど行かないけどな……」

そう言つて窓の外に視線を移した。

あんなに甘いコーヒー飲むの、千葉県の人たちだけじゃ無いんだ……。

サイゼリアのららぽーと店は、私たちが入ってきた入り口近くの一階にあり、そこだけビルから半円状に飛び出して半分独立した建物のようになっている。

半円の外周部分にぐるっと席が配置され、窓が大きくてとつても明るい。現在その席

のうちの一つ、四人がけのボックス席で私と八幡がお食事中なわけだけど……結構長時間窓のない建物の中に居たせいか、大きな窓から外を眺めていると少しだけほっと出来る。

「ね、ドリア一口もらってもいい？ こっちも一口あげるから」
「ん……」

私と彼は各々のトレイを一度入れ替える。

では一口……はふっ、まだ熱っ……ふふ、でも美味しい。

最近の八幡と私。いわゆる「あーんして」は、さすがに恥ずかしいらしく嫌がるけど、私と食べ物をシェアしたり、同じペットボトルの飲み物を飲んだりするのをあまり気にしなくなった。

でもそれは、彼氏彼女みたいな感じじゃなくなつて……なんていうか「兄妹」と似たような距離感に落ち着いたって事なのかな。

一応は私の想いを知ってるはずの八幡のこの態度は、私の恋にとつては進展なのか後退なのか……正直わからないけど、でもずっとドキドキしっぱなしでいるよりこの方がいい。なんだか居心地は良い。

「えへ、やっぱドリリアも美味しいね！」

「おう、こつちも美味しい……。まあ、ミラドリの王座は揺るがなが」

「ぷ。王座つて何よ」

私たちはまた、トレーを今度は元通りに交換する。

「あ、デザートとかも頼んでいいぞ。ちゃんと俺が出すから」

「え、でも……」

「なんかうちの親……特にお袋が留美のこと気に入ったらしくて……小町が入学祝いの話をしたらいくらか軍資金が出た。だから遠慮するな」

お母さまに気に入ってもらえた……って、もしかしてあの時の第一印象作戦が効いたのかな？

「ふふ、優しそうで格好いいお父さんとお母さんだよね」

私がそう言うと、

「は、優しそう？ 何言つてんのお前？」

と、彼は心底驚いたように言う。

「え、だつて前にお邪魔した時にはさ……」

「いやあれは、お前つていうお客さんが居たからカッコつけてただけだつての」

八幡は一つため息をついてさらに続ける。

「休みの日の朝なんか、俺と小町がちよつと騒ぐと、

『うるさい、バカ兄妹。くたばれ。こつちはたまの休みに寝てるんだから静かにしてろ

！』

「だぜ……」

「へえ……優しそうなお父さまって感じなのに……」

「……残念ながら『お母さま』のセリフなんだなこれが……ちなみに親父はちよつと
やさつと騒いだぐらいじゃ目を覚まさないでぐーすか寝てるし、小町にだけはとことん
甘い」

八幡は、「悲しいけど、これ現実なのよね……」と独り言のように付け加える。

「お、お母さま……なんかすごいね……」

うん……嫌われないように気をつけよう……。

食事が一段落し、何杯めかのドリンクバーのカップの中身は、八幡がコーヒー、私が
紅茶になっている。

「……ねえ、八幡」

「ん、どした」

「あのね、入学祝い……これでいいよ」

「? いやまだ何も買ってないだろ。さすがにサイゼで食事奢るだけじゃ……」

「んーん、そういう意味じゃなくなつてさ……。私ね、八幡と二人でお店回つて、ご飯食べ……すつごく楽しかった。嬉しかった。だから、今日の『二人でお出かけ』がお祝いって事で……ね?」

そう言つて私はまっすぐ彼に目を向ける。

「お、おう。そうか……。いや、でもな……」

私の好きな、ちよつと照れたような彼の表情。今日はたくさん見れた。ふふ、普段なかなか一緒に居られない私にとって、今日の「デート?」はやつぱり最高のプレゼントだったと思う。

「じゃあ、さ。もう一つだけお願い……いい?」

「お願い……? まあ、俺に出来るやつならいいぞ。さすがにメシだけつてのものな」

「ホント!?!」

私は思わず立ち上がる。ふふ……八幡、今「いい」つて言つたよね。

「お、おう？」

私は一つ深呼吸をして、もう一度八幡の目を見つめる。

「私ね、八幡との『思い出』が欲しいの」

鶴見留美はふわふわと落ち着かない③ 入学祝い狂想曲

女の子が憧れるシチュエーション。 壁ドン？ あすなる抱き？ ——お姫様抱っ
こ)……。

好きな男の子にしてもらえたなら、きつと最高の気分のはず……なのにどうして私は
こんなに惨めな気持ちなんだろう……。

『『思い出』って……これかよ……』

食事を終えた私たちは、サイゼリヤがある南館から北館へと移動し、大きなゲームセ
ンターエリアへとやってきていた。

私に袖を引かれて移動する間ひどく落ち着かないような態度を見せていた八幡は、な

ぜかホツとしたような、それでいて戸惑うような顔をしている。

「? 何だと思ったの」

「い、いや、なんでもねーって」

変な八幡……。

私の目当ては、店内奥の一角にある、プリクラコーナー。

実はこの前、ここじゃないお店で絢香たちと一緒にプリ撮ったんだけど、その時「カッブルコース」っていうのを選ぶ機種があったの。

その時は、「へー、こんなのあるんだ。……いつか八幡と一緒に撮ってみたいな」ってちらつと思っただけだった。

けど、さっきお昼食べながらららぽーとの店内マップ何気なく見てたら、サイゼリヤの結構近くにゲームセンターがあって……ふとその時のこと思い出しちゃったんだ。

だから、もし八幡が「いいよ」って言うてくれたら一緒にプリ撮ってもらおうって思ったの。……もちろん「カッブルコース」っていうのはナイショで。ふふ。

そのまま八幡の手を引いてプリクラコーナーの方に進もうとしたら、彼が少し抵抗するような素振りをする。

「ダメ?」

「いや、駄目っつーか……ちよつと緊張してんだよ。こういうのあんまり慣れてねーし」
あんまり、つてことは初めてというわけじゃあ無さそうだ。小町さんと一緒に撮ったのかな、それか……いつもの三人……。うーん、こんなこと考えてももやもやするだけだ。

私は平静を装って聞いてみる。

「緊張つて、別にやったこと無いわけじゃ無いでしょ？」

「おう、まあ一応はな……」

「小町さんと、とか？」

「いや……」

八幡は言葉を濁す。小町さんじゃ無いんだ……。だつたら雪乃さん——は無いか。プリクラとか誘いそうなのは結衣さんか……。いろはさんの方がありそうかな。

「ふうん……誰と撮ったの？」

「……留美、なんでそこで怖い声になるんだよ……」

「え？ き、気のせいだよ」

……ホント、そんな声出すつもり無かつたんだけどな。

「そうか？ あー、去年その、戸塚とな……」

「とつ……！ そ、そうなんだ」

びつくり。これはさすがに予想外の答えだ……。

「おう、いや、なんとというか……成り行きでな」

成り行きって……。目の前にある注意書きには「女性のお客様及びカップルのみの御入場とさせていただきます」と大きく表示されている。

カップル……そういうカップルも有りなのかな……。

でも、八幡の答えを聞いてしまえば案外心は軽くなる。私の中で、「小町さん」と「戸塚さん」は、嫉妬をしても意味がないくらい八幡にとつての特別なんだとわかつているから。

——なんて、格好つけてはいるけど、本音を言えばきつとこの二人は「八幡の恋人」にはならないだろうと安心してるってだけかも。……「恋人」に……ならない……よね!?

一抹の不安を抱えつつも、

「大丈夫だよ、私この前絢香や陶子ちゃんと撮ったばかりだから教えてあげる。一応は男女二人なんだから入るのはOKでしょ。……それに八幡さつき、『俺に出来ることならやる』って言うてくれたでしょ。ね、入学祝い」

そう言つて再び彼の袖を引つ張る。

八幡は、「ああもう」とでも言いたげにガシガシと頭を搔くと、

「まあ、確かにやるつて言つたし……『入学祝い』だしな」

そう言つて抵抗を緩めた。

私は八幡がキョロキョロと落ち着かない様子で居るのを構わず、腕を引つ張つたまま目的のプリンクラ機の中に引き込むことに成功。

八幡は「まあプリンクラ撮るくらいなら……」とか言いつつも不安そうに周りを見回している。私が機械にお金を投入すると、

『コーすを、えらんでね〜』

可愛らしい声でガイドダンスが流れ、目の前の液晶パネルにコース選択の画面が表示される。

「二人用コース」「三人用コース」「多人数用コース」……そして「カップルコース」

私は八幡が何かを言う前に「カップルコース」のところにタッチする。

『とりたいポーズを、3つえらんでね〜』

「おい、留美今のとって……」

「ん？ 何、八幡」

私は知らんぷりで次の作業を進める。

「いや、今カップルコースとか……」

選べるポーズは結構たくさんある。肩を抱いてもらう『ぎゅー』とか、二人の手でハート型を作る『はーと』、後ろから抱きつかれるみたいな『らぶらぶ』、二人で小指を絡めて顔を寄せ合う『ゆびぎり』それから、頬とか口に、……キ、キスしてる『ちゅー』とか……他にも沢山。

『ちゅー』かあ。クリスマスイベントの時の事を思い出す。今にして思えばよくあんなに大胆なことが出来たものだと思おう。……あの頃は色々といっぱいいっぱいだったからなあ……。迷っている間にもどんどん制限時間がカウントダウンされていく。

「だからコースがおかしいんじゃないかって……………」

3つか……。最初は軽く、『ゆびきり』で、それから次は『ぎゅー』もう一つ……『ちゅー』はさすがに……。でも『らぶらぶ』なら頼めばやってくれないかな……。うん、もう時間ないしこれにしよう。

『これでいいかな』

よし！ と最後の決定ボタンをタッチする……………ん？

「……………おおい、留美さんや？」

「あ！ ……な、なに？」

八幡……全部見てたよね。さすがにごまかせない、かな。

「『あ！』じゃねえ……。なんで入学祝いでカップルコースなんだよ」

「だって……………だって、『思い出』だから……………ね？」

思い出だから……………って全然理由になってないけど、でもどうしてもこれがいいと目で訴える。

しばし二人見つめ合う……………というか、にらめっこみたいに我慢比べ。

「……………誰にも見せるなよ」

少し考えるような様子を見せていた八幡だけど、結局最後は折れてくれて、しようがないというように一つため息をつく。

「うんっ」

『さいしよは、このポーズ！』

画面の端に、モデルさんによるポーズのお手本が表示される。

最初は『ゆびきり』二人で肩を寄せ合う様にして、いわゆる「指切りげんまん」をしているようなポーズだ。

「八幡、はい！」

私が小指を差し出すと、

「えーと……………こう、か？」

画面を見て確認するようにしながら八幡も手を重ねてくる。…………絡む指先、少しこそばゆそうな彼の表情になんだかキュンとしてしまう。

『さつえいするよー　　さん、にいい、いちっ』

パシヤリ、と音がしてほっとして指をほごうとする八幡。

「八幡、まだだよ」

「ん？」

『もういつかい、いくよー　　さん、にいい、いちっ……』

……

一つのポーズを2回撮影すると次に進む。

2つめのポーズは『ぎゅー』

お手本では、男の子が女の子の肩をしっかりと抱き寄せるようにして、女の子の方は胸の前辺りでVサインをして笑顔を見せている。

「これは……」

八幡はお手本を見てちよつと怯んでる様子。

「ほら、八幡早くっ。お手本と同じようにしないと、『やり直し』って言われちゃうよっ」

「え！　なに？　これってそういうもんなの？」

……ふふ、もちろん嘘だよ、ごめんね八幡。

彼は私に言われるまま、気恥ずかしそうにしながら肩を抱いてくれた。……もつとも「肩を抱き寄せる」というより、「肩にちょこんと手をのせる」みたいな感じになっちゃったけど。

——そして最後のポーズ、『らぶらぶ』

「あすなる抱き」「バックハグ」などと呼ばれるポーズ。表示されたお手本では、男の子が女の子を後ろから抱きしめ、彼女の耳の上辺りに頬を擦り付けるようにしている。女の子は男の子の腕に自分の手を重ねてニッコリと笑顔。

……で、八幡はと言えば、両手で大きな輪を作って、それで私を囲むようにしてる。極力私に触れないように、というつもりなんだろうけど……なんか違う。まるで浮き輪を被せられてるみたい。

「八幡、そうじゃなくって、もつときゅって……」

「いやそれ無理だから」

「もう……」

『さつえいするよー さん、……』

「えいつ」

私は八幡の両腕を外から巻き込むように引っぱり、そのまま彼の腕をぎゅつと抱きしめる。

「おわっ………」

八幡はバランスを崩し、体重を私に預ける形になって……。

——結果、今私……八幡に抱き締められてる。画面のお手本よりもとぎゅうつと。パシヤリ、と撮影音。

「ちよ、留美お前……」

「ほら、八幡前見てっ」

私はがっしりと彼の腕を掴んだまま離さない。

『もういつかい、いくよー さん、にい、いちっ』
パシヤリ。

プリクラ機の横、落書きコーナー。並んで表示されてる二つの液晶画面、二本の入用のペン。一本は手も触れられず置かれたままだけど、もう一本は絶賛大活躍中。

落書きしてるのはもちろん私。背景は……ベタかもだけど、やつぱりハートが沢山のにしようかな。スタンプはこれとこれ。あとは……なんて書こうかな。

でも……この3ポーズ目、『らぶらぶ』の写真……なんていうか……すごくいい。

八幡は慌ててたせいかもしれないけど、作り笑顔じゃない自然な表情だし、私はいたずらが成功してすごく嬉しそうに頬を染めて笑ってる。

その、自分で言うのはどうかと思うけど、画面の中の私は、本当に素敵な笑顔をしている女の子だ。……ふふ、八幡の隣にいる私ってこんな顔してるんだな。

撮影の間のほんの十秒くらいだったけど、八幡に抱き締めてもらって……うん、すごく嬉しかった。

私はピンクの文字で大きく「大好き」と書き込む。他の人が書いてるのを見た時は、「バカップルだなあ」なんて、ちよつと呆れたりもしてたけど……いざ自分の想い人とのプリクラを目の前にするとそう書きたくなっちゃう不思議……。

「ねえ、八幡も書いて」

落書きの残り時間が半分くらいになってもなんだか疲れたように立ったままの八幡

にそう言うと、

「いや、俺はこういうのセンス無いし、それになんというか……見てるだけで照れる」
う、確かに照れる……かも。私のはしゃいで「バカツプルプリクラ」にしちやつたし。
「でも、『思いつ』なんだから、八幡にもなんか書いて欲しい」

「なんか言って言ってもな……」

「それにさつき誰にも見せないって約束したんだから、八幡がもし変なこと書いても……笑うのは私だけだよ」

「いやお前は笑うのかよ。そこは『誰も笑ったりしないよ』って言うところだろ……」
でもまあそういうことなら、と八幡はようやくペンを握ってくれる。

「後悔するなよ」

後悔して……大袈裟だなあ。そして八幡は画面にペンを走らせる。

・達吉 *1

ぶ、あははは……、八幡さいてー……でも、大好き！

八幡は、画面の下の隅っこに、まるで漢字の書き取りみたいなしっかりとした黒文字で『祝入学』って書いたの！ それも選択した三枚全部に。

大笑いする私を見て、八幡は、

「フ、どうだ参ったか」

とドヤ顔。

「うんっ、参った。あははは」

ほんと、こんなやたら丸文字キラキラのプリクラに、硬い字で『祝入学』って……。でも八幡らしいっていうか、こういうところも……好き。

……私大丈夫かな？ このまま八幡に染まっちゃったら、私のセンスまで斜め下にずれて行っちゃうかも。

しばらくして、プリクラ機のシール出口に、完成したシールシートがコトリと軽い音を立てて落ち、私はドキドキしながらそれを取り出す。

全体的にピンクと水色を中心にした配色の、大小様々のシールたち。それぞれに私と八幡の顔、顔、顔。ぎこちない八幡、はにかむ私、照れてる八幡と嬉しそうな私……。……そして、くつきり黒く、「祝入学」の文字。ふふ、結構目立つなあ。でもこれ、なんだかとてもいい味になってる。

備え付けのハサミでシートを半分に切り、八幡に渡そうとしたら、

「そんな危険物、迂闊に持って帰れねーよ」

なんて言ってる。

「じゃあ、たくさんあるからみんなにおすそ分けしようかな」

「おいバカやめろ」

「なら、八幡もちゃんと受け取ってよ」

私は彼の上着の袖をくいくいと引っぱりながら言う。

「いやでもな……。何処に隠すか……。……」

ガシガシ頭を掻きながらぶつぶつ言い始める八幡……。

その時――。

「……つべーわ、隼人くん。最後のコーナーの抜け方とかあ、もう神業っしょ」

「たまたま運が良かっただけだっつて」

「いやマジで、初めてやっていきなりランクインとか、レーサーとか超向いてんじゃね？」

「あれはただのゲームだろ。レーサーなんて、そんな簡単になれるようなものじゃないよ……」

どこかで聞き覚えのある声が……。

声の方を伺えば、葉山さん、戸部さん、少し遅れて三浦さん、海老名さんの四人がアーケードゲームのコーナーから連れ立ってやってくる。

八幡が慌てて方向転換をしようとしたんだけど……。

「……って、あれ？ ヒキタニくんじゃね？」

間に合わず見つかってしまった。

「そんな名前のひとはしらない。人違いだ」

「またまた。ヒキタニ君てば、冗談ばかり」

八幡は、「いやほんと俺、『ヒキタ二君』なんて人知らないんですけど」とか言ってるけど戸部さんはちつとも聞いてない。

「あれ？ その娘もしかしてカノジヨさん？ 俺もしかしてじやましちやつたり……………お？ おお？」

戸部さんは私の顔をじつと見て……………なんだかあ然とした表情。

「戸部、あんまり彼を困らせ……………比企谷、その子……………」

「ん、どうしたの戸部っち。……………あ」

追いついてきた女子二人もこちらに顔を向ける。

「ヒキオと……………アンタ確か……………」

どうやら、他の三人も私の顔を思い出したようだ。

……………私たちは、「私が八幡の袖にくっついた状態」でプリクラのコーナーから出てきたわけで……………その上、急いで隠したものの、持っていたシールもちらつと見られたかもしれない。

悪い事してる訳じゃない……………けど、八幡は多分見られなくなかったはず。

空気が重くなってしまったところで、

「ねーねー二人はどんな関係？　だめだよ〜ヒキタ二君、キミには隼人くんっていう大事な人が居るでしょ〜」

海老名さんが冗談めかして言ってくれる。

「関係って……別に何の関係もねえよ。今日はその、入学祝いを買いに來ただけだ。

……あと葉山とかいらん」

「ふっ、ヒドイなキミは」

「知るか。だいたい、いるって言ってほしいのかよ」

「いやそれは……」

八幡と葉山さんが一瞬目を合わせ、二人同時に恐いものでも見るように海老名さんの方を向く、と……。

海老名さんの目が妖しく光ったような気がした。

「腐、フヒっ……『俺にはお前が必要だっ！』……はやちキマシタワー!!」

そこで三浦さんがバシッと、結構遠慮なく海老名さんの後頭部を引つ叩く。

「だからちゃんと擬態しろし……」

私は八幡がどこか言い訳がましく葉山さん達と話してるのを少し引いたところではんやりと見ていた。

はあ。……………別に恋人とか彼女って言ってもらえるとは思ってなかったけどさ、「何の関係もない」って言われたのは結構——ううん、凄くショックだなあ……………。

もちろん、八幡が照れ隠しとか焦りとかでそういう風に言ったつてのはよくわかつてる。『関係ない』という言葉の意味も、恋人とかそういう関係では無いという、それだけなのもわかっている。

でも……………でもさ。

ふとそこまで考えて、改めて思う。

「私と八幡の関係」って一体なんだろう。

家族でも恋人でもない。年も、住んでるところも学校も違う。

林間学校で知り合って、クリスマスイベントを一緒にやって……………それだけ？

ううん、そんな事無い。八幡は私にとって特別で、その……………片想いの相手で……………。

じゃあ——八幡にとつての「私」は……………？

悶々とそんな事を考えていると、なんだかまた足がじりじりと痛くなってきたやつた。

午前中からけっこう歩いたし……それにこれ、疲れてるだけじゃなくて、多分靴ずれもしてる、かなあ。……我慢出来ない程じゃないけどさすがに気になる。どこかで一度靴下脱いで見てみよう。

どこか座れる所を探して……。

つい足を気にして下を向いたまま歩きだしたせいで、すぐ前を横切る人影に気付くのが遅れた。

「あ……」

目の前を通り過ぎたのは、すぐ近くで両替機を使っていたらしい体格のいい外国人の男性。慌ててよけ、ぶつかりこそしなかつたものの、私は床を這っている配線カバーのようなものに躓つまずいてバランスを崩し、なれない靴と足の痛みもあってそのままぼてんと尻餅をついてしまった。

その外国人の方はどうやら急いでいたようで、私には気付きもせず、何事もなかったように早足で行ってしまった。

「留美、大丈夫か」

すぐ私の様子に気がついた八幡が駆け寄ってきて、心配そうに手を差し伸べてくれる。

「うん、平気……痛っ」

八幡の手を掴んで、なんでもないことのように立ち上がろうとしたら、右の足首——
踝くるぶしの下あたりに鋭い痛みが走り、思わず悲鳴のような声が出てしまった。

捻ひねったりはしてないし……多分だけど転んだ拍子に靴ずれが酷くなつたのかも。

「留美？」

「……あー……ちよつと靴ずれしちゃつたみたい」

八幡に肩を借り、とりあえず近くにあつた格闘技ゲーム用の長椅子に足を伸ばして座らせてもらう。一度靴を脱いで……と。

私たちの様子を見て、なんだか野次馬が集まつてくる。三浦さんはチツと舌を鳴らし、私の靴を持つて立ち上がった。

「ヒキオ、ボーつと突つ立つてないでその娘むすめ連れて向こう行くから」

彼女は八幡にそう声をかけ、顎で店の出口の方を指す。

「いや、連れてくつて言つても……」

「はあー……こじやあ目立つつて言つてんの。あんた男つしよ。女の子一人ぐらいとつとと運はこぶつ」

三浦さんはそう言うところつと振り向き、野次馬たちをキツと睨みつける。彼女の迫

力に彼らは慌てたように目をそらした。

「ちよつとだけ我慢しろよ」

八幡はそう言うのと片膝を突くようにして、私の背中と太もも、膝とお尻のちようど間くらいのところにスツと腕を通して……ふわりと私を抱き上げた。

「あ……」

「留美、ちゃんと掴まってる」

「……うん」

八幡に言われ、私は彼の首に腕を廻した。靴を脱いだ状態でこういう風に抱き上げられていると、足元がスースーしているような感じがしてひどく落ち着かない心持ちにさせられる。

「ヒキタニ君、こつちだよ」

海老名さんに声をかけられ、ゲームセンターのエリアから離れる。

触れる半身から八幡の体温が伝わってくる。私も女の子だし、「好きな人にお姫様抱っこしてもらおう」というのにはもちろん憧れてはいた。

……でも、せつかくの「お姫様抱っこ」を私は素直に喜べない。

ドキドキしないわけじゃない。八幡が私を氣遣つてくれてるのが嬉しくないわけじゃない。——でも……。見上げると、時折心配そうに私を見る八幡の真剣な顔。なんだか申し訳なくなつて私は視線を伏せた……。

ふと周囲に目をやると、葉山さんや戸部さんがさり気なく私たちを野次馬からガードしてくれてる様子に氣付く。

……あーあ。やっちゃた……今日はずっと楽しかったのに。背伸びして……無理して大人ぶつてたからバチが当たったのかな。

慣れない踵の高い靴なんて履いてカッコつけて……結局転んでみつもないとこ見せてたら意味ない……。

それに、そのせいでまた迷惑かけちゃったし……八幡だけじゃなく、葉山さんたちにも。

ついさつきまでプリクラであんなにも高揚していた気持ちがあんなに冷えていく。

……目尻にじわつと涙が滲んで来ちゃった……こんなことくらいで。打たれ弱いなあ、私。……まあ、普段大人ぶってるけど実は結構泣き虫な方だという自覚はある。

「ヒキオ、こつち」

「おう」

三浦さん達に先導されて連れてきてもらったのは、エレベーターの裏手、階段の上り口手前にあるベンチ。メインの通路からは陰になっていて場所なので、さっきのように変に注目されることも無い。

「そこ座らせてあげて」

「ん……下ろすぞ」

八幡はベンチの上にそうつと私を下ろしてくれた。

「ちよつと靴下めくるね」

海老名さんが優しく私の靴下を爪先残しで脱がせてくれる。両足とも、くるぶし踝の下あたりがかなり赤くなっていて、特に右足の方は傷口にじんわりと血が滲んでいるのが分かる。

「あく、切れてはないけど……これ、痛かったでしょ」

「えーと……ちよつとだけ、です」

本当はかなり痛いけど……。

それが表情に出てしまったのかもしれない。海老名さんと一緒に傷を見てくれていた三浦さんが立ち上がり、八幡に詰め寄るようにして声を荒げる。

「ヒキオあんたさあ……連れてくる子がこんなになるまで気付かないとか、マジありえないし！ だいたい……」

「ごめんなさい！ 八幡は悪くないの。……私が自分で勝手に無理しちゃっただけなの！」

私が慌てて言うと、彼女は少し驚いたような顔で私を見る。

「……………けど……………」

「優美子、留美ちゃんがそう言ってるんだし、ね？」

「……………まあ、あーしは別に……………」

海老名さんのとりなしで、どうやら三浦さんは矛を収めてくれたようだ。三浦さんはくるつと私の方に向き直ると、

「アンタもさあ、痛いんなら早く言うし」

そう諭すように言って指先で私のおでこをちよこんとつつく。

「……………はい……………」

う……………なんだか小さい子がお母さんに叱られてるみたい……………。

それから三浦さんはバックのファスナーを開け、小さな箱を取り出して海老名さんに渡した。

「姫菜、ほらこれで」

「ほいほーい。お、大きいのもあるんだ」

見れば、パステルカラーの絆創膏セット。ピンク・ミントグリーン・オレンジの三色で、サイズも三種類ぐらいあるみたい。

「右足は大きい方。こっちは……中サイズで大丈夫だね……と、出来たよ。どうかな」

海老名さんは傷と絆創膏のサイズを見比べるようにしながら、優しく絆創膏を貼ってくれた。

ピンクとオレンジの絆創膏で覆われた傷口にそっと触れてみる。

……うん、少し押すとさすがに痛むけど、すごく楽になった。ちよつと触るぐらいなら多分平気だろう。

海老名さんが三浦さんに向かって「大丈夫」というように頷くと、三浦さんはホツとしたように厳しかった表情を緩める。

なんというか……「お母さん」と「お姉ちゃん」みたい……なんて、ちよつと失礼な

想像をしてしまう。

「あの、ありがとうございます」

私が彼女たちにお礼を言うと、

「俺からも……その、色々助かった。ありがとうな」

そう、八幡も一緒になって頭を下げてくれた。

「んふふ、どういたしましてだよ、留美ちゃんにヒキタニ君」

「まあ、礼とかいいし。……けどさ、この靴今日はもうヤバいつしよ」

三浦さんはそう言っつて私の靴をヒョイと持ち上げてみせる。

「あー、ヒール高いし……たぶんまた痛くなっちゃうねー」

そうだよな、踵が高い靴履いてるとどうしても爪先とか甲に負担がかかるし。

すると今まで離れて様子を見ていた葉山さんが、

「じゃあ、今日のところは安いサンダルでも買って、とりあえずそれで帰るのがいいんじゃないかな。たしかこの向かいあたりに靴屋あっただろ」

そう解決策を提案してくれる。

「ああ、そういやあったわー。それが、上のゼビ〇とかでもよくね、シューズサンダルとか」

「そうだな……いやでも女の子だし……」

「靴屋……か」

「八幡……？」

葉山さんと戸部さんが話しているのを聞いていた八幡が、

「なあ、留美のことと少しだけ頼んで良いか？」

そう彼らに声をかける。

「比企谷？」

八幡は葉山さんと何か小声で話をしてる。なんだか指差したりして……何かの場所を確認してる……のかな。

話を終えたらしい八幡は、こちらに振り向くと、

「留美、すぐ来るからちよつとここで待つてろ。……その、足……気が付かなくて悪かった」

ピンクとオレンジの絆創膏、爪先だけちよこんとかぶってる靴下。見た目だけならちよつと可愛くなつてしまった私の足を目を向け、申し訳なさそうにそう言う。

「そんなの……」

八幡は全然悪くないのに……そんな顔、させたくなかったのに。

八幡が何処かへ行ってしまい、私が心細そうにしているように見えたのかもしれない。

「大丈夫だよ。お姉さん、留美ちゃんのこと食べたりしないからー」

隣に座ってくれている海老名さんが冗談めかしてそう言うってくれる。その優しそうな表情に、私も思わず頬が緩む。

「でさでささ、もしかして留美ちゃんて、ヒキタ二君の事……」

彼女は私に顔を寄せ、興味津々、みたいな感じに小声でそう聞いてくる。一応、男性陣には聞こえないように気を使ってはくれているみたい。

「それは……あの……」

私はなんだか恥ずかしくて答えられなかった。けど、

「ごめんごめん。無理して答えなくていいよ。でも、だいたい分かっちゃったかな♪」
そんな風に言われてしまった。まあ、急に聞かれて思わず頬が熱くなったし、態度も

ぎこちなかった。……そういうのって、見てれば分かってしまうものなのかもしれない。

「……まったく、結衣といい、あんなのの何処がそんなに良いん？」

三浦さんが誰に問うでもなくそんな風に呟いた。

彼自身の「すぐ戻る」という言葉どおり、五分ほどで戻ってきた八幡。

その手には……鮮やかな真つ黄色のプラスチック？サンダル。クロックスサンダルとかいう、あの柔らかくてポコポコ穴が開いてるデザインのサンダルだ。……でもさすがに真つ黄色って……。

葉山さん達も同じことを思ったらしい。

「比企谷……安いサンダルとは言ったがさすがにそれは……」

「うん……」

「無いわー、その色は無いわー」

と一様に渋い反応。でも、せっかく私のために用意してくれたんだし、ちよつと恥ずかしいのさえ我慢すれば……。

「八幡、私それでいいよ。……………それなら、足痛く無さそうだし、ありがと……………」
すると八幡は、

「待て待て。勘違いしてんじゃねえよ。留美も悲壮な覚悟みたいな顔すんな」

そう言つて私の前にそのサンダルを並べる。よく見れば、油性ペンで『△△シュー ショップ・Sサイズ』と書かれている。

「事情を話して、靴屋から借りてきただけだ。……………向こう行くまでずっと抱つことか、目立つてしょうがないからな」

と、いうわけで……………靴屋さんにやってきた八幡と私。試着用の椅子に腰を掛けた私の前に、ズラッと20足ほどの運動靴が並べられている。

ニコニコした店員さんが、

「お客様のサイズで白系の物ですとこのあたりになりますね」

と説明してくれる……………つて多すぎでしょ……………。

「ちよつと八幡……………お店の人になんて言ったのよ」

私が小声でそう尋ねると、

「いや、ちよつと怪我してるとは言ったが……。しかし、ここまでしてもらつて買わないわけにはいかなくなつたな。……もしかしてそれが狙いか？」

八幡も小声で返す。なるほどそうかもしれない。商売上手？ 押し売り？

「でも、さつきサンダルつて言つてなかつたつけ？」

「それなんだけどな、俺からの入学祝い、これにしようと思つてな」

「え？」

「通学用のシューズつて、この辺の中学校はみんな、『白地の運動靴、ただしラインやワンプointはカラーが入つててもOK』みたいな感じだろ。だから店の人にはそういう条件の靴を出してもらつた」

まさかこんなに持つてくるとは思わなかつたが、と言つて頭を搔く八幡。

「でもさ、入学祝いならさつきプリクラを……」

「いやあのな、俺と小町で留美に入学祝いを贈るつう話は小町以外にも、雪ノ下や由比ヶ浜たちも知つてんだよ。……まあ二人だけで買いに来るとは言つてないが……」

「うん……？」

「だからもし、『入学祝い、何を選んだの』と聞かれた場合、アレはその、非常にまずい」

「……私は構わないのに……」

ちやんと「祝入学」って書いてあるし。

「俺が構うんだよ。……それになんというか、『通学用シューズ』のほうが入学祝いらしいしな。まあもちろん留美ん家でも用意はしてるだろうが、洗い替えが一足ぐらい増えでも困らんだろ」

「それはそうだけども……でも私、また八幡たちに迷惑かけちゃって……ちやんと大人っぽくするつもりだったのに……だからこれ以上……」

うん、これ以上迷惑かけられないよ……。

うつむいた私の頭に、優しく温かい重さがかかる。

ちらつと見上げれば八幡の優しい目。頭を撫でてくれるやさしい手。ベレー帽を気にしてか、撫でるといふより手をのせたまま指だけ動かしてさすさすしてくれる感じ。……ふふ、帽子の生地越しの指がなんだかちよつとくすぐつたい。

「なあ留美、俺は迷惑だなんて思ってたねえよ。たぶん葉山たちだつてそうだ。……だからそんな顔するな」

「……うん」

「とにかくアレだ。俺が靴を買うのは『入学祝い』だ。……留美が足を怪我したのはたま

たまなんだから、余計なことは気にするな」

「……………」

「……………留美」

「ん？」

「あー、なんだ。無理して大人っぽく、とか考えなくても良いんじゃないか」

「私……………無理してた、かな。こんな服、似合わないかな」

「いや、お前は今日みたいな大人っぽい格好も似合うとは思うが、そういうことじゃなくてだな……………。どう言ったらいいのか分かんが、今のままの留美が一番留美らしくて良いと思うぞ……………ってやっぱり何言ってるんだか分かん……………」

八幡はうくと唸って首を捻る。

ふふ、ホント何言ってるか全然分らない。

——けれど、伝わってくるよ。八幡が私のことをちゃんと見てくれてるってこと。私のために一生懸命考えてくれてること。八幡の声が、手の温もりが伝えてくれたよ。

「八幡」

「ん？」

「ありがとね」

「……………おう」

うん、おかげでなんだか肩の力が抜けた。元気も出てきた。私は私のままでいいって、八幡がそう言ってくれたから。

って、そういうえげさつきからずつと靴出してもらったままで全然選んでない！ お店の人にすごい迷惑かけちゃってるんじゃないかと、さつきの店員さんを見れば、なぜか少し頬を染めてほっこりした笑顔でこっちを見てる……………というか見守ってる!?

どうやら私と八幡のやりとりをしっかり見られていたらしい。八幡がたまに言う『生暖かい目で見守る』ってこんな感じなのかな……………うう、なんだかすごく恥ずかしい……………。

八幡も今の状況に気付いたらしく、場を取り繕うかのように

「あー。さて、と。留美、どれがいい？」

と訪ねてくる。

でも私の答えは決まってる。

「八幡が選んで♪」

「……………何か条件は？」

「私に似合うこと♪」

「留美お前な……」

「ふふ♪」

八幡は並べられたシューズを一通り手にとって見ると、その中から自信なさげに一足のシューズを私に差し出した。

「これなら、軽いし、ここも柔らかいし……それに留美に似合う、と思う」

八幡が選んでくれたのは、白いレディーススニーカー。サイドに黒とグレーのギンガムチェック柄のキルトでうさぎの横顔のシルエットがデザインされている。内生地とインソールも同じギンガムチェックで、タンの部分にも黒いうさぎのロゴマーク。

うん……デザインはすごく可愛いけど、白黒のモノトーンだからか格好良くもある。それに派手じゃ無いから十分通学にも使えるだろう。

「どうだ？」

「うん……これにする」

「いや、一回履いてからにしろよ」

「だってこれ、すごく可愛いし格好いい」

私がつつかりその気になっていると、彼は呆れたように言う。

「……あのな、履いてみて足痛かったら意味ないだろ」

あ、そうだった。靴ずれのことすっかり忘れてた……。

で、実際に履いてみたら履き心地もすごく良かったの。足首周りが肉厚で柔らかい。……八幡はもしかしてこれで選んでくれたのかもしれないな。サイズは少しだけ大きめだけど、紐靴だし、これからのことも考えれば丁度いいかもしれない。

紐を縛り直し、少し歩いてみたけど、ほとんど痛みを感じない。

「うん、大丈夫。……じゃあ、これで。……でもほんとにいいの?」

「おう、じゃあ決まりだな。他のやつは片付けてもらって……」

「……じゃあ、あーしら帰るけど……って何これ? なんでこんなに並べてるし……」

ちようどそこに、いつの間にか自分の買物を終えたらしい三浦さんがやってきて……ズラツと並べられたシューズに目を丸くしてる。

そう、実は三浦さん達も靴屋さんまで付いて来てくれたんだよね。で、八幡がお店の人と話を始めると、

「あーしも自分の靴見てくる。隼人も一緒に見てー?」

と言つてそのまま店の奥に入つてつたんだけど……結構時間経つてたんだな。ホント、お店には迷惑かけちゃったかも……。

でも、ちゃんと「お買上げ」したんだからいいよね。

「今日はその、サンキューな」

「ありがとうございます」

真新しい靴に履き替えた私は、八幡の隣で葉山さんたち四人に向かって頭を下げる。

「はは、気にするなよ。こういうのはお互い様だろ。……それにキミのなかなか見れない表情が見れて面白かったしな」

「うっせ。何それ口説いてんの？ ごめんなさい無理です」

八幡が両手を突き出すようにしてそう言うのと、

葉山さんはもう一度「ははは」と笑つて、三浦さん達と一緒に帰つていった。

「さて、と……俺らも帰るか」

「うん」

名残惜しいと思う気持ちもあるけど、靴ずれのこともあるし、無理はしないでおう。……それでも、一抹の寂しさは拭えず、隣に立つ八幡を見上げる。ヒールの高さ分だけ視点が下がり、ほんの僅か遠くなってしまった八幡の横顔。

でも、これは彼がプレゼントしてくれた、等身大の視点。——だから私は無理して背伸びしなくてもいいんだ。

不意に、目の前にスツと八幡の手が差し出される。

「え……」

「まあ、一応怪我人だし、また転ばれても困るからな」

ぶつきらばうな言い方だけど、彼の声は優しい。

もう痛くないから転んだりしないよ——なんて野暮な反論はしない。だって今のは、彼自身の優しさに対する照れ隠しだってちゃんと解ってるから。

「ありがと、八幡」

私はそう言って差し出された手をきゅつと握る。

「……駅までな」

「……うん」

私たちは、ここへ来たときと同じように手をつなぎ——けれど決して同じではない気持ちで——ゆつくりと駅への道を歩き出した。

中学校に入学して数日経った朝。

私はまだ生地に硬さの残る制服に身を包み、ようやく馴染み始めた通学路をのんびりと歩いている。

登校時間にはかなりの余裕があり、私と同じ制服を着た学生はまだまばらにしか歩いていない。

家と中学校のだいたい中間位の場所にある、大きくはないけれど枝振りの良い桜の木。今年はやや開花の時期が遅れ気味だったせいか、満開の時期こそ過ぎたものはまだまだ残っていて、時折道行く人々の頭上からひらひらと薄いピンクの花びらを撒くように降らせている。

その舞い散る桜の向こうから、ゆつくりとこちらに歩いてくる総武高の制服を着た男女——八幡と小町さんを見つけた。

あれ？ どうしたんだろう、いつもより早い。始業の時刻は高校よりも小学校や中学校のほうがやや早く、普段であれば登校時間が被ることはないんだけど。

「八幡っ、小町さーん!!」

私が二人に向かって手を振ると、彼らはすぐ私に気付き、小町さんは手をブンブンと大きく振り、八幡は軽く片手を上げて応えてくれる。

私は二人に向かって自然と駆け出す——弾むように、跳ねるように。

「おはよう、八幡、小町さん。今朝は早いんだね」

「おう、おはようさん……。今日は、『新入生歓迎会』ってのがあって、朝からその会場の準備だ」と

八幡は相変わらずのめんどくさそうな顔でそんなことを言う。

「小町は何もないけど、お兄ちゃんが出るなら一緒に出ようかなって」

そういうえばこの前、一色さんから新入生のための行事の準備の手伝いを頼まれてる……。みたいなこと言ってたっけ。それが今日か。

「まあ、小町のための歓迎会だしな」

「……お兄ちゃん、その言い方じゃ小町のためだけの会みたいに聞こえちゃうよ?」

小町さんが呆れたように言う。

「俺にとってはその通りだからな。むしろそうとでも思わんとモチベーションが保てる。全く、朝から働きたくないでござる。おまけに放課後は片付けまで……。働きたくないでござる」

八幡は、「大事なことなので二度言いました」とかブツブツ言いながらも、表情を見ている限りそれほど嫌そうには見えない。

八幡が今みたいにネット用語とかギャグとかをブツブツ言ってる時って結構表情明らかったりするんだよね。逆に本当に考え込んでいる時、悩んでいる時は黙りこくって人を遠ざけるみたいなのところがある。

わざとらしくがつくりと下を向いていた八幡がゆくりと半身を起こし、そこでおやという顔を見せた。

ようやく彼の視線が私の履くスニーカーを捉えたらしい。

「お、それ……」

そう、私が今日履いてきたのは八幡にプレゼントしてもらったスニーカー。

「うん！……どうかな」

そう言ってる私はクルンと回ってみせる。

白地に、黒とグレーのワンポイントが入ったスニーカーは、浜二中——私の通う中学の制服のデザインにも無理なくフィットして思う。

制服姿でこの靴を履いてるところを八幡に見せるのは今朝が初めてだけど……。

「いやまあ……うん、制服でも変じゃないな。俺が選ばされた時はすごい不安だったが」「そういう言い方しないで。私、これすごく気に入ってるんだから」

そう言って、私はダンスの前ステップを踏むみたいに彼の前に右足を踏み出し、

ちよつと得意気に胸を張る。

「ふむふむ、それがお兄ちゃんの選んだっていう靴かあ。……可愛いけど、子供っぽくはないし……うん。お兄ちゃん合格っ！ 留美ちゃんの制服にも似合ってるし、さすがは小町のお兄ちゃん！ ……あ、今の小町的にポイント高い！」

「じゃあ私もあらためて。……コホン。……八幡がプレゼントしてくれた靴、可愛くて履きやすくて、とても気に入ってます。本当に有難うございました」

私は真顔でそう言うと、大袈裟なぐらい深々とお辞儀をして……びよこんと身体を起こし、ペロツと小さく舌を出して片目を閉じる。

「……」

「ふっ」と八幡が笑みを漏らす。私たち二人から褒められ、彼も満更でない様子で、その笑顔はいつもよりも柔らかい。

もちろんこの靴を気に入ってるのは本当だし、何よりこれなら今小町さんに見せたみたいにみんなに自慢できる。……だって、もう一つの入学祝いの方は誰にも見せないって約束させられちゃったし。

時折吹く南風が桜の枝を揺らし、また沢山の花びらが辺りを舞う。

八幡は、ひらひらと落ちてくる花びらを見上げるようにしながら、

「そう言えば留美、足はもう大丈夫なのか？」

と聞いてくる。ただの靴ずれだったのに心配症だなあ。

「うん、まだ少し跡は残ってるけど……全然平気。ほらっ」

私は彼に見せつけるようにびよんびよんと跳ねてみせる。スカートがふわりと広がり、道端に積もっていた桜の花びらがそれに煽られるようにひらひらと舞い上がる。

……ふふ、私……子供みたいなことしてる。でもそれがなんだか楽しい。無理して大人っぽくしなくたって、八幡はちゃんと私のことを見ていてくれる——だからきつとゆつくりでいいんだ。

でも、うさぎの靴のおかげかな？ 私はなんだか前よりも高く跳べるようになった気がしてる。昨日越えられなかった事をきつと今日なら越えられる。今日越えられない何かは明日にはきつと越えることが出来る。

そうして少しずつ、いろんなことを跳び越えて——いつか、八幡の隣を自然に歩けるような「私」になるんだ。

幕間 とある日の電話

『……うん、良かったじゃん。ちゃんと陽乃さんに話せて、さ』

「話をした、というだけよ。実際、それだけで何が変わるというわけでもないわ」

『それでも、だよ。………ゆきのん、頑張ったね』

「それは……」

そう、かもしれない。ただ姉さんにほんの少し自分の気持ちを話しただけ。けれど、その少しのことがこの何年も出来ないでいたのだから。

もし今日、結衣さんと……彼の、比企谷くんの後押しがなければ、私はまたきつと言いついて——逃げていただろう。

「そう、ね。……その、色々ありがとう、結衣さん」

『どういたしまして、だよ』

電話の向こう側、彼女の笑顔を思い浮かべ、私も思わず顔が綻ぶ。

ちら、とリビングの壁に掛かっている時計を見れば、間もなく日付が変わろうという時刻。

「……随分遅くなってしまったわね。こんな時間までごめんなさい」

『そんなのいいよ。あたし、もつと遅くまで優美子たちとLINEしたりしてる時あるしー!』

「……それはあまり威張って言うようなことでは無いと思うのだけれど……まあいいわ。それじゃ——」

『あのー……』

通話を終わらせようとしていた私の話を、結衣さんが割り込むようにして遮る。

『あのさ、ゆきのん……』

「結衣さん……?」

『あの、さ……今からヒツキーに電話してあげて』

「……………」

彼女の思いがけない言葉に一瞬息が詰まる。

『ヒツキー、あの後ゆきのんの事すつごく心配してた。きっと今も心配してる』

「でも……こんな遅くに……」

『大丈夫だよ。この時間ならヒツキーまだ起きてる。もし寝てても……ゆきのんからの電話ならヒツキーは必ず出るよ』

「……………そうかしら？」

『うん、きつと』

変に確信じみた彼女の声が残る。

『だけどヒッキーからはゆきのんにかけてこないよ？ ……だって、ヒッキー、前に言っていたじゃん。 ……アドレス教えてもらって調子に乗ってすぐメールしたら迷惑がられた、みたいな話』

確かに彼は中学時代の話としてそんな事を言っていた。いつも通りの、少し自虐的なあの顔で。

『……………黒歴史だとか言って笑ってたけど、ヒッキーほんととは……………、だから……………』

彼女は一度言葉を切り、改めて言い直すようにして言葉を紡ぐ。

『だから、ゆきのんから電話してあげてほしいの。 ……せっかく……………ううん、やつと連絡先交換したんだし——友達に、なったんだし』

「——雪ノ下の問題は、雪ノ下自身で解決すべきだ」

と比企谷くんは言った。

「けどな、今焦って何でもかんでもを決めちまう必要も無いだろ。母親やら姉やらに脅かすみたいにプレッシャーかけられて……その状態のお前は冷静か？ いつも通りの雪ノ下雪乃か？」

「……っ、それは……」

私が言葉に詰まり俯いていると、

「——何かを決めなければならぬとしたら……、それを決めるのはあくまでもいつものお前であるべきだと思う」

「ヒッキー……」

そして、彼は一度逡巡するような様子を見せた後、ゆっくりと言葉を続ける。

「俺も……由比ヶ浜も協力するっつーか、その……だからまずアレだ……」

「比企谷くん……？」

目をそらして下を向き、どこか照れたようなもどかしそうな表情。私にこんな表情を向ける彼は珍しい……けれど初めてでは無い。彼のこの表情を見たのは奉仕部に入学したばかりの頃、それに文化祭の後だったか——あの時は確か……

「なあ雪ノ下、俺と……その……」

「いいわ比企谷くん。……私たち、友達になりましょう」

「ちよ、また最後まで言わせずに断るとか……つて、え？」

彼のポカンとした表情に思わず頬が緩む。

「あら、違つたかしら？」

「いや……違わない……けど。……良いのかよ。俺と友達とか本気か？」

「……自分から言ってきておいてひどい言い草ね。……まあ、『三度目の正直』という言葉葉もあるし……」

「いや、お前今言わせなかつただろ……。それに……それなら三度目、もっと早くに言つときゃ良かったかもな」

『二度あることは三度ある』とも言うわよね……」

「お前な……」

「冗談よ。……その、改めてこれからもよろしくね、比企谷くん」

そして私は彼の——珍しく濁りの少ない目と視線を交わす。

「ふふ……」

「はは……」

「……ねえねえゆきのん！ それにヒツキーも！ あたしも居るんだよ!? 置いてきぼ

りにしないで〜」

そうやって結衣さんが私にぎゅうつと抱きついてくる。相変わらずの……その、圧力と熱。たまに息苦しく、それなのに離れてしまうと寂しく感じる彼女の体温が——今日はただただ心地よかった。

こうして私と彼はようやく友達になり、結衣さんの勧めで連絡先を交換することになった。

と言っても、彼がかつて結衣さんにそうしたのと同じように、無防備にも彼のスマートフォンを私にひよいと預けただけだったのだが。

私は彼の電話のアドレス帳を開き、私の電話番号とメールアドレスを登録。……そのまま私のスマホに発信し、その着信履歴から比企谷くんの番号とメールアドレスを登録する振りをする。

振り——そう、実は私の電話には比企谷くんの番号もアドレスもとつくに登録済みになっているのだ。

クリスマスイベントの……演劇の準備に追われて慌ただしかった頃、ある日私の家に泊まった結衣さんが、

「急に連絡が必要になることもあるかもしれないから」

と彼の連絡先をメモしてくれたのだ。

他人の番号やアドレスを本人の許可なく第三者に教えるという行為の問題については、本来なら結衣さんに対する指導が色々必要になることなのだろうけれど……。

それでも私は、「急に必要になるかもしれない」というそれを言い訳にするように自分のスマホにこれを登録し……イベントが終わった今も消すことなく大切に残したままにしてきたのだ。

一度もかけたことのない彼の電話番号……。

常夜灯だけに明かりを落とした自室。手の中で光る液晶画面にぼうつと映し出されたその番号をしばし眺め……私は画面の中の「発信」ボタンにそつと触れた。

コール音は一回半。

『……もしもし……?』

「こんばんは、比企谷くん」

『おう……。念のため聞くが間違い電話でしたってオチじゃ……無いよな?』

ふふ、相変わらず疑り深いのね。

「今日の着信履歴から発信しているのだし、間違えるわけもないわ」

『いやそういう意味じゃなくて……』

もちろんホントは彼が何がしたいのかはわかっている。だから……。

「私は今日友達になった比企谷くんに電話をかけているだけよ。それともまさか貴方、たった数時間前のことも忘れてしまったの? 目だけでなく脳まで腐って記憶に影響が出ているのかしら……」

『雪ノ下、そのセリフがすでに友達に対するものとは思えないんですが』

「友達の定義なんて人それぞれだと思おう。表面だけ取り繕うような関係の友達なら……いらぬわ」

『……全く、お前も俺とは違う意味でぼっち体質だよ……。まあいい、で、どした?』
彼の声のトーンが優しくなる。きっと私が柄にもなく緊張して、ごまかすように悪態をついていたのを察してくれているのだろう。彼の氣遣いに感謝しつつ私は本題に入る。

「あ……その、一応報告、というか……」

『報告?』

「あのこと……姉さんに話してみたわ」

『……そうか。……で、雪ノ下さん——陽乃さんはなんて』

「相変わらず人を茶化しながらだけど……でも話はちゃんと聴いてくれたわ。……一応協力はしてくれるみたいね。……あんまり当てにはできないけど」

『でも……話せたんだな。逃げずに』

「ええ……。貴方と結衣さんのおかげね」

『俺は……何かしたわけじゃねえよ……』

「でも……ありがとう」

『おう……』

2日ぶりに姉さんの待つ家に帰った私は、彼女に、今日まで言えずにいた私の気持ちをはんの少しだけ——でもようやく言葉にして伝えることができた。

——父のように、政治の道に進みたい。

かつて己の身に降り掛かった理不尽。正しいはずの者が、努力している者が何故か生きにくいこの世の中。大きなところでは国家単位の差別や迫害から、果ては小学校のいじめ問題まで、この世界はそんな理不尽で満ち溢れている。

そして、そういう問題を解消していくには……結局は政治の力によるしか無いのだ。たとえそれがどれほど困難な道であったとしても。

私は別に性善説だの性悪説だのに囚われたりはしていない。私を含め、人間は弱くて不安定だ。ゆえに、その置かれた状況によつて、正しくないとわかつていてもそちらに流されてしまうことも多いということも理解している。

『鑄型に入れたような悪人など居ない。普段は普通の人間がいざという間に悪人になるから恐ろしいのだ』

そう漱石が「こゝろ」の中で著しているように、これが人間の本質だろうと私も思う。だからこそ、正しい者が……正しい行いをする者が少しでも生きやすくなるような、普通の人間が悪人にならずに済むような、そんな社会へと変えていきたいと思うのだ。

私は将来、政治の道を目指したい。自分が表舞台に立たなくても……例えば父の秘

書、あるいは、もし姉がその道へと進むつもりならそのサポートからでも構わない。

——けれど、母は決してそれを許そうとはしないだろう。なぜなら彼女のすでに定めている将来設計図の中にその未来は入っていないのだから……………。

それが解ついてもまともに母と対峙できずにいる自分。

そして比企谷くんや結衣さんの存在に縋り、明確な自分の意志というものを保てていない自分。

このままでいいとはとても思えないけれど、今の私にとってはそもそもどんな自分を目指すべきなのかさえ臆げにしか見えていない。

だったら、私は……………。

『……………雪ノ下?』

比企谷くんの声にハッと我に返る。

「ごめんなさい。ちよつとぼうつとしてしまつて」

少し考え込んでしまつたらしい。

『いや、良いけど……。なんか、珍しいな』

「そう……。ね。これからの事を色々と考えてしまつて」

『これから……。』

「そう、これから。……私の事も……。私たちの事も」

『……。おう』

彼の声がほんの僅か熱を帯びたような気がした。

それつきり二人共押し黙り……。かすかな息遣いだけが電話越しに伝わってくる。

そして私はふと、ずっと気になつていたことを話そうという気になつた。些細なこと……けれど、こういう機会でも無ければきつと言えないこと。……そう、今なら言える。

「そう言えば比企谷くん」

『ん?』

「その、去年のクリスマススの頃から、私……。由比ヶ浜さんのことを『結衣さん』一色さんのことを『いろはさん』と呼ぶようになったでしょう。その時、比企谷くんのことも考えたのよ」

『考えたつて……。何を?』

「その、貴方の呼び方も変えたほうがいいのかしらつて……」

『いやそれは……。』

あからさまに戸惑うような彼の声。

「でも、結局変えられなかったわ。流石に『八幡くん』と呼ぶのは恥ず……抵抗があったし……。親しみを込めて、『ヒキタニくん』とか『ゾンビ企谷くん』とか呼ぼうかとも思っただけけれど……」

『おいちよつとそこ、むしろ親しみが後退してるだろ。それを親しみを込めてとか言ったら親しみさんに失礼だろうが』

「……ふふ、冗談よ」

そう言つて私は笑う。……彼と話していると私は……そう、楽しい。楽しいのだ。

他の誰と話すのとも違う感情。やはり比企谷くんは私にとつて特別な存在なのだろう。実際、彼を求める気持ちは私の心の中に確かに存在する。けれどこの、彼に対する気持ちはたして単なる恋愛的な気持ちなのかと問われれば——正直自分でも良くわからない。

「ただ……呼び方は変わらないけれど……私は前よりずっと貴方を近しく思っている、ということ……ちゃんと伝えておきたかったのよ」

そう、私が彼を特別に思っているということ、彼自身にも知っていて貰いたいのだ。

『……おま……いや……おう』

ふふ、彼が電話の向こうで照れているのが伝わってくる。今夜の私は饒舌だ。きつと今日彼と結衣さんの三人で出かけたこと、それに久しぶりに姉さんと正面から向き合つて話したことも重なって色々テンションがおかしくなっているのかもしれない。

『その……アレだ。正直今更お前から違う呼び方されても違和感しかねえよ……多分』
「そういうものかしら」

『あー、例えば俺がお前を、『雪乃』とか『ゆきのん』とか呼んだらどうだよ……』
……不意打ちで彼から『雪乃』と呼ばれ思わず頬が熱くなる。……本当、顔の見えない電話で良かった。

「確かにそれは気持ちわる……照れるわね」

『今お前気持ち悪いって言おうとしなかったか？ 親しみさんは何処に出かけちゃったの？』

「何のことかしら？」

『こいつ……』

楽しい……。今日の私達は何かを先送りにしてしまったのかもしれないけれど、それが間違いだとは思いたくない。いえ、もしかしたら両方間違っていて……両方正しいのかもしれない。

「だからその、改めて言うのは変かもしれないけれど……これからよろしくね、『比企

谷くん』

『おう。……まあなんだ、よろしくな、『雪ノ下』』

そして私は、少しだけ名残惜しく思いながらも終話ボタンに触れる。

姉さんから見ると私たちの関係はいびつだと言う。

私が、

「比企谷くんや結衣さんに依存していると言いたいのでしょう？ その自覚はちゃんとあるから今はほうっておいて」

と言った時、姉さんは、

「依存……ねえ。そんな単純で生易しいものじゃ無いと思うけど……雪乃ちゃんにはわかんないかなー」

と、どこか独り言のように言い、探るように私の目を覗き込んできた。

確かに姉さんの言うように私たちの関係はどこか歪んでいるのかもしれない。いずれは私も彼もそのことに正面から向き合わなければならぬ時が来るのだろう。

結衣さん、いろはさんとの関係。そして……比企谷くんがどの程度自覚しているかはわからないけれど留美さんとの事も……。

鶴見留美さん……。私と彼女はどこか似ている……。いえ、似ていた。

彼女もやはりかつての私と同じような理不尽に晒され、けれど彼女は私のようになってしまいう前に比企谷くんと出会い、彼に救われた。

もし、小学生の時の私が、今の比企谷くんのような人と出会うことができたら……。なんて、それは意味のない仮定ね。

それからの彼女は、特に隠す様子もなく彼に想いを寄せているように見える。その瞳は誰よりも真つ直ぐで……。その素直さが正直羨ましくさえある。

だからこそ比企谷くんにとつても彼女は大きな存在になりつつあるのだろう。それはきつと……。留美さんが彼を慕つてもおかしくないと彼自身納得できるだけの経緯があるから。

人からの好意を信じることに臆病な彼は、間違いなく自分に好意を持って接していると信じられる相手に特別な価値を見出すのだろう。

小町さんや……。彼女のよう。

いつか私もあんな風に誰かとまっすぐ向き合える日が来るんだろうか。

それでも……。比企谷くんという名前を知ってから二年。知り合ってからほぼ一年。

入学式の日の事故から、奉仕部の仲間としての関係を経て、今日——もう日付が変わってしまつたから——昨日、ようやく私たちは友達になれたのだ。

それを素直に「嬉しい」と思える自分がある。だから……今はそれでいい。

カーテンを開くと、窓の外の雪はすっかり止んでいた。いつの間にか晴れてきた夜空の雲間から、白く静かに輝く月が顔を覗かせ白銀の世界を照らしている。

私は窓ガラスに息を吹きかけて白く曇らせ、指で猫の足跡みたいなマークをつけた。子供の頃姉さんとよくやった遊び……。私は足跡を3つ作つて満足し、そつとカーテンを閉じた。

ふふ、なんだか今夜はゆつくりと眠れそう。

——翌朝、珍しく寝過ごした私は、

『ゆきのん、ゆきのん！ ヒツキーのお家で留美ちゃんのパジャマがおそろいで、いろはちゃんが大変なの！』

……という、結衣さんからのさつぱり要領を得ない電話で叩き起こされることになるのだけだ。

幕間 甘くてあまい話

「ありがとうございます」

「有難うございました」

お会計を終えてお店を出て行くお客さん。あたしがかけた声にかぶせるように店の奥からおとーさんとじーちゃんの声がする。

と、そのお客さんと入れ違いになるかのように、高校生の男の子が一人店内に入ってきた。このあたりでは珍しくない総武高校の制服。

けれど、うちみたいな甘味処に男の子一人というのは珍しい……って、なんと比企谷さんじゃん。

いや、特徴のある髪型に猫背、もしかしたらそうかなーとはちよつと思っただけど、まさか一人でうちに来るとか思わないじゃん。さつきのお客さんが座っていたテーブルの「抹茶ぜんざいセット」の器を下げながらチラチラ見ていれば、その知的な横顔、髪をすかして覗く素敵にゾンビちつくなご慧眼。

うん間違いない。世の中にはボサ髪・猫背の高校生男子なぞ掃いて捨てるほどいるだ

ろうけれど、あの整ってるのに腐っているという絶妙かつ奇跡のバランスの邪眼をもつヤツなど比企谷さんしかないッ！

……て、熱く語るようなことでもないな。要するに、服装からしても学校帰りらしい比企谷さんが、あたしの家でもある和菓子店兼和風茶寮『御菓子司 あやせ屋』美浜店にご来店してくださった——まあそれだけなんだけどね。

そんなわけで、久々に「あーちゃん」こと綾瀬絢香がお送りしますよ。

んん？ 千葉市の、「あやせ」って名前の女子中学生はヤバイだろって？ 大丈夫。どこのヤンでデレなあやせちゃんの名前の方があやせ。こっちは名字と屋号があやせなので人畜無害。しかもまだピチピチの小学生なので安心してお付き合いくださいねっ！

さてさて比企谷さんが御用なのは私がいる茶寮の方ではなく販売の方のようで、店に入ってからすぐにショウケースの中を覗き込んで……ぎよつとしたような顔をしている。

ええ、今日そんな変わったものあったかなあ。まあ確かにバレンタインデー・ホワイトデーという菓子業界一大イベントのせいで、ちよつと和菓子店ほくない……ぶっ

ちやけ「これほとんどケーキじゃね？」みたいな見た目のもどーんとスペースを取ってるけど……てゆーか今ケースの半分くらいそうだけど。……やっぱそのせいかな？

あ、他の和菓子店さんの中には、「伝統を守り、クリスマスやらバレンタインやらというイベントには手を出さない」ってところもあるけど、うちはどんどん積極的にイベントやつてく方針みたい。

大体がおとーさんもじーちゃんも、お祭り好きで新しもの好きなんだよね。だからうちはクリスマスもハロウィンもフェアやるし、季節ごとの限定スイーツみたいなのも結構作る。

「和菓子屋ならではのアプローチってのがあるだろ。生クリーム大量に使うケーキに比べりゃカロリーも控えめだし。……それに、せっかくの稼ぎ時に指啜えてみてるだけってのも腹立つしな。ここで稼げば晩酌が旨いって寸法よ」

……お、お父様。それは流石に身も蓋もないのでは……。

でも、それだけじゃない。我が父の作る菓子は美味しいだけでなく、見た目も実に繊細で美しいのだ。いやまじで。

おとーさんの言動は……江戸っ子の職人っていうのに変な憧れがあるらしく、似非べらんめえというか何というかであれなんだけど、その指先が練り上げる菓子の造形は非

凡。特に得意とする煉切では、若手のとき出場した「全国創作和菓子コンクール」で金賞を取ったりもしている。本人は最高賞である厚生労働大臣賞じゃなかったと悔しがってたらしいけど。

だから……おとーさ……父はあたしの憧れでもあったりするのだ。

このお店は……多分年の離れた弟二人のうちどつちかが継ぐんだろうけど、もしも二人に違うやりたいことができたなら、その時はあたしが継いでもいいかなあ、なんて思ったりもしてる。……誰にも言ったことは無いけどね。

そんな事を頭の片隅で考えつつ、未だにショーケースの前で何やら悩んでいる様子の比企谷さんに横から声をかける。

「お客様、何かお探しでしょうか？」

「い、いえその……もう少し見てから……」

急に声をかけられ、「もう少し」と言いながらも帰ってしまいそうな様子で後ずさる比企谷さん。

「こんにちはあ。そんなに構えなくても大丈夫ですよ」

「は、はい。……あの？」

この反応……ふふふ。どうやら比企谷くんにはアタシの正体がわかっていない

と見える。うむ、まあそれも仕方あるまい。

ジャストなうのあたしは、この店のバイトさん用の制服である、和風・洋風を組み合わせたような……着物風洋服とでもいうようなものプラスお店のロゴ入りエプロンに身に付けており、髪は編んでまとめている。その上化粧つ気が全く無いのをごまかす意味もこめて伊達メガネまでかけているのだ。

別に比企谷さんじゃなかったとしても、じっくり見なければあたしとは分からないだろう。あたしはただでさえ身長もあってこうしていれば高校生ぐらいには見えるだろうから。

てゆーかわざとそう見えるようにしているんだよね。

現在の日本では、小学生を働かせるということになかなかめんどくさいルールがある。これは厳密には家業の手伝いでもそうで、「家の仕事を手伝う小学生」というのは黙認されているだけなのだそうだ。

けれど、こと接客の仕事となると「アウト」とされることが多いらしい。……本人が好きでやってるんだから良いと思うんだけどなあ。

そんなわけで、平日学校から帰った後、今日のように「おかーさんが近所の公園で弟たちの幼稚園バス待ちをして、そのまま買い物して帰ってくる」みたいなちよつとホールの人員が手薄になる時間にお店のお手伝いをして……一応「お駄賃」という名目で

時間あたり800円の「お小遣い」をもらっている。

……んん？ それ完全にアルバイトじゃないかって？ ……な、なんのことツスカ？

う、うちは小学生に労働させたりする店じゃ無いツス。いやあたし誰だよ。

まあ、土日とかの忙しい日にはすぐ近くにある大学にかよう学生のバイトさんが入ってくれてるので、それほど長時間仕事をする機会があるわけでもないし。

……などと脳内で長々と語ってしまっただけだけど、比企谷さんは一向にあたしに気付く様子がない。それほどまでにこの変装は完璧なのかっ！

……なんて、単に忘れられてるだけだったりしたら悲しいなあ。……だ、大丈夫だよね。クリスマスその後だって挨拶ぐらいはするようになったし、先月のことだってあるし………いい、一応ヒント出してあげよっかな、うん。

「へへ、あたしのお菓子、どうでした？」

そう言っただけは伊達メガネをおでこにクイツと持ち上げる。あたしの言葉に比企谷さんは一瞬目を丸くすると、

「あ、なんだ綾瀬か。びっくりしたわ」

そう言っただけはようやく緊張を解く。

「なんだとはなんですか。ここはあたしの家うちなんですから居てもおかしくないでしょ

う」

「居るのはおかしくないが、その格好がおかしい」

「え……変……ですか……？ あたしこの制服好きなんですけど、似合ってませんかね……」

と大げさにしゅんと落ち込んで見せる。

すると比企谷さんは見てておかしくなるぐらい慌てて言う。

「いや、そういう意味じゃなくて……まさか店員さんやつてるとは普通思わないだろうって意味でな……。その、制服は似合ってて……大人っぽくて格好いいと思うぞ。逆に合いませんってまったくお前の事わからなかったぐらいだし」

比企谷さんは冗談という風でなく、真顔でそんなことを言う。

「う……あ、ありがとうございます」

「……なんでお礼……？」

「なんでもないですっ……」

……『似合ってて……大人っぽくて格好いい』……くっ、不意に褒められるとドキドキしちゃうじゃないかよう……。まったく比企谷さんはこれだから……ホント、まったくもう、まったくもうだよ！

「コホン。えー、改めましてお客様、今日は何をお探ですか？」

気を取り直し、あたしは営業スマイルで応戦を開始する。

「いや、それは……」

おや……比企谷さん、なんだか言いにくそうだけど、お菓子見に来てるのに言いにくい理由ってなんだろう？ まあ時期的にはホワイトデー絡みかな？ うちのお菓子もおすすめしたいところだけど、まずは言いにくい理由だよな。さっきのギョツとしたような表情も気になるし。

「比企谷さん、なんかあるんですか？ あたし、とつても気になりますー！」

「ふ、なんでそんなネタ知ってるんだよ……」

その後すぐおかーさんが戻ってきたので、あたしは比企谷さんを奥の席にさそい、お茶を飲みながら事情聴取お話を伺うことに。

最初は言い渋ってた比企谷さんだったけど、食い下がる私にようやく口を開く。

「いや……小町が『ホワイトデーのお返しは三倍返しとかいうよね。……そういえばお兄ちゃん今年結構もらってたみたいだけど大丈夫？』とか言うからちよつと気になつてな……」

比企谷さん曰く、「今年は人生初、まあもちろん義理だろうがそれでも何人もの女の子からチョコを頂き、大変嬉しく思う」

曰く、「で、あれば当然ホワイトデーにはたとえうざがられようともちゃんとお返しをすべきだろう」

曰く、「さらに驚くべきことに、みんな手作りなので三倍返しと言われてもどの程度のものを返して良いのかよく分からない」

「……で、かろうじて値段の参考になりそうな『あやせ屋』のお菓子を確認しに来たわけだ……」

「ははあ、それでやけに集中してシヨウケース覗いてたんだ……」。

「なんか……すまん。まさか本人が居るとは思ってたからな」

「彼はそう言って申し訳無きような顔をする。」

「いえいえ。無理やり聞いたのはこっちですし。どうせですからバレついになんでも相談してくださいよ」

「そういう訳にもいかねーだろ」

「いえいえ、この前のことのお礼もありますし」

「お礼って……あれは俺大したことしてないだろ」

「まあまあ。あたしはほんとに助かったんですから、そういうことでいいじゃないですか」

この前のこと……については別の機会に。あんまり詳しく語ると比企谷さんとあたしのフラグが立つちやいそうだから。てへ。

まあ、先日たまたま個人的にお世話になってしまう出来事があったということですよ。

「で、誰と誰からもらったんです？　ここだけの話にしておきますから、とつとと全部吐いたほうが楽になりますよっ」

「え、なにこれ取り調べなの？」

彼はまた答えを洩る。

「じゃあ、予想してみましようか。……あたしと留美の他に……雪ノ下さん、由比ヶ浜さん、会長さん。あとは小町さんとお母さん……どうですか？」

「あー……お袋はくれなかった。小町は受験だから既製品。あとは今お前が言った三人の他に川崎とけーちゃん、藤沢、城廻先輩、あとクリスマスイベントで顔ぐらい見てる

かもしれんが折本ってやつ」

「そ、そんなにですか……」

な……なんということでしょう。なんだかんだでモテるんじゃないかとは思ってたけど、留美とあたしを合わせたら十一人、二桁じゃないですか！

それに聞き覚えのない名前も……。藤沢さん……は「書記ちゃん」さんのことか。折本さんはなんとなくおぼえてる。海浜校の——ウケるウケると騒がしかった人だよ。でも、彼女も中々の美人さんだったと思うけど……比企谷さんって一体……。

まあもちろん、それが全部本命チョコというわけでは無いにしても……。

「それ、自称ぼっち（笑）のもらう数じゃ無いですよね……」

「自称って言うな。今年はいろいろあつてたまたまなんだよ。去年までは毎年小町からもらう一つだけだったし……まあそれはいい」

いやよくないっ。色々とよくないっ。

「とにかく、ここからが本題なんだが……」

本題……つまり、比企谷さんの「本命」は誰なのか、だよ。あたしはゴクリとつばを飲む。

ああどうしよう。ここでもし、「本命は雪ノ下だ」とか、「由比ヶ浜が好きなんだ」と

か聞いてしまったら、この後留美の顔を見て話せなくなっちゃうよ……。

「実は……」

「実は……？」

「予算がピンチだ」

「は？」

「いやだから、小遣いが厳しい」

「な、な、何いつてんですか比企谷さん！ それのどこが本題なんですか」

「ぼつかおまえ本題も本題、最重要項目だろうが。今年も小町だけに返せばいいと思っ
て……まあもしかするとその、部活仲間からは「義理」ぐらいはもらえる可能性もゼロ
ではないかもしれないから——一応それぐらいの出費は覚悟……というかまあ取っては
おいたわけだ」

「はいはい」

「で、びつくりこの人数だろ？ しかも今ここのお菓子の値段見たら……三倍返しとか

無理だろこれ！」

彼はどこか他人事のようにそう言う。

「ちよ、あれはおと……父が作ったやつだからあの値段なんです！ 比企谷さんに差し上げたのは……餡を煉つたのは父ですけど、その、形を作ったり細工をしたりしたのはあたしなので——お金なんか取れる代物じゃ無いんですよ……」

お店に並んでいる煉切は、小さいものは二百円台からあるけど、比企谷さんに贈ったようなケーキに近いサイズの凝った細工のものは高いもので五百円近い。

バレンタインの時と並ぶ商品は違っていているけれど似たようなデザインのものはある。ちなみに『恋ごころ』という名前の、ハートを矢で射抜いたデザインのお菓子だと、ホワイトデーバージョンは白いハートにピンクの矢という、バレンタインとは対になるカラーリングだったりする、というふうな。

それで比企谷さんはあたしが贈ったのと似た煉切菓子の価格を確認してたんだろうな。

いまショウケースに並んでいるもので彼にプレゼントした物に近いデザインの商品の値段はそれぞれ、450円・470円・480円（税別）

これを合計して、その三倍返し……で、それを基準に十一人分と計算してみたとする……と……げ、消費税足したら五万円近いじゃん。なるほど比企谷さんがぎよつとするわけ

だ。

「いや、綾瀬が作ってくれたつてのは小町から聞いてるから。……あれ、味はもちろん美味かったし、細工だって細かくて食べちまうのがもつたいたくないくらいきれいだった。

そりゃあ親父さんのと並べて比べれば違うのかもしれないが……ちやんと『売り物になる』お菓子だったと思うぞ」

比企谷さんは離れたショウケースの方にちらつと視線を遣りながらそう言つてあたしの作つたお菓子を褒めてくれる。

美味しいのはおとーさんの餡なんだから当たり前。だけど………へへ、苦勞した細工を褒めてくれたのはすつごくうれしいなあ。

あんなに気合い入れて細工菓子作つたの初めてだし……。こんなことを言うにあたしが比企谷さんのことを好きみたいにする人も居るかもしれないけれど……。そおゆうんでも無い……。と思う。

なんていうか、留美とかまわりの娘たちが一生懸命バレンタインの準備してるの見て……それが羨ましくなつちやつたんだよね。

留美はお菓子の試作したり、あと「告白するか迷つてる」みたいなこと言つててそわそわ落ち着き無いし……。

それから陶子のやつ。あの子実は彼氏持ちなんだよねー。まったくお互い小学生の分際でけしからん。だいたい普段は結構強気なキャラのくせして彼氏の前では妙にしおらしくなつちやつたりするところが許せん。いや、あたしの許しとかいらんだろーけどさ。

まあそーゆうの間近で見るとねー やっぱりあたしもがんばるぞい！ とかちよつとは思うわけでありませよ。

だけど今のあたしには、「どうしてもあげたいっ！」て思うような異性が居るわけでもない。でも、折角のイベントだし、おとーさんたち以外にも誰かにあげたいなあと。

だってバレンタインにお菓子手作りしたはいいものの、あげるのが肉親だけって乙女としてどうなのよ、とか思っちやうじゃん。

そんな風に思ってたところで留美の「どうやって比企谷さんに渡そうか」っていう話になった時に、じゃあ、せっかくだからうちに来てもらって、留美のついでに受け取ってもらおうと考えたわけですよ。なんだかんだで比企谷さんにはお世話になってるしね。

で、お店のバレンタイン限定煉切の中からあたしが可愛いと思うのを3つ選んで、あたしなりにできる範囲でなるべく同じものを作ろうと目指したわけ。

……まあ、結局比企谷さんが来れなかったのはがっかりしたけど、小町さんにお願

いすることが出来たのでせっかく作ったお菓子が無駄にならなくてすんでよかった。

おとーさんがあたしのためにわざわざ見本まで作ってくれたから、渡せなかったらおとーさんにも申し訳ないな、なんて思ってたからさ。

ちなみにおとーさん、じーちゃん、第二人の分は一つにドンとまとめて作って目の前で切り分けた。けっして比企谷さんにおける方に時間をかけるために手抜きしたわけでは無いのよ。ほんとよ。

何を作ったかというところ……一度作ってみたかった煉切ホールケーキ！

煉切餡を丸い枠のなかで色ごとに四層に重ね、枠を外したそれを真っ白な餡で覆い、更に甘さを抑えた白い煉切餡と生クリームを混ぜたものを、星口金をつけたクリーム絞りでデコレーション。

そして最後は本物のいちごを乗せて——完成!!

見た目はまるつきりいちごのショートケーキホールサイズ。断面は……羊羹みたい
にスパツと切れるので超きれい。味も……これ最高。いちごと生クリームと餡の組み
合わせってヤバイ。いちご大福の例もあるように、苺の酸味と餡ってよく合うんだよね
。

弟達やおかーさん、ばーちゃんにもとっても好評でした。

……実のところ、これは何種類も餡を練るほうが大変で、おとーさんとじーちゃんとおたしの三人で作ったみたいになっちゃったけど……。忙しい時期に申し訳ないことしちやっただかなー。

まあでも、おとーさん達こういうチャレンジみたいなことするのが大好きだし。やたらノリノリで楽しそうにしてたからいいよね。

とか思ってたなら、このケーキ風煉切、おとーさんの手で改良されて、さつき比企谷さんが覗き込んでいたショウウケースの中に新商品として並んでるんだよね……。ほんと商魂たくましいというか……。いやでも、ケーキ部分の一層がいちごたっぷりの葛ゼリーになっててほんとに綺麗で美味しいんだよ！

そんなことはともかく、

「とにかくですね！ あたしのアレを値段の基準にするのは間違ってます。それに……三倍返しとか都市伝説みたいなもんです。きちんと気持ちがおもってれば値段なんて関係ないと思いますよ」

「そんなもんか」

「そうですよ。だいたい女の子の手作りチョコの価値を値段で考える方が失礼です。三倍返しなんて……比企谷さんが一生働いても返せないかもしれないですよ……」

「お……おう」

彼はそれでようやく納得したような顔をする。

「しかし……気持ちを込めるつつても……どうすりゃいいんだ？」

「いやいやそれを比企谷さんが考えるのが大事なんでしょう！ 手作りするわけじゃないんですから、『相手に合わせて選ぶ』って感じですかね。そこがセンスの見せ所、みたいな」

「分らないではないが……そーいうのを俺に求められてもなあ……。だいたいどの店行ったらいいのかも見当がつかないしな」

「まあ……そですかね……。あ、じゃあ、ちよつと待つててください」

あたしは一度レジ横に行きそこにたくさん挿してあるパンフレットやらの中から一冊の小冊子を引き抜き、それを持って再び比企谷さんのところに戻る。

「それは？」

「じゃじゃ〜ん」

彼に聞かれ、あたしはそれを捧げ持つようにして表紙を見せる。

「『銘店倶楽部』……フリーペーパーか？」

「はい。うちも載ってるんですけど、それは置いて……」

あたしはパラパラとページを捲りながら、席においてあるアンケート記入用の鉛筆で何箇所かに丸をつけていく。

「はい、どうぞ。あたしのおすすめのお店です。ホワイトデーまでまだ日にちありますし、一度全部まわってみて、その中から選ぶっていうのはどうですか？ どのお店のお菓子も美味しいので見た目のイメージで選んでもハズレは無いですよ。」

まあ……うちの和菓子もご利用いただきたいトコなんですけど……前日買って学校に持っていくのはちよつと大変ですしね。あ、あとけーちゃんにはこの店のが良いと思います。ここのお菓子、お酒使って無くて見た目もカワイイですよ……」

そんな話をしている時、鈴の音のような電子音がして自動ドアが開く。お客さんのご来店だ。

「いらっしやいませ」

「いらっしやいませ……あ」

母の「いらっしやいませ」の声についあたしも復唱するように「いらっしやいませ」という声が出てしまう。今はエプロンも外して休憩中なのに……失敗失敗。

ふと、あたしと母の様子を見ていた比企谷さんと目が合う。なんだろう、微笑ましい

ものでも見ているような目だ。

「はー……。なるほどな。綾瀬の言葉使い、目上に対してはやけに丁寧だとは思ってたが……。やっぱり接客とかで慣れてるからなのか？ なんとというか……。小学生なのに大したもんだなお前」

「ちよ、なに話と関係ないところに感心してるんですかつ」

もう……。この人ほんと油断できない。

「あ、いやすまん。……。そうだ、お前はこれの中だったら何処のが良いんだ？ 今日の
お礼に何かリクエストが有れば……」

「だ・か・ら・！ ……そこは聞いたら駄目なところなんですよ。ちゃんと一人ひとり、あたしの、皆さんの顔を思い浮かべて選んでください。……間違っても、面倒くさいから全員同じのにしよう——とか考えちゃ駄目ですからねっ」

「……まあ、努力はしてみるわ」

「はいー」

そんなことがあってからはや一ヶ月。小学校を無事卒業したあたしは、本日比企谷さん兄妹の家にお招きをいただいたのです。

なんでも、小町さん・留美・あたしの三人の入学祝をしてくれるとのことと連絡をいただき……留美はともかくあたしも？ と最初は驚いたものの、まあ多分これがホワイトデーのお返しの替わりなのかなーなどとなんとなく勝手に納得しました。

なにせホワイトデー当日は小学校の卒業式前日で……「比企谷さん、そういうえげどうしたかなあ」とちらつと思ったりしたもの、すぐにそれを忘れるくらい忙しかつたんだよねー。あの日の比企谷さんの言動からして、全く何も無いってことはないだろうし……。

なんて気楽に考えて留美に案内されつつやってきたと思つたら……。

なんだか小町さんの変なノリで制服姿の披露とかさせられてるし（そもそも「中学校の制服持つてきて」って時点で何かおかしいって気付けよあたし！）

……それに、なんとも言えない場違い感……。

いや、集まったメンバーがね、もうレベル高すぎつつーか……。

筆頭は雪ノ下雪乃さん。言わずと知れた超美人で、艶やかな長いストレートの黒髪、スレンダーな体軀からスラリと伸びた手足……容姿的な弱点なんて上半身の一部が

少々ボリリューム感に乏しいことぐらいしか無い！ おまけにその弱点をむしろ長所だと捉える男性諸氏だって決して少なくは無いわけで……即ち全方位死角なし！

そして対抗、由比ヶ浜結衣さん。可愛らしい、それでいてとても整った顔立ち。普通かわいい系の顔つてどこかしらバランスが崩れてる部分が有るもんなんだけど、結衣さんにはそれが無い。でもすごく可愛いんだよね……。そして彼女は、結衣さんを結衣さんたらしめる最強の兵器を胸部に装備しているのだ。

——これこそ大艦巨砲主義の具現！ 正に圧倒的じゃないかッ!!

と、いやその、大きいんだよね……すっごく。それでいて形も綺麗という……。

結衣さんの胸については前にも同じようなことを言ったような気がしないでもないけど……まあ、大事なことなので二回言いましたってやつね。「大きい」「こと」と書いて『大事』だし。

そういえば以前抱きつかれた事のある留美がそのあまりの戦力に唖然としてたっけ。そしてその留美——我が親友、鶴見留美さん。

最近一緒に居る事も多くなり、だいぶその容姿にも慣れて気にならなくなってきたるものの、改めて客観的に見れば彼女もまた相当な美少女なのだ。

確かに眼の前に居る高校生二人に比べれば流石に幼さを感じる。けれどそれが年の割に大人っぽい彼女の容姿に不安定な危うさという魅力を付け加えているようにも感

じるのだ。

「そういえば……彼女は外見的な雰囲気雪ノ下さんとどこか似ている。容姿そのものも、彼女の持つ雰囲気も。この印象を持ったのはあたしだけでは無いらしく、比企谷さんが留美のことをぼそつと「ミニの下さん」と独り言のように言っていたのを聞いてしまったこともある。きっとこのまま成長すれば雪乃さんや結衣さんに負けなくらいの美人さんになるに違いない。」

もう一人、八幡の妹さんの小町さん。あたしはそれほど接点多いわけじゃないんだけど、留美は随分前からお世話になってるらしい。

彼女は表情がくると変り、笑顔がとつても可愛らしい女の子。いろんな事にしつかりしていて、でもなんだかところどころがなくて……。すごいなあと思うのは、自分のことを「小町は〜」とか言っても嫌味がなくあざとくない……。というかあざといのに可愛いという稀有な才能。しかもお兄ちゃん大好き——と、萌えキャラ要素で言ったら彼女がNo. 1！

……で、その綺羅星の如き女性陣の中にあつてですよ？ 外見的には「小学校を卒業したばかりにしては背が高い」程度のことしか特筆すべきこともなく、立ち位置的にも「比企谷さん兄妹と色々親交のある小学生……の、同級生……にこれからなる予定の友

達？」という実に微妙な存在が約一名。

……いやほんと、なんであたしここに居るんだろう。

その、あたしだつて別に卑下するような容姿じゃあ無い、とは……思う。背が高く手足が長い体型も嫌いじゃないし、目は奥二重おくふたえで、黒目がちでやや切れ長にもみえるところは結構気に入ってるし、

ばーちゃんは「絢香は和風美人さんだなー」と言ってくれるし、

下の弟も「ぼくね、おねーちゃんどけつこんするのー」とまだ言ってくれてるし。これがまた可愛いなのつて……それは関係ないか。

まあ、そんな事をグダグダ考えてたあたしだけど、いちいちそんな事を気にしてるのつてあたしだけみたいなんだよね。

雪乃さんお手製という、まるで海外ドラマのホームパーティーに出てくるようなおしやれで美味しい料理を摘みながら、ごく自然にあたしに接してくれている彼女たちを見ていると……変に構えてしまっているこつちが馬鹿らしくなってくる。

それに……なんだかんだで雑談に盛り上がってる女子陣はもちろん、比企谷さんだつて、男子×一名、女子×五名（うちハイレベル美少女三名、実妹一名、普通女子一名）という超ハーレム状態の中で結構平気そうに話をしてる。

ほーんと、一体全体どこが「ぼっち」なんですかね。「ファッションピッチ」ならぬ

「ファッションぼっち」？

なんとゆーか、「俺ってぼっちだからさ、ちよつと寂しいんだよね」……みたいに自分を演出して、それにフラフラと寄ってきた女の子たちを片っ端から……とか？

まあ、どう考えてもそんな器用ではなさそうだなあ。比企谷さんって、結構小難しいこと語るくせに恋愛方面は不器用っていうか……そこがちよつと可愛く見えちゃったりなんかしちやつて……。

……はっ！ これはもしかしてあたしもその魅力の罠にはまっていたりするのか？

そんなことを考えながら比企谷さんの方をチラチラ観察してたら……おや？ なんか留美に対する態度というか意識の仕方が前と違ってないですか？

上手く言えないけど——こう、ちゃんと女の子の子として見るようになってるといっか……微妙な変化なんで確信は持てないけど……。

バレンタインの後、留美はあまり詳しい話をしてくれないけど、「言いたいことは言えた」と言ってた。……つまり、告白はしたということだろう。

そう考えれば彼のこの態度もなんとなくは理解できる。

だって、あれだけ可愛くていい娘に想いを寄せられて嬉しくない訳がない。どうしたって意識はするだろう。

——そりやあもちろん、年齢のこととかいろいろ考えちやったりはするだろうから、いきなり付き合う付き合わないの話にはならないのかもしれないけどさ。

もつとも留美のほうは、「八幡が私を恋愛対象と見てくれるなんてありえない」なんて思ってるみたいだけど……あたしから見ると、比企谷さんと留美の二人が並んでいる絵面は結構自然で、年齢やら人間関係やらの余計な予備知識なしにこの二人を見れば、十分アリだ！ という結論になるんだけど……こういうのは本人同士の意識の問題だしなあ……。

「……これも美味しいです、雪乃先輩」

「そう？ 先に下味を付けておいたのが良かったのかしら」

「ほら、結衣先輩も食べてみてくださいよ……」

「どれどれ……へえ、美味しいねえ。あたしもこれやってみようかなあ」

「えっ」

「ん？ どつたの二人共……」

小町さんは今日から雪乃さんと結衣さんを「雪乃先輩」「結衣先輩」と呼び始めた。まだ少しだけ……どちらかと言うと呼ばれる側のほうがぎこちない様子だけど、あつちはあつちでなんだか楽しそうだなあ。へへ。

そんな中、比企谷さんがタイミングを図ったようにすつと立ち上がり、
「じゃあ、小町頼むわ」

と言つて二階へと上がっていく。はて、なにかこの時間にどうしても席を外さなきゃいけないご用事でもあるんだろうか……。 神への礼拝？ 黒の組織への定時連絡？ そんなアホな。

彼が階段を登るのを確認するように見上げていた小町さんが、やがてくるつとこつちを振り向いた。

「はいはい。ここで留美ちゃんと絢香ちゃんはじゃんけんをして下さい」

「あのー、何ですか？」「え、何？」

あまりにも突然そう言われたあたし達二人は当然疑問の声を上げる。

「まあいいからいいから。順番決めるだけだから気楽にね」

小町さんに腕を引っ張られて立ち上がり、頭の中は「？」状態で留美と正面から向き

合う。彼女も事情はわかっていない様子で困惑顔。けれど横目で雪乃さんたちを見れば特に驚いてる様子もない。結衣さんなんか露骨に知らんぷりしてるし。

……ふむふむ、この流れはあれですね。いわゆるサプライズ的な何かがあるということですな。——そうと分かれば応えてあげるが世の情け。世界の破壊を防ぐため、世界の平和を守るため……じゃないけどつ。

あたしはわざとらしく不敵に笑い、

「よくわかんないけど、やるからには負けな。3回勝負ね！」

あたしは左手で前髪をかきあげ、その手をそのまま前に突き出し、留美の眼前にその指先をビシッと突きつけた。

そんなあたしを見て、留美も呆れたように笑いながら構える。

「じゃあ、勝負！」

「じゃん、けん、ポン——」

あいこ、勝ち、あいこ、あいこ、負け、あいこ、勝ちい!!

「へへっ、あたしの勝ちい」

あたしは一つ跳ねるようにして天に拳を突き上げた。

……お？ 留美は結構悔しそうだ。彼女に向かって煽るようにVサインを決めると、留美はふうつと可愛らしく頬を膨らませる。

「じゃあ、絢香ちゃん、お先にどうぞ」 小町の部屋の手前のドアだよー

小町さんがそう言う。要は階段を上がって比企谷さんの部屋に行けということか。

「ええー、いやあの……ホント、何なんですか？」

まあ、ここは芸人のお約束として一応渋ってみせる。(誰が芸人だ)

「まあまあ、行けば分かるから」

そう言う小町さんに背中を押され、あたしは留美たちに見守られながらゆっくり階段を登った。

さつき制服を着替えた小町さんの部屋の一つ手前のドア。ここに一体何が待ち構えているのか？ ……いやまあ、比企谷さんが待つてるに決まってるんだけどね。

あたしは一呼吸おいてから、トン、トンとドアをノックする。

数秒、ドアがすつと開かれて比企谷さんが顔を覗かせる。

「おう、先に綾瀬か。……まあ入ってくれ」

「はい、おじやまします」

そしてあたしは初めて比企谷さんの部屋に足を踏み入れる。

部屋の印象は……「本ばかり」

高校生男子の部屋ってどういのが普通なのかは知らないけど、部屋は綺麗に片付けられており、ベッドと学習机、そして本棚。

パソコンもテレビも見当たらないけれど、その分この本棚がやたら大きい……って、これ、同じ本棚2つ並べて置いてあるのか。

留美から「八幡は本ばかり読んで」とは聞いてたけど、なるほどだねー。

何かのアンケートなんかで、何の趣味もない人が、「趣味」の欄に「読書」って書いたりするらしいけど、比企谷さんなら自信を持って「趣味Ⅱ読書」と書けるだろう。

比企谷さんは、そんなしよーもないことを考えながらウロウロしてるあたしを横目に見ながら、机の引き出しから綺麗に包装された円筒形の包を取り出した。

あ……なるほどそういうことかあ。あの包装紙はうちの比較的近所にある洋菓子店のもの……先月あたしが比企谷さんに渡した「銘店倶楽部」に載ってて、あたしがお薦めの丸印を付けたお店のうちの一つ。名物の「塩ブッセ」が美味しくて、あたしも

たまにお小遣いで買って食べたりますとこのものだ。

「まあ、お前は見ればわかるだろうが……先月のお返しな。ちよつと遅くなつて悪かったが、今日来てくれるつて話だったから急がなかった」

そう言つて比企谷さんはあたしにその包を渡してくれる。

「いえいえ、どうもありがとうございます。へへ、このクッキー好きなんで嬉しいです」

「……中身わかるのか」

彼の反応を見るにどうやら正解らしい。多分、透明な円筒ケースに入ったクッキーを3つ重ねて包装してあるんだ。

「まあこれは形に特徴ありますからね。でもわかるのは『クッキー』つてトコまでで、比企谷さんがどれを選んでもくれたのかは分かりませんけどね。ここのクッキーたくさん種類ありますし。」

……で、ちゃんとあたしの顔を思い浮かべて選んでくれましたか？」

「そう言う言い方されるとなんか恥ずい……。まあ一応な。クッキーにしたのも、綾瀬に贈るなら……。どうせなら和菓子から離れた方向で、しつとりよりはサクサクした物にしよう……。とかそんな感じだ。……相手に合わせて考えるつて言われてもこんな風なことしか思いつかなくてな……。こんなんでもいいのか？」

「はい、選び方は合格ですよ」

「……選び方は？」

「失礼ですけど渡し方は今ひとつですわ。部屋に入っていきなり立つたままというのは良くないです」

「お、そうか……スマン」

「いえ、でもこれから留美にも渡すんでしょう？ だったらもう一回練習しましょう！」

「練習して……どうすりゃいいんだ？」

「最初にクツションか座布団用意して、そこに座って落ち着いてもらうんですよ。まずはそこからです」

「なるほどそういうもんか……」

言いながら彼は部屋の隅からクツションを持ってきた。

「えーと？ 『とりあえずそこ座ってくれ』か？」

「はい」

と、そんな風に一連の流れを練習したところであたしはお暇することにする。留美も待つてらるだろうしね……って、この比企谷さんから貰ったお菓子どうしよう。このまま

持つて下に降りたらサプライズにならないじゃん。

うーん、セーターの中に隠せないかな……。お腹側を広げて中にしまってみたもの……無理だ、どう考えてもバレるわこれ。

比企谷さんは、そんなあたしの様子に気づいたらしく、何かを思い出したように言う。「あ、そういうえば小町が、『一人目の子は小町の部屋で待たせておいてあげて』って言うってた。そういう意味か」

なるほどそれならお菓子持ったまま留美とすれ違わないで済む。あたしは比企谷さんに改めてお礼を言い、彼の部屋を出てドアを閉めた。

あたしは下に向かつて、

「次、留美呼んでくださいってー」

と声をかける。

「じゃあ、絢香ちゃんはお町の部屋で待つててねー」

下から小町さんの声。

あたしは「はーい」と返事をして小町さんの部屋に。で、ドアはほんの少しだけ隙間を開けておく。

やや間を置いて階段の音が響く。おそらくは留美が二階に上ってきた音だろう。

隣でノックの音が響き、留美と比企谷さんがなにか言ってる声。あんまりはつきりとは聞こえないなあ。

——仕方ない。あたしは隣の部屋のドアがボタンとしまった音を確認すると……：……うっと小町さんの部屋から這い出した。

這い出したってなんだよ、お前は混沌の邪神か？ などとおっしゃいますな。あたしは文字通り、赤ちゃんのハイハイみたいに這い出したりだよ。……だって、立つてたら下から見つかつちやうかもしれないし。

そんなわけで（どんなわけで？）スニーキングミッション開始、である。

階段が近づくと、下から見えないようにするためには更に角度が厳しくなるため、あたしはほとんど匍匐前進状態ほふくぜんしんで隣のドアの前にたどり着いた。立ち聞きならぬ寝聞きの体勢である。

「……とりあえずそこ座つてくれ」

今度ははつきりと比企谷さんの声が聞こえてくる。おお、ちゃんと練習通りにやつてるな、えらいえらい。

「遅くなつてすまん。もつと早く渡せればよかつたんだが、卒業式とか色々あつたしな……」

「下で渡そうかと思つてたんだが、ちゃんと一人一人渡したほうがいいつてあいつらに言われて……まあ、そんな感じだ」

あれ、留美の声が聞こえて来ない。場所が悪いのか……それとも単に声を出さずに頷いてるだけだったりするのかな？ 流石にドア越しの声だけじゃ分かんないや。

「あー、そのアレだ。あくまでこの前のお返しつてやつな？ ……言つとくがそんな大したもんじゃないぞ。普通に買えるお菓子だ。まあ、評判を聞く限りじゃ、美味しい……らしい」

評判……ね。比企谷さん、留美にはどんなお菓子選んだんだろう。やつぱりあの『銘店倶楽部』の、あたしのお薦めの中から選んだのかな……そこはちよつぴり気になるところ。

「うん………八幡、ありがとう」

お、ようやく留美の声が聞こえた。……………言葉はシンプルなのに、万感こもったような嬉しそうな声。

「それで、な」

僅かな沈黙の後、再び比企谷さんの声。

「まあこれはこれとして、だ。…………留美、入学祝い、なんか欲しいものあるか？」

「え？」

「まあ、あんまり高いもんは無理だが」

「入学祝いなんて…………そんなのいいよ」

「いや、これは俺が勝手に留美に何かしてやりたいと思ってるだけだ。おまえとは、夏以来なんだかんだで縁みたいなものがある気がするしな」

「……………うん……………」

…………縁、ねえ。やっぱり比企谷さんの留美に対する態度が前と違ってるのって思い過ぎしじや無かったみたい。

比企谷さんが「勝手に留美に何かしてやりたいと思ってるだけ」とまで言う時点でもう相当特別な存在ってことだね。…………留美がここにお泊りした日、一体何があったんだらう。

「ただ、その『何か』がまるで思いつかん。まあ考えてみれば、俺なんか小中学生女子の好みなんて分かるはずが無い」

「それは……」

「それで小町に相談してみたんだが、小町は、『なら、本人に聞いてみればいいんだよ。お兄ちゃんの残念なセンスでいらぬものプレゼントされても留美ちゃんの困ると思っし』だと」

ぶぶ、いろいろ酷いなこのセリフ。妹に相談するつても、小町さんの返しも。

「小町さん……」

「まあそれはその通り、と納得したわけだ。……で、どうだ、留美？」

……比企谷さん色々おかし。今の言葉に納得しちゃうトコも、その言われたまま留美に聞いてるトコも。

「……そんな、急に言われても思いつかないよ。それに、もし何かもらえるなら、八幡が選んでくれる物ならなんだって嬉しいよ？」

「そうは言ってもなあ……文房具とかは……学校の指定とかあったりするの？ 服

……いや、俺のセンスじゃな……」

いやだから、そういうのはセンスのいい悪いとかじゃなくて、比企谷さんが考えなきや駄目ですよってこの前も言ったのに……。

と、ここで留美の……どこか震えるような声が響く。

「ね、八幡……だったら、あの、い、一緒に選んでよ。その……お買い物、連れてつてくれたら嬉しい……」

うおおつ、留美から行ったあゝ！ デートですな、デートのお誘いですねっ!!

「ああ、だったら小町とも都合を合わせて……」

「だめっ」（あほかっ！）

思わず留美と一緒に声出しちゃうとこだった。あつぶなー。

「……留美？」

「だめ。……八幡と二人だけがいい」

ひやああ、留美も頑張るじゃん！ デートだもんね、やっぱり二人きりがいいよね。

「いや、それはアレでだな……」

くっ、この男……女子にここまで言わせてまだ渋るかッ。

「だって、小町さんが一緒だったら……八幡は小町さんにまかせちゃって自分で選んでくれないもん。——私……私は、どんなものでも八幡が私のために選んでくれた物がいい」

「……………」

おしつ、黙らせた。留美の勝ちっ！

そして比企谷さんはため息を一つついて、

「まあ、『欲しいものを選んでもらうために一緒に買物に行く』ってだけの話だよな」

と保険をかけに行く。あくまでも『デート』じゃ無いということにしたいんだろうなあ。

「う、うん。そうそう買物。せっかくだから直接見て選びたいし。それだけだよ」

……お、留美もこれに乗った。無理に「デート」にするより二人で出かけられるようにすることを優先したんだろう。

「……………なあ、留美……。入学祝いの話は小町しか知らない。……だから、他のやつ

らには内緒にしてもらつていいか？ その、この前みたいなことになると面倒だしな」

「うん。絶対……絶対に言わないから」

へへへ……。ごめんなさい聞いてしまいました。……でも誰にも言わないから安

心してね！

「……じゃあ、いつがいいんだ？」

そして若い二人はデートの相談を始める。

スケジュールについてはぜひ聞きたかったんだけど……どうやらカレンダーか、あるいはスマホの画面なんかをみて話をしているらしく、二人して「この日はどう」とか「その日は用事があつて」とかしか言わないんだよね。頼むから具体的な日付を声に出してくれ……。あたしは比企谷家二階の廊下で蛇のようにたくりながら心の中で叫ぶ。

……他所様の家で何やってんのあたし……。

結局「デート」の日程は分からずに終わった。南船橋で待ち合わせしてららほに行くってのはわかったんだけど。春休み中毎日南船橋駅で張り込むわけにも行かないしなあ……。

小町さんの部屋が外からノックされる。

「おわったよー。下に戻る」

と留美の声。彼女たちに気付かれないようにこの部屋に戻っていたあたしは、今ノックされるまで何も聞こえてなかったみたいで態度でドアを開けた。居るのは留美だけ。さつき階段の音がした気がするし、比企谷さんは先に下に降りたんだろう。

「ね、留美も貰ったの？ やっぱりお菓子？」

しれつと聞いてみる。

「うん、まだ開けてないけど八幡はそう言ってた。絢香も？」

「あたしはこれ」

そう言つて比企谷さんからもらった包を彼女に見せる。

「へえ、お店違うんだ。ちよつと意外。……私にはここのだつたよ」

そう言つて彼女が見せてくれた包は、あたしにくれたクッキーのお店とは結構離れたお店のもの。もちろんあたしお薦めの店の中の一店だ。生ケーキメインのお店だけど焼き菓子も美味しくて……留美のもらったのはマドレーヌのセット辺りかな。

それにしても、仮にも想い人が自分以外にもバレンタインのお礼を返しているという状況なのに留美はとつても上機嫌だ。……まあ当然か。今その彼と「デート」の約束をしたばかりだしね。

……でも比企谷さん、ちゃんと贈る相手に合わせて選んだんだなあ。品物だけじゃなくお店まで違うってことは、もしかしてあたしに言われたとおり一度お薦めのお店全部回ってみて、それから改めて買いに行ったのかも。

あたし、確か10個ぐらい丸つけちゃったはずなんだけど……。あのめんどくさがりの比企谷さんがバレンタインのお返しのために何店も何店もお菓子屋さんを巡り歩く姿を想像したら、なんだかおかしくて笑ってしまった。

「絢香、どうかした？」

「ううん、なんでもない。比企谷さんも頑張ったんだなーって」

「頑張った？」

「まあ、おサイフ方面とか色々。だって、比企谷さんお返ししたのって多分あたしたちだけじゃ無いでしょ」

「そっか……」

なんとなく納得したらしく、留美は階段の先に視線を向ける。

へへ、彼女たちだけじゃないんだよ？ 留美が、比企谷さんが実際にくつお返しをし

たか知ったらきつとびっくりするんだろうけど……誰にも言わないって比企谷さんと約束しちゃったしな。

あたしたちも下にもどり、みんな揃ってお食事再開。

サプライズ？ も終わったので。その手の話題もちよつぱり解禁になったらしい。結衣さんが、

「絢香ちゃんとおのお菓子って綺麗で美味しいよねー。それになんかケーキみたいでびつくりだし。今度優美子たちとも一緒にお店に行くね」

と言ってくれる。話を聞けば、比企谷さんは、結衣さん・雪乃さん・いろはさんには、一人ひとりに選んだ個別のお菓子の他に、うちの生菓子を予約して、放課後総武高からうちの店まで自転車で取りに来てくれたらしい。

それがまさかの、例のホールのショートケーキもどき（中）で、部室で切り分けて食べたら大変好評だったとのこと。

「……そう言えば……あやせ屋って、『御菓子司』の看板出してる割には、なんつーかこう、攻めてるよな」

そんな話を横で聞いていた比企谷さんがぼそつとそんな事を言った。

「へ？ 攻める？」

「いや、あれ以外にもホワイトデー限定のケーキみたいな和菓子とか結構あるみたいだったからな」

まあ確かに。そのショートケーキ型の煉切は外見のミスマッチ的な面白さもあつて結構な人気商品になってしまっている。サイズも小（いちご1個カットケーキ風）中（いちご4個ミニホールケーキ風）大（いちご6個ホールケーキ風）と充実展開。

いやこのラインナップ、ほんとに和菓子屋のショウケースかよっ！ おとーさん、娘にまで突っ込まれてどうすんの？

「いや、父と祖父がそういうの結構好きで……『御菓子司』だとか何かマズインですかね」
「別にいいんじゃないか。いや知らんけど。ただこつちが勝手に「伝統を守ってる」みたいな名前のイメージ持つてるだけだしな」

「イメージ？」

「うる覚えだが……『御菓子司』って、確か宮中御用達とか殿様御用達とかの公的な許可をもらつたお店、みたいな意味だったような」

「へえ〜」

「いやなんでお前が驚いてんだよ」

「だってうちは、今は独立してますけど元々はただの支店で……言われてみれば本店は

千葉城のすぐ近くにあるんですよ。『殿様御用達』かあ、なるほどね〜」

本店には何度も行ったことあるけど、たしかに向こうのお店は「ザ・伝統」って感じのお店だった。

「じゃあほんとはホントは御菓子司名乗っちゃマズイんですかね」

ちよつと心配になってきた。すると、

「大丈夫よ、別に問題ないわ」

と雪乃さん。

「そうなんですか？」

「ええ、確かに比企谷くんの言うとおり、江戸時代なら御菓子司を名乗れるのは、今で言う公的な認可を受けたお店だけだったけれど……、最近ではその言葉のイメージからか、歴史も何もなくてもお店の名前につけるところが多いそうよ」

「え、なにそれ。詐欺なの？」

今度は比企谷さんが驚く。

「むむ、うちも微妙ですかね……。本店の方は江戸時代からのお店ですから間違いないとしても、うちは昭和になってからのお店だそうですし……。置いてるお菓子も随分違いますしね……」

うちと本店両方で同じものを扱ってるのは、伝統的な焼き菓子数種類だけだ。それに

本店ではショートケーキ煉切なんて絶対扱わないだろう。

「今の時代、名前や呼び方にはあまり意味がないという事よ。……大切なのは本質。『あやせ屋』さんにくるお客さんだつて名前が『御菓子司』だから通うという方はあまりいないと思うわ。」

——あなたのおうちのお菓子が美味しいからたくさんのお客さんがいらつしやる。きつとそれでいいのよ」

「うん、絢香ちゃんのとこのお菓子すごく美味しいよ。名前なんて……小町、『あやせ屋さん』としか覚えてなかったもん」

雪乃さんと小町さんの言葉になんだかほつとする。

「名前や呼び方にはあまり意味がない……か」

比企谷さんが何故か感慨深そうに言い、

「そうよ、ヒキタニくん」

雪乃さんがそう言っていたはずらつぽく微笑う。

「そうか、流石はユキペディアさんだな」

そして比企谷さんがそう返して口角を上げる。

楽しみに絡み合う二人の視線。……この二人も特別な雰囲気持つてるよね。なんとというか、「二人で話を始めると他の誰も入っていけない」みたいな。

夫婦漫才みたいな会話している時もそうだし、クリスマスイベントのときとかも、予算とか進行とかの話に夢中になると、二人にしか分からない、他の誰もついていけないペースで議論しているのも見たことがある。

その時の留美はただ遠くからもどかしそうに二人を見てるだけだったけど……。

「でも、私は……私は呼び方って——意味、あると思う」

「留美……？」

彼女は果敢にも比企谷さんと雪乃さんの会話に割り込んでいく。——そう、留美だつて前とは違うんだ。

「お店の名前のことはよくわかんないけど、私は八幡のこと『八幡』って呼びたいし、八幡が私の事、『留美』じゃない呼び方するのは……なんか嫌だし……」

比企谷さんと雪乃さんの今のやり取りに何か思うところがあつたのだろう。留美は比企谷さんをじつと見つめ……それから驚いたように留美を見ている雪乃さんの視線に気づいて、うつむきながら謝る。

「あ………めんなさい、その……」

「(こ)ち(ら)そ(め)ん(な)さいね。そんなに特別な意味じゃなく、ただ個人的な話をしただ

けのつもりだったの……」

二人がシユンとしてしまったところで、小町さんが声をかける。

「はい、そこまでですよ、雪乃先輩も留美ちゃんも」

「その、すいませ……」

「だから謝らなくていいんだよ。悪いことしたわけじゃないんだし」

「でも……」

「じゃあ、もう一回乾杯しましょう！ 今日はお祝いなんですから」

「そう、そうだよ。じゃあ今度は何に乾杯しようか」

小町さんが盛り上げ、結衣さんがそれに乗っかる。じゃああたしも。

「うーん……。ベタですけど、みんなの友情に、とかどうです？」

「おお、なんかかっこいい！ ゆきのんもそれでいいよね」

結衣さんは喜んでるけど、雪乃さんはあまりの強引な展開に呆れ顔……。

あ、でも今、留美と雪乃さんが顔を見合わせて二人とも笑った。

「じゃあ、小町飲み物用意しますね」

二人の様子を見て満足げな笑顔を見せた小町さんが、手際よくみんなのグラスに氷を入れジュースを注いでいく……。

「みんなコップ持った？　じゃあ行くよっ」

そう言つて結衣さんが高くグラスを掲げる。

「えつと……ここに居るみんなの友情に、かんぱーい！」

「「かんぱーい」「……乾杯」

それからみんな次々とグラスを軽く順番にぶつけて鳴らしていく。

「……比企谷さんも頑張りましたね」

彼とグラスを合わせながら小声で言う。

「何をだよ」

「へへ、おサイフとかお店回りとか色々ですよ。……お小遣い足りました？」

あたしがそう尋ねると、

「ぶつちやけ親父に前借り頼んだ。で、理由を話したら親父が『お前がそんなにたくさん貰えるなんて、一生に一度の奇跡かもしれない』とか言つて半額援助してくれたんで、まあどうにかな」

彼はそう言つて相変わらずの斜に構えたような笑みを浮かべる。

「一生に一度って……」

「いや、正直俺もそう思う」

ふ、比企谷さん自己評価低すぎ……でもないのか？ 11個、しかも手造りがその内10個って確かに大した戦果かも。

「あはは……まあ何にせよお疲れ様でした。乾杯です！」

「おう、今回は色々とありがとな」

そしてあたしと比企谷さんはもう一度ちよんとグラスを合わせる。

グラスの当たたる音は微かだったけど、中の氷が揺れて「からん」と優しい音を立てた。

鶴見留美は未来に迷う①
近況 ～ そして停滞の時は終わりを告げる（前）

「はい！ 留美ちゃん、絢ちゃん、少し休憩していいよ〜」

「はあ〜。つ、疲れた〜」

「うん……動けないってのってストレス溜まる」

私は立ち上がって一つ大きな伸びをする。絢香なんかブンブン腕を回してなんだかラジオ体操みたい。

椅子に座ってるだけでこんなに疲れるなんて……。やっぱり動けないってのはきついなあ。デッサンのモデルって大変。……まあ私たちがやらされてたのは一ポーズあたり五分位ずつだけど、プロの人は二十分も動かないと聞いたことがある。自分で実際にやってみると……二十分動かないってすごいなあと改めて感心する。

「なんであたしらがこんな事……」

「ね……」

絢香と私が愚痴ると、泉ちゃんがニッコリ笑って言う。

「留美ちゃんだったって絢ちゃんだったって一応部員でしょ？ 二人とも……特に絢ちゃんは普段あんまり活動してないんだから、たまには部のために貢献してよね」

「へいへい。副部長様のご命令とあらば致し方ありません」

「あはは……今日も見学の子、結構来てくれてたけど……新入生、何人ぐらい入ってくれるかなあ」

泉ちゃんがそうぼつんと言う。

「うちは……なんだかんだでそこその人数入るんじゃない？ ほら、あたしとか留美みたいなのも結構いるだろうしさ」

「うん……でもやつぱりちゃんと活動してくれる子にもっとたくさん入ってほしいなっ
て思うんだよー」

絢香の言葉に、泉ちゃんは赤縁の眼鏡の奥からジト目で私たちを見てそう返す。

「うう……それを言われると……」

「なんかごめんね、泉ちゃん」

「ううん。元々そういう話で入ってくれたんだし、留美ちゃんたちはまだ来てくれる方だよ。佐藤さんとか……三学期一回しか来なかったよ。それも三分で帰っちゃったし」

「あたし全然会ってないや。佐藤さん……どんな顔してたっけ……」

「おくい？ 一年同じ部活にいてそれって……」

「まあ、顔忘れたつてのは冗談だけど、ここんとこ実際話してないしね。クラスの違う幽霊部員同士なんてそんなもんだよ」

私たちがこの美浜第二中学校に入学して一年が過ぎた。

ここは美術準備室。美術部の部室だ。泉ちゃん、そしてなんと私と絢香もその美術部に所属している。

意外？ そう、自分でも意外。私と絢香は、泉ちゃんのお付き合いの中で美術の素晴らしさに目覚めて——っていう理由ならかつこよかったんだけど……。

実はあんまり褒められた理由じゃないんだ。絢香も言ってたけど、美術部って幽霊部員の溜まり場なんだよね……。

うちの中学校は伝統的に全員必ずどこかの部活動に入ることが義務になってる。でも、それだと家の都合がある人とか、外部のスポーツクラブに入ったり本格的に習い事してたりする子は困るよね。

そこで、その受け皿として幽霊部員を黙認してる部がいくつかある。その代表格が「科学部」と、そしてここ「美術部」なのだ。

勿論全く活動しなくてもいいというわけではない。例えばこの美術部なら、毎年文化祭に最低一作品展示できるものを作ることが条件。逆に言えば、それさえこなせば後は部活に出なくても特にお咎めなしってことでもあるんだけど。

そしてそんな幽霊部員を受け入れる側の方のメリツトは……下世話な話ではあるんだけど「活動費」だ。学校の予算から分配される「活動費」は、それぞれの部の「活動実績」と「部員数」によって決められるわけで……。

要するに、例えば県大会に出場するような運動部や、単純に人数の多い吹奏楽部なんかには予算が多く分配されるということだ。そして、「部員数」には幽霊部員の数も含まれるから……。まあ、そういう事。

で、その部活に出ない幽霊さんたちが何をしているのかと言えば……

例えば絢香なら家の手伝い……とか修行？ かなり本気で和菓子のこと勉強してるみたい。ただ、「お家は絢香が継ぐの？」って聞いたらなんだか曖昧な顔して笑ってたけど。

他にも、「Jリーグの下部チームに入団してる子」「本格的にバレエやってる子」「ずーっと図書館で受験勉強してる子」「単に遊んでる子」と様々だ。

そして私はいえば——。

* * * * *

去年の夏頃から、私は東京にあるデザイナーさんの事務所に通って様々なことを勉強させてもらっている。このデザイナーさん（私はユキ先生と呼んでいる）は母の古くからの友人で、私も子供の頃からのお付き合いだ。

今私は彼女の個人ブランド「Fairly Wings」の専属モデルという形で籍を置いている。「専属」なんて言うとなんだかすごい特別な事みたいだけど、これはお母さんの希望——というか私がモデルを引き受けるに当たって両親が付けた条件で、要するに、

「あくまでも学業優先、学校生活の負担になるような仕事はしない」

「モデル業界はなかなか恐い所だけど、友人の所の仕事だけなら両親も安心出来る」

「彼女の事務所兼アトリエ兼自宅は、母の仕事先である出版社の事務所から目と鼻の先にある」

と、つまりそれだけの理由なのだ。ユキ先生は普通に他の事務所所属のモデルさんも使う——というか作品に合ったモデルさんを選ぶし、私がモデルをするのは先生の商品

のほんの一部だけ。実際仕事として本に載ったことなんて数えるほどしか無い。

私は平均して週に1〜2回ユキ先生の所に通い、ごくたまにあるモデルの仕事以外の日は、仮縫いのマネキンやったり、デザイン画の見方や縫製の仕方を教えてもらったり雑談したり。それから先生が主催しているデザインスクールの助手みたいな事を他のお弟子さん達と一緒にやったり、みたいな事もしている。

……で、時間が合えばお母さんと待ち合わせをして家に帰る時もあるし、時にはその母と一緒に先生とかそのお弟子さん達とご飯食べに行く、というようなこともある。

あ、あと一応、私は一応週に一回ぐらいはちやんと（と言っていいのか）美術部にも顔を出しているよ、念のため。

そしてこの春、私にとって大切な場所がもう一ヶ所出来た。

* * * * *

「そういえば留美、比企谷さんの引越しのお手伝い行っただよね。先週だった？
ねね、どうだった？」

「どうって……」

「だからほら、どんなお部屋か、とか、回りにどんなお店が有って、とか、比企谷さんとラブラブして、とか……こう、色々とあるじゃん」

「最後のは部屋関係ないでしょ……」

「いやいや？ 何言ってるのーちゃんてば。一人暮らし始める男の人の引越し手伝いに行くとか……それともう彼女——いやむしろ奥さん……？」

「ええっ！ 留美ちゃんいつの間にかそこまでの……」

「待って、まだそんなんじゃないってば！」

私が慌ててそう言うと、何故か絢香の目が嬉しそうに光る。

「『まだ』……聞きました？ 藤沢の奥さま。今この子『まだ』っておっしゃいましたわよ？」

「ええ聞きましたとも綾瀬さま。確かに『まだ』とおっしゃいましたわ」

なんで泉ちゃんまでノリノリなのよ……。

「……あのね二人とも、わけわかんないんだけど……」

もう、絢香も泉ちゃんも……特に絢香のやつがニヤニヤして鬱陶しいったら……。

私が睨むと、絢香は悪びれずに「あはは」と笑ってごめんと手を合わせた。

私は一息ついて話を続ける。

「……まあ部屋は別に……普通のワンルーム……じゃあ無いか。お部屋と、キッチンとかのスペースが区切つてある、えーとワンケイIKとかお母さんが言つてた。あとは……あ、スカイツリーがよく見えたよ」

「へー……。でも真面目な話さ、女の子が年上の男の人の引越し手伝いに行く関係つて……も一回聞けどささ、留美、ホントに比企谷さんと付き合つてないの？」

「そうなら……せめて少しくらい意識してくれたらいいんだけど……八幡つて私の事、なんか保護者目線で見てる感じがするんだよね、こここのところ特に……。こう……兄あにいもつと妹の兄じゃなくて父兄のほうの兄な感じ？」

「父兄つて……ああでも、何となく分かるような」

「でもでも……留美ちゃんのことなんとも思つてないのにそこまで一緒にいるかな？」
「でしよでしよ」

「うーん……でもそれが八幡なんだよね」

うん、八幡は私の気持ちを知つてるわけだし、実のところ全く意識してない……つてことでは無いんだと思う——思いたい。私が中学生になつてからは以前よりもちやんと女の子扱いしてくれるようになったのは感じるし。だけど……。

* * * * *

3月の終わり——私は八幡の引越しのお手伝いにI市のアパートに来ていた。

引越しと言ってもそれほど遠い所というわけではない。そもそも八幡がこの春から通うのは東京で、八幡本人は最初、自宅から通うつもりでいたんだって。

けれどどうやら両親の意向というか方針で……「学生のうちに一人暮らしを経験しておくべきだ」ということでそれからの部屋探し、そしてやや遅めの引越し、になったらしい。

八幡は、「俺と小町を引き離そうとする親父の陰謀に違いない」とか言ってるけど……。小町さんのこと好きすぎでしょ……。

何かあればいつでも帰れる距離。だから荷物も大した量じゃなくて、なんと宅配便での引越した。なんでも一立方メートルの容積のコンテナに詰めるだけ詰めて運べる、お一人様用の引越しパックというのを利用したんだって。

動きやすいように髪をポニーテールにくくり、トレーナーにデニム、その上からコックトンのエプロンという出で立ちの私。食器棚の奥を乾拭きしながらちよつと気になっ

ていたことを聞いてみる。

「でもさ八幡、東京の大学なのにわざわざ千葉ちづ県のお部屋にしたの？」

「それは……いいか留美、千葉県とは言ってもここから旧都心の大学まで三十分もかからん。千葉から都心に向かうには川を何本か渡るわけだが——都心に向かつて一本川を渡る度に月の家賃が一万円位ずつ上がるのが相場らしい」

「ふうん」

「うちの親は、仕送り額……つつうか一ヶ月の支給額を決めて、『この金額でやりくりしてみなさい』ってことらしいから、まあこつちも出来る限りのことは考えないとな」

なるほどねー。「一人暮らしを経験させる」ってそういうこともあるのか。

「それに千葉ちづなら自販機でマツ缶普通に買えるし……俺が千葉県民じゃ無くなったらライフが半分ぐらいいになる気がする」

「え、そんな理由……」

「まあそれは半分冗談だが——」

半分は本気なのね……。八幡だもんなあ。

「——電車の定期代とか考えてもこつちの方がかなり安く済むし、その上ここ、留美のかーさんの紹介でさらに割安にしてもらえたからな」

そう、実はここはお母さんの勤める出版社で、独身者用の社宅として十数部屋契約し

て借り上げているアパート——の同じ敷地にある別棟。

ここ以外にも多くの部屋を契約している出版社の社員さんからの紹介ということで、不動産屋さんが気を利かせて少しだけ割引で契約してくれたらしい。

「え、でも安くなったのって確か二千元でしょ?」

「いや、家賃の二千元は大きいぞ? 一年で二万四千元、もし四年住んだら……」

「あ、そうか」

家賃つて、住んでる間ずっとかかるんだもんね。

ちなみに江東区にある会社の社宅がわざわざ少し離れたここにあるのも、実はさつき八幡が言つてたとおりの理由らしい（マックスコーヒーは関係ないけどね）

段ボール箱から取り出した食器類を布巾でさつと乾拭きして食器棚へ並べていく。うん、ここはだいたい終わりかな。

さつきコンロにかけておいた鍋のお湯がいいタイミングで沸騰してきた。私は蕎麦の乾麺の袋を開け、鍋の縁に沿ってぐるっと回すように放り込む。ブクブクと湯の泡が細かくなつてきて、白い泡がクリームのように盛り上がってきたところで火を緩めた。もこもこしてた泡がすうつと鍋に沈み、鍋の中で麺がゆっくり回転するように揺れているのが見える。

「八幡、もうすぐ蕎麦茹で上がるけど……、ざる蕎麦風で良いの？　暖かいつゆ作ろうか？　……乾燥ネギしか具無いけど」

「いや、別に寒いわけじゃないしそのまま……あれ、そばつゆなんてあったつけ？」

「あ、これはつゆ付いてるやつだよ。引つ越しならその方がいいってお母さんが」

そう言いながら私はコンロの火を止め、ステンレスのざるとボウルを重ねて流しに置いて水を出し、そこで茹で上がった蕎麦を流水に晒す。

水を切った蕎麦を、食べる方のざる……は無いからお皿に盛り付け、小鉢代わりのお椀につゆを張る。……よし。お蕎麦だけって八幡にはちよつと物足りないかもしれないけれど、お昼だし……この後を考えると軽めでちよつどいいか。

「出来たよ八幡、テーブルの上空けて」

そう彼に声をかけ、さつき八幡と二人で部屋のちよつど真ん中に置いたばかりの低いテーブルに蕎麦とつゆを二人分並べる。

「じゃ、たべよつか」

「……なんかサンキューな」

ふふ、八幡がなんだか照れくさそうにお礼を言ってくれたのがちよつと可愛くて、それだけで私は嬉しくなってしまう。

「はいはいどういたしまして」

私たちは向かい合わせに座って、二人タイミングを合わせるように「いただきます」と手を合わせる。

「じゃあ改めて、八幡、引っ越しおめでとー」

「おう……つて、引っ越しつて『おめでどう』で良いのか……?」

「さあ?」

どうなんだろう。まあ、悪いことじゃないんだし、いいんじゃないかな。

「じゃあ、お留守だったのは手前のお隣さんと上のお家か……。ちゃんと後でもう一回お蕎麦持つていくの忘れないでね」

「おう」

お蕎麦を食べ終え、お茶を飲みながらこの後の予定を確認する。

「えと……水道、電気、ガスもオーケーだし……。うん、あとは日用品と食べ物の買い出し、かな」

「……………なんか、留美すごいな」

「え？」

「いや、ものすごく助かってるんだが、なんか慣れてるんだな……………」

「ふふ……………慣れてる……………かも？ お父さん、転勤族だしね」

相変わらず半年かそこらで全国色々な所——まあ最近は関東圏が多いけど——に転勤してるお父さん。母と私は時間が合えば小旅行を兼ねて父の引っ越し荷物片付けたりする手伝いに行くことも珍しくない。

だってお父さん、ほうっておくとめんどくさがってちつとも荷物片付けられないの。去年なんかどうせ三ヶ月だから、とか言って食器とか入ってたダンボール、次の引っ越しの時まで開けないままだったんだよね……………。

まあ、お父さんの事はいいや。

「じゃあ、慣れてるついでに私が見て必要かなって思うもの書き出してみたから読み上げるね。足りないものとか思いついたら追加するから言って」

「お、おう」

「えーと、掃除機使えないとこ掃除するためのハンディモップ。お風呂・トイレ用の洗剤とスポンジ類。あ、トイレトペーパーとティッシュは一パックずつあるからまだ良いけど、早めに追加で買つといたほうが安心かも」

メモの下の方に「後で」の欄を作って今の2つを書き込む。

「シヤンプーとか……歯磨き粉とかは？」

「とりあえず向こうで使ってたのを持ってきたから大丈夫」

「あと調味料は一通り全部……砂糖・塩・胡椒・醤油・味噌・お酢・みりん・サラダ油・マヨネーズ・辛子・ケチャップ・バターかマーガリン、あと、あると便利なめんつゆと味噌ぽん。……それからとりあえずの食材かあ。お肉とお野菜はお店に行つて値段見てから考えるとして……お米はあるんだよね？」

「一応荷物の中に五キロの袋がある。しばらくは持つだろ。」

「なら、あとは牛乳と……お茶とコーヒーは少しはあるからこれも安い時に……」

さっきの「後で」の所にお茶とコーヒーを追加。

「あ、そうだ八幡、今夜食べたい物ある？」

「え、作ってくれんの？ いやそれは流石に悪いっつか……」

「いいのつ。私がやりたくてやるだけだし。……それとも、私が作るの迷惑……？」

最近色々と学習した上目遣いでそう八幡に尋ねると、彼は慌てたように言う。

「いやそんな意味じゃなくてだな……作ってもらえるなら正直嬉しいが、ただ夕飯つてなると……帰りあんまり遅くなると家で心配するだろ」

「じゃあ、後で駅まで送つて。今日はお母さんと待ち合わせして帰るから。……後で

確認するけど多分七時くらいだと思う」

「そりゃ送るくらい構わんが。いやだから……」

もう……ここで帰されたって困るし……。

「はい決まり！ 時間無くなっちゃうから買い物行こう、そのスーパーでいいよね」

私が話を打ち切るように立ち上がると、八幡は何か言いたそうにしたものの……諦めたように頷いて立ち上がった。

* * * * *

まだお昼を過ぎたばかりということもあってか結構空いてる近所の大型スーパーマーケット。春休みで、平日のこの時間に出歩いていられる中学生という立場にちよっぴり感謝。

初めて入る店内は清潔そうで、それに品揃えもなかなか豊富に見える。野菜売り場にたくさんお客さんが居るし、お惣菜のコーナーから漂って来るのは揚げ物の美味しそうな匂い……うん、なんだかちよつと安心。

八幡にそう言ったら笑ってたけど……お家とか、よく行く所の近くに良いスーパーが

有ると安心するのって私だけかな？

ま、これも転勤ばかりのお父さんのせいかもしれない。

私が売り場の店内表示ボードを見上げて確認しながら歩いて行く後ろを、八幡が買い物カートを押しながらゆっくりと付いてきてくれる。

私はさっきのメモを見ながら品物を選び、次々とカートの中に放り込んでいくんだけど……。

ふふ、なんだか夫婦で買い物でもしてるみたい、なんて。……でも口には出さない。

そんなこと言っちゃったら八幡照れたり嫌がったりするかもしれないし。それに私は夫婦気分でも、傍から見たらせいぜい兄妹に見られるのがいいところだろう。

お肉のコーナー。私がちよつと悩んだ末に、牛肉の切り落としと鶏もも肉の特大大パックを両方カートに入れると、

「こんなになん？……何作るんだ？」

と八幡が聞いてくる。

「さっき何でも良いって言ったから、カレーと……あと唐揚げ作っておこうと思って。少し多めに作って冷凍しておけば後でチンして食べられるでしょ」

そう言いながら私はさらに調味料とか粉類とかパスタ麺とかをカートに入れていく。すると今度は、

「? 留美、そんなの俺多分使わないぞ」

カートの中を覗き込みながらそう彼が言う。

ん? ああ、私が小麦粉・片栗粉・から揚げ粉・鶏がらスープの素・重曹とかをカートに入れてるからか……。うん、まあ八幡は使わなそうだね。でも、

「あ、これは私を使うやつだから。ちゃんとお金払うからどつか隅の方に置いて」

「おま……しよつちゆう来る気満々だな……」

私はそれには答えず、ただわざとらしいニッコリ笑顔で返す。ふふ。

「はい……」

まあ、今の八幡と私はこんな感じ。

* * * * *

この一年、いろんな事があった。

特に去年の春頃、八幡と雪乃さんの距離がすごく近くなって……。……。「ああ、私の恋、

終わっちゃうのかな——なんて思う時期もあったんだけど……。

それでもなぜか二人が付き合い始めるといふようなこともなく、かと言って離れてしまふというわけでもなく……一年経った今も、私はまだこうして八幡のそばにいたいことが出来ている。

もしかしたらだけど、この一年は奉仕部の三人にとって受験の年でもあったわけで……傍から見てもどかしいような心地良いような停滞の理由には、そんなことも関係していたのかもしれないな、とかそんなふうに今は思う。

そう、八幡たちの受験。

彼らはこの春、見事受験を突破し、それぞれ別の大学へと進学を決めた。結衣さんは県内の女子大へ。雪乃さんは日本最高峰の国立大学へ。

そして八幡はやはり東京の、誰でも名前を知ってる有名私立大の……なんと教育を取り巻く環境や教育に関する心理などを研究する学科へと入学を決めた。

八幡が教育絡みの学部に進学するって意外に思う人もいたかもしれないけど……。

『まあなんだ、平塚先生が転勤になつて……俺がどれだけ守られてきたか分かつたというか……。あの俺の担任でも何でも無かつたのにな。』

だから……俺みたいなのが学校生活送るのにどれだけ周りの環境が重要か、どうしたらぼつちでも安心して学校行けるのか、平塚先生みたいな人がもつと仕事をしやすくす

るにはどうしたら良いのか……とか、まあそんな事を考えてみたくなって、とかそんな感じだ。……俺が教育とかほんと笑うだろ』

とは本人の弁。

平塚先生は学校が変わった今でも八幡たちのことは気にかけてくれていて、時折超長文のメールが届くとか。「でも……結婚の話は聞こえてこないんだよなあ」と八幡はため息混じりに語る。

八幡の平塚先生との絆とか、その想いとか……私なんかには本当のところはわかるはずも無いけど……それでも、彼女を語る八幡の声から、表情から——想いの強さが、絆の強さがどうしようもなく感じ取れてしまう。

きつと奉仕部の二人が、平塚先生が彼の近くにいてくれたから今の八幡がいるんだ。だからこそ、八幡はきつと本気でその道へ進みたいと、そう思うようになったんだろう。

春を迎え、3人がそれぞれの新しい道へと踏み出した今、雪乃さんは、結衣さんは、……八幡は——どうするのかな。

まだ私は……今までと同じように八幡の近くにいても……いいのかな。

それに私だけじゃなく……。

* * * * *

買い物から帰ってきて十五分も過ぎただろうか。「ピンポンファンフォン」と、八幡の新居にチャイムの音が響いた。うちのチャイムより電子音っぽい柔らかい音だな……。

でも私は、間の悪いことにちょうど唐揚げの下味をつけようとお肉に塩と胡椒を揉み込んでいる所だったので手が放せない。

奥の部屋の八幡に視線を送ると、テレビの配線か何かをしているところだった八幡が気が付いて立ち上がってくれる。

「何だ？ 水道とか電気とかはもう午前中に来たし……後は……もしかして新聞の勧誘か？」

八幡が小声でブツブツ言いながらキッチンを使ってるわたしの後ろを通り過ぎ、「今開けます」と外に声をかけつつドアを開ける……。

「こんにちははく、せんばい？」

相変わらずの甘い声を鈴のように響かせて、私のもう一人のライバルさんが満面の笑みを浮かべて立っていた。

八幡は一瞬ビクツとした後、彼女——いろはさんに言う。

「な……お前なんでここ知って……ストーリーカー？」

「もう、せんばいってば、こおんなに可愛い後輩がわざわざ訪ねてきてあげたのに、一言目がそれってヒドくないですかあ——」

「う……いやそれは……」

八幡はごによごによと何か言いながらさり気なくいろはさんから私を隠すかのよう
に身体をずらす。が、

「もうお荷物片付いたんですか——」

そう言っているいろはさんは八幡の肩越しにぴよこんと部屋の中を覗き込む——。

「……………」

「こ、こんにちはいろはさん……」

上半身を傾げた体勢で固まっている彼女とバツチリと目が合ってしまった。

「……………せんばい……またですか？ また裁判ですか？」

いろはさんの抑揚のない平坦な声がちよつと怖い。

「つく……いやだから何でだよ。俺は訴えられるような事は何も……」

「は？ 何言ってるんですか先輩。今の時代、せんばいみたいな目をした大学生が女子中学生を部屋に連れ込んだ時点でもうヤバイです。『じあんはっせー』です！」

「う……それはそうかもしれないが……」

ちよ、ちよつと八幡、そこは認めちやダメなんじや……。

そしてさらにいろはさんは八幡と私をキツと睨みつける。じりじりと後ずさる八幡……。

「なくんて。ね！」

そう言っているいろはさんは急に表情を崩し、私に向かつてはちんとウインク一つ。

「ちよつと遅くなっちゃってごめんね留美ちゃん。オーブンの調子が今ひとつでさー」

そう言って彼女は体の横に下げているやや大きめの紙袋をひよいと正面にぶら下げてみせる。

「お疲れ様、いろはさん。今まだ唐揚げ揚げる用意してたトコですから大丈夫ですよ」
「よかつた〜」

「はい。そんなところで立ち話もなんですし、上がって下さい」
「え、留美？ 一色も……おい……？」

急変した私たち二人の態度に啞然とした表情の八幡。

「じゃあお邪魔します。……ね、冷蔵庫開いてるかな」

靴を揃えて脱いで床に上がり、紙袋の中身を気にしながら聞いてくるいろはさん。

「まだあんまり中身入って無いんで余裕だと思います。高さが足りなかったら真ん中の棚外しちやって下さい」

「うん。ありがと留美ちゃん」

いろはさんはしれっと八幡の横をすり抜けてさっさと冷蔵庫の方へ。ふふ、八幡から顔が見えない角度になったところで……彼女は笑い出すのをがまんしながら小さくガツポーズを決めて見せる。嬉しそうだなあ……。

オロオロと落ち着かない様子で私といろはさんを交互に見てる八幡がおつかしくて可愛くって……私も口の端がヒクヒクしちやっただけど、どうにか吹き出すのをこらえ、いろはさんに向かって肩のところまで小さくVサインを作った。

「…………いや、だから……留美？ 一色？ おーい……………」

八幡は「一体なんなんだよ……」とでも言いたげな顔してるけど……。

ふふーんだ。「どつきり」は八幡の専売特許じゃないんだからね！

鶴見留美は未来に迷う②　そして停滞の時は終わりを告げる（後）

「へえー、ベランダもちゃんとおあるんですねー」

着いた早々、八幡の新居に興味津々のいろはさん。

「まあ、そんなに広いわけじゃないがな」

「外、出てみてもいいですかあ？」

そう聞きながら彼女はもう勝手に窓を開けてベランダに出ている。八幡は苦笑しながらその後を追った。

「あ、せんばい、スカイツリー見えますよっ」

「いや流石に知ってるって……」

二人はベランダで話を始めたようだ。話してる様子からみると、私には聞こえないだろうと思ってるみたいだけど——窓が開いてると……風向きの関係だろうか、キッチンスペースにいる私にも意外なほど声が届いてしまっている。私はつい気になって料理の手を止めてしまった。

「……一色お前、その、なんで平気なんだよ……」

「ああ、そのことですか……」

いろはさんの声が僅かに曇る。

「平気、じゃあ無いですよ」

「だったら……」

「でも！ でも怖がって会わないでいたら……どんどん会いにくくなっちゃいそうで……」

「……」

「それにですね、せんぱい……今私のこと意識してますよね！ 申し訳ないなーとか、ちよつと思っちゃってますよね」

「……どつかで聞いたような話だが……その、まあ……な」

「なら、もう少し頑張らせて下さい」

「いやでも俺は……」

「迷惑……ですか……？ もう顔も見たくない、とか……」

「……そんな事は……無い。一色はその……あざとくて面倒くさくて……ちよつとだけ可愛い後輩だったのに変わりはねえよ」

「……か、可愛いって……」

「おま、何照れてんだよ馬鹿。ちよつとつて言っただろ。ちよつとだけだ」
「せんばいがデレました♪」

「デレてねーつつうの……。そもそも何しに来たんだよお前は」

「それは……じゃあ中に入って留美ちゃんと一緒に」

「なんだか二人の距離が近いなあ……。私は聞こえて無かったふりをして料理を再開した。」

* * * * *

「ということで、今日はわたしと留美ちゃんから、『卒業と入学の、それからついでに引越しのお祝いパーティーをプレゼント』です」

「なにが『ということで』だよ。いきなりすぎるだろうが……わざわざ引越し当日にやらんでも……」

「そのほうがびつくりするかなーと思ひまして。それにちゃんと小町ちゃんには許可をもらいましたよっ！」

「いやおかしいだろ。なんで小町じゃなく俺から許可を取らないんだよっ！」

「えー、それだとサブライズにならないじゃないですかー。わたし達にもお祝いさせて下さいよう。……奉仕部三人だけの打ち上げの時はお邪魔するの遠慮したんですからー」

「え、あの日お前用事有るとか言って……」

「もう……そんなの空気読んだに決まってるじゃないですかあ」

「あー……だからあいっらお前にありがとうとか言ってたのか……」

「はあ……今になって気付くとか鈍感すぎです……ま、いいですけど。せんぱいですし」
彼女は心底諦めたというようにガックリと肩を落としたため息をつく。

「それは悪かったな……」

「だいたいですね、せんぱい、もしわたしと留美ちゃんの二人でお祝いしてあげますからうちに来て下さいってお願いしてたらOKしてくれました？」

「却下だな」

「即答ですか!？」 「ええー、八幡ヒドい!？」

「あー……すまん。言い方が悪かったな。……その、嫌だつて意味じゃ無くてだな

……そういうのは苦手というか……だからその、今日はありがとな」

あ……八幡照れてる……。

「……ほんつと、めんどくさい先輩ですね」

「まあ、それが八幡だし」

いろはさんと私は顔を見合わせてニヤツと笑う。

「うっせーよ」

「ふふ……」

「じゃあせんぱいはお部屋でもうしばらくお待ち下さい」

さあ、料理の仕上げしなきゃ！

* * * * *

いろはさんと並んでキッチンに立つ。……なんだか久しぶり。去年の夏にみんな

で一緒にお菓子作った時以来……？

いろはさんは自分が持ってきた材料で何種類かのサイコロみたいな形の小さなサンドイッチを作ると、それを三個ずつ並べて焼き鳥みたいな感じに串（ピック）を刺していく。パンはたった今トーストして……具はベーコン入り卵焼き・鶏肉・レタスとか。

……いわゆるクラブハウスサンドかな。

私はその隣でからあげを揚げ、（と言っても私の定番、油が少なくて済む揚げ焼きだ）同時に隣のコンロに鍋をかけ、カレー用にあらかじめ別々に炒めて下味をつけた肉と野菜を合わせて煮込んでいく。それから特別な隠し味を入れる。ふふ。

このコンロは2つログリル付きのオーソドックスなタイプのもので使い勝手が良い。ちなみに私はIHコンロちよつとだけ苦手だ。一定の温度に保つたりするには向いてるんだけど、料理の火の通り具合を見ながら弱火とかとろ火に調整する時、炎が見えてるほうが分かりやすいと思うんだけど、他の人は違うのかな？

「留美ちゃん、ごはん炊くんだよな？ 料理、作り過ぎかな。あれもあるし」
いろはさんが冷蔵庫の方をちらつと見ながらそう聞いてきた。

「一応3合でセットしましたが、最初からカレーは残すつもりで多めに作ってますし……。八幡っ、ごはん残ったら後で食べてくれる？」

部屋の方に居る八幡に声を掛けて聞いてみる。

「おう、まかせろ。むしろ労働せずに食える食事に感謝するわ」

「だ、そうです」

「ぶ、相変わらずせんぱいはバカだなー」

いろはさんはお菓子作りだけじゃなく普通の料理も結構手慣れてて……腕というか手際の良さというかは私と同じくらい……かな。そんな風に思ったら失礼なのかもし

れないけど、似たような腕の人と一緒に料理していると気負わなくていいから安心する。
……正直、雪乃さんクラスの人の隣で料理するのってなかなかプレッシャーかかるんだよね……。

ちなみにお菓子作りの腕では、私はいろはさんの足元にも及ばない。去年彼女作の綺麗にピエが立った色とりどりの可愛らしいマカロンをうちそうになつた時にはなんだかちよつぴり悔しかったり……。今度教えてもらおうかな。

やがて料理も出来上がり、部屋のテーブルの上には所狭しと色鮮やかな料理が並ぶ。種類の多さとテーブルの広さの関係もあってカレーは小鉢に少しだけにした。

八幡は流石に男子らしくよく食べる。カレーも気に入ったらしく（元々少なかつたせいもあるけど）おかわりまでしてくれた。

「ね、八幡……このカレー、変わった隠し味が入ってるんだけど……なんだか分かる？」
「隠し味……？」

八幡は小鉢の底に残っていたカレーを一匙口に含み、じつくりと味をみている……。
「分らん。結構辛いのにさつぱりした甘みと酸味があつて……旨いってことだけは

解った」

「わたしも分かんないですー。……でもこの甘み……果物ですかね？ りんごとか」

「いろはさん惜しい！ ……かも。八幡は？」

「かも……？ いやもう降参だ降参」

「実はね……桃缶なの！」

「!!マジか………」

八幡が驚いて腰を浮かせる。

「うん。この前テレビで自衛隊の人たちが作ってるのを見て……調べてみたらけっこう沢山『桃缶カレー』のレシピがあつてびっくりしちゃった。これは白桃の実の部分だけ潰して入れてるんだけど……ふふ、私も八幡も結衣さんに謝らなきゃね……」

「おお、そういうえばそんな事あつたな……。いやあの時の由比ヶ浜は別にちゃんと分かつてて言ったわけじゃねーだろ？ 多分。知らんけど」

「えー？ 何で突然結衣先輩が出てくるんですかー」

「……ここでいろはさんがもつともな疑問を挟んでくる。」

「あはは、いろはさんには前に話したと思いますけど……六年生の時に林間学校行ったんですよ」

「確か……先輩と留美ちゃんが初めて出会ったっていう……」

「そうです、その時もカレー作ったんですけど……その、野外炊飯で。それでその時に結衣さんが……………」

そして私はいろはさんに、ほろ苦くも懐かしいその時の話をする。思えば結衣さんの「カレーに桃缶」の一言が八幡と初めて言葉を交わすきっかけだったんだよね……。

でも……あれからまだたったの一年半かあ。私の目の前に居る八幡はあの頃よりずいぶんと大人っぽくなったように感じる。……そうだよね、もう大学生になるんだし。

彼の目には私はどう映っているんだろう？ 少しは成長したと想ってくれているんだろうか？ ……それとも相変わらず子供扱いのままなんだろうか？

三人で和気あいあい？ と食事。みな一通り料理に手を伸ばしてある程度平らげ、空になる器も出てきた。

いろはさんのクラブハウスサンド美味しかったなー。表面サクサク具はしつとりで……サンドイツチなのになわざわざ食べる直前にトーストして作っただけのことはある。やや落ち着いてきたと見て、いろはさんが席を立つ。彼女は冷蔵庫から両手のひらか

ら少しはみ出すぐらいの大きさの箱を取り出してきてテーブルの真ん中に置いた。そして八幡の顔をちらつと見ながらゆっくりとふたを開ける。

中身は少し小ぶりでも可愛らしいサイズの生クリームホールケーキ。小さめの母がぐるっと縁を回るようにピツチリと並べられているのがおしゃれで、その分広く空いた真ん中の白い部分いっぱい、カラフルなチョコレートのデコペンで『せんぱい 卒業&入学 おめでとうございます！』と三段に書かれている。

可愛くって美味しそう。やっぱりお菓子作りの実力じゃあ完敗だなあ。

「それじゃあ、あらためてですけど、おめでとうございます！ せんぱい」
「おお、ありがとな。……すげえ美味そうだ。なんか店で売ってるやつみたいだな……でも……」

「むー、なんですかこれじゃ不満ですか」

「いや不満ってわけじゃないが……こういうのって普通名前入れるもんじゃないの？
なんでいつも『せんぱい』なんだよ……」

「は、なんですかもしかして口説いてるんですか俺のこと名前で呼べよアピールですか俺様ですか？ そういうのはちゃんと付き合って自分もわたしのこと名前で呼んでからにしてくださいごめんなさい」

出た！ 一色さんのお家芸。八幡は「お断り芸」とか言うけど……でもこれ、断って

も振ってもいないよね……。

それに私は、いろはさんの「せんぱい」呼びって何か逆に特別感があつて結構好きなんだけどなあ……。

「だからおま……いや……うん」

あれ、八幡の反応がいつもと違うような……。

お約束の「あざとい」も言わないし……なんか困ってる？

* * * * *

食事を終えた後、八幡は

「日中留守だった近所の方にもう一度ご挨拶に行つてみて、そのついでに管理棟の方に書類を出しに行つてくる」

みたいな事を言つて外出中。そう言えばご挨拶のお蕎麦まだ配り終わつてなかつた……。

「留美ちゃん、わたし……わたしも、伝えたよ」

いろはさんと二人で流しに並んで洗い物をしてたら、ぽつり、という感じに彼女が

言った。

「え？ それって……」

「うん。先輩に、わたしの気持ち」

そう……か。さつきベランダで話してたのって……あ、さつきケーキの時おかしかったのもそれでか。……でも私はどういう反応をしたら良いのか正直困る。

「あの、私、あの……」

「あ、なんか急にごめんねー。びっくりしたよね」

「………はい」

「わたし、留美ちゃんも先輩のこと好きなの知ってる。……でも……ううん『だから』かな？ ちゃんとっておきたかったんだー」

……まあ、バレてるとは思ってたけど、はつきり言葉にして言われると………なんか、こ
う……変にドキドキしてきちゃう。

いろいろさんはそんな私の顔を一度だけ見て……すぐ視線を外し、食器を拭く作業に戻り、少し力が抜けたような笑顔で続ける。

「先輩が結衣先輩と雪乃先輩の二人のことを大切にしているのはもちろん解ってる。

……でもあの人達は卒業まで答えを出さなかった。だから、伝えたの。卒業式の日」

「………」

「振られちゃいましたけどね。……今そういうの考えられないって」
「！」

「だけど先輩は……誰かと付き合ってるから、とか、違う人が好き、とは言わなかった。だから……これからは誰にも隠さないで頑張ってみようって思ったの。雪乃先輩にも、結衣先輩にも——留美ちゃんにも」

「私……にもっ？」

「うん、もしかしたらそれがきつかけになって何かが変わって……先輩はわたし以外の誰かと付き合っちゃうかもしれないよね。それでも仕方ないって……ちゃんと先輩が答えを出せるならそれでも良いって……」

いろはさんは言葉を探るように続ける。

「でも。でもね、せんぱいがそれでも答えを出せないくらい雪乃先輩たちのことが大事なら……わたしが逃げ道になっても良いかなって思ったの」

「逃げ道……ですか？」

どういう意味だろう？

「たぶん先輩が一番怖いのは……奉仕部の三人が、特に雪乃先輩と結衣先輩がバラバラに離れてしまうこと。だから……せんぱいが二人以外の誰かと付き合うとしたら……もちろん二人は悲しむだろうけど、でももし先輩の相手が、雪乃先輩や結衣先輩が少し

でも納得できる相手なら……先輩が付き合ってもおかしくないと思えるような誰かなら——きつと三人の絆は壊れない」

そう言つて彼女はもう一度私の目を真つ直ぐに見る。

「自惚れかもしれないけど……わたし達はきつともうそこまで来てるよ」

わたし達……。

「でもそれつて……八幡が本当に好きなのは……」

「うん、わたしじゃあ……ない。というか……好きの順番が三番目とか四番目とかそういう感じかなあ？」

「……いろはさんは……それで良いんですか……？」

付き合つてる人に、自分よりも好きな人がいる——それつて切なすぎるんじゃない……。

「うくん？ 二股男がどつちも選べずに三人目に逃げるとか最低ですね。……それに、逃げて来ても良いですよつて言う女はもつと最低ですね。……それに、

……でもそれでも良いつて、そばにいられるなら先輩にとつての本物じゃなくても良いつて……そう思えちやつたんですよね……」

いろはさんは、私に、というより……むしろ彼女自身に言い聞かせるかのようにそう言つて一度言葉を切り、

「今じゃなくて良い……いつか本物になれば良いつて」

最後にそう締め括った。

……いろはさんは私が想像もしなかつた未来を見てる。

果たして私に同じ覚悟が出来るだろうか。——想いを伝えて、「ただ言いたかつただけだから」と、満足してふりをしてごまかしてきた私に。

いろはさんは、私も「雪乃さん達が納得できる、八幡が付き合ってもおかしくない相手だ」みたいな事を言ってくれたけど、私はとてもそんな自信を持ってない。だって……『疑似恋愛の一種』『真っ向から否定されると意固地になる』『一過性の成長病のようなもの』

いくつかの認めたくない『言葉』が、フラッシュバックのように脳裏をよぎる。

* * * * *

あれは去年、五月の連休の頃——。

小町さんに誘われ、八幡たちの家に遊びに行った時のこと。

その日八幡は、午前中はしっかり受験勉強して、午後は息抜きも兼ねて小町さんと私を千葉に遊びに連れて行ってってくれる、という予定になっていた。……勝手にそう予定を決めたの小町さんだけどね……。

で、10時ごろ、お菓子と飲み物が乗ったトレーを一度部屋の入口の床に置くと、私はペットボトル一本だけ持って八幡の部屋にそうつと忍び込んだ。

何故つて……テレビのCMとかで、「いきなり冷えた飲み物をほっぺにピタツてくっつけられてびっくり。『こいつ何すんだ〜！』『きゃー』』みたいなのあるでしょ。あれを八幡とやってみたいくって……。

ちようど八幡も一息ついているところだったらしく、彼は机に肘をつけてぼーつとスマホの画面を眺めていた。いたずら心全開だった私は少し離れた場所からそうつとその画面を覗き見る。

何見てるのかな？ えっちなサイトでも見てたらからかってあげようと思ってただけど……。

淡い水色の背景。『思春期の女の子の疑似恋愛』『対応の仕方』という言葉が目飛び込んできて私は一瞬息が止まる。それって……。

……落ち着こう、落ち着こう、と部屋の入口までひとまず下がった。その時八幡が私の気配に気付いたようだ。

「ん……留美、か」

彼はさり気ない風をよそおって、手に持っていたスマホを机に伏せて置いた。

私はいかにも今来たばかりという態度で彼に言う。

「うん、10時過ぎたからおやつにしないかなって。……一応持ってきたけど……。どうする、下に行く？」

「サンキューな。……んー、じゃあ下に行くか」

八幡は結局スマホを伏せ置いたままにして私と一緒に居間に降りた。

その日は八幡と小町さんと三人で千葉で遊んで……すごく楽しかった。途中で小町さんは用事ができて帰っちゃって、急に八幡と二人になっちゃったりしたけど、それはそれで別の意味で嬉しかったり……。

——でも、あの時の、八幡がスマホで見てたモノがずっと心の端つこに引つかかったままだったんだ。

その日の夜。私は『思春期の女の子の疑似恋愛』を検索した。たくさんあるページを

次々に見ていくと……。

見覚えのある淡い水色の背景。八幡が見ていたサイト、だ。

そこには、色々な「疑似恋愛」の記事が集まっていた。

一言で「疑似恋愛」と言っても色々あるらしい。

「映画やアニメの登場人物、あるいはアイドルタレントなどに恋をする」

「妄想の中に彼・彼女がいる（脳内彼氏・彼女とか言うらしい）」

そして、「親族や学校の先生など身近な年上の男性に自分の理想を重ねて恋をしてる気になる」——これ、かあ……。

記事は雑多で、考察、体験談、周りの人間の対処法など様々な事が書いてある。

曰く、「疑似恋愛は誰にでも起こり得るもので、特に二次成長期に多い」

曰く、「一時的な物であることが多いので周りは振り回され過ぎないように」

曰く、「否定されればされるほどより意固地になるから注意」

曰く、「二種の病気だと思って対応しろ」

曰く、「肯定も否定もせず、話だけは聞いてあげていたらそのうち落ち着いて」

曰く、「教え子から熱烈に告白され真剣に悩んでいたが、一年ほどで治まってあっさり

同級生と付き合い始めた」

曰く、曰く、曰く……。

八幡は……私のこと、どう見てるんだろう……。

* * * * *

あれからかな……八幡と距離を詰めるのに臆病になって、つい現状に満足しちゃおううになったのは……。

八幡は確かに私を近くに置いてくれてるけど……近くに居て欲しいって思ってくれているのかな、とか、もしかしたらあまり否定すると厄介な事になるかもしれないからと仕方なく相手をしてくれてるだけなのかも……とか、そんな風に思考はぐるぐると回って渦を巻き、心を、想いを淀みの中へと飲み込んでいく。

ガチャリと玄関のドアが開いて八幡が挨拶回りから戻ってきた。

「悪い、ちよつと遅くなつたな。……そろそろ時間だろ、駅まで送るから支度しろ」

靴も脱がずにそう言った八幡の向こう側、ドアの外に見える風景はもうすっかり暗く

なつてしまつていた。

日中、スーパーに買い物に行つた時には、「もうすっかり春だなあ」と思わせるような暖かさだつたけれど、この時間になつてみれば、やはりまだ3月の夜は肌寒い。それでも日は日々確実に伸びていて、7時を回つたこの時間でも西の方の空にはほんの僅かに明るさの余韻が残っている。

八幡の左隣を歩くいろはさんが微かに白い息を吐きながら、

「せんばーい、さくむくいくでーすー。ちよつと手え貸してください」

と言つて八幡の腕をぐいぐい引つ張る。どうやらジャケットのポケットに突っ込んだままの手を引つ張り出そうとしているようだ。

「何だよやめろ、服が伸びる。あと俺が寒い」

「ええー、せんばいは自分が送つていく女の子が極寒の中で震えているのを見捨てるんですかー」

「何が極寒だ。だつたらその短いスカートやめろ」

「もう……先輩つてばどこ見てるんですかー」

いろはさんはわざとらしく両手でスカートの前裾をキュツと掴んで八幡を上目遣いで見上げる。彼女のこういう仕草には……女の子の私でもついときりとさせられる。当然、八幡にも効果てきめん。傍から見ても笑っちゃいそうになるぐらい動揺して

「ど、どことか……なにも見てねーし」

「なら、はい」

そう言つて彼女は八幡に右手を差し出す。

「いや、その理論はおかし……」

「はい、」

「……ほれ」

いろはさんの攻撃の前に、八幡は諦めて左手をポケットから出す。ほんと八幡の扱いというか……甘え方が上手いなあ。

そんな風に思っていると彼女は八幡の手を流れるような動きで自分の方に手繰り寄せ、指を絡めるようにして手を繋いじやった！ え、それ……ここ、恋人繋ぎ……とかいう……。

「おい……」

八幡が慌ててほどこうとしたようだけど、いろはさんはどこ吹く風といったふうで

ガツチリ握って放さない。それどころか、

「ほら留美ちゃん、せんばいの右手空いてるよ！」

なんて私にまで振ってくる。

「でも……」

それは私だつてこんな風になぎたいし、目の前でわたし以外の女の子と八幡が手を繋いでるのは——たとえ無理やり繋がされたところを目の前で見ててももやもやする。

けどだからこそ、こんなふうに八幡の意志じゃなく手を繋いでもらうというのには気が引けるというか……。

するといろはさんは、目を細めてちよつとドキツとするような低い声で言った。

「ねえ、留美ちゃん。……いいこと教えてあげるね」

「いいこと……う？」

「せんばい、卒業式の予行演習の日の帰りに、雪乃先輩と結衣先輩と……今みたいに三人で手を繋いで歩いてましたよねー。あの二人だけなんてずるいですよー」

「ちよ、お前どこで見て……。在校生は授業中だつたはずだろ……」

「ふっふっふー。わたしは誰かさんのせいで生徒会長やらされてるので、あの時はそっちの仕事してたんですよ。……そしたら、渡り廊下の窓からバツチリ」

「いや會長つて……。一年目は確かに俺のせいかもしれないが、二年目はお前自分で……。それにあれば、『今日が部室使える最後の日だから』つて由比ヶ浜が……。て、何を言い訳してんだよ俺は……」

八幡はなんとも情けない顔して頭を振つてる……。けど……。

ふうん……。八幡、雪乃さんと結衣さんとお手手つないでイチャイチャしてたんだ……。ふうん……。

私は彼がいろはさんと繋いでる手の反対側——右の腕を引っぱり、そのまま右手を上着のポケットからぐいと引き出した。

「な……。おい留美？」

「い・い・か・ら・！」

びつくりしてる八幡を無視して、私はいろはさんと同じように指を絡めて手をつなぐ。こんな風に指を絡めるとすごくよく分かる、がっしりとして大きな……。男の人の手だ。

私はこの手に触れていると嬉しくて、他の女の子がこの手に触れているのを見たり聞いたりするのは嬉しくない。——我ながら単純すぎるよね、まるで小さい子のやきもちみたい……。

「……おまえらな……………」

左にいろはさん、右に私という二人に両手を絡め取られて八幡はひどく落ち着かない様子で、あからさまに目が泳いでいるし……ちよつと顔も赤い？

「ふふ、なんで嫌そうな顔してるの？ 八幡」

「そうですよー、両手に花、しかもこおんな可愛い娘二人に挟まれてて、一体何が不満なんですかー」

そう言いながら私たち二人は八幡の手を握ったまま、くるりと軀を半回転させて彼の前に回り込み、下から覗き込むような上目遣いで八幡を見上げた。

「あいな、周りの目とか少しは……」

ふふ、確かにすれ違う人たちが私たちをチラチラ見てるけど……別に悪いことしてて訳じゃ無いと開き直ってしまえば案外平気なものだ。

八幡は一瞬私たちと目を合わせ……恥ずかしそうに、視線だけでも上に逃がそうとするかのように空を見上げた。

彼の視線を追うように私も空を見上げれば、今度こそ日は完全に暮れて空は夜の色に変わっており、街の灯りは一際鮮やかさを増しているように感じられる。

八幡の見上げる先には……もしかしたら雪乃さんや結衣さんの姿が映っているのか

もしれない……なんて、考えすぎかな。

みんながみんなを思いやって……でもそのせいで停滞してしまっていた私達の気持ち。

……いろはさんが覚悟を決めた今、きつと何か動き出す。

私の気持ちは——みんなの気持ちは……どこに向かうんだろう。

ビルの谷間から時折姿を覗かせるスカイツリーは、美しくライトアップされて煌々と輝いているけれど……空に行き着く展望台の先は、上空のもやに隠れてぼんやりとしか見えなかった。

* * * * *

「……………あの時はそんな感じでさ、その後少し悩んじやったりもしたんだけど……。ね、絢香、泉ちゃん……。私……。私は、それでもやっぱり八幡と一緒に居たいって気持ちには変わらないんだ」

どうにかそこまで言って一度言葉が途切れてしまった私を、二人は何も言わずにただ待っていてくれる。

「けど……私やいろはさんが八幡にとつての……偽物、なんだとしたら——このまま当たり前みたいに傍に居るのは……それでいいのかな、正しい事なのかなって……」

「留美ちゃん……」

泉ちゃんは両手を口元に当て、目を潤ませて私を見つめる。

絢香は私の目をじいっと見た後、何故か両手に一本ずつそこにあつた絵筆を握り、私たちに背を向け窓際に立つ。

絢香……？

彼女はそのまま肩幅に足を開いて胸を張り、両の腕をわずかに開くように構えた。

「偽物……か」

絢香が左の肩越しに顔だけ振り向くと、肩の上辺りの高さで無造作に括られている髪がさらりと揺れた……。彼女は鋭い表情で言葉が続ける。

「だがな、偽物が本物にかなわないなどという道理はあるまい？」

わざとらしい、低い作り声でそう言い放つ。……無駄に格好いいなあ絢香は。

「ぷ、絢ちゃんそれ中二病すぎでしょっ」

泉ちゃんに突っ込まれた絢香は、しかし悪びれもせず、筆を持ったままの左手で器用にさつと髪をかき上げるとそのまま掌で左目を隠すようなポーズをとり、

「ふッ……あたし、ガチで中2ですが何か？」

とドヤ顔で言い放つ。

はあ。……そりや確かに私たちは中学2年生だけどき……ほんと絢香はブレないなあ。

でも。

……それでも私は絢香の言葉に、肩越しの視線に——心の中を射抜かれたような気がした。今の一瞬の絢香からは何か……上手く言えないけど決して冗談だけを言ってるわけでは無い……言い方が合ってるかどうかは分からないけど、「凄み」みたいなものを感ずる。

「ね、留美？」

絢香は真剣な、けれどどこか遠くを見るような顔になって言葉を続ける。その声は直前のそれとは打って変わって穏やかだ。

「うん……」

「偽物って言うけど……、比企谷さんにとっての留美が例えば『偽物』だったとして……なら、留美にとつての比企谷さんも『偽物』になっちゃうの？」

「……っうー！」

ガツンと、心を直接殴られたような気がした。——私にとっての八幡……。そんなの、そんなの決まってる!!

「——本物、だよ。……上手く言えないけど、本物……本当の……唯一人の——特別な人」

「……へへ。なら、留美が本物にしちやえばいいじゃん」

そう言つて絢香は親指を立てて笑う。

「いろはさんも……もしかしたら比企谷さんも、偽物だ本物だ言つてんのかもしんないけど……そーゆう『偽物』つて別に偽札とか替玉とかじゃやないんだから、結局本人の心が決めるものでしょ。なら……さ、いろはさんが言つてる通りなんじゃない？」

「……………」

「最初は偽物とかでも関係ないじゃん。二人の気持ちがいつかその、『本物』つてやつになれば……きつとそれでいいんだよ」

「うん……。絢香つて……なんかすごいね」

いつも変なことばっかり言つてる彼女だけど、今の言葉にはひどく重みが有つて……私と同じ年の子の言葉とは思えないくらいだ。

泉ちゃんは

「うんうん……。人間関係の本物とか偽物とかかって、要は本人の気持ち次第つて事だよ

ね。なるほど〜」

はあー深いねー、なんて、こくこく相槌を打ちながらなんだか妙に納得している。と、
「……………あたしも、おかーさん大好きだし……………」

絢香がふと洩らした小さな声が聞こえてしまった。

「……………お母さん？」

「え……………ああ、うん何でも無い……………」

口調はさり気なく、けれどあからさまに「しまった」という顔を見せた絢香。私はそれ以上何も聞けない……………聞かない。

でも……………彼女が言ったとおり、だ。

八幡の気持ちを考えて……………つていう事もきつと大事なことで、意味がないことじやないのはもちろん当たり前なんだけど、だからって私の気持ちを否定するのは違うよね？

——うん、私は八幡が好き。だから一緒に居たい——きつとそれで良いんだ。今は八幡に「疑似恋愛」とか思われてるとしても……………たとえ一番には見てもらえないとしても。

「でもさー留美ちゃん」

いろいろ考えてぼーっとしてしまっていた私を泉ちゃんの声が現実には引き戻す。

「ん？ ぞしたの泉ちゃん」

「こうなると……もしかしたらいろはさんが最大のライバルになるって事もあるんじゃない？」

「あー……うん。……いやえーと、うん？」

「ぷ、何ソレ？」

「何ていうか………」

どう説明したら良いんだろう……ずっと八幡を近くで見えてきた私たちだけが理解する事。——雪乃さんと結衣さんはやっぱり八幡にとつて特別の中の特別で……。いろはさんや私がそこまで行くのは簡単なことじゃないと思う。……でも……うん！

「絢香、泉ちゃん。……私、頑張ってみるよ」

そうだ。うじうじしてたつてなんにも変わらない。ただなんとなく八幡のそばにいられてるだけの今の状況に満足してないで、——雪乃さんと、結衣さんと……それにいろはさんとも、もちろん自分自身の気持ちとも向き合つて……ちゃんと向き合つて——頑張つてみよう。

——少なくとも、私自身が「八幡の傍にいても良いんだ」つて納得出来るくらいには。私の宣言を聞いた絢香と泉ちゃんは大きく頷き、何故か二人で「ぱあん」とハイタツチをして嬉しそうに微笑つた。

鶴見留美は未来に迷う③ 私の進路希望調査票

「あ。そーいえば留美のクラスって、進路希望調査票、だっけ？ あれもう提出した？」
「ううんまだ。……でも提出期限来週中なんだよね。私、なんて書くこう……」
「まあ、でもまだうちら二年だし、大雑把でいいんじゃない？ 職業なんか適当に書く子も多いし、志望校だって何が何でもそこ受けなきゃいけないってわけでも無いじゃん」
「うん、それはそうなんだけど……さあ」

今日も今日とて美術部室（美術準備室）で放課後会議——というかただお喋りしてるだけ。こんなにしよっちゅう部室に来ててどこが幽霊部員だよ！ という声が聞こえてきそうだけど、ここ最近の私と絢香は毎日のように顔だけは出している。

だからといって、大半の日は美術部員らしい創作活動をするわけでもなく、少し話をして帰るだけ。理由は……その……友達と遠慮なく話がしたいから。

……別に小学校の時のようにクラスでハブられていたりという訳じゃない。ただ、ちよつと……ほんのちよつとだけ「浮いている」かもしれない。

去年同じクラスだった絢香とクラスが別れてしまったのが個人的にはけっこう痛かった。

今のクラスにもそれなりに親しく話す子がいないわけでは無いんだけど……。私の心は「だからその子たちとなんでも話せる友達になろう」とはなってくれないのだ。

なんていうか……。波長が合って大事な事でも相談できる、そして私と考え方が違ってズバズバ意見を言われても素直に話ができる、そんな得難い親友たち——絢香や泉ちゃん——と、どうしても比べてしまう。

例えばクラスの中ではよく話す、比較的仲のいい娘は三人くらいいるけど、じゃあその彼女達に八幡とのことを相談できるかと言えば……。やっぱり無理だ。

だったらそれが出来るようになるべく自分で彼女たちとの距離を詰める努力をすればいいんだろうけど……。私は未だに自分の壁を壊すことを怖がっている。

これは一昨年の後遺症かな？

昨日まで親しく話していた「友人たち」から一斉に無視されるというあの絶望的な感覚。そして——それを感じて初めて理解った、かつてその同じ行為の加害者側の一員だった自分の罪への恐怖。どっちの感覚ももう懲り懲りで……。

そんな私自身の心の持ちようもあり、それともう一つ、私がかくたまにだけモデル活動をしているという話が校内ではそこそこ有名になってしまっている、というのもある。

りで、そのせいか……なんとなくクラスメイトからは遠巻きにするように距離を置かれている、みたいな感じなんだよね。

さらに困ったことに（というか困らないことに）私はこの状況をちよつと寂しいとは思いつつも、同時に面倒くさい人間関係に関わらなくて済むという事にはほつとちやつてもいるんだ。

そういう意味では……言いたくないけど私はクラス内では「ぼっち」なのかも……。
……ふふ、いいや。なら私は「正しいぼっち」で構わない。

ただそうは言っても……さっきの進路調査票の話に戻せば、私はクラスの友人に「進路希望、なんて書いた？」みたいに気軽に聞いたり聞かれたりする関係を築けていないわけで……。

だからここに来ればそういう話が出来てホツとできる、と。

まあとにかく、絢香が言ってるのはその通りで……進路希望調査票で何かが決まってしまうわけじゃない。

二年生に学年が上がって最初の進路調査なんて多分形式的な意味合いが強いもので、新しい担任の先生とかに「自分はどの辺りのレベルの高校を希望しています」みたいなことを伝えるだけのものだろう。

あとはそれと、来週早々に行われる「学力テスト」（成績には関係ないと説明されている）の結果を合わせて進路指導が進められる、というだけの話だ。

『要は学校側が生徒を管理しやすくするためのデータ集めみたいなもんだからいちいち悩むようなもんじゃ無い。取り敢えず自分の今の成績に見合った志望校を……公立と私立一つずつ書いておけば、向こうも安心して余計な呼び出しとか指導とかしてこないから無難なところを選んでおけばいい。志望校なんて後でいくらでも変更が効く』

……なんて、今のは八幡の受け売りだけだ。

確かに八幡みたいな捻くれた考え方じゃ無いにしても、「適当に書いておけばいいや」って思ってる子たちも結構いるんだろう。ただ……。

「泉ちゃんは……やっぱり……」

「うん、職業の方は『画家』か『学芸員』だから第一志望はここだよ」

そうはつきりと言って彼女は鞆から薄い冊子を取り出す。

『学校法人 山吹高等学校 美術専門科・普通科 ○○年度入学案内』

泉ちゃんの口からすでに何度も聞いている学校名。薄い黄色地に赤とオレンジの幾何学模様を配し、そこに縁取られた白の文字。入学案内にしては派手な色合いで、けれどもセンスの良さを感じさせる表紙。流石に美術科で有名な学校だけのことはある。

「……泉、それいつも持ち歩いてるの……？」 だいたいそれ去年のでしょ。うちらが受

験するのって……」

「う……。いいでしょ別に。なんかこう……モチベーションっていうか、その」

絢香に突っ込まれて泉ちゃんはちよつと恥ずかしそうな顔をして……。だけど、話を引つ込めたりはしない。

「この表紙素敵でしょ……。これ、去年の卒業生がデザインしたんだよ」

「え、高校生のデザインなの!？」

思わず入学案内の表紙を二度見してしまう。言われなければ——ううん、言われてもそんな風には見えない——素人目に見ても洗練された構成の表紙。これを高校生が……。

「この先輩は今、○○美大に通ってるんだって」

「へー、○○美ならあたしも名前だけは聞いたことあるな」

うん、私も知ってる。日本でも一二を争う有名な美術系の大学で、確か東京都の西の方……神奈川寄りのほうにあって、東京とは思えないほど田舎——じゃなくて、そう、自然が豊かな環境——らしい。

実はユキ先生がこの美大の出身なんだよね。「近くに遊べるところが全然無かった」って文句言ってたっけ。

「山吹高校って○○美大から電車で15分位の所にあつて、学校行事とかで結構色々な

交流があるんだって。実際山吹から○○美に進学する子も多いみたいだし、それにお祖父ちゃんのお弟子さんが○○美で先生してて……その先生わたしもすごく尊敬してる人なんだよね。日本の洋画界に次々に新しい事を取り入れる革命児、みたいに言われて。だから、できればその先生に教わりたいな……なんて……あ、なんかごめんね」

入学案内のパンフレットを胸に抱くように持つて夢中になって話していた泉ちゃんが我に戻って申し訳なさそうな顔をする。

「いやそれは気にしなくていいけどさー、泉?」

「な、何? 絢ちゃん……」

「ふっふっふー。今、泉……この表紙書いた人のこと『先輩』って言ってたよ? もう合格したつもりかね?」

絢香はニターッと意地の悪い笑みを浮かべる。

「え、ホント? そんな事言って……言ったね……。でもわたしそんなつもりじゃ……」

「あはは。ごめんごめん冗談だって」

うるたえる泉ちゃんに絢香が両手を合わせて謝る。

「……でも、こーこー、通いたいな」

泉ちゃんはそうぼそりと言ってパンフレットを握る手に力を込めた。

「うん……」

「実は、ね」

「ん？」

「わたし、去年『こども二科展』っていうので入選して……、その時お世話になった先生から『来年は二科展本撰の方に応募して見ませんか』って言われてるの。もしここで結果出せれば——山吹高の特別推薦枠か……もしかしたら特待生枠ももらえるかもしれない」

「おおつ、凄いいじゃん」

ホントに凄い。こども二科展で賞獲ったのは知ってたけど、そんな風に期待されてたんだ……。まあ不思議じゃ無いかもしれない。泉ちゃんは謙遜して入選って言ってたけど実は『特選』だ。それに彼女のお祖父さんが「故・藤澤誠司」だということは美術の関係者なら当然知ってるだろうし。

「うん、だから今年は頑張ってみようと思う」

「頑張るって……今回もやっぱり油絵だよ。大きいやつ？」

「今回は60号に挑戦してみようと思うの」

「ををつ!! って言ってるんだけどごめん。号数で言われてもわからない」

「絢ちゃん……あなた一応美術部員……」

「はは……」

「でも私もわかんないかも。ここで書いたり見たりしてる10号くらいまではなんとなくイメージ湧くけど、60号って言われると流石に……」

絢香が書棚に置いてあった美術教材・画材のカタログを手にとってそのページをパラパラとめくる。

「お、あつたあつた。……60号……長辺が1, 303 短いほうがF型で970、Pで894ミリかあ」

「うん、枠の大きさまで入れると、だいたい縦1. 5メートル、横1メートルちよつとつて感じかな」

「1. 5メートル……で……横が……こんくらい?」

絢香が空中に手で大きな四角を描く。

「わ、けつこう大きいね……。ここで描くの?」

「まだ考え中。流石に一度描き始めたら簡単に持ち運びつて訳にはいかないし……。今はスケッチいっぱい書いてるところ」

「そか、頑張つてね泉ちゃん。何も出来ないけど応援するから」

「うん、ありがとう留美ちゃん」

「でも……合格したら……流石にここからは通えないよね」

千葉県から東京に通う大学生なら知り合いにいて……でもI市から23区内の旧都心辺りに通うのと、この千葉市から神奈川県寄りの郊外に通うのでは距離もかかる時間も違う。

泉ちゃんが近くにいなくなってしまうと考えると、ただでさえ親しい友達の少ない私としては寂しい思いもあるけど……。

「あー、そつか。まだ気が早いけど、寮に入るとか？ それともまさかの一人暮らし……？」

「それが……お母さんそれなら自分も引越すって……」

「え？ 泉ちゃんだけじゃなくお母さんも一緒に？」

「うん。新宿に出るならこつちからと時間あんまり変わらないんだって。 ……あくまでもわたしが合格したら、だけどね。もしかしたらその先〇〇美に進む事になっても便利だからって」

泉ちゃんは、志望校さえ決められていない私には想像もできないくらい自分の将来をきちんと見据えてる。こういう子が身近にいと、将来のことを考えるのはまだ早いん

じゃないかなー、と頭の中では思っているけど、どうしようもなくジリジリと心を焦がす……焦燥感って言うの？ そんな感情が沸々と湧き上がってくる。……「私は」このままでもいいのかなって。

私は……子供のころから、格好良く仕事をしてるお母さんに憧れて、ファッション誌の編集とかの仕事をやってみたいと思っていた。今はその勉強の一環としてユキ先生に色々教えてもらったり、モデルの真似事までさせてもらっている。

でも……元々本を読むのが好きで、八幡の影響もあって更に本が好きになった私は、編集に限らず本に携わる仕事——例えば図書館の司書さんとか……も悪くないかな……なんて風に色々と気持ち揺れ動き始めている。

ちなみにモデルに関しては……将来の仕事としては目指していない。

だいたい、私がモデルをした服はユキ先生がデザイナーとして所属している大手の会社のものじゃなく、あくまでも彼女の個人ブランド「Fairy Wings」のもの。これが正直少々特殊な分野の服で、一般的にモデルと言われている人が着る服とはちよつとイメージが違うかも。

私がいま本気でモデルを目指すつもりなら、これを足がかりによりステップアップした仕事を……ってことにもなるんだろうけどね。

もちろんモデルの仕事も新鮮な体験が出来て楽しいし、機会があれば経験させてもら

えるのはありがたいと思ってるけど……ただどうやら私の身長は150センチ台後半で落ち着きそうだし……その……今のところあんまり胸も大きくならなそうだし……はあ………。

ま、まあそういう理由もあって、そもそも本格的にそっちの道に進むのは厳しそうだしなあ。

「そういえば……絢ちゃんは今進路希望、なんて書いたの？」

泉ちゃんが思い出したように絢香に聞いた。絢香は……将来は和菓子職人を目指したいみたいな事をずいぶん前から言ってたけど……。

「ん？ あたしは当然職業の方は菓子職人。でもね、とりあえず普通の高校に進学って書いたよ」

「あれ、でもこの前……」

「うん……調理師学校か製菓専門学校で資格とって、あとは家か知り合いの店で修行したいって親に相談したらさく、『絢香、あんた今の時代高校ぐらい出とかなくてどうするの』って。あたしは逆に今の時代だからこそ早く資格とって手に職付けたほうが良いと思っただけどねー」

「進学ってことは……」

「とりあえずだけでも第一志望は総武高にしといた。あと一応書いたのは△△女子」

「え、総武?」

「うん、だって近いじゃん。通うの楽だし部活やらなければうちの手伝いもしやすいし」
絢香は「将来希望する職業が『菓子職人』で志望校が総武って訳わかんないけどねー」と付け加える。

「近いから」って……公立とは言え県内有数の進学校をそんな理由で……。

でも、絢香はそう言えるだけの成績を取ってるんだよね。一年生の時の学力テストの順位だけで言ったら学年総合で二位から五位の間をずっとキープしてたし。

彼女はそれほど長時間勉強してるってわけじゃない。予習は教科書にさっと目を通すだけ。授業は集中して受けて……そして復習、授業中とったノートを読み返すだけ……らしい。それだけであんな成績が取れるものなのかなあ……。

でも確かに、去年一年同じクラスにいて、彼女が授業中以外に勉強してるところってほとんど見たことがないし……。

「じゃあさ、留美も第一志望、『総武』にしとこうよ。そしたら高校も一緒のところに行けるじゃん。留美ん家なんか特に近いから朝ゆつくり寝てられるよー」

「簡単に言わないでよ……。絢香の成績ならともかく私じゃ……」

一応言っておくと、私も成績は悪いわけではない。学年6クラス、約200人の中で

常に30位以内には入ってる……けど、うちの学校から本気で総武高を目指すなら最低でも上位10人くらいの中には入ってないと厳しいだろう。少なくとも朝ゆつくり寝れるという理由で受験する高校じゃない。

「だからー、あくまで志望校じゃん。どうせなら目標は高くっ！」

「うん、わかってるよ……」

そう言いつつも私は自分自身なんだか納得出来なideいた。

「だって、総武高って……簡単じゃないでしょ。公立落ちたらお母さんたちにも負担かけるし」

「うーん？ ……つまり留美は、成績が良くなりさえすれば総武行きたいって気持ちはある、ってことでファイナル・アンサー？」

絢香は半身になって両手のひらを上に向けて腕を軽く上げたポーズを取り、首を傾げて聞いてくる。

「……それは……行けるんなら行きたいけど。いい学校だと思うし——八幡が通った学校だし。」

「え、その……ふあ、ファイナル……アンサー」

私がそう答えた瞬間、絢香の目がキラーンと効果音を立てて光ったような気がした。

「ほほう。なら、さ、……」

「え、でも……………」

「まあまあ、まずはお母さんに……………」

「絢ちゃんそれいいね！ だったら……………」

「……………」

「……………」

* * * * *

「要するに、だ」

私の支離滅裂でまとまりもない話を聞き終えた八幡が一つ息を吐いてから言葉を発する。

ここは東京の東の端の方、その気になれば歩いたって千葉県にたどり着けるだろうなという某駅の近く。改札を出てすぐの雑居ビルの一階にある喫茶・軽食のお店。

ユキ先生のオフィスに近いこの店は、外観もインテリアも、それにカップやお皿など

の食器に至るまでアンティーク風の調度で整えられていて、お洒落で居心地が良い場所だ。

この「アンティーク風」というのがポイントで、質のいい物ではあるんだろうけど、本物のアンティークを使ってるお店ほど敷居は高くなく、メニューに表示されている値段も意外なほどリーズナブル。

普段はお母さんやユキ先生と来ることが多いお店だけど、今日は学校帰りの八幡に途中下車してもらい、お母さんの仕事帰りを待つ間にここで例の——私の進路の相談に乗ってもらっている。

「——留美は、子供の頃からずっと言ってる目標以外の進路を考える事に抵抗がある、と」

「……そう、だね……」

言葉にしてまとめるなら確かにそういう事になるのか。

「それに、まだはつきり『これ』って考えてるわけじゃないよ。さつき言った司書さんって言うのも例えばの話で」

「なら、まだ何もかも迷ってるって事か。なんつーか……その段階でそこまで悩む必要有るのか」

「……悩んでるっていうか……、お母さんとか、ユキ先生とかになんだか申し訳ないっていうか……色々応援してくれてるし、それに今教わっていることも嫌々やってるわけじゃないし」

「じゃあ、しばらく迷いますって答えて良いんじゃないかねーか？」
「!？」

「そう書けつてことじゃなくてだな……『まだ将来について決められないので、迷う時間を延長するために進学する』みたいな感じで考えてみるよ。……学生時代はモラトリアムとも言われてる事だしな」

「もらとりあむ？」

「まあ、厳密には言葉の本来の意味とは違ってるんだが……猶予期間——先送りおけーの期間、みたいなニュアンスだ」

「先送り、かあ……そんなんでいいのかなあ？」

「留美……何を焦ってるのか知らんが、お前が自分で言ったように、中二で将来の目標をはっきりと決めてるやつなんかそう多いわけじゃない。色々なものを見て、むしろ選択肢を拡げていく時期なんじゃないのか？」

「そうかもしれないけど、でも……泉ちゃんも絢香ももうはつきりと自分になりたいものが決まってる……」

「たまたま親しい友達が二人そうだったただけだ。忘れてるかもしれないが、俺なんか中二どころか高二の時の進路希望が『専業主夫』だったんだからな……」

「あ……」

そう言えば……最初の頃はそんな事言ってたなあ。

「さらに言えば今の俺だって、ようやく本気で勉強したいことは出来たが……その先の目標まではつきり決めてるわけじゃない。将来に悩んだり、目標が変わっちゃったりなんて珍しいことじゃ無いし、むしろ留美くらいの歳なら当たり前のことだろ」

「……うん」

「だから、それをじっくり考えるために学生時代がある……んだと思うぞ、俺は。いや将来のことなんか全然考えずにウエイウエイ言ってる奴らも中にはいるとは思うが」

ウエイウエイ……って。

「ただ……留美が今考えてる雑誌の編集者も図書館の司書も、それなりに競争率が高い……なりたいてだけで簡単にはなれない仕事だったはず、だ。まあ俺もそれほど詳しいわけじゃないが」

「う……それは……」

「だから……とりあえずは勉強頑張つて、いわゆる良い高校・いい大学を目指すつてのもありかもしれない。学歴社会の功罪というか……これで良いのかつてのはひとまず置け

ば……少なくともある程度レベルの高い大学に進学しておけば、その先での選択肢が広がるというのは確かだしな」

いわゆる「良い高校・良い大学」への進学を目指すつもりなら……この辺りならやっぱり総武高校だよ。いやでも、公立は日程が決まっているから何校も受けられないし、普通なら高い確率で合格できそうな高校を受験したい……今までならそう考えてた——でも。

「ねえ、八幡。私が総武高受験したいって言ったら……無謀かな？」

「なんだかんだで八幡には私の成績のこと話してはある。その彼から見てもどうなんだろう。」

「まだ二年になったばっかりだし、今から頑張れば無謀なんて事はねえだろ」

「ほんと？」

「そこまで構えるほどたいした高校じゃねーよ。なんせ由比ヶ浜が卒業出来たんだからな」

「八幡ヒドい……」

「けど……」

「うん？」

「友達が行くからって理由なら止めておいたほうが良いぞ」

彼は少し真剣な顔になってそう言葉を続けた。

友達——絢香の事か。それは……彼女と同じ高校に進学できるなら確かにそれは嬉しいけど……。

「違う、よ。……そういう気持ちじゃ全然ないって言ったら嘘かもだけど、今八幡が言ったみたいに、将来の選択肢が広がるなら、つて。それに、私が八幡の……総武高校の後輩になれたらなんだか嬉しいってのもあるし」

「嬉……だからそういう理由は……まあ制服は似合いそうだけだな……」
「え？」

「あ、いや何でも無い。……そのなんだ、本気で総武目指す気なら少しくらい勉強見ても良いぞ」

八幡は何故かちよつとだけ照れたみたいな顔でそう言ってくれた。

……ふふ、言ってくれた。確かに言った！

「八幡！」

「お、おう？」

急に強い口調になった私に八幡は目を丸くしている。

「今、勉強見えてくれるって言ったよな」

「……確かに言ったが……急にどうしたんだ？」

「だったら……だったらさ、私の家庭教師してくれないかな？ もちろんアルバイト代はきちんと払うから」

「あのな、少し勉強を見るぐらいでお金なんか……」

「少し、じゃなくてちゃんと勉強見てほしいの。同じ勉強頑張るなら中途半端にはしたくない。一生懸命頑張って……本当に総武高校に行きたい」

「……だったら余計俺なんか頼むよりきちんとしたプロの家庭教師を頼んだほうがずっと……」

「八幡がいい。……八幡が教えてくれるなら、きっと私はどこまでだって頑張れちゃう、から……あ……う」

言いながら、私は思わずテーブル越しに、継るように八幡の手を握ってしまった。暖かくて大きな八幡の手。意外にがっしりとした、好きな人の……手。たまに手をつなぐことはあるけど……だからってその時その時、いつだってドキドキしないわけじゃない。

流星に自分の言動があまりにも恥ずかしくすることに言ってる途中で気が付き、後半の声は些かトーンダウン。ついでに手の方もそうとずらして彼の上着の袖に持ち替えた。

うう、きっと私赤くなってる……。それでも私は彼の服の袖をキュツと握って、真剣

な目で八幡の顔を見上げる。

私の目をまじまじと見返して——一瞬呆けたように固まっていた八幡は、我に返ると慌てたように私から目をそらし、

「あ……いや。だいたいこういう話は親御さん抜きでするもんじゃ無いだろ。まずはご両親の許可をもらってから……」

「もうお母さんには話してOKもらってる」

「は？」

ふふ、八幡びつくりして固まってる。

「八幡、時間の自由が効くバイト探してるんでしょ？ 『週に一回か二回、お互いに都合の合う時間にあわせて一回あたり二時間程度。一回につき〇〇円という条件ではどうかしら。もしよかったら一度改めて面接しましょうか』ってお母さんが……」

「待て待て？ 家庭教師の話は今出たばかりだろ。なんでもう親の許可とか取ってるだよ？ だいたいバイトの話とかどこで……、あく……小町のやつか……」

正解。諸々の情報源は小町さんです。

「私だつて色々と考えてるの！ 将来の夢を変えちゃうかもしれない事には今も抵抗あるし、八幡がさつき言ってくれたみたいな事までは考えてなかったけど……それでも目の前にある『進学』のことはやっぱり気になるし……今みたいに、不規則に東京通いな

がらだと塾とか曜日の決まった家庭教師さんは難しいんだ。……だから、今日は最初から家庭教師のことはお願いしてみようと思ってたの」

「だからって……」

「八幡なら……八幡の大学とかの都合に合わせて……私の家でも、お母さんの事務所の端っこでも八幡の家でも良いし……あと、ユキ先生のところも開いてる日なら使ってもいいよって言ってくれてるし」

「でもなあ……って留美お前さらつと俺の家って……あそこで二人つてのは色々和不味いだろ……」

「なんで？ 引つ越しの時は二人だったでしょ」

後からいろはさんも合流したけど……。

「あれは……ほんとは小町も来てくれるはずだったんだよ。けど……なんか前の日になつて急に用事が出来たからって」

「え、そうだったんだ……」

あれ……？ あの時小町さんからは、

『小町が手伝いに行つちやうと妹離れの出来ないダメダメな兄が小町をお家に帰してくれなくなつちやいそうなので心を鬼にしてそちらには行きません。』

まあ留美ちゃんというは先輩になら料理とかも安心してお任せ出来るし……うちの

兄がご迷惑をおかけするかもですがよろしくお願いしますねー。あと、お母様にも今回のごとお礼を言っておいてね』

という内容の連絡をもらったけど……前日急に予定変更になったっていうのは今初めて聞いた。だいたい、「妹離れ」とか言ってた割に、あの後小町さん時々八幡の部屋に来てみたいなんだよね……。

「まあ、場所の話はともかく……留美の勉強見るのがアルバイトになるなら悪い話じゃ無いな……。家庭教師は割の良いバイトなんだが……知り合いでもなけりや面接で速攻落とされるに決まってるからな」

「なんで？」

「……面と向かって聞くか？ 目の前に座ってる男の目を見てみろよ」

言われて私は八幡の目をじいっと見つめる。八幡はちよっと戸惑ったような顔をしているけど……。

「……………」

……………わかんない。私が首を傾げて困っていると、

「そう言えば留美は平気なんだったな……」

八幡は頭をガシガシ掻くようにしてボソリと言う。

「だから何が？」

「いや、忘れてくれ。お前を相手にしていると変に気にしてる俺が馬鹿みたいだしな」

そう言つて、何が面白いのか彼は少しだけ楽しそうに微笑つた。

「お前じゃなくて『留美』……」

「それ、もう良いだろ……」

うん、八幡が私のことを「留美」じゃなく「お前」とか他の呼び方をして、前みたいに気になるわけじゃない。ただなんていうか……私と八幡が話をする時の言葉遊び——「いつものお約束」みたいなものだ。

「そろそろ時間だな。いつもみたいに早めに駅に移動しておくか？」

ちらつと腕時計を見た八幡が言う。そう、普段なら駅で仕事帰りの母と待ち合わせて帰るところなんだけど——

「あ、今日はね……」

私が説明しようとした丁度そのタイミングでお店のドアベルが「カラン」と小気味よい音で鳴り、洒落たブランド物のスーツを上手に着こなした女性が入ってきた。

ウエイターさんと二言三言話してから店内を見回す彼女に私は軽く手を振る。

「お待たせー。留美、八幡くん」

「お母さんお疲れ〜」

「なん、いやその……お疲れ様です……？」

あはは。八幡、今日はびっくりばかりだなあ。

私達の席までやってきたお母さんは、近くにいたウェイトレスさんにチーズケーキと紅茶のセットを頼んで私の隣にすつと座る。は……外^oモードの彼女はメイクもバツチリで、我が母ながら格好いいよなあ……。

「どこまで話したの？」

「一応、家庭教師お願ひしたい、つてどこまでは」

「そう……。ね、八幡くん、どう？ 留美のことお願ひ出来るかな。条件面で何か不満があれば……」

「ちよ、待つて下さい。……正直条件良すぎて恐いくらいなんで不満なんて……というか何でいきなり面接が始まつてるんだ……？」

「八幡……細かいことを気にしたら負けだよ？」

「細かくねえよ！」

そうやって八幡が私を睨んだけど、私はさっと目をそらして知らんぷりをする。

「あらあら……。なんだか急なお話になっちゃって御免なさいね」

——御免なさいね、だって。お母さんの口調が家にいる時と明らかに違って思わず笑い出しそうになったけど、無理やり息を止めてなんとか堪える。

「いえ。ただ……。俺で良いんですか？　こんな事言うのはあれですけど、どうせお金をかけるならちゃんとプロの先生を頼んだ方が……」

「私は……一番重要なのは本人がどれだけやる気を出せるかだと思うのよね。……中学生の頃なんか特にそう」

「はあ」

「だから……留美のやる気を引き出すつてことにかけてなら、八幡くん以上の人材はいないと思うんだけど？」

そう言ってお母さんはちよっぴりいたずらっぽくくりと微笑う。

八幡は何故か顔を赤くして……一瞬だけ私の顔をちらつと見てからすぐに目を逸した。

それから少しの間考える様子を見せていた彼は、やがて母の方に向き直り、「俺で良ければ精一杯頑張らせていただきます。よろしくお願いします」

そう言つて深々と頭を下げた。

お母さんにはつつこりと笑って私の背中をぼんと軽く叩く。

「じゃあ……留美から聞いているかもしれないけど改めて。不定期になるの前提だから月決めじゃなくて一回あたり〇〇円。基本は週一回か二回で……日時、それと場所は八幡くんと留美で相談して決めてね。」

八幡くんが試験とかレポートとかで大変な時はそつちを優先してもらって……代わりに次の週に回数を増やしてもらおうとかの形で調整する……と。こんな感じかしら?」「分かりました。俺の方はそれで特に問題ない……です」

「あとは……あ、八幡くん、一応私にも連絡先教えてもらっておいでいいかしら。それに簡単な契約書作るから住所とかも……」

そうしてお母さんと八幡は、お互いのスマホを突き合わせるようにして連絡先を交換しているところ。

絢香、泉ちゃん、上手く行ったよ!

* * * * *

「ほほう。なら、さ……比企谷さんに家庭教師頼んでみたら？ 成績も上がるだろうし……何より比企谷さんと堂々と会える口実が出来る！」

相変わらず私では考えさえしない事をよく思いつくなあ……。

「え、でも私が勝手に決められることじゃないし」

「まあまあ、まずはお母さんに『総武高校に進学したいから、比企谷さんに家庭教師頼みたい』って言うてみなって。……留美のお母さん、絶対にダメって言わないから！」

なんでそう言い切れるのよ……。でも絢香ってばいつの間にかうちのお母さんとLINEの交換してたんだよね。……二人で私の情報交換でもしてるのかなあ。

「絢ちゃんそれいいね！ だったら……。いつその事お母さんと二人で一緒に頼めば比企谷さんも断りにくいんじゃないかなー」

「そうかな？」

「うん、比企谷さんのお部屋紹介したのって留美のお母さんなんですよ。そういう人から頼まれたら簡単には断れないって思うんだけど」

「それって……強引すぎない？」

「留美……この前『頑張る』って言うてたじゃん」

「言っただけど……でもそれは……」

「比企谷さんが引越しちゃって……そんなに遠いとこって訳じゃ無いにしても、前

よりは会いにくくなるでしょ。比企谷さんが家庭教師になってくれれば、少なくとも中学卒業——というか受験が終わるまでは……なんて言うの？　こう……合法的にいうか……とにかく一々理由作らなくても会えるんだよっ！」

絢香が両拳を握りしめて熱く語れば、

「うんうんうん！」

泉ちゃんは目をキラキラさせて妙なプレッシャーをかけてくる……。

昔の泉ちゃんはこのままで恋愛話に盛り上がるタイプじゃ無かつただけ……やっぱり絢香の影響なのかなあ……。

なんて思いつつも、目の前に「八幡」という人參をぶら下げられた私は、結局二人の提案に乗っちゃったんだよね……。

* * * * *

「それじゃ……改めて、留美のことよろしくお願いします。比企谷先生！」

「あの……先生とかお願いですから止めて下さい……」

お母さんの言葉に、八幡は恐縮半分照れ半分みたいな顔。

「良いじゃない、天下のK大生なんだから堂々と先生って呼ばれときなさいよ。ほら、留美もちゃんとご挨拶！」

「あ、うん。ふふ……じゃあ、これからよろしくお願いします、八幡せんせ♪」

私は笑顔でぴよこんと頭を下げ、それから八幡に向かって片目をつむって小さく舌を出す。

「おま………。まあ……こっちこそ宜しくな」

八幡は苦笑いしながらそう言って、自分のカップに残っていたコーヒーをゆつくりと啜り、それから全身の力を抜くように大きく息をついた。

鶴見留美は未来に迷う④ 手のひらの中の宝物

「じゃあ、次に間違えたのは……問6の2だな？」

「そうだけど……。ね、八幡。少し休憩しない？ 今日ユキ先生のところで、頂き物のお裾分けでフィナンシエ貰ってきたの。□□っていう有名な店のなんだって」

実は男の人としてはかなり甘い物好きな八幡はその言葉にぴくりと反応し、一瞬だけ手を止めてくれたものの……。

「いや、とりあえず英語終わってからな。……間違えたのあと3問だけだろ」

「ええ〜」

「いいから。今日中に二教科……出来れば三教科終わらせておきたいしな」

今私がやらされているのは、先日行われた学力テストで私が間違えてしまった問題の解き直し。

このテストと、例の進路希望調査票をもとに、これから私達二年生への進路指導が行

われていくことになる。

このテストは、中学一年生で習った全範囲から広く出題されていて、定期テストよりもやや難し目の問題という印象だった。一年生の範囲の問題のはずなのにこんなに難しい理由を八幡に尋ねると、

「だれがどの程度出来るのかを視るために、簡単な問題から難しい問題まで幅広く出題されていて、難しい問題はかなりの難問になってる」

という事らしい。なんでも、

「何人も百点取れるようなテストじゃ、余裕で満点の子とギリギリで満点の子との差がわからなくなっちゃうからだろうな」

とのこと。

そうは言ってもあくまで中一の問題。総武高校を目指すならまずはこれを全部解けるようになるろう……というのが八幡先生（笑）の方針らしい。

もちろん全く同じ問題ならすぐに回答はできる。授業で解説もしてたし……。けど、その私が間違えた問題を元に、「八幡が即興で作った問題」を解こうとすると急に難しくなる。

ちゃんと理解できてる問題なら、「ちよつと単語が違うだけ」「後は定型文を当てはめるだけ」とスムーズに答えが出てくる。

けれど、よく理解できていない問題になると、その「ちよつと単語を変えられただけ」で急にわからなくなってしまう……。

あ、進路希望票は——目指す職業は編集者か司書。志望校は、第一志望：総武高校／第二志望：海浜総合高校、それからもう一つ近場の私立高を書いて提出した。

八幡や絢香の言いなりつてわけじゃないけど結構適当。本当に悩むのはもつと先でいいと開き直れたし……今はまず、どんな進路だつて自由に選べるように力をつける、という建設的な考え方で行くことにした。

まったく……たつたこれだけのことを割り切るために悶々と悩んで……私つて本当に面倒くさい子だつたなあ。

それにしても……なんだか八幡が真面目すぎる……。

もちろん私が八幡に家庭教師をお願いしたのは総武高に行きたいという目標があるからで、その気持に嘘は無い。だからそのためにはちゃんと勉強は頑張る。……頑張るけど、さ。もう少し……なんていうか——甘い雰囲気——みたいなのを期待してしまつていた私はそれこそ考えが甘かつたんだろうか。

折角二人きりでいるのに……これじゃ成績は上がったとしても、その裏にあるもう一つの目的達成はうまくいかないかなあ。

もう一つの目的——まず私を「恋愛対象になる女の子」として意識してもらおうこと。

小学生の時の告白からほぼ一年。「五歳という歳の差」「八幡の大学受験」「強力なライバルの存在」とかいろいろ言い訳をして積極的にならずに……なれずにいて、それでもなんとなく彼の近くに置いてもらっている、みたいな状況にある今の私。

今までこの状態になんとなく満足してたくせに、今になっていきなり、やつぱりちゃんと「恋人」とか「彼女」になりたいというのは……あまりにも急ぎすぎだよね。

まして私はその告白のときに、

「付き合ってほしいなんて言わない。ただ言いたかっただけ」

そんな風に言ってしまったているわけで……。

あんな事言わなければ良かったかなあ……。でも、あの時は本気でそう、「気持ち着を伝えられればそれで良い」って思ってた。五歳も年下の私が八幡の恋人に……なんて最初から諦めてた。

だけどそれから一年以上を八幡の近くで過ごしてきて……彼に対する想いは落ち着くどころかむしろ熱を増し、今はもつともつと彼の近くに居たい、誰に遠慮することもなく八幡の隣に居たい——いつの間にかそう思うようになってしまっている。

特別な何かがあったわけじゃない。ただ彼を知ってしまった。八幡のそばに居る居

心地の良さを知ってしまった……それだけの事。

……それだけの事で——きつと私は、前よりずっと欲張りになっちゃったんだ。

「お……これ、ほんとに美味しいな。甘みが染み出すみたいになってそのまま口の中で融ける」

「うん。……でもこれ、自分で買うには中々にお高いんだよね……」

「そうなの？」

「えーとね、これ一つで三百円くらいかな」

私が、細身で親指ほどの大きさ、一口サイズのフィナンシェをつまんでそう言うとき、
「マジか！ 俺もう四つも食っちゃったぞ……」

八幡は動きをピタツと止め、今正に口の中に放り込もうとしていた5つ目をそつと箱に戻した。

「頂きものだし……お金払えなんて言わないから遠慮しないで食べて」

「おう……じゃあもう一つ……」

そう言つて、さつきまではほとんど一口で食べてたフィナンシェを端からかじつて食べてる八幡がなんだか可愛い……。

なんだかんだで……結局私達は切りのいいところまで勉強を進めてしまった。

今は私がお茶を淹れ、お土産のお菓子で休憩しているところ。

今日は、私（とお母さん）から無理やりお願いする形で始まった八幡先生の家庭教師の記念すべき第一回目。しかも八幡の部屋で。ふふ。

実際に家庭教師をどこでするかにあたつて——最初こそ渋つていた八幡だけど、今までだつて私と二人になることは何度もあつたし、それに私が東京と千葉を行き来する沿線の駅の近いところにこのアパートがある、というのもあつて最終的にはOKしてくれた。今後は私の家とこの二箇所の内、その日お互いの都合が合うほうで……ということになりそうだ。

とりあえず最初のうちは、私がユキ先生のところに行つた帰りには八幡のアパートで。それから週末、八幡が実家に寄る時には私の家まで足を伸ばしてもらふ、という形でやってみることに。

もつとも、それぞれの最寄り駅の間は電車で20分弱しかかからない。徒歩の移動時間を含めても30分くらいだから、それこそ当日に変えることだって出来なくはない。だからそれぞれの都合に合わせてお互い無理のないように先の予定はその時々で調整して行こう——と、そういう結論になったんだ。

「それにしてもこれって、口の中で融ける感じが、前に留美に作ってもらったお菓子に似てるな……。なんだっけ？ ダックなんか？」

「『ダックワーズ』でしょ。それは似てて当たり前だよ？ だって基本の材料が同じ『アーモンドプードル』だし」

「は？ プードル ……犬？」

「違うってば……。『プードル』はたしかフランス語で粉って意味だって。英語だと……。パウダー？」

ふふ、犬が材料って……。一体全体どんなお菓子よ？

でも、小学生の時、お菓子のレシピで初めて「アーモンド・プードル」と書いてあるのを見て、私も犬のプードルを思い浮かべたのは内緒。

「？ いやでも『アーモンド』は英語だよな。なんで混ざってるんだ？」

「え！ フランス語も一緒なんじゃないの？」

「ん……確か、アマモンドとか言ったような？……」

で、調べてみたらホントにそうだった。

「あれ？ でも袋には『アーモンド・プードル』って書いてあったけど……。じゃあ、『アマモンド・プードル』が正しいの？」

「いや、商品名なら正しいも何も無いだろ。それを言ったらミルクカフェラテなんてさらにややこしいのもあるしな……」

「何で突然ミルクカフェラテが出てくるのよ？」

「いや……うちの大学マツ缶置いてないからとりあえず代わりに」

ああ、そういう……。

「でもやっぱり物足りんというか……生協にリクエストは出したんだか……」

リクエストって……面倒くさがり屋さんでそういう事しなさそうなのに……。八幡
どんだけあのコーヒー好きなの……。

でも……特に違和感もなく普通に使ってた言葉なのに実はちぐはぐだったりするんだなあ。そんなちぐはぐなもの当たり前前になってるのってなんだか不思議。

「おし、んじやあ次は……数学やるか」

「えー、もう少し休憩しようよ。今日は一回目なんだし」

「一回目だから頑張るんだろうが。人間、回数を重ねれば必ずダレてペースが落ちる」
そんなものかなあ……。でも、

「そういえば……八幡って、教えるの上手だよね。すごく分かりやすい」

「そうか？　もしかしたら……一昨年小町の勉強見てやった時のこと思い出しながらやってるからかもしれない」

「そか、なら『八幡せんせい』には総武高校合格者の実績がある、ってことだね！」

「その『せんせい』っての止めてくれ」

「いいでしょ。だって『せんせい』だし」

「お前な……」

「『お前』じゃなくて『留美』」

「な、自分だけ……。俺の生徒が理不尽すぎる……」

……結局、二人っきりの時間はそんなふう過ぎて行き、「彼女たち」が勝手に期待していたような甘い展開は無いままに終わった。

今日の成果：三教科分のテスト見直し完了!!

……その、私もちよっぴりは期待されてただけだなあ。甘い展開とまではいかなくても、八幡と……。その……。もう少し……。はあ。

* * * * *

「は？ 何やってんの留美！ もっとこう……『ガンガンいこうぜ！』みたいな気持ちで行かないと」

第一回目の家庭教師がどんな感じだったかを報告した私に、絢香はそんなダメ出しをしてきた。

「ガンガンって……。まだ一回目だし」

「せっかくチャンス手に入れたんだから！ そんなにのんびりしていると他の人に負けちゃうよ？ ……いろはさんにライバル宣言されたんでしょ？」

「ライバル宣言……なのかなあ、あれ。 ……どっちかというと、一緒に頑張ろうみたいな——」

「甘い！ いろはさんは危険だよ。長いこと恋愛ウオッチャーやってるあたしには分かる。あれは一旦いくと決めたらそれこそガンガン行くタイプだからね」

そう言われると、確かにそんな気もするけど……いろはさんも、きつと八幡にとつては特別な一人だと思うし……。

「いい？ 家庭教師の定番シチュってのはねー……『どうしたんだい？ 手が止まって
いるよ』」

絢香は私を置き去りにして唐突に小芝居を始めた。え？ いろはさんの話をしてたんじゃないかったつけ……。

『あの……先生、ここがわからないんです』

『ん……どこかな？』

ここで絢香は突然私の手を掴むと、抱き込むようにして彼女の胸の中心あたりへと押し付ける。

「ちよ……絢香？」

『わかりますか？ 比企谷センセイを見つめると、胸のドキドキがどうしても止まらないんです』

『留美クン、レデイがそんな事をしてはいけないヨ』

『いえ！ センセイになら、私……わたしっ……』

目を閉じ、私の手を抱いたまま身をくねらせる絢香……。

「人の名前使つて変な妄想しないでっ！」

「あ痛っ」

私は絢香の手をちよつと乱暴に振りほどいてその手をベシつと引っ叩く。

「もう………………。恋愛ウオッチャーとか偉そうに言ってるけど、それって絢香はいつとも横から見てただけって事でしょ？ だからそんな…………」

「失礼な。あたしだって人を好きになつたことぐらいあるつての」

絢香の意外な発言に、私は一瞬だけ我を忘れる。

「え!! 誰!! そんな事一言も…………」

「ええい騒ぐでない。遠い昔の話じゃよ」

絢香は両手のひらをこちらに向けて挙げて、落ち着け落ち着けと言うかのようにその手を小さく振りながらまるで「おばあちゃん」みたいな口調で言う。

「中学生が遠い昔とか……………」

「あはは」

ふと、さつきから私達のことを呆れたような笑顔でクスクス笑いながら見てた泉ちゃんの右手首に湿布のような物が貼られている事に気が付いた。

「あれ…………泉ちゃん、その手どうしたの?」

「ん、ああこれ? 大したことないの。筋肉痛…………じゃないけど似たようなものかな」

泉ちゃんはその手をグーとパーを繰り返すように動かして見せながら言う。

「あのね、例の二科展の絵、下地始めたんだけど……どうしてもナイフ使っていると、ね。あれ大きいし」

ナイフ、と言つても彼女の言つてるのは油絵用のペインティングナイフのことだ。用途によつて色々な形のものがあるけど、一番一般的なのは細身のケーキサーバーとかバターナイフみたいな形のものだろうか。

この腹の部分に油絵の具を乗せてキャンバスや板の上に擦り付けるように色を置いていくんだけど……。

もちろんただ平らに塗りつければいいというわけではない。広い部分を使つて押し広げるようにしたり、先端部分で点描画のように少しずつ絵の具を置いたり、時にはエッジを使つて逆に絵の具を削り取つたりと、ナイフを使いこなすには多彩で繊細な技術が必要になる。それだけに、逆にきちんとつかいこなせば絵の具の立体的な造形による陰影によつて筆だけでは決して表現できない重厚な迫力を生み出す事が出来る。

そんな事を考えていると、昔の……泉ちゃんのお祖父さん——蒼の巨匠と呼ばれた藤澤誠司——の絵を見たときの記憶が脳裏をよぎつた。代表作でもある『苦悩』に圧倒的な存在感をもたらしている陰影の力……。泉ちゃんが目指すものがそこだとすれば、それはきつと険しく遙かな道のりだ。

泉ちゃんが手を痛めたのも、その繊細な作業を長時間続けたということによるものだ

ろう。彼女にしてみれば、自分の目標を目指す上でのある意味やむを得ない怪我。……だからなのかな？ 自らの怪我のことを笑いながら語る泉ちゃんの表情はどこか誇らしげでさえあつた。

絢香も泉ちゃんも自分の夢に向かってもう走り出してる。私もたつた一歩だけでもようやく踏み出した。

あとは……八幡が私の気持ちに伝えてくれたらなあ……なんて、その時の私は自分に都合のいいことばかり考えてたんだ。

* * * * *

純粋な動機と不純な動機の両方で始まった八幡との家庭教師。もちろん二人で過ごせる時間は嬉しくて充実してはいたものの、学力テストの反省の続き・中間テストの対策、とやらかなきやいけないことはたくさんあって……残念ながら恋愛方面の進展は無いままに数回が過ぎていった。

そんな五月半ばの金曜日。その日最後、六時限目の英語の授業が終わって――

こんな私でも、クラスの中ではそれなりに親しく話してくれる子が三人いてくれて、その四人でお昼を一緒に食べたり、グループ学習では班を組んだりペアになったりするんだけど……。

その中の私と佐川さんという子が英語の教科係で、今日は授業の最後に提出されたワークブックを、ホームルームが終わった後で職員室まで持っていくことになっていった。

こういう時は、後の二人――津久井さんと藤野さんも手伝ってくれて、それぞれが部活に行く前に教室で少し話をする、というのがいつもの流れだったんだけど……。

バラバラに積まれたワークブックを出席番号順に並べ直していた時、ふと私と目が合った藤野さんが、急にぼろぼろ涙をこぼして泣き出しちゃったんだ。

「藤野さん……?」

「……あの……違っ……」

彼女は何かを言おうとするものの、嗚咽が漏れるばかりでうまく言葉を紡げずにいる。

「ごめ………。今日は帰る……ね……」

彼女は絞り出すように微かな声でそれだけ言うと、スクールバッグを抱きかかえるようにして、そのまま一人で教室を出て行ってしまった。

津久井さんが慌てて藤野さんを追いかけて行き、佐川さんは不安そうな顔で私の顔と教室の出口を交互に見つめている……。

私、藤野さんに何かしちやつたのかな？ 少なくとも今何かがあつたわけじゃないし、そうでなくても彼女を怒らせるような事をした覚えはない……けど。

多分……昼休みのあのことが関係してるんだろうな、位のことには私にも想像が出来た。

* * * * *

「俺……去年同じクラスだった時から鶴見のこと好きだったんだ。友達からでもいいんで……俺と付き合ってくれないかな」

二時間目の後の休み時間、藤野さんが私の席にやってきて、

「鶴見さんに話したいことがあるって子がいるんだけど……わたしその子に頼まれちゃって……。お昼休み、少し時間……いいかなあ」

そう申し訳なさそうな声で言ってきた。

これは……多分、「告白」かな……。告白するための呼び出しを、目当ての子の友達に頼むというのは男子女子とも割とよくある話だ。きつと直接言うとか手紙で呼び出すとかより無視されにくいから。

実際、正直私は断りたかったけど……話も聞かずに断ってしまったら仲介した藤野さんも立場が無いだろう。そう思って、

「うん、少しくらいなら……」

渋々ではあるけれどそれはなんとか顔に出さずに引き受けた。

「ほんと？ ……その、ごめんね」

「ううん、大丈夫だよ」

藤野さんはホツとしたように肩の力を抜いた。

そして昼休み、藤野さんに連れられてやってきたのは特別教室棟の裏、物置の影になっ

なっているところ。
藤野さんはその手前まで来たところで足を止め、

「……その子、先で待ってるから」

そう言っ

て、なんだか切なそうな表情で私を先へ進むよう促した。
告白を断る時——それほど気分が重くならない時と、気分が重く……なんというか心に後を引いてしまう時との二つがあるような気がする。

私はその……本格的で無いとはいえモデルなんかやって悪目立ちしているせい、今回のような「告白」をされたことは何度も何度も……もちろんその度にお断りしてきた。

「他に好きな人がいるので」と。

顔も名前も知らないような先輩とか、モデルをしてる私のファン？　みたいなことを言う相手とかへの「お断り」はそれほど心の負担にはならない。それはきつと彼らが私の外面の部分だけを見ているから——そんなのは本当の「私」じゃないから。

けれど……ちゃんと私と関わって、話をして、それなりに私を知ってくれて……こんな言い方はおかしいかもしれないけど、「私を好きになっってくれるきつかけぐらいいあったのかな」と私自身がそう思えるような相手からの告白を断るのは……なんというか、酷く申し訳ないような重い気持ちになる。

今日私に告白してくれたのは……後者。私もよく知っている男子だった。

辻堂くん——辻堂冬也くん。

一年生の時同じクラス。同じ班で……二学期三学期は数学の教科係を二人でやったし、委員会も同じ美化委員だった。男子の中ではよく話をする……去年の同級生の中では多分一番話すことが多かった男子だったと思う。

つまらない事でもよく笑う。理系は得意、文系は少しだけ苦手。サッカー部で一年生の後半からレギュラー。匂香とも仲が良く、彼女の謎言動によくツッコミを入れていた。

クラスが別れた今でも、顔を見れば軽口くらいは言い合う。そんな男の子。

うん……彼はきつと、私のことをちゃんと好きになつてくれたんだ……。

でも、私の答えは決まっている。私は八幡が好きで、八幡以外の誰かを好きになる自分なんて想像も出来ない。だから、辻堂くんにはただ申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「あの……辻堂くん、ごめんさい。……私、ずっと好きな人がいるから……」

私はそう答えて頭を下げる。これで終わり。……もう彼とは今までと同じようには話せなくなっちゃうな。せつかく仲良く出来たのにな……。

「そんな顔するなよ鶴見。……なんとなく振られるんじゃないかって思ってたから」

「……………」

彼は普段とあまり変わらない笑顔で続ける。

「でも……なんつーの？　言わなきゃ始まんないし……それに、『好きな人』ってことは、まだその人と付き合ってる訳じゃ無いってことだろ？」

それはその通りだけど……でもだからって……。彼の言葉に私が身構えると……

「ああごめん　別に、だったら俺と付き合いとか言わないって。ま、ちよつとは意識してくれればいいかなってね」

気持ちを伝えられればいい——それはたぶん半分は本当。……でも半分はきつ

と強がりだ。

だってわかってしまう。私も同じだから。

彼の一言目の声は震えてた。勇気を振り絞って告白して……それで何の期待もしないなんて……そんなの無理だ。

それが分かってても……私はそんな彼の言葉に、ただ

「ごめんささい……」

と小声で繰り返す事しか出来なかった。

暫くここにいるという彼を残し、重い足取りで来た道に戻ると、藤野さんがさつきと同じ所で俯くように立っていた。

私に気付いた彼女は顔を上げて一瞬だけ私の目を見て……何かを察したように唇を噛み、

「鶴見さんごめん、先に戻ってて」

それだけ言つて奥へ……辻堂くんのいる方へと小走りに駆けて行つた。

それが、今日のお昼休みの出来事。

* * * * *

しばらくして……。藤野さんを追いかけていった津久井さんが一人で教室に戻ってきた。

彼女はなんとも言えない雰囲気の中でほとんど無言でワークブックをまとめていた私と佐川さんに向かつて、

「それ、職員室に持っていきながら話そっか……」

そう言っただけで微笑った。

「……鶴見さんに謝っておいて、ってさ」

「そんな、謝るなんて……。あの……。もしかして私……」

「鶴見さんは何も悪く無いんだよ。ただ……。あの子の気持ちの問題っていうか……」

そこで今まで黙って話を聞いていた佐川さんが、

「もしかして辻堂君の……?」

遠慮がちにそう訊いた。

「うん……」

やっぱり関係あるんだ……それに佐川さんも知ってるみたい……

「あの子……小学校から辻堂と一緒にでさ、それで……まあようするにずっと前から辻堂のこと好きだったわけ」

「……え、だってそんな事……」

津久井さんの言葉に私は軽い衝撃を受ける。だったらどうして告白の橋渡しなんか……

「あー……鶴見さんに言わなかったのは……。あの子さ、辻堂から鶴見さんのことが好きだって相談受けて、『応援する』って言っちゃったんだよね……」

「どうしてそんな……」

「わかんないけど……すすきりさせたかったんじゃないかな。辻堂が上手くいくにしても振られるにしても」

「……」

「でも、実際に振られてしよげてるとこ見ちゃったら、なんだかいたたまれなくなっ

「ちやっただってさ」

そんな事情だったなんて……でも、そうだよ。辻堂くんも私なんか相手にしていないで、自分を想ってくれる藤野さんに振り向いてあげれば……。

と、そこまで考えたところで——私自身のあまりの傲慢さにゾツとした。

それじゃあまるで……私の八幡に対する恋心は絶対に優先で……他の、辻堂くんの想いなんか取るに足らない、簡単に変えられるものだと言ってるようなものだ。

今と同じことを八幡に言われたら……。

『留美は俺なんか相手にしてないで、お前のこと好きになつてくれた辻堂つてやつに振り向いてやれよ。俺には由比ヶ浜や雪ノ下がいるんだからいくら頑張つても無理だぞ』
想像するだけで足がすくんで、視界が暗くなる……。

「——鶴見ちゃん、鶴見ちゃん大丈夫？」

佐川さんに呼ばれてハッと我に返る。

「あ……。」

「ちよつと、顔青いよ……。」

「あ……ごめん、変なこと聞かせちゃったね。」

……さつきも言ったけど、鶴見さんが

悪いわけじゃ無いんだから、ね？」

違うの。津久井さんごめんなさい……。

「これ私達でやるから鶴見ちゃんも帰っていいよ」

「ううん大丈夫……職員室もうすぐそこだし……」

私は無理やり笑顔で応えて歩き出す。

ままならない。恋は何時だつてままならない……。自分の恋心が想い人に届かないと嘆く私が……その痛みを知っているはずの私が、平気な顔で私を好きになってくれた人の想いを踏みにじっている……。

ああ、八幡の顔が見たい。声が聞きたい……。家庭教師の予定は明日の午後、まだ丸一日もある。長い……。よ。

会いたいよ……。八幡に会いたい。

* * * * *

次の日。

朝の天気予報では、お天気お姉さんが「今日は気温が上がって、午後からは天気不安定になるので折り畳み傘を忘れずに」みたいなことを言っている。

このお姉さん、いつもの人と違うな……あ、そうか今日は土曜日だからか……なんて半分寝ぼけた頭で考えながら朝ごはん。

昨日色々あつてなかなか寝付けなかつたので少し寝不足気味だけど、ようやく目が覚めてきた。

今日は午前中からユキ先生のところで衣装合わせと仮縫いがあつて……その後、四時から八幡のところで家庭教師の予定。先週は二人の予定が合わなかつたから……十日ぶりくらい？　ただ彼と会う予定があるだけで落ち込んでいた気分が高揚してくる。

今はただ、無性に八幡に会いたかつた。

土曜日の午前中、通勤時間をやや過ぎた時間帯ということもあつてか、千葉から東京方面へと向かう電車はそこそこ混雑してはいるものの、乗り換えに便利な中央寄りの車両を避ければ空席を見つけるのは難しくくない。私は先頭車両に広く空いている席を見

つけてその丁度真ん中あたりに腰を下ろした。

車内は冷房がよく効いていて、駅までの僅かな時間で薄っすらと浮かんでしまっていた汗がすうっと引いていく。

まだ五月だと言うのに朝から変に蒸し暑い。気温はそれほど高いわけではなさそうなんだけど、湿気が肌にまとわりつくような感じだった。

「あれ……やっぱり留美ちゃんだ。やっはろー!」

そう私に声をかけてきたのはなんと……って、こんな挨拶をするのは彼女しかいないよね。というか……大学生になってもまだ「やっはろー」とか言ってるんだ……。

なんて思いながら声のした方向に振り向き、

「こんにちは、結衣さ……ん?」

言いかけた私の声は最後のほうがかすれてしまった。だって……彼女の雰囲気の前に会った時とびつくりするぐらい変わったから。

驚いてる私に、彼女は私の隣に腰を下ろしながら聞いてくる。

「留美ちゃんは……デザイナーの先生のとこに?」

「あ、はい」

そのあと八幡の家で家庭教師の予定にはなってるんだけど……なんとなく言いにくい。だいたいそれどころか——私は一瞬完全に彼女に見惚れてしまったんだ。

そういえば彼女と会うのは二年生になってから——つまり結衣さんが大学生になつてから——は初めてだったっけ。以前までと変わらず気さくに話してくれる結衣さん。いざ会話してみればもちろん「結衣さん」なんだけど……。

今日の彼女は、高校生の頃は頭の横でトレードマークのようにお団子にしていたサイドの髪を細く編んで肩の前に垂らしている。お化粧もうつつすらメイクだけど大人っぽいいし、あえて色数を減らした細かい花柄のトップスと春らしく落ち着いたピンク色のスカート。目立たないけどポイントポイントにフリルが入ってるフェミニンなコーデ。

ウエストをしっかりと作ることで結衣さんの女性らしい体型が嫌味なく強調されている。少しだけ広く空いているシャツの首元には控えめに光る二重オープンハートのペンダント。

そして全体の色合いを引き締めるように肩に掛けられたシックなデザイン革のバッグ。

彼女の抜群のスタイルも相まって、ファッション雑誌のグラビアに載っていそうな「女子大生」結衣さん。まるで本当にモデルさんみたい……というか、ユキ先生のところ

で会う本職のモデルさんたちにだって全然負けてない。その上高校時代にはそれほど感じなかったはんなりとした色気のようなものであつて……。私の口から声にならないため息が一つ漏れる。

「あ、そうだ！　この前留美ちゃんが載つてる本見たよ。なんか天使っぽいってゆーか……とにかく超可愛かつた！」

結衣さんは本当に嬉しそうに話してくれる。

「不思議な雰囲気服だよなー。こうさ、ふりふりで可愛いのにでもかっこいい、みたいな感じでさ」

先月ティーン誌に載つた、ユキ先生デザインの「普段から着れるゴスロリ風のドレス」の記事かな。コンセプトは「天使と悪魔」

天使の方にも一部悪魔っぽいデザイン、悪魔の方にも天使っぽいデザインを相互に取り込んである所がポイントだ、とか言つてたつけ。なんでも、「その二面性が女の子の魅力なのよ」ということらしい。

「あ……結衣さんはお買い物？」

「うん！ ゆきのんとヒッキーと……あ！ ……あの、あのね？ ゆきのんが大学の中案内してくれるって、それでその後ついでに……それだけでさ」

結衣さんが急に言い訳するみたいに早口になつて言う。

「あたしも興味あつて……だつてあの大学だし、一回ぐらいは見てみたいじゃん。ヒッキーもきつとそういう感じで……ね？」

うん、確かに雪乃さんがこの春から通っているのは日本一有名な大学だし、どんなところか見てみたいっていうのはもちろん分かる。だから慌てて変な言い方しなくてもいいのに。これは……結衣さん、もしかして私に気を使って、八幡を話題にすることに過剰反応しちやつてるって事なのかなあ。

でも、正直私の気持ちなんてとつくにバレてると思つてただけど……なんで今になつて急に……？

もしかして……いろはさん辺りが結衣さんと何か話したのかもしれない。あんまり変な事言つてないと良いけど……。

ああでも、結衣さんこれから八幡と会うのかあ。ふと脳裏に八幡と結衣さんが並んでいる姿が浮かんでしまい、胸に疼くような痛みが走る。

最近ぐつと大人っぽくなった八幡と、今日の前にいる「美人女子大生」という言葉をそのまま現実に映したような結衣さん……うん……お似合い、だよね……お互い大学生

になったばかりで、あんなに信頼し合つて——。

きつと雪乃さんのことがなければ普通に付き合つていたかもしれない二人。

結衣さんのことは大好きだけど——もやもやする。

八幡の隣に私以外の女の子がいることに、頭では理解してても心がそれを納得出来ない……。

私は辻堂くんの気持ちを受け入れなかった。「他に好きな人がいるから」と断つた。

私は別に彼が嫌いなわけじゃない。むしろどちらかといえば好感を持つている男の子だ。でも私は彼を傷付け、藤野さんのことも傷付けてしまつている。

八幡も……間違いなく私のこと嫌つてはいない、きつと好感は持つてくれてるつてそれくらい自負はある。

でもじゃあ、雪乃さんや……眼の前にいる結衣さんと同じような意味で好きでいてくれるかは……。

そう考えたら私は……私は辻堂くんと同じなのかもしれない。せつかく八幡の近くにいることが出来るのに、これ以上を望んだら八幡は私から離れていつてしまうかもしれない。だつて結衣さんみたいに素敵な人が何人も八幡の近くには居るんだもの……。

ううん大丈夫だよ、と無理やり自分に言い聞かせる。なんだかんだ言っても……今八幡の一番近く置いてもらえてるのが自分だという自覚はあるし。(小町さんは除く、だけど) ……けれどいくら近くにいても、じゃあ私が八幡と並んでいる姿を傍から見たら、皆が抱く印象は「兄妹」がいいところだろう。……「八幡と結衣さん」「八幡と雪乃さん」に比べたら—— 思考は何度もぐるぐると同じ所を巡り続け、私がそんな風に嫌な考えのループに嵌まりかけていると、

「……………留美ちゃんは、さ」

「……………！」

ついさつきまで何かを取り繕うみたいな話し方をしてた結衣さんが、急に声のトーンを変え、静かに話しかけてくる。

その切羽詰まったような声に、私は思わず彼女のほうに振り向く。けど、結衣さんは、ちら、ちらとかすかに視線だけはこちらに送ってくるものの正面からこちらを見ようとしない。

「留美ちゃんは……その……ヒッキーと……………」

「……………」

「……………やっぱ何でも無い……………。ごめんね留美ちゃん、今の無しにして」

結衣さんはそう小声で言って申し訳なさそうに微笑った。

彼女が私に何を聞こうとしたのかはつきりとは分からないけど——聞きかけて止めた理由なら——なんとなくだけど……わかる。せつかくこれから八幡と会うタイミン
グで話したい話題じゃ無かつたんだろう……。

それから私と結衣さんはなんだかギクシヤクしてしまつて……。間もなく電車はユ
キ先生の事務所の最寄り駅に到着し、私は「また今度」みたいな挨拶だけを交わして電
車を降りた。

ホームに立つと、手足の指先から体温がゆつくりと戻ってくるのを感じる。冷房に当
たりすぎたのか、いつの間にか随分と体が冷えてしまつていたらしい。電車を一步降り
れば、さつきまでよりもっと気温が上がつたようで、まるで夏のような蒸し暑さだけど
……今だけはその暑さになんだかホツとさせられていた。

私は小さく伸びをして、結衣さんに乗せた電車が去つていつた方向をしばし見つめ
る。

ホームにかかる屋根と屋根の間からそこだけ切り抜かれたように覗く青い空には、季
節外れの大きな入道雲がぽつこりと浮かんでいるのが見えた。

* * * * *

ユキ先生のとこで予定してた作業は、ほとんど休憩も無しだったけど、その分早めに……午後の二時少し前くらいに終わった。今は、先生がデリバリーを頼んでくれたピザが届き、みんなで遅めのお昼を食べているところ。

スマホをチェックしたら、お昼すぎに八幡からメールが入っていた。

From 八幡 : 今日うちに戻るの少し遅くなるかもしれない。天気もおかしいみたいだし明日に予定ずらして良いか？ もし早めに帰れるようならまた連絡する。

そんな……折角会えるの楽しみにしてたのに……。

少し悩んだけど……結局私は返信をしなかった。

その後の私はなんだかぼうつとしてしまっていたらしい。

「るー子、疲れちゃった？」

ユキ先生が心配そうに声をかけてくれる。あ、るー子というのは私のこと。前に私を「るーちゃん」と呼ぶ子がいるという話をしたことがあって……しばらく先生が面白がつて呼んでただけ……いつの間にか「るー子」で定着してしまった。先生はみんなを変なあだ名で呼ぶ。まあ、それを言ったらユキ先生だって「ユキ」つて名前じゃないんだけどね。

「あ、いえ……」

「今日あんた家庭教師の日だつて言つてたでしょ。こっちの予定早く終わったんだし、早めに帰つていいわよ？」

先生はそう言つてくれたけど、早く行つても八幡は遅れるつて……。でも、このままいても何も手に付かないし、お言葉に甘えようかな。八幡の家の近くはどこか……お店でも見て時間つぶして……。うん、そうしよう。

「じゃあ、お先に失礼します。次は木曜でしたっけ？」

「絶対に開けといてほしいのは再来週の金土。あとは適当でいいわよ。学生の本分はお勉強だしね。……そうだ、今度「噂の八幡くん」連れてきなさいよ。なんならここで家庭教師やつてもいいわよ。みんなで見せてあげるから」

「デザインナーやらモデルやら事務所のスタッフやら（全員きれいな女子）に囲まれて

……なんて、

「八幡……絶対途中で逃げちゃいますよ……」

* * * * *

時間を潰す……はずだったんだけど……。私は結局予定の時間より前に八幡のアパートの前にたどり着いてしまった。

一人でいるのも嫌いじゃないはずなのに、どんなお店を覗いても楽しく感じない。八幡がまだ帰って来てないのは分かっているのに、ただ気ばかり急いでしまい……。

メールの返信はまだしていない。電話もしてない。だって、連絡しちやつて、もし「明日にしよう」って言われちゃたら……。

いつもなら、たった一日ずれるだけって納得出来たのかもしれない。でも……今日は……。感情がうまくコントロール出来ない。ほんと、八幡に会って——私は何がしたいんだらう。

もうすぐ三時半になる。予定は四時だったけど、八幡は遅れるって……どれくらいだろう。一時間？ それとももつと？

今、八幡は雪乃さんと結衣さんの三人で居るんだよね。雪乃さんの大学見に行つて……それから、買い物、食事……。夕食も食べてくるつもりなら夜になつちやうよね。でも、流石にそれなら連絡来そうだけ……。

こつちから「待つてる」って連絡した方が良いのかなあ。でもそれじゃまるで八幡たち三人の時間を意地悪して邪魔するみたいだし……。

ぼつ、と頬に水滴が落ちてきた。見上げれば、西の空から真つ黒な雲がゆつくりと近づいて来ている。遠くでゴロゴロと雷鳴も聞こえる。

天気予報、当たつちやつたな。『所により激しい雨となり、落雷の恐れもあるでしょう……』か。

ぼつぼつ、ぼつぼつと雨粒はアスファルトをまだらに濡らし、雨脚は徐々に強くなつてきているようだ。

私は八幡のアパートの階段を上がり、八幡の部屋の前に身を寄せる。

すると程なく、ぱらつく程度だった雨が一気に勢いを増し、まるで滝の中に居るような豪雨へと変わった。風も急激に強くなり、外廊下の手すりに叩きつけてくる激しい雨

は水しぶきを上げて私に吹き付けてくる。

薄暗かった廊下が白く光り、直後、大木が割れるような轟音が響く。

「!!っ」

どうやらすぐ近くに雷が落ちたらしい。廊下の照明が一度一斉に消え……数秒後にバラバラなタイミングで再点灯する。

私は特に雷が苦手なわけじゃないけど、それでも今のは流石に恐かった。

私は背負っていたリュックから折り畳み傘を引っ張り出して、盾を構えるように横に向けて水しぶきからガードしようとする。直接の雨はいくらか抑えられたけど、風に乗って巻くように吹き付けてくる水しぶきの水滴は防ぎようがない。気がつくとも私は全身ずぶ濡れに近い状態になってしまっていた。きつとこれがゲリラ豪雨と言われるもの。ニュースとかではよく聞くものの、実際に屋外にいて直撃されたのは多分初めてだ。

その上、風向きが変わったせいとか、いつの間にか気温もどんどん下がってきているようだ。……これ、ちよつとまずいかも……朝から暑かった事もあって今日の私は薄手のシャツ一枚の格好だ。スカートはお気に入りのプリーツだからそれほど薄いつてわけじゃないけど……、それでも全身がどんどん冷えていくのが分かる。

どこか他の所に避難したほうが良いのかな。けど、今から移動するってことはこの滝

みたいな雨の中に飛び出すってことで……。どうやら少し雨が収まるまではここに居るしかなさそうだった……。

身体がガタガタ震える。寒い……。寒いよ……。降り出してから時間にして三十分も経っていないのに私は全身濡れ鼠。でも、風は依然嵐のように吹き荒れているものの、雨はようやくやく小降りになってきた。

ギョツと絞れば勢いよく水が出そうな私。この格好で帰りの電車乗れるのかなぁ……。……。

でも……。いつまでもここに居るわけには行かないし……。後少しだけ待って駄目だったら帰ろうかな……。

まだ待つとは言いながら、諦めかけていた時、コツコツと階段を登ってくる足音が響く。

「ふう、ひどい目に遭った……。……。て、留美お前……。なんで居るんだよ！」

壊れたビニール傘を手に抱えた、こちらも濡れ鼠の八幡が目を丸くしてそう言った。

「だって……」

「……………とりあえず上がれ。すぐタオル出すから」

私あまりにも情けない格好をしていたからだろうか、八幡は鍵を開け、私を部屋の中へと招き入れてくれた。

* * * * *

「うぷっ」

部屋に入ると、すぐに八幡が大きなタオルを何枚か投げつけてきた。キャッチしそこなった一枚が私の顔を直撃。

「ちよつと、顔に……」

「ああ、悪い悪い、いいから文句言つてないでどんどん身体拭け。風邪引くぞ」

「もう……このくらい、平気だよ」

そう私が言うと、

「いやお前顔真っ白だぞ。適当に拭いたらそのままシャワー浴びてこい。あ、使い方分

かるよな？」

うん、確かにすごく寒いし体は震えてるけど……でも平気なの。八幡が帰って来てくれたから。

正直もう体調は最悪。寒さで吐きそうなの。でも八幡が居るだけで……彼にタオルぶつけられて文句を言うだけで……あんなに沈んでいた心があつという間に上向いていく。

「じゃあ俺はこっちで着替えるから……覗くなよ」

「なっ……の、覗くわけないでしょ！ ばかっ」

思わず手に持ってたタオルを投げ付けたけど、八幡がすばやく閉めたドアに遮られて、タオルはぼすんと下に落ちてしまった。

さつきは強がって「平気だ」って言っちゃったけど、流石に身体は冷え切っていて、背中にゾクゾクとした震えが走る。このままだと本当に風邪引いちゃいそうだし、ここは八幡に甘えてシャワー浴びさせて貰おう。

そう思ってシャツのボタンに手をかけて……気が付いた。こういうアパートって、脱衣所って無いんだ。キツチンのコンロの向かい側、トイレのドアの隣にある磨りガラスのドアの向こうはそのまま直接バスルーム。

見慣れた玄関ドア、ようやく使い慣れてきたコンロ、やや小ぶりの冷蔵庫。一枚の引き戸を隔てた向こうには八幡がいる——ここで、裸になるんだよね。

そう思ったら急にドキドキしてきた。

……とりあえず私は、スカートのポケットからヘアゴムを取り出して口に咥えようと、両手で髪を束ねてゴムをくるくると二回回して留める。よし！

覚悟を決めて服を順番に脱いでいく。濡れてる服って体に張り付いて脱ぎにくいけれど幸か不幸か今日の私は薄着だし。そしてショーツ一枚の姿になった時、

「おーい、留美ー」

「ひゃ、はいっ。なに？」

いきなりドア越しに呼ばれて変な声がでてしまった。

「とりあえず服はその籠に入れとけ。お前が中に入ったら適当な着替え用意して、そこに置いておくから」

「う、うん……。ありがとう、八幡」

うわあ……。わ、私裸で八幡と話してる……。八幡こそ覗いてないよね。

でもでも、覗きたくなるぐらい興味もってもらったほうが……。って、何考えてるの私！

私は、誰かが見ているわけじゃないと分かっているけど、縮こまって前を隠すようにし

ながら最後の一枚を脱ぎ、逃げ込むようにバスルームへと飛び込んだ。

熱いシャワーが冷え切っていた私の躰を叩き、白を通り越して青白い色をしていた私の肌が急速に赤みを取り戻していく。

「はあ〜、温ったかい……」

このお部屋はお風呂とトイレがちやんと別になって、お風呂は狭いなりに湯船も洗い場もある。でも今回はお風呂を入れる準備なんかして時間無かったからシャワーだけ。

湯けむりの中、肩にシャワーを浴びながら、ふと私自身の身体を見下ろした。私ももう中学二年生、流石に小学生の頃に比べればそれなりに女の子らしい体型にはなってきたように思う。

去年ぐらいからウエストラインがはつきり分かるようにはなってきたし、胸だつてちよつとは大きくなってきたような気がするけど……そつと手を当ててみれば、ちよつと片手にすつぽりと収まってしまうようなサイズでしかない。

……八幡も男の子だし、やつぱり大きい方が良いのかなあ。

……さつき見た結衣さんの姿が思い浮かんだけど……あれはいいや。なんていうか比べるのもバカらしいくらい圧倒的だし。

うん、私は私。無い物ねだりをしたって虚しくなるだけだ。……でも、結衣さんとまで行かなくても、もう少し……こう……。

私は腕を両脇にピッタリと付けそのまま力を入れて前に寄せるようにしてみた。

……あ、ちよつとだけ谷間みたいなのが出来た！

「着替えここに置くぞ〜」

「きや……じゃなくてえとあの……うん、あ、ありがと……」

ドアを隔てた八幡の声に、また変な声が出てしまった。……み、見られたわけじゃないし大丈夫。

「おう、着てみて、違うのが良かったら声かけてくれ
「う、うん」

シャワーを終えた私は、外に八幡がないことを確認してからドアを開ける。

八幡が用意してくれた、大きくてふわふわのバスタオルで身体を拭き、そのままそれ

を肩から羽織るようにして着替えを確認する。

きれいに畳んで置かれていたのは明るいグレーのちよつとモコモコつとした暖かそうな生地のスウェット上下。

さすがに下着は自分のを着るしかないけど……。スカートが化繊の厚地だったおかげで下の方はほとんど濡れてないから大丈夫そう。ブラのほうはけっこう濡れちゃつてるなあ……。

まあいいや、別にどこか行くわけじゃないし。そう考えて、ブラを付けなままスウェットをかぶる。

あ……これ裏地がふわふわですごく肌触りがいい。頭をすぽんと出して袖を通す。ふわんと広がる柔軟剤の……八幡の香り。なんだか八幡に包み込まれているように私はそれだけで幸せな気持ちになつてしまう……。

でもやつぱり大きなあ。これ、手をいっぱいに伸ばしても袖口から中指の指先くらいしか出ないし、裾も長くて太ももの半分くらいまで隠れちゃうから、こうして立つてみると丈の短いワンピースみたいな感じだ。

ズボンの方を履いてみたら、こつちも長すぎて裾を引き摺っちゃやし、ウエストのゴムもゆるゆるで油断したら脱げちゃいそう。

うーん……上だけで良いかな。

結局私はスウェットの上だけ借りる事にして引き戸の向こうに声をかける。

「八幡、着替えたよ〜」

「おう。じゃあ暖房入れたから……ってお前何で下……」

言いながらドアを開けた八幡が慌てて目をそらす。

「大丈夫だよ八幡。これ大きいから……。ほら、ワンピースみたいでかわいいでしょ」

私が両腕を軽く払って片ひざをちよつとだけ曲げ、小首を傾げてポーズをとると、

「う……そりゃ可愛いけどな……」

彼はなんだか困ったような顔でポソリと声を洩らした。

「え……」

今、「可愛い」って……。

「いや何でもない。一応暖房つけたからこっちの部屋入れ。あとは留実の服干さないとな……」

八幡がそう言って籠に手を伸ばそうとするので、

「わ、私自分でやるよ」

そう言って飛び付くように籠を押さえる。だって服の間にブラ隠してるし……。

八幡がエアコンの吹き出し口の目の前にスタンド型のハンガー掛けを置いてくれたので、ハンガーに掛けたシャツとスカートを風が良く当たるように引つ掛ける。

ブラは、シャツの中に隠すように吊るした。その分乾きは悪くなるだろうけど、いくらなんでも好きな男の人の目の前で堂々と下着を干すなんてできない。

あと、本音を言えば、雨に濡れちゃった服はきちんと洗濯してから干したいとこなんだけど……乾くの時間に時間かかっちゃうもんね。うちに帰ってから改めて洗おう……。

そうして私達はようやくほっとすることができた。

「ま、ようやく落ち着いたな。留実、ココアで良いか？」

そう言つて八幡が立ち上がろうとする。

「待つて、私やるよ？ ……あ、でも八幡はシャワー浴びないの？」

「おう、俺はもう全部着替えて頭も拭いたからいい」

彼がそう言うので、私はちよつとだけ腕捲りをしてキッチンからマグカップを二つ取ってくる。天使のマークが入った袋のココアパウダーをスプーンで三杯ずつ入れ、電気ポットからこぼこぼとお湯を注ぎ、ゆつくりとかき混ぜて——完成。

たちまち部屋にはチョコレートの甘ったるい良い匂いが広がった。

私 が ば た ば た 動 き 回 っ て コ コ ア を 淹 れ て る 様 子 を 見 て た 八 幡 が、

「ほれ、足に掛けとけ」

と、何故か薄い膝掛けを渡してくる。

「え、別に全然寒くないよ？」

そう言う私に、

「そうじゃなくて……なんだその……目のやり場に困るんだよ……」

八幡は照れたような顔でそんな事を言う。

言われて下を見てみれば……やだ、スウェットの裾がさつきよりずり上がっていて、角度によっては下着が見えちゃいそうになってる……。

内心凄くドキドキしながら、そっと太ももを隠すように裾を引っ張って直す。

もしかしてほんとに見えちゃったのかな。

物凄く恥ずかしい……でも私は何でもない事のようなふりをして言う。

「ふうん……八幡、ようやく私のこと女の子として意識してくれるようになったんだ」

まるで挑発するような言葉に……

「馬つ鹿お前、そんなのどつくに……。いやその、何でもねえよ……」

言いかけた八幡は途中で言葉を濁したけど……。聞き間違いじゃなければ——私を、
「どつくに」女の子として見てくれてたって意味——だよね……。

私は一瞬息が止まり……。それから自分でも赤くなっているのがわかるくらい頬が火照ってしまっている……。

なんだろうこの感覚……。「恥ずかしい」「嬉しい?」そして「ちよつぱり怖い」そんな感覚。

私は少し落ち着こうと、まだ熱いココアをふうふうと吹いてそつと一口だけすする。

同じようにカップに一度口をつけた八幡が、少し居住まいを正して口を開いた。

「そんな事より、だ」

その言い方にはちよつとカチンとくる。私にとっては「そんな事」じゃない。

「どうしてこんな……。連絡もしないで待ってたりしたんだ?」

「それは……。連絡したら『帰れ』って言われそうだったから」

「それにしたって……。ファミレスで待つとかあるだろ」

「だって……。いつ帰ってくるかわかんないし……」

「だから、今日は遅れるかもしれないし、天気も悪いみたいだから明日にするかってメール入れたんだけど……。元々今日か明日のどっちかって話だったはずだろ? 向こ

うも急に雨降ってきて……たまたま早く帰ってきたから良いようなものの、俺の帰りがほんとに遅くなってたらどうするつもりだったんだよ……」

「……………今日が……」

「ん？」

「今日が良かったの！ 今日じゃなきゃだつたの！」

私は顔を上げ、八幡の目を睨みつけるようにして言う……けど、だめだ……みつともないとこ見せたくないのに、勝手に声が震えて、涙が滲んでくる。

「……………何で……そんな」

「それは……」

——昨日学校であんな事が有ったから。今日の結衣さんがとつても素敵だったから。なんて自分勝手な理由。それで八幡に心配かけて、迷惑かけて……でも、でも……。

うつむいて黙り込んでしまった私に、

「留美、手え出せ」

八幡はふうと一つ小さなため息を付いて言う。

「？」

なんだろう。握手して仲直り、とか？ 別に喧嘩した訳じゃないし、今回の私の暴走……ううん、ただ私が駄々を捏ねてるだけだ。

今日八幡は遅くなるかもって言ってた。……だから家庭教師一回分の時間は取れないかもしれない。だから彼はちゃんと時間を取れるように明日にしようと言ってくれたのだ。

でも私は、時間が短くたって——八幡に会いたかった。それこそほんの少し顔を見て話せるだけでも嬉しいし、今日はそれで構わないと思っていた。だって……だって、八幡には、彼女たちと……結衣さんや雪乃さんと会ったあと、そのまま眠ってほしく無かった。私の顔を直接見てほしかった……。ただ顔を見たかった。声を聞きたかった。私の声も聞いて欲しかった。

今日という日の最後に——他の誰かでなく、「私」を見て欲しかった。

自分でも訳がわからないって思う。けれどそれはきつと抑えきれなかった強烈な……醜い独占欲……。

——だから、私はどうしても今日八幡に会いたくなかった。

でも八幡が私を家に入れてくれているのは、「家庭教師」という分かりやすい理由があるから。帰りが少し遅くなるから別の日にずらそうとはつきり言われてしまったら、その大義名分が無くなってしまふ。それが分っていたからあえてメールも返さず、確認の電話もせずにここに来たんだ。

雨になるって天気予報は知ってたけど、折りたたみ傘はちゃんと持ってたし……まさか傘を差してもずぶ濡れになるほどの嵐になったのは流石に予想外だったけど。

……まあ何にしても、私が無理やり押しかけたみたいになっちゃってるし、さつきはほんのちよっぴり気まづい雰囲気になっちゃったから……これで許してくれるなら嬉しい。きつと強情な私の様子を見て八幡の方が折れてくれたんだろう。

私は変な気恥ずかしさと申し訳無さを感じつつ、それでも素直に右手を差し出した。

八幡は一瞬何故か変な顔をして……左手で私の手の甲の方を掴むと、それを九十度捻^{ひね}って手のひらを上に向けさせ、軽く握った彼の右手をそつとその上に乗せた。

「八幡？」

八幡が何も言わずにその手をゆっくり開くと、私の掌の中に小さな感触が生まれた。彼はゆっくりと自分の手を引つ込める。

——それは小さくて、でもとても大切なもの。私にとってはその「物」以上に価値の

ある「意味」を持つもの。

「八幡、これ……」

「……まあ、今回みたいな時のためにな」

八幡愛するゆるキャラ、千葉県の名を冠した赤い犬？「チーバくん」のストラップが付けられた、鈍色に光る……この部屋の……八幡の家の合鍵。

「これ……良いの？」

「いや、ぶつちやけ良くはない。バレたら騒ぐやつも居そうだしな……」

「ちよ……だったら何で渡すのよ」

すると八幡は、

「まあ、今回みたいな事がまた無いとも限らんし……。いやでも、そもそもちゃんと連絡さえ取れば……。留美、やっぱそれ返し……」

「やだー」

私は今受け取ったばかりの鍵を、胸の前、両手で包むように握り締め、その手を八幡から庇うように身体をよじる。

「……もう、私のだもん……」

「いやそれ、部屋引き払う時には返すもんだし……」

それはそうだけど！　そういう事を言ってるんじゃないかって！

「……………」

「……………」

私は、「もう返すつもりがない」という強い意志を込めて、我慢比べのように八幡を見つめて目をそらさない。

「……………ま、いいか」

やがて根負けしたようにそう言つて八幡は私の頭に軽くほすんと手を置いてわしわしと撫でた。相変わらず子供扱いされてる感じなのは面白くないけど……私は八幡に頭を撫でられると条件反射のように頬が緩んでしまう……。もう……もう！ 八幡は女の子の頭を気安く撫ですぎ！

……でも結局、相変わらずそれで嬉しくなっちゃう私——成長してないなあ。中学生にもなつて頭なでられて喜んでる「私」には……我ながら流石にどうなのって思わないでもないけど……。

つて、そんな話じゃなくて。……鍵は？ 本当にいいんだよね……。自分で返さないとか言つておきながらちよつと心配になる。

「けど、あくまでも今回みたいな時のための——非常用だからな？ 基本ここに来る時

は必ず連絡する事。いいな！」

「え、でも……急に時間空いた時にごはん作りに来たり……」

「それは有り難い……っていやだから事前に連絡をね？」

「サプライズじゃ駄目なの？」

「……男には色々あんだよ……」

聞こえるか聞こえないくらいの小さい声で八幡がボソリと言う。

「色々……？」

「……あ、いやその——買い物が必要になったり……急に用事が出来たりとか……」

八幡はなにやら慌てて今思いついたみたいに言う。

「それに、予定してた講義が休講になって早く時間が空く、なんて事もある……。そういう時なら、留美の都合が合えば予定より早く始めてさっさと終わらせることだって出来るしな」

「そうか、急な連絡って……予定が変わって会えない、みたいな嬉しくない連絡だけじゃなくてもいいんだ……」。

八幡は私のことをとても大事に思ってくれてる。ちゃんと女の子としても見てくれている。……もしかしたら、結衣さんや雪乃さんと同じくらいに。

いろはさんが前に言つてたのつて——きつとこういう事、なのかな。

それは本当の意味での恋愛感情とは違うのかもしれないけれど、それでも間違ひなく八幡が私を、特別で大切な存在として扱つてくれている——そう実感出来る、そんな魔法のようなアイテムが私の掌の中にある。だつて、女の子に部屋の鍵を渡すつて、きつとそれは特別なことのはずだもの。

私はそれを胸の前で包み込むように握りしめ、万感の思いを込めて八幡の顔を見上げる。私と目が合つた八幡は、一瞬だけ息を詰まらせたようにして……何も言わず私からすつと視線を外して窓のほうに向き直る。彼はそのまま少し体を伸ばすようにしてカーテンと窓を少しだけ開け、外の様子を伺つた。

「……雨、止んだな」

私の方を見ないまま八幡がポツリと呟く。一見素つ気ない態度だけど、私のことを無視しているわけじゃない……これは彼らしい照れ隠しだ。いつの間にかそれが分かるぐらいには私の心に余裕が生まれていた。

ふふ、これもこの小さな宝物のおかげかな？

開けられた窓から微かに雨の匂いが残る風が流れ込んでくる。

その風が思つたよりもひんやりとしていたせいかな、八幡がクシユンと一つ可愛らしいくしやみをした。

鶴見留美は未来に迷う⑤ ゆっくりと視えてくるもの

八幡が風邪をひいた。

昨日、ゲリラ豪雨でずぶ濡れになった私と八幡。予定変更を提案するメールを無視してアパートに押しかけた私にシャワーを譲り、自分はタオルで拭いたから平気だと言ってシャワーを浴びずにいたからじゃないだろうか。

そう考えると八幡の風邪は私が原因なんじゃないかと思えて申し訳なくなってくる。八幡は違うって言うてくれたけど……。ううん、間違いなく私のせいだ。だって、あの後――

* * * * *

「どうだ？」

「……………うん、触った感じでは大丈夫だと思う。思ったより時間掛かっちゃったね」

エアコンの正面に吊るされて二時間ほどひらひらと揺れていた私の服は、どうやら着るのに問題ない程度まで乾いてくれたみたいだ。

これで、素肌に八幡のスウェット一枚だけの姿で彼の横に座り——問題集を解いて、間違えた瞬間に八幡に鋭くダメ出しされる——というドキドキタイムも終了だ。

……これ、ドキドキの方向性が間違ってるよね!?

「まあ、乾燥機つてわけじゃないからな。それに待つてる間にそこそこ課題も出来たし……まあ予定通り？　なのか……」

「……今日はほんとにごめんね、八幡」

「いや、『今日か明日のどっちか』なんていいかげんな予定だったとはいえ、一方的にその予定変えようとしたの俺の方だし……。悪かったな、留美」

「八幡が悪いことなんて何も……」

「ま、お互い確認不足だったってことだな。ケータイ持つてると思うとつい約束とかアバウトになりすぎるよな……」

「……………」

……ごめんね、やっぱり私が悪いんだよ？　確認不足じゃ無いんだ。だって八幡のメールちゃんと見たのに……今日どうしても会いたくて——連絡が付かなければ……結衣さんたちと一緒に居るのを切り上げて早めに帰って来てくれるんじゃないか——

なんて酷いこと考えて、知らんぷりして真っ直ぐここに来ちゃったんだもの。

そう思ったけど流石にこれは言えないなあ。それになんとなくだけど……八幡はなんとなく解つててそう言ってくれてるような気もするし……うん……、ここは彼の優しさに甘えてしまうことにする。

そういえば、もし八幡とLINEで連絡してたなら、「既読」付いちやうからこんな風にごまかしたり出来なかつたかもしれないけど……八幡、いくら言つてもLINEやらないんだよね。

「いや……あれつて既読付いてから一分以内に返信しないと『既読スルーした』つてキレられたりハブられたり離婚届突き付けられたりするんだろ？ 対人スキルの低い俺には危険物過ぎるだろうが」

だつてさ。

八幡が言ってるのは流石に極端すぎるとは思うけど……でも離婚届の話つて実話らしいし、たしかに危険……というか怖い？ あと面倒くさい部分もある……のかな？

うん、同級生たちの間でも、「既読スルーはルール違反」みたいな空気が確かにあるみたいだし……。そんな風にお互いを縛り合うみたいなのが本当に友達なのかな……なんて、変なこと考えるようになつちやつたのは八幡の影響だね、多分。



「おし、じゃあ駅まで送るわ」

「え、別にいいよ。服だつてちゃんと乾かしてもらつたし、今日はまだ明るいよ?」

元の服に着替えた私を、八幡は駅まで送つてくれると言う。内心は嬉しいと思ひながら、
「まあ……なんとなくそんな気分なだけだ。帰りにコンビニも寄る用事もあるしな」

八幡はなんだか歯切れの悪い言い方でそう言い、さつさと玄関に向かうと私より先に靴を履いてしまった。

薄つすらと暮れ始めている駅までの道を八幡と並んで歩く。日中の暑さは影を潜め、まるでこの街を包む空気の全てがひんやりとしたものに入れ替わってしまったかのようだ。

空は僅か数時間前の豪雨が嘘だったかのように晴れて、その空も、建物も、あちこちに残る水たまりもみな夕刻の茜色に染まり始めている。

駅にほど近い小さな橋を渡る時、すうつと雨の匂いが残る風が吹き抜けた。ふと顔を上げると、欄干の上はそこだけポツカリと視界が開けていて、ずっと遠くまで見通すことが出来る。遙か東の空には天高くそびえ立つ大きな入道雲。それが陽の光を反射してオレンジ色にキラキラと輝いているのが見えた。

「あ、八幡、見て見て！ すっごく綺麗！」

私は夢中になって八幡の手を取り、ぐいっと引つ張った。

「あ、おい……」

「あ……」

手を繋ぐくらいのことですさら照れるなんて、と思われるかもしれないけど……。確かに彼と手を繋いだことなんて何度もある。けど、私はそういう時はいつも——こう、「よし！ 行くぞ」みたいに覚悟を決めてから手を繋ぎに行つてるので……。

要するにこんな風に心の準備をしないまま手で手を繋ぐのはやっぱりドキドキしてしまふのだ。

八幡は一瞬繋がれた手を見て何か言いかけたけど……そのまま何も言わずに私の隣に立ち、一緒に雲を眺めてくれた。

まるで生きているかのようにゆっくりと形を変え、色を変えする雲をどれくらいの間

見ていただろうか。私の手をにぎる八幡の手にほんの少し力がこもったような気がした。

「八幡……？」

「あんなに綺麗なのに……あの下じやさつきみたいな大雨になってるんだよな……」

見れば、そのオレンジと朱に煌めいている巨大な雲の足元は、暗い灰色に烟^{けむ}つてそこにあるであろう街の風景をすっかり覆い隠してしまっている。もしかしたら、今日私達をずぶ濡れにしたのも今見ているあの雲だったのかもしれない。

美しいものと恐ろしいものが重なり合って存在するその姿。私は……私たちはただ圧倒されたように、暫しそれを無言のまま見つめていた。

また、川面を渡る風が吹く。八幡が今度はちよつと大きなくしゃみをした。

* * * * *

やっぱり私のせいだよね……。あの時、けっこう風冷たかったし……。

今日のお昼ごろ、昨日家庭教師の次回の予定をはっきりと決めてなかった事を思い出して八幡に電話した。別にすぐじゃなくても良かったんだけど……その……こ、声が聞きたかったというか……。

まあこれはいつものことで……去年八幡と連絡先を交換してから、私は何かと理由を探しては八幡に電話をかけたリメールしたりしてらんだよね。

この一年そんな風に行っていると、なんとなく八幡が嫌がらないコツというか、ルールというか、そういったものがぼんやりと解ってくる。

①なんでも良いからはっきりとした理由を作ること。

これは「声が聞きたい」とかいうのはダメで、今回みたいに「予定を決める」みたいなのならOK。

②最初に、今大丈夫か、いつなら話せるかを聞いて、だめならその時間に向け直す。

③一回の話は短めに。代わりに、一日に何回かかけたとしても八幡は呆れはするけど案外嫌がらない。

④メールは普通に送って大丈夫。……時には長文も返してくれるし、女の子とのメー

ルにも慣れてる感じ。

意外……でもないか。結衣さんやいろはさん、最近は雪乃さんとも結構メールしてるみたいだし。

と、そんな感じ。

別に厳密なルールってわけじゃ無い。話を始めてしまえば、それでいつの間にか最初とまったく違う話になっても別に機嫌を損ねるといふようなことも無いし……。多分、八幡も私と同じでけっこうめんどくさいタイプなんだと思う。きつと何をするにも「理由」とか、「必然性」みたいなのを欲しが……。というか、うーん？　そういうのがある。と自分の行動に安心出来るんじゃないかな。

まあその話はひとまず置くとして、とにかくその時彼の声が明らかに掠かすれていたたので、もしかして……。と思ひ聞いて（問い詰めて？）みると、渋々ではあるけど、今悪寒がして熱が高い——要するに風邪をひいたことを認めた。

彼は、

『さっき葉飲んだし、今日は休みだから一日寝てれば治んだろ……。溜溜まつてるビデオでも視るのに丁度いい』

なんて余裕そうなこと言ってるけど、電話越しに聞こえてくる声は言葉に反して結構辛そうだ。

私が「今からお見舞いに行く」と言うと、八幡は「大したこと無いから」と当たり前のように断ってきた。

私は八幡に風邪を引かせてしまった責任も感じていたから、

「ちよつと顔出すだけですぐ帰るから……八幡が風邪ひいたの私のせいだし……」
そう言つて粘つてしまった。

『あー……だからお前のせいじゃないって……』

「でも……大丈夫なら大丈夫で……その、やっぱり顔見た方が安心できるし……」

私はどうしても行きたいとアピールする。

『いや、だから……』

「……………」

『……………早めに帰れよ?』

「……………八幡……………」

結局、八幡はちよつぱり呆れたような感じで折れてくれた。

『駄目って言つてもどうせ勝手に来そうだし……また昨日みたいにいきなり来られてもな……………』

うう、行動読まれてるなあ……。

『こつち着いた時、もし俺が寝てたら起こして……』

「大丈夫！ 私、鍵で入るから寝てていいよ。チーンだけ外しておいてくれれば……」

『それは今もかけてないが……。あ、もしかしてお前、鍵使ってみただけだろ』

「そ……、えーと？ あはは、そうかも」

『つたく……』

「まあまあ……ね、何か必要なものとかある？」

『……じゃあ、後で払うから500のスポーツドリンク2、3本頼むわ。あとは特には

……思いつかん』

「そう？ あ、なら……プリンとヨーグルト、どっちが良い？」

『…………プリン』

「ふふ、じゃあ今から買い物して行くから……多分遅くても2時前には着くと思う」

『おう、なんか……悪いな』

「全然。じゃ、後でね？」

* * * * *

八幡の引越しの日にも買い物をしたスーパーで買い物物を済ませる。休日ということもあり、お昼すぎの時間帯にしてはけっこう混雑していた。

頼まれたスポーツドリンクと……プリンはおーソドックスなものと、牛乳プリン・マシゴプリンみたいな変化球も合わせて五つも買ってしまった。だってどれも美味しそうだったんだもん。

まあ、私も食べるし（居座る気満々）残った分は冷蔵庫に入れておいて後で食べてもらえばいいよね。

程なくたどり着いた八幡のアパート。寝ているかもしれないのを起こしちゃいけないから——というのを言い訳にして、私はチャイムも鳴らさずそつとドアノブを捻ってみる。

やっぱり回らない。私はちよっぴりドキドキした気持ちでポケットから鍵が3つつけられたキーホルダーを取り出した。

私の家の鍵、ロッカーの鍵、そして八幡のアパートの鍵。

数秒、鍵を見つめる。ふふ、自分でも頬が緩んでいるのが——要するににやけているのが分かった。

まあ……さつき電話で八幡に言われたとおり、私はこの鍵を使ってみたかったんだよね。だって、男の人の家に合鍵を使って入るのって……その、か、「彼女」っぽいとか……えへ。

だいぶテンションがおかしくなりながら、私は鍵を差し込み、ゆつくりと回した。カチリ、と硬質な音が思っていたよりも大きく響く。

もし八幡が起きてたら、今の音で気付いちやつたかな……。でも、なるべくそつと……。私は静かにドアノブを回し、そうつとドアを開ける……と、

「ど、泥棒っ!」

誰かの強張った声が響き、正面からいきなり何か棒のようなものを振り下ろされた。

「きゃあっ!!」

反射的に私は掠れた悲鳴を上げ、目を閉じて手で身を庇うようにして座り込む。

「へっ!?!」

殴られた!……と思っただけど……あれ? 覚悟していた衝撃が来ない………?

恐る恐る目を開くと、私に叩きつけられようとしていた棒のようなもの——ビニール傘だった——は、私の額に当たる直前、数センチ手前で急停止していた。

「留美ちゃん!？」

「小町さん!？」

◇ ◇ ◇

「いや、小町びっくりしたよ」

「…………それはこつちですよ…………」

要するに…………小町さんは八幡の風邪とか関係なく、普通に休日暇だったからという理由で八幡の所に顔を見に来たらしい。

で、来てみたら八幡が風邪引いて寝込んでいたので、それじゃあ、お昼を食べてない八幡のためにお粥でも作ろうかと思いい、すぐ近くのコンビニまでちよつと買い物に出ようとしてたんだって。

そしたら靴を履こうとしていた彼女の目の前で——チャイムも鳴らさず……しかも勝手に鍵を開けて、音を立てないように入ってこようとしている不審人物（私）が——。小町さんはそのピッキング犯人を撃退すべくとつきに武器（傘）を取り……、ということだったらしい。

「うんまあ、さつきのものもちろんびつくりしたんだけど……他にも色々、ね」

「色々？」

「ええとね……その、鍵のこととか」

「あ……」

そういえば、八幡には「誰にも言うな」みたいなこと言われてたよね。……でも、小町さんには目の前で鍵開けるとこ見られちゃったし……どうしようかな。

それに今はそんな事より、

「あの……八幡の具合は……」

「多分大丈夫……今は少し寝てると思うよ？　小町が来た時うつらうつらしてたし。熱はさつき測って37度6分。ななどろくぶ朝は38度3分だったって言ってたから、一応薬は効いてるんだと思う」

「そうですか……」

うん、ちょっとだけ安心。

「あ、じゃあ小町そのコンビ二行ってくるから、お兄ちゃんのことよろしくね」

「あ、はい」

「……寝顔、ちょっと可愛いから今のうちに見ておくといいよっ♪」

「な……」

絶句する私を尻目に、小町さんは鼻歌を歌いながらさつと出ていってしまった。

八幡の寝顔……小町さんが変な言い方するからなんだかドキドキしてしまう。

私はなるべく静かに引き戸を開けて部屋に入った。

ベッドの上で静かな寝息をたてている八幡……。ボサボサの髪、熱のせいかな少し赤らんだ頬。

こうしてベッドの横に置かれた椅子に座って見下ろすと、彼はいつもより随分と幼く——私とそれほど変わらない年頃にも見える。ふふ、小町さんの言う通り可愛いなあ……。

私は手を伸ばし、八幡の額にそつと掌を当ててみる。結構熱い……。小町さんは大丈夫

夫つて言つてたけどやっぱり心配になるよ。

八幡がピクツと眉を動かし、ゆつくりと目を開けた。

「……留美……？」

「あ……ごめんね、起こしちゃった？」

「いや……。あれ？　小町が来てたような……あれは夢……か？」

「大丈夫、夢じゃないよ。今ちよつとコンビ二行つてる」

「ん。そうか……。あの薬、効くんだけどやたら眠くなつちまうんだよね……」

八幡が弱々しく首を振りながら頭を搔く。

「それで……風邪の方はどう？」

「大丈夫……とは言えんかこれじゃ。……まあ朝よりはだいぶ良くなつてきた。熱も

下がつてきてるし、寒気はもう無くなつたな」

「ん、そっか」

それを聞いてまた少しホツとする。今日はだいたいのお医者さん休みだし、ここに来るまではかなり心配だったんだよね。

そうだ、ここに來るつて言えば、

「そういえば八幡、私がお見舞いに來るつて小町さんに言わなかつたの？　鍵で入ろうとしたら泥棒と間違えられそうになつちやつたよ」

流石に「傘で殴られる寸前だった」とは言わない。相手病人だし。

「あく……すまん。なんかぼーつとしてたから……。一回寝たら……そもそも留美と電話したのが夢だったか現実だったかわかんなくなってるな……」

電話ではそんなに寝ぼけてる感じじゃなかったけど……熱が高い時なんてそんなものかもしれない。

「でも、そんなの電話の履歴見れば……」

「無い」

「無い？ 無いって……スマホ？」

「おう……。寝落ちしたみたいで……気が付いたらスマホどっか行っちゃった。どうせその辺に転がってると思うが、探すのも億劫だな……」

「はあ……しようがないなー八幡はあ」

言いながら私は八幡に電話をかけた。

八幡のすぐ近くで聞き慣れた彼のスマホの着信音が鳴っている。 ……どこだろう？ 八幡の頭の方……ここかな？

私はベッドに手をついて、八幡の体越しにマットレスと壁の隙間を覗き込む。

「あ、あったよ。ちよつと待ってね」

私は、よいしょつという感じに更に奥へと手を伸ばす……と、
「あつ……」

身を乗り出しすぎてバランスを崩した私は、八幡に覆いかぶさるように倒れ込んでしまった。

「おわつ、と。留美、大丈夫か」

衝撃はほんの僅か。八幡は私の肩を抱くようにして支えてくれた。大丈夫、どこもぶついたりしてない——けど、この体勢……心の方が大丈夫じゃないみたい……。

薄い肌掛布団越しに感じる彼の体温、微かな汗の匂い。すぐ目の前に八幡の顔。近い吐息、わずかに濡れた唇とまばらな無精髭……。

男の人、なんだなあ……。

風邪って……誰かに感染しちやえば治るとか言うよね……なら……。。
ふわふわと落ち着かない頭でそんな事を考える……。

「はち……まん……」

「おい……留……美……？」

トクン、トクンと、自分の心臓の音がやけにはつきり聴こえる……。

ふらふらと吸い寄せられるように八幡に身を寄せていく私。風邪で弱っている彼は

私を振り払うことも出来ずに……………

「たっだいまー」

小町さんの元気な声と同時に玄関のドアがボタンと開く。私と八幡はお互い飛び退くように離れた。

な、何しようとしたの私……。八幡もびっくりしてあんまり抵抗してなかったみたいだし、もし小町さんがもう少し遅かったらあのまま……………。

残念なようなホツとしたような気持ち。

とにかくここにも、私はずっとここに座ってましたとでも言うように足を揃えて椅子に座り、八幡は半身を捻って、さっき私がスマホを見つけたベッドと壁の隙間に突っ込むようにうつ伏せになった状態。

そこですつと引き戸をあけて小町さんが入ってくる。

「お？ お兄ちゃん起きたんだ……………って、何やってるの……………」

「……………いや、スマホ落つことしちまってな……………」

八幡は言い訳みたいに言って自分でスマホを拾った……まあ嘘ではないし。
「ふうん」

小町さんはさして興味無さそうに言い、

「ね、留美ちゃん。こつち手伝つてくれる？」

今度は私にそう言つてニッコリと笑つた。



「小町が作る時は分量とかてきとーなんだけどね、お出汁はこんくらいをおたま一杯のお湯で溶いて……」

私が今小町さんから教わりながら作っているのは、お粥があまり好きじゃない八幡でもけつこう気に入つて食べるという、「甘い梅干しのお粥」だ。

正しくは「はちみつ漬け梅干しのお粥」らしいんだけど、比企谷家ではそれで通つて
いるんだって。

小町さんがコンビニで買ってきたのはこのための材料、「はちみつ南〇梅四個入り」
「……あとは粒の大きさ次第だけど、だいたい一粒で丁度かな。種抜いて、小さくちぎってまぶすように入れて軽く混ぜる……そう、そのくらいいいよ。」

……あと、無ければ塩で良いんだけど、普通の甘くない梅干しをほんの少くし入れて塩加減を調整して……と。あとはもう一回軽く火にかけるだけ……。ね、簡単でしょ。これ、食欲無いときはさっぱりしてて良いんだよ」

「あ……梅のいい香り……美味しそう」

「でしょー。これ、冷めてもイけるから猫舌でも大丈夫だしね」

あ、なるほど八幡が気に入るわけだ。

小町さんのおかげで「甘い梅粥」は無事完成。

彼女は小さなスプーンでお粥を掬うと、フーフーと数回吹いて冷まし味見をする。

「んっ、いい塩梅っ。留美ちゃんって手際も良いし、料理のセンスあるよね」

「小町さんの言うとおりにやっただけだよ？」

褒められるのは嬉しいけど、大げさじゃないかな、そんな風に思っただけだと、小町さんがこぼすように言う。

「それがねー……隣で同じように教えても、人間が食べられないあまり美味しくないモノを作ってしまう人も中には居るわけですよ……」

言つて小町さんはがっくりと肩を落とす。

そ、そうなんだ……。誰の事かは敢えて考えない事にしよう。

「じゃあ、小町洗濯物やつつけちやうから、留美ちゃんはこつちお願いね」

小町さんにそう言われ、私は出来上がったお粥を小鉢によそう。ふわん、と梅と蜂蜜、お出しの甘い香り。

「食べ終わったら薬飲むように言つてね」

「はい」



「八幡、具合どう？ 少し食べてお薬……。ふ」

「なに笑つてんだよ」

なにか文句でも言いたげに睨む八幡。でもちつとも迫力がない。彼のおでこには、

さつき小町さんがコンビニで梅と一緒に買ってきた冷えピタが貼られていて、さつきより余計可愛く見える。

八幡は最初抵抗したものの、結局小町さんには逆らえず最後はおとなしくおでこを差し出したんだ。

ミニテーブルをベッドサイドに寄せ、梅粥とお吸い物、水と薬を用意して私は先程の椅子に座った。

さつき変な雰囲気になってしまったせいで、二人だけで面と向かうと気恥ずかしい……というかなんだか落ち着かない。

私は照れ隠しと……それから悪戯心で、

「八幡ちゃん、ごはんでちゅよ〜」

そう言つてわざとらしくにいつと笑う。

「留美お前な……」

八幡が抗議の声を上げるのを微笑つて流し、私は手に持った小鉢から木のスプーンで梅粥を一口掬い、軽くフーフーと吹いてから八幡の口元へと差し出した。

「はい、あーん」

「ちよ……一人て食べるっての」

「あーん」

「だから……」

「あーん」

「……………」

「あーん」

私をやめようとしなないのを見て彼は抵抗するのを諦め、やれやれという顔であーんと口を開ける。

ひよいとスプーンを差し入れるとぱくんと口を閉じ……ちよつとだけ甘酸っぱそうに頬をすぼめ、少し味わうようにモグモグ。それから満足そうにゴクンと飲み込んだ。

良かった、どうやらお気に召したみたい。

「塩加減とかどう？　小町さんに教えてもらいながら作ったんだけど……」

「おお、これ留実が作ってくれたのか。凄いな、小町のと変わらんぞ」

良かった。でも八幡の「凄い」の基準は小町さんなんだなーと思っただらなんだか笑ってしまった。

あーん、ひよい、ぱくん、モグモグ、ゴクン。

あーん、ひよい、ぱくん、モグモグ、ゴクン。

あーん、ひよい、ぱくん……………。

ふふ、動物に餌付けしてるみたいでなんだか楽しくなってきた。結局彼は小鉢一杯分のお粥をきれいに食べてくれた。

「もう少しだけならお代わりあるけど……」

「いや、ずっと寝てたからそんなには食えん」

「ん、あとはお薬だね……」

「その、ごちそうさん。旨かった」

「うん」



デザート、と言うほどのものでも無いけど、小町さんと三人で私が買ってきたプリンを食べる。ちなみに八幡はやっぱりと言うか……一番普通の甘いプリンを選んで美味しそうに食べてくれた。

それから八幡に薬を飲んでもらい、その後小町さんと私は、あまり煩うるさくならないようにと気をつけながらお互いの近況などの雑談をして過ごす。八幡はぼんやりしながら

私たちの話を聞くと、もなしに訊いていたようだった。

最初は私たちの話につっこみを入れたりしていた八幡だけど、気が付くと静かに寝息を立てていた……またスマホを手に持ったまま。

もう、しようがないなあ。

私は彼を起こさないように気を付けながら彼の手からスマホをそつと外すようにして、八幡の頭の上、ベッドに作り付けの棚の上へと乗せる。小町さんが肌掛布団を八幡の肩のところまで引つ張り上げた。

「ん……もう食えねーよ……」

八幡の寝言……。ふふ、どんな夢を見てるんだらう。

私は小町さんと顔を見合わせて、二人でくすくす笑ってしまった。

その後小町さんは、かけうどんのスープを作り、麺はさつと茹でて冷まし、器に入れてラップを掛けて冷蔵庫の目立つ所に入れた。

夜八幡が起きた時、ちよつと温めればすぐ食べられるようにと考えたのだらう。

「じゃあ、家のこともあるからそろそろ小町は帰るけど……留美ちゃんは？」

「私は……もう少し居たいです」

「んん……それじゃ、もう少しお兄ちゃんのことよろしくね。うどんの事とかは一応メ

毛書いてここに置いとくから、お兄ちゃん起きなくても適当な時間に帰るんだよ？」

「はい。明日は学校ですし……」

「うんうん。あと……『鍵』よろしくね！」

小町さんがフンと笑う。

「あの、小町さん……。鍵のことなんですけど、その……」

「あはは、いーよいよ留美ちゃん。その話は、お兄ちゃんが元気になってから弄り倒して聞く予定だから」

ほっとしたような余計心配なような……。

そんな感じに小町さんは帰って行った。

八幡の寝顔を見つめる。静かな呼吸、まだほんのりと赤い頬。二人きりの静かな部屋。

小町さんも帰っちゃったし、八幡も寝てるし、なんだか手持ち無沙汰になっちゃった。もう帰ろうかな……。

でも、もし八幡が目を覚ました時に小町さんも私もいなくなったら——きつと寂しいよね……うん、八幡が目を覚ますまではここにしよう。それでちゃんと「また来

るね」って言うてから……。

それにしても八幡よく寝てるなあ。眠くなり易い薬、かあ……。

ふわあ、八幡の顔見てたら、なんだか私まで眠くなつてきちやつた。

◇
◇
◇

目の前のお皿に色とりどりのショートケーキが3つ。

イチゴのミルクフィューユ、抹茶のシフォン、チョコレートモンブラン。

どれも美味しくて、私は行儀悪く次から次へとそれを平らげていく。

「さあ、お次はこちらをどうぞ！」

食べ終わるとすぐに次のケーキがお皿に追加される。今度はバナナのミルクレープと紅茶のテイラミスかな。

本当にみんな美味しいけど、さすがにお腹いっぱいになってきた。これ食べたら終わりにしよう……。

そう思ったのに、

「ほら留美、次だ」

何故かパティシエ姿の八幡がそう言って、前のケーキがまだ残っている私のお皿に次のケーキをひよいと乗せてしまう。

しかもこれ……梅干しのショートケーキ!? 見た目はまるつきり苺のショートケーキ。ただしトップには苺の代わりに大きな梅干しがデーンと乗っかっている。

「ちよ……お腹いっぱいだよ」

そう言って私はお皿を置いてその場を逃げ出す。

「おい留美………」

「留美………」

「留美………」

相当遠くまで逃げたはずなのに、私を呼ぶ八幡の声だけがどこまでも追いかけてくる。

「留美っ」

「だから、もう食べられないよー」

「……留美いい加減起きろ」

「……………ふえ……………」



気がつくと私は八幡のベッドに突っ伏してすっかり眠ってしまったようだ。

「なにが食べられないんだ？」

寝言聞かれたっ!? 思わずガバッと起き上がると、ベッドの上で半身を起こした八幡がくつくつと愉快そうに笑っている。

「つゝゝ……」

は、恥ずかしいところ見られちゃった……………。

「悶^{もだ}えてるとこ悪いが……………」

「悶えてないもん！」

「あー……………まあいい。とにかく時間見ろ」

言われて私はベッドの柵に置かれている目覚まし時計の方に振り向く。

07:10

「え？ 七時過ぎ!？」

窓を見ればカーテンも引かれていないのに、部屋の中はすっかり暗くなってしまった。 ……私、どれだけ寝てたのよ……………。

「こんな時間！ 帰らなきゃ。あ、その前に小町さんのうどん温めて……」

「うどんはいいから。もうだいぶ楽になったし自分でできる」

「熱は……」

「今測って37度ななどジャスト」

そっか。治ってきてるみたいで一安心。

◇ ◇ ◇

私が帰り支度をしていると、

「しかしけっこう遅くなっちゃったな……。着替えて駅まで送るわ」

八幡がとんでもないことを言い出す。

「何言ってるの八幡？ 駄目に決まってるでしょ、大人しく寝てて」

「いや、流石にもう暗いし、それに熱もだいたい下がったしな」

「それは薬が効いてるの！ 今無理したら風邪ぶり返しちゃう」

「けどな……」

「駅までそんなに遠いわけじゃないし、そんなに心配しなくても大丈夫だよ。もう子供

じゃないんだから」

「……子供じゃないから心配なんだろうが」

八幡が小声でボソリと言う。

「え……」

それって……あう、その……。

「すまん、変なこと言った……。まあ何だ、留美も少し自覚を持った方が良かったっ……かな」

「でも流石に今日送ってもらうのはちよつと……。あ、そうだスマホー」

「スマホ？」

「うん。ね、八幡。今から八幡のスマホに私のと同じアプリ入れてもらっていいかな」

「別に構わんけど……」

そう言つて八幡は私の手に自分のスマホをひよいと乗せる。

「え！ 私がやるの!？」

そんな簡単に他人にいじらせるなんて……。

「ロックは今外した。分からんことあつたら訊いてくれ」

もう……。私は彼のスマホを操作し、とあるアプリをインストールする。



「なんだこの『る』って?」

八幡のスマホに新しく追加されたアイコンは水色の「る」という平仮名がパステルピンクで縁取りされているという図柄。

「オリジナルアイコン。可愛いでしょ」

「いやそういう意味じゃなく……」

「えーとね……とりあえず起動してみて」

八幡はベッドの端、私は椅子をベッドギリギリまで寄せ、肩を寄せ合うようにして二人で八幡のスマホの画面を覗き込む。

黄色いシークバーが一瞬だけ表示され、すぐにアプリが起動した。

「これは……地図?」

画面上にはこの辺りの割と詳細な地図が表示され、青い丸と赤の人形が交互にゆっくりと、まるで点滅するように表示されている。

「えーとね、青が現在地で、赤いのが私。薄い点線みたいなのが足跡」

「おい、これって……」

「お父さんが『いまココアプリ』っていうのに私のスマホを登録してて……パスワードを入れると私を見守る事が出来るんだって。たしか5台まで」

「勝手に俺を登録して良いのかよ……。それに、駅に送る話じゃ無かったのか?」

「お母さんは八幡なら良いって。だから八幡はこれで私のこと見守っててよ。駅まで——家に着くまででもこれから毎日ずっとでももちろん良いけど……」

「いやそれ、色々とまずいだろ……」

「でも、八幡こういうの好きなんじゃないの? 去年八幡の部屋で読んだ小説に、恋人の位置情報とか心電図とかをずっと見守ってる——みたいなヒロインがいたでしょ。八幡、部屋にそのヒロインのフィギュア飾ってたし……あ、心電図が無いとダメとか?」

「俺、どんな特殊性癖なんだよ! リアルタイムで心電図見守って喜んでるとか普通に怖いだろうが」

「そう?」

「そう! それにフィギュアはゲーセンで取ったやつだし、一体だけじゃなくちゃんと黒の剣士さんと並べて飾ってあるから!」

「それ、わざわざ強調するようなことなの?」

「いやそう言われると……でも何故か言わなきゃいけないようなプレッシャーがどこからともなく——『閃光さんのパートナーは黒の剣士さんです(これ重要)』——みたい

な感じ、か？」

「……………」

「それはともかく、だ。大体だな、ずっと居場所を見られてるのって落ち着かないし嫌だろ？」

「うーん？ 私は…………八幡に見てほしいかも？」

「…………つ、何いってんのお前…………」

今、八幡照れた？ それとも引いたかな…………？

「あ、お前じゃなくて留…………」

「それはもう良いだろ…………」

「とにかく、今日はこれで見てくださいれば良いから、大人しく休んで。今からこっち出るってお母さんに電話もするし、うち着いたら八幡にも電話するから…………でも寝てるかな？ 起こしたら迷惑だよ…………」

「今さら別に迷惑とか思わねえよ。連絡無いほうが心配になる。…………面倒ならメールでも構わんし」

「電話、する。…………だって…………声聞きたいし」

「声って……今話してんだろうが」

「……でも……それでも、だよ？」

「……おう……」

ふふ、なんだか変な会話。照れくさいというか……心の奥がムズムズする感じ？

この雰囲気も名残惜しいけど、いつまでもこうしてて、ほんとに遅くなつちやうとま
ずいしなあ……。

「……それじゃ、帰るね」

私は未練を断ち切るように立ち上がり、八幡の手の指をそつと握る。

「ん……」

そう返事をして八幡は立ち上がろうとする。多分ドアまででも送ってくれるつもり
なんだろう。

私はそんな彼を制し、

「このままでいいよ、そのまま寝てて。ちゃんと鍵かけて帰るから」

そう私は笑って言ったんだけど……。

「そう……か」

信じられないことに、八幡は少し寂しそうな顔を見せてくれた。私の指先を握った彼
の手に、ほんの一瞬だけ「離れがたい」とでも言うかのようにキュツと力がこもる。

「気をつけて帰れよ」

「うん、おやすみなさい。あと、お大事に……だね」

私たちは十秒ぐらいかけて、ゆっくりとお互いの指を解いた。

◇ ◇ ◇

そして私は八幡のアパートを後にする。

別れ際に見せてくれた八幡のあの顔……。

八幡が自分のことを「ぼっち」だとか言いながら実はけっこう寂しがりやだったり、普段の態度とは裏腹に人とのつながりを大事に思っていたりすることは……この一年以上近くにおいてよく知ってる。

でも八幡はそういう部分をなかなか表に出そうとしないんだ。だから私たちは、彼の言葉や態度の端々から透き見えて来るもので八幡の心を推し量るしかない。

だけど……風邪でまだ少し熱があるせいかな？ それとも薬でぼうつとしてるせいかな？ 八幡は、「私が帰るのは寂しい」という態度を全く隠そうとしてなかった。

まるで今から留守番をさせられる犬みたい……恋人とのデートの別れ際みたい。

それって……それって……。

どこか夢見心地で駅までの道を歩く。実際問題として、深夜ならともかくこの時間なら人通りも多いし八幡が心配するほどのことは無いと思う。

それでも、いつもなら八幡がとなりを歩いて送ってくれる道を一人で歩くのはやっぱり寂しい。寂しい……けど、今、スマホのアプリで一生懸命見守ってくれてるのかな、とかそんな姿を想像したら勝手に頬が緩んでくる。

声を上げて笑いそうになるのを何とかこらえて顔を上げると、仕事帰りらしい二十代半ばぐらいのお姉さんと目が合ってしまう。う……一人でニヤニヤしながら歩いてるのをばっちり見られてしまった。恥ずかしいなあ、私。

でも今なら、そんな恥ずかしくって格好悪い自分も許せるような気分。なんの根拠もない無敵感が私を包んでいる。

昨日雲を眺めた橋に差し掛かると、前方に駅の明かりが見えてきた。ふと思い付いて空を仰ぐ。……位置情報の人工衛星ってどのへんにあるのかな……ね、八幡見てる？

私もうすぐ駅に着くよ。

家に着いたら……八幡と電話で何を話そうかな。

*
*
*
*
*

週明け。放課後の教室。

今ここにいるのは、藤野さん、佐川さん、津久井さん、そして私の四人だけ。

津久井さんに「今日ちよつと残つて欲しい」と頼まれたんだけど、どうやら話があるのは、私の正面に立つてさつきから一言も話さない藤野さんのようだった。

先週の「告白」の裏事情みたいなものを聞いてしまつている私としては……彼女とただ向き合つているというのはなんとなく気まずい。

藤野さん……？

佐川さんと津久井さんの二人は一步引いた場所で心配そうに見てるけど……どうやら口出しする様子はないようだ。

やがて覚悟を決めたように藤野さんが口を開く。

「鶴見さん、ごめんなさい！」

彼女は一気にそう言つて、私に頭を下げた。

「え、あの……。謝ることなんて何も……」

だつて彼女は辻堂くんの告白の仲介をしただけで……。彼は彼女の想い人。むしろ彼女のほうがよっぽど苦しい思いをしたはずなのに……。

「ううん……。私、知つてたの。鶴見さんに好きな人が居るつて事。佐川さんがね、鶴見さんは小学校の頃からその人一筋みたいだよつて」

私ははつとして佐川さんを見る。彼女はなんとも言えない表情で私に両手を合わせるので、私は微笑つて首を左右に小さく振り、気にしないよとサインを送る。

そうか、佐川さんはあのクリスマスイベントのとき一緒だったし……なら、私と八幡の事は知つてるよね……。

絢香の話だと、実はあの時演劇班の小学生みんなで私の事応援？してくれてたらしいし。

藤野さんは一度ぎゅつと唇を引き結んで下を向き……。静かに言葉を続ける。

「だからあいつが振られるのわかってて……わかってたから応援するって言ったの。

でもほんとに告白する事になったら……上手くいっちゃったらどうしようって心配になって——」

彼女の声が止まる。

藤野さんは、言葉を探すかのように一度宙を見つめ、それから、

「あの時……鶴見さんの顔見てあいつが……冬也が振られたのわかって、私ホツとしたの。……安心したの、嬉しかったの。」

——チャンスかも、なんて思っちゃったの」

「……………」

「最低……だよね」

そう……かなあ？ 言われてしまえば確かにそうかもしれない。

でも——藤野さんはそんな風に言ったけど……私はなんだかほっとしてしまっていた。

だって……自分の好きな人の恋を応援するなんて私には出来ない。そんなの想像だってしたくない。

自分の気持を抑えてそれが出来た藤野さんはなんて凄いんだろう、私はなんてちっぽけなんだろう——そんな風に感じていたから。

だから——同じなんだってちよつと安心しちやつたんだ。

断られるのがわかつてる告白を辻堂くんに勧めた藤野さん。

結衣さんや雪乃さんとの時間を邪魔するみたいに八幡のアパートに押しかけた私。

「私も……一緒だよ……」

「一緒？ 鶴見さんが？」

藤野さんは驚いたように顔を上げ、なんだかキョトンとした顔をしている。

うん、一緒。きつと私たちは一生懸命に恋していて、散々悩んで、時にはずるだつてするんだ。

よく「恋する女の子は輝いて見える」とか言うけど——案外その内側では暴風雨が吹き荒れていたりするのもかも。

私もちゃんと言わなきゃね。私も——ずるいんだよつて。

まだちよつとだけ怖いけど——彼女たちならきつと大丈夫。

「ね、藤野さん、聞いてくれる？ ……それに佐川さん、津久井さんも」

——八幡の事を。
そうして私は彼女たちに話す。今まで勝手に壁を感じて言うのを躊躇っていたこと

◇ ◇ ◇

「はあ……やっぱりあの比企谷さんか。あの頃からって……鶴見ちゃんも一途だねえ」

佐川さんは何故か嬉しそうに言う。

「でもさ……ライバル？ に鶴見さんより綺麗な人が何人もいるって、ちょっと信じられないんだけど……」

「ああ、それは私も思った。……だって鶴見さんよりすごい美人ばかりって……」
津久井さんが首を傾げながら洩らした言葉に、藤野さんが頷きながら同意する。

私が何と返したものと言葉に詰まっていると、

「いやー、それが結構マジなんだよねえ……。まあ？ 今の鶴見ちゃんなら負けて無

いと思うけど……。あのクリスマスのは、確かに比企谷さんの周りにいるの、すつごく綺麗で可愛い人ばかりだった。

特に同じ部活だつて話の二人が比企谷さんと仲良さそうにしててさー、……あ！　そういえばあの時鶴見ちゃんやめちや機嫌悪かったの思い出した」

佐川さんは私をからかうようにそう言つて悪戯っぽく笑う。

ちよつ、変なこと思い出さないでよ……。

ふふ。でもあのクリスマススイベントの時はまだ佐川さんとこんなに仲良く話をすることはなかった。

小学生の時は、学校は同じでも違うクラスだし、顔見知り程度の関係でしかなかった彼女……。それがいつの間にか軽口を言い合える友達になつてる。

そして私は今日また一歩だけ進む事ができた。

——私が、八幡の事を絢香や泉ちゃん以外の人にも話せるようになる日が来るなんて……。

もちろん全てを話せた訳じゃない。例えばアパートの合鍵を持つてる事とか……まだ話せないなつて思つてしまう事はたくさんある。

いつかは……そんなことも打ち明けられるようになる日が来るのかな……。

でも……うん、焦らなくていいつて解つたし。だつてこれから——たとえ立ち止まつたとしてもまた私は進む事ができる。

それは今回の事だけじゃない。進路の事だつて八幡との事だつて——きつと一歩ず

つでいいんだ。

八幡を好きだって自覚したばかりの頃は、彼が私を好きになってくれる未来なんてとても考えられなかった。

もちろん夢は見てたよ。八幡と恋人になったら、結婚したら……そんな事を勝手に想像してドギマギして……そんな子供っぽい……たわいもない夢を。

でも……昨日、お見舞いの時の八幡……。

もしかしたら私は……少しは期待してもいいのかな、八幡の気持ち。私と八幡がずっと一緒に居られる未来があるかもって、本気で期待しても……。

教室の窓から見える晴れた空。校庭の木々は風に揺れ、雲の流れも早い。私が外を眺めながら「ふふっ」と笑ったら、佐川さんたち三人は不思議そうに顔を見合わせた。

幕間 オムニバス① 重なる気持ち

大切な人が去って行く——彼が目の前から居なくなる。

……いつかこんな日が来るってことはわかった。

皆が言う、「自然な事だ」と。「早いか遅いかの違いだけだ」と。

私だって頭では理解してる。けれど心の方が追い付いていないのだ。発作的に暴れなくなるのを、泣き出したくなるのを、奥歯を強く噛んでどうにか押さえ込む。

反して彼の方はもうとつくに覚悟を決めてしまっているようだ。

どうして？ 私的事を世界で一番好きだと……愛しているとさえ言ってくれてたのに。

私がどんな我儘を言っても聞いてくれたのに、どうしてこのままずっとそばにいてくれないの……。

ううん、今さら言ったところで何もかも遅いのかも知れない。だって……彼がここを去るまでに残された時間は 一日を切っているのだから。

肃々しゆくしゆくと現状を受け入れた彼——私とは決して結ばれることの無い初恋の相手——は、感情の読めない、どこか飄々とした顔でこう言った。

「——小町、コーヒー飲むか？」



お兄ちゃんがこの家からいなくなる……。

「八幡も学生のうちに独り暮らしを経験しといた方が良いんじゃないか？」

「そうねえ。社会人になると、辞令が出て2週間後には海外に引っ越しとかそんな事も
あるみたいだし……東京なら……」

「何でだよ。ちよつと遠いつつても家から通えるのに、わざわざ余計な金掛けてまで……」

「だから、そういうのも含めて社会勉強になると……」

二月末、お兄ちゃんの第一志望の大学合格発表の日。

さすがにこの日は両親とも仕事を早めに切り上げて帰って来て、私もお兄ちゃんが好きなメニューばかりを食卓に並べて——と、家族だけのささやかな祝賀会という雰囲気だった。

サーブスで、大きなオムライスに、ケチャップで

「合格おめでとう（はあと）」

と書いてあげたら、お兄ちゃんはなんだか凄く感動してた。

……そういえばお兄ちゃんってトマト嫌いなくせにケチャップは結構たくさん使ってたよね。何がそんなに違うのかねー？　甘いから？

とにかくそんな、わが比企谷家にとつてちよつと特別な日に、言う方も言われる方も唐揚げを口に入れたままという緊張感も何もない状況が始まった、お兄ちゃんが独り暮らしをするという話。

最初はほんの冗談みたいなものだと思ってたんだよ。

なのについての間にか話にはトントン拍子に進んで、留美ちゃんのお母様がつてでアパートも見つかって——お母さんは何でわざわざ千葉^{こっ}葉^ち県にしたのつて呆れてたけど——気が付けばもうすっかりお兄ちゃんの引越は決定事項になって……今さら私が「やっぱり止めない？」

なんて言える雰囲気じゃなくなっちゃったんだ……。

◇ ◇ ◇

「……そういえば小町、明日手伝いに来てくれるんだっけ？」

お兄ちゃんの言葉に、「もちろん行くよー」と答えようとして……言葉に詰まった。

「ん……？」

実は先週いろはさんから、「引越し当日にサプライズで押しかけパーティーしたい」という相談というかお願いをされて、OKしちゃってるんだよね……。留美ちゃんはアパートを紹介してもらった関係もあって元々手伝いに来てくれる予定だったし、そうなる……引越し荷物も少ないし人手は余る位だろう。

お兄ちゃんと二人で向こうに行つて……パーティーに参加して……帰りは私一人……。

まあ帰り道は留美ちゃんやいろはさんも一緒かもだけど……それは余計に駄目だ。

だって……だって私絶対泣いちゃうから。それどころか帰りたくないって駄々こねてアパートの柱にしがみついちやうまである（お兄ちゃん風）

だから……

「ごめんお兄ちゃん。明日中学校のときの友達から遊びに誘われちゃって……クラスで総武に入ったの小町だけだったからなかなかみんなで会う機会ないし……」

「そう……か。ま、しゃーない」

中学の時の友達に誘われてるのは本当だけど、ほんとは今の今まで行かないつもりでいた。一応「行けたら行く」みたいな、どっちかと言えば「行かない」に近いよーな曖昧な返事にしてあるけどさ……。

「まあ、お兄ちゃんの相手はいつでもしてあげられる訳だし、荷物も超少ないし。……ほんとにあれだけで良かったの？」

そう。お兄ちゃんの荷物は本当に少なく……宅配便の業者さんが引越つ越しプラン用に用意してる小さな小さなコンテナでも隙間が出来てしまう程度の量しか無かった。

「ま、ベッドとか机とかは向こう用に1人て簡単に組み立てられるやつ買って、それが明日届く予定だからデカイ物ないし。……お袋もこっちはこのままにしておいて良いつて言ってくれてるしな」

「向こうは留美ちゃん来てくれるんだよね？　なら小町がいなくても人手は足りそうだもんね」

お兄ちゃんには言えないけど、いろは先輩も来てくれるみたいだし、きつとあの二人なら甲斐甲斐しくお兄ちゃんの世話を焼いてくれるだろう。

「中学生に頼るのもどうかとは思いますが……確かに俺より留美のほうがしつかりしてるからなあ」

なんて、お兄ちゃんはあつさりと納得してくれた。

あとと事前「お兄ちゃんと一緒に行く予定だよ」と伝えてあつた留美ちゃんという先輩への連絡だ。私は少しだけ考えて……、

『小町が手伝いに行っちゃうと妹離れの出来ないダメダメな兄が小町をお家に帰してくれなくなっちゃいそうなので、心を鬼にしてそちらには行きません。あと、サプライズという話だったのでまだいろはさんの事と引越しパーティー？　のことはお兄ちゃんには話してません。』

まあ留美ちゃんというは先輩になら料理とかも安心してお任せ出来るし……うちの兄がご迷惑をおかけするかもですがよろしくお願いしますねー。あと、お母様にも今回事ごとお礼を言っておいてね』

と、そんな風な内容のLINEを送る。電話にしようかとも思ったんだけど、声で無

理してるのがバレそうで……。留美ちゃんもいろは先輩も変に鋭いところがあるからなあ……。それに比べると雪乃先輩と結衣先輩は案外ちよろ……。ピユ、ピユアというか……。

次の日、引越し当日の朝。お兄ちゃんは、

「小町は午後からか？　じゃあ戸締まり頼むな」

と、まるで普段と変わらない「いつてきます」を言うような軽い感じが出ていつてしまった。

……そりや確かにここから一時間もかかんないトコだし……。でもでも、仮にも引越したよ？　今日からこの家には帰って来ないんだよ？　もつと何かこう……。

「……小町的にポイント低いよ、お兄ちゃん……。」

家を出るというのにあっさりし過ぎな態度だったお兄ちゃんにはもやもやした気持ちを抱きながらも、どうにか平気なふりで彼を見送った私は……。その後何もやる気が起こらず自分の部屋でベッドに寝転がり、ただぼーつと天井を眺めていた。こんなの「小町」らしくないって思っても、何かをやるうという気力が湧いてこない……。

まったく、お兄ちゃんがいなくなっただけくらいで我ながら情けないと思うけど……でも……。

家の前を通り過ぎる車の音……それから壁掛け時計の秒針の音が耳障りなほどはつきり聞こえる……。

私以外に人の気配が無い。そんなこと、両親ともやたら忙しくしてるこの家では珍しい事でも何でもないはず。

でも……でも今日は、なんだか……静かだ……な……あ……。



どこかで微かな物音がする……。

「ありや……」

……いつの間にか眠っちゃってみたい。

もうお昼過ぎか。そういえば、中学のときの友達と皆で遊ぶ予定……いいや。元々「お兄ちゃん引越しの手伝いあるから、早めに終わったら後半顔出すね」って言うてあっただけだし、なんかもういいかなあ。

起き上がるのも億劫で右に左にとゴロゴロ寝返りをうつ……と、また物音……あれ？
なんか壁のすぐ向こう……お兄ちゃんの部屋からみたいだけ……。もしかして忘
れ物でもしたのかな！

もう、お兄ちゃんはしようがないんだからと、私は弾む足取りで廊下に飛び出し、半
開きになっていた兄の部屋のドアを開いた。

でもね、そんな簡単にお兄ちゃんが帰って来るわけ無い。いくら近いとはいえ、「引つ
越しちゃった」んだから……。

お兄ちゃんの部屋で私を迎え入れてくれたのは我が家の愛猫、「カー君」ことカマクラ
だった。

ほとんど荷物も減って無いはずなのにやけにがらんとして感じる部屋。

ベッドにすり寄るような位置でぼつんと佇んでいた彼は、私の顔を見るなりちよつぴ
り寂しげに「みー」と一言鳴いた。

彼も猫なりに何かを察しているのかもしれない……。それとも単に私がさみしいか
らそういう風に聴こえるだけのかな。

カー君を抱き上げ、私はそのままお兄ちゃんのベッドにコロんと倒れ込む。そのまま
一人と一匹はくつついて丸くなった。

不思議と暴れもせず大人しくされるがままになっているカー君の背中を撫でてあげると、彼は気持ちよさそうに鼻を鳴らしてゆっくりと目を閉じる。

その顔を見ながら、私はカー君がこの家にやって来た頃の事を思い出していた……。

* * * * *

私は——子供の頃家出をしたことがある。

あれは小学校二年生に上がってしばらく経った頃で、きっかけは……実はお兄ちゃんが四年生になった事だったんだ。

今でこそ子供二人をほったらかしにして忙しそうにしてる両親だけど、さすがに私が小学校に入るまではそういう訳にもいかなかったんだろう。

母は午後は在宅勤務が出来る部署に籍を置き、保育園の送り迎え等もやってくれた。
た。

けれどやがて私が小学校に上がると、母は五時定時の部署へと移動し、それと同時に私たち兄妹はいわゆる「鍵っ子」になったんだ。

三年生のお兄ちゃんと一緒に帰宅して、留守番しながら6時頃帰宅する母を二人で仲良く待つ。そんな生活が約1年続き、当たり前だけど私は二年生に、お兄ちゃんは四年生になった。

それまでの私にとって、お兄ちゃんはいつでも隣りにいてくれるのが当たり前存在だった。登校も下校も一緒。お風呂も寝るのも一緒。遊ぶのも、テレビを見るのも一緒。男の子にとってはつまらないだろうおままごとも嫌な顔をせずやってくれたし、女の子向けのアニメの「プリキュア」だって一緒に見てくれて、プリキュアごっこの怪物役だってやってくれた。

……………ま、まあプリキュアは小町が見なくなつた今でも見てるみたいだけど……。

そのころの私とはかくお兄ちゃんが大好きで、お兄ちゃんがどこに行くときでも後をつけていく兄ベツタリな妹だった。その頃はまだお兄ちゃんの目も澄んでいたし、私の髪もサラふわのセミロングで……自分で言うのもなんだけど、見目にも可愛らしくて

仲の良い兄妹だったと思う。よく近所のおばちゃんに、

「小町ちゃんはお兄ちゃんのお嫁さんみたいだねー」

なんて言われたりもしてて、それがすっごく嬉しかったのを覚えてる。

白状すれば——小学校に上がる頃までは本気で「大きくなったらお兄ちゃんと結婚するんだ」って思ってた。

それが……いつだったか、親戚の誰かから「兄妹では結婚できないんだよ」と教えられて、あまりのショックに大泣きしたのは消し去りたい黒歴史というやつだ……。

うわ、思い出しただけで床を転がりまわりたいくらい恥ずかしくなってきたよ。

と、とにかくつ、お父さんやお母さんがどんなに忙しそうにしても、小町にはお兄ちゃんがいてくれたの。

でも……：四年生以上と三年生以下では、時間割りのコマ数が違う日が週に2日ある。

その上、上級生は委員会とか合唱コンクールの練習とかが始まってそれで帰りが遅くなる日もあり……：結果、私が1人で帰り自分で鍵を開け、誰もいない家でお兄ちゃんやお母さんの帰りを待つという時間が一気に増えちゃったんだ。



その日は些細な事で友達と喧嘩して、帰り道では真つ黒い大きな犬に吠えられて……と色々巡り合わせの悪い日だった。

半分泣きそうな気持ちで家に帰り着き、鍵を開けて中に入ったものの、私を出迎えるのはシーンとして薄暗い、1人で居るにはあまりにも広く感じる家。

「……ただいま……」

そう言ったところでもちろん返事は無い。

お兄ちゃんもお母さんもない……。こらえていた涙がぼろりと溢れた。

「……誰もいないおうちなんて……。ヤだよ……」

その時は寂しくって辛くって無性に悲しくなつて、……今にして思えばどうしたらそんな考えにたどり着いたのか、

「家出いえてしちゃおう」

小学生だった小町はそう思っちゃったんだよね。

子供なりに本気で家を出ようと思つていたのか、はたまた家族に心配してほしかっただけなのか……自分の事だというのに、その頃どんな思いで居たかなんてもう思い出せもしない。

覚えているのは、ただただ、小町以外誰も居ない家のどうしようもない寂しさだけ。

さあ、家出すると決めたは良いけどどこに行けばいいんだろう……。あんまり家の近くだとすぐ見つかってしまうし、かと言って知らない所に行くのは……………。

ちよつとだけ考えて、いい場所を思い付いた。

それは、小町がまだ幼稚園のころに、お母さんとお兄ちゃんと一緒に一度だけ遊びに行つたことがある隣の大きな公園。

あの時は母のお届け物かなにかの用事に付いて行って、そのついでに感じて立ち寄つたんだっけ。結構遠かったような気もするけど、その時だつて歩いて行つたんだし……………。

トイレも水呑み場もあるし、お兄ちゃんと秘密基地ごっこをして遊んだトンネルみたいな場所もあったはず。うん、あそこなら雨が降つても平気だ。

思い立ったが吉日……………というわけでもないんだろーけど、幼い私は、居間のテーブルに用意してあつたお兄ちゃんと私二人分のおやつ、きつちり半分だけをお気に入りのかばんに詰めて、最後に、

『おうちにもつままないからいえます』

と書き置きを残して家をとびだした。……………律儀にちゃんと鍵をかけて。

公園への道はなんとなくだけ覚えていた。広い通りを小学校に行くのと反対方向に曲がつてずーつと進んで、大きな赤い屋根のおうちのとこを右に曲がつて、しばらく行くと左手に鉄塔が見えてくるはずだ。そのすぐ近くに目指す公園があつたということとは覚えていたから、とにかく鉄塔さえ見つければ行けるだろうくらいに考えてたんだ。

いざ出発！ と勇んで歩き始め、しばらくは広い道をどこまでも進む。天気は良く、住宅街の大通りを進んでいるので迷うような場所があるわけでもない。私は鼻歌を歌いながらずんずんと快調に歩き続けた。

……どれくらいこの時間歩いただろうか、目印になる赤い屋根の大きな家は思いの外簡単に見つけることが出来て、私は記憶の通りにその角を曲がつた。

幸いなことに目印の鉄塔はずいぶん遠くからでも見える高い物だったので、私はそれを目指して何度か住宅地の路地を曲がつて、それほど間違えもせず塔の袂にたどり着く事ができた。

例の公園は探すまでもなかった。私が目指して歩いてきた鉄塔は——なんとまさに目的地の公園の敷地の一番端に建てられていたのだ。

思わず私は公園の中へと駆け出す。靴裏の感触が硬いアスファルトのそれから草を踏みしめる柔らかいものに変わり、ふわつと芝生のいい匂いが漂った。

なんだ……簡単じゃん！ 小町すごい！ こんな遠くまで一人で迷わず来れちゃった。

達成感と高揚感。ちよつと誇らしい気持ちになって、どうだどばかりに來た道を振り返つて……一瞬血の気が引いた。

……あれ？ 小町、どつちから來たつけ……………。

公園の周りに広がるのは、良く言えば統一感が有つて自然に馴染む——悪く言えばこれと言つた特徴のないどこにでもあるような住宅街。公園に通じてる路地なんか、あの鉄塔の近くだけで五つもあつて……。

「小町……帰らないから良いんだもん……」

そうだよ、帰れないんじゃないんだから！

子供の私は意地を張つて、広い公園の真ん中の方……目的地へと歩を進めた。

公園の「真ん中」にある複合型の遊具がある一角。実はその場所は大きな公園のまだ

端の方だったんだけど、当時の私はここが真ん中だと思い込んでたんだ。

大きなメロンパンみたいな形をしたコンクリート製の小山のような遊具は、斜面の一角が幅広の滑り台になっている。

それが正面として山の側面の三方には、子供ならちよつと屈めば立つたまま通れるくらいの特ネルの入口があり、それぞれのトンネルの先——ちようど山の頂上の真下辺りが少し広がってドーム状の空間になっている、というなかなか大きな物だ。(といつても今思えば大したこと無いけど)

以前来たときは、ここを秘密基地に見立ててお兄ちゃんと遊んだのだ。

——そう、ここがこの日の小町の目的地。ここは、この「滑り台トンネル山？」を中心に、ブランコ・鉄棒・砂場、ベンチがいくつか、それに水飲み場があつて、さらにそこからまっすぐ見える所に公衆トイレがあるという、小学二年生だった私にとっては家出するに当たつてカンペキな場所だと思えたんだ。

日は暮れかけていたけど、幼稚園ぐらいの子が何人か、砂場でそのお母さん達らしき女の人们とまだ遊んでいるのが見えた。

私はその大きな遊具の特ネルの一番奥まった所に潜り込み、腰を下ろして一息ついた。最初のうちは鼻息も荒く、

「もうおうちには帰らないで、このままここで暮らすんだー」

なんて……いかにも子供な、馬鹿なことを考えてた。うくん我ながら行き当たりばったりというか、後先考えてないなあ……。

けれど時間が経つに連れ周りは徐々に暗くなり、持ってきたおやつもあつという間に食べ終えてしまつて……お腹もすいてどんどん心細くなつてきた。

不安になつて一度トンネルの外に出てみたら、もう空は真つ暗で、広い公園の中、所々にあるベンチの上でポツンポツンと光っている街灯だけがやけに眩しかったのを覚えている。

見える範囲には誰もいない。当たり前だけど、さつきまで遊んでいた子ども達やそのお母さんはとつくに帰つてしまつたんだろう。公園の木々が風で揺れる音がざわざわと響き、どこかわからないけど意外と近くから犬の遠吠えのような声が聞こえてくる……。

怖い……おうちに帰りたい……。その頃には「ここで暮らす」なんて威勢のいい考えはとつくに引つ込んでしまつていたけど、この暗い中一人で慣れない道を家まで帰れる自信もなくて、私は微かに街灯の光が届く土管のトンネルの入口に座り込み、声を殺すようにグシグシと泣き始めた。



「……小町く、こまちー……………」

一体どれくらいの間が経ったのか……泣き疲れて頭がぼうつとしてきたころ、どこかで私を呼ぶ、しわがれたような声が聞こえてきた。

最初は誰だか解らなかった。何度も……何度も私を呼んでくれたんだろうその声はもうすっかり掠れていて……。私が潜り込んでいたトンネルの入り口から外を覗くと、ちようど声の人物が、あたりを見回しながら街灯に照らされたベンチに差し掛かるところだった。あれは……。

「お……お兄ちゃんっくく」

私は自分が家出中の身であったことなどすっかり忘れ、土管のトンネルから転がるように飛び出し、お兄ちゃんの胸に飛び込むみたいに抱きついて——みつともなくビービーと泣き出した。

「小町っ！ やつと見つけたく……」

お兄ちゃんは私の事をしつかり抱き止めると、

「大丈夫か？　どこも怪我して無いか？」

そう言つて私の顔を覗き込んだ。少し掠れた声。ちよつと落ち着いた私は顔を上げる。

見ればお兄ちゃんは息も上がつて汗だくで、どこかで転びでもしてしまつたんだろ
う、半ズボンから伸びた足、両の膝小僧は擦りむいてうつすらと血が滲んでいる。

小町のせいだ。小町が家出なんかしちゃつたからお兄ちゃんはこんな……。

「うえ……に……ちゃん、ごめ、ごめんなさい」

お兄ちゃんは、また泣き出した小町の頭をわしわしと撫でながら、

「いいよ、僕は小町のお兄ちゃんだからな」

そう言つて笑つてくれた。



帰り道。お兄ちゃんは私とぎゅつと手を繋いでくれて……今まで心細かつた私に、手のひらから伝わってくるお兄ちゃんの体温はとつても心強かつた。

少し歩くと広い通りに入る。暗くて色ははつきりとはわからないけど、目の前にある

のが来る時目印にした赤い屋根のお家だろう。あとはうちの近くまで一本道で、もう迷うような所は無い。

ホツとした私は、

「……ねえ、お兄ちゃん、小町があそこにいるってどうしてわかったの？」

そうお兄ちゃんに訊いてみる。

「わかんなかったよ。だから全部回った」

「ぜんぶって……」

「だから、小町が行きそうで僕が知っているとこ全部だよ。うちのすぐ近くから順番に、学校の手前の公園とか、○○ちゃん家とか□□くんの家とか……」

お兄ちゃん……小町のことすつごく一生懸命探してくれたんだあ………。

また申し訳無さでいっぱいになって涙が溢れそうになる。するとお兄ちゃんは握った手にぎゅうつと力を込め、

「小町。ほらもうすぐお家だぞ」

そう言つて私を安心させるように笑つた。



その後の話。

時刻としては夜の9時をだいぶ過ぎていたと思う。私達が家にたどり着くと、目を真つ赤にしたお母さんが飛び出してきて痛いぐらい小町のことを抱きしめてくれた。

お母さんはスーツ姿のまま。テーブルに転がる電話機とたくさんチエツクの入ったメモ。考えつく限りの相手に電話をかけてくれていたらしい。

私は泣きながらあやまって、お母さんも謝って……それからがけっこう大変そうだった。

お母さんは、お父さんとか、それから警察とかに「娘が無事帰ってきました」という連絡を入れて、それからメモを見ながら、やはり何件も電話をかけてる。聞こえてくるのは「帰ってきました」とか「ご迷惑をおかけしました」とか「ありがとうございます」とかそんな言葉。

しばらくして、制服姿のおまわりさんがやって来た。

私に「誰かと一緒にやなかったの?」「今までどこに居たの?」「みたいなことを訊いてきたので、一人で家出して公園に居て、道がわからなくて帰れなくなっちゃっただけだと伝えると、おまわりさんは少し安心した様子で、

「もうこんなことしちゃだめだよ」

と言つて帰って行った。あの時は解らなかつたけど、多分「誘拐じゃなかつた」のを

確認してたんだと思う。……小町、ほんと人騒がせだったよね……。

それからおまわりさんと入れ違いみたいにお父さんが帰ってきて、そのまま勢い良く抱き締められる……のは良いんだけど頬に当たる髭がジヨリジヨリして痛い……。

見ればお母さんはまだ次々と電話をかけてるところで、私を開放したお父さんもお母さんと一緒にあちこちに電話をかけ始めた……。

その日は家族みんなでカップラーメンを食べて、それからお兄ちゃんと一緒に風呂。向かい合って湯船に入ると、目の前にお兄ちゃんの手が擦りむいた膝が見えた。お湯に浸かると少し痛いらしく、お兄ちゃんは顔をしかめている。

「お膝……ごめんね、お兄ちゃん……」

「いいよ。それより小町は痛いとか無いか?」

「うん、痛いところない」

「よし! じゃあ頭洗うぞ〜」

そう言ってお兄ちゃんは私を洗い場の椅子に座らせ、痛いはずの膝を着いて、後ろから膝立ちの姿勢で私の髪を洗ってくれる。

泡に包まれた髪の間を滑るお兄ちゃんの指がとつても気持ちよくなって、でも私のせいで怪我をしてるお兄ちゃんに痛いのを我慢させてるのが申し訳なくって、何も言わない

お兄ちゃんの優しさが嬉しくて、でも辛くって……。

……………髪、ちゃんと自分で洗えるようになるう…………。

もともとお兄ちゃんが大好きだった小町だけど…………この時感じた気持ちは今までのそれとは違っていて…………今思い返してみると、これ、多分私の初恋だったんだよね。

うわゝあのお兄ちゃんが初恋の相手とか……………思い出すのも恥ずかしいやら悔しいやら…………いやでも、きつと結構ある話だね。こーゆーの…………疑似恋愛とかいうんだっけ。

* * * * *

それからというもの、お兄ちゃんは学校が終わるとできる限り早く帰ってきてくれるようになった。友達の誘いとかも全部断って…………。お兄ちゃんが友達少なくなっちゃったのって、このころの小町のせいでもあるんだよね。言葉にしては言えなかったけど…………ずっと申し訳ないなって思ってたんだ。

そんなことを思えるのも私が成長したからで、その頃の小町は大好きなお兄ちゃんが早く帰ってきてくれるのが単純に嬉しいだけだった。…………あの頃はほんとごめんね、

お兄ちゃん。

でも、今のお兄ちゃんには私以外にも、ちゃんとお兄ちゃんの良さを解ってくれる人たちがいる。……全員きれいな女の子ってゆーのがちよつと小町的にはもやもやポイントだけど……。

まあそれが嬉しくもあり寂しくもありという複雑な妹心を察してね♪

* * * * *

私の家出騒ぎがあつたその年の、夏休みに入つてしばらくたつたとある日。たまたま 偶々両親とも休みだったのか、それとも日頃私達をほったらかしにしてる罪滅ぼしみたいな気持ちもあつてわざわざ休みを取つたのか……珍しく両親が家族四人揃つての「お出かけ」をしてくれた。

といつても近場だったけどね。丁度その頃幕張メッセの一角で開催されていた『世界わんにゃんショー』というイベントを見に行き、それから食事と買物をして帰るといってお手軽なもの。

それでも私たち兄妹は嬉しくて大興奮だった。うちの家族——特にお兄ちゃんと私

はけっこうな動物好きで、テレビでもよく動物番組を見ている。

だから世界中の珍しくてカワイイ犬や猫を間近に見て触れることができるのは純粋に楽しかったから、両親を引っ張り回すように会場を隅から隅まで歩き回り……………

そこで……私たちは出会ってしまったのだ……なんつって。

『わんにゃんショー』には、展示コーナー・ふれあいコーナーの他に、販売・商談のコーナーも設けられていた。

そのころ特に人気だった猫——アメリカンショートヘアの子猫のブース。ロツカーの棚のようなショーケースに一匹ずつ展示されてる可愛らしい子猫ちゃんたち。それぞれの透明なアクリルの扉には、その子猫の雌雄・誕生日と月齢・品種（アメリカンショートヘアの中にも色とかによってさらに細かい分類があるらしい）予防接種の有無・価格などが細かく書かれたカードが貼り付けられている。

まあ、私はそんなの全然見てなくて、只々中に入ってる手のひらサイズの猫たちの可愛さに夢中だったけど。

そこに、他の子に比べてやや白っぽくてふわふわの毛並みをした子猫が、体を丸くコンパクトにまるめてうつらうつらと半分眠っているのを見つけた。

「お兄ちゃん、この子かわいいねえ〜」

「うん……」

お兄ちゃんも目を細めて愛おしそうにその子を見てる。よく見ればうつつすらと縞模様はあるけど……でも丸くつて、お腹のところが真っ白で……胴を丸めたところがちようどぽっかりと穴みたいに見えて……。

「……なんだか、かまくらみたいだね」

「かまくら？ ああ、あの雪で作る丸い家みたいなやつか」

「うん！」

「へへ、ほんとだ……」

目の前で騒がしく盛り上がる私たち兄妹の声が聞こえたのか、そのかまくらっぽい子猫はぱちんと可愛らしい目を開くと、人懐っこくも興味津々といった風に私たちの方に寄ってきた。ひやあ、薄いグリーン色の瞳がちよおラブリー！

私が仕切りのアクリルボードに指を当てて左右に動かすと、ぱしっ、ぱしっとその手を追うように可愛らしいねこパンチを繰り出してくる。透明な仕切り越しに見えるその小さな小さな肉球のかわいいことと言ったら……。

私はもうすっかりその子にメロメロで、いつまでも飽きずに夢中になって遊んでいたんだけど……ふと気がつくといつの間にか隣にお兄ちゃんがない！

一瞬迷子になったかと焦ったけど、後ろをふりむいたら、お兄ちゃんは少し離れたべ

ンチに座っていた両親に何かを一生懸命話しているところだった。

そして……じゃじゃーん！ それから数日後、なんと我が比企谷家はこの白つぼくてふわふわの「血統書付きアメリカンショートヘア」の子猫ちゃん（♂）をお迎えすることになったのだ。

名前は最初の印象そのままに「カマクラ」 お父さんは「猫つぼくねえなあ」となんだか不満そうだったけど、私が

「小町ね、『カマクラ』ってかわいい名前だと思うよ」

と言ったらすぐにOKしてくれた。てへ♪

今思えば両親にとってはかなり思い切った買い物だったと思う。子供だった私は値段なんか全然覚えてないけど……血統書付きで当時大人気のアメシヨ……いろんな費用を含めて多分20万円以上かかったんじゃないだろうか。

後から母に聞かされたところによると、お兄ちゃんに言われた言葉が大きかったらしいんだ。

なんでもあの時、「家に帰った時猫がいれば小町も寂しくないかもしれない。今小町

と遊んでるやつは相性も良さそうだし……今年僕の誕生日のプレゼントいらなからあの猫小町に買ってやって」みたいなこと言ったんだって。

でも両親がその値段に尻込みすると今度は、「共働きで子供ほつとく位働いてるんだからそのくらい出せるだろ」なんて啖呵を切ったんだとか。お兄ちゃんてば、生意気な小学四年生だなあ……。

しかも「小町を家出させてしまった」という両親の負い目につけ込むような説得の仕方は、その後の^{のち}捻くれたお兄ちゃんの片鱗を感じさせる。そう考えるとお兄ちゃんってあの頃から……むむむ……。

「……でもそのおかげでカー君は小町のトコにいてくれるんだよね……」

そう言うところカー君は相槌を打つように「にやあ」と一声鳴いて鼻をひくひくさせた。

それからその年の夏休み中は、新学期が始まって小町たちが学校に行っても大丈夫にするために、頑張つてカマクラのしつけ（トイレトレーニングとか爪研ぎ板の練習とかそういうやつね）をして、それ以上にカー君（愛称をつけた！）とたくさん遊んで……。私が髪を切つて今みたいなショートにしたのはちょうどこの頃。長い髪つてきちん

と纏めておかないと、猫——特に子猫と全力で遊ぶには邪魔になるんだよね。

もちろんそれだけが理由ってわけでもなくって……丁度そのころ自立心みたいなのが芽生えてきたというのもあるんだ。

どういうことかっていうと、それまで私は、お風呂はいつもお兄ちゃんと一緒に入って、その長い髪を洗ってもらってたの。

でも、あの家出事件の後から、なるべく自分だけで髪を洗えるようになって、練習もしたし、一人でお風呂に入る回数も増やした。……で、いざ自分でやるとなると

長い髪は洗うのも乾かすのも面倒くさい……。そんな事もあって、中途半端に短くするんじやなく思い切ってショートにしたというわけ。

そして——2学期が始まると、学校が終わった私はニコニコしながら走って家に帰るようになっていた。なんならお兄ちゃんと一緒に帰れる日でも「遅い」と言ってお兄ちゃんを置いて帰ってきちゃうくらい（笑）

あんなにつまらないと思っていた一人ぼっちの家。だけど今はカー君が待ってる！

早くケージから出してあげなくちゃ。

そういえば最初の頃しばらくは、家に誰もいないときはケージに入れられてて、小町

が家に帰ると、「早く出して〜」とみーみー鳴いたりしてたんだよね。

それが今やすつかり風格を増して我が家の主のような顔をしているカー君。

初めてお家に来た頃の幼毛でまだふわふわしてた時の面影はもう無いけど、比企谷家にとつて居なくてはならない大事な家族になって……今またお兄ちゃんのいない寂しさを埋めてくれる。

「カー君ありがとおおお〜」

そう言つて耳と首の間あたりをもふもふしたら、カー君は気持ちよさそうに首を伸ばしてゴロゴロと喉を鳴らす。ををつ、かわいいのうかわいいのう……じゆる……。

……。

……ふへ……癒されるう……。うん、たつぷり愛猫を堪能出来たおかげで今日

のところはだいぶ心が落ち着いてきたけど……つてあわわ、お兄ちゃんのベッドにカー君の毛がたくさん……。

ちよつとモフリ過ぎたかなあ。後でコロコロで掃除しとかなきゃね。

そんな風に思いながら主の居なくなったベッドを見つめっていると、またじわじわと寂しさが込み上げてくる……。私、結構重症かも。今後のお兄ちゃん不足は深刻な問題だな

。

ちよつとだけ考えて、私はあつさり和白旗を上げる……うん、無理はイケナイ。だから明日お兄ちゃんのところに行こう。引越荷物がきちんと片付いたか小町ちゃんがしつかりチェックしてあげなきゃね。あ、これ小町的にポイント高い！

そう決めてしまえば急に心にも余裕が出てくる。

どうせこんな風に会いに行きたくなるのなんて最初だけで、すぐ面倒くさくなつて行かなくなるに決まつてる。だからせめて最初のうちぐらいは様子見に行つてあげなきゃね。

おし！ これで問題解決つ！ 小町は「お兄ちゃん不足」なんかに負けないんだからねつ。

* * * * *

5月某日日曜日、お兄ちゃんの部屋の前なう。

……で、あれからはや一ヶ月以上。もう5月にもなるというのに私は毎週のようにこ

の部屋に顔を出してる……。おつかしいなあ。二、三回様子見ればすぐに飽きて、めつたにここには来なくなるだろうと思つてたのに……。うう……。小町、「お兄ちゃん不足」にはやっぱ勝てなかつたよ……。

ほんとは昨日来ようかと思つてただけど、残念ながらお兄ちゃんに予定があつたの。

日中は元奉仕部の三人でお出かけ。夕方は留美ちゃんの家教師が入るかもつていう話だったから諦めたんだよね。

明けて本日。日曜日のお昼前か……。お兄ちゃんならテレビ見てるかごろごろ寝ころがってスマホいじってるかだろう。

まあお兄ちゃんもこの何年かは休日には女の子とお出かけしたりする事もあるようになった訳だし、さらにこの前から留美ちゃんの家教師始めたり、大学以外にも通うところがあつたりとなかなか忙しそうにはしてるけど、今日は特に出かける予定は無かつたはず。

なぜなら……。私に連絡が来てないから。

いや誤解しないでね？

小町は別にお兄ちゃんのスケジュールを一から十までがつちり管理してるわけじゃないよ。ただこの前……。先々週かな？

小町が向こう

の予定を確認しないで訪ねた日が、たまたまお兄ちゃんのお出かけの日で……しかも行き先が千葉^{こっち}方面。なんだか行き違いみたいな形になっちゃったんだよね。で、それからお兄ちゃんは休日出かける予定がある時は小町に連絡をくれるようになったのでした。だからもし部屋にいらなくても、せいぜい近くのコンビニに行ってるぐらいのものだろう。

とにかくそういう事で、私はこここんつとドアをノックして、返事を待たずに家で預かっているお兄ちゃんの部屋の鍵を使つて中に入る。靴もあるし、中の引き戸も閉めてあるからちゃんとうちに居たようだ。

デリカシーのある妹として、いきなり部屋に突入したりはせず、

「お兄ちゃん、かわいいかわいい小町ちゃんが来てあげましたよ」

そう引き戸越しに声をかけると、

「んあ……おお……う？」

と、思いっきり寝惚けた声が……。

私が引き戸をそつと開けると、お兄ちゃんはベッドの上でのつそりと体を起こしたところだった。

「まだ寝てたん……ありゃ？」

お兄ちゃんの目がどんよりと濁ってる。

いつも通りでしょって？　そうだけどそうじゃなくなつて……なんてゆーか、お兄ちゃんのは確かにアレだけど、いつもは「世間を舐め腐つたような目」なんだけど、今日のはなんだかガチに病的な……。

「おー、小町か。……………小町……………小町？　……………あれ？　さつき電話してたのって……………」

そう言つてお兄ちゃんは何かを探すようにキョロキョロと周りを見回す。

「？　どうしたのお兄ちゃん」

「どこ行つた……………。てか……………夢、か？　まあなんでもねえよ」

「ほーん？　って、そうじゃなくなつてと……………もしかして風邪引いた？　起きててへーキ？」

ようやく目が覚めてきたらしいお兄ちゃん。

「おう……………朝に飲むゼリー食つていつもの薬飲んだから、今は大分楽になつてる」

ふむふむなるほど……………。風邪薬は我が家の常備薬だろう。私も何度かお世話になつた事があるけど、とにかくよく効くのは間違いない。ただ飲んでしばらくすると頭がぼうつとするというか……………とにかく眠くなるんだよね。まあ風邪には睡眠が一番だとも言おうから良いんだろうけど……………。

「ん？　朝はゼリーだけならお腹空かない？」

「あー……そういえば……でもなんか全部面倒くさい……」

お兄ちゃんはまだぼてんと布団に倒れ込む。

「はあ……とにかく熱計つてみて。そしたら小町なんか作つたげるからそれまでもう少し寝てればいいよ」

「おお……小町や、いつもすまないねえ……」

「よよよ……お兄ちゃん、それは言わない約束でしょう」

昔から変わんないお兄ちゃんとの馬鹿なやりとり。でも、それこそが私にとって他に変わるもののない宝物なんだよね。

熱は37度6分。朝、薬を飲む前に測った時は38度を超えてたって話だから、とりあえず薬は効いてるんだろう。本人も朝よりだいぶましになったって言ってるし。

冷蔵庫の中をチェックしてみる。卵、牛乳、豚肉、野菜……と食材はそれなりにあるけど、お粥を作るとなると……シンプルに卵かな。でもお兄ちゃんあんまりお粥好きじゃないんだよね……。

そこまで考えて思い付いた。お兄ちゃんでも喜んで食べるお粥がある。冷蔵庫にある材料だけじゃ作れないけど、それは多分すぐそのコンビニでも手に入るだろう。

……スーパーで買うよりちよつとお高く付いちやうけど今回は非常事態だし。

「ご飯はさつき早炊きでセツトしたばかりで、炊きあがるのにあと20分位はかかるだろうから、その間にぱぱつとコンビニ二行つてくれば……。」

「ねーお兄ちゃん、小町ちよつとコンビニに……。」

声をかけようとしたら、お兄ちゃんはまたスースーと眠つてしまっていた。なんとも無防備な寝顔が妙な庇護欲をそそる。

「あれま」

お兄ちゃんのくせに可愛い顔しちやつて……。

私は、『コンビニ二行つてくる』と卓上メモに走り書きして、財布とケータイ、それに鍵だけをポーチに入れて部屋を出、お兄ちゃんを起こさないよう静かに引き戸を閉じた。



三和土^{たたき}で靴を履こうとしたところで……目の前のドアノブがカチャツと不自然な音を立てた。

え……ドアの向こうに人の気配！ 外の人物は立ち去る様子も無いうえ、信じられないことに——内鍵のサムターンがゆつくりと回り、カチツと金属音を響かせて完全に解

錠されてしまった。

何が起きて………ここ、これって今流行りのピッキングとかつていうやつ？ どどど
うすれば……。あ、ドアチェーンかけなきや………と思いつたときにはもうドアノブが
静かに回り始めていた。

間に合わない………私はチェーンを諦め、すぐ横の傘立てに無造作に突っ込んであつ
た、ちよつと壊れて少し曲がつたビニール傘を引つ掴む。もともと壊れてる傘なら遠慮
はいらない。私は空き巣を撃退すべく大きく上段に振りかぶつた。

小町はちびな女の子だし、奥で寝てるお兄ちゃんは風邪でへろへろ……。相手が油断
してる最初の一撃が勝負だ。

静かに静かにドアノブが回りきり、ゆっくりとドアが開いていく——今だっ！

「ど、泥棒っ！」

私は気合を込めて、侵入者に向かって武器を振り下ろす。もらつたあ！

「きやあつ!!」

「へっ!」

きやあ? つて、女の子お!? ええええ。

私はまさに最後まで振り下ろさんとしていた両手に慌てて急ブレーキをかける。

——傘は、私の目の前で目をギョツと閉じてへたりこんでいる華奢な女の子に激突す

る直前、数センチを残してピタッと止まる……ふう、軽いビニ傘でなかったら止められなかったかも……。

頭を庇うように手を上げていた相手が、その手の隙間からこちらを伺うように目を開く。

「留美ちゃん!？」

「小町さん!？」

私が「ピッキング犯」だと思つて撃退しようとした相手は、私の良く知つてる中学生の女の子だった。

鶴見留美ちゃん——小町がまだ中学生の時、奉仕部の部活に付き合つて行つた千葉村での林間学校ボランティアの時に知り合つた、当時まだ小学生だった女の子。

彼女がクラスでハブられていたのをお兄ちゃん達が助けて、それをきつかけに仲良くなつたんだ。

ただお兄ちゃんに言わせれば、

「あの時俺は何もかもぶつ壊す状況を作つただけだ。それを逆にはねのけて、あんなふうに解決したのは間違いないく留美自身だよ」

ということらしい。

留美ちゃんとは、特にお兄ちゃんがいろいろと交流を持つようになったんだけど……
なんとこの留美ちゃん、お兄ちゃんのことを好きになってくれたんだよね。

一 昨年のバレンタインデーにはお兄ちゃんに告白。その後は……お兄ちゃんと付き合うというようなこともなく、でもすごく近くに居て、たまには二人で出かけたり……と、傍から見てると不思議な関係が続いている。それにしても……………。

「いや、小町びつくりしたよ」

「…………それはこつちですよお…………」

「うんまあ、さっきのももちろんびつくりしたんだけど…………他にも色々、ね」

「色々？」

そう、突っ込みたい所はいろいろとある。なんでこの鍵持ってるのか、なんでチャイムも鳴らさず鍵を開けたのか、手にはスーパールのレジ袋下げてるし、まるで同棲でもしてるみたい…………って、まさかお兄ちゃん！　とうとう中学生に手を出しちゃったの!?

「ええとね…………その、鍵のこととか」

探りを入れるようにそう言うのと、

「あ…………」

ちよつと困ったような顔をした留美ちゃんは、ちら、引き戸の方に目を向ける。ふむ

ふむ、どうやらお兄ちゃんに確認しないと云えないって感じかな。

「あの……八幡の具合は……」

お、この台詞で同棲疑惑は晴れたね。さらに観察すれば留美ちゃんの手にあるレジ袋の中身はスポーツドリンクと……プリン？

なるほどお見舞いというわけか。小町ちゃんの名推理——よし、謎はすべて解けた！
 真実はいつも一つ！

「お兄ちゃんなら多分大丈夫……今は少し寝てると思うよ。小町が来た時うつらうつらしてたし。熱はさつき測って37度6分。ななどろくぶ朝は38度3分はちどさんぶだったって言ってたから、一応薬は効いてるんだと思う」

「そうですか……」

ホツとした様子の留美ちゃん。でもお見舞いに来たってことは……。

「留美ちゃんはなんでお兄ちゃんの風邪のこと知ってたの？」

「あ、それはさつき電話で。最初頼まれたのはスポーツドリンクだけだったんですけど、プリンも買ってきちゃいました。小町さんも八幡が風邪引いたから……？」

「ううん、小町は日曜だから普通に遊びに來ただけ。そしたらお兄ちゃんが風邪引いて、じゃあお粥でも……って、あつ」

「?」

そうだった、コンビニに買い物! すっかり忘れてた。

「じゃあ小町そのコンビニ行ってくるから、お兄ちゃんのことよろしくね」

「あ、はい」

「……お兄ちゃんの寝顔、ちよつと可愛いから今のうちに見ておくといいいよ♪」

改めて靴を履きながらそう言うと、

「な……」

言葉を詰まらせた留美ちゃんの頬がサツとピンク色に染まり、ほんの僅かに口元がほころぶ。

かわいいなあ。普段は年の割には大人っぽく見える留美ちゃんだけど、こういう表情はやっぱり年相応に幼い。

雪乃先輩や結衣先輩をからかっても、ツンデレっぽいかわいいところは見せてくれるんだけど、留美ちゃんのはまたちよつと違う……素直な可愛さだ。

くうつ、年下の綺麗な女の子をからかかって、その子が恥じらって頬を赤らめているのを見ると……こう、ぞくぞくつとする。……ヤバイ、小町なんか変なシユミに目覚め

そう……。

もつと堪能したいトコだけど、早く買い物してこないとお粥が遅くなっちゃう。

私は引き戸に手をかけて深呼吸してゐる留美ちゃんを横目に、お兄ちゃんを起こさないよう静かに玄関のドアを閉じた。

あ、ちなみにいろは先輩の可愛さは全て計算され尽くした可愛さなのであればまた別物。——といってもお兄ちゃん相手にだけは素の可愛さを見せているとかいはないとかいう未確認情報アリだけだね。

コンビニで「はちみつ梅」と「冷えピタ大人用」をかごに放り込んで考える。あとは……。デザートとかもいろいろ買おうかと思つてたんだけど、留美ちゃんがすでにスポーツドリンクとプリンを買つてきてくれてるし……。いい子だよね……。

でも……さつきからモヤモヤしてる。留美ちゃんに。

うーん、このモヤモヤは……私、留美ちゃんにヤキモチやいてるのかな。お兄ちゃんが風邪引いて熱があることを——私じゃなくて留美ちゃんが知つてたことに。

風邪で辛いなら……どうして私に連絡くれなかつたんだろう。どうして留美ちゃんが当然のように買い物して来るんだろう、つて。

この気持ちは、妹ポジションを脅かされる事への嫉妬？ それとも私まだ……。

いやいや無い無い！ もうお兄ちゃんへの疑似恋愛（そーゆーの）はとづくに卒業したんだから。

◇ ◇ ◇

結局目的の二品だけ買ってとんぼ返りにお兄ちゃんのアパートへ。さつき一悶着あつたからもうご飯は炊きあがつてる頃だろう。

お兄ちゃんはまだもう起きてるかもしれないけど、一応静かにドアを開閉しそつと中に入る。買ってきた梅とかを流しのところの棚に置いて……。

奥の部屋からは誰の声もしない。やっぱりまだ寝てるのかな……と、そつと引き戸を引いたら――

留美ちゃんがお兄ちゃんに覆いかぶさってる!!

帰ってきたらまさかの場合！ え、お兄ちゃんと留美ちゃんってやっぱりもうそういう関係だったの!?

これはいわゆる「じあんはつせー」では？ いやでも留美ちゃんの方から行ってるよ
うに見えるし、この二人がそういう事するなら間違いなく同意の上だろうし……。

あ、頭の中がぐるぐるしてきたよ……。とりあえず引き戸をそつと閉じる。

私は玄関ドアの前に戻り、

「たっだいまー!」

と大きな声で言いながら玄関ドアを内側からバンッと開けた。

それからすぐパタンとドアを閉め、ゆっくりと十数える。

もう良いかな? 私は引き戸を開けた。

留美ちゃんはベッドの横の椅子に、正しい姿勢の見本みたいな格好でまつすぐ背筋を伸ばして座ってて……何故か顔が赤くて息が浅い。そしてお兄ちゃんは半身を捻って壁の方上半身を突っ込むような変な体勢になつてる。ぷぷ、なにそれ。

「お? お兄ちゃん起きたんだ……って、何やってるの……」

「……いや、スマホ落つことしちゃってな……」

そう言つてお兄ちゃんはベッドと壁の間からスマホを拾い上げる。

「ふーん」

留美ちゃんは留美ちゃんで、私ともお兄ちゃんとも目を合わせようとしな……。

うん、二人とも挙動不審すぎる。けど、どうやらこの様子だと、さっきのあれはどうやら事故みたいなものだったらしい。よく考えれば、流石に私がすぐ帰つて来るような状況でそういうことは始めないだろーし。

本人たちはうまくごまかしてるつもりみたいだし……しやーない、小町は物分りの良
い妹だから騙されておいてあげよう。

私は空気を変えようと、

「ね、留美ちゃん。こつち手伝つてくれる？」

そう言いながら留美ちゃんに笑いかけたら何故かビクツとされちゃった。……あれ、
小町の笑顔——怖かったかな？

「あ、その前に！」

そうそうこれを忘れてた。

「ん？」

「さあお兄ちゃん、とつととおでこを出すんだよっ」

私はそう小芝居風の台詞を言いながら、水色のふるんとして冷やんとした物体をパツ
クから取り出してに兄に迫る。

「おい……やめろつて。子供じゃないんだから……」

お兄ちゃんはそう言つて嫌がるけど、

「大丈夫だいじょーぶ、ダイジョーブ博士だよ。ちゃんとパッケージに『大人用』つて書

いてあったから」

「ダイジョーブ博士はちつとも大丈夫じゃ無いやつだろ……」

「ぐだぐだ言つてないで小町にマカセナサーイ！」

私は例のブーツをお兄ちゃんの額に押し付けた。喰らえ、女子中学生とイチャコラした罪の報いを受けるが良い！

「ぎゃあああああ!! 冷てえ!!」

「病氣ノ治療ニ犠牲ハツキモノデース」

「その病人を犠牲にしてどうすんだよ……」

こうして冷えピタ装備のお兄ちゃんが完成。おお可愛い可愛い（笑）

それからキッチンスペースで留美ちゃんと二人で「甘い梅干しのお粥」を作る。

最初はなんだかオドオドしてた留美ちゃんだけど、

「このお粥だけは、お兄ちゃんも喜んで食べるんだよね〜」

という話をした途端、急に目つきが変わって真剣な表情になった。ほわー、この娘お兄ちゃんのこと好きすぎじゃない？

留美ちゃんはなかなか料理の手際が良い。並んで料理をすることは何度かあったか

ら驚きは無いけど、でも改めてそう思う。

料理が苦手って言う人は、食材を素手で触るという時点でもうおっかなびつくりなんだよね。たとえば「梅干しの実をほぐす」のにスプーンとか果物ナイフとか使おうとしたりするし……。

反対に留美ちゃんもそうだけど、料理に慣れてる人って手をしつかり使って食材を扱うし、その分ために何度も手を洗うという印象がある。

今回も、留美ちゃんがきれいに洗った手で、ためらいなく丁寧にはちみつ梅の実をほぐしていく様子には、同じく料理が好きで一人として好感を覚えた。

留美ちゃんは私が教える通りに実にスムーズに作業を進め……小町流「甘い梅干しのお粥」完成！

「んっ、いい塩梅っ。留美ちゃんって手際も良いし、料理のセンスあるよね〜」

「小町さんの言うとおりによったただけだよ？」

留美ちゃんはそう言って謙遜するけど、みんながみんな上手にできるわけじゃないんだよね……………。

「じゃあ、小町洗濯物やつつけちゃうから、留美ちゃんはこっちお願いね」

今日の梅粥は、私は口を出さずだけで作ったのはほぼ留美ちゃん一人だし……上手に作

れたご褒美つてわけじゃないけど、お兄ちゃんの相手は留美ちゃんに任せてあげることにした。

「食べ終わったら薬飲むように言ってね」

「はい」

出来上がったばかりのお粥を小鉢によそい、いそいそとお兄ちゃんのもとに運ぶ留美ちゃん……。うん、可愛い。

それにしてもこの娘、びっくりするくらい綺麗になつたよなー。

もともと小学生の頃から綺麗な子ではあつただけど、さすがにあの頃はまだ幼い印象が強かった。

だから、こないいい子がお兄ちゃんを好きになつてくれたのは嬉しいけど、でも正直雪乃さんと結衣さんが恋のライバルっていうのは……いくらなんでも厳しいなつて思つてたんだ。まして留美ちゃんには五歳の年の差というハンデもあるし。

でも、留美ちゃんのお兄ちゃんに対する好意は真つすぐで、いくら捻くれたお兄ちゃんでも勘違いと否定することは出来なかつたらしい。

今、出会つてから二年足らず……。でも中学生になつてからシルエットも年頃の女の子らしくなつて手足もスラリと伸び、すれ違ふ人をはつとさせるほど綺麗になつた留美ちゃん。モデルまでこなすようになって、きつときぞかしモテるだろうに、そのお兄

ちゃんへの想いは変わっていないように——

気がつけば……留美ちゃんは今、お兄ちゃんの「一番近くにいる女の子」になっている。

一途……だよね……。お兄ちゃんの方はどう思ってるのかなあ……。

ちらちらと二人の様子を横目で見れば、なんとあの伝説の「はい、アーン」をやつて
るではないか！

ちよつとちよつと、世界の妹小町様の前でいちやついてくれるじゃないのお二人さん
……とか思ってたけど、良く見れば甘い雰囲気はなく、あれは……「餌付け」だ。最後
の方なんかひよいパクひよいパクとわんこそばみたいに忙しそうで、でも楽しそうで
……なんだか笑ってしまった。

その後みんなで留美ちゃんが買ってきてくれたプリンをいただくことに。

マンゴープリンに牛乳プリン、みかんプリンなんてのもあるんだ……。お兄ちゃんが
牛乳プリンと普通のプリンで悩んだので、牛乳プリンは冷蔵庫にとつておくことにし
て、私は気になったみかんプリンを。

さつそく一口……甘みと柑橘の酸味がふわつと口の中全体に広がる。みかん果汁を

溶かし込まれたプリン生地に缶詰のみかんが小さい粒状になって入ってる感じかな。甘さはやや控えめだけどさっぱりして美味しい。

留美ちゃんの、ふわとろたまごプリンと一口ずつ交換、こっちは口に入れた瞬間に蕩けてしまうくらいに柔らかかった。

お兄ちゃんにも別なスプーンで食べてもらうと、みかんプリンが好評だった。

それから留美ちゃんと二人、手作りでこの味を再現出来ないかという話でひとしきり盛り上がって……ふと会話が途切れた。

「でもさーお兄ちゃん、なんでこんな時期に風邪引くのよ」

最近は、寒いどころから5月とは思えないほど暑い日もあつたくらいで、ずっと温かい日が続いてるのに。

「あの……八幡が風邪引いたのって、私のせいなんです」

答えたのはお兄ちゃんじゃなく留美ちゃんだった。

「え、そうなの」

「昨日、家庭教師でここ来たとき、私も八幡も雨で濡れちゃって……私だけシャワー借りちゃったから……」

「いやお前のせいじゃねえよ、ただ俺が最近暖かったから油断しただけで、」

「でも……」

「……………」

なるほどねー。ようやくわかってきた。留美ちゃんがお見舞いに来たのは「責任を感じて」というのもあるんだろう。

お兄ちゃんが「小町」よりも「留美ちゃん」を頼ったというわけじゃないということが解って、何故か安心してしまう私。

そのあとお互いの学校の話とか、最近会ってない絢香ちゃんの話とかしてただけで……。

しばらくして気がつくと、風邪薬が効いてきたらしいお兄ちゃんは、いつの間にか静かに寝息をたてていた。

うーむ……この風邪薬、確かに効くんだけ……こんなに簡単に眠くなるって、何かヤバイものでも入ってるんじゃないか……。大丈夫なんだろうか、この薬。

さて、と。ホントなら留美ちゃんを帰らせて私が残る状況だけ……留美ちゃんがまだ居るなら早めに帰ろうかな。

そんな風に思うのは、先に留美ちゃんを帰しちゃうのは——お兄ちゃんの周りから留

美ちゃんを追い払うみたいだから。

多分、留美ちゃんもお兄ちゃんもそんなこと考えもしないだろうけど、他ならぬこの私がそう思つちやうから。

さつきから心の端の方でずつと何か引つかかつてる。嫉妬してる。

お兄ちゃんの風邪のことを知つてた留美ちゃんに。

お兄ちゃんが合鍵を渡した留美ちゃんに。

お兄ちゃんのためのお粥を上手に作れた留美ちゃんに。

お兄ちゃんと楽しそうに「あーん」とかやつてた留美ちゃんに。

お兄ちゃんと二人で遊びに行く留美ちゃんに。

お兄ちゃんに家庭教師してもらつてる留美ちゃんに。

——小町よりもお兄ちゃんの近くにいる、留美ちゃんに——

そんな風に思う小町は嫌だ。そんなのは小町じゃない！ だから……。



お兄ちゃんが起きたら簡単に夕食が食べられるように、具は刻みネギだけの簡単なうどんスープを作り置きする。うどんの麺の方は茹でたあと水で締め、小丼に入れて冷蔵

庫へ。

これで電子レンジでも鍋でも簡単に食べられるようになるし、もしそのまま寝てしまおうようだったら明日の朝食に回しても大丈夫。

その旨のメモも書いて、一通り部屋を見回してから、私は留美ちゃんに声を掛ける。「じゃあ、家のこともあるからそろそろ小町は帰るけど……留美ちゃんは？」

本当はそんな事無い。やらなきゃいけないことは家を出る前に済ませてきたから、あとはせいぜいお風呂のスイッチを入れるくらいだ。

「私は……もう少し居たいです」

まあ、そう答えるよね。

「んん……それじゃ、もう少しお兄ちゃんのことよろしくね。うどんの事とかは一応メモ書いてここに置いとくから、お兄ちゃん起きなくても適当な時間に帰るんだよ？」

「はい。明日は学校ですし……あんまり遅くなるとお母さん心配するし」

「うんうん。あと……『鍵』よろしくね！」

私を含むように笑って言うのと、

「あの、小町さん……。鍵のことなんですけど、その……」

留美ちゃんはそんな風にしどろもどろになって言い訳を探してる。

「あはは、いーよいーよ留美ちゃん。その話は、お兄ちゃんが元気になつてから弄り倒し

て聞く予定だから」

私がそう言うと、留美ちゃんはなんとも言えない困ったような笑顔を見せた。

私はお兄ちゃんの部屋を後にする。

あの様子……留美ちゃんはきつとお兄ちゃんが起きるまで待つてるよね……そしたらあの二人つきりになるわけで……。

まさかこのまま一気に……って流石にそれは無いかな。一応お兄ちゃん病人だし、だいたい二人きりになることなんて今までだって何回もあったんだから、お兄ちゃんがその気ならとつくに二人の関係はもつと進展してるだろう。

お兄ちゃんがその気なら——か。そんな事を思うと、また少しだけ心がもよもやする。でも……なんとなくわかった。このもよもやの理由。

——私、寂しいんだ。お兄ちゃんが小町だけのお兄ちゃんじゃ無くなっちゃう事が。

うーん、でも……お兄ちゃん未来のお姉ちゃん候補の彼女が出来るのは嬉しいというのも嘘じゃないんだよ？ だいたいお兄ちゃんはもう大学生なわけで、そういう相手がいけない方が心配になるレベルの話なんだよね。

それは解ってる……けど、お兄ちゃんが一番は小町のままだいいなって思っちゃうのは……小町の我が儘かな。

* * * * *

後日、比企谷家のリビングにて。

明日は休日。今日はお兄ちゃんが留美ちゃんの家で家庭教師してきて、そのままこちらの家の……以前のままのお兄ちゃんの部屋に泊まることになってる。もともとの自分の部屋に泊まるって……なんだか変な感じだよね。

両親はもう寝室へ下がり、私とお兄ちゃんはパジャマでコーヒーを飲みながらいつもと変わらない馬鹿話をして時間を過ごしている。

生徒がまだ中2のこの時期、家庭教師って何を教えてるのか、とかの話題の流れから、ちよつと気になってる疑問をさり気なく訊いてみることにした。

「ね、お兄ちゃん。留美ちゃんって……お兄ちゃんの何？」

「いふつ……。な……。な、何って。何だ小町、突然そんな」

あちやあ、失敗失敗。全然さり気なくなかったか……。いきなりのド直球すぎる質問にお兄ちゃんは大にむせた。

「だって……前から思ってたんだけどさあ……お兄ちゃんて、留美ちゃんだけ特別にかまってるよね？」

「う……そう見えるか……」

この兄め、自覚が無いの？

「そりやそーだよ。だってまさかの合鍵まで渡してるし……中学生の女の子にさ……」

私にはへーつと意地悪く笑ってお兄ちゃんをイジりにいく。

「ぐ……あれは家庭教師の……いや……。なあ小町、俺……やつば変か？」

「うん、今までだったらお兄ちゃんって、誰かがこう……グイグイ来ると、面倒くさがって逃げようとするみたいなどこあったよね。」

……けど留美ちゃんに対してだけは——なんていうの？　こうさ、不思議に正面か

ら向き合ってるカンジで……」

そう、変というか……らしくない？

「それは……」

「あの林間学校のあれ気にしてるってのあるんだろーけど。それだけにしては……他に
も何かあるのかなーって。……あ、言いたく無いことなら無理には……」

「……を……つてくれたんだ……」

何かを言いよんどんでいたお兄ちゃんがボソリと言う。

「え？」

「手を振ってくれたんだ」

「手……？」

お兄ちゃんは頭をガシガシ掻きながら話し始める。

「前に少し話したことあったろ。高二ん時の秋に……学祭とか修学旅行とか選挙とかあつて……ちよつとキツい時期があつたつて話」

「うん……」

覚えてる。学園祭で馬鹿なことやって「学校一の嫌われ者」になったり、修学旅行と生徒会選挙の時は、お兄ちゃんなりに一生懸命だったのに……何が悪かったのか——結局雪乃先輩や結衣先輩とまですれ違つちやつて、お兄ちゃんの大切な場所だった奉仕部がバラバラになりかけて……あの頃のお兄ちゃんは小町から見ても本当に辛そうだった。

「ま、もとを^た迎れば全部俺が原因で、ただの自業自得なだけだったんだが、それでも……平気だったわけじゃない。

そんな時に、あいつは……留美は俺を見つけると、いつも本当に嬉しそうな顔で手を振ってきてな」

まだほんの1年ちよつと前の話を、お兄ちゃんはなんだかひどく懐かしそうに語る。「俺も馬鹿みたいに手を振り返したりして……今思うと自分でもキモい絵面だが……。まあ、あの頃の留美は俺の状況なんて知らなかったはずだし、単に普通の挨拶みたいなもんだったんだらうけど、俺にとつては……俺があれでどれだけホツと出来たか、どれだけ——救われたか……」

「お兄ちゃん……」

……確かに、辛い時に触れる無邪気な好意つて……沁しみみるよね……。

「それだけつてわけじゃないが、まあ……だから何だ？　その恩義つて言つたら大袈裟かもしれないが、俺にやれることなら出来る限りやってやりたいと思つてるうちに……なんとなくこうなつてるといふかだな……」

恩義つて……もしかしたらその感情はそれとは違うんじゃないや……。

「お兄ちゃんさ、それつてもしかして……留美ちゃんのこと好……」

「馬つ鹿そんなんじゃないやねえよ。俺はただ……」

「でもさ、はつきり好きだつて告白までしてくれた女の子を、突き放しもせずそばに置いておく訳でしょ」

お兄ちゃんは、痛いところを突かれたというように一瞬間をしかめ、

「置いとくつて……。だいたい留美のあれは……多分、疑似恋愛つてやつ……ほらアレだ、助けられた動物が懐くみたいなもの……」

そう小声でぼそつと、だけど女の子としては絶対看過出来ないさいてーな言葉をもらしやがったのだ。

「お兄ちゃんの馬鹿っ！ そんなだからゴミいちゃんなんだよっ」

「つ……っ、小町？」

いきなりキレた私にぎよつとしてビビるお兄ちゃん。おうとも、いくらでもビビりやがるがいいさあ。

「女の子の真剣な気持ちを……疑似恋愛だからとか動物が懐くとか……疑似恋愛なら何？ じゃあその気持ちまで嘘だつて言うの？ ……そんなの、馬鹿にしすぎだよ……」

「う……悪い、でもな……」

「でもじゃないよ。いい？ 留美ちゃんの気持ちは真剣だよ——ちゃんとお兄ちゃんのこと見ててくれてるんだよ。なんでそのくらいわかんないの。……あ、今の台詞小町のポイント高い！」

「……せつかくシリアスだったのにポイントとか言っちゃうのはどうなんだ……」

「ええいだまらっしやい！ 小町が言いたいの……」

「……わかってるよ」

静かに、けれどよく通る声でお兄ちゃんはそう言った。

「ほへ？」

「多分、わかってる。でも今は……俺が俺自身の方をよく解つて無い……んだと思う」

「……はつきりしないなあ……」

「はつきりしてたら悩まねえよ！」

おおつとまさかの逆ギレですかあ。えへへ、でもちゃんと悩んでるんだね、お兄ちゃん。

「そう、かあ……」

「おう」

「では、存分に悩むが良い」

「……おう」

あれ、私、留美ちゃんのことではちよつとモヤモヤしてたのに、なんだか二人のこと応援するみたいなこと言っちゃってるなあ。

でも小町が応援するのはあくまで「お兄ちゃん」

「いっぱい悩んで、お兄ちゃんにとって一番の相手って思える人を見つければ良いよ

……留美ちゃんでも、他の誰かでも」

「だから留美は……いや、そうだな……留美は俺にとつて——■■■■……だ。きつとな」

「……おおう、お兄ちゃん……そこで俺今カツコイイこと言った、みたいなドヤ顔するは小町的にポイント低いよ〜?」

ホントいきなり何言つてんのこの兄は。全オール小町がドン引きですよ。

「う……やつぱり今の無しな」

「いや、無しとかそういう……」

「とにかく、絶対誰にも言うなよ」

「それは大丈夫。ここまでアレだと身内の恥になるから逆に言えないって」

「あ、そう………。そこまで酷くは無いんじゃないや……いや言わないでくれるのは良いんだけどな……」

納得いかないというようにお兄ちゃんは首を捻ひねる。

私はそれを見てやれやれと肩を竦めながらコーヒを啜る………そんな風に比企谷兄妹の夜は更けてゆくのでした、まる。

え、お兄ちゃんが留美ちゃんの事なんて言ったのかつて?

それは……ごめんなさい！ この時お兄ちゃんが何を言ったかは内緒なのです。だつて誰にも言うなつていわれちゃったからね。とかいうか小町が言いたくない。

あ、一応言つとくけど別に好きだとか嫌いだとかつてそういうはつきりした言葉だつた訳じゃなくつてね、ただ、中二病（高二病だつて？）全開の恥ずかしい台詞だつただけ。

そうだなあ……もし将来二人が付き合うような事にでもなつたとしたら、お兄ちゃん目の前で留美ちゃんに今日のことをバラしてあげよー。

ふへへ、二人ともどんな顔するかなあ……………。

幕間 オムニバス② 冬の日、もう一つの想い

話。あの日、留美の家庭教師——比企谷さんの話をネタに留美をからかっていたときの話。

「もう………………。恋愛ウオッチャーとか偉そうに言ってるけど、それって絢香はいつも横から見てただけって事でしょ？ だからそんな…………。」

そんな留美の言葉にちよつとかちんと来たあたしは、

「失礼な。あたしだって人を好きになったことぐらいあるっての」

思わず反射的にそう言ってしまった。

「え!! 誰!! そんな事一言も…………。」

当然、彼女はびっくりして食いついてくる。泉も声さえ上げなかったものの意外そうにじつとこつちを見る。あゝ…………失敗したカモ。

「ええい騒ぐでない。遠い昔の話じゃよ」

大げさに声色を作って冗談のように言っでごまかす。

でもそう、過去形。昔の話。それにあれが本当にいわゆる「恋」に当たるものだった

かなんて——本人であるあたし自身よく分かってなかったんだよね。

あの時はただ、何て言うかこう……漠然と「この人の事好きだな」と思っただけで。でもさあ……いくら昔の話とはいえ、その相手が、目の前の親友がずっと想い続けている「彼」だったつてのがねえ……。

うん、やつば言えないわ。ちよつぴり卑怯かなーとは思うけど。まあ小学生の時の話だし、ここは許してもらおう。

そう、あれは——

* * * * *

晴れてはいるものの、見上げる空の色は青というより水色に近い淡い色。そこに、北風に吹き伸ばされたような長い筋雲が幾筋も平行にたなびいていて、嫌でも今が真冬なんだという現実をあたしに突きつけてくる。

また一台のバスがあたしの横を通り過ぎていく。それを横目で見ながら、

「はあ……。な、舐めてたわ……。バスで15分つて、歩くと結構掛かるんだなあ……」

そう溢こぼしてため息をつく。

そんな事をしたところで、寒空の下黙々と……いやブツクサ言いながらだけど、とにかく——歩けど歩けど目的地はまだ遙か先——という状況が変わるわけでもないんだよね。

あああゝ、もうなんでこんな事に……って自業自得なのはわかっちゃいるんだよ。ただとにかく今は、今朝のうっかりなたしを呪ってやりたい。

まあでも、せっかくここまで歩いたんだし、今更駅に戻るつてのもないよな。

一息入れて再び歩き出そうとした時、歩道をあたしとは逆方向からゆつくりと走ってきた自転車、ちょうどあたしとすれ違おうかというタイミングでキイツと甲高いブレーキ音を立てて止まる。

「綾瀬……だよな？ お前、こんなところで何やってんの……？」

そう自転車の上から声をかけて来たのは……。



お線香と風除け付きのライターは肩掛けバッグの中に入れてあるし、昨日買って花瓶に活けておいた花束を新聞とビニールで包んで、あとは……そうだ、パスカードいくら分残ってるかわかんないから、財布にチャージ用のお金入れとかなきや……。

慌ただしく出かける準備をしていると、

「おねーちゃんお出かけするの?」

と、幼稚園年少、下の弟の「コウ」がちよつと何かを期待するような目をして聞いてくる。あわよくば自分も連れて行ってもらおうというつもりなんだろう。可愛い弟よ、連れて行つてあげたいのは山々だけど……でも今日はそういうわけにはいかないんだ。ゴメンね。

「今日はね、ちよつとお使いに行つてくるんだ。だからコウはお留守番」

「えー、ぼくもお使い行く〜」

「ゴメンねー、今日是一緒に行けないんだ」

「でもぼく……」

「こらコウ、おねーちゃんを困らせないの。今日はお兄ちゃんと一緒に遊んでて」

お母さんにそう言われたコウは、唇を尖らせて言う。

「だつてお兄ちゃんいっつも意地悪するから」

「してない!」

「するもん!」

負けじとお兄ちゃんことコウのひとつ上のレイが言い返し、二人はうがーつとお互いを威嚇するように睨みあう……といつても二人とも幼稚園児。端から見ると可愛い

もんだけどね。

「ほら喧嘩しなーい!!」

「でもお……………」

「……………」

「お利口さんにして待ってて。帰ってきたら遊んであげるから」

「……………うん。ほんとにほんとに約束だからね……………」

そう渋々言いつつもコウは未練たらたらって感じだなあ。

そこに仕事着のお父さんがひよいつと顔を出す。

「絢香、あれ包んで玄関に置いたからな」

「はーい。ありがと、おとーさん」

「おうよ。まあ……………よろしく言っといてくれ」

「……………うん」

お父さんは弟たちの目を気にしてるのかちよつぱり歯切れの悪い言い方をする。

コウはなんだか不思議そうな顔してるけど、年中になつた途端に何故か急に生意気になつた、お兄ちゃんことレイの方はあたしのお出かけなどには興味が無いらしく、もうさつきまで読んでた漫画に夢中だ。そもそもちゃんと話を聞いてたんだかどうか

……。

そこで弟たちをなだめていたお母さんが聞いてくる。

「あ、絢は何時頃出るの？」

「ん〜……もう行くよ。今出れば22分の電車乗れるし」

あたしは時計をちらつと確認してそう答える。

「ん……いつてらっしやい。姉さんによろしくね」

「うん……いつてきます。おかーさん」

今出ると、最初に乗ろうと予定してた電車より3本も早いのに乗れちゃいそうだ。別に急ぎの用事というわけでは無いんだけどな。ま、いつまでも家にいるとまたコウが「やっぱり一緒に行きたい」

とか言い出すかもしれないし。私の方は早くて困ることなんて無いからね。弟の未練をすっぱり断ち切るためにもそのまま出たほうが良いだろう——そんな風に考えて家を出たんだよね。

で、失敗に気が付いたのは電車を降りてから。

改札を出たところにある切符販売機兼カード用チャージ端末にバスカードをセットして、鞆から財布を出そうとしたら……無い！ 財布が入ってない！

の才オオオオオ……。なんて大げさに頭を抱えても無いものは無い。

そういうばお金の準備だけしてそのまま置いてきちやつたんだっけ。バタバタと慌てて出てきちやつたからなあ……。

電車乗る前にチャージしようとしてればすぐドジに気付いたんだろうけど、駅に着いた時、電車の時間にちょうどピッタリだったから、ラッキーとばかりにそのまま改札通っちゃったんだよね……。

幸いにもここから自宅の最寄駅——つまりついさつき乗ったばかりの駅——まで戻るくらいのチャージ残高はある。ここで私の選択肢は2つ。

その1：一度家に財布を取りに戻って改めて出直す。ぶっちゃけめんどくさいし、なんか負けた感ある。またコウがグズリそうだし。

その2：普段ならバスを使う道を徒歩で往復する。前来た時は片道15分くらいだったから、ちよつと時間かかるけど歩いても行けそうな気がする……。うくん、選ぶならこつちかな。幸いというか予定よりだいぶ早く家を出てるし、もともと歩くのは嫌じゃない。

「おしー！ いつちよやつたるかあー！」

空気で気合を入れたあたしは、駅構内にあった地図で目的地を確認し、冬晴れの空のもと、一路目的地へと向けて歩み始めたのでした。



で、さっきの地図と前に何度か来るときの記憶を頼りに歩いているから道は間違っていない……はず。本当は乗るはずだったバスが目の前を通り過ぎて行ってるんだから間違っていないよね？ たぶん……。

どうやら単に目的地はあたしが漠然と考えていた以上に遠かったということらしい。そんなわけで心が若干くじけかけていたところで彼から声をかけられたというわけ。

「え……比企谷さん？」

目の前には友達の想い人、素敵なゾンビチック・アイの持ち主比企谷さん。ちよつともこつとした暖かそうな上着にマフラーでしつかり首元をガードした冬仕様。あたしが彼をお見かけする時はほぼほぼ制服姿なので、比企谷さんの私服姿はなかなか新鮮に映る。

「やっぱり綾瀬か」

「こんなところで何してんですか？」

「いやだから、俺が訊いてるんだけど。ちなみに俺は本屋の帰りな」

「むむ、わざわざ離れた本屋に買い物とか、きてはエッチな本ですね。そんな事してると金髪の吸血鬼に眷属にされちゃいますよ」

「ばーか。俺はそーゆうのはデジタル派なんだよ……つてそうじゃなくて、気分転換にちよつといつもよりでかい本屋に行こうと思っただけだ。ついでにそういう系の知り合いは雪女が一人いるから間に合ってる」

「なるほど、雪女の従僕ですか。確かに便利にこき使われてるようではあります」

雪女と聞いて、それは誰のことだろう？ とか一片も考えないあたしも大概酷いな。

「誰が従僕だ……いや、案外当たってるような気もしないが……。それにもしかしてその蝸牛かたつむり幽霊少女みたいな喋り方は狙ってやってんのか？」

おお、留美から「八幡は小説なら何でも読むよ」とは聞かされていたけど、こつち方面もイケるのか！

「ををつ、さすがは日比谷ひびや花壇かだんさん！ まさかこれに気づいていただけるとは」

「人の名前をピアノの発表会に花をお届けに来そうな高級生花店みたいに言うのはやめろ……。僕の名前は『比企谷一ひきがや』だ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ……って、何がさすがなんだよ。それに無理やり名前噛まなくていいぞ。俺は元々ヒキタニって誤解されてんだからこれ以上必要ない」

「ほほう……って、いやいやそこは『かみまみた』まで言わせてくれる流れじゃないんですか!？」

まったく、不完全燃焼この上無い。

「さすがにそこまでネタ引つ張るのもなあ」

そんな事言つて……「僕」とか言つちやつてけっこうノリノリだったくせに……。

「いいじゃないですか。あたし今日は……ちよつとそういう気分の日なんです」

「そういうつて……」

「……迷子な蝸牛かたつむりの気分……みたいな感じですよ。　そんなあたしがこのタイミ

ングで自転車に乗った男子高校生から声をかけて頂けるとか、これはもう何かの運命ですかね?」

あたしが胸の前で祈るように両手の指を組み、わざとらしい上目遣いをする、
「そんな無理やりな運命は無いだろ……。で、お前は何してんの?」

比企谷さんは付き合つてられないと、呆れたような顔をしながら訊いてくる。

「いやー、実は○○霊園に行く途中なんですけど」

「はあ？ 歩いてか？」

「はい」

「駅から？」

「まあ」

「なんでバス使わないんだよ。歩いたら結構あるだろ」

「あー……実は今朝財布を忘れちゃいまして、パスカードは持つてるんですけど残高が心細くて……」

そうしてあたしは大雑把な事情を説明する。

「そうか……じゃあとりあえずバス代位なら……いや、どうせここまで来たならその方が……」

なにやら考えてる様子の比企谷さん。

「よし、絢瀬は後ろに乗れ」

やがて彼は何でもない事のようにそう言う。

「え？」

「自転車なら大してかからん。乗せてつてやるから俺の後ろに乗れつてこと」

「そ……でもそんなご迷惑を……」

「ここでほつとくのもなんか心配だしな……。ま、二人乗りがまずいなら、バス代貸した

ほうがいいか？」

あたしは……

「じゃ、じゃあ……ホントに乗せていただいても良いですか……？」

そう、答えてしまっていた。

◇ ◇ ◇

あたしを乗せた比企谷さんの自転車は軽快に飛ばしていく。あたしは彼の腰のあたりに軽く掴まって、自転車の荷台からの眺めをちよつと新鮮な気持ちで味わっていた。

その後比企谷さんはあたしの荷物を前かごに入れてくれ、あたしは言われたままに荷台に跨がってるんだけど——これが意外に快適。荷台は幅広で平らだし、後輪の車軸に取り付けられていた折り畳み式のステップも大きめでしっかりしてて、踏ん張りが効くというか……安定感がある。

バス通り沿いの広い歩道。自転車通行可の青い標識。視線を上げれば遠くに高速道

路の高架らしきものが延々と続いているのも見える。

景色の流れていくのが想像していた以上に速い。それに、たまに友達とふざけて二人乗りするときのようなギクシヤクした感覚やフラフラとバランスを崩すようなことが全く無い。

なんていうか……いかにも二人乗りに慣れてる感じの比企谷さん。肩幅の広い背中が頼もしく感じられて、女子としてはちよつとキュンとしてしまう。こ、これは数多の恋愛漫画とかに倣つて彼の背中に抱き付くべきか？……つて、いかんいかん。

この比企谷さんは大切な友人の想い人。ここで変な感情を持つてしまうと色んな意味でヤバイ。

だいたいこの比企谷さんは、なんであたしなんかの面倒を見てくれたのかねえ？

ま、これはあくまであたし個人の考えなんだけども……あのクリスマスイベントを通じて思ったのは……この人、年下の女の子には無条件で甘いところがあるみたいなんだよね。

お兄ちゃん体質というか……同世代には遠慮がち——あえてひどい言い方をすれば卑屈っぽい態度の比企谷さんは、しかし何故か年下には妙に堂々としていて面倒見が良いのだ。

全身から、こう……頼つてもおつけーみたいなおーラが出てるんだよね。あのクリス

マスイベントの時も、実は小学生チームからの信頼度は抜群に高かったんだ。まあ、留美とセツトで生暖かく見守られてたつていう事情もあるけど（笑）

こういう態度を年下以外の相手にも出来ればきつともつとモテるのに……いや、もう十分モテてましたねそういうえば。本人に自覚があるかどうかはさておき。

うーん、やっぱり分かる人には分かる魅力ってことなのねー。

そうこうしているうちに自転車が霊園の入り口に到着。比企谷さんは駐車場の端の方にすうつと寄せて自転車を止めた。

彼の言ったとおり、確かに大して時間もかからず目的地である霊園に着いてしまい、自転車を降りてお別れしなければいけないのがちよつと名残惜しいくらいだ。

なーんて思ってたんだけど……。

「ここで良いか？ 俺はしばらくこの辺ぶらついて待つてるからゆっくり行ってこい」

なんと！ 比企谷さんは当たり前のように帰りも送ってくれるつもりでいたらしい。くうつ、もおー……そういうトコだゾ！ うっかりしたら惚れてまうやろー！

でも……こんな寒い所でただ、待つてもらおうくらいならいっそ……。

「もし、お時間あるなら……比企谷さんも来てもらえませんか？」



断られるのも覚悟していた誘いに、存外抵抗なく比企谷さんは付いてきてくれた。

きつちりと碁盤の目状に区画された広い霊園。入り口から1分程歩いて目的の区画に到着したところで、あたしは荷物を一度預かってもらうことにする。

「それじゃあ、ちよつとこれおねがいます。できればあんまり傾けないように……」
「おう。……これ、何入ってるんだ？」

「あ、お供えの和菓子です。お父さんとあたしで作ったんですよ」

「そーいやお前、あやせ屋の娘だったっけ」

「はい」

「じゃあ、将来は和菓子屋の跡取りか」

「……それは……」

「……?」

適当に答えればよかつたんだけど、何故かそれが出来ずに答えに詰まってしまった。

比企谷さんはそんなあたしの様子を訝しげに見ていたものの、それ以上突っ込んで聞いてきたりはしない。

霊園内にくっつか設置されている水場のうちの一番近いところでお茶碗と花立を洗い、備え付けの手桶に水を酌む。

比企谷さんは「綾瀬家の墓」の前でちよっぴり居心地悪そうにして待っていてくれた。花立てに花を活け、お線香に火をつける。それから比企谷さんに持つてもらっていた包みを開いて、小ぶりな重箱の蓋を開ける。その箱ごとお菓子をお供えし、湯呑茶碗には持つてきたマグボトルのお茶を注ぐ。気温が低いせいか、茶碗の大きさに似合わない盛大な湯気が立ち昇った。

あたしが静かに手を合わせると、比企谷さんも手を合わせてくれているのが横目に見えた。

「……………」
「……………」

しばしの沈黙。あたしは心の中でここに眠る大切な人に近況を報告する。学校の事、友達の事、おとうさんの事。みんなの事も。

伝えたいことを一通り語り終えたあたしは、立ち上がって比企谷さんの方に振り向

き、

「じゃあ、一緒に食べましょうか。お好きなのをどうぞ。ちゃんとお茶もありますよつ」
そう言つて、さつき備えたばかりの重箱を持ち上げて両手で彼の方に差し出した。

「え！ いやそれは仏さんの……」

「あー……。最近はですね、お墓に備えたお菓子とか飲み物とかは、持つて帰るかその場で食べてしまつて下さいっていう決まりになつてゐるんですよ。なんでもカラスとか浮浪……じ、自由生活者さんとかがお墓を荒らすのを防ぐためだとかで……」

あたしはちよつとびっくりしてゐる比企谷さんにそう説明する。

「ああ。そういうえば駐車場のところの掲示板にもそんな事書いてあつたな」

「あたし一人じゃ食べきれませんし、持つて帰るよりはこの場で食べてもらつたほうがお菓子も喜ぶと思つて……実はそのために来てもらつたんですよ」

比企谷さんはフツと笑つて、

「お菓子が喜ぶつて……うまく言えんが、良い……面白い言い方だな」

そんな事を言う。

「あはは。変ですかね？」

「いや。ただ、綾瀬が自分とこのお菓子を大事に思つてるといふのはわかつた」

そう言つて彼は重箱に手を伸ばす。

「どれが綾瀬の作ったやつだ？」

「え？ あ、この『一口どら焼き』とかこの辺がそうです。作ったって言つても白玉と餡を包んだだけとかそんな感じですけど……」

あたしがそう言うのと、比企谷さんは 一番端のどら焼きをひよいと摘まんでそのまま半分くらいかじり、モグモグと食べる。

あたしがマグボトルの蓋（カップ）として使えるタイプ）にお茶を注いで差し出すと、彼はすずつとお茶をすすり、

「うん、美味しい。形もきれいだし……お前才能あるぞ。本気でやるのも良いんじゃないか」

不意打ちのようにかけられた言葉。……この言い方は……きつとさっきのあたしの煮え切らない態度に何かを感じてくれたからこそ今の言葉なんだろう……多分。

あたしは墓石の方に向き直り、そのまま比企谷さんの顔を見ずに言う。

「あたしのママ……ほんとお母さんです」

比企谷さんは何も言わない。一度顔を上げたあたしと一瞬だけ視線を合わせ、またすつと墓石の方に目を遣る。きつとあたしが続きを話し易いように——あるいは話したくなければ話さなくてもいいように。

「ママはあたしが幼稚園のときに病気で……………。今のお母さんはママの妹……………ほんとは叔母に当たる人なんですよ……………」

お父さんとお母さんたち姉妹は、同じ町内に住む子供の頃からの知り合いで両家とも家族ぐるみでの付き合いだったとか。

彼女は、ママが亡くなった後もずっとあたしたち父娘と家族同然に接してくれて……………それにそもそもあたしにとって今の「おかーさん」は元々年の離れたお姉ちゃんみたいな存在だったんだけどね。

それから一年ぐらい経って、「おとーさん」と「おかーさん」は、双方の両親の勧めもあつて結婚。父は再婚なんてまだ早いつて躊躇したみたいだけど、それでも決心した理由のひとつには、幼いあたしに母親が必要だと思つたつて事もあるんじゃないかな。

その後年子の第二人が生まれ、元々叔母と姪で顔立ちが似ている母とあたし。事情を知らない人から見ればごく普通の家族になって……………現在に至る……………」と。

一度話し始めたあたしは止まらなくなり、溜め込んでいた何かを吐き出すように、連々と今まで誰にも話したことがないようなことまで彼に話してしまつていた。

そう、このあたし一人のお墓参りそれ自体があたし自身の何かを吐き出すためにしているようなものだ。

家族みんなでお墓参りに来る時は、幼い弟たちの手前「ママ」と声をかけるのがはば

かられる。今のお母さんも、「お母さんのお姉ちゃんのお墓だよ」と弟たちには説明していた。

いつの頃からかそれが無性に苦しくなって、去年から、ママの命日の直前の休日にはあたし一人でお墓参りに来るようになったんだ。

お父さんやお母さんには言い出しにくかったけど、いざ話してみたら二人共なんだか納得するような顔をして笑ってた。

「……………だから、迷子娘の気分、か」

比企谷さんがポツリと漏らす。

「弟たちはお父さんと今のお母さんの子で、あたしとお母さんが違うってことは知りません。両親はもう少し大きくなってから話すつもりでいるみたいですけど」

「今一生懸命お店を盛り上げてるのはお父さんとお母さんなんです。だから……」
「だから？」

「さっきの話ですけど……やっぱり、お店を継ぐのはあたしじゃなくって——レイかコウ……弟二人のどっちかが良いと思うんですよね」

そう言つてわざと茶化すように言う私に、しかし比企谷さんはまるで論すように言葉をぶつけてくる。

「……絢瀬に継ぎたいって気持ちがあるなら、そう言ってみれば良いだろ」

「……さすがに鋭いなあ。それともあたしが分かり易過ぎるのか……」

うん、そのとおり。あたしは出来ることなら将来和菓子職人になって、尊敬するお父さんの技を受け継いで行きたいと……家の店を守って行きたいとも思ってる。でも……。

「あたしがもし『お店を継ぎたい』なんて言ったら……お父さんもお母さんも絶対『良いよ』って言ってくれちゃうと思うんです。たとえ本音では違うこと考えてたとしても」
そう、両親には両親の考えがあるだろうし、それにあたし自身の中にも、弟が店を継ぐのが当たり前だと思う心が確かにある。

職人の世界はなんだかんだ言ってもまだまだ男社会だ。男の子がいる家なら、その子とお嫁さんが家業を継ぐってのがうちみたいな業界の一般的な考え方だと思う。

「でも、やりたいって気持ちはあるんだな」

「それは……」

「本音を話すのは悪いことじゃねえよ。ここには綾瀬とお前のママさんしか居ないんだから遠慮する必要無いだろ」

「……比企谷さんがいるじゃないですか」

「俺は、『俺なんかいてもいなくても同じ』みたいな空気に慣れきってる男だ。そういう

空気を読みすぎて最近は何れも俺自身が空気まであるから気にするな」

上手いこと言つたみたいで顔ですごく悲しい事を言う比企谷さん……。 「空気」ならそんな風に女の子に優しくしてくれないと思う。

「親に言いにくいなら、言い易くなるように状況を整えたり、逃げ道を作つておいたりするのでも手だぞ」

3つ目のお菓子を頬張りながら彼が言う。

「……………」

「例えば………… 『弟たちに他にやりたいことが出来たら、あたしがお店継ごうかなー』とか。で、弟の『他の夢』を全力で応援する、とかな」

「それじゃレイとコウが…………」

「じゃあ、もしお前の弟たちが、家を継ぎたくないと思つてたとして、それでも店を継がせるつてのは良い事なのか？」

「そ、それは…………」

「弟、二人ともまだ幼稚園だったよな。これから大きくなって、『マリーンズの選手になりたい』とか『成田空港で働きたい』とか『専業主夫になりたい』とか言い出すかも知れないだろ」

「専業主夫は無いと思います……」

「そうか？ あとは、『弟がお店継ぐときは暖簾分けでもしてもらおうかな』とか『兄弟3人でお店やろうか』とでも言つときゃいい」

「いやいや何言つてんですか。このご時世に、暖簾分けとか経営的にも厳しいでしょ」

「……意外と冷静だな。お前ホントに小学生かよ……」

姉弟で一緒に、というのもナシだ。こんな小姑がいたら将来弟のお嫁さんになる人がやりにくいだろうし……。

待てよ、いつそのことあたしが弟のどつちかと結婚すれば——ここは「千葉」兄妹の結婚が赦されている約束の地！

なら、姉弟で結婚つてのもワンチャン有りか？ いやねーよ！

などと、あたしが脳内でお馬鹿な事を考えていると、

「今から具体的な話としてそう考えろつて事じゃない。お前が小学生であることを最大限に活かす戦略みたいなもんだ」

「戦略……とは？」

「つまりだな、今みたいなことを小学生らしく無邪気に言っておけば、自分の希望を両親に伝えつつ、かつその後の展開によっては撤退もしやすい状況を作れるわけだ」

……成る程、あくまでもよくある子供の夢、みたいな感じにしとけば、両親は、「あた

しを後継者と考えた場合、レイとコウは……」などと真剣に悩むのはまだまだ先の話でいいという事になる。その上でちやんと、あたしがお父さんの技を学びたいと言えば教えてもらえるであろう環境……というか了解が貰えるわけだ。

これは——うん、両親の心に変な負担を懸けずに和菓子職人を目指したい、というあたしにとつては満点に近い方法論かも。

「比企谷さん……腹黒いですね」

「そこは、戦略に長けてるとか言っといてくれない？」

なんて反論しつつも、腹黒と言われた比企谷さんは何故か嬉しそうだった。

それから比企谷さんは、帰りもあたしを駅まで送ってくれた。彼の背中がなんだかとても頼もしく感じられて……「超寒いつ」とかわざとらしく言っつてその背中にくつついてしまったのはきつと……。

別れ際、駅前の自販機でコーヒーまで奢ってくれた比企谷さん。冷えた体にあの甘くって暖かいコーヒーは沁みたまー。



そして今——中学生になったあたしは本気で菓子職人を目指してる。

あの日家に帰ったあたしは、勢いに任せるように「和菓子職人になるための勉強をしたい」と両親にお願いした。先のことはわからないけど、家を継ぐくらいの気持ちもあることも。

その時、比企谷さんに知恵をつけてもらった作戦通りに、弟の気持ち次第だという話や、場合によっては暖簾分けしてもらうのも良いなー、みたいな話とかもしたけど……でもそんなのはただのおまけ。こういう逃げ道とか予防線とかが「ある」と思うことであたしは両親に本音を言えたんだ。

比企谷さんは「戦略」とか言ってたけど、きつとそれ自体が重要じゃ無いってことは分かってて言ってくれてたんじゃないかなあ。

それに気付いた時はなんだか面映ゆくって嬉しくて……ふと気が付くと何故か比企谷さんの広くて温かい背中を思い浮かべたり、クリスマスの時に頭撫でてくれたことを思い出していたりと、

「きやは、あたしつてば恋する乙女みたいじゃん」

などと頭悪い突っ込みを入れたくなるような浮かれ状態だったんだ。

で、あたしはその浮かれた気分のまま——お世話になったお礼だと自分に言い訳して

——感謝の気持ちを込め、比企谷さんのためにバレンタイン用の練切菓子心を込めて作ったのでした。……いやけっこうマジで。本格的な練切細工なんて初めてだったし……あれ3つ作るのに5時間近くかかったんだからね！

* * * * *

あの後……あたしのお母さんのことか、家を継ぐ継がないの話だとか……比企谷さんはもしかしたら……留美にだけは話すんじゃないかな、なんてちよつと思ったりもしてたんだ。別に口止めもしなかったし、もしそれで自分からは話しにくい事をそれとなく伝えて貰えるなら……まあそれもいいかな、なんて。

でも、留美の様子は変わらないし、ついこの間あたしがポロツと漏らしてしまったお母さんの話にも本気でいぶかしがっている様子で……。

だから今はつきりと確信が持てた。比企谷さんはあの日の事を誰にも話してないし、あれから今に至るまで、まるであの墓参りの時の話が無かったかのようにあたしに接してくれている……。なんていうか「氣遣いの人」だよ。苦労してそうだなあ……。

一度だけ意味ありげな表情を見せたのは、あの少し後……あたしが六年生のときのホワイトデー直前にうちのお店で「お母さん」と顔を合わせた時ぐらいだろう。

まあそんなわけで、その時は全く自覚が無かったものの、振り返ってみれば当時のあたしは間違いなく比企谷さんに恋してただよびたね。

もつともその頃から留美が本気で彼に惚れてるのを目の当たりに見てたわけで、あれと比べちゃうと……あたしの気持ちなんて恋と呼ぶのもおこがましいような些細なものだったんだけど……。

今はどうなんだって？ いやだから昔の話だってば。

まーその……家族とか以外で誰か好きな男性の名前を挙げるとすれば、とか聞かれたら、真つ先に彼の名前を思い浮かべるくらいには好ましく思ってる……かな？

いやほらね、比企谷さんとは留美を通じてだけど会う機会はけっこうあるし、そういう時、留美と仲良さげに話してる様子とかを見てると、

「いいなあ、留美は……」

なんて思う気持ちも……有ったり無かったりしますけど……。ごめん……ちよつぴり、ほんのちよつぴりだけ気持ち引き摺ってるかも……。

でもだからといって留美を応援する気持ちに偽りは無いし、本当に、心の底から留美の恋がうまく行ってほしいなと思ってる。

ま、身も蓋もない言い方をすれば比企谷さんより留美のほうが好きだし。……つ

て、つまりあたしつてもしかして今流行りの百合っ子なのん？

あたしにその気はなかつたはずなんだけどなあ。

でも、今日の前で比企谷さんの家庭教師の時の話を恥ずかしそうな、嬉しそうな顔で話す留美を見ると自信が揺らぐ。この照れたような幸せそうな表情を見ると……それだけでご飯三杯イけるわ。これは男子も女子も惚れちゃうね！

結論。あたしは——留美と比企谷さんがセットで好き！ ということでおーけー。

結局あたしはこの図体のわりにお子さま脳なのか、はたまた逆に子供らしくなく覚め過ぎているのか……自分が恋愛するより誰かの恋を眺めてからかっている方が性に合っているってことなんだろうな、今んトコは。

だから、いつか留美と比企谷さんがくつついて、二人セットでからかうことが出来るように——

「留美……頑張れ」

何の脈絡もなく、いきなりそんな声をかけられた留美は、あたしに一瞬キョトンとした目を向けたあと、

「うん！」

と、微かに頬を染め、目を細めて鮮やかに微笑った。

ほああ ……親友の笑顔が可愛すぎて死ぬる……。

幕間 オムニバス③ 我が野望のために

闘い疲れた戦士には休息が必要である。

室町時代最強の剣豪將軍「足利義輝」が、戦国武將が美少女化して覇を競っている剣と魔法の世界「倭の国」に転生した。彼はたどり着いた弱小国の姫武將を、自が劍の腕と転生時に会得した二刀流の技、そして左手に封印された黒炎龍の力で無双して助け、その国の軍師となる。

戦いの中で義輝の力を見せられて次から次へと軍門に下った他の美少女武將達。ヒロインや彼女たちとイチチャコラしつつ天下統一に突き進む。

……という実に心踊るストーリーの自作小説を、我が「小説家になるぜ」という投稿サイトで連載し始めたのが無事大学に進学したこの春の事。

このweb小説が一気に人気爆発。書籍化待ったナシで大量重版。あつという間にアニメ化が決まって……メインヒロインの声優には人気絶頂アイドル声優の「あやみん」がつ！

そして——アニメが縁で原作者の我とあやみんがケコーン!!

……………と、なるのが約束された未来のシナリオだったはずなのだが……………。

——パクリ要素つなぎ合わせただけでツマンネ

——相手（主人公）がちよつとチート見せたくらいですぐに敗けを認めてハーレム要員に成り下がるとか、この世界の女武将はバカしかいないのか

——足利義輝とかマイナーすぎ草生えるww 戦国武将かせめて幕末志士にしろよ 足利は尊氏しか知らん

——ワイは義満と義政なら知ってるゾ

——おー、金閣と銀閣の人だっけ

——いつそ金閣さんと銀閣さんを擬人化して主人公にしろよ

——そこは主人公じゃなくヒロインじゃね？ 金閣ちゃんと銀閣ちゃん

——そのほうがこのクソつまんねー話よりはマシになるな

——……………

……………酷評されすぎて辛い……………というか最後の方はもう作品の話ですら無いではないかっつ。

ううつ、我が心が折れちゃうよおお。

くそう、天才はいつの時代でも最初は大衆には理解されないものなのだ。いずれは時代の方が追いついて私の前にひれ伏すであろう……。

高校時代はまだ良かった。なんだかんだ言っても八幡をはじめ奉仕部の連中が私の小説を読んでくれたからな。あの者たちの指摘は時にはネットのコメント欄以上に辛辣ではあったが、少なくとも悪意は無かった……無かったよね？

卒業後、八幡に相談してみたら、

「プロの作家だってネットでは酷い事書かれたりしてるんだから、そういうのにも慣れが必要だ」

と言われて、それもそうかと思えば大手の小説サイトに私の作品を投稿してみたのだが……orz

とにかく！　私は傷ついた心を癒すため、ここ最近の憩いの地である、とあるファミレスへとやって来たのであった。

勿論ただ休息するためだけではない。私の尊敬している漫画家さんが、

「ネームは家の近くのファミレスでやることが多いです。煮詰まった時なんかは、家で一人でうんうん悩んでるより良いアイデアが出るんですよ」

と、仰有っていたのにあやかろうと思ったからである。

……決してこの店のウエイトレスさんの制服が可愛くて、さらにはスカート丈も短くて、バイトに入ってる女の子が可愛い娘ばかりだから——という訳では無い！ ……無いのだ。

◇ ◇ ◇

……ドリンクバーのお替わりもすでに三杯目。我が大学ノートを払げて例の小説の今後のプロットをああでもないこうでもないと考えていると、店のドアが開き、ガヤガヤと騒がしい声が聞こえてきた。

顔を上げて見れば中学生らしき男子が6、7人。服装は制服だったりジャージだったりバラバラだが、部活の帰りに小腹を満たしにファミレスに寄ったところだろうか。

よく見ればその制服の校章やジャージには見覚えがあった。私の通っていた総武高校からほんの200メートル程しか離れていない中学校の物だったと記憶しておる。

この女の子の制服は可愛いと評判なのだが——ほむん、残念ながら女子の姿は無い……無念である。まあ、我にはこのファミレスのウエイトレスさんという強い味方がいるから許してやろう。

通路を挟んで私の斜め向かいにある大人数用のボックス席に通された彼らは、手早く注文を済ませると、やや常識に欠ける——少々耳障りな声で騒ぎ始めた。

「ややつ、私のちように向かいの席に一人で座っていた30歳位の茶髪の男性が顔をしかめて迷惑そうな顔をしているではないか。」

我が義憤に刈られ、騒がしい小僧どもを一喝すると、存外彼らは礼儀正しく謝罪し行いをあらためた。そして彼らは後にわが有能な配下になるのであった……というシンのアイデアが浮かんだのでそれをネタ帳に書き留める。

「……げふんごふん。いや、ちゅ、中学生と言ったって七人もいたら怖いし我にはムリイ！」

キレル若者、スマホ世代、オヤジ狩り。君子危うきに近寄らず。

まあ彼らとて悪気は無いのだろう。単に声がデカいだけだ。

そんなわけで、聞くとは無しに聞こえてしまう話を聞いていると、我が知己の者の名が聴こえたような気がして思わず耳をそばだててしまった。

「……………」

「……藤沢さんって流石に絵え描くの上手いよな〜」

「藤沢……泉だっけ？ まあそりゃ美術部だしな」

「いや、そういう話じゃ無くてさ、いやそれもそうなんだけど」

「何の話？」

「俺こないだ藤沢さんと同じ小学校の奴に聞いたんだけどさ、彼女、藤沢誠司って有名な画家の孫なんだってよ」

「藤沢誠司……ああ、確か去年……一昨年だった？ 亡くなつたとかニュースでやつたよな。難病を克服して世界的に認められた天才とかどうとか」

「こそ。その藤沢誠司」

「でも、凄いんだろ。確か絵一枚で何百万とか何千万とかするって……」

「おお！ てことは何？ 彼女もしかしてお嬢様ってやつ？ ……あんまそうは見えないけどな……ちっちゃくって可愛い感じだけど」

「お？ 可愛いってお前……」

「ばっか、そんなんじゃ無いっての」

「そうそう。こいつはどっちゃかつつと彼女の友達、鶴見さんのことが……」

「……余計なこと言ってるじゃねえよ」

「鶴見さんって……お前自分の顔鏡で見たことある？」

「うるせーよ」

「いやでも、留美ちゃん確かに可愛い……つてか、綺麗だよな。どつかのブランドの專屬モデルやつてんでしょ？」

「ブランドつてもデザインナーの個人ブランドのらしいけどな。ゴシックロリータとかそういう系」

「へー………つてやつば詳しいじゃんお前！」

「……別にいいだろ！」

「まあまあ。鶴見さんは可愛い。ああいう娘がうちの学校に居てくれることを感謝せねばなるまい」

「うん、彼女………ホントいいよな」

「あ、鶴見さんつて言えば、こないだトーヤのやつが告つて玉砕したつて話だぜ」

「まじ？ トーヤでもだめならお前とかぜつてー無理じゃん」

「っだから………」

「んでもさ………彼女、大学生と付き合つてるとか噂で聞いたぜ………K大生の家庭教師だとかなんとか」

「げ、マジ？ 俺もちよつといいなつて思つてたのに……。お前も残念だったな………」

「だからそんなんだの噂だろ。大体今そんな話してなかつただろが」

「分かつた分かつたつて。つまり今度は可愛い感じでお金持ちのお嬢様である泉ちゃんに目標変更したと………」

「言つてねえ！ 藤沢がお嬢様だつても今聞いたばかりだつーの………」

「……………」

それであつざりと話は変わつて、中学生たちはすぐ違う話題に夢中になつてゐるようだが……。

彼等の話題に上つていた二人……鶴見留美……あのしよつちゆう八幡にくつついておる黒髪ロングの中学生だな。藤沢某というのも彼女の友人だったか。その藤沢という子ともクリスマスイベント等で一応面識はあるのだから……向こうは私の事など覚えてゐるのかも怪しいな。

今の話を書く限り、鶴見嬢は男子に相当人気があるようだが、まあ納得ではある。

一昨年のクリスマスイベントで劇の主役を演じてゐるのを見た頃から見栄えのする少女だとは思つていたが、中学生になり、たまに通学路などで見かける彼女は明らかにその美貌に磨きがかかつてきている様子であつた。此方の中学生が言つていたようにモデル活動までしているようであるしな。

付き合つてゐるといふ噂の大学生とはおそらく八幡のことであろう。先日八幡と少し話をした時には、今のところ特に「お付き合いをしてる」という雰囲気ではなかつたはずだが、しかし——傍から見ただけならば、あの二人はそう誤解されても仕方ないくらいに距離感が近い気がするのだ。強いて言えば兄妹のような関係……かもしれない

ぬ。

八幡め、リアル妹がいるくせにもう一人妹キャラをゲットとかうらめやましい……我の呪いを受けて爆発してしまうがよい。あともげろ。……もしくは一人我に分けて下さいお願いします。

そういうえば……彼女ら美浜二中女子の制服は「艦〇れ」朝潮型駆逐艦の改二の制服とデザインが良く似ており、実に私の好み……駆逐艦としては、かなりいい仕上がり……なのである。

去年の秋頃だったか、件の鶴見嬢と八幡兄妹が通学路で愉しそうに立ち話をしているのを見かけたのだが、その時彼女は髪をサイドに結っていて、朝潮というよりまるで私の好きな、デレないツンこと霞の改二そのままという雰囲気の中で——実は思わずときめいてしまったりしたのだが……むむん、一生懸命お願いしたら、あの制服に霞の髪型で、

「このクズ！」

とか言つて駄目な我を叱つてはくれぬかな。

想像すると……ふほうっ！ 色々と捗るではないか。きつと小説のアイデアも湯水の如く浮かんでくるに違いない！

これはぜひ、八幡の盟友であるという立場を最大限に生かして実現すべく作戦を

……。

はっ、いかんいかん！

なんだかんだで八幡は鶴見嬢のことを大切にしているのが端から見ても丸分かりであり、彼女の方も八幡を慕っているのを隠す気もない様子である。

つまり……彼女にそんな変態ちつくなお願いをしたのがばれたら、怒り狂った八幡により我は物理的社会的に死亡待ったなし！

ええい、だいたい八幡ばかりがなぜモテる。

確かに一見面が整つておるのは認めてやらんでもないが、あんな淀んで世の中をなめ腐つたような目をしておるくせに……。

しかもあの男……高校時代からこの美少女J.C以外にも、ぼわぼわ巨乳の同級生やらあざとビッチ生徒会長やらともイチャコラしておつて……ちよつぱり——いや結構——いやいやめちやくちやうらやましいではないかっ！ 一周回つて、ビッチでも可愛ければアリだと思えます。

ん、もう一人とな？

あ、あの御仁は恐いので正直羨ましくはないです。万が一あんなのと二人にされたら私のライフは5秒に1ずつ減つていつて……最期は氷の彫像にされてしまうにちがいないのだ。それに確かにとんでもない美人ではあるがいかんせん胸は無——。

そんな事を考えた瞬間、何故か背筋に冷たい物が走る。くつ、なんとというプレッシャーだ。これ以上は考える事さえ不可侵のギアスに抵触するというのかッ。

「……………この辺であの手の手の制服なら浜二中ですかね？　野郎の制服は詳しくないっすけど多分」

不意に横から聞こえてきた声によって我の硬直が解除される。

向かいのボックス席、先ほど迷惑そうな顔をしていた男性客の連れらしき人がいつの間にか席に着いていた。

小肥りに眼鏡。髪を金色に染めてピアスと、チャラ男のような格好をしているものの、……………どこかオタクっぽいというか、何となくだが我と同じ匂いがする。いや、我は只のオタクではなく小説家のたまごな訳であるが。

「はまご……………」

「あーつと、美浜第二中のことっす。女子の制服が可愛いって有名で……………ぐふ。これがマジで可愛すぎなんすよ〜〜」

男性客の問いに答えた連れの男はちよつと独特の笑い方をした。

ほう……こいつ、なかなか良い目をしておるではないか！ あの制服は似合う娘が着ると超絶可愛いのだ。なんというわかりみの深さか……。

同意の意を込めて熱い眼差しを送り、心のなかで拳を握つてうんうんと頷いていると、茶髪の男性からギロリと睨まれた。

我はさつと目をそらして知らんぷりをする。

彼らは、私の視線に気付いたせいであろうか、お互いに少し頭を寄せ合い、人目を憚るように小声で話を始めた。

「……………」

「……顔と……調べ……」

「……名前……ならなんとか。でも……」

「……金……都合良い……」

「それって……ヤベー話……」

「……ちよつとお小遣いを……」

「……………」

「……………」

「……調べるだけなら……」

二人が声をひそめているのと中学生が騒がしいのではつきり聞こえないが……。顔とか名前を調べる、ヤバい話、金・お小遣い……。さっきの女子の制服が可愛いと

いう話と合わせて、わが灰色の脳細胞で推理すると……ま、まさかお金でエロい事をさせてくれる中学生（制服着用！）を調べるとか探せ言っておるのか？ それで

「おじさんがお小遣いあげるからイイコトしよう。グエツヘツへ〜」

「そんなにお小遣いもらえるなら……少しだけですよ、オジサマ」

とか言っちゃったり——なんて羨まし……げふんごふん、けしからん話だ。

さてはこの二人ロリコンか？ あるいは……そういえば、制服が可愛いと言っていたのは後から来た男の方だけであつて最初から座つていた茶髪の男性はそれに反応した様子は無かつた。つまり想像したくも無いが——目の前の男子中学生こそが獲物ターゲットという可能性も微レ存!?

我は驚愕のあまりまたあの二人をガン見してしまい、それに気付いた茶髪にまたまた睨まれてしまったのであつた。

だが——後から思えば、こんな些細な日常の一コマが、後に恐るべき事件へとつながっていくということを、この時の我はまだ知らなかつたのだ。

……という物語の導入部分を思いついたのでネタ帳に書き留めた。

しかしファミレスの日常風景では異世界バトル作品には使えぬし……ここは一つ

気分を変えて新作を書いてみるのも良いかもしれぬな。

主人公は現代日本に転生した我……ではなく足利義輝。ヒロインは……よし、黒髪サイドテールの中学生で、妹ポジションっぽいツンデレキャラにしてみようではないか。

うむ、これは名作の予感！ 今度こそ私のラノベ作家デビュー待ったナシ!!

* * * * *

その後「小説家になるぜ」に投稿したこの新作だが、

—— テンプレ&ワンパターン乙

—— ○○ちゃんだけ可愛い。主人公は無能

—— 恐るべき事件とか言ってた癖に後半話が尻すぼみ杉ww

—— 話の時系列が飛び飛び過ぎです。過去と現在がごっちゃになって結局今何が起きているのかが分かりにくいです

ヒロインはよくあるタイプとはいえそこそこ可愛いと思いましたが、設定とか戦闘シーンとかの説明過多で読みにくい文章が勿体なかつたです

コメント欄にはそんな文章が踊っている。

これは……褒められてばかりではおらぬが、前よりは高評価と言つて良いのではないだろうか？

……け、決して前が酷すぎたとか褒められてんのはヒロインだけだろうとかそういう事では無いッ

う、うむ。わが未来は明るいな！

我は次代の人気ラノベ作家の地位を掴むべく、新たなる闘いの場へと歩を踏み出すのであった。

……次のヒロインは、「あざと可愛いロリ巨乳の生徒会長」とかもつとウケるかもしれない……。

幕間 オムニバス④ いつか本物の恋に

「先生いらつしやい。今日も留美のことよろしくお願いしますね」

玄関を上がったもたらったところで私がそう声をかけると、目の前に立つ、この春大学生になったばかりの男の子は苦笑いのような表情を浮かべ、

「その、先生って言われるのは慣れないですね……」

そう返してくる彼。

「でも、今日は先生として来てくれてるんだし……良いじゃない、堂々と先生って呼ばれときなさいよ」

「そうだよ八幡センセ」

留美はあえてわざとらしくそう言うと、さり気ない風を装って彼——八幡くんの手を引いて自分の部屋へと誘導する。

「留美……お前普段はそんな呼び方しないくせに……」

「いいからこっちっ」

そうつつけんどんに言つてはいるけれど、留美が彼の手をとる瞬間ほんの少しひるんで……それから覚悟を決めたみたいに思い切つて手を握る——そんな姿を見て、その初々しさと微笑ましさに、我が娘のことながら思わず頬がゆるむ。

「お母さん？ 何にやにやしてんの？」

「ん？ にやにやなんてしてたかしら？」

あらあら、留美に睨まれちゃったわ。ふふふ、そんな頬を染めた恥ずかしそうな顔で睨まれてもちつとも怖く無いわよ。

まあ娘が八幡くんの事となるとムキになったり急にしおらしくなったりとおかしくなるのはいつもの事なので驚いたりはしない。

むしろ意外と言えば意外なのが、彼が娘に手を引かれても平気そうにしていること。

確か去年会ったときは留美が彼にベタベタしようとするのをあからさまに避けて……嫌がつてる感じじゃなくて、こう……留美の親である私の目の前では気まずいとかそんな感じだったと思う。

これは、八幡くんがうちの家族に身内意識を持つてくれたという事なのか、それとも私が親として八幡くんを信頼しているというのを彼が感じ取つてくれたのか……両方かな。

まあ単に大学生になった余裕、かもしれないけれど。

もっとも留美の方は、親の目の前で好きな人（はつきり聞いたわけじゃないけどバレバレ）と二人というシチュエーションはさすがに居心地が悪そうだ。あまりジロジロ見ても二人に悪いし、勉強にも集中できないだろうと思い私はリビングに退散することにした。

ただし、留美の部屋のドアは開けっ放しにしておくのが一応のルール。八幡くんのことを信頼してないわけじゃないし、そもそも八幡くんのアパートで二人で勉強させてる時点で今更ではあるんだけど……。そこは「親としてちゃんと留美のことを考えている」というのを自己満足的に示しているだけなのかもしれない。

* * * * *

娘と彼との出会いは二年近く前の、留美が小学六年生のときの林間学校に遡る。

最初に私が留美から聞かされたのは、ボランティアで林間学校に参加してくれた総武高生と仲良くなって、その中に「はちまん」という男の子もいた、という話。

彼を始めとするその高校生たちにはとてもお世話になった……。らしい。「らしい」と

いうのは、その頃の留美が詳しい話をしてくれなかったから。

ただ、その夏休みみだしから、それまで留美と仲が良く、家へも時々遊びにも来ていた仁美ちゃん達が全く訪ねて来なくなり、娘との話題にも上がらなくなった。

これは……と、いくら鈍い私でもさすがに「何かあったな」と感づいてはいた。

ただ、林間学校から帰った後の留美は……相変わらず仁美ちゃんたちと遊びに出かけたりすることは無いものの、留美自身妙にさっぱりした——何か吹っ切れたような様子で居たので、その後はそれほど心配することは無くなった。

結局……大まかに何があったのかを留美が話してくれたのは二学期に入ってからで、そのときになってようやく、「はちまんくん」達が留美にとってどれほど大きな助けになってくれたかを知ることが出来たのだった。いつかちゃんとお礼を言わなくちゃいけないわね——そんな風に思った事を覚えている。



私がいかに彼、「はちまん」君に会ってお礼を言えたのはその年の12月だった。娘がボランティアで参加したお年寄りと保育園児向けのクリスマスイベント。

驚いたことに、このイベントで留美は、なんと総武高校主宰の劇の主演をつとめる事になったというのだ。

留美がボランテアアに通い始めた最初の頃、

「ボランテアアって、具体的には何してるの？」

と訊いた時には、会場とか大きなクリスマスツリー用の飾りを作っているという話だったはず。

だからイベントの主体はあくまでも高校生たちで、小学生はあくまでもお手伝いなのだろうと思っていた。

途中留美がなんだか嬉しそうな顔ではちまん君に差し入れを作ったり、ちよつと機嫌が悪かったりという事があつたり……と、そんなある日留美が突然、「賢者の贈り物」という劇の主役をやることになったと言つたのだ。

イベントのメインになるような催しは、最初に大枠が決まってから一斉に動き始めるのが一般的だと思うのだけど……日程も半分以上過ぎたこの時期にそんな事が急に決まるなんて一体何があつたのかしら？ と不思議ではあつた。

それでも娘の表情は明るく、「大変だー」「疲れたー」と言いながらも、嫌がる様子は全く無く、学校から帰ればすぐ嬉々としてイベントの練習に出かけて行く。家でその話題になれば、開口一番出てくるのは「はちまん」の話ばかり。

と、ここまでくれば、娘を持つ母親なら誰だつてピンとくる。

——留美は「はちまん」くん恋をしてるのだ。

◇ ◇ ◇

そしてクリスマスイベント当日。

期待半分、不安半分で見に行った劇「賢者の贈り物」は——本当に素晴らしかった。留美たち出演者の演技も堂々としていたし、髪を切る場面の見せ方とか、劇終了後のサプライズから蠟燭の炎を使った演出への流れとか、高校生が企画し、小学生が演じているとは思えないくらい見事だったのだ。

私は、その素晴らしい劇の主役がわが娘であったことをとても誇らしく思いながら、この劇に関わった全ての子供たちに惜しみない拍手を送り続けた。

◇ ◇ ◇

舞台が捌はけて、劇の出演者や裏方さん達が一度控え室に下がった時、ホールの舞台寄

りの角……クリスマスツリーのたもと辺りに目当ての高校生たちが固まっているのを見つけて私は席を立った。

どうやら彼ら三人は何かの打ち合わせをしている様子。

直接の面識は無いけれど、留美には何度も写真を見せてもらっているし、彼ら——特に女の子二人は一度見たら見覚えようも無いくらいに綺麗な可愛らしい娘たちなので、私は人違いを心配する必要なく彼らに声をかけることが出来た。

「こんにちは」

声をかけると、三人は揃って私に目を向けた。

彼らの中で一瞬の目配せがあり、黒髪の少女「雪ノ下さん」が皆を代表するようにして応対してくれる。

「こんにちは。……あの、何かありましたでしょうか？」

少し首を傾げる彼女。写真で見知ってはいたが、実際に顔を合わせた彼女は写真より遥かに——同性の私でも背筋がゾクツとするほどの美少女だった。

内から輝くような白い肌には、はっとするほど整った容貌、意思の強そうな瞳に艶やかな黒髪。仕事柄モデルさん達と話す機会も多い私だけれど、この雪ノ下さんほど素直に「美しい」と感じる娘には会ったことが無い。

「いえ、そうではなくて……」

「……………」

「初めまして。私、鶴見留美の母です。皆さんには娘が大変お世話になっております。この機会にお礼を言わせて頂きたくて……」

私が頭を下げると、

「いえ、こちらこそ娘さんには大役を引き受けていただいて本当に感謝しています。鶴見さんたちのおかげでこのイベントもこうして大成功を納める事が出来ました」

そこで彼女は改めて居住まいを直し、自己紹介を始めた。

「ご挨拶が遅れて申し訳ありません。私は実行委員の一人を務めております雪ノ下と申します。こちらは……」

「存じ上げていますよ。娘からたくさん話を聞いてますから。……雪ノ下さん、由比ヶ浜さん、それにはちまんさん」

私は彼女たち三人の顔を順番に見るように言ったのだが、私が「はちまんさん」と言った途端、彼らは僅かにぎよつとした表情を見せた。

「あら……間違えちゃったかしら？」

私がそう言うと、

「あはは……間違ってる訳じゃ無いんですけど……」

由比ヶ浜さん（で合ってるはず）が苦笑いしながらはちまんくんの方をチラチラと見

る。

彼は戸惑ったような表情で

「あ、その……ひきがやはちまんです。比べるに企画の企、山と谷の谷で比企谷、はちまんは八幡宮の八幡と書きます」

そう丁寧に名乗って頭を下げてくれた。

「まあ……ごめんさい！ 留美が『はちまん』としか言わないものだから、てつきりあだ名のようなものだとばかり思っていて……本当にすいません。もう、お世話になっている方呼び捨てにするなんて……」

「いえ、それは別にいいです。元々まともに呼ばれることのほうが少ない名前なんで」

彼は諦観を含んだ言い方をして微笑う。なるほど、こういうところかな……。

留美が言っていたのだ。

『はちまんは——八幡は、目はなんか眠そうにどよんとしてるし、いつも捻くれた言い方ばかりするけど……でもね、本当はすごく優しくてあったかいの』

そう思つて見れば、確かに彼は常に何か不安げな——拗ねたような、あるいは受け取る人間によつては見透かされているように感じる目をしている。それを不快に感じる人もいるのだろうし、もしかしたらそのせいで彼自身苦労したりつらい思いをしたことがあつたかもしれない。

でも、私は知っている。外見の印象で人を判断することの愚かさを。優しくて情の深い人が、外見のせいでその内面まで否定された時どれほど傷ついているのかということ。

なぜなら私自身がかつて、本当は優しい誰かを傷つけた加害者だったから。

今でこそその相手とはすっかり和解して良好な関係を築くことが出来ているけれど、当時の彼を傷つけた事実は、今でも強い後悔として私の心の深いところに棘のように刺さったままだ。

だから、留美が外見に惑わされることなくこの「八幡くん」の優しさに気づくことが出来たというなら——それはとても素敵なことで、母親として誇らしいことなのだ。

私は彼にまっすぐ向き合い、

「娘のことを助けていた দিয়ে、ありがとうごさいました」

私がそう言うて頭を下げると、しかし彼は、「自分たちが作れたのはきつかけただけだ」「最後に問題を打ち破ったのは留美自身で、自分たちはなにも出来なかった」と、「だからお礼を言われるなんて申し訳ない」そう言うのだ。

雪ノ下さんと由比ヶ浜さんは何か言いたそうにはしていたものの、どうやらここで口を挟むつもりはなさそうだ。

ふふふ、聞いていたとおりの頑だなあ……。まあそれが留美が言っていた「はちまん

らしさ」なのかもしれないけれど。そう考えて、大人としてここは一步引いて、

「では、その事はひとまず置きますけど、留美は比企谷くんたちのことをとても信頼して……大事に思っているようです。娘の一方的な思い込みだとしたら、ご迷惑かもしれないが、出来ればこれからも留美と仲良くしてはいただけませんか？」

そうお願いしてみる。

比企谷くんは一瞬口を開きかけたが、なんと行って良いのかわからないといった表情。

そこで雪ノ下さんが話を引き継ぐようにすつと言葉を紡ぐ。

「もちろんです。鶴見さん——留美さんは一緒にイベントを成功させた仲間ですし、夏からのご縁もあります。今後も仲良くさせていただけるなら私達も嬉しいです」

言い終えた彼女が由比ヶ浜さんと比企谷くんに視線を送る。

「あ、あたしもです。留美ちゃんとはもう友達ですからっ」

由比ヶ浜さんが勢いよく応じ、

「……まあ、よろしくおねがいます……」

比企谷くんがボソツと答える。

それを見た女子二人が可笑しそうにクスクス微笑っているのが印象的だった。きつと彼女たちもまた八幡くんの良さを理解できる娘たちなのだろう。

それから由比ヶ浜さんが、「留美たちがエレベーターを降りたところの控室にいるはずだから顔を出してみたら」と勧めてくれたので行ってみることにした。

お暇する時にもう一度お礼を言おうと、比企谷くんは神妙な顔で

「留美には今回本当に助けてもらっただけです。だから……もう一つ。あと一つをなんとかできるように……頑張ってみます」

そう言ったのだ。

もう一つ……なんの事かは分からなかったけれど、きつと留美に関する事なのだろう。私は少し考えて、

「お願いします」

それだけ言ってもう一度頭を下げた。きつと彼なら信頼しても大丈夫、そんな気がするのだ。



「ほんと、かつこよかったわよ。留美」

「ふふ、ありがとうお母さん」

コミュニティーセンターの控室にやってきた私は、留美や相手役の綾瀬絢香ちゃんや中原陶子ちゃん、それにそれぞれのご家族とも話をする事が出来た。

まあ、お互いお疲れ様でしたとか、劇が本当に素晴らしかったですねとかそんな話ばかりだけれど。

本当はもつと色々と深い話もしてみたかったんだけど、この絢香ちゃんと陶子ちゃんは留美とは小学校が違うのよね。PTAで知り合ってる同じ小学校の親御さんと話をするのとはわけが違う。……初対面同士で話をする場合、大人には色々あるのだ。

「あの、髪を切ったところってどういうふうにやったの?」

劇を見ていてその変化にびっくりしたシーンの事を留美たちに聞いてみる。

「それはね、まずロングのウィッグはピン二本だけで留めてあるの。で、幕が降りた瞬間に絢香がダツシユでシヨートの方を持ってきてくれて、中原さんと絢香の二人がかりでこんなふう……」

彼女たちは身ぶり手振りを交えて教えてくれる。

ああ、ロングの髪と言われてふと雪ノ下さんの事を思い出した。

「あ、そういうえば、さつき八幡くんたちに挨拶してきたわよ」

私がさらりとそう言うのと、娘は目を見開いて、椅子から落つこちそうになりながら慌てて立ち上がって私に詰め寄る。

「なっ……。何してんのっ？ 変なこと言ってるじゃない？」

「大丈夫よお。ただ、留美がお世話になつてますっただけ」

えーと、嘘は言ってるない……。わよね？ 余計なことは言ったかもしれないけれど。でも親として変な事は言ってるない……。うん、大丈夫。

ということでは私はしれつと笑う。

「そう……。なら、いいけどさ」

いいと言いつつ納得してない様子の留美。まあ、母親なんてこんなもの。これも子を思う親心と思つて諦めなさいな。

* * * * *

昔のことを思い出してぼんやりしていたらしい。いつの間にか留美の部屋から聞こえてきていた話し声が静かになっていたので、ダイニングの椅子をめいっばいずらして、留美の部屋がギリギリ見えるところに座り直して、彼女の部屋をそうつと覗いてみる。

今勉強しているのは数学だろうか。留美が黙々と自力で問題を解き、八幡くんはルーブリーフらしいファイルを開いて持ちながら留美の手元を見ている。

留美は一問解き終わるごとにちらつと上目遣いで八幡くんを見上げる。彼がこくんとくなくと、留美はほつと息をついてまた次の問題へと向かう。

たまに八幡くんがストツプを掛け、二言三言なにか言うのと、留美がノートに消しゴムをかけてもう一度その問題を解き直す——そんな事の繰り返し。

なるほど、八幡くんは、留美が間違えたり答えに詰まったりしない限りは特に何も言わず、自力では引つ掛かるような問題の時だけ重点的に教えてくれているらしい。

これがいつもの二人のペースなのだろう、やり取りされている言葉数こそ少ないものの、二人の息は合っている。戸惑った様子もなく淡々と勉強は進んでいるようで、親としては一安心といったところ。

でも……こうして見ていると、二人が一緒にいる姿はとても自然だ。

恋人同士のような甘い緊張感はない。では兄妹のように見えるかと言えばやっぱり違う。

上手い表現が見つからないけれど……無理をしていない感じ、とでも言えばピッタリくるかしらね。

八幡さんと最初に顔を合わせてからもう一年以上が経つ。

最初——あのクリスマスのは、娘を助けてくれたお礼を言いながら、留美の「初恋の相手」の顔を拝んでおこうかな、くらいの心持ちだった。

実際に会った彼はとても良い子だったけれど、流石に留美の恋の相手としては大人過ぎるように思えたの。

それに、八幡さんの近くには彼を憎からず想っている魅力的なお嬢さんもいるようだったし……留美にとっては厳しいかな、「初恋は実らないもの」とも言うし——なんて、勝手に留美は失恋するんだろうと思ってしまうていた。

それが……彼は今でも留美のこんな近くに居てくれる。

今だけを切り取って見たなら、二人は仲の良い兄妹みたいにか見えなないのかもしれない

ない。でも……この一年、八幡くんとは何度も顔を合わせてるけれど、その間ゆっくりとだけれど彼の留美に向ける視線が、声が、時を追う毎に優しくなっていくのを見てきた私からすると、「これは脈があるんじゃないかしら」なんて希望的観測も含めてそう思えてしまうのだ。

もちろん憶測だし、留美にも八幡くんにもうかつに言えないけど……でも。

ふふふ、もしこのまま二人の気持ちちが本物の恋に育ってくれたら……その時は八幡くん、留美のことをもらってくれないかしら。それかお媚さんに来てくれるとか。

……私、結構本気よ。これまでの付き合いで、彼は誤解されやすいところもあるけど本当にいい子なのは十分分かってるし、経歴だつて総武高校からK大に進学とじつに将来有望そうだ。

こんなふうに学歴なんかを気にするのは俗っぽいとかいやらしいとか思われるかもしれないけれど、母親として娘の交際相手・結婚相手（気が早いかな）として見るなら、そりゃあそういう部分も気になるといいますよ。だって娘には幸せになつてもらいたいですし。

それにね、八幡くん——色々と心境の変化があつたせいなのか、イケメン度がちよつぴりアップしたのよ。元々顔立ちは良かったところに前より目つきが柔らかくなつたというかな……。この変化には、留美という存在も大きな要因の一つじゃないのかなあ

私は勝手に思ってるんだけどね。

ちなみに、留美と八幡くんのことはまだ夫には話していないの。別に良いわよね？

彼氏として紹介された訳でも無ければ、そもそも今のところは留美の片思い以上の段階には進んでいないようだし。

一応、留美に家庭教師を付けたという話だけはしてあるけど……父親にとって娘の恋愛話なんか聞きたくないでしょうし……うーん。

いざ話をしたとしたら……：……どうなんだろう、娘を持つ父親の多くの例に習って交際とか結婚に猛反対とかするんだろうか。娘には弱い彼のことだから案外留美に押し切られてしまいそうだけど。

でもね、そんなには心配してない。私には確信があるの。きっと夫と八幡くんは気が合うはずだって。

ふと、あの人と八幡くんが一緒にお酒を酌み交わす未来の姿なんてものを想像していたら——

「お母さん？」

と、非難めいた娘の声。

気がつくとも留美がちよっぴり眉を吊り上げ、腕を組んで私の目の前に立っていた。

「あら」

『あら』じゃないわよもー。またにやにやしてる!」

「だから別ににやにやなんか——」

していたかもしれない……。八幡くんにも見られちゃったかしらね? 何を想像して笑ってたか話したら思いっきり引かれそうだけど。

「お母さんっ!」

「あのね、お茶にしましよって声かけようと思っただけど……。集中してるみたいだったから声かけにくくて。待っていたらぼうつとしちやっただけよ」

「本当?」

「ほんとほんと。ね、折角だから休憩しましょう。あやせ屋さんの変なケーキ買ってあるのよ」

「変なっ……」

まだぷりぷりしている娘に呆れられながら、私はキッチンの奥へと向かい、生ショートケーキそっくりの和菓子を冷やしてある冷蔵庫のドアを開けたのです。

ふふふ。本当、八幡くんに恋するようになってからのわが娘は、もうずっと見ても飽きないわねえ。

鶴見留美が守りたいもの① 彼女がドレスに着替えたら

本誌記者（以下「記」）：今月号では、他にない不思議な魅力があると話題のデザイナー、個人ブランド「Fairry Wing」を展開している、塔之原有来（とうのはら あこ）先生にお話を伺います。よろしくお願いします。

塔之原さん（以下「塔」）：はい、よろしくお願いします。

記：塔之原先生は、元々はあの、スポーツウエアや下着などで有名な「ワコレヌ」のデザイナーさんだったとか。

塔：はい。でも私、実は今もまだ「ワコレヌ」のデザイナーでもあるんですよ。

記：え、そうなんですか？

塔：はい。個人でブランドを立ち上げたわけですから、さすがにそのまま社員という形ではないですが。現在は嘱託デザイナーという形で「ワコレヌ」の社内ブランドの一つ、「フェアリーズ」のデザインを一部任せて頂いています。

記：「フェアリーズ」というと……女性向けプレミアムインナー——こんな言い方をして良いのか分かりませんが、所謂「勝負下着」というイメージがありますか……。

塔：あはは、そうですね、合ってると思いますよ（笑）

塔：勝負下着と言うと、皆さん……男性の方は特に、「異性を誘惑するための下着」という意味で使いますよね。でも、女性が特別な下着を身につけるのにはもつと広くて大きな意味があると思うんですよ。

記：意味というと？

塔：なんて言えば良いんでしょう？ 自分を上げていくとでも言うか……。自分にとつての大切な日、例えば重要なプレゼン、大事な試験、もちろん好きな人とのデートとか、そういう特別な日に、特別な下着を身につけていると気持ちが上がる——勇気が湧いてくるというような……。

記：わかりますわかります！ でもそういうのって女性ならではの感覚ですよ、多分。

塔：確かに男性にこの気持ちを説明するのは難しいですね。男性は「このパンツ履くとアがる」とか言わないでしょうし。

記：あはは。思っても言わないだけかもしれないかもしれませんよ？

………。

………。

記：では、それまでそういった方面のデザインをされていた先生が「Fairy W

ing」を立ち上げたのは何故ですか。

塔：私は細かいフリルやレース、ドレープを使ったデザインが好きなんです。もちろん高級インナーにはそういう要素がぎゅうつと詰まってるわけで、私の天職だと思っていたんですけど……でも、それがどんなに素敵なデザインでも、外でみんなに見せびらかすわけにも行かないでしょう（笑）

記：そ、それは確かに大変なことになりますね（笑）

塔：私は、世の女性にもっとフリルとレースとドレープに溢れた服を着て街を歩いて貰いたいんです。そういう服には女の子の夢がいっぱい詰まっていますから、さっきも言ったように着ればきつと気持ちも上がると思うんですよ。

記：確かに先生の「Fairry wing」の服はフリルとレースとドレープのイメージがあります。ただ、今回の物は、いわゆる「ロリータドレス」のように豪華ではないですよ。

塔：「Fairry wing」のラインナップにも勿論そういう派手な、というかボリューミイなデザインの服もたくさんあって、主力商品であることに変わりはないんですが……。

記：ですが？

塔：やはりそういう「ドレス」は着られる場面が限定されてしまいます。「それを着て

街を歩く」のには抵抗を持たれる方も多いと思いますよ。

記：確かに普段着という訳にはいきませんね。

塔：そういう状況もあつて、最近多くの皆さんに支持されているのは、もつと気軽に着れるタイプのものですね。

記：今回取材させて頂いてるような？

塔：ええ。デザインの傾向としては……シルエットは所謂ゴシックロリータと、クラシカルロリータ・カントリロリータの要素をミックスして、それを全体的に軽くした感じでしょうか。ただし、生地のカラーやパターンについては、王道といえる物の他に、一見するとロリータ系のデザインには見えない配色の物もラインナップしています。

塔：それから今シリーズの特徴として、フリルやドレープの部分に形状記憶素材の生地を使うことで、洗濯ネットを使えば自宅の洗濯機で洗える物も多くあるので（注：一部スワロフスキー等を使っている物はその限りではない）好評をいただいているようです。

記：確かに、オシャレ着が自宅で洗濯できるというのは魅力的ですね。

塔：はい、今回はサイズ展開を小学生以下のお子さんにまで広げているので、そういう扱いやすさの部分も考えて企画しています。

……………。

.....。

記：ではここからは、今回の撮影でモデルをしていただいた女性四人を交えてお話を伺います。

記：それでは簡単に紹介させていただきますと、(上の写真)順番に右から、現役女子大生モデルのあーや(AーYA、SRPROMーション所属)さん。中学生でこの「Fairy wing」専属モデルをされているルミさん。最年少、モデルは初体験の小学二年生けいかちゃん。そして先月結婚したばかりの若妻、弊社レディースコミック編集者のさやかさんです。改めて皆さん宜しくお願ひします。

四人：宜しくお願ひします。

記：早速ですが、皆さんは年齢も経歴もバラバラなんですよ？ お会いになるのは今回が初めて？

あーやさん(以下「あ」)：元から仕事だったりプライベートだったりでの繋がりはある方もいるんですけど、四人揃ってというのは今日が初めてですねー。けいかちゃんはこういう撮影自体今回が初めてだと聞いてますし。

記：では最初に皆さんが今着ておられる新作シリーズについて伺います。小学生から大人の女性まで、あえて同じシルエット——同じ型ベイスデザイン紙からいくつも印象の違うデザイ

ンを展開するというコンセプトだそうですが。

さやかさん（以下「さ」）：最初にお話を伺った時は、「そんなに若い子たちと同じフリリの服を着て並んで撮影とか無理〜」って思いましたねー。でも、実際に着せていただいた服は、確かにレースとなるデザインは同じなんですけど、シルエツトとか色味のチョイスとか、それからレースの幅とかがそれぞれ違う工夫がされていて……。私が着てるアイボリーに細かい黒の花柄が入ったワンピースは裾も長めでシツクに見えますし、けいかちゃんのピンクのギンガムチェック生地ワンピースが同じデザインだとはばつと見分らないでしょう？ ああ、これなら安心つて。

あ：さやかさんまだ若いんだからピンクのお揃いも行けるんじゃないですか。

さ：いやいやさすがにそれはキツイつて（笑）

記：でも本当に、一見すると同じ型のデザインには見えませんよね。けいかちゃんのピンクで可愛らしい雰囲気ですし、ルミさんのはアズールブルーとオリーブグリーンを大胆に対比させて上下が分かれているようにも見える配色、遠目には学校の制服みたいにも見えます。

ルミさん（以下「ル」）：実際にはこんなフリルとかレースがいつぱいの制服は無いと思いますけどね。ものすごいお嬢様学校とかなら別ですけど（笑）

さ：そう？　うちの漫画に出てくる女子の制服つてそういうのばっかりよ。

ル：でも、制服にレース……可愛いですけど、お手入れとか大変そう……。

記：そしてあーやさんのは黒に白い大きなドットの……丈の短いドレス風。これだけ印象の違う服が同じデザインをベースにしているというのは不思議な感じがしますね。

あ：私達も基本の型紙が同じというのは説明されてなければ気が付かないですよ、多分。

さ：作る方も混乱しそうですよね。

塔：実際試作のときはスタッフ一同大変でした（笑）ただ生産ラインに乗れば、最近
は生地もデジタル裁断なので細かい柄合わせなんかも楽になりましたから。だからこ
そこんな企画が通せたのかもしれない。

ル：型が決まっている中で色々雰囲気の違いデザインになってるのに、どれもみんな
可愛いっていうのが先生の凄いとこだと思います。

記：けいかちゃんは……緊張してるのかな？ その洋服はどうですか？ 今回着た
中で一番好きなのはどれでしたか？

けいかちゃん（以下「け」）：今着てるピンクのがとっても可愛いです。でも、るーちや
んがさつき着てた黒いのも格好いいです。

記：るーちちゃん？

ル：あ、私のことです。けいかちゃんとは彼女が幼稚園の頃からのお友達で、その頃

のあだ名みたいなの。

記：なるほど、二人は仲良しさんなんだね。

け：うん！

………。

………。

記：今皆さんが着ておられるドレスの他にも、同じデザインベースの服は何種類もあるわけですが、やはりそれぞれ雰囲気違いますよね（次ページ写真） この狙いは何でしょう？

塔：デザイン一回するだけで沢山商品が出来るので楽ができてお得だから………というのは冗談として、こういう、フリル、レース、ドレープがたくさんついたデザインでも、アプローチの仕方で様々な場面で着ていただける服になりますよ、というのが分かりやすいかなと。

記：なるほど。

塔：今回のシリーズでは実験的なチャレンジという位置付けでこんなことをさせていただいています、1つの型から、カラー・サイズ共これだけ多数の展開をするという

のはもちろん例外中の例外です。……ただ、実際やってみたらとても楽しかったので、機会があればまたやってみたいですね。

記：今皆さんを見ていて思ったんですか、母娘とか姉妹とかで趣味が違っていても無理無くペアルックとか出来ますよね。こう……隠れたさりげないお洒落、みたいに。

さ：ちよつと記者さん、「母娘」って言ったときわたしとけいかちやんのこと見てませんでしたか？（じろりと記者を睨む）

記：（ギクツ）いや気のせいですよ。

さ：わたしまだ20代で……あれ、けいかちやんいくつだっけ？

け：7才！

さ：げ、二十はたちで結婚してたらこんなに大きい子がいてもおかしくないのか……。もつと早く結婚しとけば良かったかな。

あ：新婚が何言ってるんですか？ さやかさんは今の旦那さんに巡り会うのを待つてたんですよ。写真見せていただきましたけど格好いい方じゃないですか。

さ：そう？ まああいつ顔だけは良いからなー（満更でもない様子）

ル：惚気だ〜。

（その後さやかさんの旦那さんの写真を見せていただくと俳優の□□さんに似た渋いイケメンさんだった。羨ましい。）

.....。

.....。

記：それから先程撮影で着ておられたブルーのドレス。こちらは色も形も全員同じものでしたね。(下の写真)

塔：あれは各個人の体格に合わせたシルエツトの変更だけです。今みんなが着ている物に比べるとフォーマル寄りのデザインで、街で着るといよりはパーティーやお祝いの席などを想定したものです。

記：これは華やかですよ。でも、その中にも可愛らしさがあるというか……。

塔：そうですね。サイズによつてスカート部分の丈とレースの面積を調整して可愛らしさとボリュームのバランスを崩さないようにしています。揃いのドレスを着た四姉妹みたいなイメージで。

さ：先生、さすがにあたしとけいかちゃん「姉妹」というのはやめてください……。ル：でも、みななど揃いのドレス着たのはテンション上がりしました。写真を撮つていただいている時すごく楽しい気分になつたし。

あ：それ、私も思いました。この記事を読んだみなさんも是非、お友だちとか家族でお揃いを着てこの楽しさを感じてほしいです。

記：けいちゃんも撮影の時とっても楽しそうにしてみましたねー。
 け：うん、だってお姫さまになったみたいで嬉しかったの。

……………。

◇ ◇ ◇

先週発売されたばかりのカジュアル寄りのファッション誌。お母さんの働いてる出版社の、けれどお母さんは担当してない雑誌。

特集記事の写真の中の私は、けーちゃん達、その時一緒にモデルを務めた三人と並んで楽しそうに笑ってる。

これまでもユキ先生こと塔^{とうのはら}之^{あこ}原有来先生の所でのカタログモデルみたいな撮影は何度もあったけど、今回のように名の通った雑誌の取材というのは私にとって初めてで……将来、漠然とではあるけれど、取材する側の職業を目指している私には見ることをすこと一つ一つがとても新鮮で興味深く、忘れ難い貴重な体験になった。

ちなみに「有来」は「あこ」って読むのが正しいんだけど、子供の頃からみんなが「ゆき」って間違えて読むのを否定しないでいたら「ユキ」というあだ名が定着しちゃったんだって。私のお母さんも先生のこと「ユキちゃん」て呼ぶから、最初は私も「ユキ」が

本名だと思ってたしね。

先生に訳を尋ねたら、

「だっていちいち訂正するのも面倒くさいし……それにユキのほうがアコより可愛いじゃん」

だつてさ。

それにしても、記事を読んでいて……編集者さんつてやっぱり凄いなあと、実際に取材を受けた身として改めて思う。

ふふ、記者さんの質問に堂々と答えてるこの「ルミさん」つて……私が読んでみて、この娘誰？つて感じなんだよね。だってあの時の私は、こんなに流暢に話せてなかったもの。記者さんに何か話題を振られても、つい考え込んでしまつてすぐに答えられなかったりして……あーやさんやさやかさんに助け船を出してもらつたりしてようやく答えてたんだ。

けーちゃんなんか、記者さんに聞かれたこととは全然違う話を始めたりしてたし、何よりユキ先生からしてこんなに丁寧な話し方じゃ無かつた……。

ところが、この記事はそんな事まるで無かつたことのように綺麗に面白くまとめられている。嘘を書いている訳じゃ無いんだけど、インタビュの内容そのままが書かれているというのでも無くて、実際の取材風景を知っている身としては、記事の中の自分が面

映ゆいというか……変な感じ。

本に載っているのは僅か一月ちよつと前の私で間違いないのに、ずいぶん昔の事のように感じてしまうのはそんな理由もあるのかもしれない。

まあ……それ以外にも、この頃私は、なかなか大変な経験もしたので、だからそれ以前の出来事を遠く感じてしまうというのもあるのかもしれない。

大変——その一言で片付けて良いような話じゃないのかもしれない……けど、それ以外にどんな言葉も思い浮かばないなあ。そんな事を思いながら頁をめくる。

あ……この青いドレスを着て、ちよつぱり背伸びした雰囲気「ルミ」は目をキラキラさせて嬉しそうに笑ってるなあ。少しはにかんだような……我ながらなかなか可愛いと思える笑顔だ。

当然かもしれない。

何故なら——その視線の先には八幡がいたから。

* * * * *

「ねえ？　らがきー、るー子。あんた達、知り合いに可愛い小学生いない？　十歳とか

……五年生位の……出来れば染めてないロングヘアで、お持ち帰りしたくなるような女の子♪」

「……ユキ先生、誘拐は犯罪です。通報しますよ?」

ユキ先生がワークデスクの上にペタンと突っ伏すように上半身を投げ出し、顔だけ起こして言った言葉に、「らがきー」ことあーやさんはにこやかな表情のまま返す……んだけど通報しますという言葉に異様な迫力がある。はつきり言ってちよつと怖い。

「らがきー、あんた私のことなんだと思ってる訳……。そうじゃなくて例の取材の時のモデル役よ」

「あれ、まだ決まってるじゃなかったんですか?」

「あんたとるー子、それから集談館のさやつちに……。もう一人小さい子が欲しいのよ。プロのモデルばっかりに片寄らないようにさやつち頼んだけど、小学生の方も出来れば素人の子に頼みたいんだよね」

「事務所とかに入ってる小学生かあ」

「誰もいなければあんたの事務所の子役やってる子とかに頼むことになると思うけど……」

「子役……ですか? モデルじゃなくて?」

「モデルはあんたらで間に合ってるし、もういらなかなー」

「先生、言い方……」

ユキ先生の物言いにあーやさんがムツとした声を出したけど、本気で怒ってる訳でもない。大体先生の口の悪さは今に始まった事じゃないし、慣れればそんなものと思うようになってくる。

「ユキ先生のドレスが似合いそうな小学生……」

脳裏にパツと浮かんだのは青みがかつた黒髪、くりつとした目の女の子。

「ん？ るー子、心当たりあるん？」

「あー……でも、その子、まだ二年生なんです」

「二年生か……。でも待てよ……。……」

「るー子、その子身長どのくらい？」

数秒、視線を右上に向けてるような表情で考えていた先生が私に訊いてくる。

「はつきりは分からないですけど、春に会ったときはこんくらいでした」

そう言つて私は自分の胸の前に手をかざすようにして高さを示す。

「お、案外この方が身長バランス的にイケるかも。小学校の高学年だとるー子と変わらない背の子も多いし……。小さい子の方が今回のコンセプトに合ってる気がしてきました！」

ふん、ふん、と先生は一人で勝手に納得してしまった。

「ねえ、その子の写真ある？」

「はい。えーと、確か……みんなでお花見に行った時の写真が一番新しいのかな……」

私がスマホのアルバムのページを指で繰ると、私の横に回ったユキ先生とあーやさんが私を両側から挟むように覗き込んでくる。

「えーと……あ、これ、この子です」

私が目的の女の子——けーちゃんが満開の桜を背景に写ってる写真を見つけると、
「へえー、可愛いじゃない！ 目がくりくりとして……うんうん、いいわね」

「うん、なんだか目力ある娘ですねー。二年生ってことは……7才か8才？」

ユキ先生とあーやさんも彼女の可愛さに目を奪われている様子。

「他には」

「あ、ちよつと先生！」

ユキ先生が勝手に写真を次々とスワイプする。

「お、八幡くんじゃくん。やつぱりお花見一緒に行ったんだー」

彼女は一枚の写真で指を止め、にやあくつと笑う。

「う……良いじゃないですか」

実はユキ先生、私のお母さんと会ったときに一度だけ一緒になったことがあり、八幡とは面識があるんだ。確か八幡が部屋探しをした頃だったかな。

その時お母さんが何か余計な話を吹き込んだらしく、先生はたまに「八幡」の名前を出して私をからかってくるんだよね……。

「はちまん……？ 何ですか、それ」

「それがね……」

先生は私の背中越しにあーやさんにこそこそと何かを耳打ちする。

「はー、歳の差恋愛ですか。なんだか甘酸っぱくてドキドキしちゃいますねー」

「そうそう、からかうとカワイイのよね、これがまた！」

「大学一年……私の一つ下ですか。……あ、何ですかこれ！ 留美ちゃんじゃない娘と腕組んでるじゃないですか。ひき……がや君だっけ、まさか彼女いるのに留美ちゃんにちよっかい出してるんですかっ」

写真を見ていたあーやさんが急に非難の声を上げる。

「ああ、それは八幡の妹さんです。この二人すつごく仲が良いんですよ。まるで恋人みたいに」

それは八幡と小町さんが腕を組み、それぞれもう一方の手に三色団子を持ち、その団子をカメラに向かってつき出すようなポーズをしている写真。

八幡はきつと他の娘とは恥ずかしがってこんなことはしないだろう。けど、小町さん相手だと妙にノリが良くなるんだよねー。

「……イモウト？ また妹ですか……」

あれ？ なんだかあーやさんの様子が……。

「——どうして千葉の男は妹、妹つてそればかりなんですかねーつ。ホントぶち殺しますよ？ ……そうですね、いつそのこと全員抹殺してまともな人たちと入れ換えた方が……ふふふ」

急に目の光彩を無くしたあーやさんが平坦な声でブツブツと何か恐ろしい事を言い始めた。

怖い！ どうしちゃったのあーやさん!?

「……らがきー……?」

ユキ先生が、おっかなびっくりという感じで声をかけると、彼女はははつとしたように元の笑顔に戻り、

「な、なーんて、冗談ですよ?」

そう言ってあーやさんは長い黒髪を掻き上げて優しく笑う。良かった……急におかしくなっちゃったのかと思った。

……先生に言わせると、あーやさんと私とは見た目の雰囲気似ているらしい。「姉妹のような感じで絵になるのよね」だつてさ。言われてみれば、外見的には確かに似

てる部分があるような気もするけど……。

でも、笑っていると優しいけど、時々今みたいに急に迫力があるところとか、私より雪乃さんに似てる気がする。なんだか二人は声も良く似てるし……雪乃さんをスタイル抜群にしたらこうなる——みたいな感じかな、なんて雪乃さんに失礼な事を考えていると、

「でも、シスコンの変態には気を付けないとダメですよ?」

あーやさんが真顔に戻ってそう言う。

「あの、八幡はシスコンだけど別に変態じゃ……」

「気を付けないとダメですよ?」

「は、はい……」

と、とにかく話題を変えよう。

「そういうば前から聞きたいなーと思ってたんですけど、あーやさんって、どうして Fairy Wing のモデルやってくれるんですか?」

「ええ? 何か変かなあ」

「だって……あーやさんみたいな人気のあるモデルさんがこんな……」

そう、A-YAさん。私と同じ千葉出身で、中学生の頃に読者モデルを経て、その後大手プロモーション事務所に所属してバリバリ活躍してる現役女子大生モデル。○○○

コレクションとか名のあるショウモデルとしてステージに立った経験もある人気モデル——業界ではそれなりに有名人なのだ。

Fairy Wingは、ユキ先生も言ってるようにフリルとレースとドレープを看板に掲げたような、ファッションの主流からはやや外れたブランドだ。一部特定の嗜好を持つ層には強く支持されているブランドではあるけれど、メジャー志向のモデルさんが好んで受けるような仕事では無いだろう。

で、私の質問に対する答えだけど、あーやさんによれば、ユキ先生には彼女がプロモーション事務所所属する前の読モ時代からお世話になってるからなんだとか。「あとは……」と彼女は言葉をつけ加える。

「中学の時知り合った友達に普段からこういうのばっかり着てた娘がいるんですよ。この前ルミちゃんと二人で撮ってもらった時みたいな黒のドレスに、目もしっかりカラコン入れてたりしてて……それで慣れたせいかな?」

「着てた……って、え、アレを普段から、ですか?」

だってこの前私とあーやさんの二人で撮ったのって……今回みたいにライトなのじゃなくて、けっこう本格的な黒系のゴスロリドレスだったんだよ。二人とも紅いカラーコンタクト、黒の猫耳まで着けて……あえて無表情に——人外の姉妹みたいな雰囲気、というのが先生のリクエストだったつけ。

とにかく、少なくとも普通に町中にするには相当勇気がいる格好だったはず。あんなのを普段から……。世の中にはすごい人も居るんだなあ。



さて、けーちゃん、かあ。

あの後、結局私がけーちゃんにモデルの件をオファー……。というか、一応話を通してみるということになってしまった。

小学六年生の時のクリスマスイベントで知り合ってから何度か一緒に出掛けたりしてるけど（もちろん二人でじゃない。八幡や小町さん、沙希さん・大志さんを含む大人数での時ばかりだ）直接の連絡先は知らないんだよな。

うーん、八幡に頼んで沙希さんを通して……。それとも小町さんから大志さんのルートでお願いした方が良さかな……。

そんな事を考えながらの帰り道。先生の事務所から百メートルも離れていない最寄り駅の改札を通り、階段を登って千葉へと向かう電車に乗り込んだ。

「あ、やつほー留美ちゃん」

「泉ちゃん！ 教室の帰り？」

ちやうど乗り込んだ電車で、おそらく美術教室の帰りであろう泉ちゃんと一緒になった。

奇跡的な偶然……という程の事でもない。彼女の通っている教室のある新都心方面から乗り換え無しで来れる電車はこの時間30分に一本位しか無いし、私も彼女も特に急いでいない限り、比較的空いている上り方一番端の車両に乗ることが多いからだ。

去年本当に偶々泉ちゃんと一緒になって以来、私は帰るタイミングが近ければ、淡い期待を込めて電車を1、2本遅らせてわざとその時間の直通電車に乗ったりする時もあるんだ。もちろん急ぎの時はしないけど。

成功率はそれなり、かな。最初の時以降も数回「偶然」会えた事がある。本気で一緒に帰りたいなら待ち合わせでもすれば良いんだけど……そういうのじゃなく、「会えたらラッキー」位のちよつとしたゲームみたいな感覚だったろうか。

ただ、今日はけーちゃんへの連絡の事を考えながらだったから直通電車に乗ったのは本当に偶然。端の車両に乗るのはいつもの事だけど。それに……。

「あれ？ 泉ちゃんこの時間だったっけ」

泉ちゃんの帰る電車はもう少し早い時間だったはず。

「今はあの絵描くのの時間取られちゃうから、週一回だけにして、その分少し遅くまで見てもらってるの。金曜なら次の日休みだし」

「なるほどねー。順調なの？」

「もちろんバツチリ……と言いたところなんだけどね……なんだかよくわかんなくなってきたちやった」

「え、どうしたの」

「何て言うか……寝る前に絵を見て、『うん、なかなか良いじゃん！わたし天才？』なんて思ったはずが、朝同じ絵を見て、『うわー、ここのタッチ下手すぎ。わたし才能無いなー』ってなったり……」

「ふふ、なんだか芸術家っぽい悩みだねえ」

「笑い事じゃ無いのよー」

泉ちゃんは小柄な身体を揺らしてぷうつとむくれる。ちよつぱり情緒不安定かな……。うん、やつぱりゲージユツカっぽい。

そんな話をしているうちに電車は数駅先に進み、八幡のアップートの最寄り駅に停車した。

短い停車時間。今日は特に何がある訳じゃ無い……けど、私はなんだか落ち着かない気持ちになって、ついドアの外、ホームを歩き交う人達に向けて視線を泳がせてしまう。

その様子を見ていた泉ちゃんがニマニマと嬉しそうに笑ってるのに気づいた。

「何よ？ 泉ちゃん」

「えへへ、別に。恋って凄いなあとか思ってるだけだよー」

もう……泉ちゃんって意外と恋バナとかに食い付きが良いんだよね。……絢香の悪影響に違いないと私は思ってるんだけど……。

まあ、この情緒不安定になってる親友が笑ってくれるなら、ここは特別に我慢しといてあげよう。

電車は程なく私たちの家の最寄り駅に到着した。

駅舎を出て広い通りを少し南に歩いた横断歩道のところで泉ちゃんとはお別れだ。私の家はこのまま通りを進んだ所にあるマンションだけど、泉ちゃんの家はここからやや狭い路地を入れて少し奥まった所に建つやや大きめの洋館だ。

この時間女の子一人で歩くのにはちよつと寂しい道だなという気もするけど、この季節、時間の割にはかなり明るいからかそこまで不安も感じない。彼女も慣れた感じで、

「じゃ、またねー」

と手を振って路地へと入って行った。

振り返ってふと見上げると、ビルとビルの間……まだ明るい西の空に、一際明るい星

が強く輝いているのが見えた。あの空の向こう……というほど遠くもないか。あの空のこつち側、くらい？ とにかくあつちの方向にはユキ先生たちがいて、八幡がいて……。別々の場所においても同じ空を見ることはできる。同じ星を見て「綺麗だね」って言うこともできるんだ。

……決めた。けーちゃんモデルのこと、やっぱり八幡に相談しよう。これだって立派な「電話をかける理由」だもの。

そんなふうには、私はいちいち彼に電話をかけるための理由を探している事が多い。

理由なんか無くても電話すれば良いでしょって自分でも思うけど、八幡に関わる事で理由を付けて何かをしてる自分が嫌いじゃないんだよね。

家に帰った私は、「こほん」と軽く咳払いをしてから、ショートカットに登録済みの八幡の名前に触れて電話をかける。コール音三回半で通話が繋がった。

「——もしもし、八幡あのね……」

* * * * *

後日、ユキ先生の事務所兼アトリエには、私と八幡、それに沙希さんとけーちゃん姉

妹が揃って訪れていた。

八幡から沙希さんに話を通してもらったところ、けーちゃん本人もさることながら、沙希さんの方がかなり乗り気だったとか。

あとはユキ先生とけーちゃんのお母さんとで電話で直接話をしてもらい話は決まったとのことだ。

で、今日は打ち合わせとけーちゃんの採寸のため、八幡の実家の方の駅（沙希さん達の家も最寄り駅は同じ）で待ち合わせをして四人でここにやって来たというわけ。

八幡まで来ているのはけーちゃんのたつての希望によるものだ。

要するに、けーちゃんが

「はーちゃんも一緒ならやる！」

と言ったのに私が便乗して、

「八幡、お願い。せっかくだから一度くらい見に来て」

と頼み込み、八幡が仕方無く折れてくれたという話。

「……そして、これが同意書と契約書ね。それぞれ二枚あるから、お父さんかお母さんに

署名捺印してもらって、一枚ずつこの封筒に入れて郵送して下さい。残りはそちらの控えになりますから大切に保管しておいてくださいね」

「はい」

「あと、こちらに振込先を書いてください。今分からなければ当日でも良いですよ」

「あ、今で大丈夫です」

事務員さんから説明を受けていた沙希さんが、スマホの画面を開いてちらちら見ながら色々必要な書類を書かされている。

私も前に書いたけど、小中学生が「仕事」をするのには保護者の同意書とか、時間によつては成年者の監督（付き添い）が必要になるとか面倒なことも多いんだよね。

一方、面倒なことはお姉さんに任せ、その可愛らしさですつかり Fairy Win g スタッフのアイドルと化していた本日の主役はといえば……。

「はーちゃん、るーちゃん、これカッコいい？ 美人さん？」

ついさつき採寸を終えて、ちょうど合うサイズの物があつた鮮やかなブルーのドレスを着せてもらったけーちゃん。布の衝立で囲まれたフィッティングエリアから飛び出してきた彼女は、八幡に向かって両手を拡げてポーズをとり、いかにも誉めて欲しそう

に訊いてくる。

「おう、美人さんだ」

そう言つて八幡が彼女の頭をぼんぼん、と撫でた。

けーちゃん八幡に誉められてとつても嬉しそうにしている。

膝丈のスカートから覗く足先は普通の白いスクールソックスなのがミスマッチで可愛らしい。もちろん撮影当日はちゃんとドレスと同系色のレースをあしらつたタイツになるだろうけど。

けーちゃんが八幡に撫でてもらった所を自分の手で触つて「えへへ」と笑つているのを見てすつごく羨ましかつたけど、ここは年上のプライドでぐつと我慢する。妹の様子を横目で見ていた沙希さんまでなんだか羨ましそうな顔をしていたように見えたのは——気のせい……かな。

けーちゃんが踊るように八幡の周りをくるくる回つていると、必要な話を終えたらしい沙希さんがやつて来た。

彼女はスマホを取り出すと、蕩けるような顔でけーちゃんのこと大好きだよね。撮影している。

ふふ、沙希さんつてほんとけーちゃんのこと大好きだよねー。

彼女は春から総武高からすぐの国立大に通つているので、通学路とかでもたまに

は見掛けることがある。でも大学生してる彼女は凛とした雰囲気、もちろん今みたいなデレデレした顔はしていない。たまに髪を下ろしてるのも大人っぽくて似合ってると思うんだけど、今日は見慣れたポニーテール姿だ。

「けーちゃん、今日は来てくれてありがとね。……でも、ドレス本当に似合ってるよ。やっぱり女の子だし、こういうの興味有るの？」

私はけーちゃんにそう訊いてみた。

けーちゃんを一目で気に入ったユキ先生には、あわよくば彼女をスカウトしろなんて言われてもいるし……まあ半分は冗談だろうけど。彼女は体格の割に大人っぽいスツとした顔立ちで、目の表情がはつきりしてるからきつと本格的なゴスロリ服とかも似合うと思うんだよね……。

でも、ドレスアップしてもらったけーちゃんはこの満面の笑顔。この様子なら案外乗り気になってくれるかもしれない。

ふふ、彼女も女の子としてそろそろ可愛い物や綺麗な洋服に本格的な興味が出てくるお年頃だもんね。

少し上気してうっとり夢見るような表情を見せたけーちゃんは、

「うなぎを食べるの」

と、最高の笑顔で言った。

……え？

「うなぎ!？」

「うん」

うなぎ……ウナギ……鰻……。

「けーちゃんごめん。よくわかんない」

「あのね、さつえいでしゃしんとつたらおこづかいもらえるよつて。それでうなぎ食べるの」

「それは……」

もちろんこれは仕事で、モデル料をもらえるとということを前に八幡が説明していた。つまりそれでうなぎを食べたい、と……。

「さーちゃんがね、うちはびんぼーなんだからそんなに何回もうなぎたべれないよつて。だからおこづかいもらつてみんなでうなぎたべるの」

「つちよつ、けーちゃんつ！」

「むぐぐ」

いつもクールな印象のある沙希さんが珍しく顔を赤くして恥ずかしそうにしながら妹の口を塞ぐ。

何とも言えない雰囲気で見合わせる八幡と私。

「川崎……」

「その……ごめん」

沙希さんは消え入りそうな声を出してうつむく。

「いや、謝る事じゃねえし。確かに鰻は安くはないし……。なあけーちゃん、」

「むぐっ？」

口を塞がれたままで可愛らしく小首を傾げるけーちゃん。

「鰻、旨いもんな」

「ぶは……うん！ みんなで食べるとおいしいの」

けーちゃんは、口を塞いでいた沙希さんの手をぐいっと剥がしてそう言うにぱっと笑った。

鶴見留美が守りたいもの② 彼女がドレスに着替えたら

続

「おし、全問正解だな。……少し休憩にするか」

「うん、私お茶淹れるね」

恒例、家庭教師の日。今日の会場は八幡のアパートのほう。

私は開いていたノートと問題集をそのまま二つ重ね、真ん中にシャーペンを挟んでまとめて閉じた。それを床に置いておいたスクールバッグの上にぼすんと載せてテーブルの上を空け、そのまま立ち上がって勝手知ったるキッチンへと向かう。

最初の頃八幡は、「お客さんにやらせるのもな……」と言って自分で飲み物を出してくれることも多かったんだけど、いつも私が「私がやりたくてやってるの」と言ってお茶当番？をやる事が多くなつたんだ。

そのうちになんとかなくお茶やコーヒーの時は私が淹れ、その間に、もしなにかつまむ物が有ればそれを八幡が用意する、という風に定着してしまっている。「もし」とは言っただけど、こつちが会場の時、彼は必ず何か甘いものを用意してくれてるみたい)

こぼこぼという音と共に日本茶特有の爽やかな香りが拡がる。八幡のパンさん柄の湯呑みと私用にこの部屋に用意してある淡い藤色の湯呑みとを急須で何度か往復させ、金緑色の玉露を最後の一滴まで注いでいく。

「お茶はね、最後の最後の一滴が一番美味しいのよ」

と教えてくれたのはお祖母ちゃんだったつけ。

玉露はちよっぴりお値段お高めだけど香りが良いし、それに他のお茶より使うお湯の適温が低めだから、猫舌の八幡とは相性が良いんだよね。

「ふふ、いい香り……」

この……八幡という一人暮らしの男の人の部屋で、私が買い置きしてるお茶を私が彼に淹れてあげる、というシチュエーションがすごく嬉しいんだ。こうね、彼氏彼女みたいな感じというか、その……お、奥さんの気分……みたいなその……ほう。

なんて、急須の注ぎ口からぼたん、ぼたん落ちていくお茶の滴を眺めながら、かなり脳内お花畑な事を考えてた私に、八幡がポツリと言う。

「なあ、やっぱり俺行かなくても良いか？」

「ええー、けーちゃんには八幡も行くからって約束したのに……」

彼が言っているのは例の雑誌の撮影の付き添い。

「いや、この前は顔つなぎみたいなものだから俺も行ったが、今度も川崎がついていく

し、俺が居てもしょうがないだろ？　けーちゃんもすっかり塔ノ原さんと馴染んでたし」

八幡が洩るのも解らなくはないんだ。だってあそこは女の人ばかりの現場で、八幡からしたらきつと相当居心地が悪いんだろう……。

実際、打ち合わせのときは、けーちゃんや沙希さんの相手をするという手前ついてきてくれはしたけど、終始なんだか落ち着かない風だった。

あの雰囲気以上に騒々しいであろう撮影当日に、また来てもらうのには申し訳なさも感じないでは無いけれど、でも。

「それは……。じゃあ、けーちゃんが、じゃなくて……。私がどうしても八幡に来てほしいってお願いしたら……？」

私は少し上目遣いになって、甘えたような声を出して八幡に不満を言う。

こういう態度をわざとやるといのはどちらかというと苦手なんだけどな。だから正直こんなことして八幡に鬱陶しがられたりするんじゃないかと思って内心はドキドキだ。

それでもあえてこんな事をする理由は……。

* * * * *

「……だからその、もしかしたら、だけど……八幡、私の事少しは女の子として——恋愛対象としても見てくれてるのかなあ……」

この前、風邪を引いた八幡のお見舞いに行つた時、帰り際に彼は、「私が帰ることを寂しがってくれてる」そんな風に感じて思つた事。

聞く相手によつては自意識過剰とも思われかねない私の言葉に対する親友の反応は、「は？」

覚めた目で私を睨み、一言で切り捨てるという、私が想定していたより遥かに辛辣なものだった。

う……そんなに夢見すぎな発言だったかなあ。でもでも、あの時の八幡は確かに……。

「……留美……」

絢香は何故か「ジト目」の見本みたいな目で私を睨む。

「は、はい？」

「ようやく!? 今さら!? ……比企谷さんはずっと前から……特にここ最近は明らか

に留美の事意識してんの見え見えでしょーが」

「えー！」

どうやら絢香の呆れたポイントは私が思っていたそれとは違うようだ。

「そりゃ、あの態度だけであんたに惚れてるとか……そこまで確信出来るとか言うつもりは無いけどさあ、明らかに留美の事他の女子とは違う扱いしてくれてるってこと位分かるでしょー！」

「でも、だってそれは雪乃さんや結衣さんにだって、いろはさ……」

「それでも……それでも留美が一番……に見えるよ。あたしには……」

呆れながら言う絢香の声は、どこか切なげでさえあった。私ってそんなにがっかりされるくらいこういう事に疎いんだろうか。

「あたしは留美を鼻屑目に見てるから、そう感じるってこともあるかもだけど……少ないとも留美が比企谷さんにとつて結衣さんや雪乃さん、いろはさんより下に見られてるってことは無いと思う」

そう断言するように言った絢香の言葉を受けるように、それまで黙って話を聞いていた泉ちゃんも続ける。

「わたしはさ、絢ちゃんほど雪ノ下さんとか由比ヶ浜さんの事知らないから簡単には言

えないよ。けど、留美ちゃんが比企谷さんにとって特別なんだってゆーのは間違いないと思うよー」

「そう……かなあ……」

今までならすぐに否定してしまうくらい自信が無かったこと。

でも、八幡が私を特別に思ってくれていることを今さら疑ったりはしない。要はそれがどんな意味での特別かって事で……。

「そうー。まさにそう、それよ。あんたがいつも言ってる特別——留美はよーするに比企谷さんの恋愛的な「特別」なのは『雪乃さん・結衣さん・いろはさん』だと思ってるって事でおーけー?」

「うん……」

「で、あなたは今現在自分がその恋愛的な意味でもあの三人よりリードしてる、とまで言わなくてもさ……えーと、少なくとも同列には並んでるって位の自覚さえも無い、と?」

「自覚って言ったって……」

そんなものあつたらこんな風に悩んだりしないよ……。

「はあ……るーちゃんは相変わらずでちゅねー」

絢香が私を馬鹿にしたように上から目線で言うのに少しムツとして

「絢香だって、いつも端から見てるだけで大した恋愛経験も無いくせに」

わざと嫌味に聞こえるような言い方でそう返すと、

「oh……ふむふむ確かにそう言われちゃうとなー……。あたしに言わせて貰えば、横から見てるからこそよく分かるってこともあるんだけどねー。……あーでも、恋愛経験、ねえ……」

絢香は、きつとすぐに何か言い返して来るだろうと思つて構えていた私に肩透かしを喰らわせるかのように、意外にも神妙な顔をして、しばしおでこに指を当ててぶつぶつ言いながら考え込む様子を見せていた。

そして……。

「あ、なら……」

彼女はパチツと目を開けてそう明るい声を発すると、イタズラを思い付いた子供のようその目を輝かせた。



翌日の放課後、美術部室。

「……と、いうわけで本日のゲスト。恋愛の大先輩、中原陶子先生をお呼びしております

す」

「ちよつと絢、話が見えないんだケド? というわけってどういうわけよ?」

絢香に連れてこられて、長机を挟んで私と泉ちゃんに向き合うように座らされていた陶子ちゃん。

どうやら理由も聞かされないままだったらしい彼女はさすがに目を白黒させている。

「えー、それでは、彼氏との交際もはや4年目、今もらぶらぶな陶子先生にお話を伺ってみましょう。相変わらず交際は順調なようですが、その秘訣は何でしょうか?」

絢香は呆れ気味の陶子ちゃんに構わず、テレビの中の芸能レポーターがするみたいに、彼女に向かってマイクを差し出すような仕草をする。

「あのね絢……はあ、まあいいか」

何かを諦めたように、一つため息をついた彼女は、意外にも絢香のノリに付き合つて、「インタビュ―」に応じてくれる。

「秘訣って……。わかんないわよそんなの。一緒にいるのが普通、だし?」

「たまにケンカもするようですが、すぐに仲直りしちゃいますよね」

「だって、好き……だし、ずっと気まずいのはヤダなつて——じゃない! 何言わせてんのよー!」

いつもはクールな印象のある陶子ちゃんが耳まで真っ赤にして絢香のことをベシベシと叩く。

「ちよ、痛、マジ痛いってば。自分で言ったくせに〜」

絢香は恋愛がらみの話になると変に暴走するというか、テンションがおかしくなることがあるんだよね……それが自分の恋愛じゃないってのが彼女らしいとこだけだ。

「陶子ちゃん、なんかごめん……」

「あーううん、るーは何も悪くないって。悪いのはみんなコイツ」

「陶子ひどツ。幼稚園の頃からの親友を裏切るのねツ」

絢香が芝居がかった声で泣き崩れるような演技をするが、陶子ちゃんは慣れた様子で完全スルー。

彼女は、話の流れや私の態度から何か気付いたみたいで、今まで一言も話題に上がっていない人物の名を当たり前のように口にしている。

「るー、もしかして比企谷さんがどうかしたの？」

おお、こういうトコはさすがに「恋愛の先輩」だなあ。言ったら怒られそうだから口には出さないけど。

「あのね、実は……」

「……………」

「……」



「なるほどねー。……でもさ、アドバイスとか言ったって、私は比企谷さんのことなんて
絢から聞き瞞ったくらいのことしか知らないし……」

「だからー、陶子には一般論っていうか、こうね、相手の気持ちを確かめるテクニクみたいなのを教えて欲しいわけよ。あいつとも付き合い長いんだし、なんかあるでしょ？ そーゆーの」

絢香はさっきの事なんかにめげた様子もなく陶子ちゃんに無茶振りする。

「ちよつと絢香！ テクニクだなんてそんな言い方……」

真剣に恋してる人にもその言い方は流石に失礼過ぎると思つて口を挟む。

「いいよ、るー。絢は前からこういうヤツだし」

陶子ちゃんは「もうとつくに諦めてるよ」みたいな顔で話を続けた。

「うーん……テクニクって訳じゃ無いけどさ、『我が儘わがままを言つてみる』のは……あるか

な」

「我が儘？」

「うん、一緒に居ても、たまに不安になるときがあつてさ。そういう時、何でもいいから我が儘——あいつが困りそうなこと言ってみるの」

「え、でも……そんな事して嫌われちゃったりしないの？」

「あ、無茶なのとか強引なのとかは駄目だよ？ 例えば……男の子が行きにくいスイーツ食べ放題のお店にお出かけしたい、とか、頼めばもしかしたら聞いてくれそうな事を……そのさ、か、可愛くお願いする感じで」

「ほほう！ 可愛く、とは具体的に？」

絢香がぐぐつと前に乗り出す。

「それは……『日曜日一緒に行くよ。……だめ……？』みたいな感じかなあ」

上目遣いに、甘えを含む声……。

「中原さん……可愛い……」

泉ちゃんが目をキラキラさせて言う。

「かわ……恥ずかしいなあもう」

でも、今の陶子ちゃんは確かに可愛いかった。

「ナルホド、これが必殺乙女の顔つてやつね。この顔で甘え倒して何でも言うことをき

かせてやろう、と……」

「絢うるさい！ そんなんじゃないくて……別にお願いした通りにしてくれなくても良いんだ。だめならだめですぐ、我が儘言つてゴメンつて言つて諦めるし」

「そうなの？」

「うん。その……りゅ……あいつが私の事を一生懸命考えてくれるのを見て、それだけで安心する……満足しちゃう、みたいなの？ はは、何言つてんだろね私……」

そう言つて照れたように笑う陶子ちゃんの表情は、女の子の私がドキツとするほど魅力的だった。

普段私たちと話をしている時は、どちらかと言えばサバサバした態度の、あまり女の子の子したところを感じさせない彼女が見せてくれた意外な一面。

まだ中学生だけと小学生の頃からずっと同じ男の子と付き合つて……。自称恋愛ウオッチャーの絢香をして、

「あいつら多分本気で結婚まで行くんじゃない？」

とまで言わしめる陶子ちゃんの姿を見て、私も内心期するものがあつた。

* * * * *

「……私は八幡に来て欲しい」

改めて上目遣いで、声もなるべく甘くして彼に我が儘を言う私。……これって陶子ちゃんが見せてくれたお手本のまんまだよね。

我ながら芸の無い話だとは思うけど、八幡のこと試してみたいなつもりで我が儘言うなんて初めての事だから、自分なりのやり方なんて無いし……。

八幡は困った顔で少し考え込んでる。

二人の間に静かに張りつめる変な緊張感……うう、もしこんな事して嫌われちゃったらやだなあ。今からでも謝って無かったことにしてもらおうか——と、今正に口を開こうかとした時。

「な……留美、そんな顔するなって」

不安な気持ちが顔に出てしまったのかもしれない。私の様子を見た八幡が少し慌てたように言う。

「ごめんね八幡。私——」

「分かったら。行くからそんな顔するな」

八幡はそう言つて右手でぼすんと私の頭を撫でてくれる。

彼の体温がじんわりと染み込んで来て、条件反射のように頬が緩む。

「でも……いいの？」

面映ゆい想いをごまかすように尋ねる。そんな私の様子を見て八幡はほっとしたように微笑った。

「まあアレだ。確かに一度は行くってけーちゃんたちにも言っちゃまった訳だしな、うん……」

八幡が自分の行動にいちいち言い訳するみたいな理由をつけるのは何時もの事。

うーん、どうやら、自信が無かった事がかえって効を奏したらしい。

彼の気持ちを探りたいがためにわざと我が儘言うなんて、実験するみたいにそんなひどい事しちゃって、八幡を困らせて……

申し訳ない気持ちがいっぱい湧いてくる……けど、けど!?

——なんだろうこの気持ち。

私の言葉に、態度に、一喜一憂するように向き合ってくれる八幡の顔を見ると……
こう、心の奥がくすぐったくって……ゾクゾクする。

——心が甘く痺れるような——これは？

そうか……嬉しいんだ、私。八幡が私のためだけに困ったり、ほっとして笑ったりしてくれる事が。他の誰でもない、私が八幡を振り回してる今の状況が。

ああ……これかあ、陶子ちゃんが言ってた「私の事を一生懸命考えてくれるだけで安心する、満足する」っていうのは。

好きな人を困らせて、それで嬉しいなんて……ひどい女の子だなあ、私って。でも……ふふ、悪女とか、小悪魔って呼ばれる女の子ってこんな気持ちになるのかな？ なんだか変な快感に目覚めちやいそう、なんてね。

* * * * *

そして撮影& a m p ;取材当日――。

私たちモデル担当の四人は、最初の撮影で着るお揃いの青のドレスに着替えを終え、メイクや髪の毛のセットをやってもらっているところ。

普通ならバタバタする時間帯んだけど、スタジオの方の照明の準備にまだもうしばらくかかりそうとのことで、私たちの間には少し弛緩した空気が流れている。

「おけしようってのはじめてだったのー」

けーちゃんメイクさんに撮影直前のメイク直しをしてもらいながら、鏡に映った自分の顔を見てとつても嬉しそうにニコニコしてる。

でも……元々目鼻立ちがはっきりした子だとは思ってたけど……この子凄い化粧映

えする……。

可愛い子を例えるのによく、「お人形さんみたい」という言い方をすることがあるけどそんなレベルじゃない……。

これはそう——絵本の中の妖精みたいだ。

側に控えて様子を見守っていた沙希さんが妹のあまりの可愛さに感動して目をうるうるさせている。こういう所ばかり見ていると、初対面の頃は沙希さんを怖いと思つたのが信じられないなあ。

けーちゃんは。どこか非現実感さえ感じる綺麗な可愛らしい顔で、

「今日がかつぷやきそば食べたべたい。この前とくばいで買ったやつ」

沙希さんにそう言つて満面の笑みを浮かべる。

「けーちゃん……」

沙希さんが今日もまた恥ずかしそうに俯く。川崎姉妹は通常営業中みたいね……。



「……比企谷くーん。キミ、ヒマそうだね?」

スタジオの一番隅っこ、数個並べて置かれているパイプ椅子に独りでぼつんと腰掛け
ていた八幡に、ユキ先生が何やら声をかけている。

さつきまでは彼の隣に沙希さんが座ってたんだけど、今説明したように、彼女は今
けーちゃんの所に付いている。

「ただの付き添いですから。邪魔にならないように大人しくしてるだけです」

「邪魔なんてとんでもない。けど、そうね……何もしてないのも居心地が悪そうだから
らいつちよ仕事して貰おっかなー」

ユキ先生が悪い笑みを浮かべる。どうやら彼女は八幡を弄りたくて仕方ないらしい。
「いや、仕事とかいいです」

迷惑そうな顔で、「出来れば一生仕事したくないまであります」とかぶつくさ言ってる
八幡を、

「まあまあせつかく来たんだしー。ちよつと荷物出して欲しいんだよねー。男の子で
しょ、お願いっ」

とか言いにくるめて隣に引っ張って行こうとする。

八幡が連れていかれてしまう。撮影の時までには戻って来られるのかな？

彼には今日の私を見ていて欲しかったのに……。

思わず立ち上がって声を挙げようとした瞬間、ユキ先生はくると私のほうを振り向

くと、にいつと笑つてばちんとウインク。

え？何？どういう事……？

それで氣勢を削がれた私は声をかけるタイミミングを失い、二人はそのまま隣バックヤードに入つて行つてしまった。

——今日の私を見て欲しい——

それが私が八幡に「我が儘言つてでも」来て欲しかつた最大の理由。

私がユキ先生のところでもモデル活動を始めてから一年余り。

もちろん今までも、八幡にその時々撮影された写真とか、カタログそのものを見てもらう事はあつたけど、実際に撮影の時の「私自身」を披露する機会は無かつた。

まあ、今までの撮影で私が着てきたのは、いわゆる豪奢な「ロリータドレス」が多い。メイクだつてそれに合わせたものだから、アイラインやチークもしつかり入つていて……正直「凄く綺麗にしてもらえてはいるけど、なんだか私じゃ無いみたい」というのが私が自分で感じていた印象だつた。

でも今回の取材では、もつと日常的に幅広く、ちよつとしたお洒落着として使えるドレスを何枚か着ることになっている。

つまり——本格的なメイクアップの資格を持つスタッツさんにナチュラルなメイク

をしてもらい、ユキ先生自信作の可愛いドレスを着た、そんな私を八幡に見てもらえる、ということだ。

プロのメイクさんの技術は本当に凄い。

あーやさんを始めとする、これまで撮影をご一緒したモデルさんたちが、元々凄く綺麗なのにさらに輝きが増す表情を引き出されるのを何度も見ているし、ついでに言えば鏡に映る私自身の姿にさえ視線を奪われたことも少なくない。

こういう事には大分慣れてきてるはずの私でさえ未だにドキッとするくらいなのだから、八幡だつてきつと……。

んん？どこかから八幡の声が聞こえてくるような……。

「クソ、騙された……。……一体いつの間に……」

「この前打ち合わせ来た時、るー子に練習させたでしょ」

「あん時か……。でもあの時いちいちメモとかしてましたっけ？……」

「甘いわね。標準プラスマイナスでチェックすれば数値八つくらいまとめて五秒で書けるわよー」

「だからって……」

「この期に及んで往生際が悪いわね、とつとと諦めて楽になりなさい？」

「塔之原さん、それ悪役のセリフ……」

「いいから、ほら！」

ユキ先生の掛け声のような声に押し出されるように八幡がスタジオに入って来た。

……………格好いい……………。

はっ、違う！いや違わないけど。

頭が混乱してるみたい。だって——

——八幡がスーツ着てる!!

それもすつごくお洒落なやつ。艶のある黒の生地には、銀糸で細かいストライプ状の刺繍が施されたジャケットに、白い飾り入りのシャツ。そして私たちのドレスと同じ青色のタイには艶消し金の糸でレリーフのように Fairly wing のロゴが意匠されている。

それが彼のやや細身の体躯にしっくりとまるであつらえたように馴染んでいて……。

「八幡！どうしたの、それ？」

思わず立ち上がり、彼に駆け寄った私が興奮ぎみに疑問を口にするのと、八幡はなんとも渋い顔をして、

「ああいや……塔之原さんが、『記者さんやカメラマンさんの手前、比企谷くんはアルバイトスタツフってことになってるから』ってな」

「で『うちのスタツフとしてそれなりのカツコしてもらわないとねー』そんな感じでの服押し付けられて……」

「それ……さすがに着替えてる途中で変だつて気付かない……?」

「言うなつて……。いや俺もおかしいとは思つたんだか、なんというか……塔之原さんの妙な迫力に押されてな、折角キミに合わせて作つたんだからとかなんとか……」

八幡は両手を肩の高さくらいに軽く上げて、自らの服装を見下ろすように眺めて嘆息する。

八幡に合わせて作つた……。そう言えばこの前ユキ先生のところでけーちゃんの手採寸をした時、

『るー子、男物の服の採寸の仕方つて知つてる? ちようどいいマネキンが居るんだから練習しときなさいよ。基本的に、襟周り・肩幅・身幅・袖丈・ウエスト・ヒップ・股上・股下がきちんと採れば、よっぽど変わった体型でもない限り体にあつた服が作れるし……それに既成品を選ぶときにもサイズが分かつてると便利よ』

なんて言われてその気になって、八幡で採寸の練習させてもらつたんだつて。それにしても……。

「ふふ……。でも八幡、それ似合ってるよ」

「そうかあ？」

「うん。あのね、すごく格好いい……。よ。本当に」

私が素直に言ってるのが——茶化して言ってる訳じゃ無いということが——伝わったのだろう。

「……その、あんがとな」

頭をがしかしと搔きながらぼしよぼしよと小さな声で応える八幡。

私が微笑うと彼も安心したような笑顔を見せてくれた。

そして、少し柔らかくなった八幡の視線が私の頭のとっぺんから爪先までゆつくりと移動して行き……

彼は僅かな間息遣いを止め——ふと何かを思い出したように口を開く。

「あ、何だその……留美も、綺麗だな。ドレスも良く似合ってる」

「えーあ……」

八幡の思いがけない言葉に、思わず彼を見上げる私。

ドクン、ドクン、という自分の鼓動がはつきり聞こえて、他の全ての音が遠ざかっていくような錯覚。

顔が熱い。火照って真っ赤になっているのが自分でも分かる……。

恥ずかしいのに……それでも彼から視線を逸らせない……。

私たち二人の間にピンと張りつめる空気。きりきりと心を締め付ける——けれど不快ではない、そんな甘い緊張感。

ずっと続いて欲しいような、逃げ出したいような……。

頭が回らないまま彼に向かってふらふらと左手を伸ばすと、八幡はその手を外から包み込むように、右手で柔らかく、私の人差し指と中指、甲の辺りを握ってくれる……。

「……なんか、似合わないセリフ言っちゃったな……」

先に緊張に耐えられなくなったのは彼のほう。ぎこちない笑顔を作ってまたそんな事を言う。

でも不思議、ガヤガヤと騒がしいスタジオの喧騒は、ラジオのボリュウムを絞ったみたいに遠くぼんやりとしてるのに、八幡の声だけがやけにはつきりと聞こえる……。

「ううん……」

私が首を左右に振っても、

「いや、な。この前小町から『お兄ちゃんももう大学生になるんだから、ドレスアップした女性を素直に誉める位の事は出来て貰わないと将来が不安になる』と言われたのを思い出して……」

「……お〜い比企谷くん」

遠慮がちなユキ先生の声に、二人とも我に帰る。いつの間にか私たちはこの部屋にいる全員の注目を集めていた。

慌てて握っていた手を離し一步後退あどずさる八幡。

うわあー……今の、みんな見てたのか……恥ずかしいなあ。

はっ？さつきから部屋が静かに感じられてたのって……もしかしてこのせいなの？

「いやこれは……」

「それは良いんだってば。むしろもつとやってよし……それより、折角いい雰囲気だったのに、つまらないネタバレみたいなのはどうかと思うよおー。男の子なら最後まででビシツと決めなきゃ」

言い訳？しようとする八幡に変なお説教をするユキ先生。

でもネタバレって……そうか、冷静に考えると、「八幡がドレスアップした女性を誉めるような機会」があつたって事だよね……相手はやっぱり……。

たつたこの程度の事を考えてしまうだけで心がもやもやする。……嫉妬深いのかなあ、私。

それから、悪目立ちしてしまった私たち二人は皆の視線から逃げるように部屋の端、さつきまで八幡が座ってた場所に引つ込んだ。

幸い非難するような視線は少なく、みんな、よく言われる「生暖かい目」とかそんな感じだったけど、あーやさんと沙希さんだけは冷めた目をしてたのがちよつぱり怖い……。

もうしばし撮影の準備が終わるのを待つ事となった私たち。

一息ついたところで、気になっていた事を我慢出来ずに尋ねてしまった。

「そういえば、さっきの……小町さんに言われたのって……」

「小町?」

「その、『ドレスアップしてたら褒めてあげなさい』みたいな事言われたって」

「ああ、前に言わなかったか? 卒業式の後にプロムってのがあって、そんな時にも似たような格好させられて……まあ、色々……な」

八幡は、僅か数ヶ月前の事をひどく懐かしそうに——目を細め、眩しいものを見るような表情で語る。

プロム——プロムナード。海外ドラマなんかで出てくる、皆が正装^{ドレスアップして}で参加する卒業ダンスパーティーの様なもの。

八幡達のプロムについて私は殆んど知らないんだ。彼は、

「俺にダンスとか……。とにかく大変だった」

としか言つてなかつたし。

八幡とは、今でこそ当たり前のように毎週会つて、話をする機会もたくさんある。でもそれは彼に家庭教師をお願いするようになってからのごく最近のことで、その頃はたまにしか会えなかつたしなあ。

話を戻せば……八幡が褒めた（褒めさせられた？）のは、やつぱり雪乃さんと結衣さんと……いろはさんはどうだったんだろう。ドレスを着たのは卒業生だけ？

三人とも華やかなドレスが似合いそうだし……。

あの三人と比べて今日の私は彼の目にどう映っているんだろう。大人っぽさでは敵わなくても、今の私はプロのメイクさんの力を借りてパワーアップしてる。

何より——八幡が「綺麗だ」と褒めてくれた。……小町さんによる教育の賜物かもしれないけど、それでもあれが嘘や社交辞令だけで言ってくれた言葉じゃ無い事くらい判る。

あれ？「服が似合ってる」とか「大人っぽい」とかはあつたけど、「綺麗だ」って言うてくれたのは初めて……だよね!?

綺麗……きれい、かあ。

今までだつて八幡は私のことを沢山褒めてくれてる。

クリスマスの演劇で上手に出来たこと。勉強頑張ったこと。鶏肉の揚げ焼きを、バレ

ンタインのチョコを、誕生日のケーキを美味しいって言ってくれたこと。

中学生になって大人っぽくなったこと。ちゃんと友達が出来たこと。普段と髪型変えてみた時、似合つてて可愛いって言ってくれたことだってある。

でも——綺麗——それは、なんだか今までの誉め言葉とは違う特別な響きで私の心を震わせてくる。

また私の鼓動が少し速くなる。

隣に座った八幡にチラチラと目を遣りながらそんな風に想いを巡らせていると、

「お待たせしましたー。機材のほうオーケーですので、テストからお願いしまーす！」
撮影スタッフさんの声がして、場の空気が一気に張りつめた。

「じゃ、メイク崩れる前に一人ずつのアップから行くよー」

「「はいっ」「はい」

「先生、最初は……?」

「じゃ、るー子から行こうか」

カメラマンさんの問いかけにユキ先生が答える。全員準備は出来てる様子だけど、彼女の指名は私。まあこれは仕方がない。一応はこの「専属モデル」だしね。

最初の一人には、撮影前にもう一度照明のチェック等の手間が入るから、「お客さん」(外部のモデルさん)にこれをお任せするのは申し訳ない、みたいな暗黙の了解があるの

だ。

私はカメラマンさんを始めとするスタッフさん達に、

「よろしくお願いします」

と頭を下げ、一度八幡のほうを振り向いてからゆっくりとステージに上がった。



私たち4人全員が青いドレスのソロと、それから全員での集合写真のようなショットを撮り終えたところで、

「さて、比企谷くん？ 勘の良いキミの事だから、その衣装、ただ着せられてる訳じゃ無
いってこと位……理解してるよね？」

八幡のほうを振り向いてそう言ったユキ先生がふふんと笑う。

まあ……それはそうだろう。スタッフとしての体裁だけのためにするような服装
じゃないもんね。

「嫌な予感はしてましたけど……でも俺はそういうのは——

「顔は掲載しないし、バイト代はもちろん払うわよ。……お金、要るって聞いているけど、

」

ユキ先生がまた悪い笑みを浮かべる。

「げ……」体どこからそういう情報が……」

あはは……犯人はうちのお母さん辺りかな……。若干引き気味の顔で、それでも幾ばくかの間逡巡した八幡は、

「主役はこの子たちとドレス。キミの扱いは撮影小物とか描き割りみたいなもんだから、気楽に、ね」

そんなユキ先生の言葉に止めを刺され、

「もう好きにしてくれ……」

そう言つて、もう降参ですとばかりに両手を上げた。



その後八幡は、ユキ先生の言つた通り「撮影小物」として大活躍させられた。

シャンパングラスを傾けて乾杯のポーズを取つたり、

エスコート役として私たちと腕を組んだり、ダンス（をしてるふり）をしたり、

それからけーちゃんや八幡にお姫様抱っこしてもらつてVサインなんてシーンも撮つてもらつたりしてて、……実はちよつと羨ましかつたり……。

それに八幡！ あーやさんやさやかさんとツーショット撮ってる時に鼻の下伸ばして嬉しそうにしてたのはポイント低いよっ。

……まあでも、ドレスアップした私を見てもらうだけでなく、格好いいスーツを着た八幡と一緒に写真を撮ってもらえたのは嬉しかったなあ。

それに……さっきの私と八幡のやり取りを見てたカメラマンさんが、こっそり、「後で二人の写真をプレゼントするね」

って耳打ちしてくれたの！

そして、散々使い倒された八幡がお役御免になり、ぐったりした彼が解放された後は、私たちそれぞれ違うドレスを何着か着替えての撮影。

これが今回の取材のメインになる。

私たち4人かそれぞれ3着ずつ、合計12着の全て違うドレスを着るんだけど、実はその全ての型紙たるベースデザインはたったひとつなのだ。

にも関わらず、それぞれのドレスが見せる表情は多彩で……。きつとこの記事は、ユキ先生の作品が、今まで以上に広く評価されるようになる大きなステップになるだろう。

メインの撮影が終わり、その後最後に着た衣装のままにインタビューを受けながらの

撮影へ。

インタビュアーさんからの質問に、私は何度も答えに詰まったりして、ご迷惑掛けちゃうんじゃないかと心配したんだけど、

「あ、テレビとかじゃ無いんで全然気にしなくて良いですよ、こっちで字数に合うようにまとめますから」

と、全く問題にしてなかったようなのでほっとした。

* * * * *

すべてが終わり、八幡と私二人並んでの帰り道……と言っても途中、ついさっきまでは電車で沙希さんとけーちゃんも一緒だったけど。

八幡は自分の最寄り駅を通り過ぎ、私を家まで送ってくれる。

そんなの悪いからって断ったんだけど、元々今日は実家に泊まる予定だったから遠慮するなと言われ、何時ものごとく八幡の好意に甘える事にしたのだ。

本音を言えば、八幡と少しでも長く一緒に居られることが、その時間を彼が作ってくれたことが、ただ素直に嬉しい。

だから私は、駅から僅か一キロにも満たない道のりを、一步一步を惜しむようにゆっ

くりと進む。

歩道を反対側から来た人とすれ違おうとした時、ふと二人の肘の辺りが触れ、一瞬、彼と目が合った。

私はさらにもう半歩身を寄せるようにして八幡の手を握る。

今までの——昨日までの私よりちよつとだけ大胆で積極的な行動。彼は、瞬間戸惑った様子を見せたものの、繋いだ手をそのままにさせてくれた。

歩くペースはさらに緩み、ほんのりとした緊張感。私は少しの間心地良い無言の時間を楽しむ。そして、

「今日は来てくれてありがとう。大変だったでしょ?」

「……全くだな。まさか俺まで……」

「……でもちやんと似合って……」

一言二言話し始めれば、もう何時もの私たち。

ユキ先生が強引過ぎるとか、けーちゃんやんが全然物怖じしなくて凄かったとか、撮られる側だと照明ってあんなに眩しいんだな、とか——次から次へと話が出てくる。

ふふ、まるで今日の反省会みたい。

そんな中、八幡が溜め息を洩らしながら言う。

「そういえば……なあ……俺、A—Y^あA^やさんになんか失礼なことしたっけか?」

「え、どうかしたの?」

「いや、彼女撮影の時、顔は完璧に笑ってるのにその笑顔のままで強烈な敵意——殺意?——さすがにそんな訳ないか……とにかくそんな感じのプレッシャーを受けた気がして……気のせい……だと思いたいんだが」

え? 気が付かなかった。だって八幡と並んで撮影されてる時のあーやさんは終始笑顔のまままで……ここだけの話、少し嫉妬してしまう位だったのに……。

「俺はどうも大事な何かを見落として失敗する癖があるらしくてな……。いい加減こういうところは変えていかなきゃとは思ってるんだが、なかなかなあ」

小首を傾げる八幡。

「全然わかんなかったけどなあ……。あ!もしかして……」

「ん? 心当たりあんのか?」

「多分……。うん、きつと八幡が千葉のお兄ちゃんだからじゃないかな?」

私が笑うと、八幡は、

「『千葉のお兄ちゃんだから』って……さっぱり解らん」

「良いんだよ、解らなくて。八幡は八幡なんだから、さ」

私はそう言いながら、彼と繋いだ手を、小さな子供がするように前後に大きくぶんぶんと振る。

「おわつ……と。ますますわかんねーよ。八幡って形容詞か何かなの……？」
納得いかない様子の八幡。

「昔、私に言ってくれたことあったでしょ、『無理して変わらなくて良い』って。それと同じだよ」

「同じ……ねえ」

「きつとね、『変えよう』なんて思わなくても——自然にゆっくり変わって行くんだと思う。私も……そうだったし。だから……」

「だから……？」

「変わっても変わらなくも、私はそのまんまの八幡が良いってこと——」

そう言って、彼の手を握る指先に力を込めると、

「やっぱり解らん……けど、留美がそう言ってくれんなら——まあ、それで良いか」

八幡は空を仰いで独り言のように言い、私の手をぎゅつと握り返してくれた。

そつぽを向いたままなのは……ふふ、もしかして照れてるのかなあ。

だったら……嬉しい。

私の中に棲む小悪魔心がまたちよつぴり顔を出す。

これ、あんまりやりすぎると、八幡がいろはさんに言ってるみたいに「あざとい」と言われちゃうのかな。とは言え、実はそういうあざといのも嫌いじゃなさそうなのが

八幡のめんどくさくて難しいところ。

もう午後七時を過ぎているのに、ふと見上げた空はまだかなり明るい。半円の月が空の高いところで薄く輝いているのが見えた。

「あ、お月様……」

「ん……」

八幡と並んで月を見上げる。あの半月はこれから満月に向かつて大きくなるのかな、それとも細くなって三日月みたいになるんだろうか、そんな事も知らない私。

ただ間違いないと言えるのは、このまま変わらないことは決して無く、日々少しずつ、けれど確かに変わり続けていくということだ。

八幡と私も――

ううん、今はこれ以上先のこと考えても仕方がない。変わっていくからこそ、今を大切にしなきゃね。

まあとにかく、

今日は本当にありがとね、八幡。おつかれさま。

鶴見留美が守りたいもの③ 楽園

カクテルライトの下で、フリルとドレープで飾られた蒼いスカートの裾が揺れる。
ワン・ツ・スリー

1、2、3と頭の中でカウントを数えながら拙いステップを踏む私の視線の先には、真剣な表情で、私よりさらにぎこちないダンスを踊る八幡。

それでも、光沢加工された彼のスーツは照明を映して鈍く虹色に輝き、その袖先から伸ばされた手は、一回り小さな私の手を優しく添えるように握り、ステップに合わせて上下にリズムを刻む……。

……と言っても、ここはダンスホールじゃなくて小さなスタジオ、カメラの前。本来のダンスより半分位ゆつくりなテンポで、しかもダンスのごく一部、取材の主役たるドレスが写真映えをしそうなどを何度も繰り返してるだけなんだけどね……。

撮影スタッフさん曰く、

「静止画スチルならテンポなんかわからないから大丈夫、ちゃんと素敵に撮れてますよ」

だつてさ。

それでも……たとえ格好だけだとしても、ドレスアップして二人で踊るといふ普段か

らは想像できないようなこの時間はまるで夢のようで――

……誰かが私の肘の辺りをつついてくる。何……？

——みさん。………鶴見さん？」

「えーあつ、はいっ」

数日前のことを思い出してぼうつとしちゃってたけど、今英語の授業中だった……。先生に指されたのを気が付かなかつたらしい。

慌てて立ち上がった私。

「23ページの問4」

たった今私を突ついてくれた、隣の席の藤野さんが小声で教えてくれた。

手元のワークブックに視線を落とすと、どうにかちゃんと該当のページを開いてはいる。

問4：次の文を英語にしなさい。

「彼女は来週京都を訪れるつもりです。」

未来を表す文の問題……。大丈夫、八幡に教えてもらったばかりのところだ。

使うのは「be going to」……三人称単数だから動詞は原型に戻して……うん。

『She is going to visit Kyoto next week.』です」

どうにか答えられた、と思う。確か「will」を使っても似たような意味になるって八幡は言ってたけど、まだ授業では習って無いし。

先生はちよつと困ったような顔でじつと私を見てる。あ……これはぼーつとして授業聞いてなかったのばれちやつてるなあ……。

彼女はひとつごく小さなため息をつくど、

「まあ……良いでしょう。正解です」

そう私に言い、それから、誰かに、というよりクラスの皆に向かつて声をかける。

「皆さん、最近特にだいぶ気温も上がってますし、お腹も一杯になった午後は、眠くなったりするのも解らなくは無いです。でも、そういう時にこそきちんと集中して授業を受けることが大切ですよ」

「「はーい……」」

数人が気の抜けたような返事をした。

「じゃ、ちよつとだけ早いけど今日は終わりにしましょう。次回、予習の発表は……出席

番号16番さんから20番さんね」

名簿をちらつとチエックした先生が、そう言いながら日直に終礼を目で促す。

「起立！ 礼っ！」

◇ ◇ ◇

——その日の放課後。

「でもさー、珍しいよね？ 鶴見ちゃんがあんな風にポケットしてるなんて」

「ま、らしくないよね」

「てゆうか、さっきの鶴見さん、焦点合わない目で微笑つてて……なんか壊れちゃったのかと思って怖かったよ」

「！うっ……」

「どーせまた、比企谷さんの事でも考えてたんでしょ」

「うわー、色ボケだ……」

色ボケつて……。あーあ、藤野さんたち、言うようになったなあ……。あながち的外れでも無いのがちよつと悔しい。

でも、ひどいこと言われてるはずなのに、この友人らの遠慮無い態度を好ましく感じ

てしまう不思議……。

元々クラスメイトの中では私と仲良くしてくれていた佐川さん、津久井さん、藤野さん、の3人。

先日の、辻堂くんが私に告白したことで、藤野さんの気持ちを知った事が、私がそれまで無自覚に作っていた心の壁を取り払えるきっかけになり、私も今まで彼女たちに話せずにいた八幡の事なんかも少しずつ話すようになったんだ。（なんでも、つて訳じゃないけど）

それからはお互い良くも悪くも少し遠慮が無くなったと思う。結果、たまには今みたいに心にグサツとくる事を言われることもあるけど……、

ふふ、この気を遣わずに思った通りを話してくれてる感じに、友達としての距離感が近付いているのを実感出来て……嬉しいんだな、私は。

だから私も素直に答える。

「まあ……考えてたけど。八幡のことも……」

「うひゃー！まじで惚気キター？」

「違うってば。そういうんじゃないよ」

「そういうんじゃないよ……どういうんよ？」

「あのね、先週「Girly Style」の取材あったときに八幡も来てくれて、そ

の時の……

「ウソ！ ってあの Girly Style?」

「鶴見さんの…… Fairy Wingだっけ？ あれってゴスロリとかそういうやつばっかりじゃなかったっけ？」

こういう疑問が浮かぶのはなんとなく解る。どちらかといえばカジユアル向きの人氣ファッション&情報誌「Girly Style」と、ユキ先生のとこのメイン商品である豪華なロリータドレスとではイメージが合わないだろう。

「ばっかりってわけじゃないよ。今回は特に、普通におしゃれとして着れるアイテムの特集みたいだし。モデルだって……そう、今回はA-YAさんも一緒にモデルやってくれたんだ」

「え、すごい。わたしファンなんだ。写メとか撮ってないの?」

「少しはあるけど……。ごめん、雑誌が発売されるまでは誰にも見せちゃダメだっけ」
「そっかあー、残念」

「あ、そういえば、今回ね、けーちゃん……小学校のクリスマスイベントで保育園の代表やってた子もモデルやってくれたんだよ」

「へええええ？ あれ？ えーと今……小学校の……」

あのクリスマスイベントに参加した佐川さんが驚きの声を上げる。

「小学2年生だよ」

「あの子が2年生……。ますます写真見なくなった」

「あ、けーちゃんの写真なら、今回の撮影の時のじゃない、見せて大丈夫なのもあるよ。ほら」

私は、さつき職員室で返してもらったばかりのスマホ（習い事とかでケータイが必要な子は、朝に職員室に預けて放課後に返してもらうのがうちの学校のルール）をスクロールバッグから取り出し、けーちゃんの写真を表示してみんなに見せる。この前ユキ先生たちにも見せたお花見の時の写真だ。

「はあくく、なんか大きくなったねー。わたしも年を取るわけだ」

「わー！めつちや可愛い。誰この子？」

「やっぱモデルやってる子なの？」

佐川さんが親戚のおばさんみたいな感想を漏らし、津久井さんと藤野さんはけーちゃんの可愛さに食い付いてくる。

「前に話した、小学校の時のクリスマススイベントで友達になった子で、京華ちゃんっていうの」

「あ、だから佐川も知ってるのか」

「うん。普段からモデルしてる訳じゃなくて、今回は特別に頼んでやってもらったの。」

ユキ先生が、インタビュ어도あるなら所謂モデルばかりじゃないほうが新鮮な感想も出るから良いだろうって」

「へー」

「けーちゃん以外にもう一人、大人の女性ってことで漫画雑誌の編集さんも参加してくれたよ」

「ふうん……やっぱ美人？」

「うん、なんか色気があって……人妻だよ。それも新婚さん」

「へえー………いやいや待って。比企谷さんの話はどこ行つたの？」

ええ、話を脱線させたのって津久井さんたちだったよね……。

「だから、八幡は付き添いで来てくれたんだけど、ユキ先生に頼まれて撮影のためのダンスの相手役とかもやってくれて……」

「あ、鶴見ちゃんまたちよつと顔赤くなってる？」

もう……最近隙あらば弄ろうとしてくるなあ。

「それはもういいって……」

放課後とはいえ、私たちの他にもいくつか残ってるグループはあり、今の話が聞こえている子もいるだろう。

いつもなら八幡の話をするときにはなんとなく声をひそめてたところなんだけど、今は

あえてそうしてない。

これは、この三人が考えてくれた作戦みたいなものの一環なんだ。



「積極的に噂を流していく……作戦？」

「流す、っていうか、今流れてる噂を全部否定するんじゃないかってー、修正した噂に書き換えるみたいな。もし、鶴見さんが嫌じゃなかったら……なんだけど。」

「……………」

「やっぱり知らないみたいだね」

「あのね、鶴見ちゃん本人が知らないならわざわざ言うような話じゃないかな……とも思ってたんだけどさ……。鶴見さんが大人の男の人相手に、その……不純な交際をしてる……みたいな噂が流されてるみたいなんだよね」

「ー…そんなの……」

佐川さんは言葉を濁してくれてるけど、言い方次第では援助交際とかにもとらえられ

かねない嫌な噂だ。

「うんうん、もちろんそれがデマなのは私らは分かってるし、ほとんどの人は信じてないけど……今、えーとヒキガヤさん？の話聞いて納得したんだ。なんてーか、なんの根拠も無い噂だけど……全く根も葉もないって訳じゃ無かったからだね、噂がなかなか消えないのは」

「どういふこと？」

根も葉も無かった訳じゃない……？

「鶴見さんとその『比企谷さん』が一緒にいるところ、結構見られてるみたい。遅い時間に二人で歩いてたとか、電車で並んで座ってたとかその程度なんだけどさ。それって家庭教師の時に送ってもらったりしてたやつだってことでしょ……多分だけど」

「でもそれだけで……まあ大人つちや大人だけど、大学生でしょ？ それでわざわざ不純って言うかあ……なーんか、悪意を感じるなー」

佐川さんが納得いかないというように怒ってくれる。

「あのさ……私、鶴見さんのこと悪く言う子にはちよつと心当たりがあつて……」

言い辛そうに津久井さんが言う。

「でさ、周りの子に聞いてみたら、その子の好きな男子が鶴見さんに告白して……それで逆恨み……みたいなの？」

つい反射的に藤野さんのほうを見てしまう私と佐川さん。

「ちよ！ わ、わたしじゃ無いわよ!？」

彼女は心外だとばかりに左右にぶんぶんと首を振る。

「ううん、疑つてたとかじゃないんだ。ごめんね」

そう。ただあまりと言えばあまりなタイミングの話だったから、つい……。

「私もゴメン、言い方悪かったよね。今のは鶴見さんと同じクラスになったことの無い子の話で……」

「でも」

藤野さんが津久井さんの言葉を遮る。

「でも——わたしはそんな事しないけど……気持ち少し分かる……」

「藤野ちゃん……」

「だって……全然嫉妬しなかったって言ったら、そんなの嘘だし……だからってそんな噂流すのはサイテーだけど」

「うん……」

「……あー、とにかくね、鶴見さんと一緒にいるのは家庭教師の先生だよってはずきり言うでしょ。それで、付き合ってるって噂は変に否定するんじゃないくて、堂々と清い交際をしていますみたいな感じでアピールしとけばさー、うまく行けば……告白されたりと

か、やつかまれたりとかも減るんじゃないかなーと……」

「でも、私と八幡は、本当は付き合っているとかじゃ無いし……嘘言つて騙すみたいなのはなあ」

「むむ……じゃあ、あたし達が聞かれたら、『鶴見ちゃん本人は認めないけど、なんちゃら以上恋人未満、みたいな感じだよ』とでも言つておくとか」

「おー、良いんじゃない？ それなら嘘はついてない」

「うーん……」

「まあまあ、物は試しつて事でき」

「……………」



佐川さんが周りをちらつと見回し、声を落として言う。

「今んとこ作戦成功してるよね」

「うん、なんか鶴見さんのこと悪く言う噂も聞かなくなった。応援したいって言ってる子もいるよ」

「応援て。ま、女子は恋バナ好きだからなー」

「それが自分の恋愛の邪魔にさえならなきゃ、無責任に見物出来るしねー」

「男連中はダメーじ大きかったのもいるみたいだけど」

「そういえばあたしも男子から聞かれた。『ホントなの』って。本人は『さりげなく』してるつもりみたいだけど、目がマジだったからねー」

「あはは……って笑っちゃ悪いか」

『K大生の家庭教師とまだ恋人未満の清い交際』ってのが鶴見さんのイメージに合ってるリアルみあるしねー」

「名門大学生なのも結果的に良かったんじゃない？　なんてゆーか、イメージだけど……中学生のガキなんかじゃ相手にもしてもらえない……とかそーゆー感じになるし」

「でも……やっぱり、いつまでも嘘ついてるのは……」

「嘘じゃないからおつけーじゃん？」

津久井さんに「何言ってるの？」みたいな顔をされる。

「嘘じゃないって……」

んん、なんのこと？

「フフフ……見テタヨ？」

津久井さんの両目が妖しく光る。

「見てた？」

「優しそーな人じゃん。夜だし遠目だったから顔はそんなにはつきりは見えなかったけどさー。二人で手え繋いで月を見上げちゃったりして……良い雰囲気過ぎて声掛けらんなかったよー」

「！」

「うん、あれはもう、ただの家庭教師と生徒って感じじゃ無かったねー」

津久井さんがなぜか得意げに言い、それを聞いた佐川さんと藤野さんがキャーキャーと声を上げる。

例の撮影の帰りの時だよね……。駅から家に向かう途中だし知り合いに見られても不思議じゃないか。……結構薄暗かったからあんまり周りの目とか気にしてなかったけど……うわあ、あれ、見られてたのか……。

少しずつ、少しずつ。積み重ねてきた想い、近づいてきた二人の距離感。

今はもう八幡と人前で手を繋ぐのもあまり抵抗はなくなった……。つもりでいたんだけど、それを友達に見られていたというのは……。それはそれで別の恥ずかしさがあるなあ……。

「色々話聞きたいなー。ね、鶴見ちゃん、今度の日曜って空いてる？」

「ごめんね、日曜はちよつと用事があつて……」

「もしかして……デートとか!？」

「そんなんじゃないって。誕生日のお祝い」

「ふうん、言い方からすると比企谷さんのじゃ無いか……。お家の人？」

「ふうん、あのね……。あれ」

「ん？」

「ううん、何でもない」

「友だちの」そう答えれば済むだけのこと。

……でも、彼女たちって……。私にとって——一体なんだろう。

* * * * *

6月も中旬に入った日曜日。

今年、この関東地方でもつい先日にも梅雨入りの発表はあった。

ただ、今のところ毎日雨が続くという天気にはなっていない。なんでも、梅雨前線の北上が日本列島本州の南岸辺りで一進一退を繰り返しているという状況のせいらしい。

そんな季節の変わり目だからだろうか、このところ急に暑くなったり、かと思えば次の日は肌寒かったり、またある日は夕立が降って雷が鳴ったりと不安定な天気が続いてきている。

でも、幸い今日は今の所穏やかな空模様のようにほっとする。

「晴れて良かったー」

保冷のトートバッグを左手に持ち替え、少し赤い跡が付いてしまった右手の指を軽く屈伸させながらそう言うのと、

「ですねー。ただ、午後は少し蒸し暑くなるって天気予報で言っていましたよー」

まだ10時前のこの時間にして、かなり高く昇ったお日様を見上げるようにしながら答えるいろはさん。

「最近、変な天気続きますよね」

「まあ、今日の会場は、空調とかちよお完璧だから問題無いですけどねー」

「話にだけは聞いてますけど、雪乃さんのお家ってそんなに凄いですか?」

「わたしも初めての時はびっくりしましたけど……広いのもそうだけど、とにかくお洒落なんですよ。セレブドラマに出てくるようなお部屋でー、高校生とか大学生の住むような部屋じゃ無いですね、あれは」

「ふふ、なんだか楽しみになって来ました」



今日は結衣さんの誕生日会。

私たちが親しくなってきたから、なんとなく行われてきた、誰かの誕生日をお祝いする習慣。とは言っても、今まではそれほど大袈裟にやっていた訳じゃなかったんだ。

誕生日に近い週末や休日に、みんなの都合がいい時間に集まり、ファミレスかどこかで食事。その後カラオケボックス行ったりして、みんなからのプレゼント渡して……と、そんな感じ。

暗黙の了解のように誕生日当日を避けてきたのは「その日もし八幡が……」と、みんな思うところがあるからだろうけれど、とにかく「誕生日」というほどはつきりとした集まりでなかったことは確か。

ただ、この春、八幡たち三人が卒業して進路は別れ、当たり前だけど皆が揃って会える機会はいぶ減っちゃったんだよね。

口には出さずとも、みんなその事を寂しく思っていたのだろう、今年は少し盛大に「結衣さんの誕生日会」をしようという小町さんの提案には皆積極的に賛成したんだ。

じゃあ料理も自分達で作ろう、場所はどうしようか……という話になったとき、雪乃

さんが「その日なら大丈夫」と自宅を会場として提供してくれたのだ。

いろはさんの案内で到着したのは、中に入ったことは無いものの、見知ってだけはいた駅近くの高級高層マンション。

雪乃さんの家ってここだったのか……。

いろはさんが、エントランス前に設置されているインターホンのキーパネルに、15▲▲と雪乃さんの部屋の番号である15ナンバを入力した。数字からすると雪乃さんの部屋は15階とかなり高層にあるようだ。

数秒置いてインターホンから雪乃さんの声。

『いらっしやい。早かったのね』

「雪乃せんばい、着きましたー。留美ちゃんも一緒ですよー」

『大丈夫、ちゃんと見えているわ。いろはさん、留美さん、今開けるわね』

エントランスの出入口、自動ドアの上で赤く点つていたランプが緑の点滅に変わると、クウンという微かな機械音と共にスモークガラスのドアが左右にゆっくりと開いた。

エレベーターを降り、いろはさんに続いて雪乃さんの部屋へ。

「いらつしやい。どうぞ上がって」

「こんにちはですー。おじやましますねー」

「お、おじやまします……」

ふわあー、すごい。玄関入ったとたんにおシャレ空間が広がっていてちよつぱり氣後れしてしまう。

広い上あがりかまちがり框には木目のぴんと通った高級そうな天然木。壁の低い位置から足元を照らす間接照明。

雪乃さんに案内され、玄関から真っ直ぐ伸びる廊下を奥へと進む。左右にはいくつかのドアが配置されていて、そのうち一つには、花冠の中に「陽」という文字が流麗な書体で浮き彫りされているデザインの木製のレリーフが掛けられていた。

私たちが通されたのは突き当たりの広いリビング。シンプルで高級そうなカーペットの上に低いガラステーブル。それに沿うように、L字型にローソファアが並べて配されている。

部屋の隅に置かれた液晶テレビはけっこう大きめで、あまりテレビを見ているイメージの無い雪乃さんとはミスマツチな印象を受けた。

キョロキョロと見回せば、天井に照明は無く、部屋の中央にはエアコンの吹出し口らしきものが設置されているのみ。

明かりは、部屋の四隅の柱とそれぞれの間に設置されている、スポットライトを上向きに取り付けたような間接照明だけのようで、それをつや消しされた白い天井に反射させることで光が柔らかくなり、決して暗くは無いものの落ち着いた雰囲気醸し出しているのだろう。

もつとも、今は窓側の明かりは消されており、その大きな窓の外には広目のバルコニーが見えている。15階ともなるとさすがに視界を遮る建物もそう多くはなく、方向によつては都心方面の町並みをかなり遠くまで見通すことが出来る素晴らしい眺めが広がっている。

そして、リビングの右手側には間仕切りのように低い柵と観葉植物が置かれており、どうやらその先がダイニングスペース、さらにその奥がアイランド型のキッチンになっているみたい。

いろはさんに聞いていた通り、本当にドラマとかに出てきそうな部屋だなあ……と、「会長、お疲れ様です」

「ここで会長はやめてよー、小町ちゃん」

先に到着していたらしい小町さんがそのキッチンの奥からひよっこり顔を出した。

そういえばこの二人、現総武高生徒会のメンバーだっけ。いろはさんは二期連続の会長さん、小町さんは、「奉仕担当庶務」とかい、よく分からない役職らしい。

「留美ちゃんもお疲れ〜」

「こんにちは、小町さん。来てたんですね」

「うん、特に用事も無かったし、ちよつと早めに着いちやった」

「確かにまだ時間もあるし、一度お茶にしましょうか。貴女達は座つていて」

そう皆に声をかけ、雪乃さんはそのまま奥へと入つて行つた。

私というはさん、小町さんがガラステーブルを囲むように腰を下ろすと、そのタイミングを見計らつたように、カチャツと小さな音を立てて先程見たレリーフの掛けられていたドアが開いた。

中から出てきたのは、肩くらいまでの髪の……雪乃さんとも顔立ちの似た、見る者をはつとさせるほど綺麗な女性。年は二十歳ぐらいだろうか。

紺に近い青のノースリーブのプルオーバーに膝丈のギャザースカート。シースルー素材の白い薄手のカーデイガンを羽織り、ややカジュアル寄りのおしゃれな装い。いかにもこれからお出かけしますという体の彼女は、

「ひゃつはろーん。久しぶりだねー、一色ちゃんに妹ちゃん」

ずいぶんと親しげな様子でいろはさんと小町さんに声を掛けてくる。

「はるさん！どうしたんです？今日はお出かけだよーって朝LINEで……」

「小町も……陽乃さんいらっしやっただの知りませんでした……」

こっちの二人はかなり驚いてるみたい。でも、「ハルノさん」って……。

「まあまあそれはいいーから。ねー、その娘に紹介してよおー」

その彼女は、初対面の私に興味津々といった様子。

「あ、はい。——コホン。留美ちゃん、こちら、雪乃せんばいのお姉さんで、そのC大の理工学部 of 四年生のはるさんです。もちろん総武高の先輩でーす」

なにがもちろんなのかよくわからないけど、やっぱりこの人が噂に聞く雪乃さんのお姉さんかあ。

……改めて見ると、さすがに姉妹だけあって顔かたちは本当に雪乃さんに似てる……けど、纏ってる雰囲気は少し違うかな。

「初めましてえ、雪乃ちゃんの姉の『はるさん』こと雪ノ下陽乃でーす」

八幡は「怖い」とか「ラスボス」とか言ってたけど、そんな事なさそう。どちらかかというとなんか……人懐こそうな感じ……？

「で、ですね、こちらが総武からすぐの浜二中2年生の留美ちゃん。私たちとは小学生の頃からのお付き合いなんですよー」

「……、……んには。鶴見、留美です」

私が立ち上がって挨拶すると、

「なんだか……昔の雪乃ちゃんみたいな子ねえ……。あ、もしかして貴女が比企谷くんが家庭教師してらるって娘？」

「あ、はい」

「へえー………キミかあ、比企谷くんと仲良しの中学生って」

声のトーンが変わった気がした。何故かぞわり、と冷たい感覚が背筋を走る。

「鶴見留美ちゃん………かあ」

私の顔を上げしげと見ながら、彼女——陽乃さんがすうつと距離を詰めてくる。

「ねえ、鶴見ちゃあん？」

にこやかに微笑みながら私の顔を覗き込む彼女の目は——全く笑っていない。その瞳は、どこまでも透明な冷たい氷のように私の視線を吸い寄せる。得体の知れない怖さを感じているのに、金縛りにかかったように目を反らす事さえ出来ない……。

「……小学校で他人ひとのもの盗ぬすっちゃいけませんって習わなかったあ？あれ、雪乃ちゃん
のなんだけど？」

低く囁かれた声、全身が総毛立つような感覚。頭では理解できないような圧力の前に、思わず膝の力が抜けて座り込みそうになるのをどうにか堪えた。

盗ぬすつ……？ 私、そんな事してない……してないよね。だって私はただ八幡が好きな

だけで……それだけで、どうしてそんな風に言われちゃうの……。

「……姉さんはここで何をしているのかしら？ 今日朝から一日出掛けているという話だったでしょう？」

「理不尽なこと言われている——とは思いますが、陽乃さんの妙な迫力に圧されて固まっていた私に助けの声がかかった。」

奥から出てきた雪乃さんが、腰に手を当てて呆れ顔で陽乃さんを見ている。

「ん〜。ガハマちゃんだけじゃなく比企谷くんたちも来るって聞いたからー、待ち合わせの時間2時間遅らせてもらっちゃった。ほら、最近彼の顔見て無かったし」

陽乃さんは澄まして答える。

「そんな事誰が……」

「雪乃せんばい、すいませんわたしです……。今朝、比企谷くんも来るんでしょって当たり前のように聞かれたので、知っているものだと思っただけ……」

雪乃さんはガツクリと肩を落として溜め息をつく。

「だからと言っただけで出掛けたふりまでして……」

「ええ〜、普通に部屋に籠ってただけでしょー。雪乃ちゃんが勝手に勘違いしてただけ

じゃない」

陽乃さんは悪びれない。

「……いえ、居るだけなら問題無いのよね、ここは姉さんの部屋でもあるのだし。……でも、私の友人を侮辱するような態度は例え姉さんでも許さない」

雪乃さんが氷点下の声で凄む。

「そんなに怒らないでよ。新しいお友達に小粋な挨拶しただけじゃないの」

「何が『小粋な』よ。『姑息な』の間違いじゃないかしら」

「そんな事無いわよお。ねー、鶴見ちゃん？」

さっきの怖さはどこへやら。こうして気さくに話し掛けてくる彼女はとても人好きのする陽気なお姉さんという雰囲気だ。

「私はなにも……。でも、八幡の事、『誰のモノ』とか、そういう言い方はしないで欲しいです。八幡……そういう——外からレッテル貼られるみたいに、自分のこと勝手に決めつけられるの好きじゃないから」

「んー……。でも、その言い分だと、キミ自身も比企谷くんのこと決めつけてるって事にならない？ 彼、案外格好つけてるだけなんじゃないの？」

ふふふ、と微笑いながら、まるで挑発するかのような陽乃さんの言葉。そして……今もその瞳の奥では笑っていない……。

きつとこの人は八幡の事知つてて、わざと私にちよつかいを掛けてきてるんだ。でも、もしそうじゃないなら——ううん、だからこそ……。

「決めつけてるんじゃないよ——知ってるんです。だつてずっと近くに居たから。——私だけじゃなく、雪乃さんも……結衣さんもいろはさんも。」

だから、そんな事も分からないなら、勝手に八幡の事いろいろ言つて欲しく無いです」
勇気を振り絞り、私は陽乃さんの目を真つ直ぐに見返す。

陽乃さんは眇すがめていた目を丸く見開くと……突然手を叩いて笑いだした。

「……あはは——っ。凄いねえ。雪乃ちゃん、この娘——手強いよお」
「……知つているわ」

雪乃さんはしれつと言う。

「あれえー、そんなに余裕でいて良いの？ そんなんじやまた……」

「今までとは違うのよ。私は私でいることが出来る。だから、」

雪乃さんは挑むような目をして続ける。

「何かが例え望み通りの結果にならなかつたとしても……私たちにはちゃんと得たものがある」と自信をもって言えるわ」

「それで納得出来るの？ 壁を壊すのはこの娘かもしれないのに」

「納得……そうね、少なくとも受け入れる心構えは有るつもりよ。何もかも思い通りに

ならなきや気がすまない姉さんには分からないだろうけど」

「心外だなー。……わたし、肝心なことは少しも思い通りになんてさせて貰えなかったわよ？　今まで」

「姉さん……」

「でもまあ、今は雪乃ちゃんが頑張ってくれてるお陰でしばらくは好きなこと続けられてるし……だからそのお礼に雪乃ちゃんのこと応援しようと思っただけだねー」

そう言つて陽乃さんは雪乃さんと私を交互に見て、実にチャーミングな表情でクスクス笑う。

この空気がギシギシ音を立てそうな雰囲気の中であんな風に軽やかに微笑えるなんて、この人は一体どういう心臓をしてるんだろう。

「余計なお世話よ。……でもそうね、気持ちだけは受け取っておくわ」

雪乃さんが返したその言葉の字面だけ見れば拒絶のよう。でも彼女の声はどこか優しい響きを含んでいて、その表情には悪戯っぽい笑みさえ浮かんでいた。

「ふうー、やれやれです。でもお二人……随分仲良くなりましたよねー」

一段落と見たいろはさんがほっとしたように溜め息をつく。

でも……え、これで「仲良くなった」の？

「ねえ、その比企谷くんはどうしたのよ？」

「はいはい。それじゃ雪乃ちゃん、比企谷くんとガハマちゃんによろしくね〜」

陽乃さんはそう言って私の方に振り向く。彼女は他の皆に聞こえないようにか、私の耳許に顔を寄せて、

「鶴見ちゃん、どんなに居心地が良くても、出口のない楽園に未来は無いよ」

そう小声で言うのと、またいたずらっ子のように笑う。

「え、あの……」

「ふふふ、おねーさん、キミには色々期待してるから——頑張つてね」

そうして、陽乃さんは嵐のように去っていった。

「留美さん……姉さんがその、色々とごめんさい」

雪乃さんが本当に申し訳なきように謝ってくる。

「いえ、そんな事……。すごくびつくりはしましたけど、大丈夫ですから」

本当、何をされたと言うわけでもない。少なくとも雪乃さんが謝るようなことは何も
ないはずだ。

「びつくりと言えば、わたしは留美ちゃんにもびつくりですけどねー。はるさんにあん

な……」

「あの、何か不味かったですか」

「そんな事無いわ。もつと言つてあげても良かったくらいよ」

「それは……陽乃さんの事なにも知らないからこそその強味ですかねえ。お兄ちゃんが見てたらどんな顔しただろ？」

「せんばい、驚いて泡吹いちやうんじやないですかねー」



それから私達は誕生会用の料理の準備に取り掛かる。今日は、みんなで料理をするこ
ういう時にトラブル・メーカーになりそうな結衣さんがいないので失礼ながら安心して
作業ができるなー、なんて。

本日の主役に対して酷いこと考えて申し訳ないとは思うけど、彼女は実際何度かやら
かして実績があるからなあ。去年の夏なんかどうなることかと………まあ、それは
いいや。

ざっくりとした分担は、小町さんと私がいわゆるオードブルなんかの料理全般。パー

スデーケーキ、お菓子が雪乃さんというはさん。

もちろんお互い手が空いたら手伝うんだけど、今回一から作るメニューは少ないし、みんなそれなりに料理スキルの有るメンバーなのでバタバタすることなく余裕を持って準備できるだろう。

昨日家で下ごしらえをしておいた鶏肉なんかをトレイに並べて出し、雪乃さんからキッチンを使う上での注意点とかを教えてもらう。(調味料の置いてある場所、それに三ツ口のコンロのうちどれが強火力対応だとか、オーブンレンジのワット数の切り替え方とか)

ただ、下準備はだいたい終わっているんで、案外急いでやらなければいけない事は少ない。あまり早く火を通して、結衣さんが来る前に冷めちゃうし……。

そこでケーキの方を手伝おうかと見れば、さすがにお菓子作りが得意な二人だけのこととはあり、実に手際よく作業は進んでいるようだ。

今回のケーキはなんと二段重ね。大小のスポンジ生地は昨日雪乃さんが焼き上げてくれている。

もうすでに、雪乃さんというはさんでそのスポンジをワイヤー式のケーキスライサーを使ってスライスし終え、次の工程に入っている。

後は間にクリーム・フルーツなどはさみ、全体に生クリームを平らに塗りつけ、そ

れから今度は絞り袋を使った生クリームとチョコレートペンなどで飾り付け、最後に苺をたくさんトッピングして仕上げるという話だった。

二段重ねで豪華であることを除けば、オーソドックスで奇をてらわれない、いわゆる苺のホールサイズショートケーキ。

でも、雪乃さんが金属ボウルにドボドボと遠慮なく注ぎ入れている一リットル牛乳パックみたいなものは、この辺のスーパーではあまり見ない高級生クリームだ。……あれ一本で三千円くらいするはず。親友の誕生日だけに奮発したのかな。

ボウルはやや大きめと中くらいのサイズの二つ。どちらもそれぞれ氷水の入った一回り大きなボウルに浸けられている。雪乃さんは、中サイズの方のボウルに砂糖と小さじ二杯分くらい何か液体を加え、泡立て器で一気にかき混ぜ始めた。

「雪乃せんばい、今入れたの何です?」

大きい方のボウルに砂糖を加えて混ぜ、小指を啜えて味見をしていたいろはさんが聞く。

「ライムの果汁よ。少しだけ柑橘の果汁を混ぜると生クリームのポツシュとかフリルが型くずれしにくくなるの。色々試してみたけれど、ライムが一番クリームの風味を損ねなかつたし、苺との相性も良かったわ。ただ、入れすぎると分離しちゃうから、もし試してみるなら注意して」

「なるほどですー。じゃあ、そっちがデコレーション用ですね」

「そう、貴女の持つてる方が下地塗り用」

ふうん、生クリームにライム果汁か……。私も今度試してみようかなあ、なんて考えていると、

ピンポーン、とチャイムが鳴り、インターホンの液晶画面がパツと点く。

モニターに映るのは、エントランス前で大きな袋を下げて佇む八幡の姿。魚眼レンズというほどではないようだけど、俯瞰でかなり広い範囲の様子を確認できるみたいだ。なるほど、私たちもこういう風に見えてたのか。

「いらつしやい、比企谷くん。今開けるわ」

雪乃さんの声が弾んでいるように聞こえるのは、決して私の勘違いじゃないだろうなあ……。



「悪い、遅くなった」

飲み物のたくさん入った袋を床に下ろしながら済まなそうに八幡が言う。

「いえいえ、ご用事があつたんですから仕方ないですよ。結衣せんばいもこれからですしちゃんと間に合ってます。……でも最近お忙しいみたいですねー」

「まあ、それなりにな。バイトもあるし」

「そういえば比企谷くん、留美さんの家庭教師以外にもずいぶんと色々とアルバイトしてるみたいね」

「単発が多いから色々って感じなだけで、それほど日数出てるわけじゃない」

「でも、一年のこの時期からそんなに……お金に困っているというわけでもないでしょうに」

「親父に借りてる金をとつと返しちまいたいだけだ。実家に帰る度に偉そうにされるのも頭に来るからな」

「そういうこと……。もしよかったら、また今度うちの事務所の短期スタッフもお願ひしようかしら」

「そういうえば、親父さんこの秋選挙だつてな。まあ前の時みたいにピラ配り位なら……」

「あら、今回貴方には事務所の内部スタッフの方をお願ひしようと思つて居るのだけど」

「あのな雪ノ下、大学生になったばかりの人間に何をさせようっていうんだよ。いくら

県議会副議長様でも余裕有りすぎじゃないか？」

「この世界、若い人にしか思いつかない発想、というものも馬鹿に出来ないのよ。これから選挙権の年齢も引き下げられる事だし。そういう方面、比企谷くん得意でしょう」

「買い被るな。俺の発想は若いんじゃないやなくひねくれてるだけだ」

「それを自分で言っちゃうのがせんばいらしいですよね……」

ホント、ドヤ顔で言うセリフじゃないよね、それ……。

「それにそもそも選挙に直接関わる活動に賃金を支払うというのは法的にアウトなのよ。」

選挙運動は原則ボランティアというのが建前だから……前に配ってもらったのも、あくまで『議員の日頃の活動を紹介する小冊子』であつて、選挙とは何も関係無いわ」

「いやあれは……」

「関係無いわ」

何か言いかけた八幡を、雪乃さんが笑顔で黙らせる。

「……………なんにしても、俺に雪ノ下の真似は出来ねーよ。『現役でT大法学部政治コースに通う傍らで、十代にして議員秘書職をこなす才媛』——お前、自分が陰でそんな風に言われてるの知ってるか？」

「それは初めて聞いたわね……。だいたい私はただの事務処理係よ。秘書なんて名乗っ

たら父の秘書をしてくださってる本職の方たちに失礼だわ」

「……まあ、その秘書さんたちこそがお前には随分期待してるみたいだったけどな」

「もちろん努力はしているもの。……さあ、雑談はこのくらいにして、準備を終わらせて

しましょよう」

「「はい」」

「しかし……このメンバーで料理にケーキ作りとなると、俺はやること無いな……」

「あら、そんな事は無いわよ」



そして、料理の準備も滞りなく終わり、約束の時間であるお昼ちょうどに結衣さんが到着。

このメンバー全員が揃うのは久しぶりで、なんだか安心したような気持ちになれる。

プチ同窓会のような雰囲気の中で結衣さんの誕生会は始まった。

◆
「誕生日おめでとう」

「おめでとうございます！」

「……おめでとさん」

「……………」

「……………」

「ゆきのん、みんな……」

「ではここで、結衣せんぱいからごあいさつ」

「あたし？そんなの聞いてないよ！」

「はい、言つてませんし。てか、今思いつきました。誕生日も迎えたことですし……ここ

は一つ、大人の女性としての挨拶をお願いしまーす」

「無茶振りだ!？」

「結衣さん頑張つてー」

「う……ほ、本日は私どものためにこのような盛大な会を開いていただき有り難うござ
いました。後はえ〜と……え〜と」

「由比ヶ浜……お前は何人もいるのかよ。あと、まだ終わつてないから。格好つけなく

「ていいから自分の言葉で話せ」

突つ込む八幡もなんだか楽しそうだ。

「ヒッキー……うん！」

結衣さんは一つ深呼吸してから、

「みんな、ありがとーっ」

と、最高の笑顔で言った。



「じゃじゃーん！ケーキですよー」

小町さんがゴロゴロとワゴンを押してケーキを運んできた。

完成した二段重ねの苺のホールケーキは雪乃さん、いろはさんによる生クリームのでコレーションも美しく、二段のケーキそれぞれの外周を縁取るように載せられた苺の赤が、白いクリームの上でとつても鮮やかに映えて見える。

上の段のケーキの端に数字の1と9の形をしたロウソクが並べて刺されていて、広く空いた上面の白いスペースには、焦げ茶色のチョコレートペンで

「Happy birthday YUI」と、

……ミミズが這ったような字で書かれている……。

「由比ヶ浜すまん、俺にやらせるのは無謀だと何度も言ったんだが……」

ふふ、チヨコレートペンって、馴れないと、慎重に書こうとすればするほど線の太さが不安定になっちやうんだよね……。

「これ、ヒツキーが書いてくれたんだ……。ううん、ありがとう、すぐくうれしいよ……」
頬を紅潮させて本当に嬉しそうな結衣さん。

「んん？ この、ネズミみたいな何だろ」

「ぐ……その、お前んとこの犬のつもりで……」

「サブレ？ あはは、うん、言われればそう見えてきたし。色とか」

「色かよ……」

まあ……チヨコレートだもんね。



お腹が満たされた私たちが今みんなで作っているのは、小町さんが持ってきた、あま
り馴染みのないカードゲーム。

最初に手札を二枚配って、後は山から順番にカードをひいて、場に出されたカードの

指示にみんなが従うというゲームなんだけど……。

雪乃さんがカードを引き、少し考えて引いたカードをそのまま場に出す。

「爆弾よ。これで……」

「待った。雪ノ下、お前言い忘れてるぞ?」

「え? あつ、創英角POP体最高……」

「ぶぶー、もうアウトですよつ、雪乃せんぱい」

顔を赤くして本気で悔しがる雪乃さん。

「こんな下卑た目をした男にこの私が辱しめを受けるなんて……屈辱だわ……」

「おい、人聞きの悪い言い方はやめてもらえませんかね。誰かに聞かれて俺が逮捕されたら小町に迷惑がかかるだろうが」

「よよよ、お兄ちゃん、そこまで小町の事を……。でも心配しないで。小町他人のふりして切り抜けるから♪」

「ちよつとちよつと小町ちゃん?……」

「あはは、じゃあ次はあたしだね。創英角POP体最高つ」

結衣さんが、雪乃さんが忘れてしまった言葉を叫び、カードをひく。

「よつ、と。あ、『全員、せーのでじゃんけんをすること!』」

そう言つて結衣さんがカードを伏せる。

「「「セーのっ」」」

結衣さんがグー、私はパーで八幡といろはさんがチヨキ……。

結衣さんが満面の笑みでカードをめくる。

『手番プレイヤーと異なる手を出した全てのプレイヤーは敗北する。』

「くっ」

「ああっ」

「やられました〜」

「やったー、あたしの勝ちっ」

今回の勝負は主役の面目を保つて結衣さんの勝利！

このゲームは意味不明な指示も多いし、一発で全員負けになつて全滅なんてこともあ
るけど、一回一回の勝負は長くても5分位。繰り返しプレイしているうちにいつの間
にかテンションが上がつてしまうという不思議なゲームだ。

「もう一回よ！ 次は勝つわ」

「よーし、ゆきのん、受けて立つよっ」



そんな風に、楽しい時間が過ぎていく。

八幡たち——彼はもちろん、雪乃さん、結衣さん、いろはさん、小町さんと共に過ごす時間は、楽しくて、嬉しくて、甘酸っぱい切なさがひとつまみだけあって。

ふと、あのクリスマスイベントの時の事を思い出す。

私に背を向け、並んで歩いていく八幡と雪乃さん、結衣さん。その後ろ姿は三人の絆の強さを見せつけ、他の誰かが近付くのをさえ躊躇われるほどだった。

——それでも勇気を出して彼等を追いかけて、隣を歩いて行つたいろはさん。——そして、取り残された私。

あの時私は強く願った。ううん、あの時だけじゃなく、その後も、何度も何度も。

「私もあの隣を歩きたい。あの人達が築いた世界に、並んで一緒に居られる、そんな私になりたい」と。

当時その望みは遙か彼方のものに感じられたし、私自身それは叶わぬ夢だろうと漠然と思つていただけ……。――

幸運か運命か、今私は八幡の近くに――共に在りたいと焦がれたみんなの中に居ることが許されている。皆それぞれの想いを抱えてたどり着いたこの優しい世界に。

――けれど、誰もその先に進めずに、もがくことさえ出来ずにいる世界に……。

そう、この優しい世界には甘い呪いが掛けられていたんだ。

陽乃さんは「出口のない楽園」と言った。

そこにいるのがひどく心地好いから、皆そこから出ることを怖れる。

スマートに先に進める出口なんてどこにも無い。誰も傷つかない未来なんて無い。

先に進むには、自ら楽園の壁を打ち破っていくしか無いんだろう。でも……。

危ういバランスで保たれている世界。誰かが八幡と結ばれたなら……私たちの関係

は、きっと今までと同じではいられない。

遠慮、気遣い、傷心、後ろめたさ……。もし私が八幡と結ばれる未来があったとして、

或いは私以外の誰かと八幡が付き合う未来があったとしても……雪乃さんや、結衣さん、

いろはさんに何も思わないでいるなんて無理だ。彼女たちだって同じだろう。

いつそ彼女たちが他人を妬んだり、逆恨みして悪い噂を流したりするようなライバル

なら心も痛まないのに……。などとあり得もしない考えがぐるぐると頭を巡る。

そんな事を思うくらいには、私は八幡だけでなく彼女たちの事も好きになってしまっているんだよね、たぶん。

それでも……私の脳裏に嫌な考えがちらつく時はある。八幡が私を好きになつてくれるなら、雪乃さん達との関係が壊れても構わないんじゃないか、と。

それは、私は彼女たちとは違つて、八幡以外との関係が薄いからかもしれない。それに……私が自分の事ばかり優先して考えてしまうずるい子だから。

八幡さえ居てくれればそれで良いって割りきることもしつと出来ると思ってしまうから。

そう思い込んでみても、壁に向かつて踏み出そうとする心はすくむ。

だって、壁を壊すことは、八幡からこの「楽園」を奪う事でもあるんだもの。

人と付き合うことの得意じゃない八幡が、たくさんの事を乗り越えてやつと得たこの……雪乃さん、結衣さん、いろはさん、それに小町さんや私も含めたみんなとの絆をどれほど大切にしてくれているのかを解つていながら——それを壊す？

そんな事をしてにおいて「私がいるから大丈夫、私だけを好きでいてほしい」とでも言ううつもりなの？

今なら分かる。なぜ八幡が……雪乃さんが、結衣さんが、おそらくは何度もあつただろうチャンスに前に踏み出せなかつたのか。自ら望んで飛び込んだはずのいろはさん

がその先に踏み込めずにいるのか。

みんなが今を大事に思っているから、それをお互いに解っているから、このままでいるのは違うと思っただけでも前に進めなかったんだ。壊れてしまうのが、壊してしまうのが——奪ってしまうのが、怖かったんだ……。

私でさえそうなんだもの。より強い絆で結ばれている八幡たちなら尚更だろう……。

いつの間にか考え込んでしまっていた私にみんなが声をかけてくれる。

「んん？ どうしましたー、留美ちゃん、なんかぼんやりしてますよ……」

「あら、疲れちゃったのかしら？」

「あー、飲み物持ってきてあげる」

「あーもう結衣さん、主役は座つててください。小町がやりますからー。……あ、お兄ちゃんが立ってる。留美ちゃんに飲み物ぶりーず。あと小町にも」

「小町……」

「立ってる者は兄でも使え、つてことわざがあるじゃん」

「『兄』じゃなくて『親』な。それにそれは自分がどうしても手が離せない時に……はあ、まあいい。留美、お茶で良いか？」

ほら、まただ。

私たちはお互い口には出さないけど、八幡を廻つての恋敵同士だという自覚は持つてる……はずだ。

それなのにみんなは……。私だって……。ここに失くしたくない。壊したく……。無いよ……。

そう……。今日陽乃さんに言われたように、私もきつと「出口のない楽園」に囚われてしまっているんだ……。

* * * * *

『……次は稲毛海岸。次は稲毛海岸、お出口は左側です……』

また物思いに耽っていた私は、車掌さんのアナウンスで我に帰った。

あれからもう五日が経つ。

日常。学校に通つて授業を受け、放課後には美術部室に顔を出して絢香たちと下らない話をする。今はユキ先生のところからの帰りだし、明日土曜日は自宅《うち》で八幡の家庭教師……いつも通りの生活。

だというのに……。

『出口のない楽園に未来は無いよ』

陽乃さん——雪乃さんのお姉さんに言われた言葉がずっと心に引つ掛かつてる。

はあ……そんな事言われたって、私はどうすれば良いの？

今のみんなの関係を壊したくなんてない。

それにもし仮に、私が全部を失う覚悟で踏み出そうという気持ちになつたとしたって

……それに八幡が応えてくれるとも思えない……。

そこまで考えたところで電車が駅へと到着した。私は一時頭を切り替えて電車を降りる。

ホームから出口へ向かう階段へと、滝が流れ落ちるように移動していく人々。

私は人混みを避けたい気分だったので、ホームで暫し人の流れをやり過しほごすことにした。

待つこと一、二分。少し階段の人波が空すいてきたところを見計らつて下に降り、改札

をくぐって外に出る。

空は灰色の雲に覆われ、ぱらぱらと小粒の雨が落ちてきている。私はリュックサックの中から折り畳みの小さな傘を取り出した。

頬に感じる風は湿つぽいけれど、電車内の冷房の風とは違った夕刻らしい自然な涼しさ。心が心地よく、私の心を少しだけほっとさせてくれた。

駅を背に家路を急ぐ人々の群れ。徐々に雨脚は強まってくる気配だけど、傘を差している人といない人との割合はまだ半々といったところか。

人の流れが徐々にばらけて、人影もまばらになってきた時、私の数十メートル先に、見えるのある桜色の傘を差して歩く泉ちゃん。彼女の背中を見つけた。

そうか、今日は金曜日だから泉ちゃんやんは絵画スクールの日か。同じ電車だったのかな？今日は端の車両に乗らなかったし、気が付かなかったなあ……。

こんな時、いつもの私なら走って泉ちゃんに追いつき、笑って声を掛けるんだろう。

でも、さっきまで考え事をしていたせいかな、はたまた雨のせいかな……とにかく今日は何もかもが億劫で……。

それにどうせ今から追い付いても、私たちの家まではたいした距離じゃない。一緒に歩けるのはせいぜい二百メートルかそこらだろうし……だったら、わざわざ追い付かな

くてもいいかなあ。

そのまま歩いていくうちに、彼女との距離はだいぶ詰まったけど、結局私は声をかけなかった。

いつもの角を曲がって、自宅に向かう細い路地へと入っていく泉ちゃん。

彼女が視界から外れ、たぶん二十秒くらい後にその路地の入り口に差し掛かった私。

「泉ちゃんはもう見えないかな」と路地を覗き込んだ私の視界に飛び込んできたのは――

――灰色の作業服を着た男に口を塞がれ、幌の付いた工事用のトラックのような車の中に引きずり込まれる泉ちゃんの姿だった。

鶴見留美が守りたいもの④ 守りたいと願うもの

一瞬、だった。

ここを通り掛かるタイミングが十秒遅かったら、私は事件に気付きさえしなかったはずだ。

雨の夕刻、通りから奥に入った暗い^{ひとけ}人気の無い路地。

だから、全てがはつきり見えてた訳じゃない。泉ちゃんの異変に気づいたのだから、直前に路地に入っていく彼女を見ていたからこそだろう。

でも……私は自分の目に映る犯罪ドラマのような光景をにわかには信じられず、すぐには声を上げる事さえ出来ずにいたんだ。

作業服の男に、後ろから抱き抱えられるようにして口を塞がれた泉ちゃんが、開けられていたトラックのドアの陰に引き込まれるまでほんの1、2秒。

わずかにドアの下に見えていた足もすぐ見えなくなり、同じ作業服を着たもう一人の男が、逆さになって足元に転がっていた桜色の傘を、開いたまま車内に放り込み、パタンとドアを閉じる。

そのトラックは左右にそれぞれ前後二枚ずつドアがあるタイプのものらしい。男が

今閉じたドアの前のドアを開いて運転席に乗り込むと、トラックは慌てた様子もなく、丁寧にウインカーを出してゆつたりとこちらに向かつて走り出した。

……正にあつという間の出来事。ここに至つて私は目の前で何が起こつたのかをようやく認識する。人攫い、拉致、誘拐、とにかくそういう犯罪に私の親友が巻き込まれたんだ。

足が竦み、頭の中は真つ白になる。自分の心臓の音が耳元で大きく聞こえるような錯覚。

どうしよう、どうしようどうしよう……。そうだよ、警察に電話……。でも、こういう時警察はすぐには動いてくれないと聞いたことがある。

通報は悪戯じゃないか？ 見間違いじゃないか？ いなくなつたとされる人の家を訪ねての安否確認。出かけた先への行動の確認。搜索はそれからやつと始まるらしい。

それまでどれ位かかる？ そんなことをしてる間に泉ちゃんは……………。

思考だけがぐるぐる回り、指一本さえ動かせないまま、スローモーションのようにトラックが私の目の前に差し掛かる。

そうだ、ナンバーを確認しなきゃと見れば、泥を塗つたように茶色く汚れていて読めない！ きつとわざと汚してるんだ。

窓から中を確認しようとしても、街灯の明かりの反射と雨の雫で中ははっきり見えな

い。ドアには〇〇工務店と印刷されたシールみたいなのが貼つてあるけど、これも本物かどうかなんてわかりはしない。

どうしよう、私、なにも出来ないの？ 鼓動だけが速くなっていく。

何事もなかったように私の前を通り過ぎ、細い道から表の広い通りへと向かうトラック。

キンキンと頭の中でこだまするように暗い声が響く。このままじゃ泉ちゃんにもう二度と会えなくなるんじゃないか、何もしなくて良いのか、——また見捨てるのか——と。

きつとこれは過去の私からの声。

気付けば私の脚はその声に追い立てられるかのように勝手に動き、トラックの後ろを追いかけ始めていた。距離にしてほんの電柱一本分くらいだったけど、すぐにぐいっと引き離されてしまう。

「そんな……嫌だっ……」

走りながら叫んだつもりの私の声は掠れて頼りなく、雨音の中に融けて吸い込まれてしまう。

すぐに動き出せなかった事への後悔と絶望、涙が滲む……。

でも——広い通りに入る手間で、トラックがブレーキランプを光らせて止まった！ど

うやら前を走る車の列がすぐには途切れないようだ。

やけに眩しく点滅するウインカー。

——今しか無い——。

傘を放り捨て、必死に走る私。一度は引き離されたトラックの赤いテールランプが一気に目の前に近づいたけど、いつ走り去ってしまうかわからない。あと10メートル……5メートル……お願い、間に合ってっ！

そして……ついに私はトラックに追いついた。

幌に後方をふさぐ布は無く、ぼつかりと暗い穴を開けている。私は荷台の縁に両手を掛けて地面を蹴り、そのまま硬い荷台……幌の中へと飛び乗ることが出来た。

ほとんど同時にトラックが走り出す。車の流れに割り入るためか、グイッと曲がりながら加速したようで、私はバランスを崩して大きく尻餅しまたについてしまった。右の二の腕あたりを、積んであった何かの機械したたに強かにぶつける。

「痛っ……」

奥歯を噛んで悲鳴を上げるのをこらえた。

鉄板にゴムか何かのシートを敷いただけみたいなゴツゴツと硬い床、手のひらとふらはぎにこすれるザラザラベタベタした……暗くてはつきり見えないけど、たぶん砂とか土が散らばっているような感触。

開口部から入るわずかな光を便りに荷台を見回すと、たくさん三角コーンや看板。それに、さつき私が腕をぶつけてしまった——名前は知らないけど、道路工事とかで使ってるのを見たことがある、アスファルトを平らにする凄く大きな四角いアイロンのような形の機械とかがいくつも置かれてる。

……さつきのシール……工務店の車っていうのは本当なのかもしれないな。

後方を振り向けば、ちょうど京葉線らしきガードをくぐった所だった。街灯や民家の灯りが飛ぶように後ろに流れていく。光に照らされる雨の粒はさつきよりも大きくなってきた。みたい。

狭い道では無いけれど、幹線道路という感じでもない。裏道、というやつかな。帰宅渋滞の時間はすでにピークを過ぎてるからか、車の流れもスムーズで、すれ違う車の数もあまり多くはない。

無我夢中で飛び乗っちゃったは良いけど……これからどうしよう。

車体の鉄板一枚隔てた向こうに捕らわれている泉ちゃんは無事にいるだろうか？

目を凝らしたところで先を見通せるはずも無く、今のところ車内からのものらしい音は聞こえてこない。走行するトラックの風切り音と幌を叩く雨音だけが私の耳に届いてくる。

周りを走っている車に助けを求めるのはどうだろう……。でも、上手くいけばいいけど、泉ちゃんの今の様子も分からないこの状況でそれをやるのは危険すぎる。万が一にもそのせいで彼女を傷つけることになったら……。

車の中でいきなり酷いことはされないだろう、きっと大丈夫、と無理やり思い込んで少し心を落ち着かせた。

ホントのところ……悪手だった、ということとは自分でも分かっているんだ。不安だろうとなんだろうと、まず警察に通報してその場で待つべきだったとも……でも！

泉ちゃんを見捨てるなんて出来ない！ もう二度と出来る訳がない！

そもそも事件に気付けたことだけでも奇跡みたいなもの。せつかく得た泉ちゃんを助けるためのチャンスなんだ。なら、私がやるべきことは？

とにかく誰かに今の状況を伝えて、助けを求めなくちゃ。

私の言葉を悪戯や冗談ではと疑ったりしないので、すぐに最善の手を打ってくれそうな誰かに……。

——八幡の顔が自然と脳裏に浮かんだ。私がこの世で一番信頼してる、彼の顔が。



「八幡っ？ 良かった出てくれた！」

電話は拍子抜けするほど簡単につながった。

『おう、どうした慌てて？ 明日はそっちに——』

「聞いて八幡、泉ちゃんが誘拐されたの。駅から帰る途中に拐われて……」

『……留美？』

彼が息を飲む気配が伝わってくる。

「コミセンの裏の通りの近くでトラックに連れ込まれて……私、追いかけて荷台に乗っちゃって……それで……」

『な、荷台について……じゃあ留美も？ 馬鹿お前何やってんだよ……』

う……本当にその通り。馬鹿なことしてると思う……。

「ごめんなさい……。でも……」

『いや待て、言い方悪かったな。留美は無事なんだな？ 気が付かれて無いんだな？』

その……犯人っつーかには『

彼の声から、混乱と戸惑いが伝わってくる。

「うん、多分……」

『藤沢の方はどうしてる?』

「わかんない。泉ちゃんは前に……トラックだけど四枚ドアがあつてね、その後ろの席に居るはずだけど……」

相変わらず雨がトラックの幌を叩くパラパラという音は結構大きく響いており、トラック室内の様子を伺えるような物音は聞こえない。

もつとも、そうであればこそ、こうして八幡と電話をしたりも出来てるわけだけど。

『そうか、ダブルキャブの……。よし、そこ……荷台か、ずっと隠れてられるか?』

「幌被つてて荷物たくさん積んでるから、奥の方に居れば大丈夫……だと思う」

「なら落ち着いて、お前が見つかからない事を最優先にしてじつとしてろ」

「でも泉ちゃんが……」

『自分が安全な時に分かったこと教えてくれれば良い。いいか、絶対に危ない真似はするなよ』

「でも……。うん……」

焦っている。考えも無しにこんな無茶をしておいて、結局何の役にも立たない自分に……苛立っている。

『まず……そうだな、今どっちに向かつてるか分かるか?』

「最初にガードくぐったから……多分、東か北の方に向かって走っていると思うんだけど……」

宵闇、雨の車道、それも後方に流れていくだけの風景。もう何度か角も曲がったようだし、あまり車を利用することも無い私は、正直この車がどこに向かってるかなんて、確信を持つては言えない。

『とにかくケータイもマナーモードにし——

唐突に八幡の声が途切れた。

あつ、と思つてスマホの画面を見れば通話が切れちゃつてる。こんな時に……。関係あるかはわからないけど、直後に派手な飾りを着けた大型車が視界の向こうへと走り去つて行くのが見えた。

アンテナ——電波レベルが、最低ラインになつたり圏外になつたりと安定しない。移動しながらは繋がりにくい場所なのかな。そういえば、外に見えている明かりが民家のものより工場とかの方が多くなつて、随分とまばらになつてきた気がする。そんな事を考えてながらも、八幡が言いかけただろう言葉にしたがつてスマホを音も振動も無いマナーモードに切り替えた。

充電残量は半分ぐらい。これからどうなるか分からないし……。肝心な時に使えなく

ならないように節約しなきゃ、ね。



しばらく時間が経った。何もしていないと不安で……ダメ元でもう一度八幡に電話してみようか……なんて悩みながら、ついスマホの画面を見てしまう。

雨は徐々に強くなり、幌に当たる音がうるさいくらいだ。

私の今の服装は、ゆったりとしたTシャツに目の細かいレースのキャミを重ね着し、下はキュロットに近い感じのショートパンツ。本格的な夏も近いこの季節とはいえ、夜に屋外にいると流石に少し肌寒く感じてくる。

……一体どこまで行くんだろう。何か特徴のあるものでも見えればそのことを八幡に連絡できるんだけど……そんなことを考えていたら、スツとトラックが止まった！

ガチャツと、ドアの開く振動音が伝わってくる。幌布一枚隔てたすぐそこで男が何か言ってるみたいだけど、雨音とエンジンの音のせいによく聞き取れない。

私の事に気付いた、というわけじゃあ無いとは思う。

ただ、このまま後ろに回って覗かれたら見つかってしまうかもしれない。私は身を縮めて、工事用の荷物の陰、出来るだけ奥に身体を押し込んだ。ガソリンのような……燃

料だがオイルだかの臭いに息が詰まる。

カチャカチャと金属同士がぶつかるような音がして、続いてギギツと何かが軋む音。

そして車が動き出す。ゆっくりと大きく方向を変えたトラックは、ガクンと段差を乗り越えたように揺れ、それから大きく前に傾いた！

うわ、何？ と驚いたけど、急な下り坂を降りるということらしい。坂を少し下ったところで、斜めのままトラックが止まる。

すると……トラックの後ろ、私の視線の先に、おそらくさつき泉ちゃんを拐ったであろう作業服姿の男が立ってる！

彼は、アコーデオンのみみたいな形の扉を閉め、取っ手のところに鎖か何かを巻いているようだ。

そして……その作業を終えた男がこちらに向かって来る。コツコツと大きく響く足音。

音———そういえばさつきまでうるさいくらいだった雨音が今は聞こえない。そうか、建物に入ったから。

ここが目的地ということ？ ずっと遠くまで連れていかれてしまうのかと覚悟してたけど、案外近い場所だ。トラックに飛び乗ってからせいぜい三、四十分、走った時間から考えて間違いなく千葉県内だろう。流石に千葉市内ではないと思うけど、車で移動

することの少ない私はそのあたりの確信が持てない……。

少しでも、この場所のヒントになる情報が無いかと隠れていた機械の陰からちよつとだけ首を出し、なんとか外の様子を眺めようとした。

ふと、男の視線が私に向いたような気がした。

まずい、油断してた。トラックのすぐ後ろ、間近に迫る男。周囲が暗く、表情を窺えないのが余計に怖い。

私は息を止め、限界まで身を縮める。

……男はそのまま私の見える範囲から逸れ、幌の陰に隠れた。

止めていた息をゆっくりと吐く。どうやら見付からずに済んだみたいだ。

ボタンとドアが開閉する音がし、車が今度はゆっくり走り出した。

すぐに坂道は終わつたらしく車体の傾きは元に戻り、それからトラックは大きく左に曲がる。キュキュツとタイヤの鳴る甲高い音がコンクリート壁に反響して大きく響いた。暗い中、時折ブレーキランプが点く度にこの建物の中の様子がポウつと赤く浮かび上がる。

途中白線が何本も引かれていて、おそらくビルの地下駐車場なのだろう。でも、それ

にしては非常灯さえ点いてないし、あちこちに大きな段ボールに入った荷物が置いてあるし、第一他の車が一台も無いし……と、普段使われている気配がない。

そこで私はさっきの男がしていた事を思い出す。

あんな風にわざわざ扉で入り口を塞いでいるということは、ここは工事中か何かで閉鎖されてるビル……とか、そんなのかな。うん、きつとそうだ。あの蛇腹のように開け閉めする扉って、工事現場とかに良くあるやつだし。……リフォーム？ 解体？ こういうの詳しいわけじゃないけど、新築にしては薄汚れた感じがする。

トラックはそのまま片仮名のコの字を描くように進み、奥へと入り込んだところで停まった。エンジンの振動が止まり、一瞬の静寂。

ドアが開く音が大きく響き、それからコツンコツンとトンネルの中みたいに反響する足音が聞こえてくる。

「そっちの白いボックスです。ブレーカー2つとも上げちゃってください」

すぐ近くから急にはつきりと声が聞こえて驚いた。反射的に体がぎゅつと強ばる。

「こいつか。これ入れても外のライト点いちまったりしないのか？」

今度は少し離れたところからの声。声を聞いた限りでは、この人のほうが年齢が上に感じる。

「それはここだけのやつです。上のは赤いほうのボックスなんで大丈夫ですよ」

「よし……」

パチンパチンと音がする。ワントンポ遅れて周りがぼんやりと明るくなった。

「じゃ、車のライト消しますね。………ほら、降りるぞ」

「あ、待って。見えなくて怖い……です」

泉ちゃんの声が聞こえる！ 良かった……無事でいるんだ！

「チツ。……社長、目隠し、もう良いつすよね？」

「……そうだな」

車体が少しだけ揺れ、ボタンとドアが閉じる。車から離れていく足音。

私は荷台の床を這うように移動して、幌の陰ギリギリから外の様子を覗いてみた。

見えるのは、今まで聞こえてきた声の主であろう誘拐犯の姿。金髪に銀縁の眼鏡を掛けた、二十代半ばに見えるやや小太りの男と、焦茶の短めの髪、眼鏡の男よりは年上に見える中肉中背の男の二人だ。

男たちが明かりをつけたのは、工事用の休憩所みたいな場所らしい。

細長い机が2つ、パイプ椅子がいくつか。その奥の壁にはパネルボードが取り付けられていて、「本日もゼロ災害でいこう」「重機巡回内立入禁止」などののぼり旗がくくりつけられている。

——そして、泉ちゃん。

泉ちゃんがパイプ椅子に座らされているところが見えた。膝の上に乗せられた両腕はテープのようなもので縛られていて、おでこのところにアイマスクのようなもの。

ぱつと見た感じ大きな怪我は無いみたいだけど、少し顔色が悪いようには見える。

あとは……他に人影は見えないし、少なくともここにいる「誘拐犯」は二人だけのようだ。

私の隠れてる車から泉ちゃんたちとの距離は10メートルちよつと位だろうか。この距離で見つからないでいられるのは、こつちが暗くて向こうが明るいのと……何より彼らが、このトラックに誰かが隠れて乗ってるなんて塵ほどにも考えていないからだろう。

泉ちゃんの無事が確認出来た今、私がやらなきゃいけないのは、隙を見て誰か——出来れば八幡に、警察に、今の状況を伝えること。

ただ、周囲が静かだから電話は気が付かれてしまう可能性が高い。せめてなんとかメール出来れば良いんだけど……。



あれから一時間ほどが過ぎてるけど……今、事態は完全に膠着状態に陥っていた。

まず犯人たちの方だけど、いわゆる身代金の要求——現金じゃなくて、ネットで何かを買わせようとしてるみたい——をしようとした泉ちゃんのお母さんと連絡が取れないらしい。

若い方の男が、

「今日は家にいるはずじゃないのか？」

と問えば、泉ちゃんは

「急に予定の入った伯父さんの代わりにニューヨークの美術館に出張になって、今は飛行機に乗ってる」

みたいな事を答えた。

「でも、娘のケータイからなら出るんじゃないか？」

そう言つて年配の方の男が、泉ちゃんから取り上げてあつたらしい彼女のスマホを取り出す。

「ん……？　これ圏外になつてるぞ」

そう、私の方の問題はこれ。誰かに今の状況を伝えようにも、そもそもスマホが圏外

で使えないのだ。

「マジですか？ こっちのプリペイドは弱いけど普通に入ってますけど……キャリアが違
うせいですかね？」

「もつと入り口寄りなら……」

そう言いながら男は、泉ちゃんのスマホを片手に、さつき車が入って来た方向へと歩
き出す。二十メートルほど進んだ所で……

「おお、ここならアンテナ立つぞ」

そう言つて彼は電話をかけた……けど、

「駄目だ。留守電になっちゃまうな」

男が首を振つてそう言う。

でも……私もあの辺りまで行ければスマホ使えるかもしれないのか。だからとい
つて今飛び出せばあつという間に捕まってしまうだろう。犯人たちが油断するのを待つ
しか無い。

「しかし、参ったつすねー」

眼鏡の若い男のほうがぼやく。

「じゃあ……メールでやるか？ 飛行機の中でもメールぐらい見るだろ」

「それだと、娘の声を聞かせて信用させるつてのが出来ませんね……ただの悪戯だと思われるかもしれませんし」

「今の……縛られてる写メ添付するとか……」

「うーん、計画の『保護したからそのお礼をしてもらおう』つて建前が無くなりますから、逆に即通報つてことも……。んでも、そこまでやるならいつその事こいつの指の二、三本折つちまうつてのはどうです?」

「おい、人質に怪我させると、警察に通報させずに素早く少額をつてのが無理になるんじゃないか?」

とんでもない事を言い出す若い男に、難色を示すやや年配の男。

「手の指ならそのへんで転んだつて後で言い訳させられますし、何よりとつと金払わないと娘がずつと痛い思いし続けるぞつて脅しにもなりますよ」

「しかしな……」

「社長大丈夫つすよ、手の指くらいで死んだりしませんて。……一時間ごとに一本折るぞ、みたいな脅しかければ、すぐにでもこつちの言うこと聞こうつて、なつてくれるんじゃないすかね」

若い方の男がそう言つてがしりと縛られている泉ちゃんの腕を掴む。

「や……止めてください。わたし……」

彼女の目の前で交わされる物騒な相談。今まで犯人たちには大人しく従ってきた様子の子の泉ちゃんもさすがにこれには涙声で抵抗する。

「いやー、お宅のママさんが電話出てくれないのがいけないんだよー。だから、ちよーつと痛いかもしれないけど我慢してねー」

男は片手でスマホを構え、もう一方の手で泉ちゃんの指を掴もうとするが、泉ちゃんも嫌がって、テープで縛られたままの両腕を振り、椅子から滑り落ちて逃げようとする。「くっ……。やっぱり一人じゃ無理か……。社長、すいませんこっち、撮影頼んます」男はそう言ってもう一人の方を持っているスマホを渡すと、泉ちゃんの手を両手ガツチリと捕まえた。

撮影役を押し付けられた形になった男は、渋い顔をして戸惑った様子は見せたけど、この蛮行を止めようとはせず、半ば諦めたような顔で二人に向かってスマートホンを構える。

「お願いです、手は……。痛い、離してっ」

どうしよう、このままじゃ泉ちゃんが……。

さつきまでは「しばらく様子を見て、隙があればこっそり出口の方に移動して電話を……」なんて考えてたけど、そんな状況じゃなくなってしまった。

手に、指に大怪我をする——誰だつてそんなの嫌に決まつてるし大変なことだけど、泉ちゃんにとつてはそれ以上に特別な意味を持つ。

——画家になりたい。

将来の目標を真つ直ぐな目をして語つていた泉ちゃん。私と同じ年でありながら、自らの未来へ向けてのビジョンをしつかりと持つていて、ついこの間も、志望高校・志望大学・そこで師事したい先生のことまで熱っぽく語つていた泉ちゃん。

多くの人に期待もされている彼女。夢への第一歩として、展覧会へ出品するための絵の制作を、手首に湿布を貼つてまで頑張つている泉ちゃん。

絵はどれ位進んでいるんだろう……。彼女が参加する予定の二科展、作品の持ち込み期限は8月の半ば過ぎだったはず。

泉ちゃん自身、少し迷つてる感じもあつて、夏休みあまり遊べないかも、なんても言つてた。

自分の将来のことなんか漠然としか考えられず、迷つて悩んでばかりの私にとつて、彼女の、自身の夢にどこまでもひたむきに向き合う姿はただただ眩しくて、憧れにも似た姿で……。

だから……だからこんなことで泉ちゃんが怪我するなんて、悪意によつて大怪我させられるなんて——そんなことがあつていいはずがない。

金髪の方の男が泉ちゃんの右手の指を両手で掴み、力を込めようとしてる……。

「ダメっ！」

私はそう叫んでトラックの荷台から飛び降りた。

啞然とした顔でこちらを振り向く、泉ちゃんと犯人の男二人。……無理もない。——
トラックの荷台に誰かが隠れてる——なんて、全く想像してなかっただろうから。

「泉ちゃん待ってて、すぐに助け呼んでくるからっ！」

と、この場の全員に聞こえるように言いながら出口へと向かって走り出した。

当然、「助けを呼ぶ」と言つて出口に向かおうとする私を放つておいてまで泉ちゃんに危害を加え続けるはずもない。男二人は私を捕まえようと躍起になって、道を塞ぐように追いつかり、立ちほだかる。

私は何度かは彼らを躲したものの、結局出口にたどり着く手前で、金髪の男のタックルを受けて捕まってしまった。

「はあ、はあ……。お前……。一体どこから……。？」

「……とにかくあつちに、明るい方に連れてくぞ」

私は犯人二人に両脇から抑え込まれたまま泉ちゃんの近くの椅子に座らされると、彼

女と同じようにテープで両腕を縛られ、リュックの中に入ってたスマホは取り上げられてしまった。

「留美ちゃん！」

「…………お前の知り合いか？」

「……………」

答えるのをためらう様子を見せた泉ちゃんを男たちが睨みつけた。

「これは…………逆らっても、あまり意味ないかな。そう考えて私から答えることにする。」

「中学校の友達…………です」

「そうか…………しかし、これからどうするか…………」

「ホント、予定通りに行かないっすね…………けど…………」

ねっとりとした視線を感じ、ゾワリと全身の毛が逆立つ。ぼやいた若い男が、私を、頭から爪先まで嘗め回すように見ている…………？

「きやつ!？」

いきなり太ももを触られた。

「へへっ、すべすべだねえ」

私が躰を引いて逃げようとしても、全く意に介さず、無遠慮になで回し続ける。

「ちよ…………やめてっ」

全身が泡立つような感覚。私は服の上から胸までまさぐられる。思わず立ち上がった逃げようとしたところを、逆に押し倒すように組伏せられてしまった。

「痛っ、離してっ」

さつきぶつけた右腕をがしつと強く掴まれ、小さく悲鳴が漏れる。

「留美ちゃんっ」

心配そうな泉ちゃんの声。なおも暴れようとする私に、

「お前……大人しくしないとお友達が酷い目に遇うかもな？」

そう言つて、自分の指を持つて折り曲げるような素振りをしてもう一人の男に目でサインを送る。

くー、「騒げば泉ちゃんの指を折る」と言ってるんだ……。

私は……悔しいけど抵抗を止める。

男はメガネの奥でニマツと笑い、また私の太ももをまさぐり出した。しかも今度は内腿にまで無遠慮に触れてくる。

「おいおい、まだガキじゃねーか」

茶髪の男が、若い男をたしなめるように言うと、

「イヤ、でもこの娘すげえ美人ですよ？ それに……ここまで見られちゃったら、俺らの事誰にも言えなくなるよーに、キツく口封じしとかないと……ねえ社長」

声音に含まれる下卑た期待。

「それはそうだが……………仕方ねえ、か……………」

社長と呼ばれてる方の男が、苦虫を噛み潰したような顔で、

「好きにしろ」

と言うと、若い男は待つてましたとばかりに、私にのしかかるようにして抱きついてきた。

さつき雨に濡れたからか、少し湿った作業服のごつごつした感触、湿気と汗の混った、蒸れた臭い……………。

いきなり左の鎖骨の辺りに顔を押し付けられ、匂いを嗅がれてしまった。

「ぶはくつ、甘くて良い匂いつ」

男の目が血走り、興奮してるのがわかる。逃げ出したいけど……………一瞬泉ちゃんの方を見て、私は唇を噛んだ。

悔しい……………感情が抑えられず涙が滲む。

「ひび、涙目もかわいいな」

そんな事を言いながら、太ももやお腹の辺りに腰を擦りつけて息を荒くする男。

ズボン越しに感じるゴリゴリした硬い感触は……………多分男性器だろう。私にだってそれくらい知識はある。

つまりは——私を性の対象として興奮してるんだ……。そんな事実を突きつけられて、沸き上がってくるのは猛烈な嫌悪感。吐き気と恐怖。

じつとしていられず、少しでも逃げようともがく。地べたに押さえつけられたままでもなんとか地を蹴ろうとするけど、膝に力が入らない。必死に突っ張ろうとする足はバタバタとむなしくコンクリートの床を叩くだけで、男の体に割り込まれたままの脚を閉じる事さえ出来ない。

「暴れんなって、このっ」

私にのし掛かっていた男はさらに体重をかけるようにして私に覆いかぶさり、私の乳房を服の上からぎゅつと鷲掴みにしてきた。

「痛ッ……」

針で刺されたような鋭い痛みが胸元から頭頂に抜け、我慢していた声が漏れる。

今ので少し体勢がずれたのか、男が擦り付けてくる硬いものが、私の大切な部分を数枚の薄い布越しにグリツと擦りあげた。

「っ……」

一瞬だけの事。だけどそれが今まで考えないようにしていた「この先に私の身を襲うかもしれない最悪の事態」をいやが上にも想い起こさせる。

嫌だ……私……こんなやつに……。

怖い。嫌だよこんなの。……助けて、誰か助けて。八幡………。

心臓を押し潰されそうな絶望。上げそうになった悲鳴だけは嘯み殺したけど、溢れる涙は止められない。

目尻から耳元に伝う涙をべろべろと舐め取られた。

「うひゃあ、しょっぱい！かわいい！」

汚されていく。躰が、心が。

「ささ、お洋服脱ぎ脱ぎしようね。つと、そうだ、『口封じ』なんだから写真撮らないとね」

妙にテンション上がって楽しそうな男は、私を組み敷いたままズボンのポケットからスマホを取り出した。

フラッシュが光りカシャツというシャッター音が響く。

「泣き顔ゲット。それじゃ……」

スマホを一度脇に置いた男は、左手で縛られた私の両手を押さえつけ、右手で私のTシャツの裾を捲りあげた。

ついに素肌と下着が男の目にさらされてしまう。

「ひゅーっ、可愛いブラ付けてるねー」

「嫌っ。やめて、見ないでっ」

男は私の訴えなんか知らん顔でまたスマホを構える。

どうして楽しそうにこんな酷いこと出来るの？……私……やめ……撮らないでっ。

必死で身を振って男の目を避けようとしたけど、腕をガツチリ抑えられて思うように
いかない。

またフラッシュが光る。

「暴れたらきれいに撮れねーだろ……。まあいい、次は……ひひっ」

男が舌舐めずりをして私の下着に手を伸ばしてくる。私……もう……。

私はただぎゅっとな身を縮めて目を閉じることしか出来ない。

不意に。

押さえ込まれていた体が急に軽くなり、私は何事かと思わず目を開いた。

「ぐえっ」

男は私に向かって手を伸ばした体勢のまままで引き剥がされ、放り捨てるように転がされた。シャツの襟首を強く掴まれたらしく、首元をおさえてゲホゲホと咳き込んでい

る。

そして——目の前には八幡がいる！

何故？ 助けに来てくれたに決まってる。

どうやって？……そんなのどうでも良い。

八幡が……私のところに来てくれたんだ。

相手の反撃に備えてか、険しい目で男を睨みつけながら彼は私に駆け寄って腰を落とし、心配そうな顔を向けてくる。

「留美っ……」

「は……ちまん……」

上着をはだけられ、泣いている私と目が合った八幡。その瞬間、元々厳しかった彼の表情が一段階けんのん剣呑さを増したものに変わった。

彼は素早く私のシャツの裾を戻して男の方に向き直った。

「ケホッ……なんだおま……ひいつ」

まだむせながらも立ち上がるうとしていた男が、八幡の顔をみて息を飲む。その瞬間、八幡は男の脇腹に容赦ない蹴りの一撃を放った。重い物を床に落としたときのような鈍い音がした。男はもんどり打って床に倒れ、外れた眼鏡が床に転がる。男が悶絶し

てるところを、八幡はさらに今蹴った同じところを踵で踏みつけるように蹴り飛ばした。

「が……ハッ」

男は変な息を吐いてそのまま動かなくなる。どうやら気を失ったみたいだ。

「お前、よくもー」

仲間を倒され、社長と呼ばれていた方の男の方が激昂して、懐から出したナイフを構えて向かって来る。

けれど、八幡が私を庇うように立つと、彼の顔を見て怯んだように立ち止まった。

するとどこからかパトカーのサイレンの音が聞こえてきた。動揺する男。

「……全く、すぐに警察が到着するからタイミングを待とうと自分で言っていたのに……。……でもまあ、今のは仕方ないかしらね。それにしても、最後のは流石にやり過ぎじゃないかしら」

急に近くから聞こえてきた声に振り向くと、いつの間にか泉ちゃんの傍らには、パンスーツ姿で髪をアップにまとめ、細いフレームの黒縁眼鏡をかけた女性が立ち、男をじっと睨みつけている。

……でも、この声もしかして……雪乃さん？ やっぱりそうだ！ なんて？

二人に挟まれる形になった男は、何かを迷うように動きを止める。彼はどんどん大きくなるサイレンの音に顔をしかめて、

「畜生、何で俺はいつもいつも……」

なんてブツブツ言いながらナイフを持つ手を雪乃さんの方へ向けると、

「動くなよ。大人しくしてくれれば怪我をさせるつもりは無いから」

そう言つて八幡の方を警戒しながら彼女たちの方へジリジリと近づいて行く。多分二人を見比べて、雪乃さんのほうが与し易しと考えたんだろう。

雪乃さんは動揺する様子もなくただ無表情。目だけが男の動きを追っている。

……あ、今ちらつとこっちを見た？

そう思つた時には八幡の手から何かが放たれていた。男の足元で「ガチャーン」と派手な音が響く。鉄パイプを繋ぐための金具……だろうか。

「うっ！」

男の気がそちらに逸れた瞬間、雪乃さんが滑るように前へ踏み込む。

彼女がナイフを持った男の手首を掴んだ——そう思つた瞬間、男はくるりと一回転して背中からコンクリートの床に叩きつけられていた。

苦悶の表情を浮かべてナイフを取り落とす男。

雪乃さんは素早くそのナイフを拾い上げ、駐車場の一番奥の方へと放り投げた。

キーンと硬質な音が響く。

その直後、入口の方で強い明かりがいくつも光り、大勢の人がこちらに向かってくるのが見えた。

「警察だ！ もう逃げられないぞ。直ちに武器を捨てて……」
床に倒れ伏す犯人二人。既に解放されている人質……。
お巡りさんたちは拍子抜けしたようにお互い顔を見合わせていた。



「留美、大丈夫か？」

「は……ちまん……」

目の前に八幡がいる。いてくれる。

私はもうそれだけで涙が溢れてきて……ほんとに怖かったから、安心して、頭がぐちゃぐちゃで……

「バカ野郎、動かないで待つてろつて言つただろ。なんで無茶したんだ！」

八幡が膝をついて、私の手首に巻かれていたテープを剥がしてくれる。

「ごめんなさい……。でも、あいつ、泉ちゃんの指を折るつて……。泉ちゃんの……。そんなの——そんなの絶対だめ……。でも、私しかいなくて、だつたら私がやらなきゃつて、なんとかしなきゃつて……」

また逃げたらきつと後悔すると思つちやつたんだもん……。

彼は何か言いかけて……。首を左右に小さく振ると、スツと立ち上がり「はあー」つと一つ息をついた。

「立てるか？ 留美」

彼はそう言つて手を差し出してくれる。

「八幡……」

目の前わずか数十センチのところにある彼の大きな手。

けれど、その手を取る事に私の心は疎んでしまう。だつて今、見られてたんだものが惨めに黽なぶられているところ。

今すぐに八幡に抱きつきたい……。けれど、私は自分が酷く汚れているように感じていて……。だつて、あんなやつに、私——

私は、犯人の一人……。あの金髪で眼鏡の男に、無遠慮に、乱暴に躰を触れられた。あ

と少しで女の子として大切なものまで奪われかねなかった。

八幡たちのおかげでそうならずには済んだけど、私の身に汚れた何かけがが擦り付けられまわりついてるような不快さが、心を汚されてしまったような後ろめたさが、さつきからずっと消えずに残ってる。

私が本当に怖いのは……多分、八幡に嫌悪されてしまうこと。わたしのことを汚いものを見るような目で見られること。

勿論八幡はそんな事考えるような人じゃ無いつて分かってる。でも、頭で考えるのと生理的な嫌悪感嫌悪感は別だ。

私に触れることをたとえ不快に感じていたとしても、八幡はきつと優しくしてくれ。——内心では嫌な思いをしながらでも。

想像しただけで目の前が暗くなる。そんなの……嫌、絶対に嫌だ。

目の前に八幡がいるのに手を伸ばせない。だって、触れたらきつと解ってしまう——本当は今の私には触れたくないんじゃないかって。

強張こわばって握りしめてしまった指先が小刻みに震え、その爪が手のひらに食い込む。

すると彼は、逡巡したまま動けずにいた私の両手を強引に掴んで引つ張り起こし、そのままぎゅうつと抱きしめてくれた。

「あ……八幡……？」

「大丈夫、もう大丈夫だから」

そう言つて八幡は、左腕は私の背中を強く抱いたまま、右手で優しく労るように私の頭をなでてくれた。

いつの間にか指先の力が抜けて、手の震えも止まつてる。私はそつと八幡の背に両手を回した。そこで初めて彼も小さく震えていたことに気がついた。

八幡がどんなに私のことを心配してくれたか、今どれほど安心したか……八幡がどれだけ私のことを大切に思つてくれるかが、私を包むように抱いてくれる彼の全身から伝わってくる。

不安を感じていたことが申し訳ないと思えるほどに、八幡は、私への嫌悪なんか欠片さえ感じないでいてくれる。そう確信できるくらいに、彼の腕の中は安心できたんだ。

なら、もう大丈夫。他の誰かに何を思われようと、八幡が今まで通り私に接してくれるなら、私の心は「それで良いや」と思えてしまったから。

だから私も両腕に力を込め、ぎゅうううつと強く彼を抱きしめる。

もう安心なのに……ううん、安心したから、かな。体に力を込めたら、まるで自分で自分を絞つたみたいになんか涙がじわじわと溢れてくる。

「でも、ね。はち……八幡……つく、こわ、怖かったの……。う、ううううううう……」

「ん……ごめんな、遅くなっちゃった」

「そんなの……は、……う……うう……」

もう……こんな時まで謝らないですよ……

あーあ、涙と鼻水で私の顔は相当みつともない事になってるはず。想い人に見せたいような顔じゃないけど……離れたくもない。

「あ……」

八幡の腕の力が緩み、回されていた手が私の背を離れる。

お願い、もうちよつとだけ……。

もう少し抱きしめてほしい私は、八幡の背中に回したままの両手で彼のシャツを逃がすものかとばかりにぎゅつと掴み、彼の胸に頬をぐりぐりと擦り付けて目を閉じた。

「おう……」

八幡は、しょうがないなあという感じでもう一度腕に力を込めてくれ、私の背中を優しくぽんぽんと叩いてくれる。ふふ、温かくて、不思議と安心する彼の匂い。耳に心地よく響く少し速い心臓の音。

ふと目を開くと、八幡の腕越しに雪乃さんと目が合ってしまった。

うわあ、状況が状況とはいえ、八幡にこんな風に甘えている姿を見られるというのは正直ばつが悪いなあ。

けれど、雪乃さんは私に向かって苦笑しながら頷いてくれる。彼女の目が、「今日は仕方ないわね」とでも言ってるみたいに感じた。

お許しが出たから、という訳でも無いけど……私は彼の隣にピッタリくっついたまま、疑問に思っていたことを八幡に尋ねてみる。

「ね……八幡。どうして私たちが居るのここだって分かったの？」

「さっき留美と話したあと、前に使った……いまココアプリだっけ？ あれの事思い出して、それを追いかけて来た」

いまココアプリ……そういえばそんなことあったなあ。まさか自分が本来の用途でこのアプリのお世話になるなんて想像もしてなかった。

「ただあれって、お前の方でも地図アプリとか起動するか、設定で調整するかしないと、5分に1回しかGPSサーチしないようになってるらしい。……まあ、そうじゃないとすぐにバッテリー切れちゃうからだろうな」

そうか、常に測定・発信してるわけじゃあ無いんだね。

「位置検索したら最後の履歴がこの少し先の交差点あたりでな。そのあとの新しい

位置情報^デが更新されないから、電波が繋がらないのか、電池切れか、犯人に捕まってスマホ取り上げられたんじゃないか、とか色々考えて……とにかくその場所の近くまで来てみることにした。もちろん警察には今までの状況を伝えた上でな」

それで警察よりも早かったのか。

「で、ついさつき位置情報がここに更新されて……まあそんな感じだ」

◇ ◇ ◇

スーツ姿の警察の人——刑事さんかな？ に引き起こされ、諦めが良いのか大人しく連行されていく二人の男たち。

すると雪乃さんが、制服の警察官に止められながらも、彼らに何か声をかけていた。年上のほうの男が一瞬だけ私たちを見て、何かを諦めたように左右に小さく首を振る。

雪乃さんが一歩引いて道を譲ると、今度こそ彼らは出口へと連れられて行った。

そして、

「留美ちゃん……ごめんなさいっ。わたしのせいで、こんな……」

泉ちゃんが涙目で私に抱きついてくる。

「泉ちゃん！ 違うの、私が勝手に無茶しただけで……」

「ま、確かに無茶だったな。でも無事だった。……藤沢もよく我慢したな」

八幡は、二人の頭を両手で抱き寄せるみたいに撫でてくれた。すると泉ちゃんが感極まったようにまた声を上げて泣き出してしまふ……。

「八幡……また女の子泣かせてる……」

「え、俺っ？ またつてなんだよ、人間きの悪い……」

もう……またはまただよ。その、頭撫でてくれるのつて、すごい破壊力あるんだから……もうっ！

地上に出ると、もう雨は上がっていた。私たちが囚われていた建物は二階建てのそれなりに大きなもので、改装途中の商業ビル、みたいに見えた。周りには沢山のパトカー・赤色灯を点滅させたまま停まっている。十台くらい居るだろうか。

今、私と泉ちゃんは、警察の人たちから「怪我はないか、気分は悪くないか」みたいなことを聞かれ、それから住所・氏名・年齢なんかの確認をされてるところ。

そこから少しだけ離れたところに回転灯の付いていない黒い高級そうな車が停まっていた。いわゆる覆面パトカーなのかなとも思ったけど、そういうわけでも無いようだ。

八幡と雪乃さんがそのすぐ横に立ち、後部座席の誰かと話をしていた。誰だろう。しばらくして、八幡がその誰かに深々と頭を下げると、車は軽くクラクションを鳴らしてゆつくりと走り去っていった。

ようやく安心できる世界に帰って来れた。ほつとして見上げた空はさすがに真つ暗で……。それでも、スマホで時間を確認すれば、あれから——泉ちゃんが拐われたあの時から——まだ三時間も経っていない。

そんな僅かな時間だったとは思えないほど、何かもう酷く心が疲れていて、何もかもがただただ面倒くさい。

はあ、早くお風呂呂に入って寝たいなあ。でも、八幡と離れるのは嫌だなあ。そんなことをぼーつとした頭で考えていた。

*
*
*
*
*

それからの事。

解決が早かったとはいえ「誘拐事件」だ。さすがに私たちもすぐに解放というわけにはいかず、私と泉ちゃん、それから八幡と雪乃さんもパトカーに乗せられ、病院へと連れて行かれた。

あらためて怪我や体調不良がないかを確認するということらしい。

私も泉ちゃんも、縛られた腕が赤くなつてはいたものの大したことはなく、怪我らしい怪我は私がトラツクの荷台で転んだときの腕の打ち身くらいだった。

「経皮鎮痛消炎剤」とかいふ難しい名前の、伸びる肌色の布テープみたいなのを貼られ、今日のお風呂はシャワーだけにしたほうがいいでしょう、とお医者さんに言われてしまう。

ゆつくり湯船に浸かる事を楽しみにしていた私にとっては地味にショックな指示だなあ。

そんな事を考えて、ふと我に返る。

あんな目にあつたばかりなのに随分と余裕。私はおかしくなってるのかな？

多分、あの時八幡が抱きしめてくれたからだ。

大丈夫だつて言ってくれたから——隣にいて良いって全身で伝えてくれたから、私は私に安心していられるんだ。

そのあと病院の応接室のようなところで、警察の人に簡単な事情を聞かれていると、お母さんがやってきて、飛びつくように抱きしめられた。目を赤くしているお母さんに、心配掛けてごめんなさいと謝る。

それからすぐ、泉ちゃんの伯父さんと藤沢さん（泉ちゃんの従姉。クリスマスイベントの時の書記さん、今は副会長さんらしい）が到着する。

ようやく泉ちゃんのお母さんとも連絡がついたようで、電話で話す泉ちゃんの目からはさつきやつと止まった涙が溢れていた。

もうだいたい遅い時間であり、またそれぞれの保護者も到着したことから、「明日改めて詳しい事情を伺わせてください」ということ、

私たちは一旦警察の事情聴取からは開放された。

「本当に……本当にありがとう、比企谷君、雪ノ下さん」

今まで待つてくれていた八幡たちに、お母さんと並んで改めて頭を下げる。

「いえ、とにかく留美たちに大きな怪我がなくて良かったです。……それに今回みんな無事だったのは雪ノ下の親父さんのおかげですから」

「雪ノ下さんのお父様？」

「はい。俺をすぐに車で拾ってくれて、途中までしか分からないのにアプリの……留美のいる場所探すのに付き合ってくれたんだよ」

「そうだったんですか……」

「それに、警察がこんなに速く動いてくれたのも雪ノ下さんが移動中に電話一本入れてくれたからだ」

「ちよつと比企谷くん、そういう話は……」

「?……」

「まああれだ、千葉県警ってな、言葉通り千葉県の警察なんだよ」

「うん？」

それはそうだろうけど……。

「つまり県警にとって、有力な県会議員の一言^{ひとこと}つてのは、へたすりや国会議員や大臣に何

か言われる事より重いつてこと。予算やら人事やらにも意見できる立場だからな」

そういうことか。雪乃さんのお父さんは、地元では有名な建設会社の社長さんで、県議会でも重要なポストにいる、地元政財界の名士だ。八幡に説明されれば納得の行く話ではある。

「雪ノ下さん、お父様にもお礼を……本当に感謝していますとお伝え下さいね」

「県民を守るために何かをするというのはごく当たり前の……いえ、では父にはそのように伝えておきます」

「はい、よろしくお願ひします」

もう一度頭を下げる私たちに対し、実に姿勢の綺麗な礼を返す雪乃さん。

……眼鏡は伊達メガネらしいけど、スーツ姿の雪乃さんつて……本当にかっこいいなあ……。

警察の方からは、「パトカーでお送りしますよ」と言われたけど、それは母が固辞して、その日はタクシーで家に帰った。

翌日は警察署で改めて事情説明。お母さんが休みを取って一緒に来てくれた。

私より先に着いていた泉ちゃんと並んで座り、お母さんと同じくらい年齢に見える優しそうな女性警察官さんに最初から一通り話をする事になった。

トラックに飛び乗った時の話をしたら、私は彼女から「もう無茶なことはしないように」とお説教をされてしまった。

通報してもなかなか捜査しない、というのはドラマとかに出てくる悪い警察で、本当の警察は、通報があれば、たとえイタズラの可能性があつても、義務として必ず出勤して確認しなければならぬことになっているんだとか。だから、何かあつたらすぐに110番してください、と。

その場ではもちろん、はい、すいませんでしたと素直に謝っておいたけど……あれだけの数の警察官がすぐに動いてくれたのは雪乃さんたちのおかげであることも間違いないと思っている。

* * * * *

「誘拐事件『超』スピード解決」

千葉県警によると、6月〇日午後7時頃、千葉市美浜区の路上で、近所に住む中学生児童（13）が車で連れ去られるという事件が発生した。しかし、目撃者らの通報などにより、およそ2時間半後、同県Y市内にある建築途中のビルの駐車場で児童を無事保護。現場にいた二人組の男が未成年者略取・拉致監禁などの容疑で現行犯逮捕された。児童に怪我はなかった。

男らは調べに対し、身代金目的で児童を拉致したものの児童の保護者に連絡がつかず、脅迫電話もかけられないうちに捕まってしまったなどと話しているという。

事件は翌々日、日曜日の新聞——地方紙の社会面に、こんなふうの中くらいの記事として載った。

記事に被害者の名前が無かったことにホツとする。

ローカルテレビのニュースでも取り上げられてはいたらしいけど、あまり大きな話題にはならなかったようだ。

八幡によれば、

「発覚した時にはもう犯人も捕まり人質も無事解放されてる。『スピード解決』というのと位しかニューズ的な価値はなかったんだろ。あとは……もしかしたらだが、雪ノ下の親父さんが気を使ってくれたのかもしれない」とのこと。



そしてまた日常。発売されたばかりの雑誌「*Girlly Style*」をパラパラとめくりながら、その中に登場している自分を、まるで自分自身ではないような不思議な感覚で見ている自分がいる。

八幡にそんなこと言ったら「お前は哲学者か？」なんて言われちゃいそうだけど……。今回は八幡や雪乃さんに助けられたけど、平穩な日常は当たり前前にあるものじゃ無いつて嫌でも解らされた。

友達を守ることは出来た。でも決して正しいやり方じゃあなかつたし、色々と運が良かっただけだろう。

そう、一歩間違えていたら、私は……。

たまたま運が良かったから、私は八幡とドレスで踊ってる写真をうっとり眺めてい

られる。あの時一つ歯車が狂っていたら、私はこの写真を泣いて破り捨てていたかもしれない。

あるいは……見ることさえ叶わなかった可能性さえある。

日常——今の自分の周りのささやかな世界を守るだけのことさえ決して簡単ではなく、守り続けるだけの樂園には未来は無いという。

それなら、未来のために今を壊すのが正しいのか、そう問われたとしても簡単に頷ける訳もない。

……私が守るべきなのは……今、それとも未来？

守るべき？ 今か未来かの二択？

ううん、きつとそうじゃない。

「守りたい」という想いが大切なんだ。未来は、何かを願ったからといってそのとおりになるものじゃあない。守りたいと思うだけで確実に何かを守れるほど世界は優しくない。

それでも。

私が守りたいのは、守りたいと願うものは——。

幕間 彼の隣

「雪ノ下？」

昼下がり、東京から千葉へと向かう電車の中。ラッシュ時には凄まじい混雑を見せるこの路線もさすがにこの時間は車内に余裕があり、乗客の半分以上は座れる程度の混み具合。

ドアのすぐ横の席に座ってうつらうつらしていた私の意識は、その声によって急速に覚醒した。今さら聞き間違える事など無い、ちよつぷりおどおどした、けれど低く柔らかい声。

「比企谷くん」

「もしかしたらと思ったがやつぱりお前か。珍しいな、そんな風にぼーつとしてるなんて」

目の前に立つ彼は、からかうという風でもなく、素直に感心しているというような言い方をし、珍しいものでも見るように私の姿を眺める。

彼の視線をたどり、自分の手元に目を向ける。

膝に乗せたバッグの上、つい先程まで読んでいたはずの文庫本はいつの間にかページ

が閉じてしまっていて、それでも葉代わりに左手の人差し指を挟んでいるのは、私の睡魔に対する無意識の抵抗だったろうか。

ページを繰る役目を放免されてだらんとしている右手は我が手ながら所在無げに見えた。

「私だつてうとうとする事くらいあるわよ」

居眠りしかけていたのを見られた事より、読みかけていたその本が有名な恋愛小説であつたことに何故か若干の気恥ずかしさを感じて本を押さえる手に力が入る。……冷静に考えればブックカバーをかけられた本の内容など彼がいちいち気にするはずもないか。

「まあ、この時期何もなくても眠くなるつてのはあるな」

「この時期つて……貴方は一年中眠たそうな目をしているように見えるけど……」

「おう。眠たそうなだけじゃなく實際常に眠い。なんなら一年中どころか一生だからだと食つちや寝生活したいまである」

「あら、そんなに寝てばかりいたいなら、いつそ永眠でもしてみてはどうかしら？」

「いいアイディアを思いつきました、みたいな言い方でさらっと人を亡きものにしようとするな」

私がかすりと笑うと、

「まあ、お前も……昔みたいは無理しすぎるなよ」

比企谷くんは苦笑いしながらそう言って、体の正面にたすき掛けしていたデイパツクのファスナーを開けると、書店名入りの紙カバーのかけられた一冊の文庫本を取り出した。

右手でつり革に掴まったまま、器用に左手だけで本のページを繰り始める。

私もそれに倣うように、閉じていた本を再び開いた。

けれど駄目だ……本に集中出来ず内容がさっぱり頭に入って来ない。元々ぼーっとしていた訳だし、それに彼に今言われた言葉が引つかかっているのかもしれない。

無理し過ぎるな、か。一応、彼なりに私の身を気遣ってくれているという事なのだろう。

……確かに、最近の私の生活は充実してはいるけれど、少々オーバーワーク気味、かしらね。

最近大分改善されてきたとはいえ、体力……持久力には自信がないのは相変わらずだ。将来政治に携わるつもりなら今後の大きな課題になるだろう。

父をはじめとする精力的に活動する議員先生方を観察するに、やはりそのバイタリティーが活動の根幹になっているのは明らかだ。

どれほど立派な理念やら政策やらを持つていても、結局は実績を示し、足を使って顔

を売って、市民の賛同を得なければ——もつと言えば選挙で当選しなければ——理念の実現などあったものではない。

だからといって、条例作成のための地道な研究などよりも票集め活動が最優先になっている議員だらけという我が国のこの状況は本末転倒ではとも思うのだけど……。

自分は将来こうはなるまいとは思ふ。けれど……票集め——支持者を増やす活動というものを毛嫌いして無視する訳にもいかない。「まずは選挙に勝つてから」というのが、この国で自らの理想を実現させようとする上での偽らざる現状でもあるのだから……。

まあ、政治の世界の入り口に漸くよっや一歩……いやせいぜい半歩踏み出した程度の自分が考えるような話ではないわね。

それでも、最近父のスタツフにもある程度は認められてきたと思えるようになってた。

以前は父の下もとにつくことを期待されていたのは姉さんだった。私が政治の道を志すと表明したこと、それを不承不承ながらも両親が（特に母が）受け入れた事で、彼女は長年の呪縛からとりあえずは解放され、一時は諦めようとしていた研究者への道に進路の舵を切った。さしあたって今は大学院への進学を目指して忙しい身である。

去年まで全く準備をしていなかった中での論文作成・審査……決して楽な道では無い

はずだが、姉さんなら問題なく自身の目標を達成することだろう。だって、それが姉さんだから。

私が、その姉さんが余計な心配をしなくて済むように——なんて、気を張っていたのは確かだ。

最近の自分自身を振り返って考えてみれば、少々気負い過ぎていたかもしれない。きつと少し力を抜いてリフレッシュする事も必要な事なのだろう。

だから——私の次の言葉はこう。

「ねえ、比企谷くん。この後時間あるかしら？」



二人連れ立ってやって来たのは、乗っていた電車の沿線、とある駅の改札を出て、道路を一本挟んだ所にある喫茶店。

比企谷君には申し訳ないけれど、彼の最寄り駅から数駅乗り越して足を延ばしてもらったことになった。

面倒くさがりの彼のこと、断られるのも仕方ないと覚悟した上で誘ってみたのだけ
ど、

「ま、この後は暇だしな」

と、彼は拍子抜けするほどあっさりと私に付いてきてくれた。

アーケードの歩道から直接地下に一階分降りている階段を下りて左手側、縦に細長い
格子状にガラスが嵌め込んである木製のドアを押し開くと、カラン、とドアベルが小気
味良い音を奏でた。

ウツドデツキ風に貼られた床に、落ち着いた意匠がなされた大中小様々な大きさの木
製テーブルと椅子。カウンター席も含めれば40席ほどのお店。

地下なのでもちろん窓は無く、ランプを模した数多くの照明によって、店全体がやや
オレンジ掛かった光で演出されている。

店に入って目の前、レジのすぐ横には、広い販売スペースがあり、各種紅茶の茶葉や
珈琲豆——焙煎したものだけでなく生豆まで扱っている——といった品々が、ヨーロッ
パの市場の一角のように大きなビンをいくつも並べてグラム単位で量り売りされてい
る。

近代的な駅ビルから僅か数十歩しか離れていないこの店だが、初めて訪れた時にはど

こか異国にでも迷い混んだような印象を受けたものだ。

いつもカウンターでコーヒーをドリップしている年配の店員や、他のお客さんの中にもちらほら外国人の姿が見えるのもそんな印象を後押ししているのかも知れないけれど。

「へえ……。よく来るのか、ここ？」

比企谷君は店内の雰囲気に対し驚いたような様子を見せた。

彼が興味深そうに見上げている先では、銅色をしたクラシカルな六枚羽のシーリングファンがゆつくりと回っている。

「父の仕事の関係でこちらに来た時偶然見つけて……。時間のある時に何度か途中下車して寄っているの」

店の中程、四人がけのテーブルに案内された私達は向かい合わせに座り、私はシナモンミルクティーを、彼はお店のオリジナルブレンドコーヒーを注文した。

丁度空いている時間帯だったからか、さして待たされる事もなく頼んだ飲み物が届く。

モノトーンのパリツとしたバリスタ風の制服を着た店員さんは銀の丸いトレイをテーブルに置き、白地に細かい花柄の磁器のティーポットから優雅な仕草で紅茶を注いでくれる。それからそのポットをテーブルの中央に置くと、その上からポットと同じ柄が刺繍された厚い布製の保温カバーティーコージーをすっぽりと被せ、ソーサーの上に葉巻タバコの片方の端を紙テープで巻いたような形のシナモンスティックを添えてくれた。

比企谷君の前には青地に波紋のような模様のコーヒーカップが置かれる。紅茶より深い琥珀色の中身との対比が美しい。

店員さんは最後に白いミルクポットを置くと、

「ご注文の品はお揃いですか？ ……では、ごゆっくり」

そう言つてカウンターの方へと戻つて行つた。

私がシナモンスティックで紅茶を数回円を描くようにかき混ぜると独特のスパイスィーで甘い香りが広がる。そこにミルクをそうつと注ぐと、白い渦巻き模様が浮かんで溶け込み、ゆっくりとカップ全体に広がっていく。

比企谷くんの方は、砂糖・ミルクともたつぷりと入れているようだ。なんとも彼らしいと、自然に口元が綻ぶ。

一瞬目が合った私達は、なんとなく乾杯でもするようなタイミングでカップを持ち上

纏め、濃紺のパンツスーツ姿に黒縁の伊達眼鏡を掛けている。彼は、「政治家秘書」風に見えなくもない格好をしているとでも言いたいのだろう。

確かに大学から家に着替えに戻らずに、父の事務所顔を出すならこの服装は最適だろうから、彼の言っている事も的を得ていないわけではない。

けれど、実際の理由はもっと下らないものだったりするのだが……ただ、彼に正直にその理由を言うのは少し躊躇われた。

「これは……その」

言い澀む私を見て、比企谷君は何かを察してくれたようだ。

「ああ、もしかして……男避け、か？」

「……」

正解、だ。人の心の細かい機微を読む事に長けている彼らしい鋭さ。

自分自身の容姿が標準以上——世間一般に美人と言われるものであることは流石に自覚してはいる。ゆえに以前から何かにつけ異性に声をかけられることも少なくともなかったのだが、大学に進学してからそういういった煩わしいことが目に見えて増えてしまったのだ。

総武高校時代は、「国際教養科」という、女子が圧倒的に多く、かつその実権も女子が握っているというクラスに在籍していた事もあり、私にしつこくアプローチを掛けてく

る男子など滅多にいなかった。

ところが、我が大学の政治コースに在籍する彼らは、自分にずいぶん自信のある人間が多いらしく、こちらにその気が無いことを伝えても簡単には引いてくれないのだ。

そこで「女性」をあまり意識させない服装とはどんなものか、という試行錯誤の一端が今日の私のコーディネイトの理由というわけだ。

自己評価としては……男子学生からの不躰な視線がそれなりに減つたので一定の効果あり。但し、伊達眼鏡は普段眼鏡を掛け慣れていない私にとって少々負担に感じる——そんなところ。

「まあ……概ね正解よ。それに父の仕事を手伝うのに向いているというのも正しいわ」

「まあ……ご苦労さんとしか言えんが……。——それはそれで需要ありそうだけどな……」

何か失礼なことを考えているようだけどそれは流してあげましょう。

「それに——引つ越しし難い理由がもう一つ有るの」

「ん？」

「今住んでるあの部屋……賃貸じゃなくて父の持ち家なのよ」

「マジか！」

比企谷君は驚いて一瞬腰を浮かせた。そこまでびっくりするような事ではないと思

うのだけれど……。

「あのマンシヨンは雪ノ下建設と大手とのJVで建てたものなの。それで、建築会社やその経営者が、資産として一部屋買ったたりするのはそう珍しいことでは無いのよ」

もちろん、買うだけ買って、賃貸として運用する、社宅として使うなど、その後の利用方法はそれぞれだが。

「商売上のお付き合いか言うやつか。そういう習慣もあるって聞いたことだけは有ったが……衝撃の事実だな……」

あれ、絶対うちの二戸建てより高いよな……なんて小声で呟いている彼。

賃貸物件なら、あそこを引き払って私が都内に引っ越し、姉さんは実家に戻るなり、より便利な別の部屋を借りるなりするというのも簡単だろうが、所有している中古マンションとなるとそう簡単にはいかない。

「でも……そうね。二年度までは講義にも余裕があるし……ゼミが本格的に始まる三年次になったら、状況によっては転居も考えなければいけなくなるかもしれないわね」

そんな話をしながら、私達はどちらからともなく読みかけだった本を開く。そして、どこか既視感の有る、

「紅茶と甘いコーヒーと本のページを捲る気配だけの」

そんな時間を愉しみ始めた。

いくばくかの時が経ち、私はティーポットのカバーを外してカップにお替りの紅茶を注ぐと、ソーサーに置いてあったシナモンスティックで再びゆつくりと紅茶をかき混ぜた。スティックが一度湿ったせいも、先ほどよりも濃い香りがふわりと広がる。

その香りに気付いた比企谷くんは一瞬こちらに視線を向けたけれど、特に何を言うでもなくまた顔を本に戻す。

近くにいなながら言葉も交わさず、お互い別々の本を読んで……けれどそれがちつとも不快ではない。こうしていると去年までのあの放課後の教室が懐かしく思い出される……。

ふふふ、ここにちよつぱり騒がしい私の親友がいないことを寂しく思ってしまった。また来よう、今度は三人で。



店を出る頃には、辺りはもう大分薄暗くなっており、街灯にも灯が入り始めている。その上いつの間にか雨が降りだしていた。

早足で駅舎に入ろうとしたところ、すぐ近くで携帯の着信らしき音が鳴った。耳覚えのある、おそらく電話機端末デフォルトの着信音。どうやら比企谷君のようだ。

彼はデイパックからスマホを取り出して画面を見、ほんの僅か表情を緩めると、ちらつと私に視線を向けた。

私が彼に手のひらを向けてどうぞと促すと、比企谷君は壁際に寄り、画面を軽くタツプしスマホを耳に当てた。

若い女性と思われる声が僅かに聞こえてくるがもちろん内容までは分からない。

「おう、どうした慌てて？ 明日はそつちに——

言いかけた彼は言葉を止め、目を見開いて固まった。

「……留美？」

相手は留美さんらしい……が、それにしても彼の焦ったような表情と緊迫感はなんだろう。妙な胸騒ぎがする。

「な、荷台について……じゃあ留美も？ 馬鹿お前何やってんだよ……」

比企谷君が、彼には珍しく語気を荒げる。

「いや待て、言い方悪かったな。留美は無事なんだな？ 気が付かれて無いんだな？」

その……犯人っつーかには」

犯人!?……おそ日常生活で出てくる単語では無い。なにやら深刻な事態らしく、比企谷くんは壁際に寄ってスマートフォンを耳元に抱え込むように握り直すと、声をひそめて通話を続けている。私が聞いて良いものかと迷ったものの、つい聞き耳を立ててしまった。

「……藤沢の方は……」「……隠れてられる……」「……絶対に危ない真似はするなよ……」「……どっちに向かって……」

彼の口から断片的にそんな言葉が漏れ聞こえてくる。しかしこれは……どう考えても異常事態だ。比企谷くんも動揺を隠せていない。

そして――

「とにかくケータイもマナーモードにして、どこかから着信あっても音で気付かれないように……おい、留美?……」

そして今まで耳に当てていたスマートフォンの画面を見つめて唾然とした表情を浮かべる比企谷君。どうやら通話が切れてしまったらしい。

彼は一つ舌打ちして、それからハツとしたように私を見た。

「悪いな雪ノ下、ちよつと急用が……」

そうやって今にも立ち去ろうかという様子の比企谷君。

「比企谷くん」

私は少しきつい声で彼の名を呼び、強い視線を送る。

「何があったのか話して。誰かに頼る事は悪いことじゃないってもう知っているでしょう？」

数秒、彼は逡巡する様子をみせたが、

「……途中で通話切れちまったからはつきりとは言えないんだが……」

そう前置きして、早口でざっと事情を話してくれた。

「……つまり、誘拐……なのでしようね。拉致されたのは藤沢泉さんで、留美さんは自分でついていってしまった。犯人は……と言ってしまったって良いのかどうか……とにかくまだ留美さんには気付いていない、ということかしら」

「あくまで今の通話の内容だけで考えれば、な」

話しながら彼は何処かに電話をかけているが繋がらない様子だ。

私が彼のスマートフォンに目を遣ると、

「ん？ ああ、さつきから留美のお母さんにかけてるんだが、仕事からしくて留守電になっちゃう……」

「こちらから留美さんにかけてみる訳には……。いえ、向こうの状況が何も分からないんですものね」

「ああ、下手にかけると、もしかしたら隠れてる留美が見つっちゃうかもしれないし、それに……。いや」

比企谷君は言葉を飲み込んだけれど、すでに隠れていたことが露見し、携帯を取り上げられている可能性だって無いとは言えない。

「なら、やはり警察でしょうね」

「先に警察か、確かに、な。……でもなんて言えば良いんだ？ 本人でも家族でも無い、現場を目撃した訳でもない。俺の立場じゃ悪戯だと思われてもおかしくないな」

「それは……。いえ、それでも警察にお願いすべきよ。そうすれば、携帯電話会社に情報を提供してもらって位置情報を調べるなり出来るでしょう？」

事実確認には時間を取られるだろうが、やむを得ない……。

「位置情報……。待てよ。もしかして……」

何かを思いついたらしい。比企谷くんはあわてて自分のスマホを操作する。

「位置履歴検索……。と、出た！ 最後は十分くらい前か。東に向かっている……な」

位置情報アプリでも入れてあったのか、どうやら留美さんがどちらに向かっているのかわかったらしい。

「よし、ここだとタクシーは……」

「待つて比企谷君」

辺りを見回しながら飛び出して行きそうな彼を制して、私は父に電話をかけた。タイミングが良かったのか、2コールめを待たずに電話が繋がる。

『もしもし、どうしたんだい、こんな時間に?』

「ちよつと友人がトラブルに巻き込まれた可能性があつて……」

「トラブル?」

「まだはつきり確認出来た訳じゃないのだけど……急ぐの。吉村さんが空いてたら私の方に車を回してもらえないかしら?」

『構わんよ。今何処だい?』

「○○駅の北口の——」

『じゃあ——』



「雪乃様、お待たせしました」

「『様』は止めてと……！父さ……いえ、先生!？」

10分位で着くと言われていた車は、実際は7〜8分程で到着したのだが……てつきり運転手の吉村さんだけかと思つたら、後部座席には父が乗っている。

「偶々近くに居たから、真つ直ぐ来たほうが早かつたんだよ。それにさつき少し電話で事情を聞いた上で……もしかしたら力になれることもあるかもしれないと思つてね」

「すいません、助かります。お忙しいのに申し訳……」

「まあそういうのはいいから。二人ともとにかく車に乗つて」

父が軽く諭すように言い、私達は急いで車に乗り込んだ。



助手席に座つた比企谷君の案内で、四人を乗せた車は街道を東へとひた走る。私は父の隣に座り、先ほど比企谷君から聞いた状況を改めて説明した。

「だいたいの事情は解つた。それで警察には？」

「いえ、今説明した留美さんの保護者の方と連絡をとつてからと……でも電話が繋がらなくて」

「ふむ。じゃあ、私の方から少し話を通してみよう」

話を通す？

父は携帯電話の電話帳をスクロールさせて少し考えている様子を見せ、それから一つを選んでタップする。発信画面に表示されている名前やナンバーを見るに、個人の携帯電話の番号のようだ。

「——やあ、この前はどうも。……うん、突飛な話で驚かないで欲しいんだが、実は今、誘拐事件が起こっているらしくてね」

『……っ？』

電話の相手が息を飲んだ気配が伝わってくる。

「——いや、うちの娘達の話じゃなく……そう、被害者は、あの画家の藤澤誠司先生のお孫さんらしくて……。うん。それで、連絡してきたのはその友達の中学生で、犯人の車に乗り込んで行ってしまったらしいんだよ……。そういう状況だから、申し訳ないんだが、藤沢さんのご家族への事実確認と、此方こちがら続報を入れたらすぐに出勤出来るような態勢で……。今のところY市方面。うん、よろしく頼むよ」

父はそんな風に警察の協力を取り付けてくれたようだった。藤沢さんと留美さん、無事であれば良いけれど……。

* * * * *

比企谷君が留美さんの電話を受けてから一時間以上経つ。気がつけば車はかなり郊外の方まで走って来ている。

ただ……留美さんの（隠れて乗り込んでいる車の）足取りを示していたアプリだが、数十分前から位地情報が更新されなくなってしまったのだ。

単純に電波の圏外に入ってしまったのか、スマホ機器のトラブルか、……最悪のケースとしては留美さんが犯人に見つかってしまい、スマートフォンを取り上げられてしまったということだってあり得る。

私たちは、最後の履歴地点近くの交差点の角にあるコンビニの駐車場に車を止めて、今後どうするか相談をしている。

「とりあえず県警の知り合いには現状を伝えたよ。Y警察署の方に人員を手配してくれるそうだ」

「後は……思いきって留美に電話してみるしかないか？」

「でも……大丈夫かしら？ 留美さん達の今の状況が分からないということ……もしかしいたらそのせいで……」

私たちが良かれと思つて不用意にした行動が、結果として留美さん達を危険に晒す可能性も無いとはいえない。

「……………」

何か打開策は……。主導権の無い状況で手詰まりになり、ただただもどかしい時間が流れる。

「あつ！更新された……………けど……………」

「けど……………」

何度も何度も更新ボタンをタップしていた比企谷君が声をあげ、スマートフォンの画面を私達に示す。

そこには、現在地を示す赤い点の代わりに、精度が低い情報であることを示す紫色の光点^が。

それが示しているのは、今車を止めているこのコンビニから案外近く、ほんの二、三キロ先の開けた土地。

「この辺りは……………例の産業タウンの中か！」

父の言葉に、私も比企谷君のスマートフォンの画面を覗き込む。

なるほど、点が表示されている辺り一帯は、大手ディベロッパーが大規模開発をしている市街化計画地域のはず。一部区画は稼働を始めているものの、まだ開発途中でインフラが未整備の区画も多いことを考えれば、携帯電話の電波状態が悪いのも納得できる。

さらに詳しく見ると、紫の光点は、工事が途中で何年も中断されているスーパーマーケットの入り口付近にあり、すぐ近くには新規の履歴地点を示す鮮やかな青い光点がある。時間を見ると、その直前の地点であるここが更新された時間とあまり変わらない時間のものであった。

この二つの光点が間近にあり、それが今同時に更新されたということは……数十分前から、まさに今、数分前まで。

つまり——少なくともこの数十分間、留美さんがこの場所にいた可能性が高いと考えることが出来る。

「よし。吉村くん、とにかくここへ」
「はー。」

父の声に応え、吉村さんが車を発進させた。



父と吉村さんには、少し離れた、警察が来てくれた時案内しやすいところに車を止めてもらい、そこで待機してもらっている。

父には警察の到着を待つように言われたものの、比企谷君が様子を見に行くと言つて聞かず、無理はしないという約束で様子を見に行くことになった。

もし藤沢さんと留美さんを確認出来たなら、父から警察に出動要請をしてもらう手筈だ。

私達は気付かれないように明かりを点けずに、歩いて例の建設途中のスーパーに近づいた。

GPSの位置履歴があつたのは地下駐車場への入口付近。ここに留美さんが居るか……少なくとも彼女のスマートフォンが有ることは間違いない。そして――

「やつぱりここだろうな。車が入って行つた跡があるし、扉のチェーンも巻いてあるけど、鍵はかけてあるように見せて、ただぶら下げてあるだけだ」

「タイヤ跡が濡れているし……少なくともこの先に誰かが潜り込んでいることは確かでしょうね」

新築途中にしては薄汚れて見える、廃墟のような印象。工事が中断されて何年も経っているらしいから仕方がないのかもしれない。

工事中断の経緯としては、系列店の本店が震災の時の液化化で深刻なダメージを受けて、新規店舗の出店どころではなくなつたという噂は聞いたことがある。

幸い、入口付近に人影は無い。私達はすでに鍵の開けられている蛇腹のゲートを開き、あっさりと中に侵入する。スマートフォンのライトを点けて見回すと、スロープで下に向かっている駐車場への入り口と、入つてすぐ左にある鉄扉。比企谷くんが扉のノブを下げると、扉はゆっくりと開いた。

「階段……上下両方あるけど、とりあえず地下行つてみるか……」

車が地下駐車場へと向かった形跡がある以上それが妥当か。

「それじゃ雪ノ下、下に行つて俺が確認したことを連絡する。もし……5分間俺からメールもメッセージも来なかつたら警察に入ってもらつてくれ」

「え、貴方一人で行くつもりなの？」

「二人とも行つちまうと何か有つたときの対処が出来なくなるからな」

「……わかつたわ。気を付けて」

「おう」

そう言つて彼は、携帯電話のライトを頼りに階段を下りて行つた。

暗さと静寂の故か、彼からの連絡を待つ時間がとても長く感じられる。

留美さんたちは本当に下にいるのだろうか。可能性として、携帯電話だけを棄てられているという事もあり得なくはない。

それにもし犯人が居たとして、比企谷君が見つかつてしまうという事も……………。

すつと扉が開く。比企谷君がほんの2、3分で戻つて来た。何かあれば電話かメールが来るものと思つていただけけれど。

「どうしたの?」

「いた。二人とも捕まつてるみたいだ」

少し興奮気味に話す彼。

でも、留美さんは見つかつてしまったのか。捕まつた時酷いことされなかつただろうか。怪我は無いだろうか……………。

「二人の様子は……………」

「いや、藤沢のほうはちらつと見えたが留美は声だけだ。あれ以上進むと俺も見つかうかもしれないから、その前にお前にメールしようとしたんだ。けど、電波が圏外になつて

たから、先に警察呼んでもらおうと思つて一度戻つて来た。俺はまた降りるから警察の方連絡頼む。多分犯人は男二人だ」

そう早口で言うのと、彼は言葉通りすぐまた下に降りようとする。何か焦っている彼の様子に不安を覚える。

「ちよつと、比企谷くん。無茶は……」

「心配するな。すぐに警察が来てくれるんだろ？ それを待つ。さすがに俺一人じゃ……。場合によつては、まあ、うん……」

『絶対に無謀なことはいしない』と言い切らないあたり彼も正直だ。

「いいから待ちなさい。それなら、今度は私も行くわ。少しだけ待つていて」

私は父に電話をかけた。

「父さん、比企谷君が確認しました。二人ともここに囚われているそうです。それから、犯人は二人組の男らしいと……」

手早く比企谷くんが見た内容を伝え、警察の手配をお願いしてから、私は比企谷君の後について階段を降りる。

比企谷君は足音を立てないようにか、やや腰を落とした体勢でゆつくりと階段を降りていく。

私も同じようにしているのだけれど、スーツはともかく皮のポンプスは音を消して歩

くのには向かない。スニーカーでどんどん先へと進んでいってしまふ比企谷くんを少し恨めしく思いながら、どうにか大きな音を立てることなく下の階に到達した。

目の前には上と同じ形の扉。

「ここ出たら狭いところを左に行く。周りの声とか確認しながら、急に止まるかもしれないから頭に入れてくれ」

「ええ、わかったわ」

私が頷くと、彼はスマートフォンライトを消す。真つ暗になった中、比企谷君はゆつくりと扉を押した。

扉を通り抜けた先は、ぼんやりと明るい。照明が点いているんだろうか。

扉から一メートルほど間を開けて、すぐ目の前がベニヤ板のような木製の壁パーティションになっている。よく見ると鉄パイプとクランプという金具で作られた支柱があり、仕切り板パーティションを並べたような構造になっているらしい。

少し離れた場所からかすかに男の声が聞こえ、私は一瞬身を固くする。おそらく壁の向こう、犯人のものだろうか？ 内容までは聞き取れない。

私達は壁に沿って狭い通路をゆつくりと左へと進む。比企谷くんが立ち止まり、壁の端からそうつと顔を出して先を覗き込んだ時、

「…………やめてっ…………、…………ないで…………」

留美さんの押し殺したような悲鳴が聞こえた。

次の瞬間には、比企谷君はもう飛び出していた。

こうなつては仕方がない、私も彼を追つて壁の外に出た。

視界が開ける。どうやら地下駐車場の一角を工事の現場事務所と休憩所として使用できるようにしているスペースらしい。鉄パイプの柱の上部に取り付けられた数台の投光器がこの辺りを照らしている。

視線で比企谷くんを探すと、倒れている女の子に覆い被さつていた男を引き剥がし、地面に叩きつけるようにするところだった。

あとは……少し離れた一角に藤沢さんが椅子に縛られているようだ。そのすぐ近くにもう一人の男。彼らがいるところに比べてこちらが暗いせいかな、あるいは比企谷くんの方に視線が引き付けられているのか、彼が私に気づく様子はない。

私は姿勢を低くして、比企谷くんのいる反対側から回り込むように藤沢さんの方へ移動を始めた。

倒れていた女の子が顔を起こす。やはり留美さんだ！ テープで縛られ、服も少し開けている様に見えた。比企谷君は留美さんのそばに寄つて何か声をかけている。そして……首を押さえて激しくむせていた先程の男を、怒りを漲らせた顔で睨みつけ、相手

が怯んだところを一切の躊躇無く蹴り飛ばした。

比喩でなく一瞬体が浮き上がる程の蹴り。体は床に転がり、男の眼鏡がコンクリートの床に落ちる。のたうつようにして転がり、もう完全に戦意のない相手。比企谷君はしかし先程蹴った同じ場所を踏みつけるようにもう一度蹴りつけた。

痛い！ 思わず心のなかで悲鳴を上げた。誘拐犯のことなど慮わもんばかつてあげる必要も無いのだろうか……でも、これほどまでに暴力的な比企谷くんの姿は初めて見る。まさか彼にこんな一面があつたなんて……。

そんな彼の姿に啞然としていたのは私だけではないようだ。

藤沢さんの横で今の今まで呆けたように突っ立っていたもう一人の男が我に返ったようで、慌てたようにポケットから小振りのカッターナイフを取り出し、怒鳴り声を上げる。

「お前、よくも……」

男は、藤沢さんに背を向けて比企谷君の方に数歩踏み出した。

私はその隙を突いて藤沢さんの側に忍び寄った。彼女が気付いて目を見開き、何か言おうとしてしたのを、唇の前で人差し指を立てて制し、彼女を男から庇える位地に立つ。

先ほど比企谷君が蹴った相手よりやや年上に見える男は、カッターを構えた右手を小刻みに震わせながら比企谷君と対峙したが……留美さんを庇うように仁王立ちする、彼

の目を強く歪めた形相ぎようそうに気圧され、逆に一步後退る。

彼の顔を見慣れた私にとつては、カッターナイフを前に緊張して、その上、逆光気味の投光器が眩しくて目をしかめているだけだ、というのがなんとなく分かるのだから……。彼を知らない人間が、先ほどの、容赦の欠片も無い攻撃を目の当たりにした上であれを見れば、地獄の底から蘇ってきた悪鬼が「さて、お前をどんな残酷なやり方で殺してやろうか」と、品定めでもしている顔に見えなくもない……。

いえ、その……貴方その顔もう少し何とかならないのかしらね。

そのタイミングでパトカーのサイレンの音が聞こえてくる。酷く動揺した様子を見せる男。

この犯人が自棄になったり逆上しないよう、警察の到着まで場を持たせるには……。「……全く、すぐに警察が到着するからタイミングを待とうと自分で言っていたのに……。……でもまあ、今のは仕方ないかしらね。それにしても、最後のは流石にやり過ぎじゃないかしら」

私が不安や緊張を押し殺し、まるで日常会話をするかのように余裕な風を演じて声を上げると、男はいきなり現れた私に混乱し、どうして良いのか分からない様子で動きを止めた。視線だけがせわしなく私と比企谷君との間を行ったり来たりしている。

そうしているうちにサイレンの音はもうはつきりと響くようになった。

「畜生つ、何で俺はいつもいつもこんな上手く行かないんだよ……」

愚痴でも言うようにぼやいた男は、私の方へカッターナイフを向けた。

「なあお姉ちゃん、頼むから動くなよ。大人しくしてくれれば怪我をさせるつもりは無いから」

その言葉は何故か泣き出しそうな声に聞こえた。男は比企谷くんを警戒しながらジリジリと私に近づいてくる。

警察がすぐそばまで来ている現状では……まあ今の比企谷くんと私、必ずどちらかの相手をしなければならぬとしたら、女性である私を捉えて人質に、とでも考えたのかもしれない。

見ていれば分かるが、彼の動きは素人だ。もし私を捕らえようとしても射すのは難しくないだろう。

でも今、私のすぐ側にはまだ縛られたままの藤沢さんが居る。もし刃物をめちやくちやに振り回したりされでもしたら彼女に危険がおよぶ可能性がある。

どうする？

下手に刺激しないようじつとしていると、男が私の間合いに入る直前、視線の先——男の背後にいる比企谷くんと目が合う。それが合図であるかのように彼の右手がすつ

と弧を描いて動いた。

彼の手から放たれた何かはふわりと空を飛び、男の足元すぐ横に落下し、「ガチャーン」と大きな音を立てた。

「うっ!？」

予想外であろう出来事に男は飛び上がらんばかりに驚き、何かと己の足もとに転がる工事前の部品に目を向け——完全に私から目を離れた。

私は男に向かつて一歩踏み込みカッターナイフを持つ手の手首を掴んだ。あとは相手の肘を支点にするように押し込みながら、その手首を本来曲がらない方向へと強くひねる。男は痛みに顔を歪め、自分で崩れるように一回転して背中からコンクリートの床に倒れた。無理に抵抗すればきつと腕が折れていただろう。

そしてその手からナイフがぼとりと落ちる。私はそれを取り上げ、駐車場の隅の暗がりへと放り投げた。

急に駐車場の奥のほうが見るくなり騒がしい声が響く。大勢の人と、それからパトカーらしき車も入ってきたのが見える。警察が到着したらしい。

『警察だ! もう逃げられないぞ。直ちに武器を捨てて……………』

拡声器から聞こえる大げさな言葉。あのお巡りさんはドラマの見過ぎじゃないだろうか。

それでも効果は有ったのか、床に転がって呆然としていた男は、観念したように目を閉じる。

比企谷くんと目が合う。彼はホツとしたように大きなため息をついた。

* * * * *

「留美、大丈夫か？」

「は……ちまん……」

比企谷くんが声をかけると、留美さんは安心したのかポロポロと涙をこぼす。

「バカ野郎、動かないで待ってろって言っただろ。なんで無茶したんだー」

彼の口調は乱暴だが声音は優しい。留美さんを気遣うようにしながら手を縛っていたテープを剥がしている。

「ごめんなさい……。でも、あいつ、泉ちゃんの指を折るって……泉ちゃんの……。そんなの——そんなの絶対だめ……。でも、私しかいなくて、だったら私がやらなきゃって、なんとかしなきゃって……」

その言葉に私は息を呑む。それはまるで……。

比企谷君はまた一つため息をつくど、

「立てるか？ 留美」

そう言つて留美さんに手を差し出す。けれど彼女はその手を取るのを躊躇っているようだ。

「八幡……」

彼を見つめたまま何かを葛藤する瞳の色。声も、その手も小さく震えている。

想像するしか無いが、たとえ仕方がなかったとしても、自分が嬲られて弱っている姿など彼には見られなくなつたのだろう。

すると比企谷君は留美さんの腕を持つて引つ張り起こし、彼女の背に腕を回して彼の胸に抱き寄せた。

「あ……八幡……」

「大丈夫、もう大丈夫だから」

だから泣くな。そう言つて比企谷くんは小さい子を慰めるみたいに留美さんの頭を優しく撫でる。留美さんからは見えないだろうが、彼の目にも大粒の涙が光っている。

ああ……本当に心配していたんだな、安心したんだな……。

留美さんは彼の胸の中でしゃくりあげるように声を上げて泣き、比企谷くんは彼女のしたいままにさせている。

不謹慎だと分かっているが、彼女のことを少し羨ましく思えてしまった。

そんな彼らの様子を眺めていたら、留美さんが顔を起こしたタイミングで彼女と目が合ってしまった。比企谷くんを挟むような位置で見つめ合うこと数秒。

うわ……。羨ましそうに見ていたことに気づかれてしまうだろうか？ 私は苦笑いしながら視線をそらし、少しその場を離れる。

◇ ◇ ◇

女性警察官に事情を聞かれていた藤沢さんの様子を見に行ってみたが、こちらはまだ何かを相談しているところだった。保護者であるお母様が今日本にいないらしい。

結局、彼女の従姉である現総武高校生徒会副会長の藤沢さんと、伯父に当たるそのお父様が迎えにきてくれることで落ち着きそうだった。

ふと顔を上げると、犯人二人が今まさに連行されていこうとしている事に気付く。

私は彼らに声をかけようと近づいた。

「少しでもいいかしら」

「下がってください、だめですよ」

最初は制服の若い警察官に制止されたが、

「あんた確か、雪ノ下先生んところの……。いいでしょう。手短にお願いしますよ」
どうやら父を知っているらしい年配の刑事さんが許可をくれる。

「ありがとう」

そして私は彼らの前に通された。なんだかすつかり諦めた様子で実におとなしくしている二人。私は年上の方に声をかけた。

「怪我はないかしら？」

「ああ、あつちこつち痛えが、俺は大したことねえ。タクのほうはアバラにヒビ入ってるかもしんねーっってお巡りさんが言ってたな」

「はい社長、めっちゃ痛いっす……」

「そう……でも、その程度で済んで良かったわね。彼の大切なものを傷つけて……警察が来るのが遅かったらこんなものでは済まなかったでしょうね」

「おお。まあアイツがヤバイのは目を見りや分かる。あの何人も殺ったような目……何者なんだ……？」

「それは……私の口からは言えないわね。とにかく金輪際彼らとは関わらない事をおすすめするわ」

「分かってるよ。好き好んであんなのと関わるやつはいねえって」

男は比企谷くんの方をちらつと見て、やれやれというかのように小さく首を振った。

ふう、こうやって釘を刺しておけば、逆恨みでトラブルになったりする心配がいくらかは減ると思うけれど……ちよつと大げさに言い過ぎたかしら。

* * * * *

「ありがとうございます」

比企谷くんが父に向かって深々と頭を下げる。

そんな彼の姿を見た父はわずかに苦笑して、

「私だけじゃないよ、君の名前を聞いて彼が手伝いたいと言ってくれたからね」

そう言つて運転手の吉村さんへ視線を向ける。

「あ……」

そこで比企谷くんはようやく気がついたようだ。きつと今までは留美さんたちの事を心配するのにいっぱいいいっぱいで、運転手である吉村さんの顔など見ている余裕がなかったのだろう。

ちようど三年前、私と由比ヶ浜さん、比企谷くんを引き合わせた最初の邂逅となる交通事故。その時もこの車を運転してくれていたのが他ならぬこの吉村さんだったのだ。

「比企谷くん、あの時は申し訳なかったね」

吉村さんはどこか懐かしそうに声をかける。

「そんな……あれは俺が勝手に突っ込んだだけで、運転手さんにはなんの責任も……」

「そう言つて、君も、君のご家族も私を責めなかった。それが私や家族にとってどれだけありがたかつたか……。それに、」

一度言葉を止めた吉村さんが、比企谷くんをまっすぐ見て言う。

「うちも犬を飼つていてね、彼は家族の一員なんだ。だから……あのお嬢さんの家族を奪うことにならずに済んだことを、本当に……本当に感謝してるんだよ」

一瞬言葉に詰まったように見えた比企谷くんは、父と吉村さんに向かつてもう一度深く頭を下げた。



父の車が去り、残された比企谷君と私。この後私達は藤沢さんや留美さんと一緒に事情を聴かれることになっている。

「車の用意が出来ましたら声をお掛けしますから」と言われてそれを待っていると、
「……無茶なことされるのつて、キツいんだな……」

彼が肩を落とすようにしてため息をつきながらボソツと言う。

「比企谷君……?」

「前に……修学旅行の時か。お前と由比ヶ浜に言われたことあっただろ、たしか『貴方のやり方、嫌いだよ』とか『もつと人の気持ち考えてよ』とか」

「……ええ」

「あの時の言葉の意味……分かったつもりになってたんだが——」

彼は、私と目を合わせるでもなく、独り言のように続ける。

「あいつの……留美の行動は無謀だったし、もつと上手いやり方があったのかももしれんが……それはあくまでも後から見た結果論で、無茶したのは友達のためだし、何か責められるようなことをした訳じゃ無い。自虐的に突っ走っただけの俺なんかより遥かにマシだ。そんな事は分かってるんだ、頭ではな。でも俺は……」

彼はそう言つてガシガシと頭を掻きながら、何かを振り払うように頭を振る。

誰かのために今動けるのが自分だけ、という状況が目の前にあつたとして、その時、自分自身の事を顧みないで行動してしまう——そんな危うさを持つ少女。

林間学校の時、自分を苛めていた友人たちにさえ助けの手を伸ばした少女……留美さん。

——似ている。心の在り方が……彼、比企谷君と。

そう、だからきつと二人は惹かれ合うのだろう。

今回の留美さんの無茶な行動は、ある意味高校生の頃の比企谷君のその鏡写しのようだ。

自分の過去の影ともいえる留美さんの行動と客観的に向き合ったことで初めて、彼は、「自分が大切に思っている誰かが、己を顧みないような無茶をした」事への、どうしようもない——焦燥感のような憤りを感じているのではないだろうか。

かつて、私や結衣さんが彼に懐いたいだ気持ちと同じように。

比企谷君がその心境を分かってくれたことには……漸くようや伝わった、という安堵したような気持ちと、彼をその気持ちに至らせたのが私でも結衣さんでもなかったという何処か寂しい気持ちがない交ぜになって胸を満たす。

本人達は気付いているのかいないのか、少なくとも、今、比企谷君にとって「一番大切な女の子」は間違いなく留美さんだ。

そう認めてしまうと、私の心の中で鈍く疼くような痛みが生じるけれど……同時にほっとしてしまっている自分にも気付いてしまう。

気分は悪くない。けれど何処か切ないこの気持ちには——？

——私たちには辿り着けなかった。でも——

留美さんなら……何処までも真っ直ぐに彼の心を見つめている彼女なら、比企谷君の求める「本物」の存在になれるんだろうか。

——そうであつて欲しい。

——でも、そうなつて欲しくない。

二つの相反する想いが心の中で共存していることに、しかし不思議と納得している私がいる。

——いつか、私を助けてね。

比企谷君は、私のあの時の言葉に応え、もう充分に助けてくれた。

今私が、確かに自分自身の足で立っていると実感できているのは彼のお陰だ。ずっと隣を歩んで行けないのは寂しいとは思うけれど、これからも彼が私にとってかけがえのない大切な存在の一人であることに何ら変わりはない。

だから……これで良い。きっとこれが正解だ。

私がんばりやりとそんな事を考えていると、中学生二人への警察の聴取が一段落したよ

うだ。

藤沢さんは誰かと電話で話している。留美さんは比企谷君に駆け寄って来ると、幼子のように彼の服の裾を掴んだまま小声で何か話している。

「……は、ごめ……なさい……」

「……丈夫だから。けど、また一人で……のは勘弁な」

留美さんが何かを謝って、彼がそれに短く言葉を返している。

ごく自然に二人で並び居る彼らの様子を眺めていて……いつの間にか澄んだ気持ちでそれを見ることが出来ている自分に気付き、自然と笑みが漏れた。

「ん？ どうした雪ノ下？」

「……何の事？」

「いや、なんか笑って……」

「ほっとしたというか……安心してたからよ、きつと」

「安心……まあ、うん、そうだな」

比企谷君は解ったような解らないような顔をして、曖昧に微笑う。

ふふふ、そうよ、安心したの。多分……自分自身に、ね。



その後、藤沢さんと留美さんは念のため病院へと向かうことになった。彼らの保護者がまだ到着していないこともあり、私と比企谷君も一緒だ。

彼女たちの診察を待ちながら、警察の方に追加で事情を説明し、それから到着した留美さんのお母様や藤沢さんとも少しお話をして……。

* * * * *

全てが終わり、帰りの車中。まだ電車は動いている時間だったけれど、流石に疲れていたもので、比企谷くんと二人でタクシーを使うことにした。

彼は今夜は実家の方に泊まることにしたというので、そちらに寄ってから私の家へと向かうコースだ。

「雪ノ下……今日はありがとな」

隣りに座った比企谷くんがボソリと言う。

「お礼なんて……。貴方もお疲れ様ね、今日は大活躍だったじゃない」

私が少しからかうように言うと、

「活躍つつうか……こういう冗談にならん事件みたいなのはもう勘弁してほしいわ……」

彼は苦笑しながらも、心底疲れたという風にシートにぐてつと体を投げ出しながらそう言った。

「本当に、ね」

「……まあ、こんなことそうそう有るもんじゃ無いだろうけどな」

「……………」

「……………」

「そういえば、雪ノ下の親父さん、講演会とか街頭演説とかで話すときと……口調というか、雰囲気もずいぶん違うよな？」

「父様……父はTPOや相手によって口調が結構変わるの。意図してやっているというより無意識にそうなってしまうと聞いたわ。もう職業病のようなものね」

「へえ……まあ、俺たちだつてそういうところはあるしな」

「可笑しいのは、母さんと話すときが一番丁寧な言葉になることかしら？」

「ふっ。……いや、分かる気がするわ。怖いし」

「あら。じゃあ母にそう伝えておくわね」

「おま……ホント勘弁してくださいお願いします……」

その後も、ぼつりぼつりとなんでもない言葉を交わすだけ。でもそれが心地よいのだから不思議だ。

この時間になると、朝夕は大渋滞する幹線道路も流石に空いていて、さほど時間もかからず比企谷くんの家に到着した。

「あ、金……」

「大丈夫よ、今日はタクシーチケットを使うわ」

「そうか、悪いな」

「ええ。じゃあまた」

「おう、またな」

ドアが閉じ、車がすつと走り出す。

「『またな』……か」

はつきり何時いつと言うわけではないけれど、次回を約束する言葉。彼とその言葉を当たり前のように交わし合う関係であることが今日は無性に嬉しいと感じる。

——ええ。またね、比企谷くん。



チケットに日付と金額を書き込み、サインして運転手さんに渡す。

タクシーを降りると雨はすっかり上がっていた。雨後の湿気のせいか、通りを遠くまで立ち並ぶ街灯は丸くもやががかかったような光を放っている。

「はあ……………」

やけに永く感じた今日という一日がようやく終わる……。私は深呼吸するように一つ大きなため息をついた。

明日は土曜日で講義も無いし、父の事務所でも大きな予定は無かったはず。

ならば——そうね、明日の朝は目覚ましのアラームをセットせずに、ゆっくり朝寝坊でもしようかしら。

鶴見留美の瞳に映るもの① それは等身大の自分

暗く揺れるお湯の中、仄かに漂う硫黄の香り。——私の素肌の背中に、八幡の、やはり裸のままの背中が触れる。

今は私に背を向けている彼だけど……。さっきの……。出会い頭の時には、私もまさかと思つて油断していたし……。見られちゃった、よね？多分……。

月や星空を見やすくするためだろうか、光量を落とされた照明灯は壁際にぼつんとつだけ。

ここは広い浴槽の中でも特に奥まった場所だし、何もかもをぼつちり見られてしまつたというわけでは無いかもしれないけど……。

うわあああつ、恥ずかしいよう。新しい水着姿を見せるのだから、こう覚悟がいて思つてたのに、それを飛び越していきなりこんな……。

真つ赤に火照つた躰と早鐘のように打つ心臓の音は、決して温泉の温度が高めなせいだけじゃ無い……。

ただね、今この状況、「八幡と二人で露天風呂」がそこまで嫌なわけじゃないの。

もちろん頭がくらくらする位恥ずかしいけど——いつか……もし私たちが恋人とか夫婦とかになれる未来があるなら、そういうのもいいなあ、ふふ——

みたいな妄想したこともあるくらいだから。

でも、残念ながらそんなゆるやかな気分を楽しむ余裕は今の私たちには無い。だって——

* * * * *

「はい?」

絢香が首を傾げる。

「あー、なんだっけ?……詳しくはわかんないけど、ようするに泉を助けたお礼に、留美を温泉にご招待と」

「うん」

先日の誘拐事件の事——絢香には『誘拐されそうになつた泉ちゃんを、たまたま居合わせた八幡と雪乃さんと私が協力して助けた。犯人はお巡りさんがすぐに捕まえてくれた。捜査とか裁判とかの関係で、これ以上のことは関係者以外に話さないように言われている』

と、そんな内容のことをざっくりとだけ話してある。全てを伝えられないのは心苦しいけど、余計な心配をさせてしまうのは嫌だから。それにあの事件のことは……私自身、まだ心の整理がっていないのもあるし。

「で、泉の伯父さんとこの財団が管理してる、元旅館を改装した保養施設だっけ？ うん、おーけー、そこまでは理解した。で、なんだって？」

「だからね、絢ちゃんも一緒にどうかかって言ったんだけど……」

「待って……あたしは別に難聴系主人公アピールしてるわけじゃなくてね……」

絢香が『本当に意味がわからない』という顔で今度は反対側に首を45度くらい傾げて泉ちゃんを見る。

「話の流れ的に、留美が招待されるのはもちろん分かるよ。比企谷さんと雪乃さんも、うん。でも、そこからあたしに話が来るのっておかしいでしょ」

「あんまり難しく考えなくていいんだよ絢ちゃん。お礼つてのはもちろんだけど、せっかく温泉通すから、留美ちゃんや比企谷さんと親しい方たちも招待しましょうってお母さんたちが。雪ノ下さんには由比ヶ浜さん、比企谷さんには小町さんに声かけてもらって」

泉ちゃんの言葉を引き継ぐように、まだ首を傾げたままの絢香に私が説明する。

「それでね、私も誰かって聞かれたから……一緒に行くなら絢香が良いなって……ダメだった？」

ちら、様子を伺うと、目をぱちくりと見開いた彼女は、ちよつぱり頬を染め、それから両手を頬に当ててオーバーアクションで全身くねくねさせながら

「ううっ、そんなにあたしの事を……るーちゃんツ、愛してるっ！」

そう言つて私に抱きついてくる。そんな話じゃ無いんだけど……ふふ、これは絢香には珍しく照れてるやつだ。

大げさでわざとらしいリアクションはきつと彼女の照れ隠しだろう。

「それにね、絢ちゃん」

泉ちゃんがそう言つて絢香の耳元に口を寄せた。なんだろう、私には内緒の話？

彼女達は目をキラキラさせながら、二人でぼそぼそと何かを話し込んでいる。

——恋愛ウオッチャーとしては……とか、留美ちゃんと比企谷さんのイチヤイチャをすぐそばで……とか不穏な声が聞こえた気もする……。

というか、こんな近くで話して……そのわざとらしい内緒話風の耳打ちは意味あるの？ 隠す気なんて無いでしょ、二人とも……。

こくこくと頷き、立ち上がった絢香は満足げにむふーっと息をつき、

「よーし！ 題して『るーちゃんの比企谷さん悩殺大作戦』発動！ 留美、泉、今度水着選

びに行こう！」

そう声を上げて、拳を天に突き上げる。

「うん！ 行こー」

にこにこ笑いながら、絢香に習ってピヨコンと手を上げる泉ちゃん。

……………あれ、どうしてそういう話に？

* * * * *

春休みの引越しの日からおよそ4ヶ月。家庭教師の時やそれ以外でも何度も訪れている八幡のアパート。ここで過ごすのはもう何度目だろう。

今やすっかり使い慣れた小ぶりの冷蔵庫からプラスチック製のピッチャーを取り出し、作りおきの麦茶を2つのコップに注いで氷を浮かべる。

八幡は私と交代するように冷蔵庫の前にしゃがみ、思いついたように冷凍庫の引き出しを開けた。

「もうこんだだけか。アイス、補充しとかねーとな」

なんて言ってる、けど。

見てる……よね。

うん、勘違いじゃ無い。ふとした瞬間、気がつくのと八幡が私のことを見てる……よう
な気がする。

◇ ◇ ◇

旅行の予定日は夏休み——8月に入ってから。

結局、夏休みになったら水着を買いに行こうと絢香たちに約束させられてしまった私。あれから数日、今日は八幡のアルバイトで家庭教師の日だ。

『せっかくこのタイミングで会えるんだから、どんな水着が好きかリサーチしてみたら？ あ、もしそれで比企谷さんと二人で買いに行くとかそーゆるステキな話になったら、あたしたちとの約束なんか気にしないで、そっち優先していいからねっ、ぐふふ……』

……そんな風に言われてたせいで、私が変に意識しちやってるからそう感じる、のかなあ？

私、何か変な格好してる訳じゃないよね。大丈夫だとは思いつつ、自分の髪や服装を

チエックしてみる。

今の私が着てるのは、白地に藍色の小花柄の入ったノースリーブの膝丈ワンピース。茶色い革製の組紐みたいな飾りベルトで緩くウエストを作っている。

あと、暑いので髪は左側のサイドポニーに纏めた。

普通のポニーテールにしない理由は、お行儀悪い話だけどこのまま寝っ転がるのに向いてるから。右耳を下にして、髻を丸めるようにして寝るのが好きな私にとっては、これ楽なんだよね。ソファアールとかベッドに後ろ向きでばたーんと倒れるように寝そべって、そのまま横にコロソってするの。

左手の手櫛で髪を鋤きながらさりげなく八幡に目を向けると——ほら、また目が合った。

今さら視線が合う程度のことなんて珍しい事じゃない。でも今までとはなんとなく違う……？

これは……そうだ、今までは『私が見ているのに気がついた八幡と目が合う』ことが多かったのに、今日は『私が彼を見たときにすぐ目が合う』んだ。つまり……八幡の方が先に私を見てることになる。

この変化に何か意味があるのかな。私を見てたよね？　なんて聞いてみたいけど、それって自意識過剰？　でも、もしかしたら………。

そんなふうに意識し始めるとなんだか緊張してしまう。好きな相手と一緒にいるんだから緊張くらいして当たり前だって言われるかもしれないけれど、そう単純な話でもないはずだ。

だって、この数ヶ月一緒に居ることが多かったせいか、私にとって八幡の隣は、緊張するどころか——いつの間にか、安心できる、ホツとして安らげる場所になっているから。

だから尚更——この場所を、今の関係を失うのが怖い。

八幡のことが好きなのは変わらない。近くにいる機会が増えて、以前よりもっと大切な「好き」になったように思える。

だからこそ今以上の親しい関係に踏み込みたいと思う私がついて、だからこそ、この関係を壊すような冒険をしたくない私がいる。

単純な二律背反じゃない。私は臆病だけど欲張りで、今の安心できる関係を保つたまままで、それでも八幡にとっての特別な存在になりたいんだ。

だから、だから、だから——でも。

「ねえ、八幡」

部屋のローテーブル、いつもの席に座った八幡の前に麦茶のコップを置きながら声を

かける。

「ん？」

「八幡も泉ちゃんのとこの旅行、行くんだよね。もう準備してる？」

なんて、関係なさそうな話を振る。踏み出したくて、でも踏み込めない……ごめんね、弱気で。だって……まだ怖い。

「いや、まだ何も……。ほんとは申し訳ないから断ろうとも思ってたんだが……『元々予定が空いている期間だから遠慮なさらずに』とか言われるし、小町がやけに乗り気だし……。おまけに雪ノ下も由比ヶ浜を誘ったっていうし……な」

「……ふうん。近くで海水浴出来る場所あるらしいから、今度はちゃんと水着持つてきてよね」

「今度はつて……ああ、そういうことか。なんだか懐かしいな、あれからもう二年になるのか……」

私と八幡との出会いは、二年前、私が小学六年生の時の林間学校。

八幡が言っているのは、結衣さんや雪乃さんが、三浦さんや葉山さんのグループと一緒に川で水遊びをしていた時の事。

水着を持って来ていなかった八幡は木陰で涼んでいたんだ。キラキラとした木漏れ

日の中で、目を閉じて木の幹に背を預けて座る彼の姿は、まるで童話の挿し絵のようどこか幻想的で……。手にしていたデジカメでこっそり撮ってしまったその写真は私の宝物の一つだ。

あの後彼らに、私がクラスの中で孤立している——要するにハブられてしまった理由とか、私の気持ちとかを聞いてもらって……。そのまま膝を抱えて泣いてしまった私に、八幡が投げ掛けてくれた言葉。

——『惨めなのは嫌か』

——『……うん』

——『……肝試し、楽しいといいな』

言われたその時は、何の事が解らなかった。でも、あれはきつと私を助けようという決意の言葉。あの時見上げた、八幡の優しくして寂しそうな瞳を、私はきつと一生忘れな
いだろう。

「八幡、水着………どんなのが良い？」

「あん？　どんなのって………別にわざわざ買ったたりしないぞ。一昨年小町に買わされたやつ、ほとんど着る機会無かったし、それで十分………」

「そうじゃなくて、私の水着」

「……………は？」

「来週、絢香達と買いに行こうって話になってるの。で、八幡はどういうの着て欲しいか
なって……………八幡？」

彼は一瞬、私の顔から膝小僧の辺りまで視線を走らせ、慌てて目を反らした。

ふふ、動揺してる。ちゃんと女の子として意識してくれてはいるらしい。そんな些細なことに、私の心はじんわりと熱を持つ。

「いや待って待て。どうして俺に聞くんだよ。そういうのは、自分が気に入ったのを選べば良いだろ」

「いいでしょ、参考にするだけから。八幡は私に……………どんな水着を着せたい？」

「着せ……………お前、言い方……………」

私が思わせぶりに横目で視線を送ると、彼は分かりやすく赤くなって目を泳がせる。

「ビキニが良いとか、フリフリの可愛いのが良いとか……………あ、あとは、色かあ。原色とパステル系だったらどっちが好み？」

「おーい、話聞いているか？ だいたい俺には今の流行りなんか分からねーぞ」

八幡は平気そうにそう言うけど、視線が定まらずどこか落ち着かない様子で挙動不審。

……もしかして、私の水着姿を想像してる？

彼以外の男の人に同じような態度をされたら、「怖い」とか「キモい」とか思ってしまうかもしれない姿だけ……ふふ、なんだかカワイイ。

年上の彼にそんな事を思うのは失礼かもしれないけど、ね。

「ほら、バカな話してないで、休憩終わったらさっきの続きやるぞ」

どうやら私にからかわれていると思ったらしい八幡が、子供を叱るような言い方をして私の頭をポンと撫でる。

もう……。八幡にとってはバカな話かも知れど、彼の水着の好みって、私にとっては結構興味のある重要な話なんだけどなあ。



「最初の志望校なら今の成績キープしとけば大丈夫だと思うが……本気で総武狙うなら偏差値で65、点数なら——そうだな、余裕を持って5教科であと20点以上は欲しい」
「え……あと20点も？」

八幡に家庭教師をしてもらうようになったおかげで、実力テストの成績は一気に上がった。自分でもなかなか手応えを感じる成績だったのに、ここからさらに20点以上

……。

「今すぐって訳じゃないし、1教科あたり4点だと思えばなんとかなる。留美はまだ二年生だし、受験までには無理しなくても十分届くだろ。由比ヶ浜や小町も受かったんだから心配いらん」

八幡ヒドい……とは思いつつ、なんとなく勇氣づけられた私なのでした。……結衣さん、小町さん、ごめんさい。

「それに、今はまだ実力テストで結果出すより、定期テストとか宿題しつかりやることの方を優先でいい」

「何で？」

「私立は色々複雑らしいが、総武高含めた千葉の公立高校受験は、合格判定の内申点の割合が3割位……らしい」

「3割……」

「成績表の評価が2割、生活態度・部活とかの学力以外の要素が1割程度つてことらしいが、なかなかの割合だろ？ 一年から三年の二期までの成績その他がそれだけの意味を持つて事だ。そういう意味でなら受験はもう始まってもとも言える」

そう、か。八幡が受験までまだ一年以上ある私に、手を抜かずに教えてくれているのはそういう意味もあつたのかも。

「とりあえず期末テストで間違えた問題の復習からだな」
「はい」

私はちよつと気合いを入れ直して赤鉛筆を握った。

後で考えると……水着の話がいつの間にか有耶無耶にされてしまった気もする。

結局彼の好みは教えてもらえなかつたけど、八幡のちよつぴり慌てたような反応が見れて嬉しかったので良しとしよう、うん。

こんな風に、踏み込み過ぎず、それでいて時々はちゃんと女の子として意識してもらえて——そんな今の関係に満足しちやつてる私は、臆病なのか……それとも、ただ八幡に甘えてるだけなのかな。

* * * * *

七月下旬。

全国的に夏休み突入——もちろん私たちの学校も——である。

タイミングを合わせたように関東地方の梅雨も明け、頭上には夏らしい青空が広がっている。遠くをぼこぼこ浮かんで流れていく綿菓子のような雲の白さが眩しい。

そして――。

「暑つつーい！ 留美、泉、あたし休憩しないと溶けて死んじゃうかも。あそこでかき氷食べよ？」

「絢ちゃん、まだ駅から出たばかりだよ。お店に入れば涼しくなるから……」

「ううっ、ららぽが遠い……。駅の目の前にある我がマリンピアを見習ってもっと近くに来なさいよ」

「マリンピアは絢香のじゃ無いでしょ……」

確かに私達の家之最寄り駅から目の前のマリンピアに比べれば少し歩くけど……。だいたい、「近くに來い」と言われてららぽーとが動き出したらその方が怖い。

しぶしぶといった体の絢香、額に汗を浮かべながらもなんだか楽しそうな泉ちゃんと三人で肩を並べ、ガード脇の道を遠くからでも大きく見えている目的地に向かって歩く。

夏休みに入ったばかりの平日ということもあり、回りを歩いているのは私たちも含め、中高生らしき姿も多い。

それにしても……確かに暑い。「梅雨明け十日」という言葉を八幡に教えてもらったのはごく最近だけど、なんでも梅雨が明けたばかりのこの時期は太平洋の高気圧が安定していて雨が降りにくく晴天が続く事が多い……とか。

正にその通りに良く晴れた空から強烈な日射しが私たちの肌を刺す。日焼け止めはしつかり塗ってきているけど、それでもジリジリと皮膚を焼かれている感じがする。

私たち三人は、少しだけ足を速めて、ガードや建物の日陰を渡るように歩き、大型ショッピングモールの中へと逃げ込んだ。



空調が効いたショッピングモール。エントランスには、海中の風景を模したような涼しげなオブジェが飾られ、いかにも夏らしい雰囲気を出している。大きな魚のバルーンがゆらゆらと空中を泳いでいるのがユーモラスで可愛らしい。

私たちは服飾関係の店が多い二階に上がり、絢香の

「二度この辺の店ぐるっと回ってみてからにしようか」

という案に乗って、まずは水着を扱っている店をざっくりと見て回ることにした。

季節がら多くのショップで色鮮やかな水着が並んでるけれど、いくつかのお店では早くも水着のセールが始まっている。

店によっては、一番お客さんの目につく店頭に、もう秋物がディスプレイされている。

やっぱりファッションの世界はワンシーズン先に進んでいるということなのだろう。

今日の買い物物の目的はあくまで水着だけど、やはり女子としては新作の秋物にもついつい目が行ってしまう。

「あ、あれ面白い。ちよつと見てくるね」

今見ている店の通路を挟んだ反対側に、ユキ先生のデザインと雰囲気似たドレスがマネキンに着せられているのを見つけた。少しチャイナっぽいシルエツトに控えめなフリルがアシンメトリーに配されているのが特徴的だ。左右のフォルムが異なるということは……背中側はどうなっているんだろう？

違う角度からも見ようと思い、横に回り込むようとして、すぐ近くにいた他のお客さんと軽くぶつかってしまった。

「あ、すいませ……ん」

謝りながら顔を上げると、相手は三十代位の大柄な男性で、軽く手を上げて許してくれた。どうやら柵にある財布を見ていたらしい。

それだけ。何でもないこと。

けれど……男性客と肩が触れて——「それだけのこと」で、私の心はひどくざわついていた。

誰にも言えてないけど……あれから男性と近くに接近するのが少しだけ怖い。

もちろん八幡やお父さんは平気だし、クラスメイトや先生も、これから近づくんだと前もって意識しておけば特に問題はない。でも、今みたいにぶつかつたり、目の前に飛び出されたりしちゃうと駄目だ。まして今回は、良い人そうには見えただけ知らない人だったし。

男性と距離が離れた今でも鼓動が速いままだし、しびれたように足がすくんで微かに震えてる。でも、その程度だ。何も無い、大丈夫。

まだ事件から日が経ってないからこうなるだけ。きっと時間が経てばこんな全然平気になる……。

そう心を落ち着かせて、私は絢香と泉ちゃんの方にゆっくりと戻った。

「もういいの？ 留美ちゃん」

「うん……」

「……？ んじゃ、次行ってみよっか」

絢香は、一瞬だけ私の顔を見直して何か言いたそうな様子を見せたけど……そのままくるりと振り向き、すぐに先頭に立って歩きだした。



水着売り場の試着室。

大きな姿見に映るのは下着姿の私。

客観的に見て、容姿は整っている方だと自分でも思う。少しでも大人っぽく、きれいになりたいとそれなりに頑張っているし、曲がりなりにもユキ先生のところでもモデルをさせてもらっている以上、きつとスタイルだって悪くはない……はず。

でも——子供っぽいよね、やつぱり。中学生なんだから当たり前。世間一般の認識は「児童」まさに子供でしかない。

成長途上の華奢な体躯。スレンダーといえれば聞こえは良いけどメリハリの少ない体のライン。今日は水着の試着のためにスポーツブラとシンプルなコットンのショーツだからか余計にそう感じる。

はあ、絢香は悩殺作戦なんて言ってたけど、どう考えても無理があるよね……。

私は数着持ち込んだ水着のうちの一つを身に付けてみた。

絢香に押し付けられた紺地に白のドット柄のビキニだけ……。え、何これ、生地が少な過ぎない？ 水着の下から下着が大きくはみ出している。

つまり、実際に海とかで着る場合、その部分の素肌をさらすということ……。無理無理！ 却下。

次は……これは泉ちゃんのおすすすめか。絢香には

『悩殺作戦には可愛すぎじゃない?』

なんて言われたけど、泉ちゃんによれば、

『男の人がグツと来るのつてセクシー路線だけじゃ無いと思うんだ。留美ちゃんならこういう方向のが良いんじゃないかなあ』

ということらしい。絢香も、一理あると同意はしてだけど、うーん。

色々言われると悩んじゃう。先週、八幡の好みを無理にでも聞き出しておけば良かったかなあ……。



店名の入った紙袋を下げてシヨップから出たところで、偶然見知った人と出会う。

「沙和子おねーちゃん?」

「こんにちは。来てたんだ」

泉ちゃんの従姉、総武高の書記ちゃん改め副会長ちゃんこと藤沢沙和子さんは、私達に柔らかい笑顔を向けてくる。たまに通学路とかですれ違う時の彼女の髪型はいつも三編みだけど、今日は軽くウェーブした髪をふわりと背中におろしてちよつぱり大

人っぼい雰囲気。

「「こんにちはー」」

「何かお買い物？」

「うん。例のお出かけ用に水着見ようって」

「ああ、そういえばもうすぐだったよね」

「うん」

「おねーちゃんは……デート？」

「あー、うん……えへへ」

彼女はほんのり頬を染めてほにやつと微笑った。

そう、彼女の隣にはこちらも私たちの知り合いである元総武高副会長の本牧さんが、少し所在無げな様子で立っている。

「おおー、副会長さん久しぶりですー。でも、受験生を連れ回していいんですかあ？」
「ちよつと絢香……」

彼に会うのは一昨年、例のクリスマスイベントの時からのはずの絢香だが、そのくせ少しも物怖じすることなく、揶揄するように失礼なことを言うのでこっちが焦ってしま

う。
でも彼は笑って、

「はは……今の副会長は、さわ……藤沢さんの方だけどね。それに彼女は受験大丈夫そうだし」

「そうなんですか」

私が尋ねると、藤沢さんは訳を教えてくださいました。

「あのね、まだちゃんと決まったわけじゃないけど、一応、指定校推薦取れそうなんだ。

……その、牧人くんと同じところに……」

「ほほう、牧人くん……」

絢香の双眸そうぼうがキラーンと光る。

私は彼らとは何度か会う機会が有って、お付き合いを始めたのはもちろん知っていたけど……言われてみれば藤沢さん、本牧さんのこと去年はまだ先輩って呼んでたっけ。

「あ……その、べ、べつにいいでしょう。」

唇を尖らせて、ちよつとだけ恥ずかしそうな藤沢さん。

「いやいやもちろんですよー。むしろ、その感じだと彼氏さんの方だつて呼び方が……さつきちよつと言いかけてましたよね」

ふふんと得意気に笑う絢香。

「ぐ……ああ、二人の時は『沙和ちゃん』つて呼んでるよ……」

本牧さんがぼそりと小声で言いにくそうに答える。

「声が小さいですよー。だいたい、あたしたちの前だからって呼び方変えるのは、浮気バレの場面みたいだからやめた方が……」

だからどうして絢香はそんなに上から目線なの？まあ、恋バナ大好物だしなあ……。

「違うのよ。私が人前だと恥ずかしいから今まで通りでっってお願ひしたの」

絢香の言葉に苦笑しながら藤沢さんが本牧さんをフォローする。

そんな様子を見ていて、

「絢ちゃんて面白いよねー」

眼鏡の奥の目をキラキラさせながら、凄く楽しそうな泉ちゃんが私に耳打ちしてくる。

先日の事件以降、彼女のお母さんが過保護というか……少々神経過敏になり、泉ちゃんは一人で買い物にも出してもらえなかったらしい。だから今日の「お買い物」はとも楽しみなのだと言っていた。

だから、彼女がこうやって楽しそうに笑っているのはきつと素敵な事だ。

「……うーん、いいですねえ、初々しい感じ……でも、付き合ってるなら堂々としてなきやもつたいたいですよ」

「堂々と……。そうなのかな」

「そうですよー。慣れてないみたいですけど、もしかして、呼び方変えたの最近ですか？」

「ああ。僕も高校は卒業したわけだし、いつまでも『本牧先輩』のままなのも変かなって、5月の連休のときにそんな話になって」

「恥ずかしいのなんて一瞬ですし、まわりもすぐ慣れます。小学生の頃から高校生の男子と名前で呼び合ってるようなヤツもいますけど、もう全然違和感ないですから」

みんなの視線が私の方に向く。もう、こっちにまで飛び火させないでよ……………。

「あー、そういえば、比企谷は一緒じゃないの？」

男一人、騒がしい年下女子に囲まれて居心地悪そうにしていた本牧さんが仲間を求めるかのように聞いてきた。

「あー、すいません。今日はこの三人です」

「そうか……。鶴見さんがいるとなんとなく比企谷もセットでいるイメージあるからね」

セットでって……そんな風に思われてるのは、嬉しいけれどなんだか微妙。

それにしても、絢香の遠慮のない物言いに最初は若干引きぎみだった藤沢さんたちが、いつの間にかごく自然に恋愛談義みたいな話をしてる……。

人間、誰だって自分自身の恋愛話をするのにはためらいがあるものだ。けれど、絢香のように照れもやつかみもなく話をされると、自分たちの恋愛事情を話すのにも大して抵抗がなくなってしまうらしい。

あ、気がついたら絢香のリクエストに応えて、本牧さんと藤沢さんが腕を組んでピースサインまでしてる。泉ちゃんがスマホで写真を撮ってあげてるみたいだけど、どちらかというとな藤沢さんの方が積極的に見えるのがなんとも微笑ましい。

本牧さんは、八幡と同じ学年で、三年生のときにはクラスも一緒だった。藤沢さんから見れば一つだけ年上ということになる。

ごく自然に並んで立つ二人の姿は本当にお似合いで——少し羨ましくなった。同じ学校で、一緒の生徒会で同じ時間を過ごして。いいなあ、こういうの……。

私と八幡の歳の差は5つ。

だから、私が頑張って総武高に合格出来たとしても、もしその先、同じ大学まで追いかけたとしても、当然そこに八幡がいるわけじゃない。同じ出身校の世代違いの後輩になれるというだけの話だ。

以前ほどその事は気にならなくなったけれど、こうして共通の学生時代を過ごさせている歳の近いカップルを見るとどうしても考えちゃうんだ。

——私も八幡と並んで通学路を歩きたかったな、とか、

——同じ部活動で時を過ごした雪乃さんや結衣さん、いろはさんが羨ましいな、とか、そんなふうに。

それでも、八幡にとってきつと特別だった高校生時代の、彼が過ごした空気を、彼がかつて見た景色をいくらかでも共有する事はできる。

——きつと、そこに私にとっての意味があるんだ。